

昭和55年度県営圃場整備事業地域  
埋蔵文化財発掘調査報告

1981.3

三重県教育委員会



上；高猿6号墳 変形四獣鏡

下；天花寺魔寺 塑像

# 序

圃場整備事業は農業生産性の向上および水田利用再編対策などのため、今後も推進していかねばならない県下における重要な事業の一つであります。しかしながら、圃場整備事業はその性格上、広大な面積を対象とするため、そこに包蔵される埋蔵文化財の保護が問題となる場合が多くあります。

開発計画地内に存在する埋蔵文化財の取り扱いについては、従来より地区除外あるいは地区内現状保存をしていただき、万止むを得ず保存が出来ない場合に限り発掘調査を実施して記録保存をするという方法をとってまいりました。今年度はこの方針をさらに徹底すべく「開発事業にかかる埋蔵文化財の取り扱いについて」という文書を各市町村教育委員会に通知をした次第であります。

今年度の県営圃場整備事業地内には総数48件の埋蔵文化財が存在しましたが、それらの多くは関係各位のご協力により現状保存をすることが出来、13件の発掘調査を実施いたしました。

本書はその結果をまとめた報告書であります。本書が教育、文化および学術研究の資料として、広く活用されることを願うものであります。

末筆ながら発掘調査にご協力をいただいた地元の方々をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表するものであります。

昭和56年3月

三重県教育委員会

教育長 横田英司

# 例 言

1. 本書は、昭和55年度県営圃場整備事業地内における埋蔵文化財発掘調査の結果をまとめたものである。
2. 発掘調査費用は一部を県教育委員会が昭和55年度国庫補助金の交付をうけ、その他については三重県農林水産部が負担した。
3. 発掘調査は次の体制で行なった。  
調査主体 三重県教育委員会  
調査担当 三重県教育委員会文化課主事・技師・埋蔵文化財発掘技術者研修生  
調査協力 三重県農林水産部・各耕地事務所・各土地改良区  
・各教育事務所・各市町村教育委員会
4. 本書に用いた遺構標示の略記号は次による。  
S B; 竪穴住居・掘立柱建物  
S D; 溝            S E; 井戸            S K; 土壇  
S P; 池・水溜    S X; その他
5. 本書の編集・執筆には各遺跡担当者があたり、文末にその氏名を明記した。
6. 本書に使用した航空写真は、農林水産部の提供による。
7. 発掘調査および報告書作成に際し、次の方々の協力を得た。  
山下雅春・高見宣雄・増田安生・飯田良一（昭和55年度埋蔵文化財発掘技術者研修生）・吉水康夫（三重県斎宮跡調査事務所）・田阪仁（中原小学校教諭）・杉谷政樹（皇学館大学）・福田典明（同志社大学）・上村安生（愛知学院大学）・田中久生（奈良大学）・伊勢野久好
8. スキャニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。  
各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

# 目 次

I	前 言	1
II	試掘調査遺跡	6
III	員弁郡東員町 小金塚遺跡	11
IV	員弁郡東員町 山田廢寺	15
V	員弁郡東員町 栗ノ木遺跡	19
VI	鈴鹿市南長太町 天ノ宮遺跡	25
VII	鈴鹿市南堀江町 神大寺遺跡	35
VIII	安芸郡安濃町 浄土寺南遺跡	45
IX	一志郡嬉野町 天花寺廢寺	73
X	多氣郡明和町 堀田遺跡	97
XI	阿山郡大山田村 西沖遺跡	115
XII	上野市喰代 高猿6号墳	155
XIII	上野市笠部 神部遺跡	179
XIV	上野市比自岐 下り合遺跡	195

## 図 版 目 次

卷首図版	塑像(天花寺廃寺)・変形四獣鏡(高猿古墳)	P L 22	浄土寺南遺跡	B地区 S B55
P L 1	小金塚遺跡 調査前近景		〃	B地区 S D58
	〃 調査区全景	P L 23	〃	出土土器
P L 2	〃 調査区全景	P L 24	〃	出土土器
	〃 S D 2・3	P L 25	〃	出土土器
P L 3	山田廃寺 調査区全景	P L 26	〃	出土土器
	〃 調査区全景	P L 27	〃	出土土器
P L 4	〃 S B 1	P L 28	〃	S E 42 埴材
	〃 S X 2	P L 29	〃	S E 42 埴材
P L 5	栗ノ木遺跡 A区全景	P L 30	天花寺廃寺	版築(金堂・塔)
	〃 A区近景		〃	S D 7・8
P L 6	〃 A区 S B 1	P L 31	〃	軒丸瓦・軒平瓦
	〃 A区 S B 2	P L 32	〃	軒丸瓦・軒平瓦
P L 7	〃 A区 S B 5	P L 33	〃	平瓦
	〃 B区 S D 6	P L 34	〃	平瓦
P L 8	〃 B区 S D 8	P L 35	〃	道具瓦・埴仏
	〃 B区 S D 6・7	P L 36	〃	塑像
P L 9	〃 出土土器	P L 37	堀田遺跡	調査区全景
P L 10	天ノ宮遺跡 調査前近景		〃	調査区近景
	〃 調査区近景	P L 38	〃	S B 1
P L 11	〃 S K 2		〃	S F 8~12
	〃 S D 1 断面	P L 39	〃	S F 16・20 遺物出土状況
P L 12	〃 出土遺物		〃	S F 16 遺物出土状況
P L 13	神大寺遺跡 航空写真	P L 40	〃	S K 34 遺物出土状況
	〃 遺跡全景		〃	S E 42
P L 14	〃 S D 4	P L 41	〃	出土土器
	〃 調査区近景	P L 42	〃	出土土器
P L 15	〃 出土土器	P L 43	〃	出土土器
P L 16	〃 出土土器	P L 44	〃	土製支脚
P L 17	浄土寺南遺跡 航空写真	P L 45	西沖遺跡	調査前遠景
	〃 A地区全景		〃	調査区遠景
P L 18	〃 A地区 S B 2	P L 46	〃	東南部近景
	〃 A地区 S B 8		〃	S B 6・S D 7
P L 19	〃 A地区 S B 14	P L 47	〃	S B 6 pit内柱痕
	〃 B地区全景		〃	S B 70
P L 20	〃〃 B地区 S B 23~31	P L 48	〃	S B 86~101
	〃 B地区 S B 44		〃	S B 68
P L 21	〃 B地区 S E 42	P L 49	〃	S E 66・S B 67・68・70
	〃 B地区 S E 42		〃	S B 64・65

P L 50	西 冲 遺 跡	S E 14	P L 64	神 部 遺 跡	航空写真
	ゝ	S E 66		ゝ	調査前近景
P L 51	ゝ	出土土器	P L 65	ゝ	K地区土器溜
P L 52	ゝ	出土土器		ゝ	K地区土器溜
P L 53	高 猿 6 号 墳	航空写真	P L 66	ゝ	C地区杭列・木製品出 土状況
	ゝ	墳丘全景			
P L 54	ゝ	墳丘全景	P L 67	ゝ	K地区杭列出土状況
	ゝ	墳丘全景	P L 68	ゝ	K地区杭列出土状況
P L 55	ゝ	第 1 主体		ゝ	K地区木製品出土状況
	ゝ	第 1 主体	P L 69	ゝ	K地区木製品出土状況
P L 56	ゝ	第 1 主体鏡・剣・刀出 土状況		ゝ	K地区木製品・土器出 土状況
	ゝ	第 1 主体鉄器類出土状 況	P L 70	ゝ	C地区・K地区出土土 器
P L 57	ゝ	第 2 主体	P L 71	ゝ	試掘坑・包含層出土土 器
	ゝ	第 2 主体			
P L 58	ゝ	第 3 主体	P L 72	ゝ	木製品
	ゝ	第 3 主体	P L 73	下 り 合 遺 跡	調査前遠景
P L 59	ゝ	第 4 主体		ゝ	調査区全景
	ゝ	第 5 主体南端配置土器	P L 74	ゝ	調査区東部近景
P L 60	ゝ	第 1 主体出土遺物		ゝ	S B 5
P L 61	ゝ	第 2・3 主体、墳丘出 土遺物	P L 75	ゝ	S E 1
				ゝ	S K 12・13
P L 62	ゝ	第 3 主体出土遺物	P L 76	ゝ	出土土器
P L 63	ゝ	第 2・3・4・5 主体 出土遺物	P L 77	ゝ	出土遺物

## 挿 図 目 次

第 1 - 1 図	遺跡位置図	2	第 2 - 11 図	出土遺物	9
第 2 - 1 図	石樽下遺跡	6	第 2 - 12 図	沢・田中遺跡	9
第 2 - 2 図	蛇亀橋遺跡	6	第 2 - 13 図	出土遺物	9
第 2 - 3 図	口山田遺跡	7	第 2 - 14 図	中ノ切遺跡	10
第 2 - 4 図	黒田遺跡	7	第 2 - 15 図	出土遺物	10
第 2 - 5 図	出間浦山・南山西方遺跡	7	第 3 - 1 図	小金塚遺跡 遺跡位置図	11
第 2 - 6 図	出間・土古路遺跡	8	第 3 - 2 図	ゝ 遺跡地形図	12
第 2 - 7 図	新兵衛山・東村東方遺跡	8	第 3 - 3 図	ゝ 発掘区平面図	12
第 2 - 8 図	藤原遺跡	8	第 3 - 4 図	ゝ 遺構平面図・S D 2 出土土器実測図	13
第 2 - 9 図	広垣内遺跡	8			
第 2 - 10 図	真泥 A 遺跡	9	第 4 - 1 図	山田廃寺 発掘区平面図	15

第4-2図	山田廃寺	遺構平面図……………16	第8-15図	浄土寺南遺跡 A地区包含層土器	
第4-3図	〃	S B 1・S X 1 実測 図・出土土器実測図…17	第8-16図	〃	S K 50土器実測図…62
第5-1図	栗ノ木遺跡	遺跡地形図……………19	第8-17図	〃	S B 44・S B 46土器 実測図……………63
第5-2図	〃	発掘区平面図……………20	第8-18図	〃	S D 58土器実測図…64
第5-3図	〃	遺構平面図……………21	第8-19図	〃	S B 32・S B 34土器 実測図……………66
第5-4図	〃	S B 1 実測図……………22	第8-20図	〃	S E 42木製品……………67
第5-5図	〃	遺物実測図……………23	第8-21図	〃	S E 42井戸枠組上げ法69
第6-1図	天ノ宮遺跡	遺跡位置図……………25	第9-1図	天花寺廃寺	遺跡位置図……………73
第6-2図	〃	発掘区平面図……………26	第9-2図	〃	遺跡地形図……………75
第6-3図	〃	遺構平面図……………27	第9-3図	〃	調査区全体図……………76
第6-4図	〃	S K 2 実測図……………28	第9-4図	〃	遺構平面図……………77
第6-5図	〃	大溝(S D 1) 断面 図……………28	第9-5図	〃	塔・金堂平面図……………79
第6-6図	〃	土埴・大溝出土土器…29	第9-6図	〃	塔付近東西土層図…80
第6-7図	〃	包含層出土土器……………31	第9-7図	〃	金堂東西土層図……………81
第6-8図	〃	包含層出土土器……………32	第9-8図	〃	軒丸瓦分類図1 ……83
第7-1図	神大寺遺跡	発掘区平面図……………35	第9-9図	〃	軒丸瓦分類図2 ……84
第7-2図	〃	遺跡地形図……………36	第9-10図	〃	軒平瓦分類図……………85
第7-3図	〃	遺構平面図……………37	第9-11図	〃	軒丸瓦拓影・実測図…86
第7-4図	〃	遺物実測図……………38	第9-12図	〃	軒平瓦拓影・実測図1…87
第7-5図	〃	遺物実測図……………39	第9-13図	〃	軒平瓦拓影・実測図2…88
第7-6図	〃	遺物実測図……………41	第9-14図	〃	平瓦拓影・実測図1…89
第7-7図	〃	遺物実測図……………43	第9-15図	〃	平瓦拓影・実測図2…90
第8-1図	浄土寺南遺跡	遺跡位置図……………45	第9-16図	〃	塔版築中出土瓦……………91
第8-2図	〃	遺跡地形図……………46	第9-17図	〃	道具瓦類……………92
第8-3図	〃	発掘区平面図……………47	第9-18図	〃	土器実測図……………93
第8-4図	〃	A地区遺構平面図…48	第9-19図	〃	天花寺廃寺と関係軒瓦 類……………94
第8-5図	〃	S B 2・S B 6実測図…49	第10-1図	堀田遺跡	遺跡位置図……………97
第8-6図	〃	S B 12・S B 14・S B 15実測図……………50	第10-2図	〃	遺跡地形図……………98
第8-7図	〃	B地区遺構平面図…51	第10-3図	〃	発掘区平面図……………98
第8-8図	〃	S B 46実測図……………52	第10-4図	〃	遺構平面図……………99
第8-9図	〃	S B 23~33実測図…54	第10-5図	〃	S B 1・2 実測図…100
第8-10図	〃	S B 54・55実測図…56	第10-6図	〃	S F 20・16実測図…100
第8-11図	〃	井戸枠の組手仕口…57	第10-7図	〃	S B 3~5 実測図…101
第8-12図	〃	S E 42実測図……………57	第10-8図	〃	S E 42実測図……………104
第8-13図	〃	S D 12・S B 6・S B 14土器実測図……………58	第10-9図	〃	土器実測図……………105
第8-14図	〃	S B 5・S B 9・S B 13土器実測図……………59	第10-10図	〃	土器実測図……………106
			第10-11図	〃	土製支脚実測図…109



## 表 目 次

第1-1表	昭和55年度県営圃場整備事業地内 埋蔵文化財……………	1～2	第11-1表	古墳時代後期竪穴住居一覧表……………	121
第1-2表	第1次調査遺跡……………	3	第11-2表	奈良時代竪穴住居一覧表……………	126
第1-3表	第2次調査遺跡……………	4	第11-3表	掘立柱建物一覧表……………	131
第1-4表	第3次調査遺跡……………	5	第11-4表	S E 66出土土器法量表……………	142
第5-1表	地区別出土遺物……………	22	第11-5表	出土遺物一覧表……………	150
第8-1表	掘立柱建物一覧表……………	48	第12-1表	高猿6号墳内部主体一覧表……………	161
第9-1表	遺跡地名表……………	75	第12-2表	周辺の古墳一覧表……………	175
第10-1表	土器焼成塚一覧表……………	103	第14-1表	比自岐盆地中世城館跡一覧表……………	196
第10-2表	三重県内土器焼成塚出土遺跡一覧 表……………	112			

# I 前 言

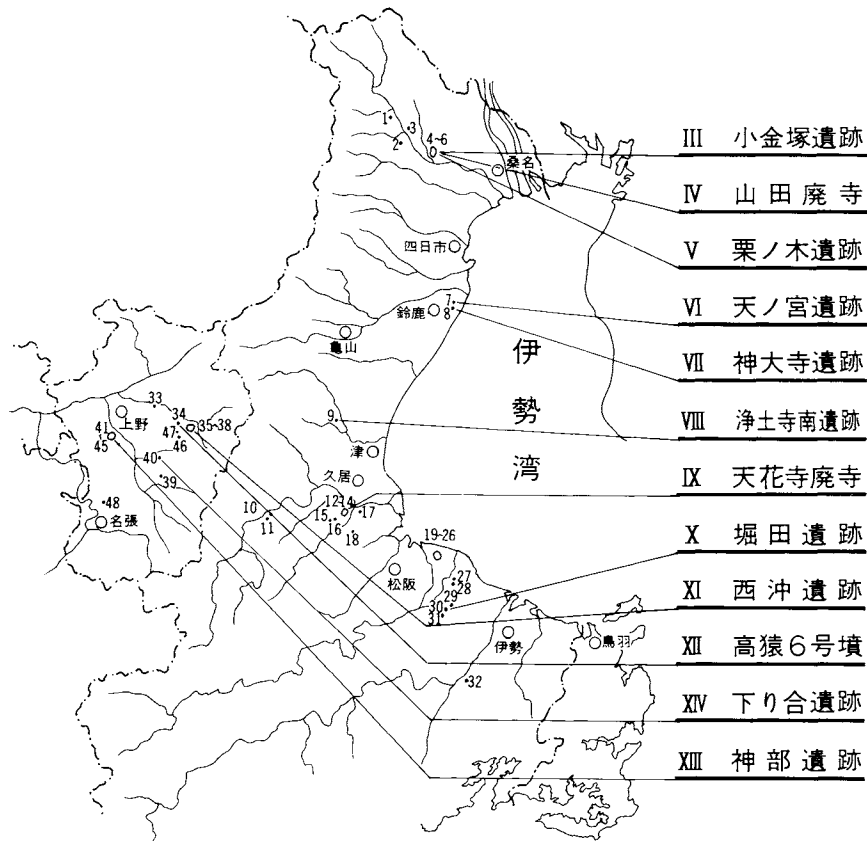
昭和55年1月16日に開始した一志郡嬉野町「天花寺廃寺」の試掘調査がまだ終了しない2月下旬、県農林水産部耕地第2課より、昭和55年度の県営圃場整備事業地域の図面が文化課に届けられた。早速、3月に入り、県下28地区の事業地、約832haにわたり、文化課係員によって分布調査を実施した。その結果19地区において43箇所

の遺跡が存在することが判明した。遺跡の総面積は882,700㎡におよんでいた。中でも嬉野町山神田遺跡、松阪市南山西方遺跡、明和町藤原遺跡は10万㎡を超える大規模な遺跡であった。これらの遺跡の保存方法について、各耕地事務所、土地改良区と個々に協議をもったのは年度当初4月上旬のことであった。

耕地事務所	地区	事業面積	遺跡名	所在地	遺跡面積	取 扱 方 法	
桑名	大安西部 員部 員弁 員	19	1. 石樽下遺跡	員弁郡大安町	15,000	試掘調査後工事実施	
		40	2. 門前遺跡	〃 〃	23,000	盛土保存	
		17	3. 御菌遺跡	〃 員弁町	3,600	工事立会后工事実施	
		71	4. 栗ノ木遺跡	〃 東員町	40,000	排水路部分調査 他は保存	
			5. 小金塚遺跡	〃	40,000	〃	
			6. 山田廃寺	〃	1,000	〃	
四日市	菰野 ちく 深溝 安塚 鈴鹿第2	26	—	—	—	—	
		31	—	—	—	—	
		27	—	—	—	—	
		18	—	—	—	—	
		66	7. 天ノ宮遺跡 8. 神大寺遺跡	鈴鹿市南長太町 〃 南堀江町	10,000 3,000	削平部調査 他は保存 〃	
津	安濃川左岸 安濃川右岸 津西部 津南部	8	—	—	—	—	
		42	9. 浄土寺南遺跡	芸郡安濃町	14,000	削平部調査 他は保存	
		53	—	—	—	—	
	白山	7	—	—	—	—	—
			48	10. 上野遺跡 11. 瀬古遺跡	一志郡白山町 〃 〃	4,900 600	工事立会后工事実施 〃
		豊地	47	12. 北瀬古遺跡	一志郡嬉野町	2,000	試掘調査後工事実施
				13. 天花寺廃寺	〃 〃	10,000	調査後盛土保存
				14. 天花寺遺跡	〃 〃	4,000	盛土保存
				15. 蛇亀橋遺跡	〃 〃	9,600	次年度事業
				16. 口山田遺跡	〃 〃	16,000	試掘調査後工事実施
				嬉野	33	17. 黒田遺跡	〃 〃
	18. 山神田遺跡	〃 〃	130,000			工事立会后工事実施	
	松	東黒部	18	19. 土古路C・E・W遺跡	松阪市土古路町	5,500	次年度以降事業へ
20. 土古路東遺跡			〃 〃	3,500	〃		
21. 土古路M遺跡			〃 〃	3,000	試掘調査後工事実施		
22. 出間遺跡			出間町	2,500	〃		
23. 出間浦山道跡			〃 〃	15,000	〃		
24. 南山西方遺跡			〃 土古路町	130,000	水路部分試掘他は次年度以降事業へ		
25. 黒部神社W遺跡			〃	7,000	次年度以降事業へ		
26. 柿ノ木原W遺跡			〃	14,000	〃		

阪	多氣	6	—	—	—	—	
	上御系	20	27. 新丘衛山遺跡	多氣郡明和町	2,700	試掘調査後工事実施	
	斎宮	65	28. 東村東方遺跡	〃 〃	1,800	〃	
			29. 藤原遺跡	〃 〃	200,000	〃 保存	
			30. 堀田遺跡	〃 〃	60,000	削平部調査	
31. 広垣内遺跡	〃 〃		10,000	試掘調査後工事実施			
伊勢	伊勢南部	16	32. 円座遺跡	伊勢市円座町	1,800	工事立会	
熊野	相野谷	9	—	—	—	—	
上野	山田	29	33. 真泥遺跡	阿山郡大山田村	3,000	試掘調査後工事実施	
	大山田第2	22	34. 高猿6号墳	上野市喰代	400	発掘調査	
			35. 沢A遺跡	阿山郡大山田村		試掘調査 保存	
			36. 沢B遺跡	〃 〃		〃	
			37. 沢2号墳	〃 〃		〃	
	上野南部	32	38. 西沖遺跡	〃 〃	27,000	削平部発掘調査	
			39. 馬別当遺跡	上野市比自岐	1,500	次年度以降事業へ	
	上野西部	27	40. 下り谷遺跡	〃 〃	2,000	削平部発掘調査	
			41. 北浦遺跡	上野市笠部		盛土保存	
	野	上野東部	20	42. 菊川遺跡	〃		〃
				43. 西浦遺跡	〃		〃
				44. 神部遺跡	〃		水路部分発掘調査
				45. 古城館跡	〃		保存
名張北部	15	46. 中切遺跡	上野市喰代	6,000	試掘調査・保存		
		47. 中切1・2号墳	〃	800	地区除外		
		48. 上原城遺跡	名張市西田原	1,200	試掘調査・工事実施		

第1-1表 昭和55年度県営圃場整備事業地内埋蔵文化財



第1-1図 遺跡位置図

# 1. 第1次調査

遺跡は全て現状保存されるよう要望したが、整備計画やむを得ず削平される場合もあり、工法変更によって現状保存するにしても、遺物包含層の深さ、遺跡の範囲については分布調査のみでは不明確であった。このため、工法変更の資料を得るために、試掘調査を実施することになった。試掘調査は23箇所遺跡において排水路部分を中心に4m四方のグリッドを設けて行なうことにした。更に、昨年度に試掘調査を実施し、今年度の本調査を行なうことになっていた嬉野町天花寺廃寺、上野市下り谷遺跡については今回同時に調査を行なうこととした。第1次

調査にかかる調査費用の執行委任を耕地第2課へ申し入れたのは4月30日のことであった。

一方、これまでの各耕地事務所との協議の結果、大安町門前遺跡、嬉野町天荷赤遺跡は全て盛土をして保存されることになり、員弁町御蘭遺跡、白山町上野遺跡、瀬古遺跡、伊勢市円座遺跡の四遺跡については、遺物の散布が極めて少なく、工事直前に文化課職員の立会のもとに重機による掘削を行ない、工法の確認をすることとなった。嬉野町山神田遺跡は幅50cm足らずの溝を掘る工事のみであったため、工事立会を行なうことにした。

事業地区	遺跡名	所在地	調査面積	備考
大安西部 東員	石樽下遺跡	員弁郡大安町片樋	16㎡	地区外
	栗ノ木遺跡	〃 東員町	104	排水路のみ調査
	〃 小金塚遺跡	〃 〃	160	〃
	〃 山田廃寺	〃 〃	32	〃
安濃川右岸 豊地	浄土寺南遺跡	安芸郡安濃町浄土寺	80	削平部調査
	北瀬古遺跡	一志郡嬉野町天花寺	20	地区外
	天花寺廃寺	〃 〃 〃	800	
	蛇亀橋遺跡	〃 〃 島田	696	次年度事業へ
	口山田遺跡	〃 〃 〃	80	地区外
	黒田遺跡	〃 〃	104	工事実施
嬉野 東黒部	土古路N遺跡	松阪市土古路町	48	〃
	出間遺跡	〃 出間町	72	〃
	南山西方遺跡	〃 土古路町	32	〃
	新兵衛山遺跡	多気郡明和町	88	〃
上御糸 斎宮	東村東方遺跡	〃 〃	24	〃
	藤原遺跡	〃 〃	200	排水路のみ調査
	堀田遺跡	〃 〃	160	削平部調査
	広垣内遺跡	〃 〃	56	工事実施
山田 山田第2	真泥遺跡	阿山郡大山田村	40	地区外
	沢遺跡	〃 〃		盛土保存
	田中遺跡	〃 〃		〃
	沢古墳	〃 〃		〃
	西沖遺跡	〃 〃		削平部調査
上野南部 上野西部	下り谷遺跡	上野市比自岐	800	
	西浦遺跡	〃 笠部	5	盛土保存
	古城館跡	〃 〃	60	〃
	神部遺跡	〃 〃	135	排水路調査
上野東部	中ノ切遺跡	〃 喰代		盛土保存
	中ノ切1.2号墳	〃 〃		地区外
名張北部	上原城遺跡	名張市西田原	26	工事実施

第1-2表 第1次調査遺跡

## 2. 第2次調査

各遺跡の試掘調査が終了すると同時に、その結果をもとに工法変更による保存が出来るかどうか、あるいは計画実施による遺跡に対する影響について協議をもった。試掘調査の結果、大安町石樽下遺跡、嬉野町口山田遺跡、松阪市南山西方遺跡、大山田村真泥遺跡については事業地域が遺跡より外れていることが判明した。東員町栗ノ木・小金塚遺跡、山田廃寺、明和町藤原遺跡、上野市神部、西浦遺跡は大部分工法変更による盛土によって保存されることになったが、排水路部分については破壊はまぬがれず、この部分は発掘調査を実施することにした。また、安濃町浄土寺南遺跡、嬉野町蛇亀橋遺跡、明和町堀田遺跡、大山田村西沖遺跡の四遺跡は周辺部より一段高い個所に位置しており、削平はまぬがれず、排水路部分とともに発掘調査を実施することになった。嬉野町北瀬古黒田遺跡、松阪市土古路N・出間遺跡、明和町新兵衛山、東村東方遺跡は遺物の散布は見られたものの遺構は全く見られず、畑作等により後世に攪乱、削平されてしまったものと考えられた。明

和町広垣内遺跡も相当広範囲な遺跡であったが、削平部分について調査したが遺物、遺構は全く検出されなかった。大山田村沢・田中遺跡、上野市古城館跡、中ノ切遺跡については全て現状保存されることとなった。また名張市上原城遺跡は小字名より中世の城館跡かと考えられたが、近世の牛三昧と判り、工事に際し立会うこととした。この他、上野市中ノ切1・2号墳は地区除外されて保存されることとなった。一方、松阪市土古路C、E、W、東遺跡や黒部神社W、柿ノ木原W遺跡、上野市馬別当遺跡は次年度以降の事業地に変更され、今年度事業地外となった。

以上のような協議の結果、10箇所の遺跡が再び調査を実施しなくてはならなくなり、その上、昨年度より繰り越しとなっていた鈴鹿市神大寺遺跡の畑寄せ保存をした残り分についても同時に調査を実施するというので、耕地第2課と話し合いがついたのは天花寺廃寺、下り合遺跡の調査中の7月上旬のことであった。

事業地区	遺跡名	所在地	面積	調査箇所
東員	栗ノ木遺跡	員弁郡東員町	600㎡	排水路
〃	小金塚遺跡	〃	200	〃
〃	山田廃寺	〃	400	〃
鈴鹿第2	神大寺遺跡	鈴鹿市南堀江町	800	削平部分
安濃川右岸	浄土寺南遺跡	安芸郡安濃町	5,078	〃
斎宮	堀田遺跡	多気郡明和町	700	〃
大山田第2	西沖遺跡	阿山郡大山田村	5,400	〃
上野西部	神部遺跡	上野市笠部	720	排水路
			13,898	

第1-3表 第2次調査遺跡

## 3. 第3次調査

第2次調査によって55年度の県営圃場整備事業に伴う調査は終了と考えていたが、嬉野町蛇亀橋遺跡が急に来年度事業となり、その反面、安濃町浄土寺遺跡の削正部分が大幅に増加するなどの変更があった。その上、鈴鹿市天ノ宮遺跡、松阪市出間浦山遺

跡の所在する地区が急に今年度事業地内に編入となり、上野市高猿6号墳は当初現状保存されることになっていたにもかかわらず、地元の事情により削平されることになり、この三箇所の遺跡が急拠調査しなくてはならないこととなった。しかし、今年度の

事業地区	遺跡名	所在地	面積	調査箇所
鈴鹿第2	天ノ宮遺跡	鈴鹿市南長太町	800㎡	削平部分
東黒部	出間浦山遺跡	松阪市出間町	200	試掘
山田	高猿6号墳	上野市喰代	340	削平部分

第1-4表 第3次調査遺跡

調査費用は第2次調査で終了しており、改めて農林水産部に費用負担を申し入れるとともに、文化庁と連絡をとり国庫補助金の追加交付をうけることになった。

以上のような経過をへて、昭和55年度の発掘調査は56年2月上旬、大山田村西沖遺跡、上野市高猿6号墳の調査をもって終了した。調査総面積19076㎡におよんだ発掘調査は遺跡の破壊という反面、今年度も貴重な遺物、遺構の発見が数多くあった。東員町や大山田村では奈良時代の集落跡が、浄土寺南遺跡では平安時代の井戸が、堀田遺跡では土師器焼成塚が新たに検出された。一方、天花寺廃寺では博仏と

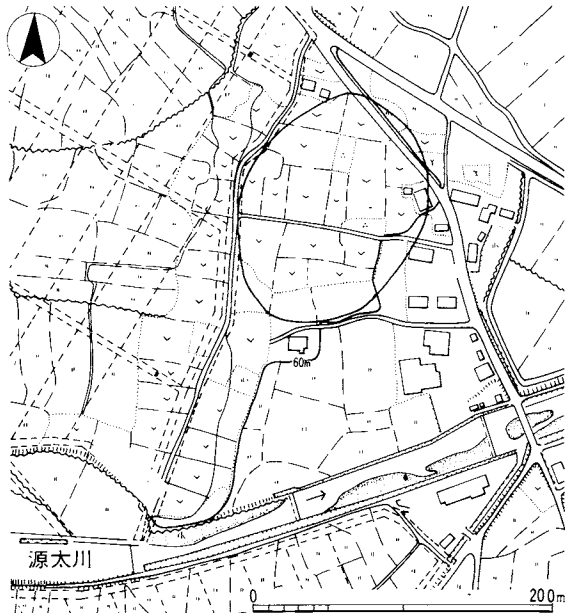
ともに今年度は新に塑像片が出土したのが注目される。また、高猿6号墳は僅か1m足らずのマウンドを残すものであったが、五つの主体部から変形四獣鏡、直刀、玉類、須恵器など豊富な遺物が出土している。

しかし、一方では現場での連絡不徹底のためか、藤原遺跡や西浦遺跡のように調査着手前に排水路部分が重機によって掘削される事態となったり、田中遺跡のように道路工事によって破壊されたり、盛土計画でありながら部分的に削平された例もあり、今後、工事担当機関と更に連携を密にしていかなければならないことが痛感された。

## Ⅱ 試掘調査遺跡

### 1. 石樽下遺跡 いしぐれした 員弁郡大安町片樋

員弁川の支流、源太川の左岸の台地上で、東面する斜面上の遺跡である。標高は64m前後で、現況は水田、畑で中世の土師器、陶器の破片が散布していた。幹線排水路部分に2箇所のグリッドを設けた。地山の黄褐色粘質土まで60～80cmと深い。遺構、遺物は検出されなかった。遺跡はこの部分までは拡がらず、斜面の畑地部分と思われた。事業実施は遺跡に影響は無いと判断した。



第2-1図 石樽下遺跡 (1:5000)

### 2. 北瀬古遺跡 きたせこ 一志郡嬉野町天花寺

天花寺廃寺のすぐ西側、一段低い水田を隔てた畑地で、標高11m前後である。土師器、須恵器の破片が採集されている。工事によって削平される部分に2箇所のグリッドを設けた。耕作土下には灰褐色砂質土が見られ、60～70cmで地山となる。この灰褐色砂質土中より土師器、須恵器、黒色土器の破片が少量出土した。中に1点緑釉陶器片もあった。工事箇所は遺跡の端部と考えられた。(第9-2図)

### 3. 蛇亀橋遺跡 じがめばし 一志郡嬉野町島田

君塚川にかかる蛇亀橋のすぐ下流の沖積地の中にとりのこされたように独立丘が三つ存在する。この丘の上の畑に縄文土器、土師器が散布している。標高は20～24mで、C地区は保存されることとなった。が、A・B2地区は君塚川のつけ替えと水田化によって削平される計画であった。削平箇所には12箇所のグリッドを設定した。A区では遺構は検出されなかったが、第2層に黒茶褐色土の遺物包含層が認められた。B地区では縄文晩期の土器片が出土した。

このため、削平部分を発掘調査を実施することになったが、地元の事情により昭和55年度事業に変更された。

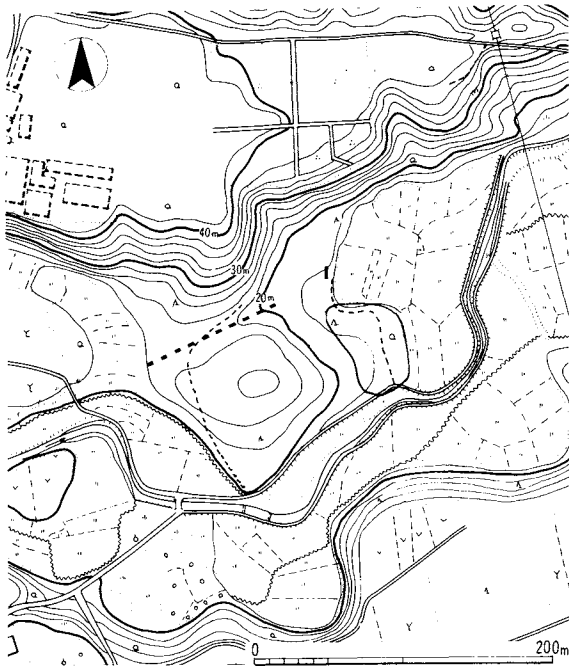


第2-2図 蛇亀橋遺跡 (1:5000)

### 4. 口山田遺跡 くちやまだ 一志郡嬉野町島田

蛇亀橋遺跡のすぐ下流、君塚川左岸の丘陵上の遺跡で、君塚川のつけ替えによって削平されることとなった。現況は山林で、標高は23mである。10箇所のグリッドを調査したが、遺構、遺物は全く検出さ

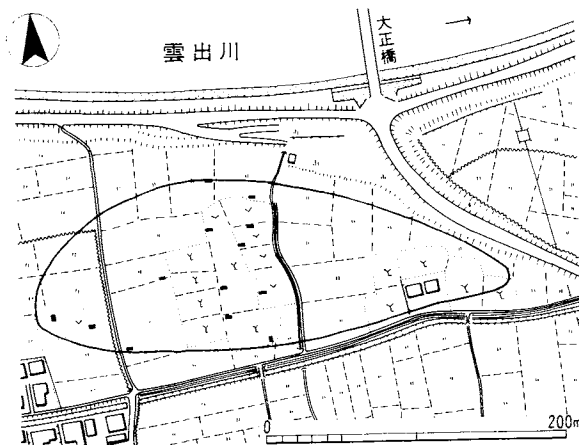
れなかった。調査地点の東南の畑地には須恵器、土師器の破片の散布が見られ、この部分が遺跡と考えられた。



第2-3図 口山田遺跡 (1:5000)

### 5. 黒田遺跡 くろだ 一志郡嬉野町黒田

雲出川の右岸、中村川が合流する地点より 500m 程下流の沖積地に位置する。水田にとり囲まれた微高地の畑地で、土師器片の散布が見られた。標高は 6 m で、水田は 50cm 程一段低い。畑地に 9 箇所、水田に 4 箇所のグリッドを設けた。明確な遺構は認められないが、表土下 50~60cm から土器片が出土している。土師器が中心であり、須恵器や山茶碗、陶器、瓦器も僅かにある。大部分は鎌倉、室町時代のものである。



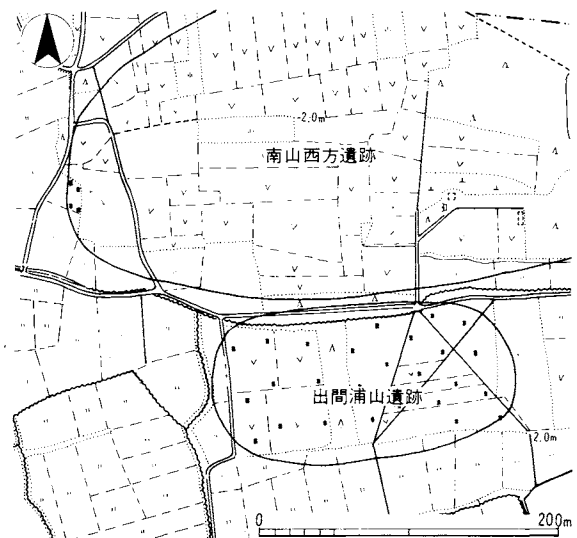
第2-4図 黒田遺跡 (1:5000)

### 6. 南山西方遺跡 松阪市土古路町字南山

榎田川右岸に広がる沖積地上に位置し、標高 2~3 m である。昭和 53~54 年、松阪市教育委員会によって発掘調査された南山遺跡の西方約 300m の箇所、表面には古墳時代より中世にいたる土師器 (甕鍋、皿) 片が散布していた。新川のつけかえのため遺跡の西端部が削平されることとなり、この部分に 4 箇所のグリッドを設けた。調査の結果、耕作土と規定される表土はなく、深さ 1.5m 程の掘削面まで灰黄褐色の純砂層が推積している状態であった。これは全く遺物を含まず、自然堆積層と考えられた。

### 7. 出間浦山遺跡 いづまうらのま 松阪市東黒部町出間字浦山

南山西方遺跡の南に接するようにつづく畑地である。事業地変更により急拠試掘調査を実施したもので、15 箇所のグリッドを約 1.5m 程掘り下げて調査。耕作土中より土師器片、山茶碗片が少量出土したが、いずれも細片であった。また、遺構も検出されなかった。南山遺跡の調査結果よりみても、さらにこの下に遺物包含層が存在することが予想されたが、約 50cm の工事削平で遺跡が影響されることは無いと判断した。



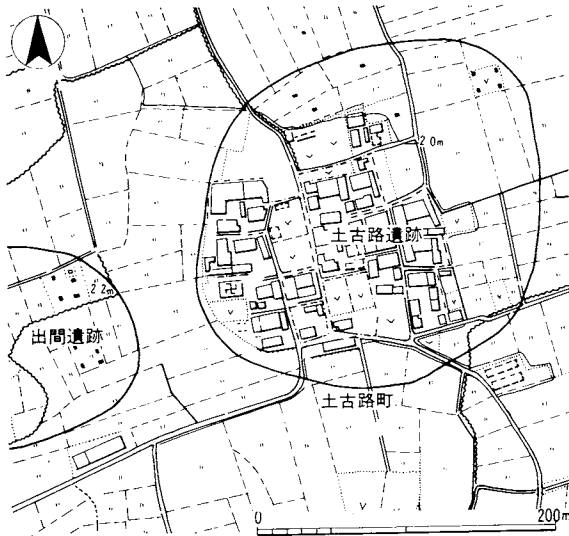
第2-5図 出間浦山・南山西方遺跡 (1:5000)

### 8. 出間遺跡 いづま 松阪市黒部町出間 土古路遺跡 ところ 松阪市土古路町

出間と土古路の集落はいずれも榎田川右岸の沖積地の微高地に位置している。この集落の周辺は一段低い水田で、水田のあちこちに集落と同じ高さの小



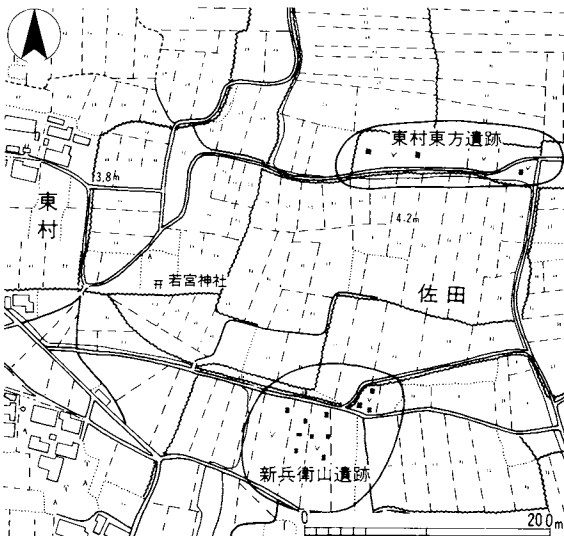
さな微高地が畑地となつてのこっている。この畑地には必ずといってよほど中世の土師器片の散布が見られる。出間、土古路両遺跡はいずれも各集落をも含んだ比較的大きな中世集落跡と考えられた。削平予定個所に合せて17箇所のグリッドを設けて調査を実施した。約40cm程掘り下げたが、明確な遺物包含層は認められず、耕作土中に中世の土師器、陶器の破片が少量出土した程度であり、遺構面はすでに耕作等で後世削平されたものと考えられる。



第2-6図 出間・土古路遺跡 (1:5000)

**9. 新兵衛山遺跡** 多気郡明和町佐田  
**東村東方遺跡** 多気郡明和町佐田

上御糸小学校の東方 600m、周囲の水田より一段高くなつた畑地で、標高4.3m前後である。中世の土師器片が散布していた。両遺跡は南北に150m程



第2-7図 新兵衛山・東村東方遺跡 (1:6000)

隔たつて存在する。東村東方遺跡に3箇所、新兵衛山遺跡に11箇所のグリッドを設けた。第Ⅰ層：耕作土、第Ⅱ層：黒色土、第Ⅲ層：褐色土(地山)で、深さは両遺跡とも60cm程であつた。黒色土からは全く遺物の出土は無く、地山面にも遺構は認められなかつた。既に後世に削平されてしまつたものであろう。

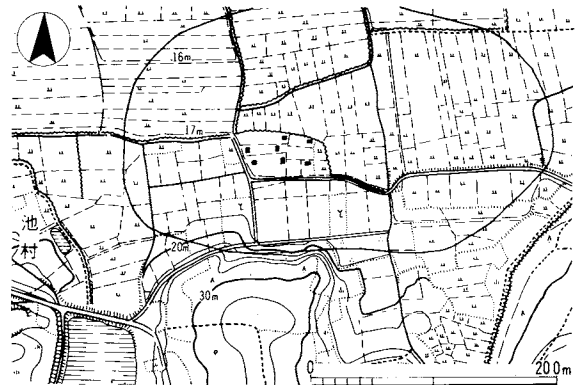
**10. 藤原遺跡** 多気郡明和町金剛坂字藤原

近鉄斎宮駅の南西約1.5km、県道松阪伊勢線の南に広がる水田地帯に位置する。標高は15m前後である。東西に走る2本の排水路計画地内に25箇所のグリッドを設けて調査を行なつた。遺構としては2つのグリッドで溝が検出された。遺物はほとんどのグリッドで見られたが、量は少なく、破片も小さい。土師器、山茶碗の破片が主なもので、平安時代後半の灰釉陶器片もあつた。



第2-8図 藤原遺跡 (1:9000)

**11. 広垣内遺跡** 多気郡明和町東池村字広垣内  
 県道松阪伊勢線をはさむ金剛坂の集落の約2km南

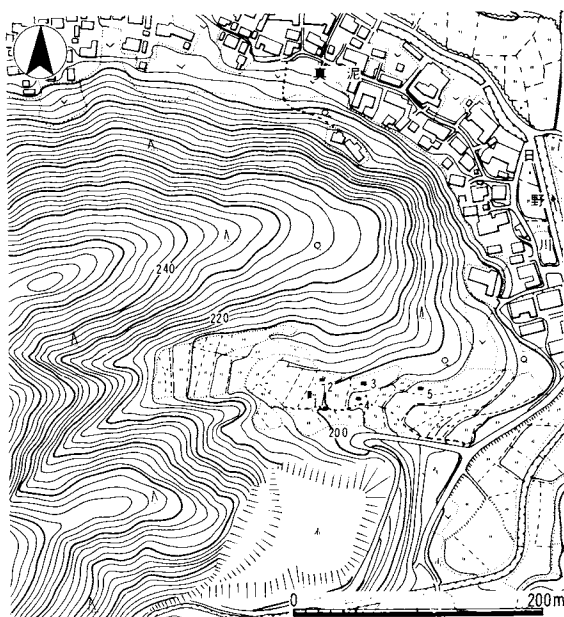


第2-9図 広垣内遺跡 (1:6000)

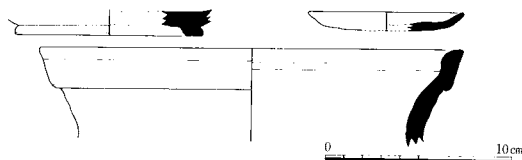
の有爾中から池村にかけてのびる丘陵の間の水田に位置する。標高15~20m。削平される箇所は丘陵麓に近いところで、7箇所のグリッドを設定して、遺構、遺物の確認につとめた。その結果、2箇所でピッドが少数みられたが、埋土が表土（耕作土）そのもので、遺物も含まず、現代に近いものと判断した。

## 12. 真泥A遺跡 阿山郡大山田村真泥

真泥地内の東に開いた小さな谷間に位置し、現況は水田で、標高195m前後である。東方の丘陵には平林古墳群、神林古墳群が存在する。5箇所のグリッドを設けて調査を行なった。その結果、各グリッドで黒灰色砂質土（耕作土）、黄褐色砂質土の直下で地山を認めたが遺構は検出されなかった。耕作土中より数点の土師器片が出土したが、細片であるため時期は不明である。



第2-10図 真泥A遺跡 (1:6000)



第2-11図 出土遺物 (1:4 1~3; 試掘坑3出土)

## 13. 沢遺跡 阿山郡大山田村広瀬

田中遺跡 〃 〃

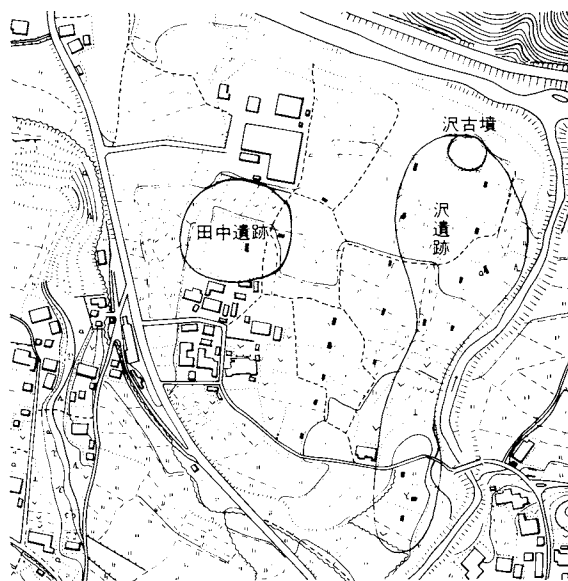
沢古墳 〃 〃

広瀬東部の下位河岸段丘の水田・畑を200×300m

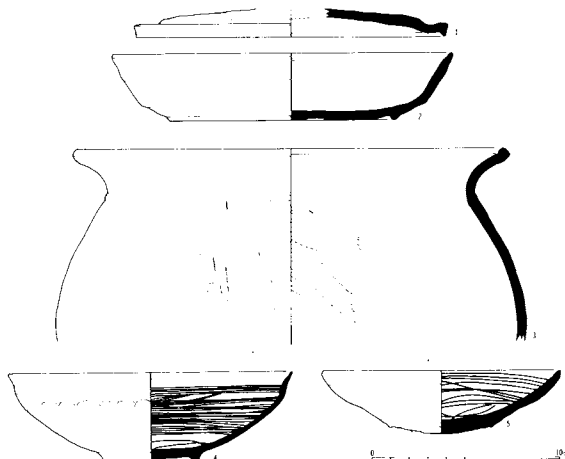
の範囲で、大体2×4mの試掘坑を26箇所入れた。調査の結果と地籍図から、従来の沢A遺跡は、小字が田中に属するので田中遺跡と改称する。田中遺跡からは、土師器・須恵器・陶磁器が出土した。

旧沢B遺跡は、当初より拡張され、馬野川に沿って巾80m位の帯状に広がり、中央部では、表土直下礫層・砂層と層序をなし、表土下より約1m程低い砂層直下に黒灰色粘質土とともに、弥生土器・須恵器を出土し、これより南へ下った標高230m付近の畑で中世墓遺構の一部と土師器皿・甕と須恵器杯を検出した。瓦器の出土は、表土下の礫層上面にて出土するものであり、古墳時代から平安時代の間での冠水を示している。

この2つの遺跡は盛土等による工事変更で保存された。なを、沢古墳は計画段階より盛土により保存されている。



第2-12図 沢・田中遺跡・沢古墳 (1:6000)



第2-13図 沢遺跡出土遺物 (1:4)

須恵器蓋（1）は、口径16.4cm。口縁部は端部で「Z」状に屈折し、外側に面をもつ。天井部は、扁平。内外面とも丁寧にロクロナデする。須恵器杯（2）は、口径17.5cm・器高3.5cm。口縁部は、直ぐ外開し、端部でオサエられ段をつくる。高台は、斜めに立ち上がった底部端より内側につき、断面方形で低い。内外面ともロクロナデする。ともに奈良時代。

土師器甕（3）は、口径32.8cm、大きく弯曲し、外反する口縁部は、端部で肥厚しつまみ上げられる。体部は、撫で肩で大きく内弯する球体をなす。体部外面上部を縦方向にハケ調整し、下半部を右下りにヘラケズリする。内面は、右下りのハケ調整を行う。口縁部をヨコナデする。奈良時代。

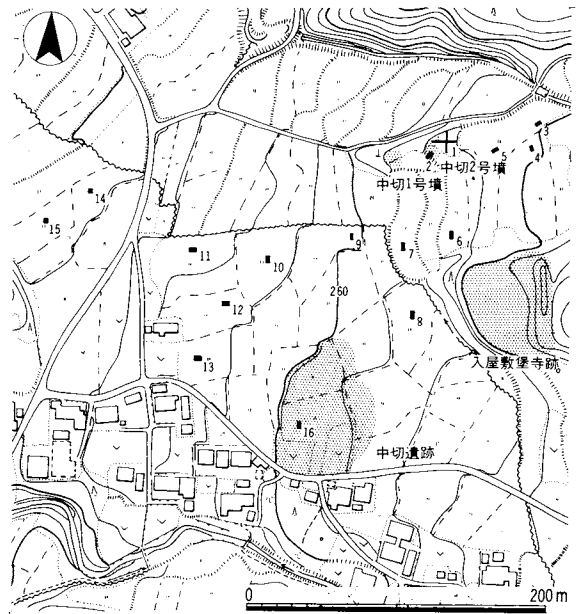
瓦器椀（4・5） 4は、口径15.2cm・器高5.6cm。体部は大きく内弯し、口縁部は外反し、高台は断面方形で低い。体部外面には、指圧痕をのこすのみでヘラミガキはない。内面には、比較的密なヘラミガキを施し、内底面に輪結状暗文を施す。13世紀前半。5は、口径12.7cm・器高3.4cm。体部は、器壁が厚くわずかに内弯して開く。口縁部は、外反せずに丸くまとめられる。口縁内面直下の沈線は消失している。高台は、断面三角形で矮小化したものが張りつけられるが、底部が高台より突出する。体部外面にはヘラミガキは認められず、内面に太く粗雑なヘラミガキが認められる。内底面は、太い輪状暗文が施される。

#### 14. 中切古墳群 上野市喰代字中切 中切遺跡

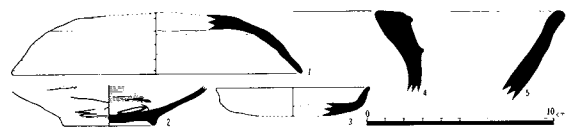
中切古墳群（全2基）1号墳は、径約12m・高さ約2.5mの墳丘を有し、南へ開口する横穴式石室をもつ。石室は、盗掘され荒れているが側壁はほぼ旧状を保っていると判断された。羨道部は、開墾のため削平され、全長等は不明。2号墳は、1号墳の東25mの水田下で検出された。耕作土直下で、石室玄室部を確認し、奥壁1.4m長さ約3mを確認した。開墾のため、天井石・側壁上部は欠損している。側壁は、2段ほどのこされている。羨道部は、開墾のため削平されている。南西へ開口する。須恵器片・瓦器小皿（3）が出土。1号・2号墳ともに圃場整備事業地域から除外され、現状保存。

中切遺跡は、小支谷の南部に位置する古墳時代以降の遺跡であるが、試掘坑の各グリッドから土師器・瓦器の細片が出土しており、その範囲は必ずしも分明でないがグリッド16を中心とするものと推定。

中切遺跡出土遺物の須恵器蓋（1）は、口径15.4cm、推定器高3.1cm。天井部と口縁部の境に稜をもち、口縁部は外開し端部は丸い。天井部外面をヘラケズリし、内面は一定方向にナデる。6世紀後半。瓦器椀（2）は、底径5.0cmの高台の破片である。高台は、断面方形で低く直立する。本部外面には、粗いヘラミガキ、内面には比較的密なヘラミガキを施す。内底面には、輪結状暗文を施す。13世紀前半。瓦器土器（4）は、推定口径26cmの火舎である。口縁部は内傾し、端部で肥厚し外面に2条の凸帯をつくる。中世後期。伊賀焼（6）は、推定口径37cmの播鉢である。口縁部は、ほぼ直線的にのび、端面は丸い。筋目は、細片のため不明。中世後期。



第2-14図 中切古墳群・中切遺跡地形図（1：5000）  
上野市都市計画図25



第2-15図 中切遺跡出土遺物（1：4）  
1；試掘坑16 2；試掘坑8  
3；試掘坑2 4・5；試掘坑9

### Ⅲ 員弁郡東員町 小金塚遺跡

#### 1. 位置と歴史的環境

鈴鹿山脈に源を発する員弁川は、員弁郡4町（藤原町、員弁町、大安町、東員町）を流れ、桑名市に至り町屋川となって伊勢湾に注ぐ。東員町地内では員弁川は、町のほぼ中央を東西に貫流し、右岸に沖積地を形成している。左岸は河岸段丘が広がり、小金塚遺跡(3)も、員弁川の支流である戸上川左岸（標高40m前後）に位置する。行政区画上、員弁郡東員町山田字小金塚にあたる。

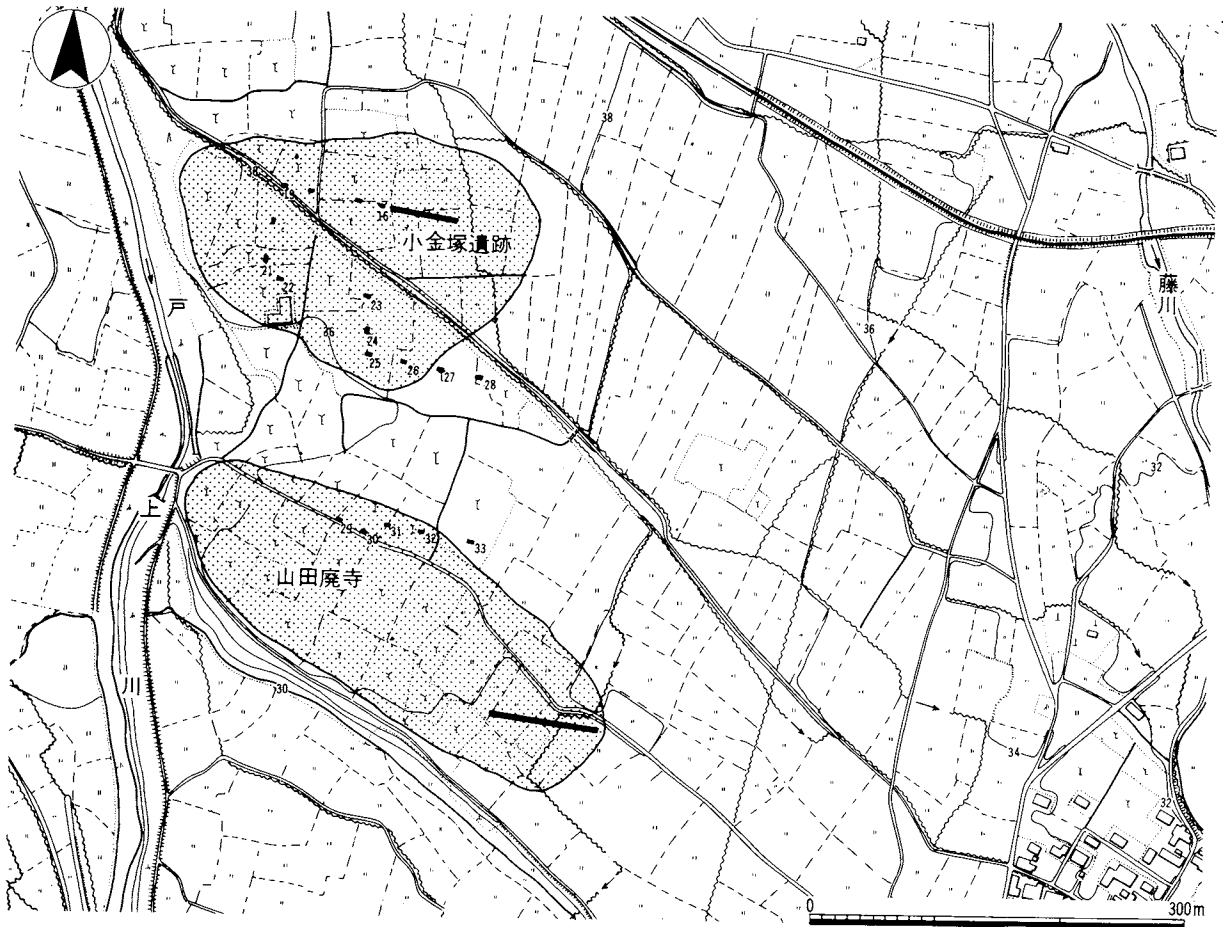
東員町には、現在44箇所の遺跡が確認されているが、全容のわかるのは、昭和45年末から46年にかけて発掘調査された、西山遺跡、新野遺跡のみである。この遺跡は、工場建設に伴い調査されたものであるが、古墳時代末～平安時代に至る村落跡であり、多

くの竪穴住居跡、掘立柱建物跡が検出されている。他に著名な遺跡には、猪奈部神社古墳群(4)がある。もと6基の古墳（一説には17基）があったとされているが、今は境内に1基を残すのみとなり、遺物も散逸してしまった。出土遺物のわかる古墳には、員弁町の岡古墳群(5)がある。これは横穴式石室を有し多量の須恵器が出土しており、その遺物は現在員弁高校に保管されている。

小金塚遺跡にも、数基の古墳があり、「黄金塚」と呼ばれていたらしいが、現在、古墳の痕跡等全く見られず、桑畑あるいは畑となっている。わずかに須恵器片、土師器片が採集されるのみである。



第13-1図 遺跡位置図 (1:50000)



第3-2図 遺跡地形図 (1:6000)



第3-3図 発掘区平面図 (1:2000)

## 2. 遺構

今回は削平により破壊される排水路部分（4 m × 50 m）の調査を実施したが、小金塚という字名が示すような古墳の痕跡はおろか、住居跡も検出されなかった。検出された遺構は少数のピット、風倒木痕と思われる深さ70～80cmの土坑および3条の溝と土坑1基であった。

**SD1** トレンチ西端で検出されたL字状の溝で、溝底は2段になっており、幅は0.7～1 m、検出面からの深さは1段目で20～30cm、2段目で30～40cmである。溝の規模、全体の形状は調査区外に延びる

ため不明である。

**SD2** 幅1.2～1.3 m、深さ30～35cmで南北に直線的にのびる溝である。須恵器蓋が出土した。

**SD3** SD2の東2.5 mにあり、SD2と方向を揃える溝で、幅1.7～1.9 m、深さ70～80cmあり一部テラス状に中段を形成している。SD2、3ともに溝底は北に高く南に低い。

**SK4** 調査区のほぼ中央部で検出された楕円形の土坑で、短径1 m、長径1.7 m、深さ70cmである。遺物の出土は全くない。

## 3. 遺物

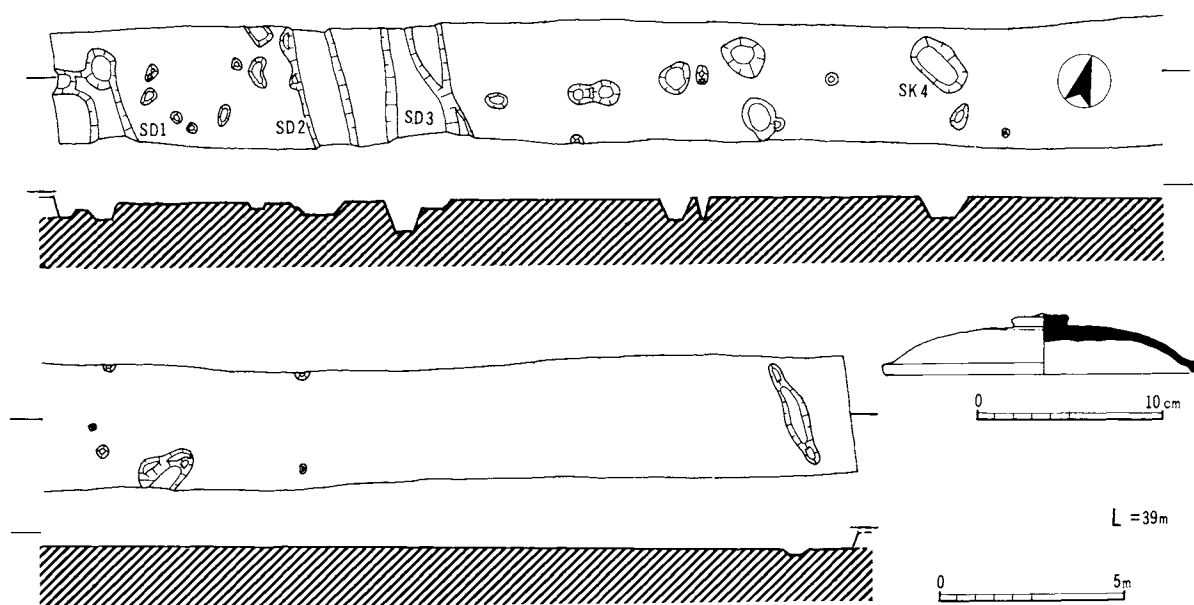
遺物の出土量は極端に少なく、整理箱1箱に満たないが、時代としては奈良時代～平安時代にわたる。図示できるものがほとんどないため、SD2出土の須恵器蓋のみ図示した。推定口径16.7cm、高さ3.2 cmである。扁平なつまみで天井部は丸く、口縁部付近でくぼみ、口縁端部は下方にのびるが厚い。ヘラケズリは天井頂部付近に限られる。ロクロ方向は右回りである。胎土は少量の砂粒を含み、焼成は堅緻である。表は明灰色、内面は灰色である。なおSD

2からは他に土師器の小片が2片出土した。

同様の特徴をもった蓋の口縁部が他に2片出土した。

平安時代の遺物には灰釉陶器の底部がある。これは高台下部がや、内におれるもので、断面は三角形に近い。

他の遺物は土師器甕・須恵器甕の小片と平瓦が1点である。平瓦は厚さ約3 cmで裏は縄目が残りに、表は布目が一部残っているがナゲ消されている。焼成は甘く、黄褐色である。



第3-4図 遺構平面図（1：200）・SD2出土土器実測図（1：4）

## 4 . 結 語

今回の調査は幅4 mのトレンチ調査で、しかも面積が狭いため、顕著な遺構は検出されなかった。また地形的に東に低くなっており、調査の結果においても東に寄るほど遺構の密度はうすくなっている。

検出された遺構のうちSD1・2・3の方向はそれぞれN38°W・N32°W・N36°Wでほぼ似た方向を示す。出土遺物がSD2の須恵器蓋しかないため結論

づけることはできないが、SD2を奈良時代の溝と考えると、SD1・3もSD2とかけ離れた時期のものではないといえるかもしれない。

ところで伝承にある「黄金塚」の痕跡は全く確認されなかったが、古墳がかつてあったとすれば、その立地からみて遺跡の西端つまり戸上川を見おろす台地端に存在した可能性が高いといえよう。

## IV 員弁郡東員町 山田廃寺

### 1. 位置と歴史的環境

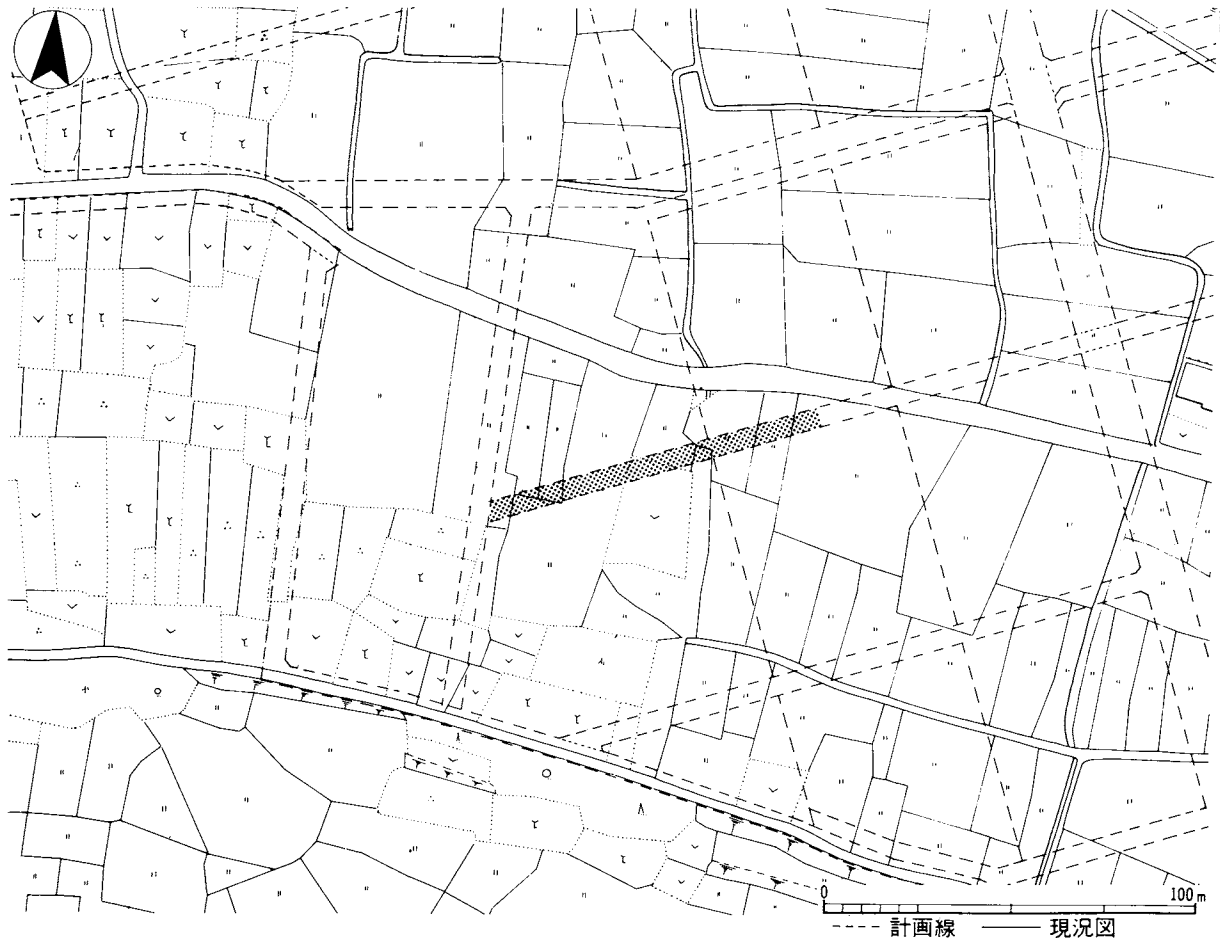
東員町山田字鐘撞他に寺跡が存在することが知られるようになった歴史は古く、すでに昭和8年刊行の「三重県古瓦図録」(鈴木敏雄氏著)に紹介されている。同書では、員弁寺址として紹介されており、出土遺物として、八葉単弁軒丸瓦と扁行唐草文軒平瓦が写真図版としてのせられている。また、出土の瓦には焼けたものが多く、寺が火災にあったのではないかと推測されている。また、土壇を予想させる方形の高まりも報告されている。

更に、「員弁史談」(近藤実氏著)では、山田村に大師堂員弁寺という真言宗、又は天台宗の大寺があり、天正年間に織田信長の兵火により焼失したが、

その寺域は方三丁に及ぶものであったとされている。また、同寺の礎石が、山田所在の円光寺に残されていることも紹介されている。

この員弁寺址域は員弁寺が、今回発掘調査の対象地となった山田廃寺(2)であることは、小字名の鐘撞等から明らかなどころである。

山田廃寺は、戸上川左岸にあり、現東員町役場庁舎を含み、周囲の水田、畑をもあわせた平安時代の寺跡として登録されている。平安時代の寺跡の調査例は、県下では四日市々南いかるが町の大膳寺跡のみであり、伽藍等わかっていない実状にある。また山田廃寺は、東員町に所在する唯一の寺跡でもある。



第4-1図 発掘区平面図(1:2000)



## 2. 遺 構

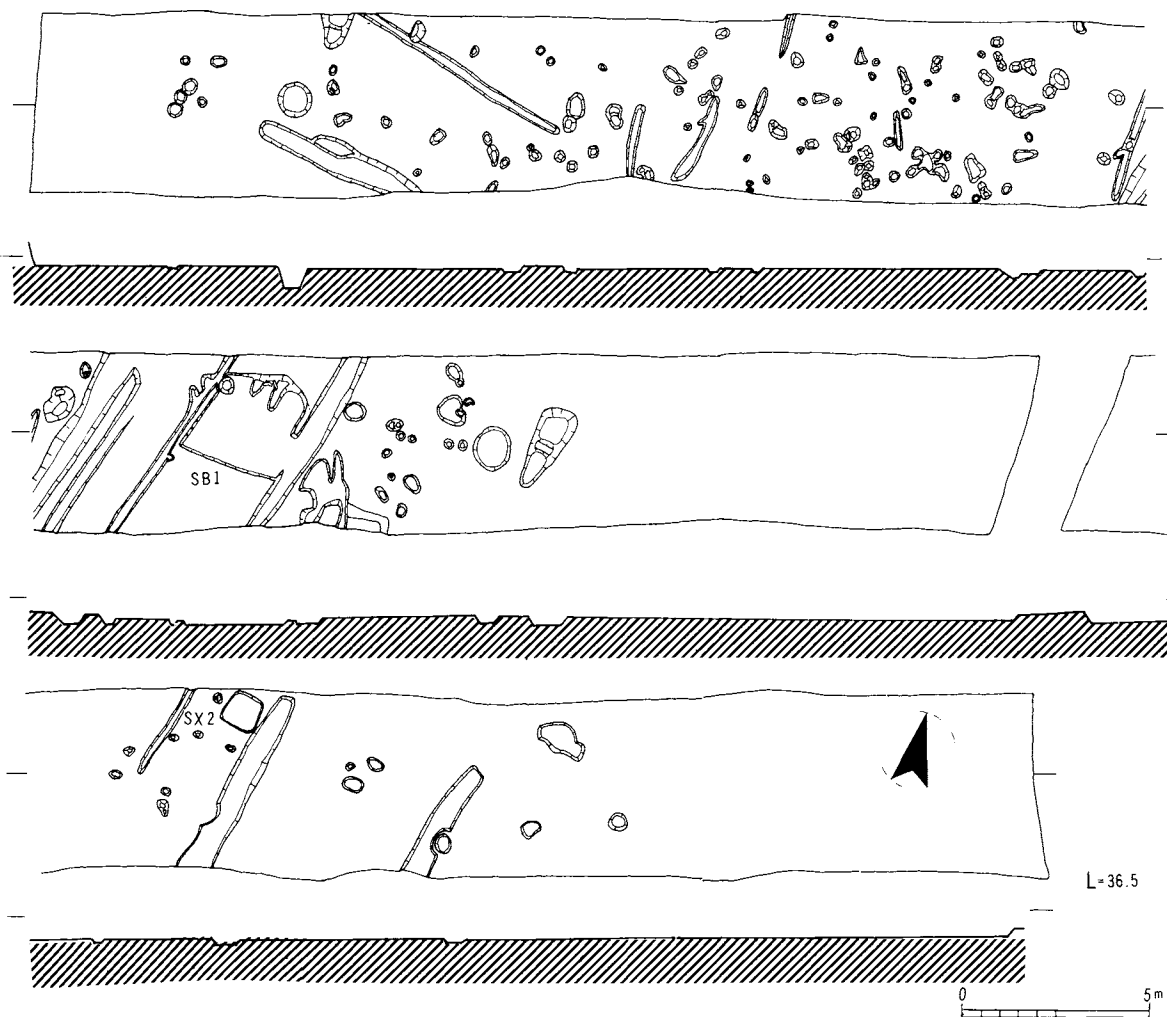
今回の発掘調査は、削平される水路部分約 400 m<sup>2</sup> の調査であり、検出された遺構は竪穴住居 1 棟、中世火葬穴 1 基、数条の溝及び不規則なピット群であった。遺構は調査区の西端から中央部にかけて濃く、東端に近づく程稀薄になる。

発掘区中央部及び東端付近で検出された溝跡は、深さ 10~20cm で、方向は N15~20° E の中におさまる。西端で検出された 2 条の溝は、これらの方向を西へほぼ 90 度ふった方向をとる。

**SB 1** 調査区のほぼ中央部で検出された小形の竪穴住居で不整形である。南北辺 2.6 m、東西辺は後世の溝で切られているため不明であるが、溝の両側外で検出されないため、その中におさまるとすれ

ば、ほぼ南北辺と同規模となる。北壁中央部には黄色粘土でつくられたカマドがある。カマドは 20cm 幅の粘土を 2 本、壁と直角に住居内に向けて 40~80cm のばさされており、土師器甕片が出土した。床面までの深さは 10~20cm で、支柱穴、周溝は確認されなかった。

**SX 2** 一辺約 95cm で隅丸方形のプランをした火葬穴である。深さ 20cm 前後で周囲及び底面は 2~3 cm の厚さで赤褐色に焼けている。内部には炭がつまっており、骨片が少量検出された。副葬品としては土師器皿 1 枚が出土したのみで、他に棺に使用したと思われる釘が出土している。



第 4 - 2 図 遺構平面図 (1 : 200)

### 3. 遺物

出土遺物が少量であり、遺構に伴う遺物もほとんど無いため、ここでは出土土器の概括およびS X 2から出土した土師器の記述にとどめる。

まず、瓦では布目のついた平瓦が1点出土しただけで、寺跡の存在を示す積極的な資料は得られなかった。

出土遺物の年代は古墳時代～近世にわたる。古墳時代では須恵器杯、高杯、甕がある。甕は口縁の一部で櫛状工具により列点文を施している。奈良時代の遺物では杯がある。蓋は扁平なつまみをもち、杯の底部高台は方形でや、外開する。灰釉陶器は高台部が断面三角形に近くなり、平安時代でも後半のものが出土している。これら、古墳～平安時代の遺物は量的にも少ないが、その中において奈良時代の土器がや、多いといえる。

山茶碗も底部の破片ばかりであるが、方形の高台を有するもの、三角形のもの、ほとんど高台をもたないものなどさまざまである。全体の傾向からみれば、高台が退化し、体部も直線的となるものが多く、鎌倉時代でも後半のものが主流を占める。

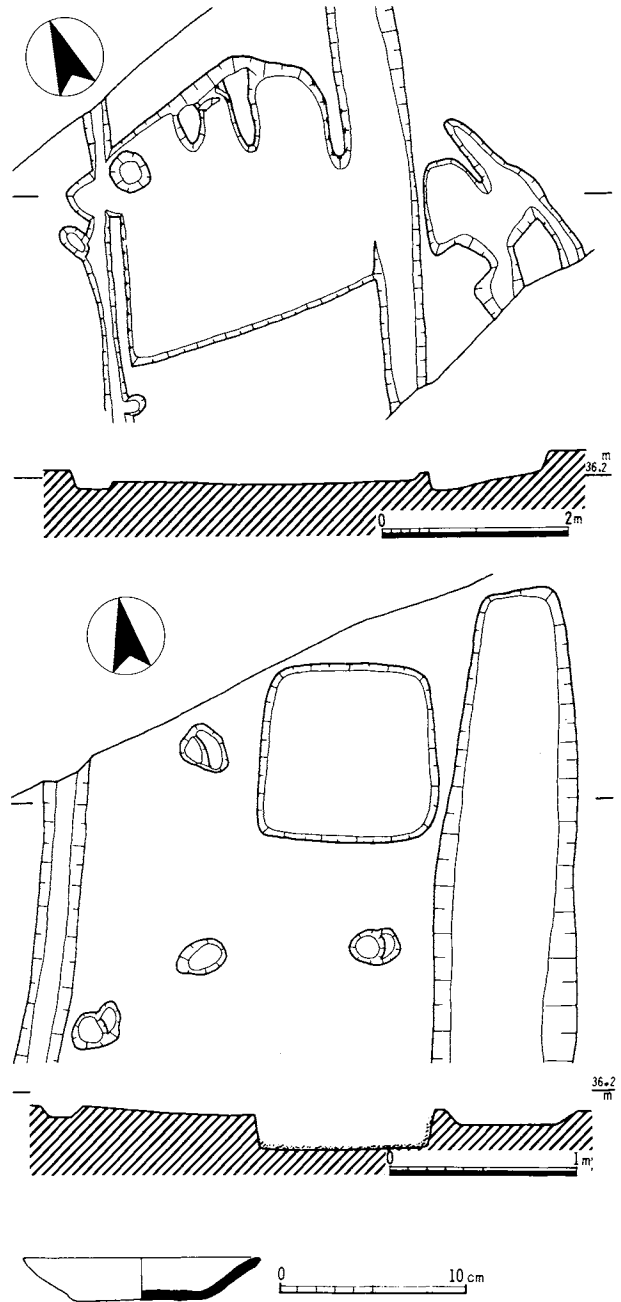
土師器はほとんどが甕の体部であり、外面にハケ目を施しているが、年代を細分できる資料は得られなかった。

S X 2出土の土師器は、薄手の均一な土器で、口径12.7cm、器高2cmである。平坦な底部から直線的に外開し、口縁部でや、外反する。底部内面はナデ調整され、体部との境から体部外面の下半までヨコナデされる。そのため、底部内面に同心円状の痕が残る。精良な胎土を用いて焼成されている。

### 4. 結語

遺構の項で述べたが調査区東端は遺構がまばらになっており、ほぼ遺跡の端になるものと思われる。

竪穴住居(S B 1)は方形あるいは長方形プランにはならないが、カマド内から出土した土師器甕の破片及び奈良時代の土器が比較的この周辺から出土していることから、奈良時代の住居跡と考えている。



第4-3図 上：S B 1 実測図 (1 : 80)  
下：S X 2 実測図 (1 : 40)  
出土土器実測図 (1 : 4)

同時代の集落跡は員弁川沿いでは右岸の西山遺跡・新野遺跡<sup>①</sup>が著名であるが、1棟だけであるが今回員弁川左岸においても集落跡の手がかりが検出されたことになる。

中世の火葬土塚は、近辺の四日市市員野遺跡<sup>②</sup>で5基検出されているものと同規模である。この種

の土坑は副葬品を伴わないことが多いが、出土した土師器皿から室町時代の後半に属するものと考えられる。また、釘が出土したことは、火葬にあたり棺を使用したことを裏づけることにもなる。

ところで、調査区と寺跡との関連となると、その存在を示す遺構も遺物も無く、平瓦片1点のみである。付近の鳥取山田神社には平瓦が1枚保管されているが、これも出土地点が明らかではない。

〈註〉

① 小玉道明『西山遺跡・新野遺跡』東員町教育委員会 1976

② 林 博通『貝野遺跡』四日市市教育委員会 1969

## V 員弁郡東員町 栗ノ木遺跡

### 1. 位置と歴史的環境

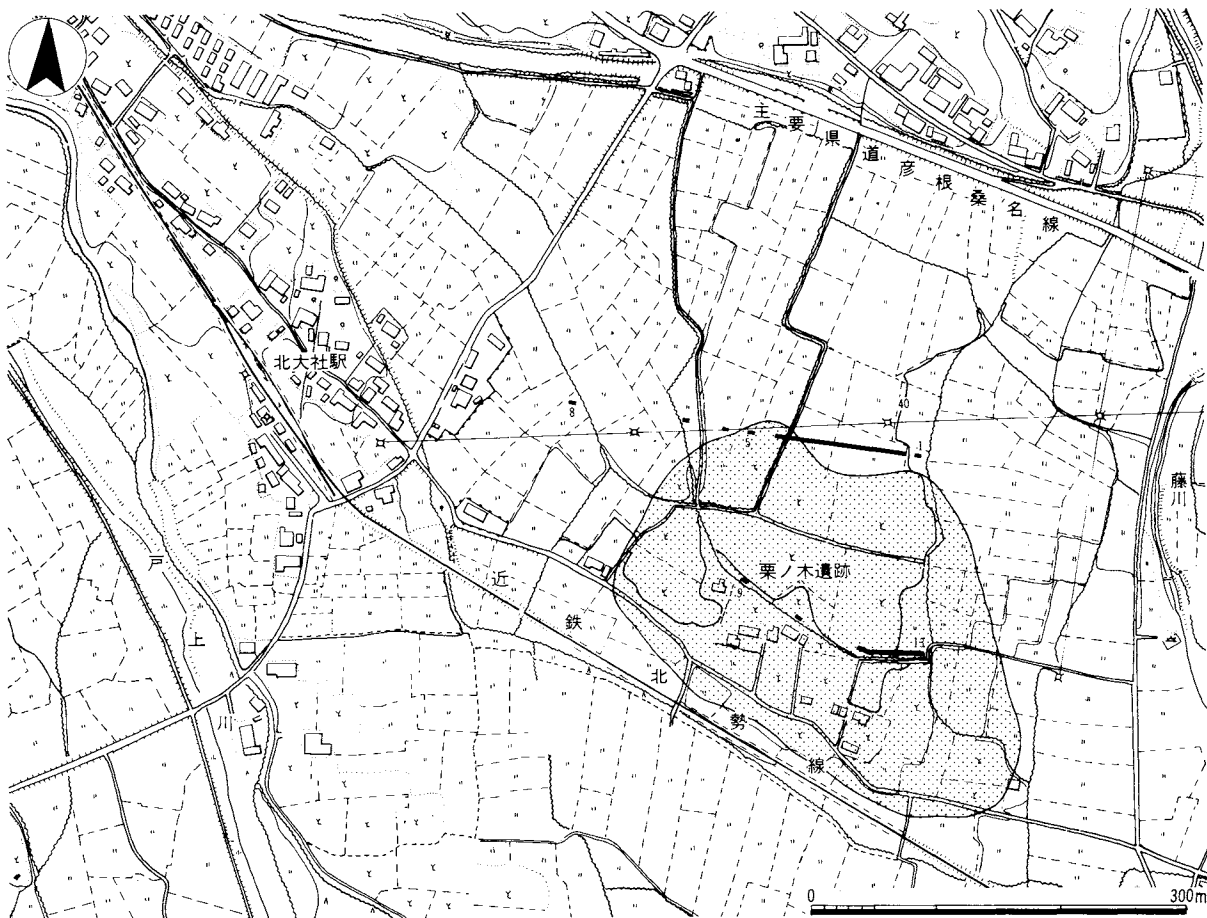
栗ノ木遺跡(1)は、東員町山田字栗ノ木他に所在する。この遺跡も、戸上川の左岸と藤川にはさまれた洪積台地上にあり、近鉄北勢線六把野駅と北大社駅の間地点の北側に広がっている。

栗ノ木遺跡は今まで確認されておらず、今回の圃場整備事業に先立つ分布調査の際、発見されたもので、4万㎡をこえる大規模な遺物散布地であることがわかった。

分布調査では、灰釉陶器、山茶碗等の遺物が採集され、平安時代以降の集落跡であろうと予想された。東員町の員弁川左岸で平安期の遺跡が発見されたの

は、山田廃寺を除いて最初のことである。

東員町の平安期以降の遺物は、現在登録されている44箇所遺跡のうち12箇所を数えるが、その様相はよくわかっていない。また員弁郡全体でも270近い遺跡のうち、中世の遺跡は50近くあるが、同様のことがいえる。そんな中で、近年中世城館跡が精査され、員弁郡にも、田光城、田辺城、大井田城等遺構の保存が良好な城跡が確認されてきた。東員町には現在5箇所の城館跡が確認されているが、大木城跡、山田城跡は当時の面影を今によく残している。



第5-1図 遺跡地形図 (1:6000)

## 2. 遺 構

第一次調査に基づき排水路部分に2本のトレンチを入れた。北側をA区、南側をB区と呼称し、A区は4m幅で110m、B区は同じく55mを調査した。

基本的な層序は灰黒色砂質土（表土層）、灰褐色砂質土、黒茶褐色砂質土（包含層）暗茶褐色土となり地山である黄褐色粘質土となる。A区での表土から地山までの深さは40～100cmで西へいくほど浅くなる。

以下に検出された主な遺構について概述する。

### A区の遺構

**SB1** 80×50cm程度の長方形の柱掘形をもつ掘立柱建物で、2間×1間分が検出された。掘形の深さは30～40cmで、東西の柱間は1.8m、南北は2mである。方向は東西でN80°Eである。

**SB2** 2×1間以上の掘立柱建物で、建物の方向は東西軸でN76°E、柱間は東西2.0m、南北2.4mである。柱穴は径40～60cm、深さ20～30cmである。

**SA3** SB2の東端から約6m離れて検出された柵列である。3間分が検出され、柱間は2.2mであり、その方向はN80°Eを示す。

**SB4** SA3の東で検出された2間×1間以上の掘立柱建物で、柱間は東西3.2m、南北2mである。方向は東西軸でN79°Eをとる。

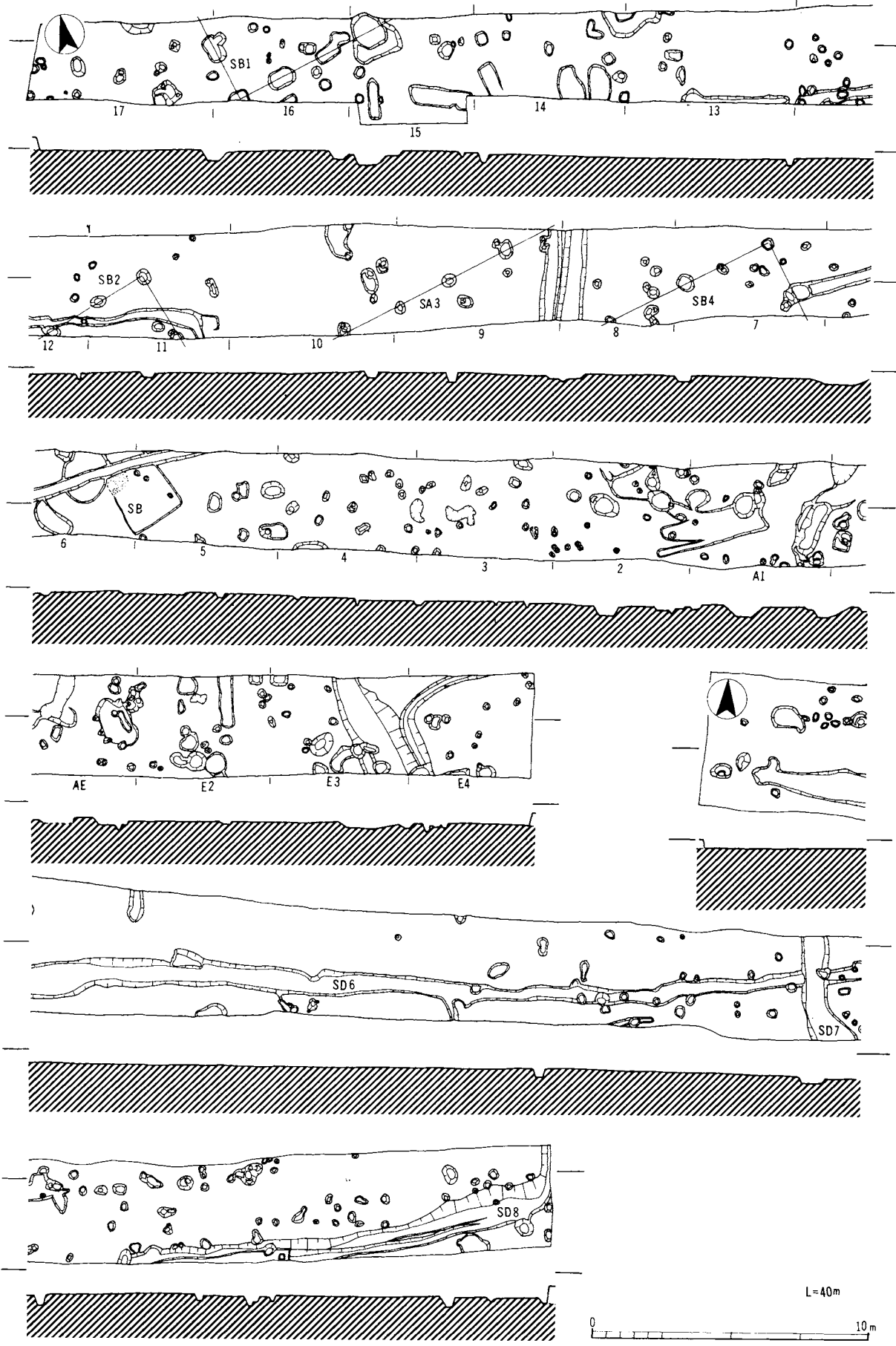
**SB5** 調査区のほぼ中央部で検出された竪穴住居で東西辺2.1m、南北辺は北側が溝で切られているが、東西辺と同じかあるいはやや長いものと思われる。平面方形で西北隅に焼土が0.6×1mの範囲にひろがっている。検出面から床までは浅く5～10cm程度で、土師器片が1片出土した。

### B区の遺構

表土から検出面（地山）まで30cm前後と浅く、トレンチ西端では20cm足らずとなる。検出された遺構は3条の溝とまとまりのないピットである。SD6



第5-2図 発掘区平面図（1：2000）



第5-3図 遺構平面図 (1:200)

は幅0.4～1m、長さ約36m、深さ10～20cmで東に低くなっている。SD7はSD6の東端付近でこれ

と直交する幅約1mの溝である。発掘区東端からは、L字に曲がる溝SD8が検出された。

### 3. 遺物

#### (1) 土師器 (1～6)

**椀 (1・2)** (1)は口径15.6cm、器高4.7cmあり全体に厚手である。割合高い高台(1.5cm)の上部で強い段をつけ、ゆるく内弯しながら口縁端部で外反し丸くおさめる。体部下半は内外面とも指頭圧痕が残り、上半はヨコナデされる。(2)は底部糸切りの台付椀でロクロによりひきあげられている。分厚い台部から内弯しながら立ちあがり、口縁端部でや強く外反する。台部を除いたスタイルは、灰釉椀あるいは山茶椀と酷似する。口径14cm、器高5.8cm、淡い灰色である。

**台付皿 (3)** 4cmの分厚い台のついた皿または盤であろう。底部は糸切りで底部から0.7～1cmで段をつけ、大きく内側へ弧を描きながら体部へ移行する。

**杯 (4・5)** (4)は1.2cmの厚い底部から大きく内弯して、口縁端部に至りころもち外反する。口径は14.2cm、器高3.8cm、底部は糸切りである。(5)は口径11cm、器高2.5cmの小形の杯で、底部は糸切りである。平坦な底部から直線的に外開し、口縁下部で大きく外反する。成形はロクロにより一気にひきあげられており、胎土も精良である。

**甕 (6)** 口径16.8cm、器高約14cmの小形の甕で、

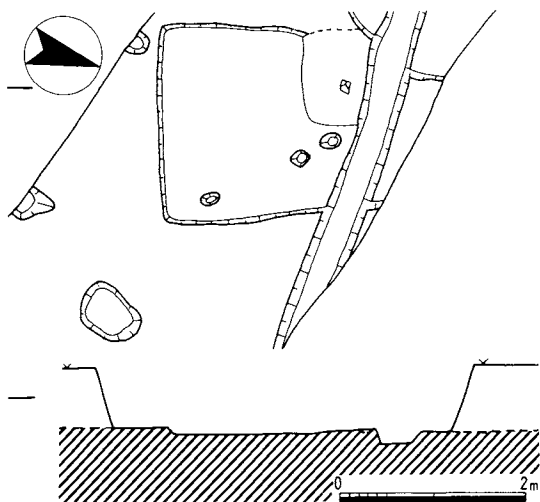
口縁部は強く外反し短く、端部はこころもちつまみあげる。胴部外面は縦方向のハケ目が施され、下半部はナデ消されている。内面は、横位のハケ目を底部近くまで施している。ハケ目原体の単位は不明瞭であるが、1.3cm幅に6～7本数えられる。

#### (2) 須恵器 (7～12)

**杯 (7～12)** (7・8)はセットとなる。(7)は全体が丸味を帯び、口縁端部は垂直に下がり三角形の断面となる。天井部上半がヘラケズリされている。口径16.1cm、器高3.4cm、ロクロ方向は右回りである。(8)は平たい底部から直線的に立ちあがり口縁に至り、底部と体部の境までヘラケズリをしている。口径15.9cm、器高3.5cmで、やはりロクロは右回りである。(7・8)とも胎土に少量の砂粒を含み、焼きがあまりため黄褐色をしている。(9・10)は共に蓋でつまみ部を欠失しており、ヘラケズリは共に天井部の水平に近い部分までで、(9)に比べ(10)は丸味にかける。(11)は糸切りの平たい底部から、凹凸のはげしい水挽き痕を残しながら直線的に立ち上がり口縁部でよわく外反する。口径12.4cm、器高3.8cmである。(12)は小形の杯で口径10.8cm、器高4.4cm、底部から体部にかけては強く屈曲し、直線的に立ちあがる。高台は外方へふんばる。

#### (3) 陶器 (13～20)

**灰釉椀 (13・14)** (13)は推定口径18.1cm、器高5.1cmで、凹凸をもちながら内弯して立ちあがり口縁部で外反する。端部は丸くおさめる。高台は断面が三角形に近くなるが、ほぼ垂直にのび高台底に狭い平

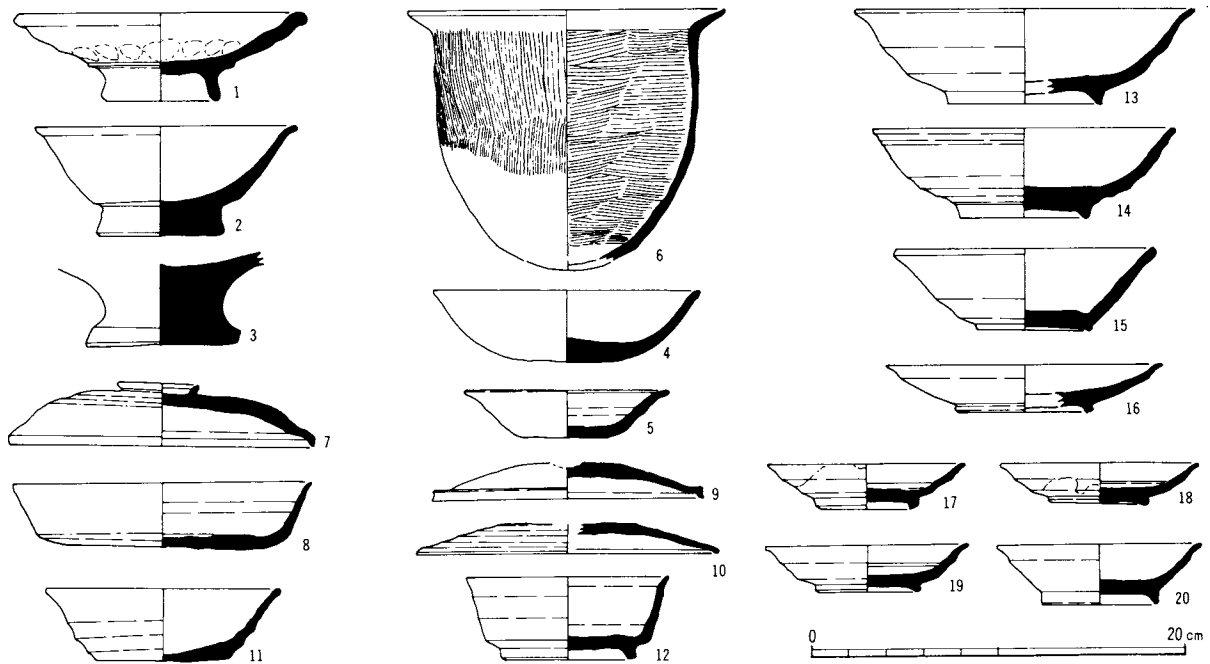


第5-4図 SB1実測図(1:80)

地区名	遺物番号
A E 1	4
A 1	13・14・17・18・19
A 2	1・2・3・5
A 9	20
A 12	7・8
A 14	9・10・12
A 15	16
A 16	11

※遺物番号6・15はB区出土

第5-1表 地区別出土遺物



第5-5図 遺物実測図(1:4)

担面があり、靱殻痕が残る。内面には薄緑色の釉があるが外面はとんでいる。(14)は底部は厚いが体部は急にうすくなり、強い水挽き痕を残しながら内湾し口縁端部でわずかに外反する。底部には糸切り痕が残り、高台は正三角形に近い。口径16cm、器高4.7cmである。

**灰釉皿** (16~20) (16)は口径14.6cm、器高2.5cmで底部から大きく開く。高台は方形で外にふんばる。内面は薄緑色の釉がかかる。(17・18)は体部内面に小さな段をつけた皿である。(17)は口径10.5cm、器高2.4cmで垂直の高台をつけ、底部には糸切り痕が残る。18は口径10.6cm、器高2.3cmで短い高台がつく。底

部は糸切り痕が残る。(17・18)とも灰釉をつけがけしているが、内面は(17)が底部付近までかかっているのに対し、(18)は全面に及ぶ。

**山茶椀** (15) 口径13.6cm、器高4.4cmで高台はほとんど退化している。体部は直線的にひろがり口縁に至る。胎土は粗く砂粒を多く含む。高台底に靱殻痕が残る。

#### (4) 磁器

**白磁椀** 細片のため図示できないが、玉縁の口縁部が出土している。

なお、第一次調査時に緑釉陶器片が1片出土した。

## 4. 結 語

40,000㎡をこえる栗ノ木遺跡の650㎡余りの調査にしかすぎないため、遺跡の全体像をつかむことはできないが、遺構・遺物が割合多くみられたA区について概述し結語としたい。また遺跡の範囲はA区のトレンチが分布調査で確認された遺跡範囲の外になるにもかかわらず、遺構・遺物が見い出されたことから、遺跡範囲が更に北に拡大されることが判明した。

### (1) 遺構について

検出された竪穴住居(SB5)は一辺2.1mの方

形プランで、西北隅の焼土上に土器器片が出土した。胴部破片であるため時代は特定しがたいが、奈良~平安時代の初め頃と考えられる。

掘立柱建物(SB1・2・4)については、その方向が最大で4°であり、大きな差のないことから、時代的に近接したものであろう。また柵列(SA3)にしてもこれらと同方向を示しており、たぶんSB2と4を限る柵ではないかと思われる。SB1の柱掘形が他に比べて大きいということを考慮すれば、SB1が先行し、SB2と4が同時に存在し



たとも考えられる。

## (2) 遺物について

図示した遺物と第5表の出土地区を比較してみると、遺物の集中地区をほぼ2箇所に分けることができる。その1つはA1・A2であり、他の一つがA12・14である。

A12・14からの出土遺物は、すべて奈良時代の須恵器に限られる。

A2出土遺物は土師器で(2・3・5)はすべて糸切り底であり、(2・5)は明らかにロクロ成形されている。(3)については底部のみの出土であるため不明で

あるが、(2)と同じ器形であり、おそらく同様のことがいえると考えられる。またA1出土の灰釉陶器については時期的には平安時代後期、12世紀初めのものと考えられ、これらと前述した土師器の時期と矛盾しない。土師器1についても同時期と考えられる。

出土遺物は奈良時代～室町時代にわたるが、中心となる時期は奈良時代と平安時代の後期であり、この間については空白期間がある。広大な遺跡の中のをわずかな部分の調査であり、断定することはできないが、おそらく時代により居住地が移りかわったものと考えられる。  
(山下雅春)

# VI 鈴鹿市南長太町 天ノ宮遺跡

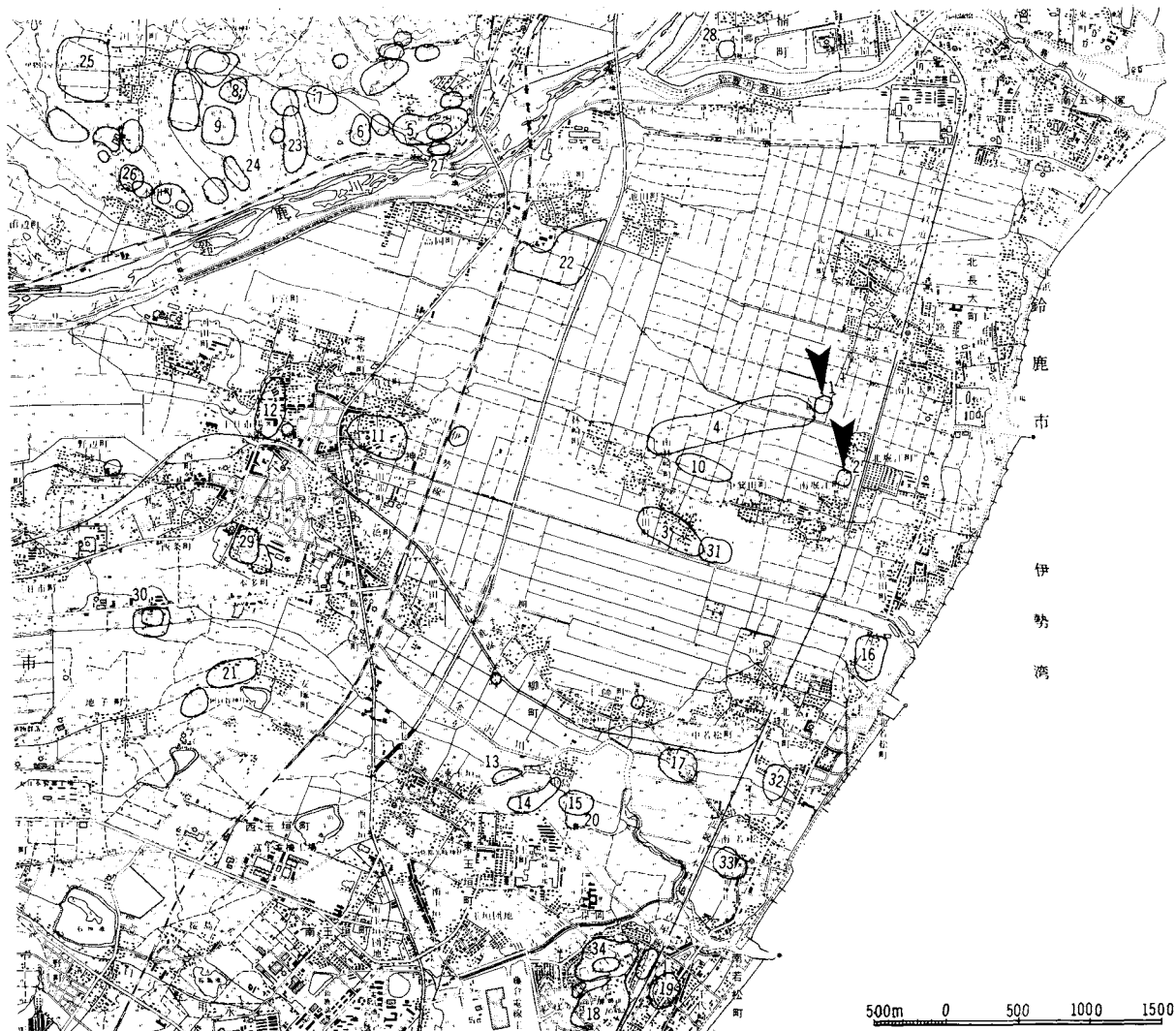
## 1. 位置と歴史的環境

鈴鹿市の北西部を南北に連なる鈴鹿山脈は、中生代に古生層を貫入したマグマが造山した花崗岩質の主稜部を持つ。第三紀の海進、海退、東海湖の形成と消失の後、鮮新世には鈴鹿山脈東麓に一志断層が生じた。断層崖を流下する諸河川は、広大な扇状地平野を形成した。扇状地面を浸食しつつ流れる諸河川の水を集めて東流する鈴鹿川は、その下流に豊かな三角洲扇状地を形成した。

天ノ宮遺跡(1)および神大寺遺跡(2)は、鈴鹿市

の市街約3kmに位置する。天ノ宮遺跡は、林崎から南長太に至る自然堤防上に立地する標高4mを測る現況畑地である。神大寺遺跡は、四周水田に囲まれた標高3mを測る畑地に立地する。

周辺の遺跡概観をしてみたい。同様な沖積平野で自然堤防上に立地する隣接の遺跡に弥生時代の拠点集落と考えられる上箕田遺跡(3)、弥生時代以降中世まで断続して営まれた大木ノ輪遺跡(4)がある。先土器時代、縄文時代の遺跡は、第三紀に形成され



第6-1図 遺跡位置図(国土地理院1:50000 神戸、南五味塚)

た丘陵上に多く位置し、鈴鹿川左岸の広大な扇状地には遺跡が多い。ナイフ型石器が出土し縄文～弥生時代に継続する高岡山遺跡(5)、東ノ岡遺跡(6)、西ノ岡遺跡(7)、細谷遺跡(8)がある。

弥生時代に入ると、鈴鹿川左岸では、谷水田を利用した稲作が行われ前述の遺跡の他に、石庖丁・石鎌が出土した境谷遺跡がある。右岸には、しだいに北にその流路を変えていった鈴鹿川が作り出した幾条かの旧流路にある自然堤防上に立地し、後背湿地あるいは、鈴鹿川の分流の湿原を利用して稲作を行ったであろう多数の遺跡が存在する。前述の上箕田遺跡、大木ノ輪遺跡の間には、弥生後期のパレス式土器が出土した上箕田北遺跡(10)があり、西2kmには須賀遺跡(11)、神戸中学校遺跡(12)が続いている。鈴鹿川の用水を集め千代崎に流れる金沢川沿いには、弥生後期以降の深田遺跡(13)、双塚西方遺跡(14)、双塚遺跡(15)が並んでいる。その北には、若松遺跡(16)、土師南方遺跡<sup>③</sup>(17)が存在する。

古墳時代では、前述の弥生遺跡の多くが存続する他、前方後円墳2基を含む岸岡山古墳群(1～24号

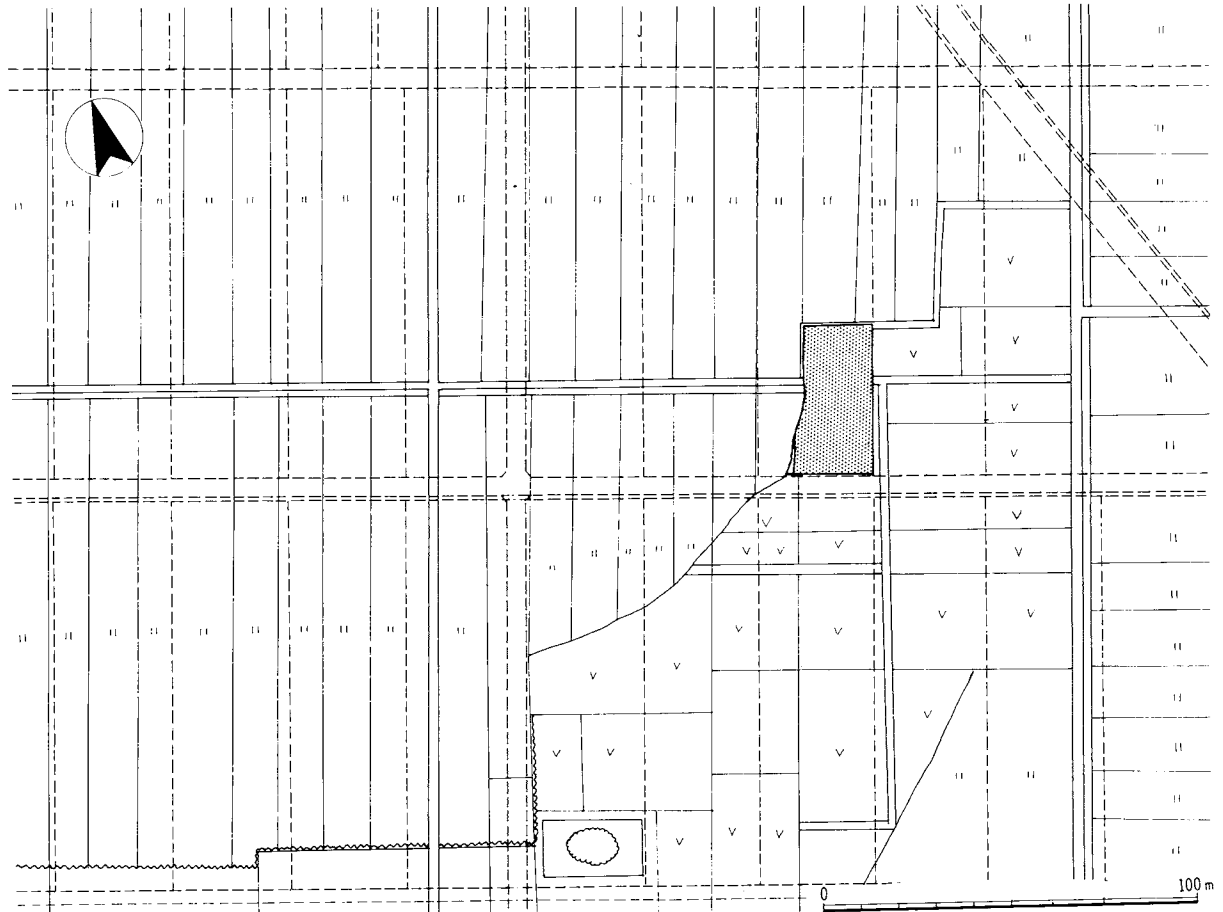
墳(18)、25～28号墳(19)、安塚遺跡(20)、一ノ宮遺跡(21)があげられる。鈴鹿川左岸では、高岡山古墳群、全長85mの前方後円墳を含む13基の寺田山古墳群(23)、中尾山古墳群(24)があり、その他多数の群集墳が存在する。

奈良時代には、国府町に伊勢国府がおかれ、国分町に伊勢国分寺(25)が造営される。又律令制の経済基盤の整備として、肥沃な沖積平野を中心に条里制が施行される。

平安時代においてもこの地域は、政治の中心的役割を果たす。平野部に多数の延喜式内社が存在すること、大木ノ輪遺跡出土の緑釉陶器、その他平野部で多く出土する灰釉陶器が、その隆盛の一端を示している。

中世では、木田城(26)、高岡山城(27)、楠城(28)神戸城(29)、沢城(30)、上箕田城(31)、若松南村城(32)、若松城(33)、岸岡山城(34)が平野部の各地に存在する。

林崎から南長太にかけて細長く伸びた自然堤防上には、面積10万㎡に及ぶ大木ノ輪遺跡が存在する。



第6-2図 発掘区平面図(1:200)

昭和54年度に発掘され、弥生後半から古墳時代の大溝、緑釉陶器、灰釉陶器、鎌倉時代から室町時代にかけての掘立柱建物などが出土している。天ノ宮遺跡は、この大木ノ輪遺跡の延長であると思われる。現況は畑地であり、同じ畑地の北西200mには県天然記念物に指定されている長太の大樟がある。この畑地の標高は4mであり、周辺の水田との比高は60cmを測る。畑地の層位は耕土(灰褐色土)、Ⅱ層が明茶褐色粗砂混り土、Ⅲ層上面が地山となる。地上面以

下は、灰茶褐色からしだいに黄褐色の粗砂あるいは細砂となる。また本遺跡の西端は、かつて水田であったと思われる、灰褐色シルトの土層分布を示す。

天ノ宮遺跡の北北西200mの水田の小字を海添という。これは、自然堤防の西を長太に流れていた川の沿岸を意味するのであろう。明治年間に作成された地籍図によると、西北西780mに池の坪の小字名が、北800mの位置に一之坪の小字が残っていることを付記しておく。

## 2. 遺 構

昭和55年12月に、水田に現状変更される畑地中央部に幅4mのトレンチを40mにわたって入れた。また南端と北端に幅4mのトレンチを南北トレンチに直交して各28m入れた。古式土師器が出土する土壌を発見し、灰釉陶器、土師器などが包含層から出土した。本調査は、翌年1月に実施した。

### (1) 土 塚

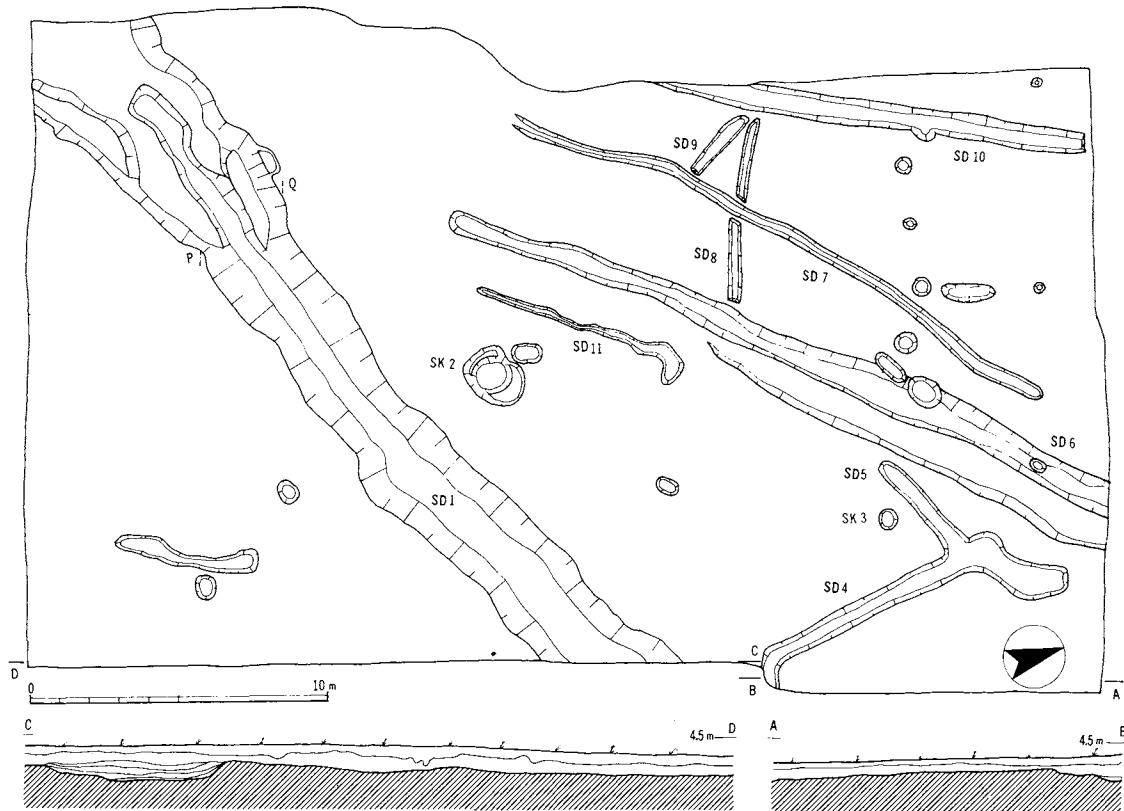
**SK 2** 遺跡中央部で発見された径約2m、深さ90cmを測る2段になった土塚である。埋土は黒褐色土で、S字状口縁の甕、丸底壺、甕などが出土している。古墳時代前期、実年代5世紀前半のものである。

る。

**SK 3** 遺跡北東部にあり径70cm、深さ40cmを測る。S字状口縁の甕脚部が出土している。

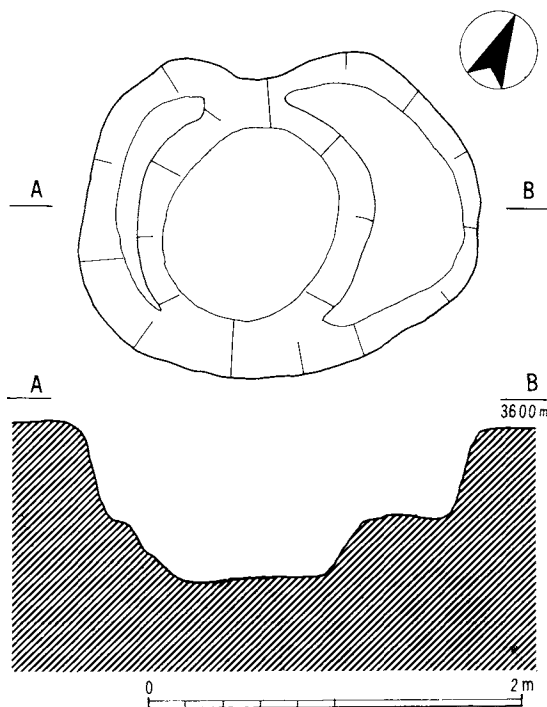
### (2) 溝

**SD 1** 幅3m、深さ60cmの大溝である。発掘区南西端から東北東に流れ、深さと流路はほぼ一定である。溝埋土は、図のようにⅠ層明茶褐色土でこの層から奈良時代の須恵器長頸壺下胴部、土師器が出土した。灰茶褐色土、灰茶色砂質土をレンズ状に含みながら、灰褐色粘質土、灰茶色粘土、最下層暗灰色粘土となっている。下層から高杯脚部、丸底壺口



第6-3図 遺構平面図(1:250)

縁部、S字状口縁甕脚部が出土している。これらの土器は、古墳時代前期のものである。下層からは、弥生時代後半と思われる土器の小片も出土しているが、少量で器壁が荒れているので確定はし難い。この大溝は、自然流路である可能性が強く、古墳時代前期には水をたたえて流れていたと想像できる。



第6-4図 SK2実測図(1/40)

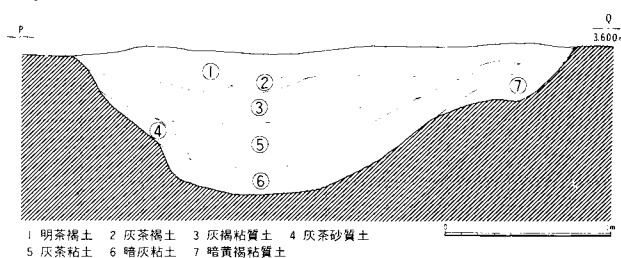
SD4 ほぼ真北に流れる幅20cm、深さ20cmの小溝である。遺物は少ないが、山茶碗の口縁が出土している。

SD5~SD7 自然堤防の尾根に沿って流れる幅15~35cmの小溝である。埋土は、いずれも灰色粘土である。灰釉陶器、山茶碗が出土した。中世の溝であろう。

SD8・SD9 幅20cmの小溝で、SD5~SD7と同時にのものである。埋土は、灰色粘土である。

SD10 北北東に流れる小溝で山茶碗片、近世陶器片を含む。近世には、天ノ宮遺跡の畑地と水田面を区画し、用水として利用されていたのであろう。

SD11 埋土は、黒褐色土である。古式土器を出土している。SK2と同時期と考えられるが、関係は不明である。



第6-5図 大溝(SD1)断面図

### 3. 遺物

#### 1. SK2出土土器

壺(1~4) (1)は、複合口縁の壺の口縁部である。径19.2cmで一段目の口縁から二段目をゆるやかに外反させている。複合口縁部内面に二段にわたって2cm程度の櫛状工具による刺突をしている。色調は、黄褐色を呈する。(2)は、長胴の壺である。胴部最大径27.2cm。推定器高は、37cmである。内面全体にわたり刷毛目が施されている。外面上胴部には、幅1.3cmの刷毛目が施され、その下部にはたて方向で反時計回りにていねいなヘラケズリがなされている。色調は、濁黄褐色を呈し、胎土に白色砂、赤色粘質土を含む。(3)は、中型壺である。外上方に直線的立ち上がる口縁部と、やや扁平な球状の体部が特徴的である。口径13.2cm、推定高13.5cm、胴

部最大径15.7cmをはかる。色調は、淡赤橙褐色で上胴部にやや張りがあり、粘土帯をつないで薄手に口縁部を作っている。内面の底部を下から上へヘラケズリし、胴部を反時計回りにヘラケズリしている。外面は、反時計回りに右斜め下にヘラケズリされている。(4)は、小型丸底壺である。器高8.0cm、口径8.4cm、胴部最大径9.2cmで、形は、(3)に類似している。茶褐色で、良好な胎土には白金色の雲母と白色砂を含む。内面底部に指圧痕がある。口縁部は、直線的であり立ち上がり急である。外面は、胴部のみヘラケズリしている。

S字状口縁甕(5~9) 口径16~18cmで、受皿状のS字屈曲部がはっきりしたS字状口縁甕である。頸部内面に指頭圧痕が認められる。外面に施されている刷毛目は、幅1.5cm程度の原体で本数7~8本

である。色調は、淡茶褐色を呈し、焼成は良好で胎土に白色砂を含む。(9)は、S字状口縁甕の脚台である。径6.8cm、脚高3.7cmをはかる。

**高杯 (10~11)** (10、11)ともに色調は淡茶褐色を呈し、焼成・胎土とも良。胎土に金雲母、白色微砂を含む。(10)は、杯部で比較的浅く、口縁部が丸くおさめられている。口径21cm、杯部高5.8cmをはかる。(11)は、高杯脚部で内面にヘラのあたり痕が残る。外面は、たて方向のヘラケズリがなされ、薄手でていねいな作りである。

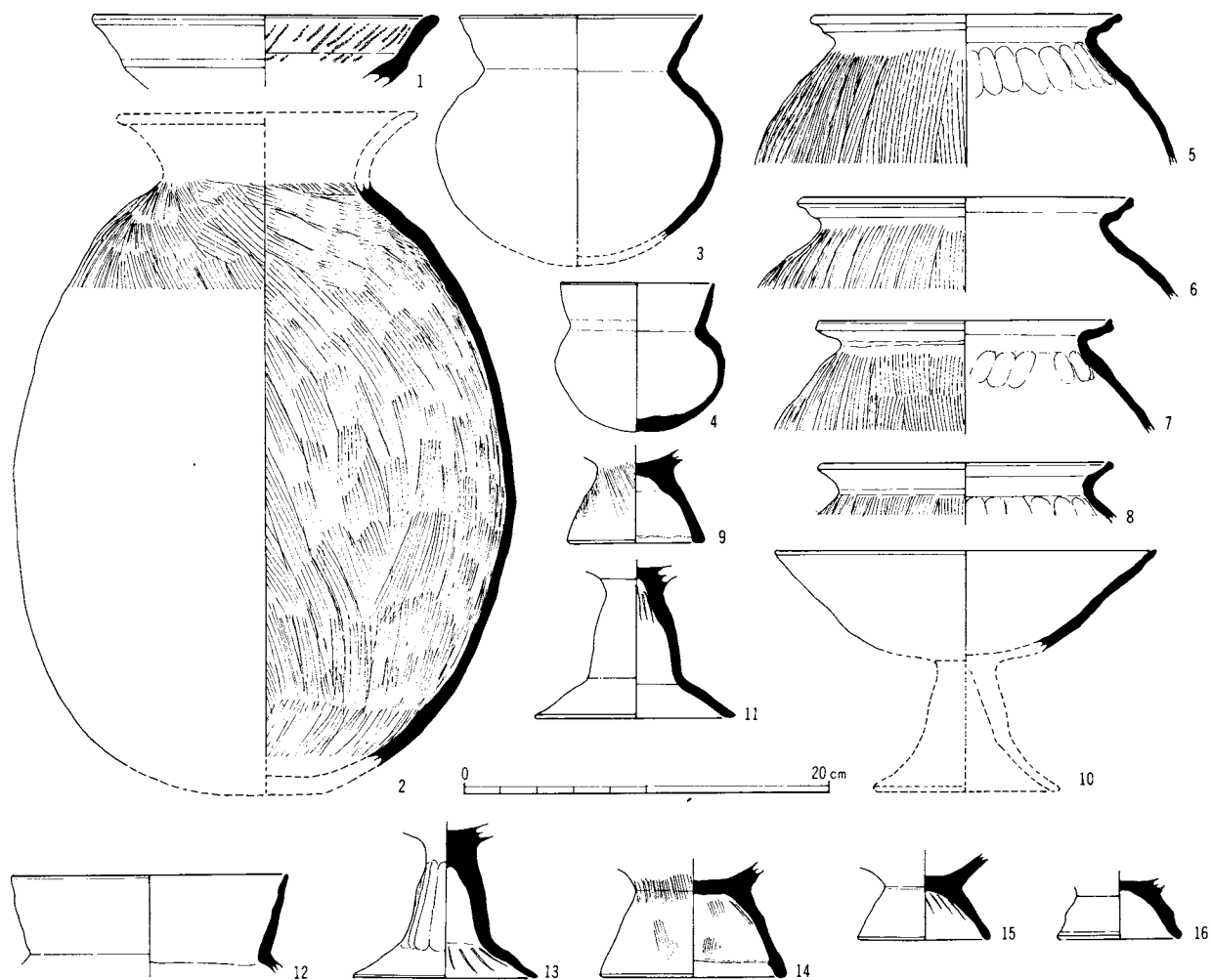
## 2. SD1出土土器

**中型壺 (12)** (13)とともに下層青茶灰色粘土層から出土したもので、口径15cm、頸部径13cmをはかる。SK2出土の(3)と類似性があり、口縁部が外上方向に直線的に立ち上がっている。淡橙褐色で、

焼成・胎土良好。胎土に白色微砂、プラチナ色の雲母・赤色粘質土を含む。口縁部高4.3cmをはかり、粘土の継ぎ目が三段に見られる。

**高杯 (13)** 底部径10.2cm、脚部高7.0cmで、厚手でやや外側に張りを持っているが、下側は薄手で裾部分は外方向にひろがる。柱状部内面には、指によるたて方向のナデ、外面にたて方向のナデが認められる。底部内面にはヘラのあたり痕が残る。

**S字状口縁甕 (14~16)** S字状口縁甕の底部である。(14・15)は、下層青茶灰色粘土層から出土している。(14)は、大型の脚部で径10.4cm、脚部高5.2cmをはかる。薄手で脚中央が内弯し、底部に1cmの折り返しがある。内外面とも刷毛目調整がみられる。黄褐色で、焼成・胎土とも良。胎土に最大粒2mmの白砂を含む。(15)は、径7.2cm、脚高3.5cmをはかる。底部の内面にはヘラのあたり痕が認められる。



第6-6図 土壇、大溝出土土器 (1:4)

外面は、ナデで仕上げられている。脚上面にはりつけ痕が認められる。色調は濁橙褐色を呈し、焼成良好・胎土並である。(16)は、底部径6.8cm、脚部3.2cmで内外面とも横ナデで仕上げられており、灰褐色を呈する。

### 3. 包含層出土遺物

#### 1. 縄文・弥生時代土器

(17)は、色調淡黒褐色の縄文土器片で焼成・胎土とも普通で、胎土に砂粒を多く含む。直径5mmの円形の刺突文がめぐり、その上に長さ1.5cm、幅4mmの沈線の山形の模様がつけられている。縄文時代中期末から後期初頭の所産であろう。(18)は、弥生時代前期の壺で口縁から上胴部にかけての破片である。推定口径16cmで、内傾しつつ立ち上がった頸部にやや肥厚しつつ外反する口縁部がつく。口縁端は、丸くおさめられている。頸部に右回りに4条のヘラ描沈線が施されている。口縁部に直径3mmの穿孔がある。2個対で4方向の穿孔であろう。色調は淡黒褐色を呈し、焼成良好・胎土普通である。胎土には淡茶砂粒、白色砂粒を含む。

#### 2. 古墳時代土器

##### (1) 土師器

壺 (19~25) (19)は、口径16cmで口縁部端面に原体幅8mmに5本の櫛状工具による刺突文が施されている。均質な厚さで外反する口縁は、その端面を強くなでて上下に肥厚している。外面と口縁部内面にも刷毛目がある。色調は橙褐色である。(20)は、厚手に作られた頸部から大きく「く」の字状に屈折し外反する口縁を持つ壺である。口縁端を上下に肥厚させているが、上の方がやや長い。頸部内外面に刷毛目があり、口縁部上面に刷毛目とそれをナデ消した痕跡がある。口径16cm。色調は淡黄褐色を呈し、(19)と同じく良質の胎土には白色砂、金雲母を含む。(21)は、口縁部を受皿的に拡大し、口縁端を上方向に肥厚させている。色調は茶褐色である。口径16cm。(22)は、口縁端が上下に肥厚する乳褐色の壺で、口径18cmをはかる。(23)は色調は橙黄褐色を呈する。焼成・胎土ともに良好で、胎土には白色砂と金雲母を含む。頸部にはり付け突帯があり、その上に櫛状工具による刺突文が施されている。頸部から斜めに

直線的に立ち上がった均等な厚さの口縁部は、その端面を上につまみ出して内側に沈線を持つ。はり付け突帯の接着面に刷毛目がある。口縁部下面には刷毛目が施されそれをさらにすり消している。口径15cmをはかる。(24)は、茶褐色の複合口縁の壺である。口径18cm。(25)は、小型丸底壺である。頸部から内湾しつつ立ち上がった口縁部は、斜めに直線的に終わっている。外面横ナデ、内面刷毛目調整である。胴部外面に刷毛目がある。橙褐色で、焼成良好。胎土に白色微砂、金雲母を含む。口径12cm。

甕 (26~39) (26)は、受口状口縁の赤褐色の甕である。焼成・胎土良。内外面ともナデで仕上げられている。口径17.4cm。(27~34)は、S字状口縁甕である。(26~29)は、ともに淡濁茶褐色を呈し、焼成良好、胎土に白色砂、金雲母を含む。(27)は、S字状口縁部の屈折が大きく、口縁端が外反し、頸部内面には指頭圧痕が残る。刷毛目は、1cmあたり5本。口径19cm。(28・29)は、S字の屈曲がゆるやかで、口縁端内側が段状になる。(28)は、口径17cm。(29)は、口径16cmである。(30)は、淡褐色で、焼成・胎土良。口縁部一段目は内側に肥厚し、二段目がそこから薄手に外反する。口径15cm。(31)は、赤褐色で口径13.8cm。(32)は、灰茶褐色を呈し、胎土に白色砂を含む。口径15.5cm。頸部と口縁部は、断面「く」の字状をしており、S字の屈曲がわずかである。外面に刷毛目がある。口縁内面にも刷毛目がのこる。(33・34)は、茶褐色で厚い直線的な口縁がつく。(35)は、口径13.2cmの小型甕で、色調は濁茶褐色。焼成普通で、胎土は粗い。口縁部は、斜め外方に立ち上がり、口縁端がわずかに上側に向く。(36~39)は、S字状口縁甕の脚台である。底部径6~8cm、脚高5cm前後である。(36)は、暗橙褐色の薄手で屈曲がゆるやかである。外面は横方向のヘラケズリ、内面はヘラケズリされている。(37)は濁褐色で胎土が粗く内面に指圧痕が残る。外面は、刷毛目調整である。ソケット状に台部を成形し、底部端面を折り曲げている。(38)は、内面に指圧痕、外部端面を折り曲げている。強く張り出した底部は、その端面を折り返し肥厚させている。外面には刷毛目が残る。(39)は、茶褐色で外面に刷毛目があり、底部の折り返しが無い。

**高杯 (40~43)** (40)は、杯部で下部に突帯がめぐっている。色調は橙褐色を呈し、内外面とも横ナデでていねいに仕上げられている。(41)は、脚部で明茶褐色を呈し、焼成胎土とも良好である。推定底部径10.8cm、脚高7.5cmである。内面には、しぼり痕・たてナデ痕が残る。外面は、たて方向のヘラケズリ痕がある。裾部分は直線的に張り出しており、横ナデで仕上げられている。(42)は、脚部破片で黄褐色を呈する。柱状部内面にはしぼり痕が残り、外面にはヘラケズリ痕と刷毛目がある。(43)は、脚部で柱状部が八の字状に大きくひろがり、杯部との接合部には刷毛目が残る。

**(2) 須恵器**

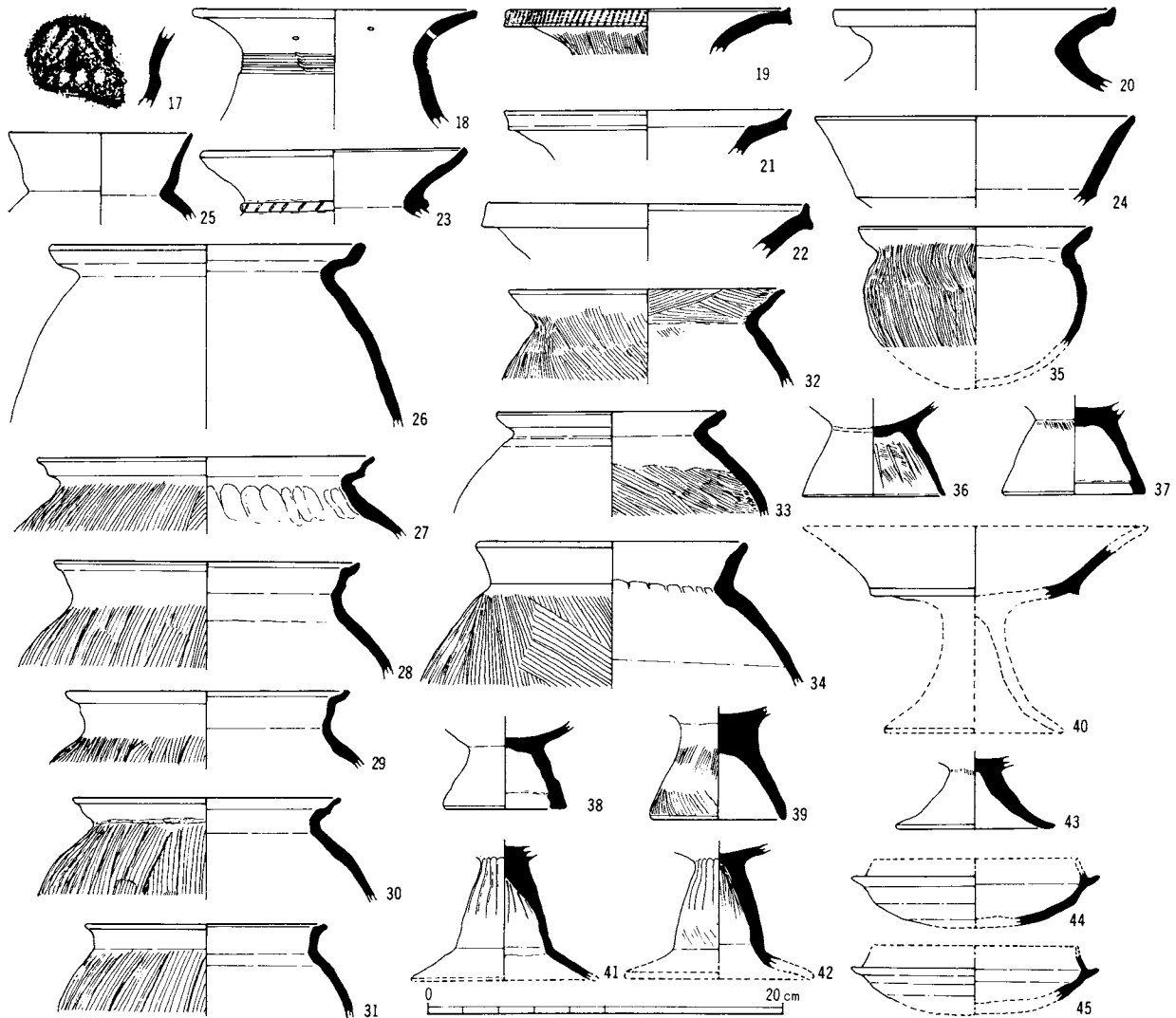
**杯身 (44~45)** (44)は、口縁部の立ち上がりが

ゆるやかで、底部の半分をヘラケズリしている。ロクロ回転は、時計回りである。焼成・胎土とも良。色調は淡青灰色を呈する。(45)は、色調は灰色で、焼成・胎土とも良好。(44、45)ともに推定口径12cm、器高4cm前後である。

**3. 奈良時代土器**

**(1) 土師器**

**甕 (46)** 頸部から「く」の字状に立ち上がる口縁部は、その端面の上端をつまみ出されて、内面は沈線状となる。胴部内面は、上半部は横方向の刷毛目、下半部はたて方向の刷毛目がある。外面には、原体幅1.2cmに8本の刷毛目がたて方向に施されている。色調は茶褐色で、焼成堅緻。胎土には白色砂・金雲母を含む。



第6-7図 包含層出土遺物 (1:4)



**小型甕 (47)** 底部から高さ4.5 cmにて最大径9.6 cmで、内面に粗い刷毛目調整がある。外面底部には刷毛目が残るが、胴部は摩滅がはげしく調整は不明である。茶褐色で、焼成・胎土とも良好。白色砂・金雲母を含む。

**杯 (48)** 口径16.2cm、器高2.3 cmをはかる。内面は粗いナデ、外面口縁近くまでヘラケズリが施されている。

## (2) 須恵器

**杯蓋 (49~51)** (49)は、色調は灰褐色を呈し、焼成・胎土とも良好。口径16.4cm。口縁部より3 cmほどがロクロナデ、その上部は、ロクロケズリをしている。口縁端面が外反する。(50)は、色調は灰褐色を呈し、外面に灰かぶりがある。胎土が粗く反り

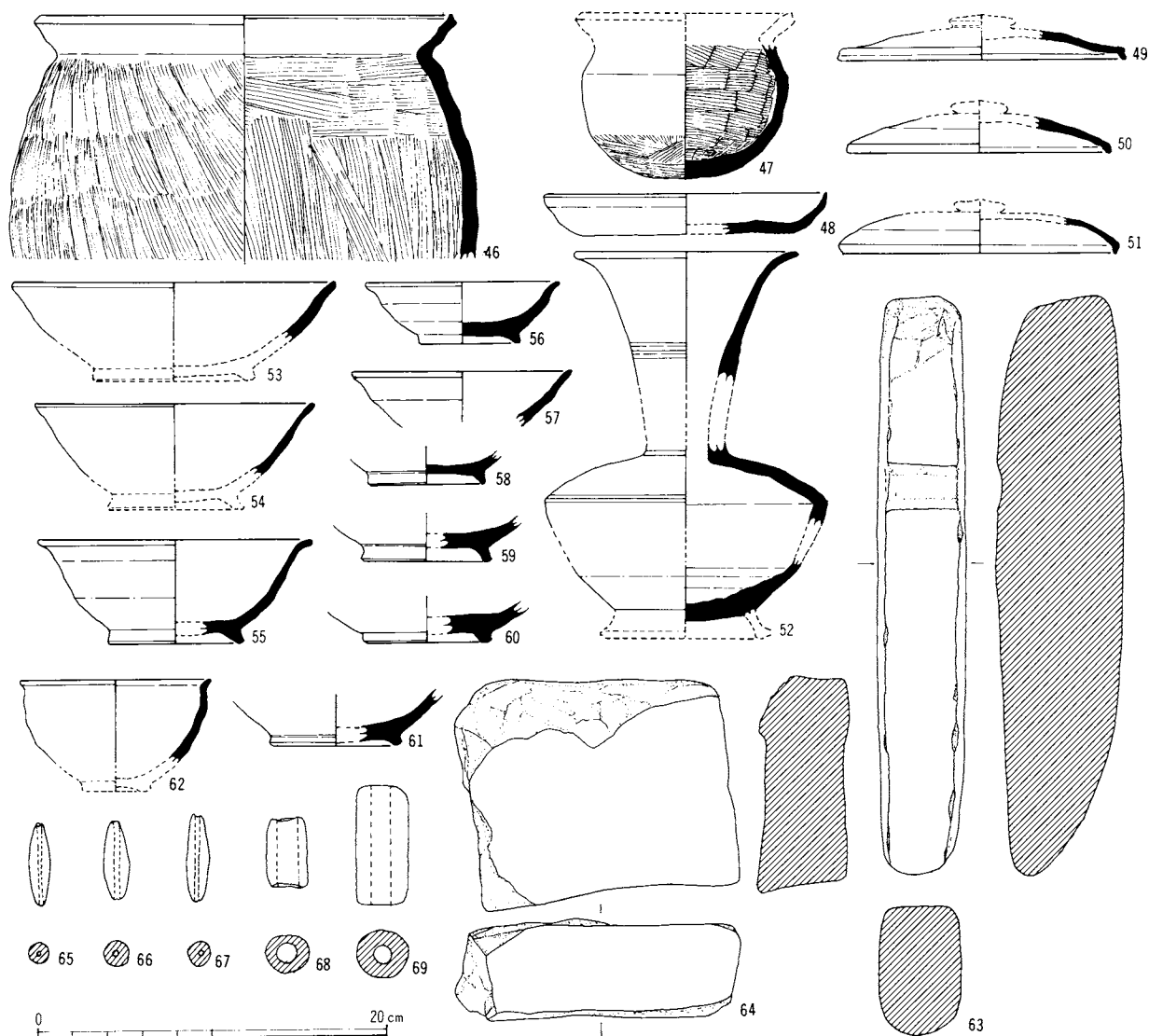
の部分が厚い。口縁端が丸く仕上げられている。推定口径16.4cmをはかる。(51)は、色調は灰褐色を呈し、焼成良好な杯蓋である。胎土も精良で、ていねいな作りである。返りがなく、口縁端は、断面三角形に作られわずかに外反する。推定口径15.8cm。

**長頸壺 (52)** 色調は灰色を呈し、焼成硬。胎土良質で、砂粒を含む。頸部口径12.8cm、肩部の最大径は16.2cmをはかる。頸部と肩部に沈線があり、頸部はゆるやかにひろがり、口縁端が丸くおさまる。

## 4. 平安時代以降の土器

### 陶器

**山茶椀 (53~55)** (53)は、ていねいな作りで、色調は黄褐色を呈し、自然釉がかかっている。焼成硬、胎土は良質である。(54)は、色調は灰色を呈し、



第6-8図 包含層出土遺物(1:4)

焼成・胎土とも良好である。推定口径16cmをはかり非常に薄く仕上げられている。(55)は、ていねいな作りの古手の山茶椀で、焼成・胎土とも良好である。底部は、ロクロケズリの後、高台をはりつけている。胴部に張りがあり口縁部は、外反する。

**山皿** (56~61) (56)は色調が暗灰色の完形で、焼成硬く胎土良好で白色微砂、黒色微砂を含む。底部径5.8cm、器高3.6cm、口径11cmをはかる。底部は糸切り痕をすり消して高台をはりつけている。ロクロ回転は、時計回りである。(57)は、灰白色の山茶椀で推定口径12.8cmをはかる。(58~61)は底部で、すべて張付高台で高台内部の糸切り痕はナデにより消えている。

**天目茶椀** (62) 口径11cm。鉄釉は、黒褐色を呈し、焼成普通。胎土良質で、白色微砂を含む。

#### 5. 石製品

**挟入片刃石斧** (63) 輝緑岩製で、色調は漆青灰緑色を呈する。長さ33cm、中央部で幅7cmをはかる。研磨の仕上げがていねいである。弥生時代の所産で

## 4. 小

天ノ宮遺跡は、南林崎から南長太へと傾斜する自然堤防上に立地する。鈴鹿川は、おびただしい量の土砂をその河上に堆積しつつ、その流路をしだいに北に移していったと推定される。漸次形成されていったいくつかの自然堤防、その間を流れる小支流、そして、後背湿地等が、奈良時代に条里制が施行されるまでの当遺跡周辺の自然地形であった。延宝乙北長太村の水論絵図を見ても、条里に沿う溝と、自然流路とが複雑に入り組む当地の地形がわかる。今回の調査で縄文時代中期末から後期初頭かと思われる土器の小片1点、弥生時代前期壺口縁1点、挟入片刃石斧が出土した。遺物は、微少なながらも河口に近い当地で、上箕田遺跡、大木ノ輪遺跡に続いて縄文時代・弥生時代の生活跡が確認されたわけである。特に、上箕田遺跡、大木ノ輪遺跡とも弥生時代前期壺を出土していることは、興味深い。

古墳時代遺物としては、SK2出土の一括遺物がある。丸底壺、小型丸底壺、S字状口縁甕、高杯、長胴壺が出土している。S字状口縁甕は、「飛鳥地

あろう。

**砥石** (64) 砂岩製で、色調は淡青灰色を呈する。長さ14cm、幅4.9cmをはかる。大溝の近くから出土している。

#### 6. 土製品

**土錘** (65~69) (65)は、長さ4.8cm、穿孔径2mmで色調橙褐色を呈する。(66)は、長さ4.5cm、穿孔径3mmで色調淡黄褐色を呈する。(67)は、長さ4.8cm、穿孔径2.3mmで色調淡黄褐色を呈する。(68)は、長さ3.9cm、胴部最大径2.3cm、穿孔径1.2cmをはかる。色調淡乳褐色を呈し、焼成良、胎土良好である。(69)は、長さ6.7cm、胴部最大径3cm、穿孔径1.2cmをはかる。色調淡乳褐色を呈し、焼成・胎土とも良好。胎土には、白色砂を含む。(68・69)は、木材や竹などの棒状のものに粘土を巻いて握りながら成形した後、棒を引き抜いて作ったものと考えられている。個体の大きさが違うが、胎土と穿孔径は近似している。

## 結

④  
域出土の古式土師器」の安達・木下編年のⅡA類に比定できよう。刷毛目が細く、S字の屈曲がはっきりしている。また亀山市地藏僧遺跡SB22出土のものとも類似点が多い。津市納所遺跡の編年では、古墳時代第Ⅳ期に比定できよう。包含層出土の遺物には、19・20・21・22・23等、はりつけ突帯や、楕状施文具による刺突、頸部の刷毛の特徴から石塚期に比定できる、より古いものもある。S字状口縁甕は、須恵器を伴う時代のものも出土している。古墳時代須恵器は、非常に少なく杯身の小片2点を数えるのみである。

古墳時代の遺構としては、前述のSK2があるが大溝SD1の下層からこの土壇と同一時期と思われる壺口縁、高杯、S字状口縁脚台が出土しており、SD1も古墳時代の遺構とするのが妥当であろう。幅2~3mで深さ60cm前後のこの大溝は、発掘区の南半を北東の方向に流れる。おそらくこの大溝は、自然流路であり、当時の人々がかんがいにも有効利用したものと思われる。天ノ宮遺跡のこの大溝SD1

は、大木ノ輪遺跡A・B・C地区で発掘されたいくつかの溝と結びつけ、流路を推定することができよう。A地区のSD103、C地区のSD405と結ぶと、帯状に残る微高地の中央を北東、東北東に蛇行する自然流路が浮び上がる。C地区SD405の底部中央で発見された杭列は、流路をせき止め、取水するためのものである。

奈良時代の遺物は、甕・小型甕・杯等土師器数点と須恵器、杯蓋、長頸壺がある。土師器は、平城京のIVに、須恵器は、須恵器編年のIV2型式<sup>⑤</sup>に比定できよう。これらの土器が使われていた当時、鈴鹿平野にも条里制が施行された。川添いの湿地、微高地

であった当遺跡では、条里溝は、確認されていない。当遺跡の北方、南方数百mのところそれぞれ一ノ坪という地名が残っている。大木ノ輪遺跡A地区発見の南北溝数条は、条里の遺構であろう。

平安時代以降の遺物では、灰釉陶器かとも考えられるほど作りのしっかりした山茶碗・山皿が数点出土している。平安時代後半の所産であろう。また1点ではあるが天目茶碗も出土している。

今回の調査で、縄文時代以降連続する遺跡であることが判明した。特にSD1の遺構の性格、SK2の一括遺物は、興味深いものがある。

(増田安生)

〔註〕

- ① 仲見秀雄・真田幸成・大場範久 『上箕田一弥生遺跡第2次調査報告』 鈴鹿市教育委員会・上箕田遺跡調査会 1970  
谷本鋭次 『上箕田遺跡調査報告』 三重県教育委員会 1971
- ② 『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会 1980

- ③ 『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県文化財連盟 1973
- ④ 安達厚三・木下正史 「飛鳥地域出土の古式土師器」 『考古学雑誌60-2』 1972
- ⑤ 『陶邑』VI 大阪府文化財調査報告書第31輯-本文編-財団法人大阪府文化財センター 1979

## Ⅶ 鈴鹿市南堀江町 神大寺遺跡

### 1. 位置と歴史的環境

林崎から下箕田にかけて集落が連なるラインは、鈴鹿川旧河床付近に形成された自然堤防である。国土地理院発行の25,000分の1の地図を見ると、5mの等高線が尾根状に中箕田付近まで張り出している。このラインに乗る遺跡として、昭和35年、昭和44年の2度にわたって発掘された上箕田遺跡がある。弥生時代の土器・銅鐸型土製品などが出土し、溝跡、杭列、方形周溝を検出している。『上箕田弥生式遺跡第二次調査報告』によると、弥生時代の地表面を海拔4m前後と想定している。

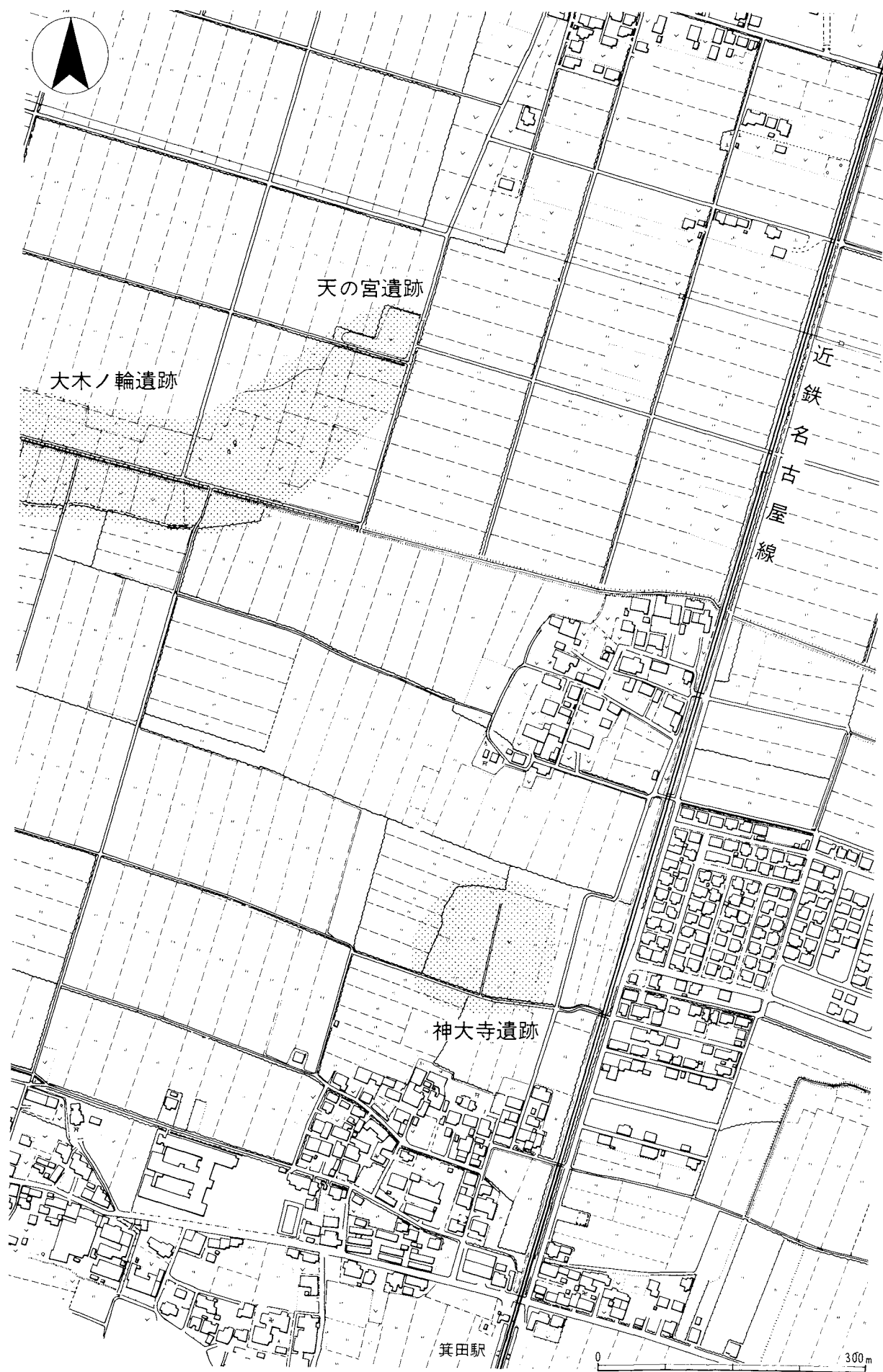
神大寺遺跡は、上箕田遺跡が自然堤防南側に位置するのに対し、自然堤防の北方に広がる水田の中に

島状に残された微高地である。現状畑地である本遺跡は標高3.6mを測り、四周の水田面との比高は60cmである。行政区画上、鈴鹿市南堀江町字大坪に属する。地元の人々は、この畑地を神大寺と呼んでいる。古老の話によると、本遺跡のあたりに寛大寺という寺院があったが、信長の伊勢侵攻の時焼失したという。本遺跡の西北西450mの箇所は、畑地であって水田にするために削平したところ、瓦、土器が多数出土したという。その時の排土を本遺跡に畑寄せしたと伝え、また本遺跡南端を水田化したとき高杯脚をはじめ土器が多数出土したとも聞く。

このように畑寄せ、削平を経て現存する神大寺遺



第7-1図 発掘区平面図(1:1500)



第7-2図 遺跡地形図 (1:6000)

跡は、基本的には沖積平野中に黄褐色砂層が高まりを見せる微高地であり、その上に黄茶褐色の包含層、部分的に黒褐色有機質層、表面に耕土がかぶさる畑地

に立地する。標高および出土遺物から見て上箕田遺跡という母村が存在した時期に、同じような環境のもとに存在したと考えられる。

## 2. 遺構

神大寺遺跡の層位は耕土が20cmほどあり、その下に黄茶褐色の砂質土が続き、多数の遺物を包含している。包含層は約40cmほどの厚さがある。地山面は褐色をした粗砂からなり、表土からおよそ60cmほどである。当遺跡は北端に自然流路と思われる線が、西壁の断面に確認されている。なお、全体的に大きく攪乱を受けており、包含層に含まれる遺物は、弥生時代の末から、室町時代に至るまでかなり幅広い年代に亘って確認されている。しかし飛鳥時代から奈良・平安前・中期に至るまでの遺物はほとんど見られず、また遺構も確認されていない。

### 1. 古墳時代の遺構

**SK 6** 発掘区の中央東寄りにおいて検出された長径2m・短径1.2mの隅丸方形の土壇である。土壇の底までは約30cmの深さである。出土品は、古式土師器に属する複合口縁をもった壺や短頸壺がある。

**SK 8** SK 6の東側に接してSK 6を切り込んだ形の小さな土壇である。SK 6とよく似た深さを持ちながら、平面的な規模は約1/3程度の大きさである。出土品としては小型丸底壺が確認された。

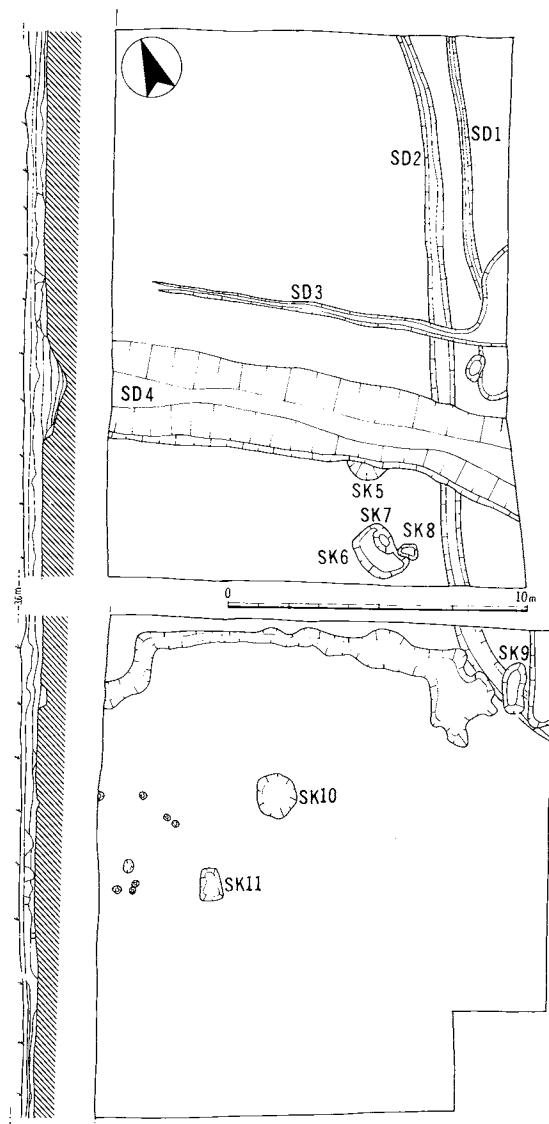
### 2. 平安時代の遺構

**SK 5** 東流する室町時代の溝SD 4によって切られているが、径1.5mほどの円形をしており、深さはおよそ10cmをはかる。出土品としては灰釉椀の雰囲気を残す山茶椀と、土師器の小皿が出土している。

**SK 10** 発掘区南よりに位置し、深さは40cmをはかり径1.2mほどの円形をしている。この土壇からは、SK 5とよく似た土師器の小皿が1点と、丸底の鍋と見られる口縁部が出土しており、SK 5よりは若干の年代の下降を見られると思われる。

### 3. 室町時代の遺構

**SD 4** 発掘区中央を西から東へ流れ、肩の部分で幅がおよそ3mをはかり、底部で50cmほどに狭まった逆台形の断面をした大溝である。深さは60cm～70cmで東へ行くほど低く流れている。出土品としては、羽釜が多く7点を数える。中に茶釜形をしたものが1点含まれている。なおこの溝からは、古手の形式をもつ須恵器の杯身・杯蓋も1点ずつ出土しているが、先述のように攪乱を受けた形跡から見れば、混入したと考えられる。他には、土師器の小皿が3



第7-3図 遺構平面図 (1:250)

点、灰釉椀が1点、山茶椀・小皿共に各1点、小型の花瓶が1点出土している。また中央より北面した底部に五輪塔の水輪部が1点出土した。

#### 4. 室町時代以降の遺跡

**SD3** SD3は、SD4と平行して西から東へ流れる。幅40cmほどであり、中世土師器皿片が出土している。

#### 5. 時期不明の遺構

**SD1・SD2** ともに発掘区の東端を北から東

へ流れる。SD1は、幅20cm、深さ18cmを測る。SD2は、幅50cm、深さ20cmを測る。弥生時代の可能性が残るが、遺物が小片であるため確定できない。

**SK7・SK9・SK11** SK7はSK6を切り込んで位置し、長径1m、短径50cmの長円形をしており、深さは50cmほどである。SK9は東端に位置し、長径1.5m、短径75cmほどの長円形である。SK11は中央部南寄りに位置し、長径1m、短径75cmほどの長方形をしており、各土塚とも遺物の出土は見られない。なお、南西部に小ピット群が検出されたが、建物としてのまとまりは見られなかった。

### 3. 遺物

出土した遺物は、古墳時代の土師器・須恵器と、平安時代末葉～室町時代にかけての土師器・灰釉陶器・山茶椀・山皿・陶器類・土錘などに大別される。

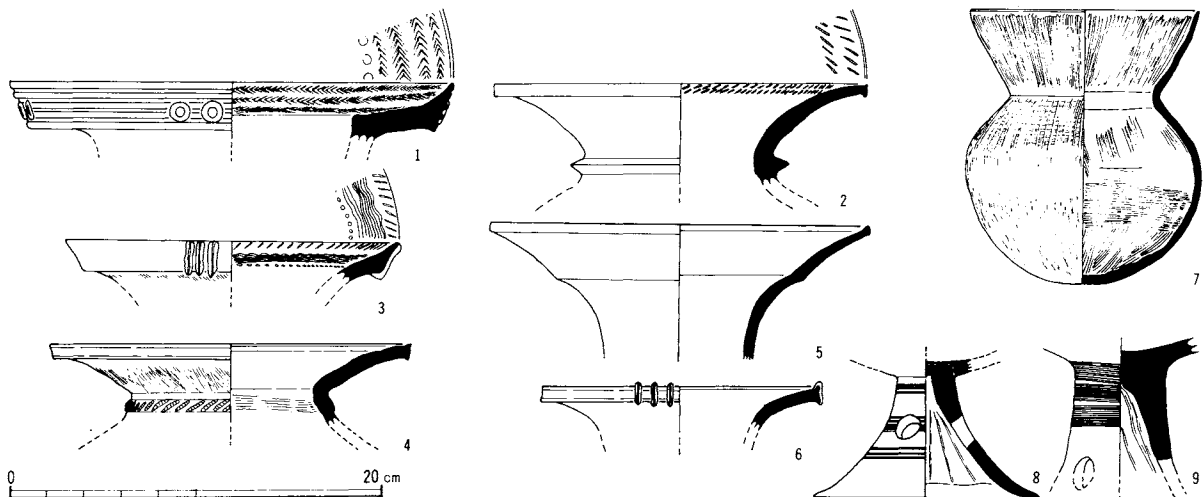
#### 1. 古墳時代前期の土器

**壺形土器A** (1～4・6) 全て頸部から口縁にかけての破片である。頸部は細くくびれ、大きく外反して口縁を形成する。頸部には突帯を持つものもある。口縁端は外へそのまま開くものと、端部がつまみ出され垂下して面を作るものとに分けられる。(1)は端部に4条の凹線を持ち、直径1cmの円形浮文が4個1単位で貼り付けられている。(3・6)は3本1単位で縦方向に粘土紐が張り付けられている。

(1～3)までは口縁内面に篋状工具や竹管を用いて、刺突文・波状文・竹管文を刻んでおり、その上から丹塗りを施している。口径は(1)が最大で24cmである。

**壺形土器B** (5) 複合口縁の壺で頸部は細くくびれ、大きく外反して逆くの字状に段を形成し、シャープな稜を作る。口縁にかけては、さらに大きく外反し朝顔状に開く。口縁端はやや丸味を帯びている。胎土中には少量であるが砂粒を含んでおり、淡黄褐色を呈する。口径は20.4cmである。

**小型丸底壺** (7) 体部は球形をしており、細くくびれた頸部から外反して立ち上がる口縁部は、端部に向かってゆるく内弯している。底部内面は放射



第7-4図 遺物実測図(1:4)

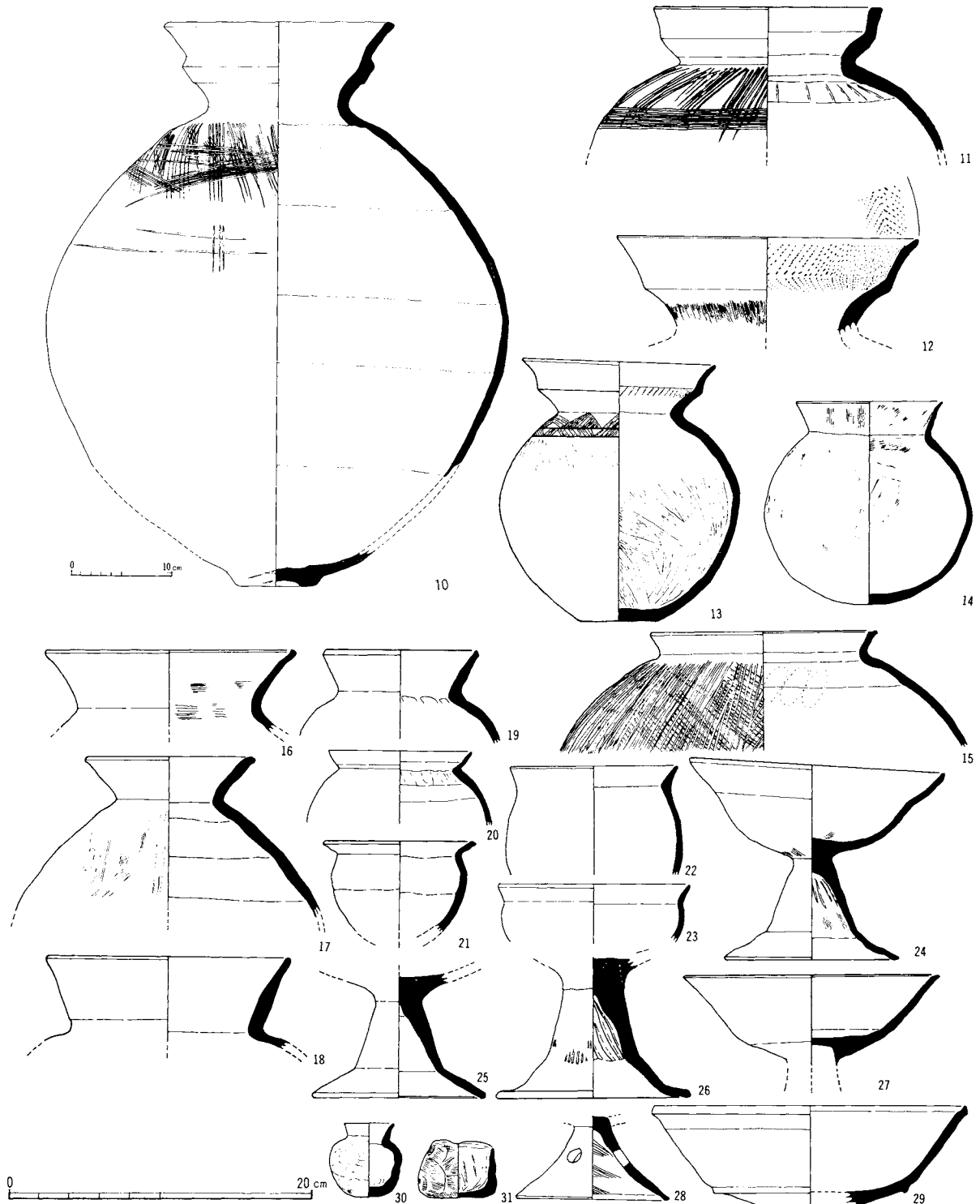
状の刷毛目が見られ、体部内面の中央には横方向に刷毛目が施されている。体部外面は削り調整された後、篋磨きされており、口縁部は内外面共に丁寧に篋磨きされている。口径は12.2cm、高さ14.6cm、最大径は体部にあり12.6cmである。

**高杯（8・9）** 下部で大きく開く脚部である。全体に篋磨きを施し、櫛状工具で横線文を巡らした

後、外から内へ向けて3方向から円形の透し穴を穿っている。穿孔は全ての調整が完了してから行っている。(8)の脚部内面には篋で調整した痕跡が残る。

## 2. 古墳時代後期の土器

**壺形土器B（10～13）** いずれも複合口縁の壺であり、(10)は口径23cm、高さ55.3cm、体部最大径46cm



第7-5図 遺物実測図（1：4，10は1：6）



の大型壺である。(10・11)は共に粗い刷毛を用いて調整されており、先に縦方向にナデてから横方向に重ねて調整している。(12)は口縁内面に粗い櫛状工具を用いて羽状の刺突文を巡らしている。(13)は体部が球形をしており、底部内面は放射状に刷毛目調整を施してあるが、体上部内面は刷毛目調整後、ナデつけて刷毛目を消している。体部外面は刷毛目調整後ナデつけて刷毛目を消している。肩部には篋状工具を用いて、変形鋸歯文が刻まれている。口縁部は大きく外反し、中段から上方に向けて外反をくり返し、丸味を帯びた端面を形成する。口径は12.8cm、高さ17cm、体部最大径16cmである。胎土中には若干の金雲母を含んでおり、赤褐色を呈する。(10)はSK6出土。

**壺形土器C** (14・16～20) いずれも口縁は、頸部から外反して立ち上がり、外弯しながら端部に至る短頸壺である。(14)は体部内外面共に刷毛目調整を施すが、風化が著しく原体幅等は不明である。胎土中には若干の白色砂粒や長石粒を含んでいる。口径は9.7cm、高さ13.2cm、最大径は体部にあり13.8cmである。(17・20)については粘土紐巻き痕跡が明瞭に残る。(14)はSK6出土。

**壺形土器D** (21～23) 体部はやや丸味を帯びており、頸部から大きくくの字状に外反して口縁部を形成する。いずれも粘土紐を積み上げた痕跡がよくわかる。なお、(20)は頸部内面に指頭圧痕が明瞭に残る。

**甕** (15) S字口縁の退化した甕である。頸部で逆くの字状にくびれ、大きく外反して口縁を形成する。端部は上面を平坦にし、一条の凹面を作る。体部外面は粗い刷毛目調整を斜方向に交差して二度施している。

**高杯** (24～29) 杯部の口縁は、底部からの立ち上がりが、段を作り鋭角的に外反しながら立ち上がるものと、内弯しながら立ち上がるものとに分けられる。(24)は後者の例であるが、杯部中段で一度くの字状に折れ曲がっている。(29)は屈曲点外面に突帯を持つ。

脚部は、折れ曲がって開くものと、ゆるやかに開くものがある。いずれも横ナデ調整であるが、(26)には刷毛状の工具による浅い刷毛痕跡が残る。また

(28)には外から内へ向けて3方向から円形の透し穴がある。

**ミニチュア土器** (30・31) いずれも手捏ね成形で、両者共に外面は、篋および刷毛を用いて調整しているが、ていねいな作りはなされておらず、凹凸が多く残る。(30)は口径が3cm、高さ4.8cmである。

**椀** (50) 体部は丸味を帯びており、内弯しながら立ち上がり、外反して口縁端部を形成する。端部はつまみ出された後ナデつけている。体部外面は篋削りされている。胎土中には若干の金雲母を含み、赤茶褐色を呈する。口径は12cm、高さ4.7cmである。

**小型丸底壺** (51) 口縁部を欠いており、口径は不明である。底部から胴部にかけては右下から左上へナデ上げている。頸部は横方向にナデつけている。体部下半には黒斑が1個ある。体部内面には、粘土紐の巻き上げ痕跡が明瞭に残る。SK8出土。

**高杯** (52) 脚部は横方向にナデつけられているが、脚部は縦方向に篋削りを施している。内面は横方向のナデつけが見られるが、最奥部では絞り痕跡が残る。杯部との接合方法はソケット式であり、先端まで篋削りが施されている。底径は9cmである。

**須恵器杯** (32～40) 全体に受け部の稜が鋭く、立ち上がりも高く、しかも口縁端に段を作るなど、古い型式の特徴を持っている。特に(32～34)はロクロ回転を利用した篋削りの範囲も広く、受部直下にまで及んでいる。(35～38)は口径の大きさに比して器高が高く、受部より下方で丸く彎曲している。(38～40)については、口縁端の作りがシャープさに欠けており、これらの杯身の中では年代が下降する特徴を持っている。口径は9cm～11.2cmに納まる。

**須恵器杯蓋** (41～49) 杯身と同様、いずれも稜が鋭く、立ち上がりも高く、天井部は丸く仕上げられており、削り幅も広い範囲に及んでいる。口縁端は内傾し、沈線を巡らせている。しかし、(46～49)にかけて立ち上がりが、下方でやや外へ開く傾向がうかがえ、特に(49)は下方で外弯して足をふんばった形になっているため、年代が若干下降するものと思われる。口径は11cm～13cmの間に納まる。

**無蓋高杯** (53・54) 杯部は、いずれも底部からゆるく内弯しながら立ち上がる。(53)は口縁端内面に段を有する。外面には稜が鋭い2条の突帯があり、

(53)は突帯の上部に櫛描きの波状文を施し、(54)は突帯間に波状文が施される。脚は短脚で大きく外反して広がり、1段の長方形の透しを持つ。(53)は4方向に、(54)は3方向に透しがある。脚端部は上下方向に突出させている。(53)は口径14.4cm、高さ11.3cm、脚底部径は10.8cmであり、(54)は口径14.8cm、高さ11.4cm、脚底部径は10.6cmである。

**有蓋高杯蓋 (55・56)** 両者共立ち上がりは直立しており、天井部との境に鋭い稜を持つ。天井部に中凹みのつまみを持っている。口縁端部は内傾して段を形成する。口径は(55)が13.4cm、(56)が12.6cmである。

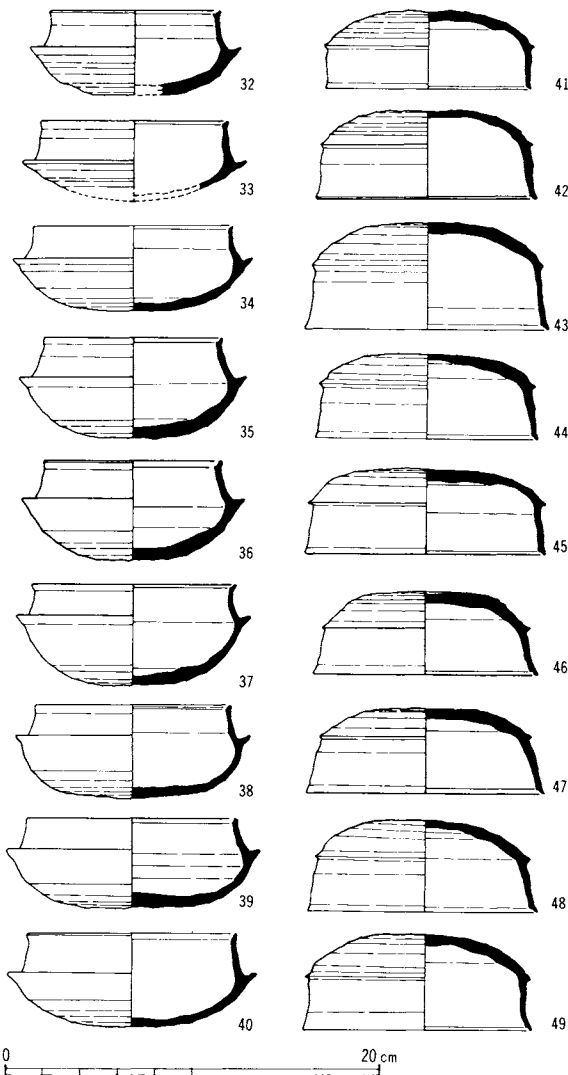
**有蓋高杯 (57・58)** (57)は脚部のみであるが、短かくハの字状に開いている。透し孔はない。割合に厚く、脚端部は丸味を帯びている。(58)は杯

部のみであるが、杯底部外面に脚の接合痕が明瞭に残る。3方向に長方形の透し痕跡を持つ。受部は鋭い稜を持っており、立ち上がりも直立気味である。口縁端部は、内面に1条の沈線を持っており、薄く挽き上げられている。体部内面は丸味を持っている。口径は10.2cmである。

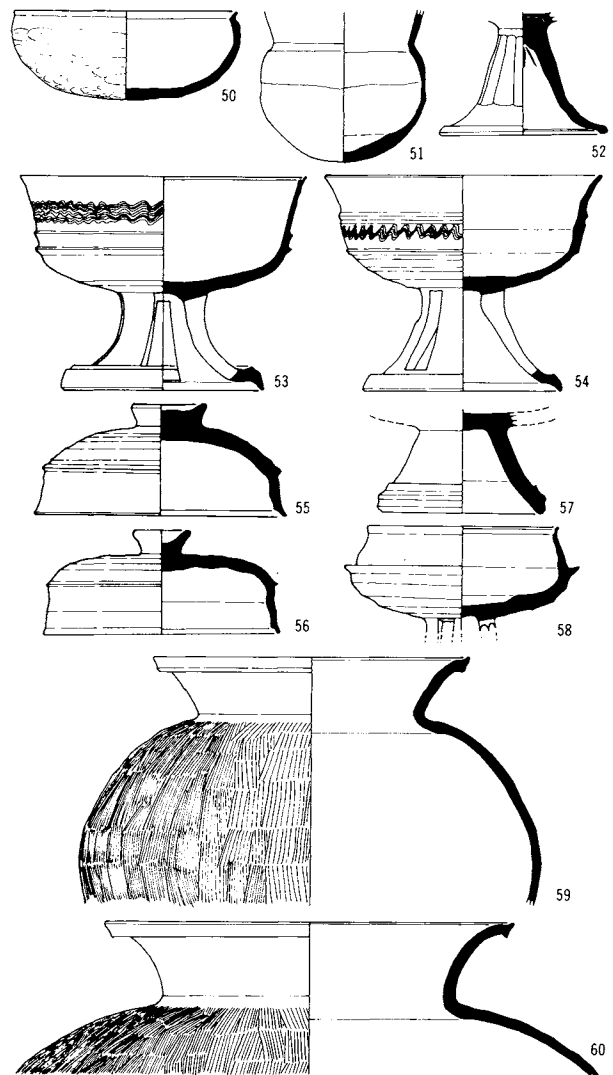
**壺形土器 (59・60)** いずれも頸部から大きく外反して立ち上がり、口縁を形成する。口縁端部は外上方へつまみ出されている。体部は叩き目痕跡がよく残っているが、内面の同心円文は全てていねいにナデ消してあり、器壁も薄い。口径は(59)が17cm、(60)が21.8cmである。

### 3. 平安時代の土器

**土師器皿A (61~64)** 口縁は内弯しながら外へ



第7-6図 遺物実測図 (1:4)



開く。端部は横方向にナデつけてあるが、一様にていねいな調整はなされず、指頭圧痕が底部に残るものもある。口径は11.2cm～13cmの間に納まる。

**土師器皿B** (65～68) 口縁は内弯して立ち上がるが、途中で大きく外反して、端部を形成する。口縁は横方向にナデつけられており、A類よりも底部が薄く、ていねいに仕上げられている。口径は13.2cm～14.8cmの間に納まる。

**土師器皿C** (69・70) 底部からゆるやかに内弯しながら立ち上がるが、口縁端は直立して断面が丸味を帯びた三角形を呈する。口縁内面に段を形成している。ていねいな作りをしており、底部はよくナデつけられている。胎土中には少量の金雲母を含み、淡橙灰褐色を呈する。口径は約10cmである。SK5出土。

**山皿** (71～73) ロクロ水挽き成形で、口縁端部の形状は断面三角形のものと、丸味を帯びたものがある。全て、底部に糸切り痕跡をそのまま残している。口径は全て8cmである。

**灰釉椀** (74) ロクロ水挽き成形で、体部は内弯して立ち上がり、口縁はゆるやかに外反する。底部外面は糸切り痕跡を篋削りした後、断面三ヶ月形に弯曲する高台を張り付けている。白緑色の釉が、内面全体と外面の口縁下約3cmまでかかっている。口径は14cmである。

**山茶椀** (75) 底部から内弯しながら立ち上がり、口縁はゆるく外弯している。底部に糸切り痕跡を残し、断面台形のしっかりした高台を持つ。灯明皿に転用したのか、内面に煤が付着している。口径は18cmである。SK5出土。

#### 4. 室町時代の土器

**羽釜A** (76～82) 体部は刷毛目調整を、底部は篋削りを施しているが、煮沸による火熱を受けて明瞭には残っていない。鏝は水平もしくは、やや上方に向けて取り付けられている。(80・82)については鏝端面に凹線を有する。鏝から内傾しながら立ち上がり、口縁部を形成する。(80・82)を除いて口縁端は外反するが、内傾する端部に段を有する。(80・82)は外反することなく、端部内面に段を有する。(79)を除いては、鏝の上に2個1組の穴を2対ずつ持つ。

なお、(76・79)には外面に煤が付着している。(76・77・79・81・82)はSD4出土。

**羽釜B** (83) 体部は刷毛目調整が施されるが、鏝の上下で刷毛目の方向等に規則性が見られない。鏝の上部は斜方向に施されるが、下部は上半が斜方向、下半が横方向に施されている。鏝は刷毛目調整がなされてから張り付けられ、刷毛目の上からナデつけて刷毛目が消されている。口縁部は、鏝上から内弯しながら立ち上がり頸部で外弯して直立し、端部は丸くナデつけられている。体部の上部に1対のつまみが刷毛目調整される前に張り付けられている。鏝から下部には煤が付着している。口径は13.6cmである。SD4出土。

**鉢** (84) 底部から直立して体部を形成し、ゆるく内弯しながら、頸部で反転して外弯気味に直立して口縁を形成する。口縁端は、つまみ出されて薄く仕上げられている。体部には密に刷毛目調整を施してあるが、口縁部と底部付近で刷毛目をナデ消している。底部外面には蕪状圧痕が見られる。口径は10.6cmである。SD4出土。

**山茶椀** (85・86) 底部から直線的に開いており、口縁は断面三角形を呈する。底部には糸切り痕をそのまま残しており、(85)には断面三角形の高台を張り付けている。胎土中には白色砂粒を少量含む。(86)の口径は14.8cmである。

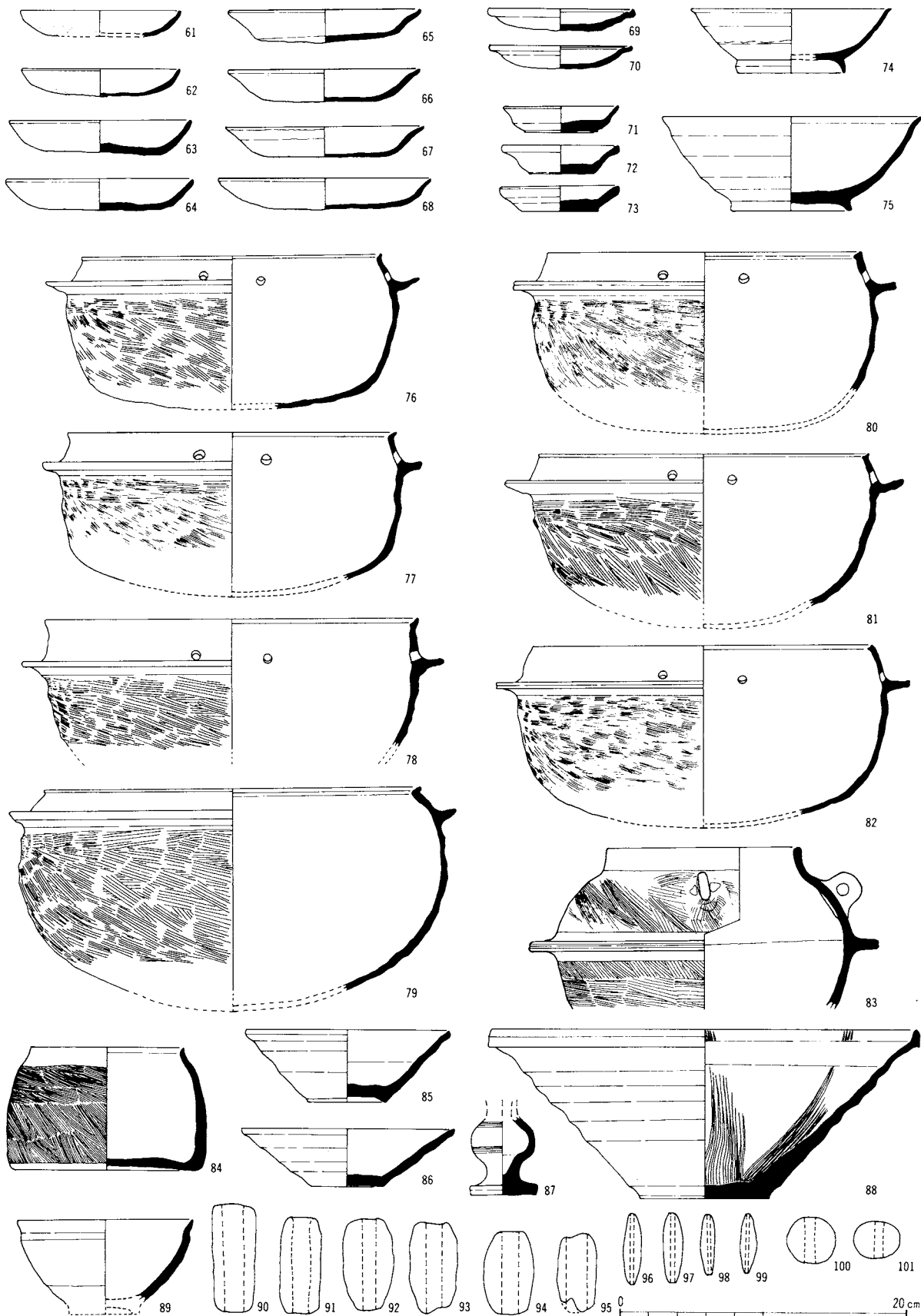
**花瓶** (87) 口縁部を欠くが現存高は5.4cmである。径4.4cmの底部には枇杷形の体部が付く。体部には2条の櫛描き沈線が巡る。全体に暗茶緑色の釉がかかっている。SD4出土。

**播鉢** (88) ロクロによって挽き上げられており、口縁端は丸く仕上げられ、口縁部に垂下した面を持つ。体部内面の筋目は原体5本の櫛状工具で施されており、2度平行して1単位を作り、間隔をおいて合計9箇所引いている。一方は長く口縁まで達しているが、他方は短かく器壁半分までである。底部は逆時計回りに施されており、外面は糸切り痕がそのまま残る。暗茶褐色の釉が全面にかかっており、素地は淡黄白色を呈する。口径は29.6cmである。

**天目茶椀** (89) 内弯しながら立ち上がり、頸部で外反し口縁部を形成する。全面に鉄釉がかかっているが、素地は白褐色を呈する。口径は12.4cmである。

土鍾 (90~101) (90~95)は円筒形の大型品であり、(96~99)は断面紡錘形の小型品である。(100・

101)は球形を呈している。それぞれに円形の穴が貫通している。



第7-7図 遺物実測図 (1:4)

## 4. 結 語

神大寺遺跡の周辺には、弥生時代に位置づけられる上箕田遺跡<sup>①</sup>や鎌倉～室町時代の大木ノ輪遺跡<sup>②</sup>等が知られ、これらとの関連を考える上でも当遺跡は重要な存在である。しかし、遺構の項でも触れたように大きく攪乱を受けており、遺跡の時代を確証し得る遺構に乏しかった。一方、二次堆積の厚い包含層があり、その中に多数の遺物が混在していた。なかでも古墳時代の遺物が多数出土しており、近辺に同時代の集落跡が存在したものと想定される。個別的に見ると、古墳時代前期の柳ヶ坪型式の土器（1～4・6）が出土している。また、多数の須恵器が出土しているが、杯及び杯蓋の型式から見ると5世紀末から6世紀初頭（TK23併行期）に各地に須恵器生産が広がり出した第1画期<sup>③</sup>に形成されたとされる久居古窯跡出土の須恵器と非常によく類似しており、当遺跡周辺に古墳や古墳時代の後期に位置づけられる遺跡の存在を考える上からも遺重な出土と言え。しかし、これらの須恵器の杯の形態を見ると、口縁端部が鋭角的で段を持つものから、やや丸味を持ったものへの変化や、杯蓋の立ち上がりが直立するものから下方でやや外へ開くもの等の形式上のわずか

な年代差等が見られるが、大きな隔りはないものと思われる。また、大木ノ輪遺跡との関連を考える上でも良好な資料を得ることができた。特に多数出土した羽釜、小皿類に見るべきものがある。すなわち、大木ノ輪遺跡出土の羽釜は口縁が大きく内湾し端部を丸くおさめ、上面に平坦面を作っており当遺跡出土例のものとは若干の形態差を見せている。この違いが年代的な相違を示すものかどうかは、今後の検討課題であると言えよう。また、大木ノ輪遺跡では、多数の井戸が検出されているが、当遺跡からは調査面積が限定されたこともあるが、1基の井戸も検出されなかった。おそらく、今回の調査地区が集落の縁辺部であったためかと思われる。

以上、当遺跡の調査結果を概述したが、壺形土器A群とした柳ヶ坪型式の土器の出土例から、その分布範囲の確認や、久居古窯跡出土の須恵器と類似した土器が出土している遺跡との位置関係の検討等、今後の類例の増加を待つて解明すべき多くの課題を列挙しておくにとどめることとする。

（高見宜雄）

〔註〕

- ① 仲見秀雄・真田幸成・大場範久 『上箕田一弥生遺跡第2次調査報告』 鈴鹿市教育委員会 1970  
② 早川裕己 「大木ノ輪遺跡」 『昭和54年県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会 1980

- ③ 田辺昭三 「須恵器生産の諸劃期」 『須恵器』 日本美術工芸第388～394号 1971  
④ 小玉道明・山沢義貴 『久居古窯址群発掘調査報告』 久居古窯址群発掘調査団 1968

## VIII 安芸郡安濃町 浄土寺南遺跡

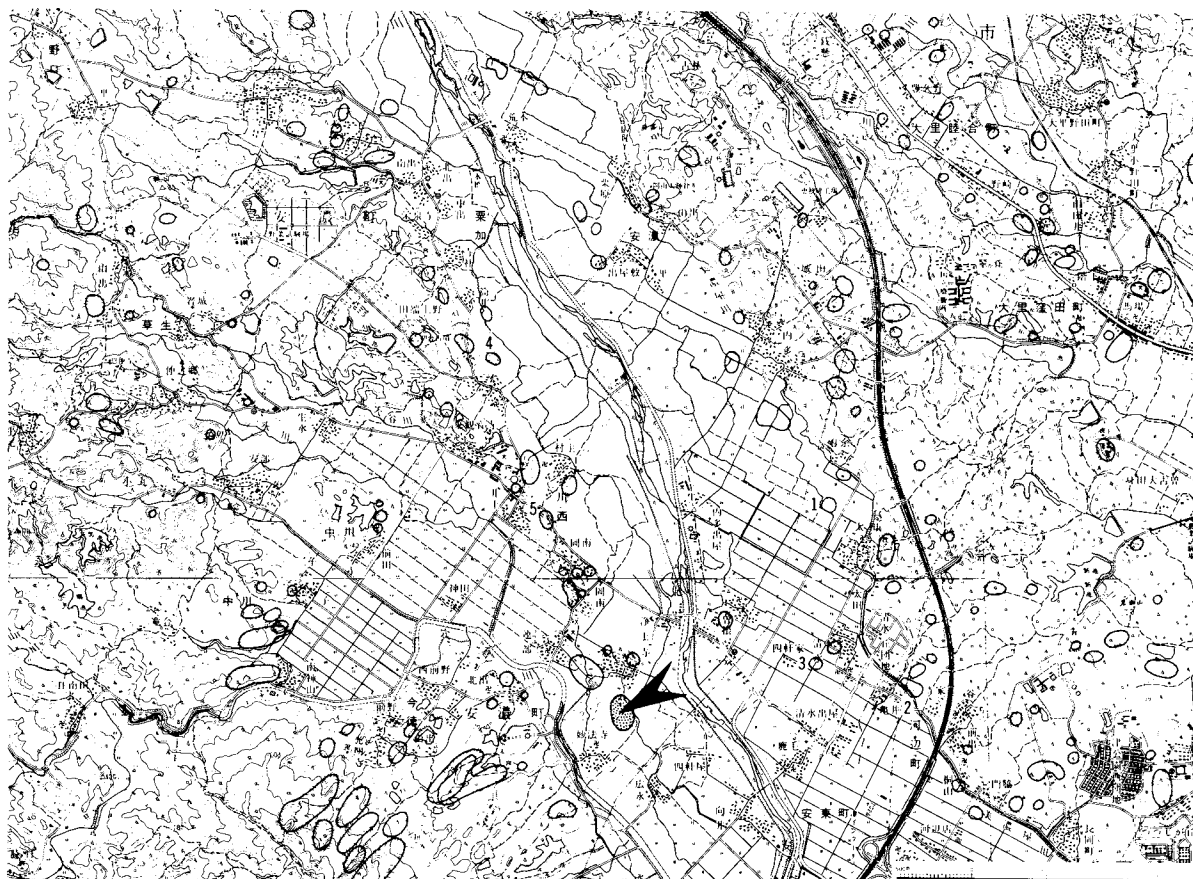
### 1. 位置と歴史的環境

三重県のほぼ中央部に位置する一級河川安濃川は鈴鹿山系のひとつ錫杖ヶ岳(627m)に源を発し、支流穴倉川は経ヶ峰(820m)にその端を発している。この安濃川は中流域で安濃町平野部を南流し、津市街地に入って東折し伊勢湾へと注いでいる。

浄土寺南遺跡(矢印)は安濃川を東に、その支流穴倉川を西にのぞむ、ちょうど両河川に挟まれた沖積地上に位置するが、その中心は水田より一段高い畑地全体に広がっている。現標高12~14mで、行政区画上、安芸郡安濃町大字浄土寺に所在し、現集落を含む付近一帯の広域(約15万㎡)が遺跡の範囲と考えられている。

安濃川両岸にみられる沖積地、あるいは、その微

高地上、また、左岸東方の美濃屋川の自然堤防上には各所に弥生時代から歴史時代に至る遺跡、遺物散布地等がみられる。縄文時代に遡るものとしては、晩期の土器が出土した辻の内遺跡(1)と当遺跡の南方約4kmにある弥生時代の集落跡として著名な納所遺跡のみである。弥生・古墳時代の遺跡としては当遺跡対岸東方の亀井遺跡(2)、清水西遺跡(3)が知られている。亀井では土埴(墓埴?)に伴う弥生時代中期後半の良好な一括土器が多量に検出されており、納所と共に当流域の弥生文化を考える上で重要な資料となっている。また、清水西では5世紀後半頃の土師器がみられ、流域丘陵上にみられる多くの古墳群形成との関連で注目される。古墳時代以降



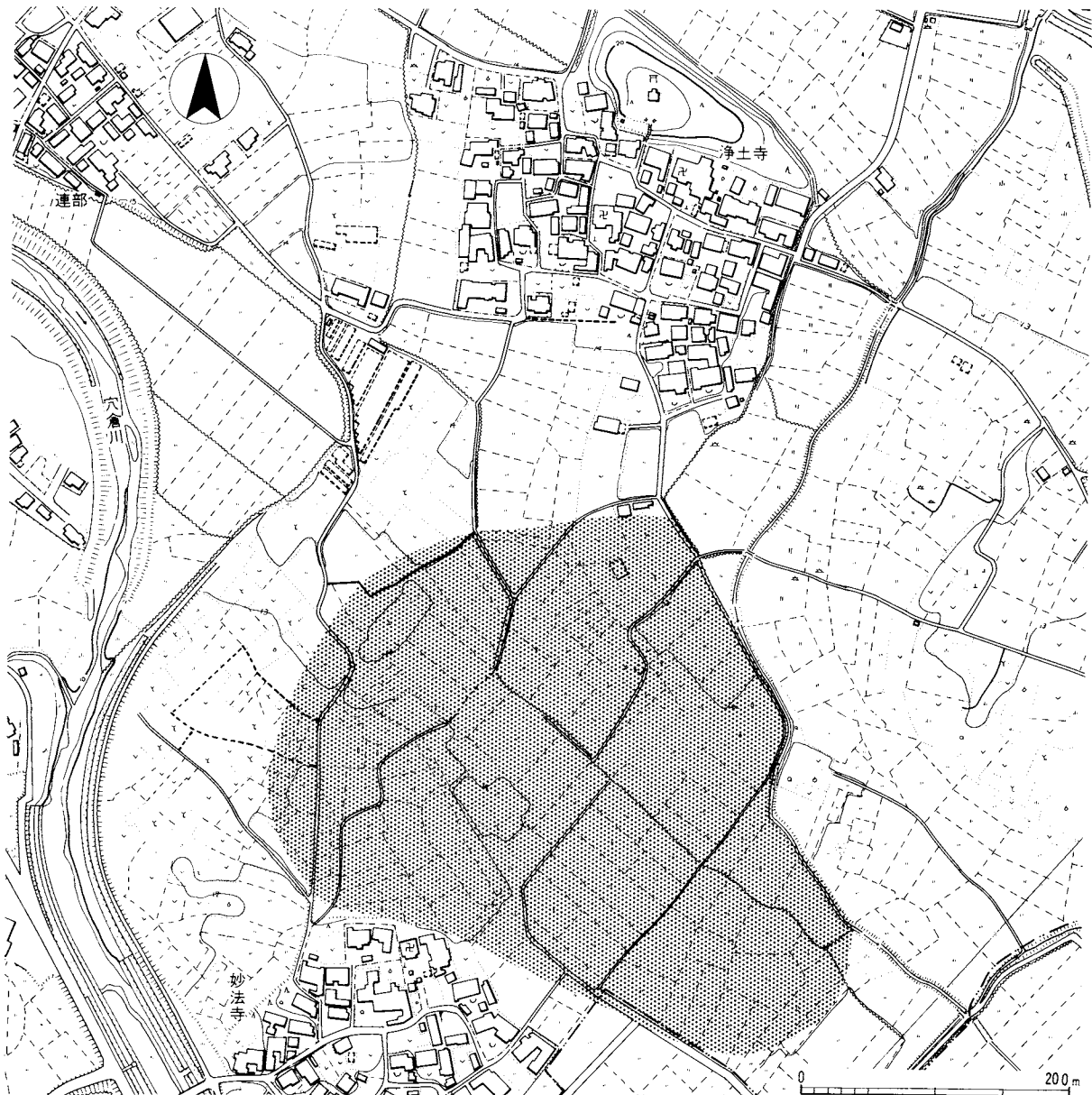
第8-1図 遺跡位置図(1:50000 棕本・津西部)

の発掘例としては北方約 2.5km の北浦遺跡(4)がある。北浦では弥生時代後期の竪穴住居を 1 軒検出しているが、その中心は奈良～平安時代と考えられ、多数の竪穴住居、掘立柱建物がみられる。この遺跡は中世(鎌倉～室町時代)にまで存続しているが、火葬墓、土坑墓などの墓地を検出しているのみで、集落としての占拠は他所へ移動していったものと考えられる。

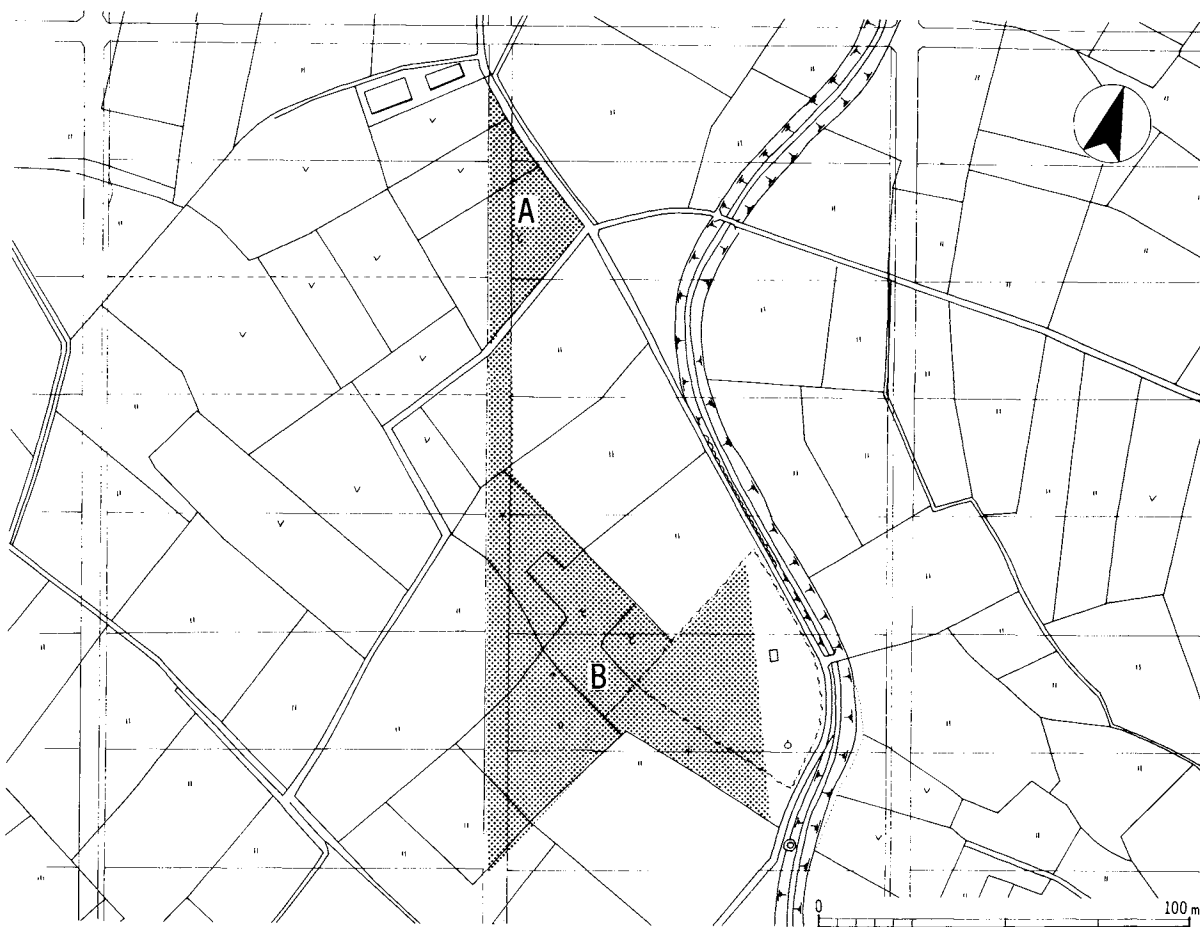
さて、中世集落跡の発掘例としては、当遺跡に比較的近い(北方 1.5km)多倉田遺跡(5)がある。数棟の掘立柱建物の他、中世土坑墓の数例を検出しているが、集落の中心部というよりはむしろその周辺部近くとも考えられるが、中世集落の立地、加えて

最近県下で検出例の多い中世墓の在り方等を考える上で貴重な資料を提供している。

古代律令制下、当地域は旧安濃郡に属しており、また、その郡下に 8 郷(村主郷など)を配していたことが文献上よりうかがえる。こうした律令体制も全国的な経済体制の変化(荘園の発生)、こと伊勢においては、神宮領荘園としての御厨・御蘭の浸透化の影響を受けて集落(村)そのものの姿も変質していったものと考えられる。当遺跡はそうした変革期にあたる遺跡として今後、こうした文献史学的見地も多用して遺跡の性格付けをされるべきであろう。以上、周辺の概況をかつまんで述べるにとどめたい。



第 8-2 図 遺跡位置図 (1 : 5000 網目;遺跡範囲 安濃町地形図 17・18・21・22 1 : 2500 1978)



第8—3図 発掘区平面図（1：2000）

## 2. 遺 構

浄土寺南遺跡の土層の基本的層序は、第Ⅰ層：耕作土（約20cm）、第Ⅱ層：茶褐色砂質土（約30cm）第Ⅲ層：黄褐色砂質層（地山）である。第Ⅱ層がいわゆる遺物包含層と考えられるが、層中には弥生時代後期から中世に至る土器が混在する状態であり、包含層そのものは層位的細分はできない。

今回の調査では発掘区域が南北に2箇所分散しているため、調査進行上、A地区（北側）、B地区（南側）に分けて調査を実施した。面積はA・B区それぞれ1000㎡、4000㎡である。

さて、検出された遺構はA・B両地区ともに竪穴住居、掘立柱建物、溝、土壇などがある。以下、A地区、B地区に分けて、時代別、遺構種類別に個々概述してゆきたい。

### 〔A地区〕

#### 1. 古墳時代の遺構

**SD12** 幅 3.5m 余、深さ 1.3m 余の大溝で底は平坦である。発掘区では南北に走る溝であるが、西壁部近くで西折しているものと思われる。溝埋土中の遺物は極少で、時期決定は難しいが、古墳時代前期の土師器（高杯）・須恵器（高杯）を埋土最下層部に含む点より溝の築造期を古墳期におさえておきたい。なお、弥生後期の土器片を1片含むが、流れ込みによるものと考えられる。この溝の埋没時期は出土遺物の下限から平安時代と思われる。

出土遺物として、広口壺（1・2）、土師器高杯（3・4）、須恵器高杯（5）がある。

#### 2. 奈良時代の遺構

##### (1) 竪穴住居

**SB1** 発掘区西端で切られ、また、後世の攪乱土壇により一部を破壊されているが、一辺約4mの方形プランをもつ住居と考えられる。周溝、主柱穴



等はみられない。

**SB6** SB5に切られ全容は不明であるが、一辺約4.6mの方形プランをもつ住居と考えられる。

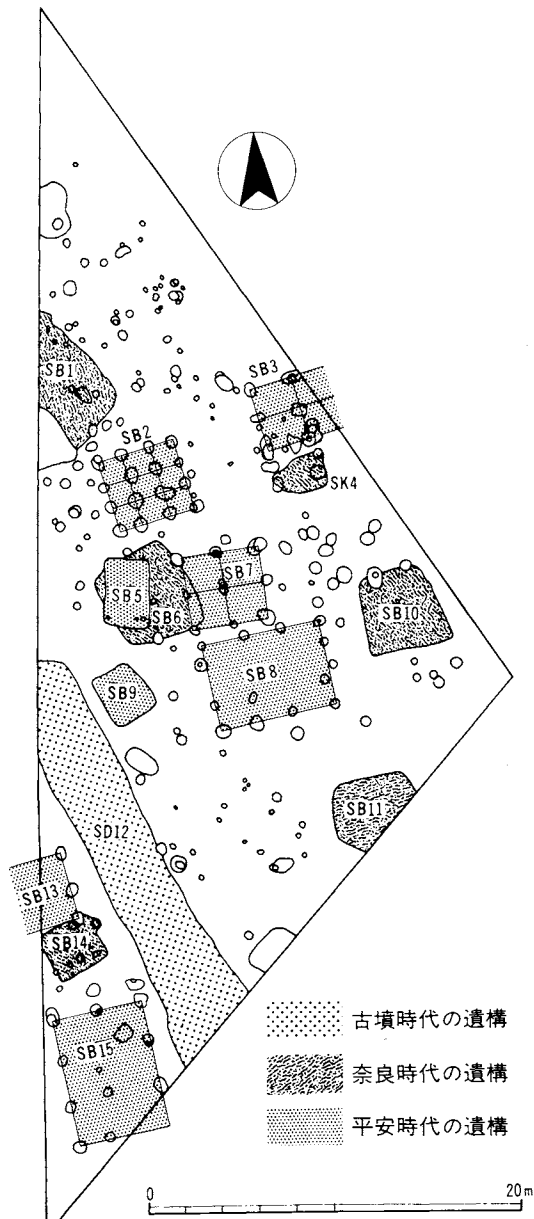
SB1同様、周溝、支柱穴はみられない。

遺物が少なく土師器杯(6)と細片が少々であった。

**SB10** 一辺約4mの方形プランの竪穴住居である。焼土、周溝、支柱穴など一切みられない。

**SB11** 一辺約3.5mの方形プランと考えられるが、発掘区に南半分がかかり、全体を復元することはできない。

**SB14** 一辺約2.8mの小型で方形プランをもつ住居である。周溝、支柱穴等はみられない。



第8-4図 A地区遺構平面図(1:400)

出土遺物として土師器甕(7~9)・高杯(10)・杯(11)がある。

### 3. 平安時代の遺構

#### (1)竪穴住居

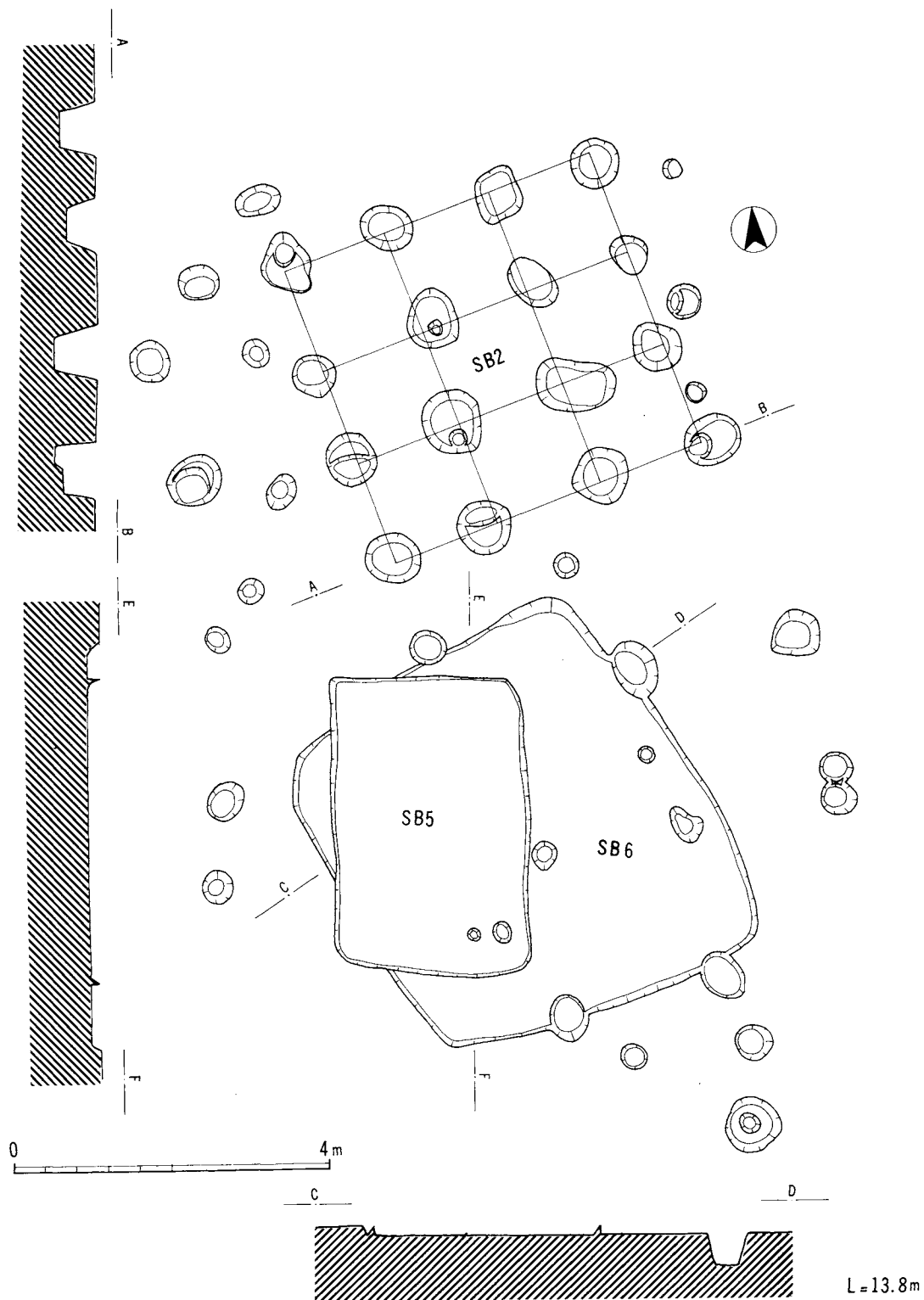
**SB5** SB6の床面埋土を切ってつくられており、深さはSB6より若干浅い。南北3.6m、東西2.5mの長方形プランで、東壁中央部にカマドとして使用したと考えられる立石3個があり、石そのものも焼けている。また、その付近に焼土がみられ、土師器(甕)片がみられた。

出土遺物として土師器甕(12~15)・杯(16)・皿(17)があった。

**SB9** 東西約2.5m、南北約3mのやや長方形をした方形プランの竪穴住居である。北東端に焼土が

名称 SB	規模 (間)	桁行 (m)	梁行 (m)	方向	柱間寸法(m)		備考
					桁行	梁行	
2	桁梁 3×3	4.2	3.9	N78°E	1.4	1.3	総柱
3	—×3	—	5.2	N78°E	—	1.4	総柱
7	2×2	4.2	4.0	N87°E	2.1	2.0	総柱
8	3×2	5.4	3.6	N84°E	1.8	1.8	
13	—×2	—	3.6	N82°E	—	1.8	
15	3×2	6.9	4.8	N7°E	2.3	2.4	
22	2×1	4.0	2.0	N12°W	2.0	2.0	
33	4×3	7.2	4.8	N3°W	1.8	1.6	
40	2×2	4.0	3.6	N78°E	2.0	1.8	
47	—×2	—	3.8	N78°E	—	1.9	
48	4×2	5.6	3.8	N86°E	1.4	1.9	
49	3×3	5.4	5.1	N7°W	1.8	1.7	西廂
54	3×3	4.2	4.2	N10°W	1.4	1.4	総柱
55	5×3	10.5	4.8	N5°W	2.1	1.6	
56	3×—	5.4	—	N5°W	1.8	—	

第8-1表 掘立柱建物一覧表



第8-5図 SB2・SB5・SB6実測図(1:80)

みられるが、カマド跡かどうか不明である。出土遺物として、土師器杯(18・19)、須恵器杯蓋(20)・杯身(21・22)がある。

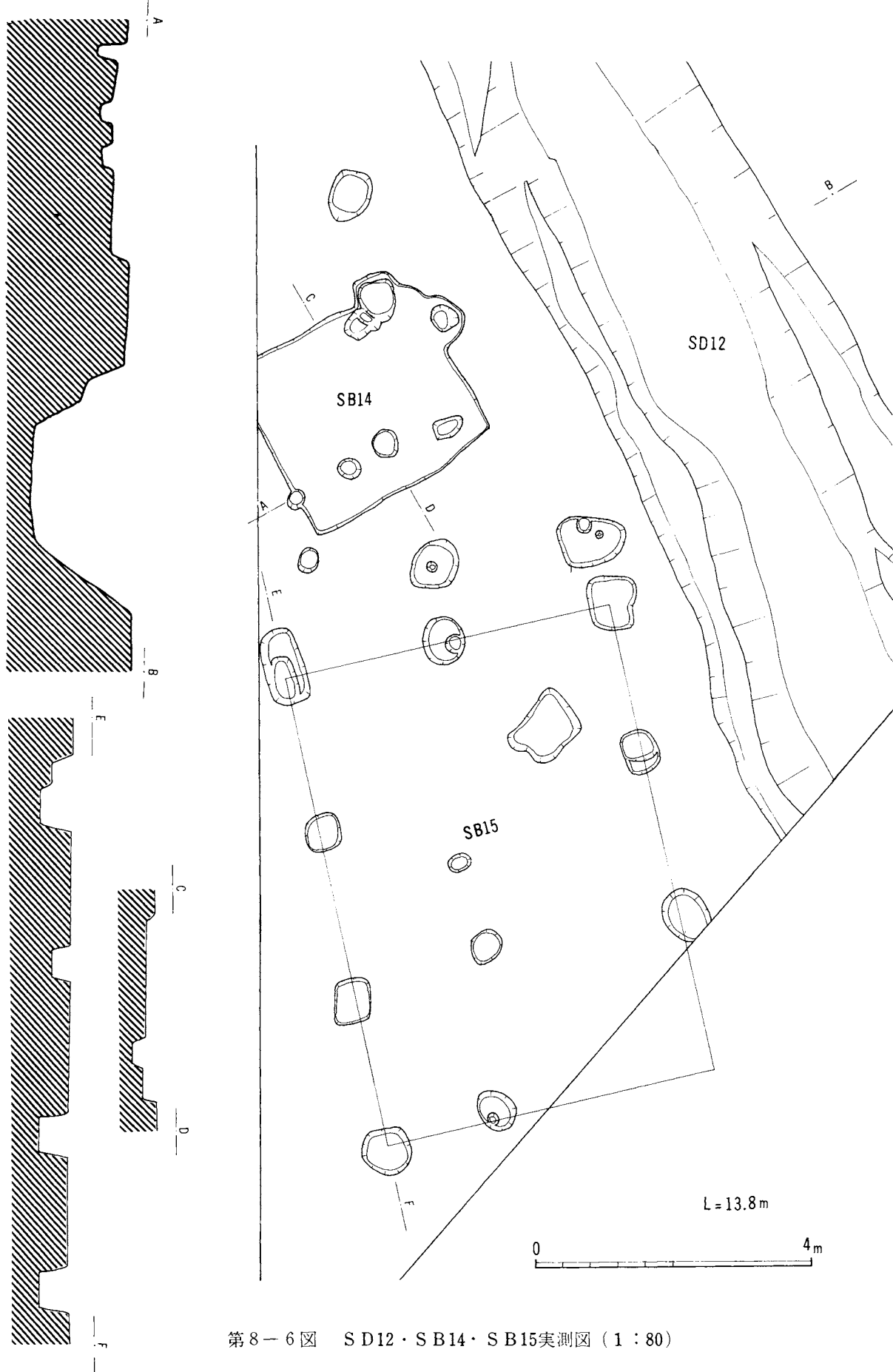
(2)掘立柱建物

**SB2** 桁行3間(4.2m)×梁行3間(3.9m)の総柱建物で、棟方向はN78°Eである。柱掘形は50

~80cmでやや不揃いである。倉庫的なものであろう。

**SB3** 桁行2間以上、梁行3間(5.2m)の東西棟をもつ建物で、棟方向はN78°EでSB2と棟を同一にしている。柱掘形は径60~80cmで円形、あるいは楕円形を呈する。

**SB7** 桁行2間(4.0m)×梁行2間(3.6m)



第8-6图 SD12·SB14·SB15实测图(1:80)

の総柱建物で、棟方向はN87°Eである。柱掘形は30～70cmと不揃いである。

**SB 8** 桁行2間(4.8m)×梁行3間(6.4m)の東西棟をもつ建物で、棟方向はN84°Eである。柱掘形は40～70cmと不揃いである。

**SB 13** 梁行2間(3.6m)で東西棟の建物と考えられるが、一部分のみの検出で規模は不明である。柱掘形は径60cm内外で揃っている。棟方向はN82°Eである。ピット内から土師器杯(23)、皿(24)が出土している。

**SB 15** 桁行3間(6.9m)×梁行2間(4.8m)、南北棟の建物で、棟方向はN7°Eである。柱掘形は径50～70cmで、柱通りはや・不揃いである。

## 〔B地区〕

### 1. 弥生時代の遺構

#### (1)土 塚

**SK 50** 長軸1m以上、短軸60cm余の楕円形を呈する土器溜りの穴である。深さ30～35cmで底は平坦である。南の部分は古墳時代のSD52に切られ、その形状は明らかではない。一括廃棄のための土塚と考えられ、埋土中に土器を充満している。埋土内から壺(100～102)・甕(103)・高杯(104)など弥生時代後期の土器が出土している。

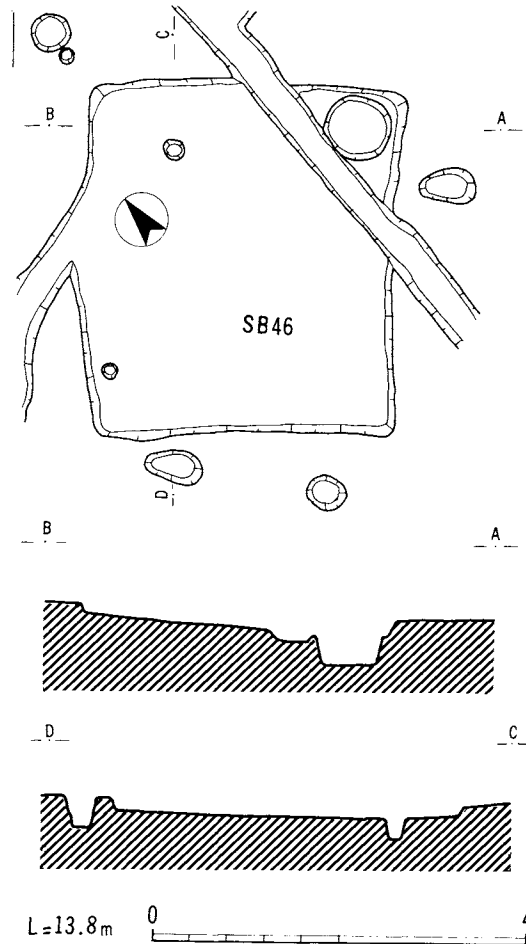
#### (2)大 溝(旧河道)

**SD 59** 発掘区南西隅で検出された幅4.5～5mの大溝で、東側約 $\frac{1}{2}$ は未掘であるが、東西方向より発掘区西壁近くで北に屈折する溝と考えられる。深さ30～80cmで東方ほど深く、北→南→東の方向に流れていたものと考えられる。埋土中の遺物は大ききの割に少なく、弥生時代中期・後期の土器がその主体を占めるが、少量、飛鳥～奈良時代前期のものを含み、この溝の埋没時期を示すものと思われる。

### 2. 古墳時代の遺構

#### (1)竪穴住居

**SB 44** 短辺約3.2m、長辺約4.6mのや・長方の方形プランをもつ竪穴住居跡で、支柱穴、カマド等の付属施設を何もたない。床面まで検出面から約15～20cmの深さである。床面ほぼ中央部に円形に径1mの焼土面を有する。埋土内から土師器甕(44)・高杯(45・46)が出土している。



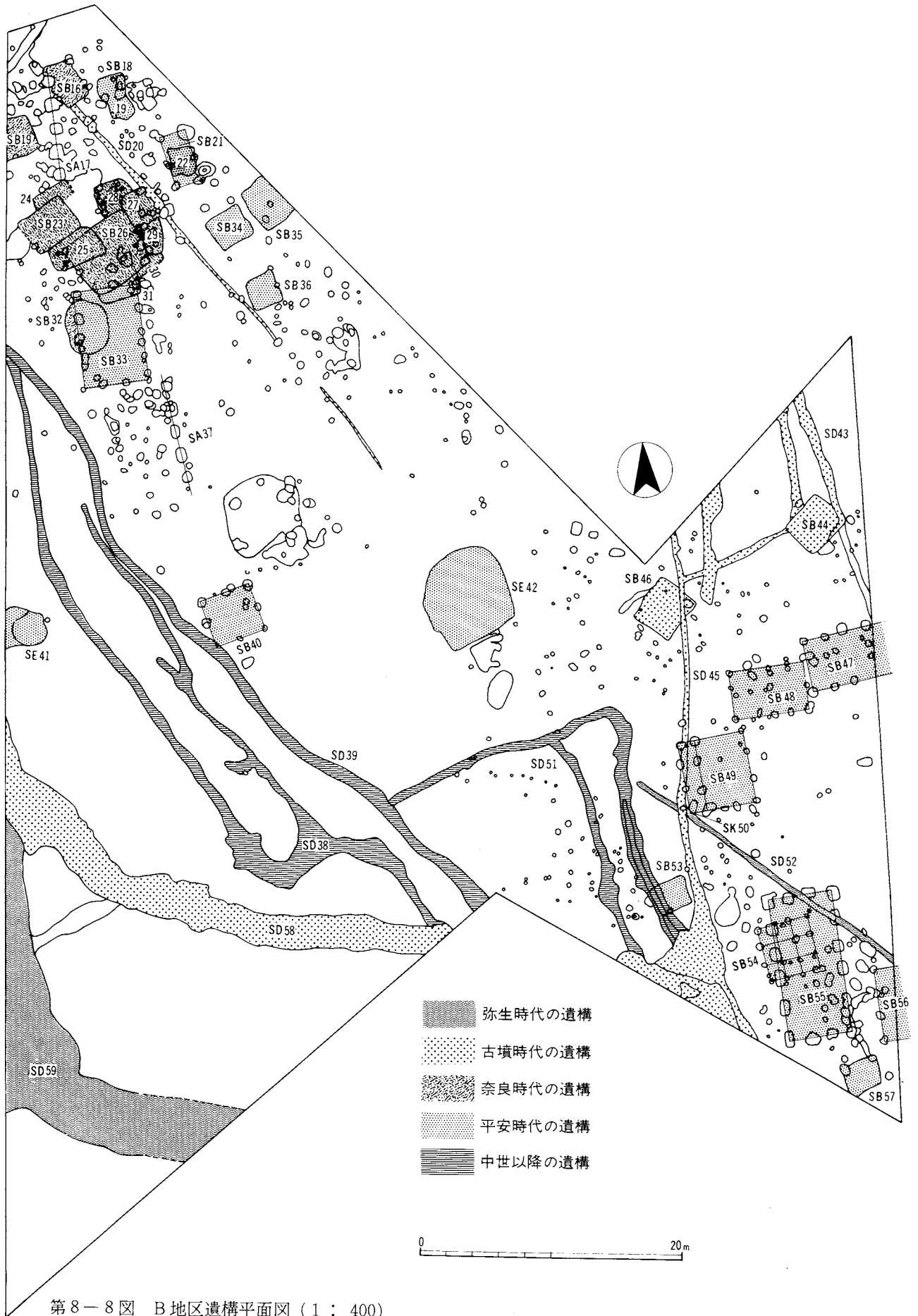
第8-7図 SB46実測図(1:80)

**SB 46** 短辺約3.4m、長辺約3.7mで正方形に近い方形プランをもつ竪穴住居跡で、SB44と主軸方向をほぼ同一にしている。検出面から床面までの深さは5～15cmで、遺構面としては東が低く西が漸高しており、その比高差は20cmある。北コーナーに径20cm、深さ25cmの小ピットがあるが、支柱穴の1つになるかどうか難しく、SB44同様、支柱穴を持たない住居と考えた方がよいであろう。焼土は見られず、東コーナーに径70cm、深さ40cm余の貯蔵穴をもつ。遺構面の高低差より考えると、西辺中央部より西南にのびる幅40cm余の溝は住居跡に伴う排水溝の役割をしたものと考えられる。埋土内から土師器甕(47)・甕脚部(50)・杯(48)・高杯(51)・小型鉢(49)が出土している。

#### (2)溝 跡

**SD 43** SB44の東南コーナーを切るほぼ南北に走る溝で、幅30～40cm、深さ25～30cmである。

**SD 45** 南北に長く走る、幅20～30cm、深さ30～



第8-8図 B地区遺構平面図(1:400)

40cm、断面U字形をした溝である。S B 46付近で東折してのびるが、その東端はS B 44により切られる。またS B 46内では溝の底近い肩のみ検出でき、S B 46より以前につくられた溝であることがわかる。

S D 52 東南から西北に走る溝で、幅40cm余、深さ20~30cmである。前述のS D 45に切られ、弥生時代の土壇S K 50を切っている。この溝はS D 45より西北へ3mのところまで途切れている。

**S D 58** 発掘区南西で検出されたもので、発掘区西端で北折するが、ほぼ東西に走る溝である。また東端は発掘区により切られているが、S D 45に続くものであろう。溝は、幅2m前後・深さ50~60cmである。出土遺物として古墳時代の土器が溝下層（灰茶色粘土混砂層と茶灰色粘質土）から出土しており、器種も土師器壺（52~62）・甕（65~79）・甕脚部（80・81）・高杯（82~85）・ミニチュア土器（63・64）・須恵器杯身（86~88）などがある。

### 3. 奈良時代の遺構

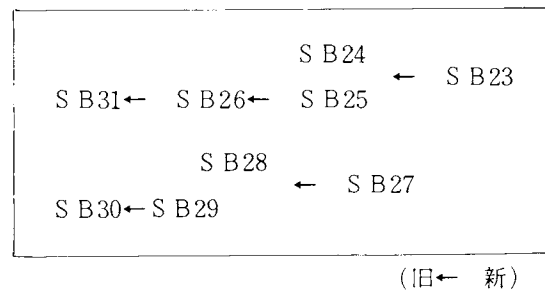
#### (1) 竪穴住居

**S B 16** 西辺は柱穴に切られ肩が不明瞭であるが短辺2m前後、長辺3mの長方形プランを呈する竪穴住居で、主柱穴、貯蔵穴等の付属施設をもたない。検出面から床面までの深さは30~35cmである。東壁中央部に半円形に焼土層のブロックの高まりを残しており、カマドの痕跡と考えられる。

**S B 19** 発掘区西壁にかかるが、一辺約2.8~3mの方形プランをもつ住居跡と考えられる。2~3の柱穴をもつが、主柱穴となるか不明である。床面までの深さ10cm内外で、焼土はみられない。

**S B 23~31** 総数9軒の竪穴住居が複雑に切り合う。S B 23はその切り合い関係より最も新しいもので、長辺3.9m、短辺3.0m、深さ15cmである。プランの北半、東半部は後世の攪乱土壇により削平されている。S B 24は、S B 23及び攪乱土壇によりプランの大半が不明で、北西コーナーと北壁の小範囲のみ遺存するものである。主軸方向はS B 23に近い。S B 25はS B 23に北壁を一部切られる。長辺4.2m、短辺2.6mの長方形プランを呈する。S B 26は一辺約4.8mで9軒中最も大きな面積をもつ方形プランの竪穴住居である。西壁北寄りにはカマド跡と考えられる焼土が厚さ10cm全堆積している。S B 27

は一辺約2.8mで方形プランをもつ。深さは床面まで10~15cmある。東壁ほぼ中央部に60cm×1mの舌状形をした焼土の高まりが認められ、カマド跡と考えられる。S B 29~31は一部分検出のため全体の規模は不明であるが、いずれも2.5~4mの方形プランを呈するものと思われる。さて、これらはいずれも相互に切り合っており、住居内に柱穴がみられるものの、主柱穴としてまとまりをもち、それと断定しうるものはない。これらの9軒の竪穴住居の新旧関係については、遺物としての時期差は認めがたく、その切り合いより下記に図式した通りとなる。



#### (2) 竪穴状遺構

**S B 32** 長軸4m余、短軸3m余で、楕円形を呈する竪穴状遺構で深さ30cm余で、底は平坦である。主柱穴等を一切もたない竪穴住居とも考えられるが、その形状（当時の住居プランとして）からみて、むしろ住居とは断定し難い。埋土内から土師器杯（90）・皿（89）・須恵器杯蓋（91）・杯身（92~94）が出土している。

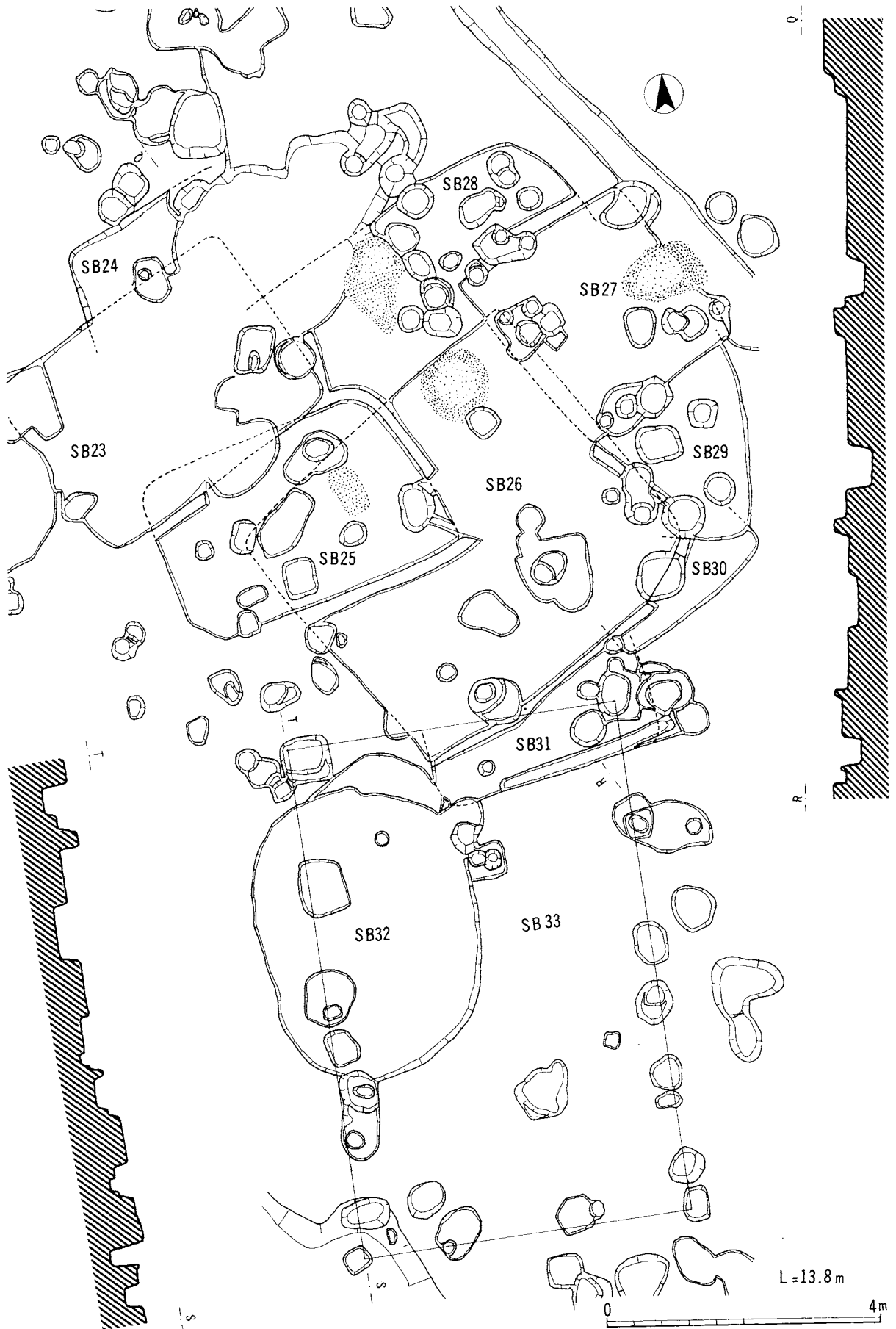
### 4. 平安時代の遺構

#### (1) 塀跡

**S A 17・S A 37** いずれも4間分を確認、S A 17の柱穴は一辺80cm~1m余の方形の掘形をもち、深さ30~40cmである。柱間は6尺等間である。S A 37の柱掘形は両端の2柱は径80cm内外の円形に近い掘形であるが、他の3柱穴は70cm内外×1m内外の方形に近い掘形を呈する。柱間はS A 17同様、6尺等間である。これらS A 17・37は掘立柱建物の棟側の一面とも考えられるが、対する柱の未検出、不均衡という点から一応、塀のような直線的な遺構としてあげておく。

#### (2) 竪穴住居

**S B 18・19** 大きい方のS B 19で一辺2m、S B 18で一辺1.8m余と、規模の小型な住居跡でS B 18



第 8 - 9 図 SB 23 ~ 33 実測図 ( 1 : 80 )

は19に切られている。主柱穴の他、貯蔵穴、カマド等、何らの付属施設をもたない。

**S B 21** S B 18・19に似た一辺2 m 足らずの小規模で方形プランをもつ。主柱穴、カマド等の付属施設はない。

**S B 34** 一辺 2.7 m 余で方形プランを呈する。床面までの深さ15~20cmである東壁に焼土がみられ、カマド裾の根石と思われる川原石が南北に80cmの間隔を置いてみられる。その間に土師器(甕)片が検出された。主柱穴はみられない。出土遺物として、床面近くやカマド付近から土師器甕(95・96)・杯(98)、須恵器杯身(97)が、そして、埋土上層から陶硯(円面硯)(99)が出土した。

**S B 35** 東部分が発掘区東壁にかかるが、約一辺3.5m、方形プランを呈する住居と考えられる。主柱穴はみられない。

**S B 36** S B 34と主軸方向をほぼ同一にする一辺2.4mで方形プランをもつ。深さ10cm前後で、床面の所々に若干の焼けた痕跡をもつ程度で、カマドは付設されていない。主柱穴はない。

**S B 53・S B 57** いずれも一辺1.3~1.5mの小型で、ほぼ正方形を呈する住居跡である。主柱穴、およびカマド等何らの施設をもたない。

### (3)掘立柱建物

**S B 22** 桁行2間(4 m)×梁行1間(2 m)で、南北棟(N12°W)の建物である。柱掘形は長軸60~80cmの楕円形を呈する。北東隅の柱穴は土壇によって切られている。

**S B 33** 桁行4間(7.2 m)×梁行3間(4.8 m)で、南北棟(N3°W)の建物である。柱掘形は径40~60cmの円形を呈するものの他、一辺80cm内外の方形の掘形をもつものと様々である。柱通りもバラツキを有する。

**S B 40** 桁行2間(4 m)×梁行2間(3.6 m)で、やや東西に長い建物で棟方向はN78°Eである。柱掘形は円形を呈すが、大きさは径40~80cmと不揃いである。東西隅の柱穴は中世溝(S D 39)により消滅している。

**S B 47** 桁行3間、あるいは、3間以上、梁行2間(3.8 m)と考えられ、東西棟で棟方向はN78°Eである。梁は柱穴2個のみ検出されただけであるが、

その長さからみて、本来は2間であったと考えた方がよいであろう。柱掘形は径60cm前後で、中に方形に近いものも混じる。

**S B 48** 桁行3間(5.6 m)×梁行2間(3.8 m)、東西棟をもつ建物で棟方向はN86°Eである。柱通り、及び柱掘形の大きさは不揃いである。

**S B 49** 桁行3間(5.5 m)×梁行3間(5.1 m)で、やや南北に長い南北棟の建物で、棟方向はN7°Wである。梁方向の西から1間は柱間がや、狭くなり、廂と考えられる。柱掘形は径50~60cmの円形を主とするが、東側柱列はひとまわり小さい。

**S B 54** 3間(4.2 m)×3間(4.2 m)の正方形を呈する総柱建物である。柱掘形は円形で、径40~60 cmである。

**S B 55** 桁行5間(10.5 m)×梁行3間(4.8 m)、南北棟の建物で棟方向はN5°Wである。柱掘形は正方形、ないし長方形で大きく一辺80cm~1 mをはかる。柱通りも揃い、規模的にも今回検出された建物中、最も大型の建物である。柱痕跡を残すものもあるが、不明なものが大部分である。

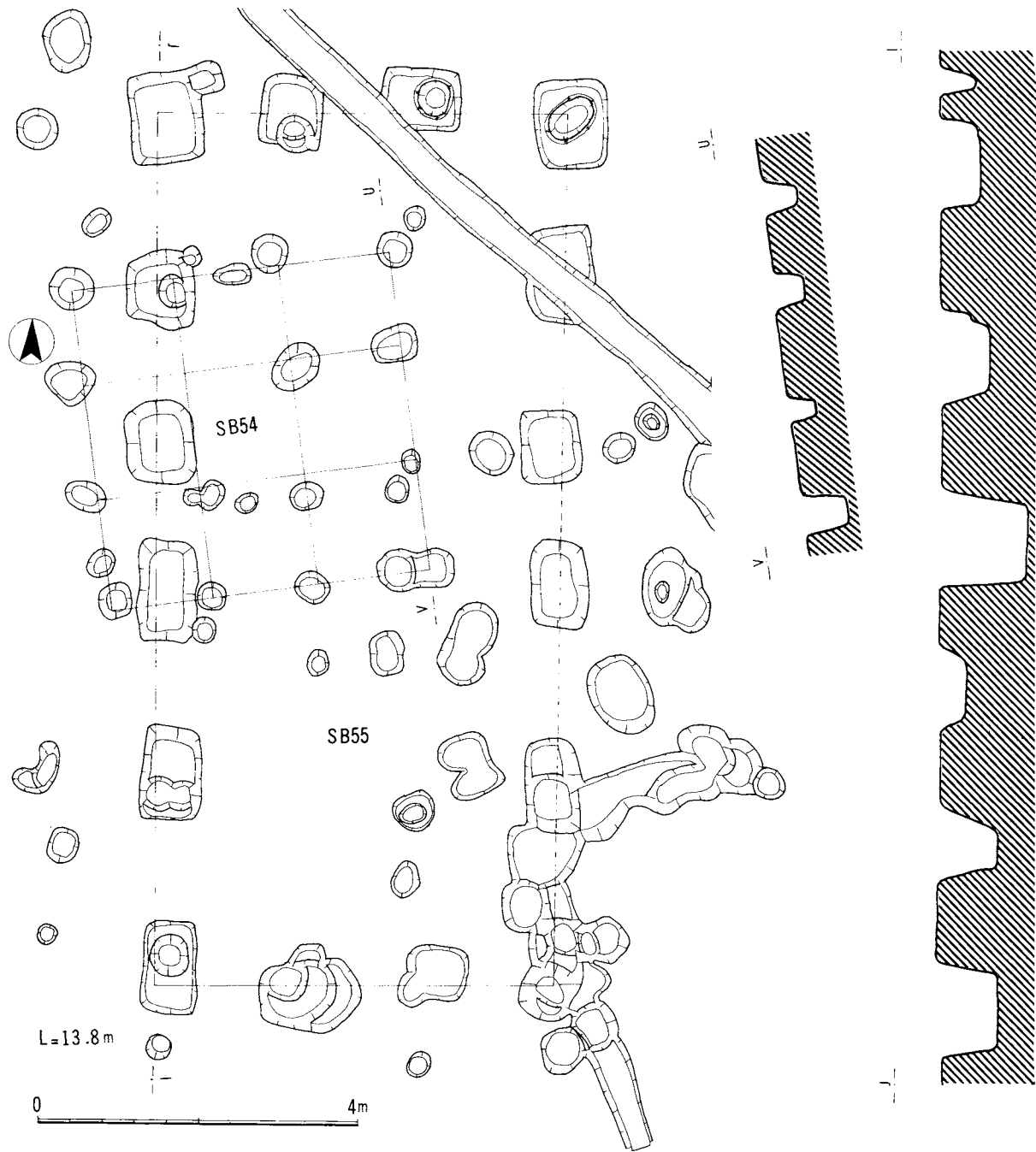
**S B 56** 東壁近くに検出された柱列で、3間分と考えられる。おそらく桁行3間(5.4 m)で南北棟の建物と考えられ、棟方向はS B 55と同一方向である。柱掘形は径60cm余で円形を呈する。

### (4)井戸

**S E 41** や、不整円形を呈する素掘りの井戸で、2 m まで掘り下げたが、内壁がしだいに外方に膨れるという形状を示し危険防止のためそれ以下の掘削を中止した。

**S E 42** 発掘区中央付近で検出されたもので、上部で東西6.8 m、南北6.6 m、下部で2.6 mとなる深さ約3.6 mの土壇を掘り、なかに長方形の部材を井籠組にして重ねたものである。井戸は、掘形の底に内枠として二段に二重の井戸枠を設け、さらにその上に一周り大きい井戸枠を外枠として組んでいる。内枠は、外枠と異なる方向に組んであり、井戸枠の裏側に裏込め石として径5~15cmの石や木屑が補強材として使用されていた。内枠の組方は、4枚の長方形板の両端を直角に挟んで組み合わせている(図1参照)。上段の下段の井戸枠の配置は同じでなく、東西と南北の部材の位置を交代させている。さらに、





第8-10図 SB54・SB55実測図(1:80)

内枠には前述した井戸枠の裏にもう一枚(北にもう一枚)の井戸枠が設けられていた。南北の長方形板の部材に柄穴を穿ち、東西の部材の両端に角柄を設けて組み合せている(図2参照)。南北の最下段の井戸枠の裏にも一枚の添板が設けられていた。

外枠は、長方形板の両端近くに切り込みをいれて図3のように組み合せている。東西の井戸枠の切り込みを下向きにして、南北の切り込みに組み合せている。さらに内枠の場合と同様に添板が4枚使用されていた。この部材は単に外枠の最下段の裏に添え

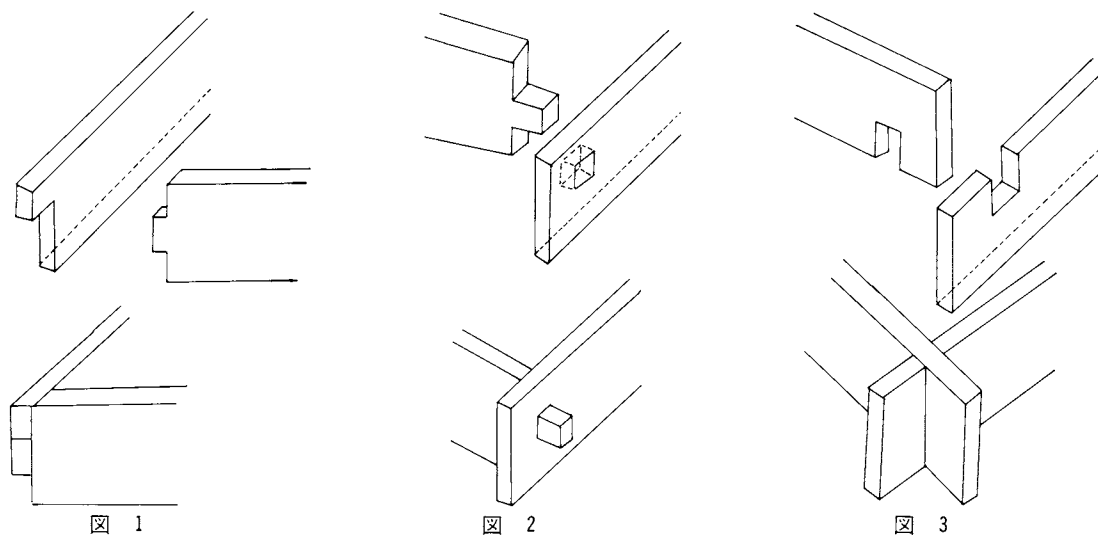
られていたようで、組み合わせはなかった。外枠は図3の組み合わせで上部まで至るものであろう。なお、井戸内からの出土遺物は少なく、土師器杯・高杯、須恵器杯、曲物底板(123・124)、植物の実、木屑などが出土した。

## 5. 中世以降の遺構

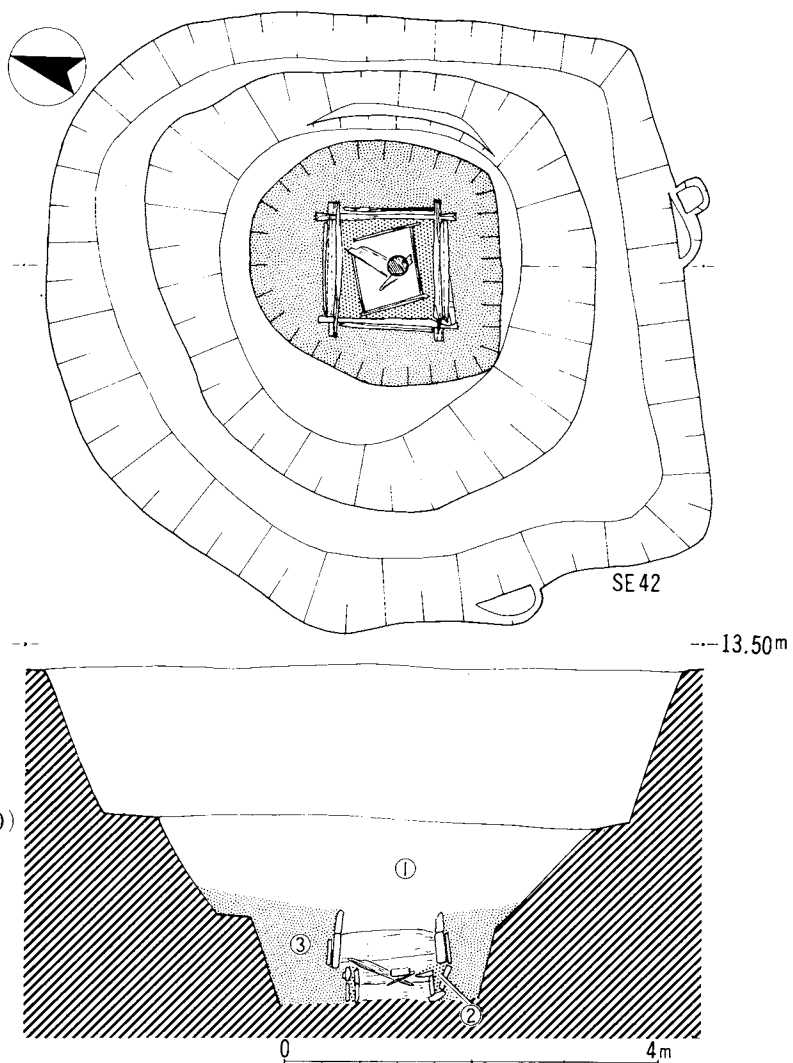
### (1) 溝跡

**SD38・SD39・SD51** 発掘区北西から南東に蛇行しながら並行して走る溝(SD38・SD39)とSD39から枝分れして東進し、南折する溝(SD51)

である。いずれも幅40～80cm・深さ30～40cmである。 しい。  
 遺物は少なく、中世土器の細片が多く時期決定が難



第8-11図 井戸枠の組手仕口



第8-12図 SE42 井戸実測図 (1:80)

- ① 灰色粘土
- ② 含小石青灰色土
- ③ 青灰色砂層

### 3. 遺物

#### [A地区]

#### 1. 弥生時代～古墳時代の土器

##### (1)SD12出土土器

##### A. 弥生土器

**広口壺 (1・2)** 口縁部のみ出土である。(1)は口縁部は大きく外反し、水平に広がる。口縁部外面には櫛状工具による6条の横線文が施され、頸部には貼付突帯が巡っている。口縁端部内面には、櫛歯による刺突文が見られる。(2)は(1)より口縁部が大きく開き、口縁端部下方に肥厚する。剝離が激しく調整方法は不明である

##### B. 土師器

**高杯 (3・4)** (3)はほぼ完形であり、口径15.4cm・器高11.1cmで半球形の杯部に中太りする脚柱部がつづくものである。脚端部は丸く肥厚する。(4)は脚部のみ出土である。脚柱部外面はヘラケズリされ、脚柱部内面にはしぼりの痕跡がみられる。いずれも胎土は緻密で、色調は赤褐色である。

##### C. 須恵器

**高杯 (5)** 八の字状に大きく開く脚柱部で、脚裾端部は上下に肥厚しておわる。脚柱部には3個の円孔を穿つが等間隔でない。色調は青灰色を呈する。

#### 2. 奈良・平安時代の土器

##### (1)SB6出土土器

##### A. 土師器

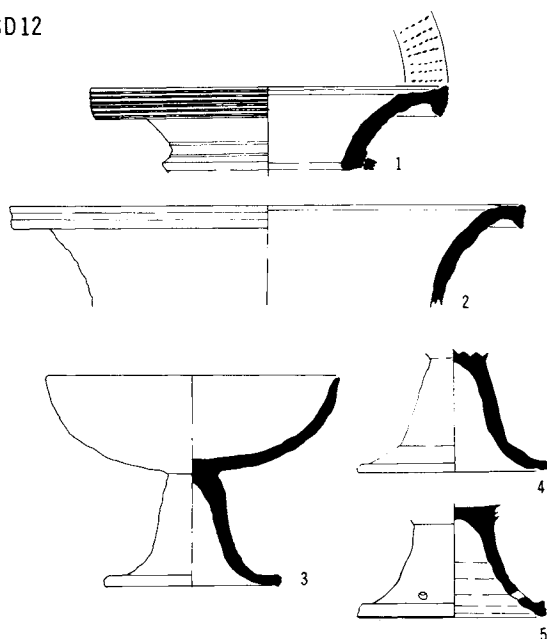
**杯 (6)** 口径20.1cm・器高5.5cm(推定)。内弯する口縁部の端部はヨコナデにより内面が凹む。器面にはヘラミガキを施し、体部内面には放射状暗文を施す。胎土は金雲母片含むが精良で、色調は明赤褐色である。

##### (2)SB14出土土器

##### A. 土師器

**甕 (7～9)** いずれも口縁部が外反し、口縁端部が外方に面をなすものである。(7)は口縁部が強く外反し、上方に面をつくり端部内側に段がつく。口縁端部外面に2条の横線文が入る。体部外面に縦方向の刷毛目調整、内面に横方向の刷毛目調整を施す。(9)は体部外面に刷毛目調整をする。(8)は剝離が進んでおり調整方法は不明である。胎土は不良である。

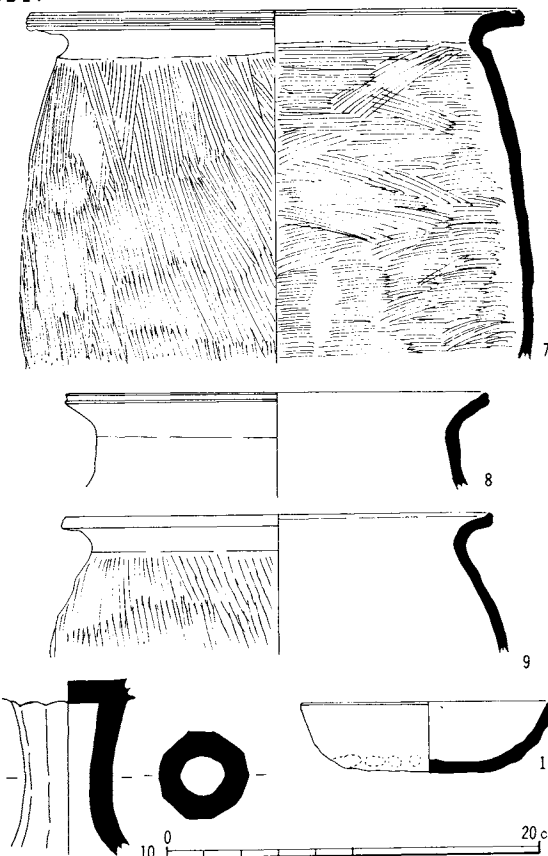
SD12



SB6



SB14



第8-13図 SD12・SB6・SB14 土器実測図(1:4)

杯 (11) 口径13.4cm・器高3.7cm。底部から口縁にかけてなだらかに外反し、口縁部はヨコナデ、底部はナデられている。胎土は緻密、色調は暗赤褐色である。

高杯 (10) 断面9角の面取りをした脚柱部のみである。器面はヘラケズリされている。胎土は緻密、色調は赤橙色である。

### (3)SB5出土土器

#### A. 土師器

甕 (12~15) 口縁部がくの字に外反し、口縁端部が面をなすもの(12)、丸くおわるもの(13・15)と、口縁部はゆるやかに外反し口縁端部が丸くおわるもの(14)がある。(12)は体部外面に縦方向の刷毛目、内面には横方向の刷毛目調整を施す。(13)は口縁部ヨコナデ、体部外面に刷毛目の調整を施す。

(15)の長胴甕は器壁が薄く、剝離がすすんでいるため調整方法がわかりにくい、体部下半部に刷毛目の痕跡がみられる。(14)は口径15.4cm・器高14.8cmで、口縁部はヨコナデ、体部外面上半部は縦方向の細かい刷毛目調整、下半部はヘラケズリ、体部内面は横方向の細かい刷毛目を施している。

杯 (16・17) (16)は口径12.4cm・器高3.8cm。口縁部はゆるやかに内弯する器形で、口縁部はヨコナデ、底部は未調整で凹凸が目立つ。胎土は緻密、

色調は暗褐色である。(17)は口径15.6cm・器高3.2cm。底部は平坦で、口縁部は外傾し、口縁端部は外反しておわる。底部外面はヘラケズリ、内面はナデられ、口縁部のヨコナデの範囲は広い。胎土は良く、色調は赤褐色である。

### (4)SB9出土土器

#### A. 土師器

杯 (18・19) (18)は口径13.6cm・器高4.4cm(推定)。口縁部はヨコナデされるが底部不調整である。口縁端部は上方に面をつくる。(19)は口径17.3cm・器高3.4cm。口縁部はヨコナデにより外反する。胎土は緻密(18・19)、色調は赤橙色(18)淡橙色(19)である。

#### B. 須恵器

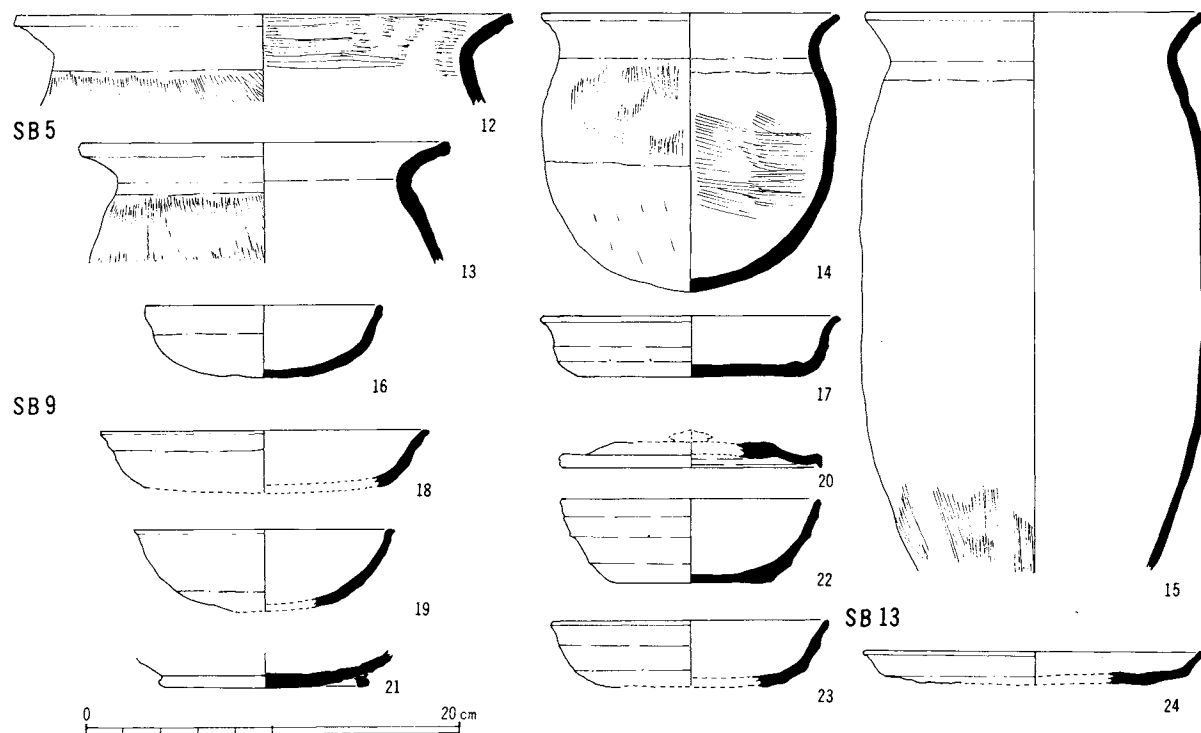
杯蓋 (20) 口径13.8cm(推定)。天井部を欠くものである。口縁端部はほぼ直角に折れる。

杯身 (21・22) (21)は底部のみの出土である。台形の高台は底部の外側につくものである。底部はヘラケズリしている。(22)は口径12.5cm・器高4.3cm(推定)。底部に糸切り痕のこる。口縁部はゆるやかに外反し、ロクロ水挽きのあとがよく残る。

### (5)SB13出土土器

#### A. 土師器

杯 (23) 口径14.7cm・器高3.4cm(推定)。平ら



第8-14図 SB5・SB9・SB13 土器実測図(1:4)

な底部から直線的に口縁部が開くものである。底部近くまでヨコナデされている。

皿 (24) 口径18.1cm・器高1.8cm (推定)。口径のわりに浅いもので、口縁部はヨコナデされ外反する。口縁端部は丸くおさまる。底部はユビオサエによる凹凸が目立つ。胎土は緻密で、色調は赤褐色である。

### 3. 包含層出土土器

#### (1) 弥生時代後期の土器

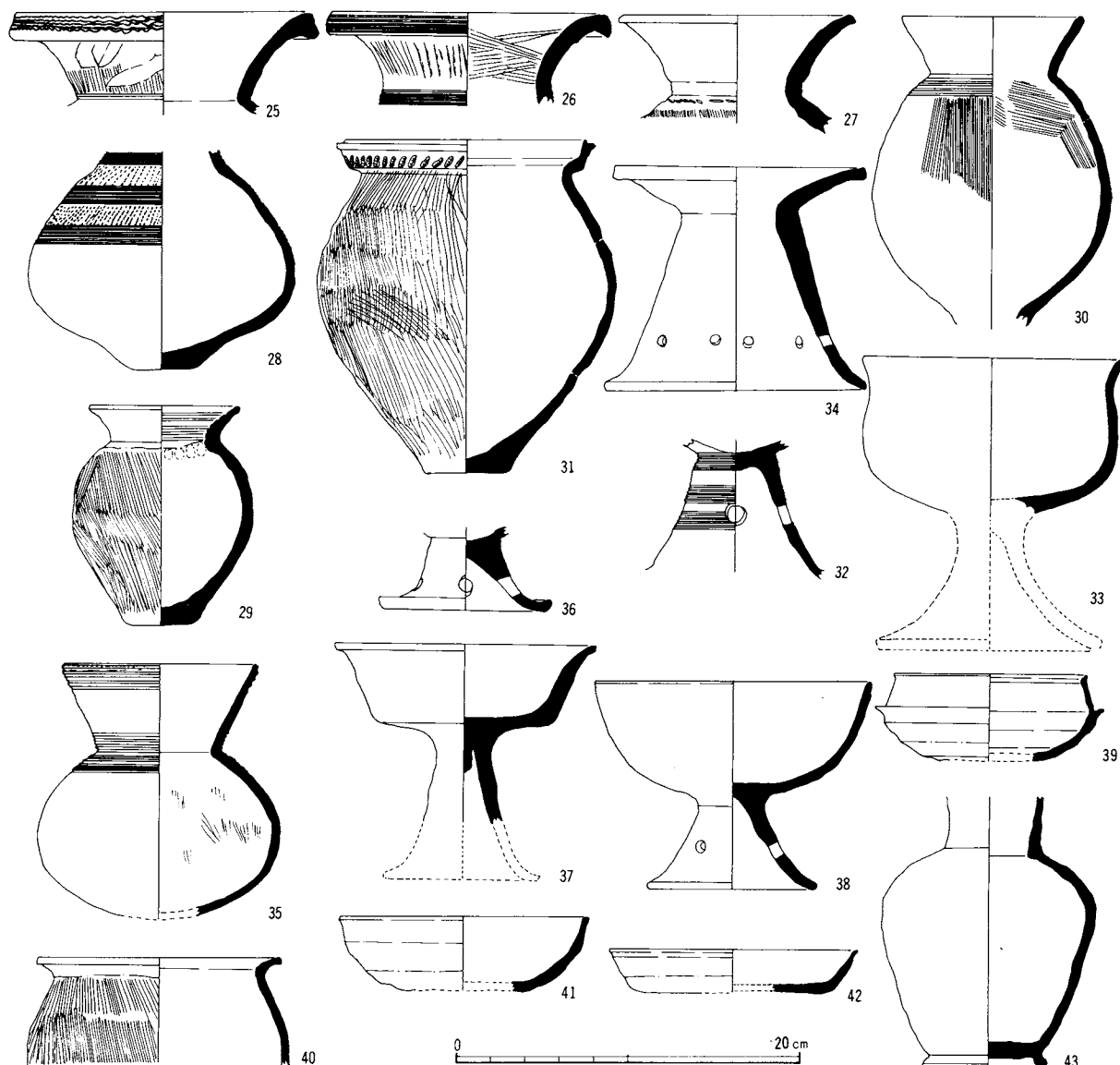
##### 広口壺 (25~28)

A (25・26) 口縁端部が下方に肥厚して外方に面をなすものである。(25) は口縁部外面に刷毛目調整をしたあとナデ消しているが、刷毛目が残る。口縁端部に櫛状工具による4条の波状文が巡っている。頸部外面に2条の横線文が巡る。(26) は口縁部外面

に粗く刷毛目調整し、端部と頸部には櫛状工具による5条の横線文を施している。口縁内面は粗く刷毛目調整されている。

B (27・28) 広口壺Aより口縁部の外反度が弱く、口縁端部は外方に面をつくるものである。(27) は口縁部はヨコナデされたあとヘラミガキされている。頸部にはヘラ刻み目を施している。体部外面には刷毛目調整を施す。(28) は現在高18.4cm・体部最大径15.4cm。体部は重心が低く、上半部には上から櫛状工具による横線文と刺突文を交互に施している。体部外面はヘラミガキして仕上げ、内面はナデている。なお、体部下半部に黒斑がある。

中型壺 (29・30) (29) は口径17.0cm・器高12.7cm。くの字に短く外反する口縁部に、最大径が上半部にある体部がつくものである。口縁部内面に櫛



第8-15図 A区包含層土器実測図(1:4)

状工具による5条の横線文を施し、体部外面は刷毛目調整されている。頸部内面に口縁部と体部接合の際の指頭圧痕がのこる。底部は平底である。(30)は底部は欠損しており、平底か台付になるのか不明である。(29)よりくの字に外反する口縁部は長い。頸部から体部にかけて4条の横線文が巡り、体部内外面とも細かい刷毛目調整されている。胎土は小石を多く含む。色調は茶褐色である。

**甕 (31)** 口径14.1cm・器高19.1cmで口縁部が強く外反し、上方につまみ上げられ端部外方に段をつくりおわる。口縁外部稜線上に櫛歯刺突文を施し、頸部から体部全体に下から上へ粗く刷毛目調整されている。底部は平底である。胎土は小石粒含み粗である。

**高杯 (32)** 脚柱部だけの出土である。八の字状に開く脚柱部に4個の円孔があり、5条の櫛描横線を三帯施す。外面はヘラミガキで仕上げている。胎土は小石粒・金雲母片を多く含み粗である。

**台付椀 (33)** 椀状の杯部に裾の広がる脚部がつくものである。口径14.8cmで口縁部はヨコナデされている。

**器台 (34)** 受皿部口径14.2cm・器高12.8cm。大きく外に開く受皿部と、真直ぐ開きながらゆるく短く屈折する裾部にいたる太い脚台をもつものである。受皿部と脚台との境は弱い稜をなす。受皿部端部は外に面をつくる。脚台下半部に10個の円孔を穿つ。受皿部はヨコナデ、脚台外面はヘラミガキ、内面はナデられている。胎土は砂粒含みや粗である。

## (2)古墳時代前期の土器

### A. 土師器

**壺 (35)** 口径11.2cm・器高約14.8cm。外上方に真直ぐのびる口縁部に、やや扁平な球形の体部がつくものである。口縁端部と頸部に5条の横線文が三帯巡る。体部外面下半部に黒斑がみられる。口縁部と体部外面はヘラミガキされ、体部内面は刷毛目調整痕がわずかに残る。胎土は緻密。色調は淡褐色である。

**高杯 (36~38)** (37)は口径14.8cmで杯底部と口縁部との境が明瞭である。口縁端部は外反し丸くおわる。口縁部はヨコナデ、杯底部・脚部はナデられている。脚柱部に杯部との挿入の際の突起がある。

(38)は口径15.8cm・器高6.0cm。半球形の杯部に八の字状に大きく拡がる中身の脚部がつくものである。脚柱部に3個の円孔を穿つ。杯部から脚部外面に細かいヘラミガキを施している。杯内面と脚内面はナデられている。(36)は脚部だけの出土である。脚高は低く、脚裾部外面はヘラミガキされ、4個の円孔を穿つ。脚裾部から内面にかけてヨコナデされる。胎土が緻密なもの(34・35)と、小石粒含む粗いもの(36)がある。

## (3)古墳時代後期の土器

### A. 須恵器

**杯身 (39)** 口径11.0cm・器高約2.5cm。口縁部はやや内向して真直ぐ立ち上がる。口縁端部は内側に段がつく。底部は平らでヘラケズリの範囲は狭い。

## (4)奈良・平安時代の土器

### A. 土師器

**短頸壺 (40)** 短く外反する口縁部に、肩の張らない体部がつづくものである。口縁端部は外方に面をつくる。口縁部はヨコナデ、体部外面は粗い刷毛目が施されている。胎土は緻密である。

**杯 (41)** 口径約14.2cm。口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部は丸くおわる。口縁部はヨコナデ、他はナデられている。胎土は緻密である。

**皿 (42)** 平らな底部に、外傾する口縁部がつづくものである。ヨコナデが底部近くまでされている。胎土は緻密である。

### B. 灰釉陶器

**長頸瓶 (43)** 口縁上半部を欠損するものである。頸部から体部にかけてあまり肩の張らない体部がつづく。外方に踏んばった梯形の貼り付け高台を有し、底部は糸切り痕がのこる。淡緑灰色の施釉はドブ漬けのため、肩部から体部下半部にかけてたれている。胎土は白灰色で緻密である。

## 〔B地区〕

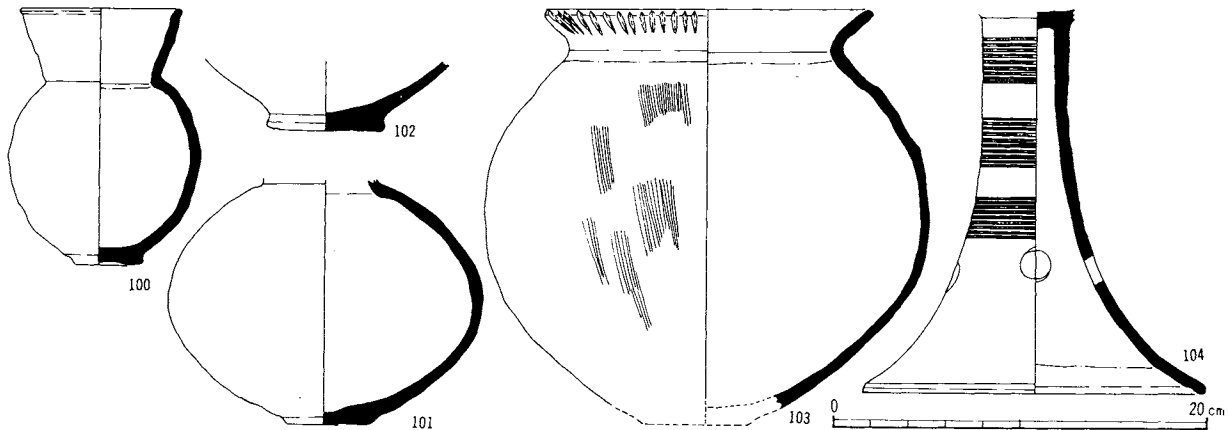
### 1. 弥生時代後期の土器

#### (1)S K 50出土土器

**壺 (100~102)** (100)は口径8.4cm・器高13.6cm。口縁部は僅かに内弯し、口縁端部は上方に面をつくる。頸部は細くくびれ、肩の張らない体部がつづく。口縁部と体部の外面は丁寧なヘラミガキ、口縁部内

面はヨコナデ、体部内面はナデを施している。(101)は体部のみ出土である。体部中央部が強く張り出し、底部は平底である。体部外面はヘラミガキされ、内面はナデられている。体部上半部から下半部にかけて黒斑がみられる。胎土は緻密(100・101)、色調は赤橙色(100)・淡黄褐色(101)である。(102)は広口壺の底部と思われる。

**甕** (103) 口径17.2cm・器高22.1cm。くの字に外反する口縁部に、球形の体部がつづくものである。口縁端部は外方に面をつくる。口縁端部から頸部の外面にヘラ刻み目を施している。口縁部はヨコナデ、



第8-16図 SK50 土器実測図(1:4)

## 2. 古墳時代の土器

### (1) S B 44出土土器

#### A. 土師器

**甕** (44) 口径18.4cmで、口縁部は2度屈曲し、口縁端部は断面三角形となる。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面は粗い刷毛目(引掻目)、体部内面はオサエによる指頭圧痕がのこる。胎土は石英の小粒を含みやや粗である。色調は暗赤褐色。

**高杯** (45・46) (45)は中太りの脚柱部に大きく開く脚裾部がつづくものである。脚柱部外面は縦方向にヘラケズリされ、内面はヨコナデ、脚裾部はナデられている。脚柱部内面には、杯部との挿入の際の突起がのこる。胎土は小石粒を多く含み粗である。色調は淡赤褐色である。(46)は完形品で杯口径20.2cm・器高14.9cmである。杯底部と口縁部との境は強い稜がつき、再び大きく外反し、口縁端部外方に面をつくる。脚部は八の字に開く脚柱部に屈折して広がる脚裾部である。杯口縁部はヨコナデ、杯底部はナデ、脚柱部外面は縦方向のヘラケズリ、内面はユビ

体部内面はナデ、体部外面は細かい刷毛目調整を施しているが、僅かに刷毛目の痕跡をのこすのみである。黒斑が体部上半部にみられる。胎土は小石粒を含み粗である。色調は茶褐色である。

**高杯** (104) 脚部の現高20.4cmと足の長いもので、脚裾部は大きく八の字に開き、杯部は欠損する。脚柱部に櫛状工具による10条の横線文が三段巡り、4個の円孔が穿たれている。三段の横線のうち下段は消えかけている。脚部は外面と裾端部内面をヘラミガキを施し、脚部内面はヨコナデしている。胎土は緻密で、色調は赤褐色である。

オサエののちナデられ、裾部はヨコナデされている。胎土は砂粒を多く含み粗である。色調は淡茶褐色である。

### (2) S B 46出土土器

#### A. 土師器

**甕** (47) 口径約15.8cmのいわゆるS字口縁甕の退化したものである。口縁部はくの字に外反し、外面はヨコナデ、内面は横方向の粗い刷毛目が施されている。頸部はややくびれ、球形の体部がつづくものと思われる。体部外面は粗い刷毛目調整、内面はナデられている。胎土は粗い。色調は淡茶褐色。

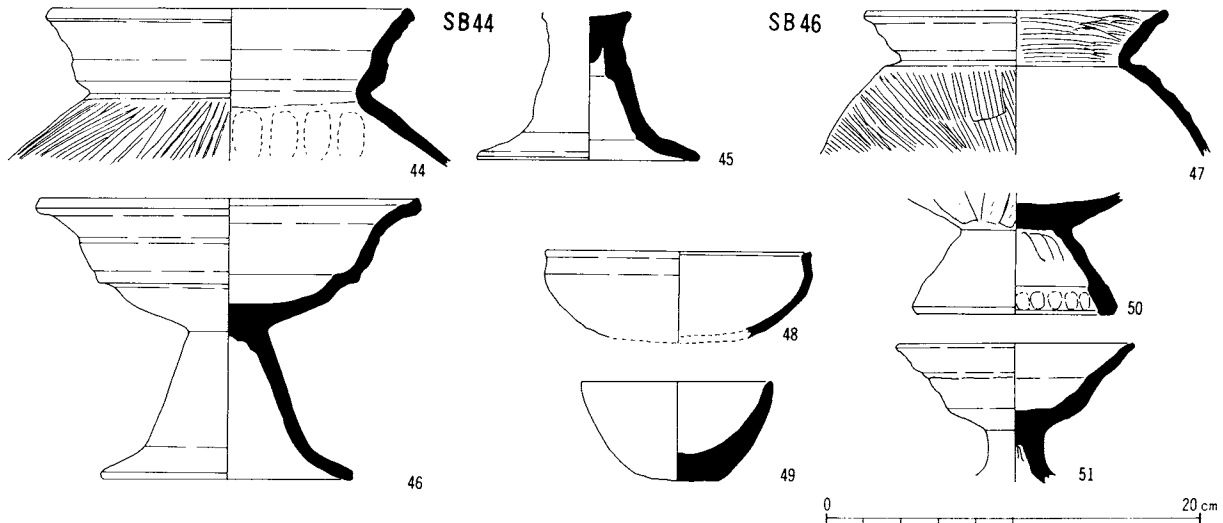
**甕脚部** (50) S字口縁甕の脚部である。大きく八の字に開き端部は内側に折り返される。脚裾部にはオサエによる指頭圧痕がのこる。

**杯** (48) 口径14.2cm・器高4.8cm(推定)。短く立ち上がる口縁部に、球形の体部がつづくもので、口縁端部は内傾して面をつくる。口縁部内外面ともヨコナデされるが、他は剥離が進んでいて不明である。胎土は緻密。色調は赤褐色である。

**高杯 (51)** 口径12.6cmで脚裾部を欠損するものである。杯底部と口縁部との境が屈曲し、2度外反する。口縁端部もわずかに外反し丸くおわる。脚柱部は短い筒状から大きく開く裾部がつづくものと考えられる。脚柱部内面に杯部との接合の際のしぼり痕がのこる。口縁部外面はヘラケズリされるが、

他はナデられている。

**小型鉢 (49)** 口径10.2cm・器高5.3cm。口縁部外面はヘラケズリされ、内面と底部はナデられている。胎土は緻密で金雲母片を含み、色調は淡赤褐色である。



第8-17図 SB44・SB46 土器実測図(1:4)

### (3) S D 58出土土器

#### A・土師器

**広口壺 (52)** 二段に外反し、口縁端部は丸くおわる大型品である。口縁部は内外面ともヨコナデされ、体部内外面はナデられている。胎土に小粒の石英・長石を含んでいる。色調は淡赤褐色である。

**中型壺 (53)** 口径13.5cm・器高23.9cm。体部内外面に粘土紐の継ぎ目が顕著にみられ凹凸が目立つ。口縁部内外面はヨコナデ、体部下半部はヘラケズリされているが、他はナデられている。体部外面に黒斑が付く。胎土は小石粒を含み粗である。色調は淡赤褐色である。

#### 小型壺 (54~61)

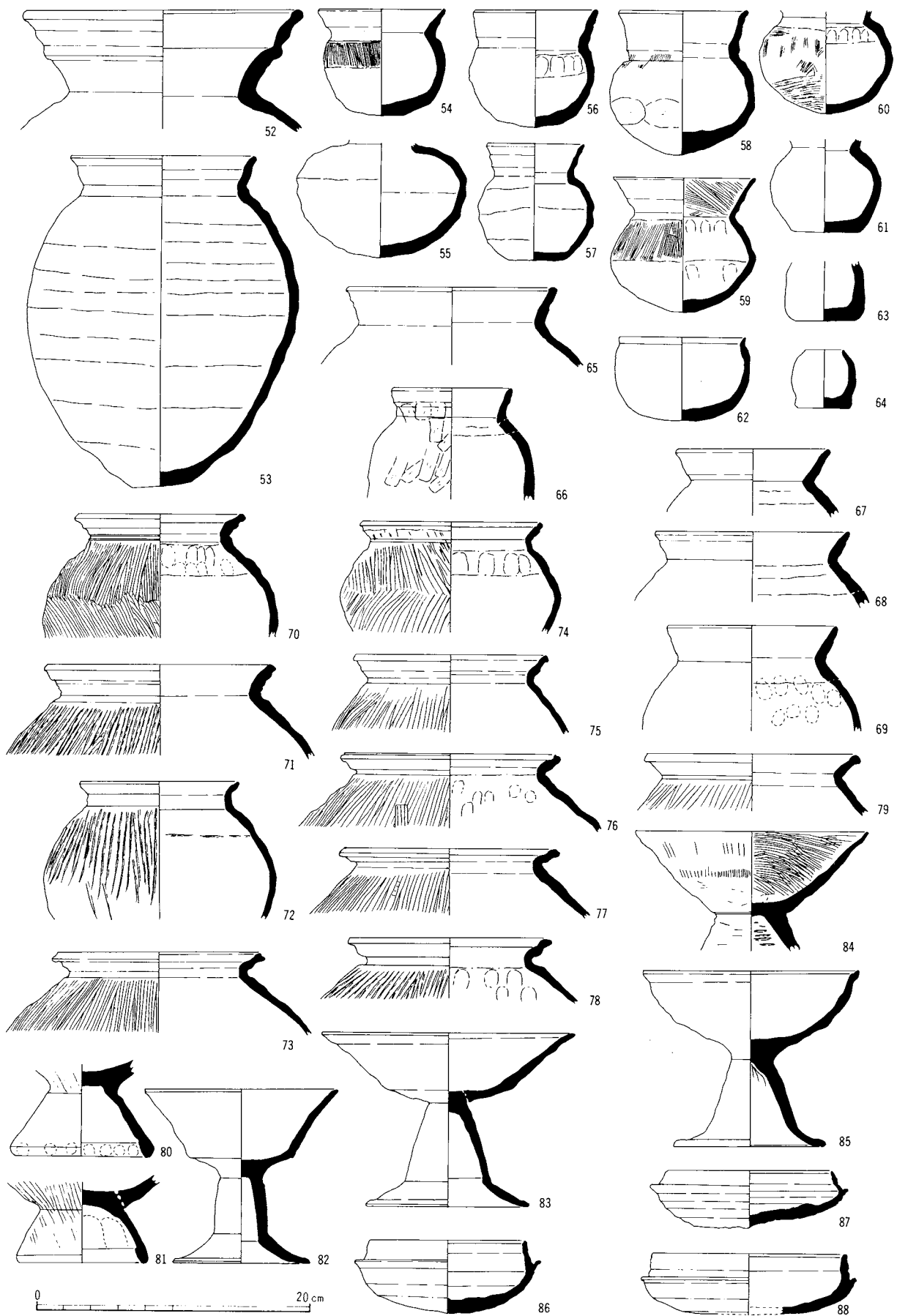
**A (57・61)** く字に外反する口縁部(61は頸部のみ)に球形の体部がつづくもので、底部は平底である。(57)は口径7.0cm・器高8.4cmで口縁部はヨコナデされ、体部はユビオサエのあとの指圧痕がのこる。口縁部から体部にかけて黒斑が付く。(61)の

体部はヘラケズリをしているが体部内面は雑である。胎土は小石・金雲母片を含んでいる。色調は淡褐色である。

**B (54~56・58~60)** 球形あるいはやや扁平な体部にくの字に外反する短い口縁部が付くもので、口縁部径が体部最大径よりもやや小さいものである。(54・56・58)は体部外面上半部に刷毛目調整のあとナデて仕上げ、体部下半部から底部にかけてヘラケズリしている。(59)は口縁部内面と体部上半部に細かい刷毛目調整、体部下半部、内面はオサエののちナデである。(55)は体部下半部から底部にかけてヘラケズリが施されている。(60)は体部外面全体に刷毛目調整され、体部内面はナデられている。底部内面はヘラケズリをしている。胎土は密(54・55・58)・粗(56・59・60)である。

**C (62)** 口径9.2cm・器高約6.0cm。口縁部がヨコナデされ短くとがっておわる。体部と底部内面はナデられ、底部はヘラケズリされている。胎土は緻





第 8-18 图 SD58 土器实测图 (1:4)

密、色調は淡赤褐色である。

#### 甕 (65~79)

**A** (65~69) 口縁部が短く外反するもので、厚手である。肩の張るもの(65・67・68)・あまり肩の張らないもの(66・69)がある。口縁部はヨコナデされ、体部はナデられている。(65~67・69)は体部外面が下から上へヘラケズリが施されている。体部に粘土紐の継ぎ目が目立つもの(66~69)と指頭圧痕が残る(69)ものがある。胎土は緻密で、色調は褐色系である。

**B** (70~79) いわゆるS字状口縁甕と呼ぶ甕である。口縁部が二段に屈曲して外反し、肩の張る体部がつづくものである。口縁部の形態により3つに分けてみた。口縁部が鋭く屈曲して二段に外反するものB<sub>1</sub>(73・76~78)。口縁部の屈曲が弱くなり、やや立ち気味で口縁端部が断面三角形になるものもあるB<sub>2</sub>(70・71・75・79)。口縁部が短く立ち上がりさらに外反するものB<sub>3</sub>(72・74)。甕Bはいずれも口縁部はヨコナデされ、特にB<sub>1</sub>は強くヨコナデされS字風に仕上げられている。体部外面は粗い刷毛目で調整されている。体部内面はヘラケズリのあと丁寧にナデて仕上げるもの(71~73・75・77・79)とオサエのちナデて仕上げるもの(72・74・76・78)がある。胎土は概して粗く、小石粒を多く含んでいる。

**甕脚部** (80・81) 甕Bの脚台部と考えられ、端部は内側に折り返される。外面をヘラケズリするもの(80)と粗く刷毛目調整するもの(81)とがある。(80)は端部外面から内面にかけてオサエられている。(81)にはオサエによる指頭圧痕が端部内外面にのこる。

**高杯** (82~85) (82)は口径14.0cm・器高12.6cm(推定)で深い杯部を有するもので、杯底部と口縁部の境が屈曲して強い稜をなし、逆八の字に開くものである。脚部はわずかに外膨らみをしながら、屈折して広がる脚裾部へつづく。内外面の剝離が進んでおり調整方法不明である。(83)は(82)より杯底部と口縁部との境の屈曲が弱い、口縁部は真直ぐ大きく開き、端部はわずかに外反しておわる。脚部は真直ぐ広がる脚柱部に屈折する脚裾部がつく。(85)は杯底部と口縁部の境がなだらかであり、口縁部は球形をしており、端部は弱く外反し内側に面をつくる。脚柱部と脚裾部の屈折はなだらかである。脚部内面

にしぼりの痕跡がある。口縁部はヨコナデ、他はナデられている。(84)はラッパ状に大きく開く杯部に八の字状に開く脚部がつくものである。口縁部~杯底部の内面は刷毛目調整し、底部にかけて粗くなる。口縁上半部は刷毛目の痕跡がある。また、口縁下半部から脚部にかけてヘラケズリされている。胎土はいずれも緻密である。

**ミニチュア土器** (63・64) 器高4~5cmで手づくねにより作られたものである。胎土は密(63)と粗(64)である。色調は淡赤褐色である。

#### B. 須恵器

**杯身** (86~88) (86)は口径11.4cm・器高5.2cm。立ち上がりはやや内傾し、端部内面に段がつく。受部先端の稜は鋭くない。底部はヘラケズリののち未調整である。(87)は口径11.8cm・器高4.1cm。口縁部の立ち上がりは(86)より内傾し、段はつかない。(88)は口径14.1cm・器高4.4cm。口縁部は真直ぐ立ち上がり厚手である。

### 3. 奈良・平安時代の土器

#### (1) S B 32出土土器

##### A. 土師器

**杯** (90) 口径16.2cm・器高4.1cmの杯で口縁部は端部にかけてうすくなり尖っておわる。口縁部はヨコナデ、内面はナデ、底部外面はヘラケズリである。底部中央部に膨らみがある。胎土は砂粒・長石などを含んでいる。色調は淡赤橙色である。

**皿** (89) 口径22.4cm・器高2.8cmのやや厚手の大きな皿である。口縁部はやや内傾しながら立ち上がり、口縁端部は内側に肥厚する。口縁部ヨコナデ底部内面ナデ、底部外面にヘラケズリを施す。胎土は緻密で、色調は赤褐色である。

##### B. 須恵器

**杯身** (91) 口径12.8cm・器高4.1cmの小型の杯身である。天井部は扁平で、口縁部へと丸味をもつてつながる。口縁部は外傾し、端部は尖っておわる。

**杯身** (92~94) いずれも貼り付け高台を有し、底部はヘラ切り未調整である。(92)は口径15.0cm器高4.1cmで口縁部は丸味を持ちながら立ち上がり端部はさらに外傾しおわる。(94)は口径15.6cm・器高4.9cmで、高台は外へふんばっている。(93)は口径14.2cm・器高3.8cmで口縁部は丸味をもち真直ぐ立ち上

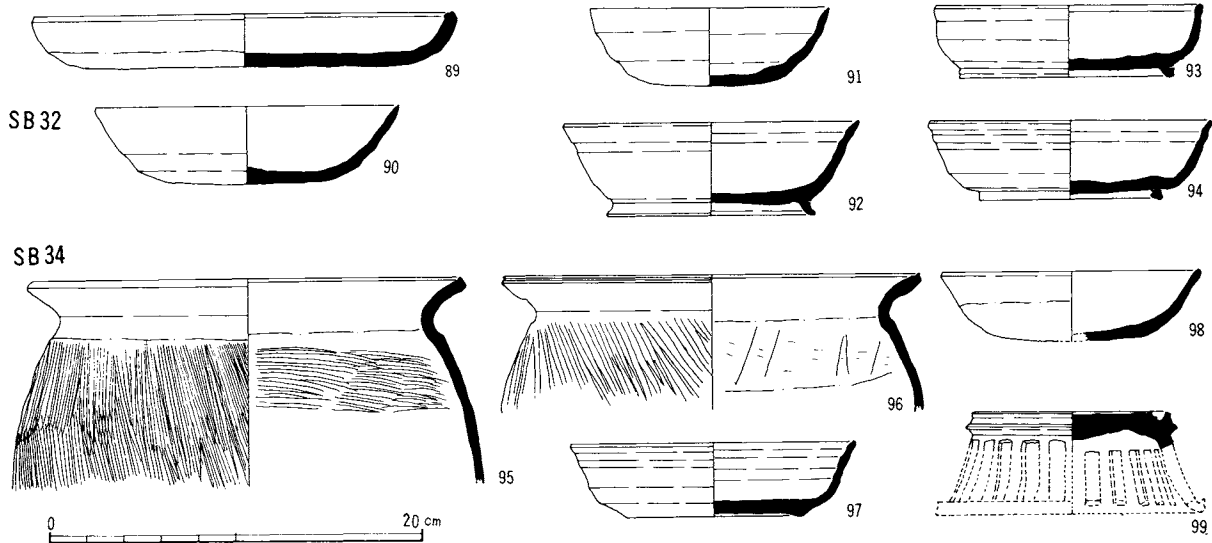
がり、端部は外方に肥厚して丸くおわる。

## (2) S B 34出土土器

### A. 土師器

**甕** (95・96) いずれも口径22cm前後で、口縁部は鋭く屈曲し、端部は外方に面をつくる。(95)は口縁部がヨコナデ、体部外面は細かい刷毛目調整、体部内面のうち上半部は横方向の細かい刷毛目調整が施されている。(96)は体部外面に粗い刷毛目調整を施す。体部内面はヘラケズリされている。

**杯** (98) 口径13.6cm・器高3.8cm(推定)。口縁部はヨコナデ、体部下半部から底部に指頭圧痕がある。



第8-19図 SB32、SB34 土器実測図(1:4)

## 4. 木製品

### (1) S E 42出土木製品

井戸枠については4段分残存していたが最上段は腐蝕が激しいため実測図は載せなかった。以下、三段目から最下段の順に各段の井戸枠4枚を1セットとしてまとめて説明していきたい。

#### 1. 井戸枠

**側板** (105~108) 第三段の4枚である。各法量をみると全長約150cm・最大幅30~34cm・最大厚7~7.6cmと揃っており、長方形の長辺の両端近くに他の井戸枠と組み合わせるための切り込みを2箇所施している。なお、各切り込みは4枚ともほぼ同じ箇所に行われている。断面は長方形である。全体に腐蝕がすすんでおり、特に、切り込み部分や両端が著しい。技法について見ると、手斧によると思われる加工痕や傷跡が見られるが、前述した通り腐蝕のため不明である。なお、部材の切断には鋭利な道具の

### B. 須恵器

**杯身** (97) 口径15.2cm・器高3.9cm(推定)。口縁部はやや外方に開き気味である。底部は糸切り痕が明瞭に残る。胎土は緻密、色調は明灰色である。

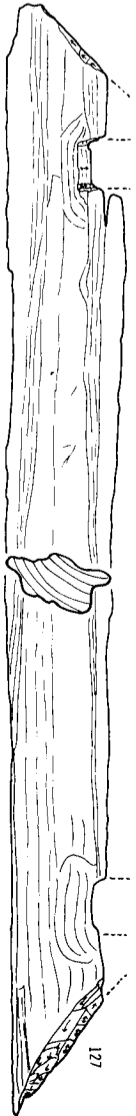
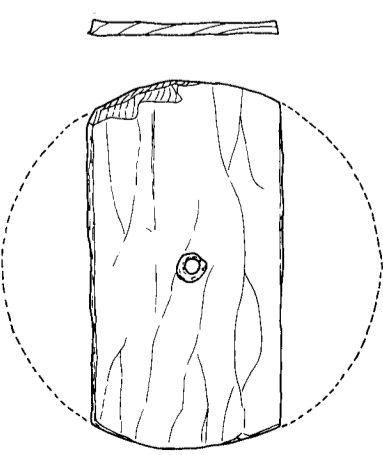
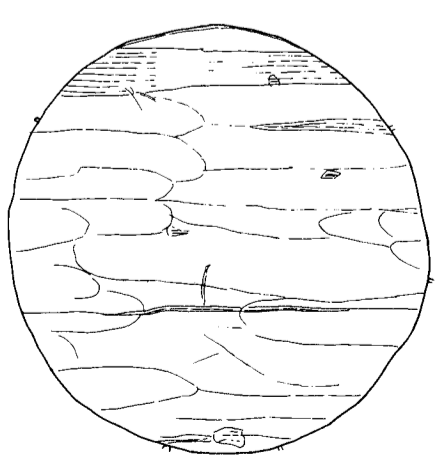
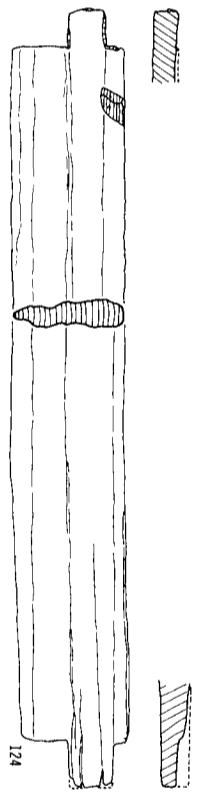
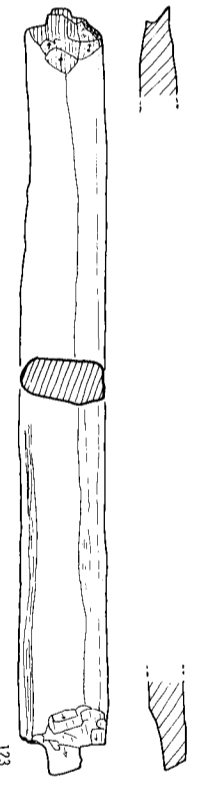
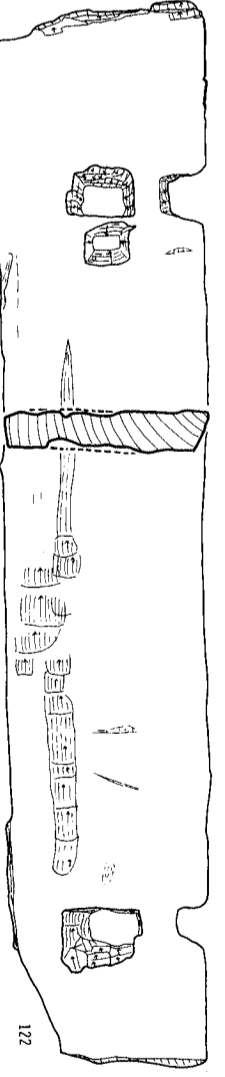
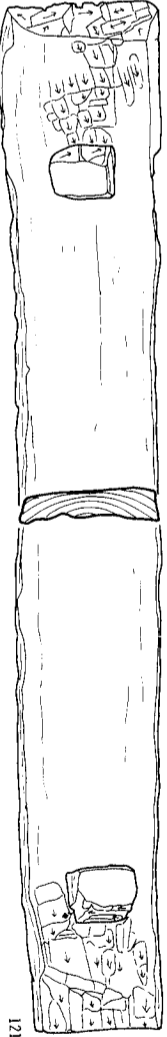
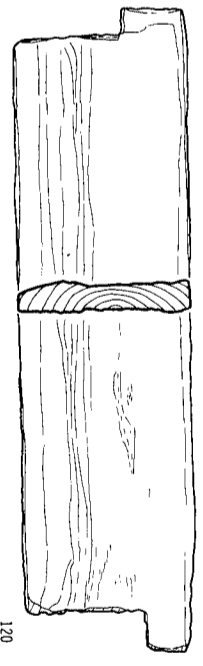
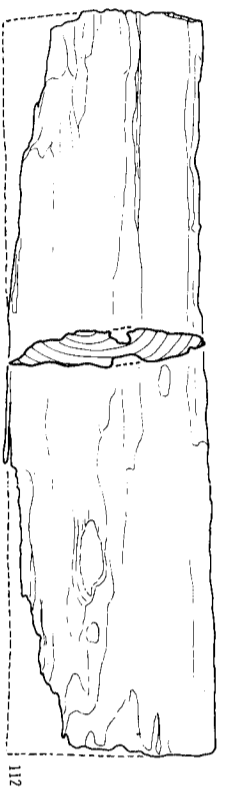
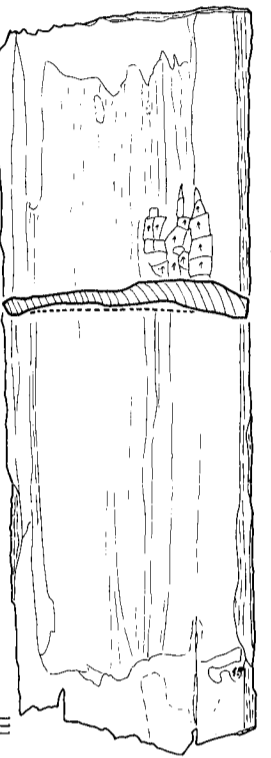
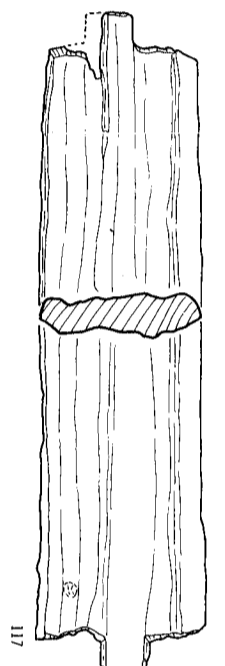
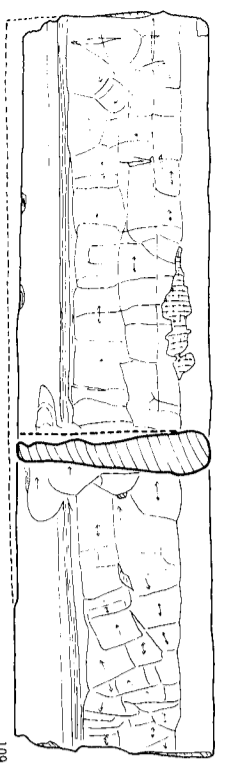
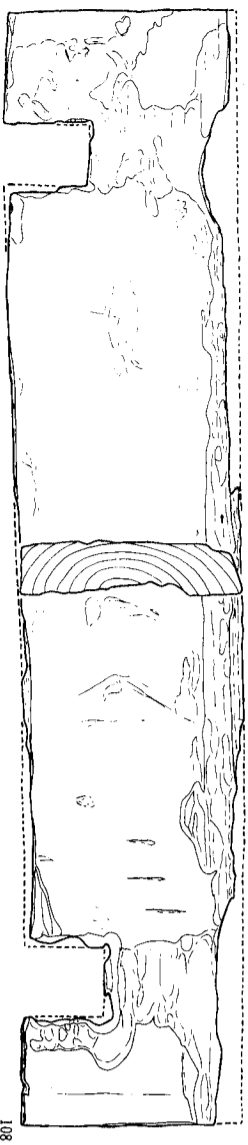
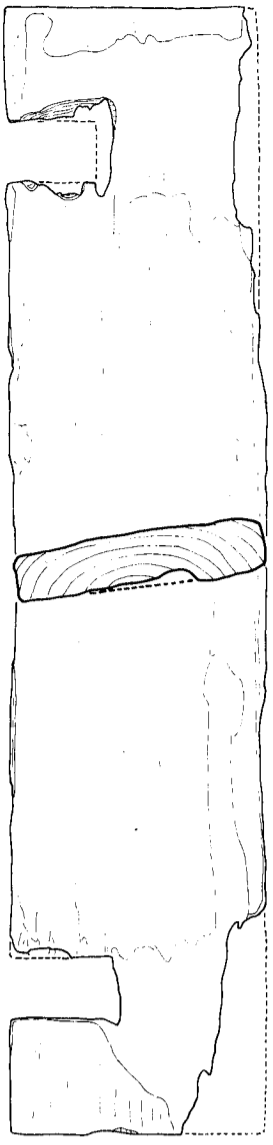
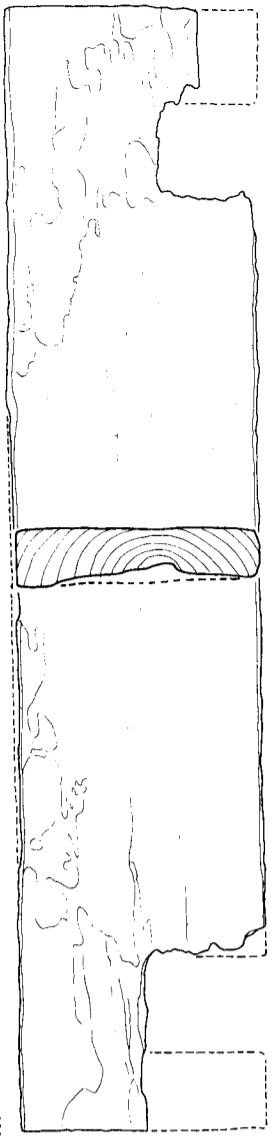
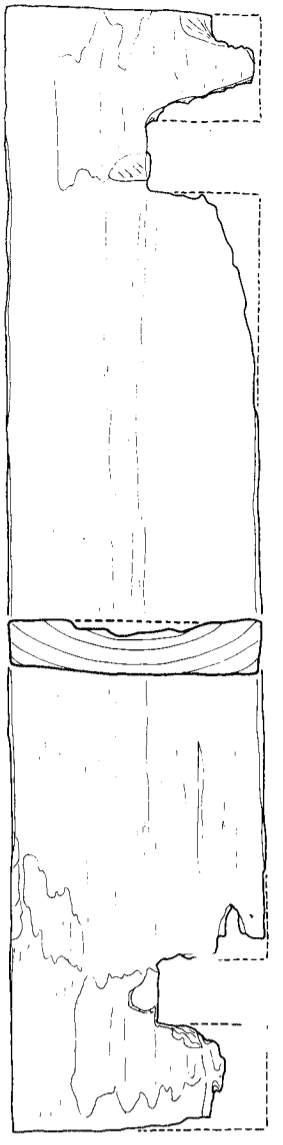
### C. 陶硯

**円面硯** (99) 径は10.2cmであり、低い外堤をめぐらし、脚部の透しは長方形であろう。外堤外面には一条の突帯がある。陸の周囲にわずかだが内堤をもつ。陸部中央部は使用による凹みがみられる。胎土は緻密で、色調は暗灰黒色である。

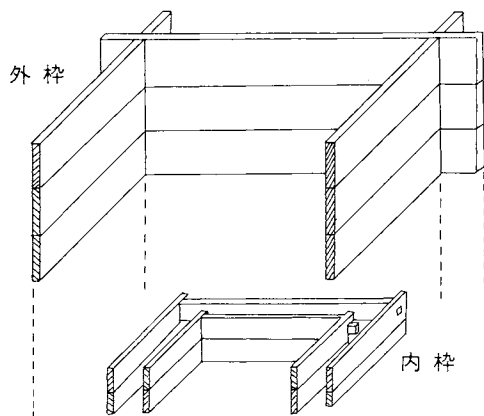
使用を窺わせる。

**側板** (109~112) 第三段の添板として使用されたものである。全長99~106cm・最大幅22~34cm・最大厚4.7cm~5.8cmで、平面・断面とも長方形を呈する。全体に腐蝕がすすんでおり、特に、両端の四隅の遺存度はよくない。このため、技法を詳細に検討すると不明の点が多いが、木表や側面に手斧による加工痕がみられる。特に、(109)には木表のほぼ中央に幅10cmにわたって手斧による加工痕がみられ、これらの加工には少なくとも3種類の手斧が使用か。

**側板** (113~116) 第二段で内枠の内側の4枚である。全長83~87cm・最大幅16~20cm・最大厚4.4~5.0cmで、両端上部に角柄を残すもの(南北の部材113・114)、両端中央に角柄を残すもの(東西の部材115・116)がある。断面は腐蝕のためいびつであるが、長方形であろう。(113)の部材は、柄のついている方は真直ぐであるが、反対側は約5cmほど短く内弯気



第8-20图 SE42出土木製品 (105~127は1:10, 128・129は1:4)



第8-21図 SE42井戸枠組上げ法

味である。(115)は中央付近が両側から内弯し細くなっている。柄の部分の遺存度はよい。(116)の柄は両方の幅が大きく異なる。腐蝕の進み具合をみると、(115・116)の裏面や側面が著しく進んでいる。

**側板** (117~120) 最下段で内枠の内側4枚である。全長85~89cm・最大幅21~24cm・最大厚4~6cmで、両端中央に角柄を残す長方形板(南北の部材・112・113)と両端上部に角柄を残すもの(東西の部材・114・115)がある。断面は長方形である。(120)は木材がひずんでいたためか、ねじれたような形になっている。(119)は柄や側面の一部にもとの面が残る。(118・120)の柄の部分に手斧による削りの痕跡がよく残っている。表面や側面の調整については、遺存度がよくないことから不明である。

**側板** (121~124) 第三段で内枠外側の4枚で添板として使用されたと考える。法量をみると、南北の部材は全長約140cm・最大幅21.5cmと29.2cm・最大厚5.0と6.7cm、東西の部材は全長102.8cmと104.8cm・最大幅12cmと15.5cm・最大厚6.1cmと4.2cmであり方向により規格性があると思われる。南北の部材には、長方形板に方形の柄穴を2個入れる。(122)には、2個の柄穴以外に2箇所(1箇所は明確に痕跡あり)の切り込みと柄穴を穿つようとして途中で止めた箇所が2箇所みられる(1箇所は明確に痕跡あり)。また、長方形板の一角を斜めに切断している。東西の部材は両端に角柄をのこす。(123)の角柄は、1cm程を残して折れている。(124)の角柄は、中央より上につくられている。

技法をみると、手斧による加工痕がよく残っている。(121)は表面を両端とも端部から柄穴までの部分を手斧により調整している。また、斜めに削り落

した部分の加工順序をみると、縦方向→横方向の順に削っている。柄穴は両側から削り取っているが、幅の異なる工具を使用したと考えられる。(122)は加工痕の遺存度がよく、(121)と同様の加工法であろう。部材の切断については、(122)の断面がよく観察できるが、三方が鋭利な工具で切断され、そのうち上面には手斧による削り加工がみられる。削りは6種の幅(最小1.5cm・最大6.7cm)が確認された。(124)の側面はすべて手斧による調整がなされているが、他の側面は不明である。

**側板** (125) 前出の(121)の裏に添板として利用されたもので、他の三方にはなかった。全長88.1cm・最大幅6.5cm・最大厚2.3cmで、断面が台形を呈するもので、平たい棒状である。一部に焦げた黒色部分がある。調整技法は不明である。

**側板** (126・127) いずれも最下段内枠の外側にあったもので(125)と同様に添板として利用されたと考えられるが、東西の井戸枠にはなかった。(126)は全長78.0cm・最大幅6.5cm・最大厚3.5cmである。棒状で細い先の方はやや丸くなっている。断面はいびつな五角形を呈する。面取りした部分も一部みられるが、中心部分から先端にかけて鋭利な刃物で切り込んだあとがのこる。(127)は全長148.3cm・最大幅16.0cm・最大厚7.2cmで、長方形板の2角を斜めに切断し、現状は平面が台形を呈している。現状をみると、方形の切り込みが同一長辺に2箇所つくられている。長辺は腐蝕が進んでいる。斜めの切断部や方形の切り込み部には、手斧の加工痕がのこる。

## 2. その他

**曲物底板** (128・129) (128) 長径22.6cm・短径22.2cm・最大厚0.8cm。ほぼ円形で、やや反っている。厚さもほぼ一定している。木裏は裏面の中心約10cmを除いて全体に黒色(ウルシ?)を呈している。木表と側面に加工の痕跡がみられる。木表は木目(柾目)に沿った削りあとが認められる。側面にはクギ穴と思われる穴が5箇所確認された。(129)は長径19.7cm・幅10.0cm・最大厚0.8cm。もとは円形であったと考えられるが、現在は両端が5cm欠落し、短辺円弧の長方形を呈する。中央に両側よりくりぬかれた穿孔があり、内面は炭化している。裏面は黒色(ウルシ?)を塗布。曲物の底板であろう。

## 4. 結 語

浄土寺南遺跡は、安濃川右岸の標高13m前後の河岸段丘上に位置する弥生時代後期から平安時代にかけて断続的に営まれた集落跡である。検出された遺構は、竪穴住居28棟・掘立柱建物15棟のほか、土壇・溝・井戸などがあり、各時代にわたって良好な資料を提供してくれた。ここでは今回の調査結果の要点をまとめて小結としたい。

### 1. 集落について

今回検出した遺構の中で一番古いものは、B地区の土壇1基（S K50）・溝（S D59）である。このうち、S K50は一括して多種の土器が出土しておりこれらの土器は弥生時代後期前半に比定される。県下では四日市々西ヶ広遺跡<sup>①</sup>や安濃町多倉田遺跡<sup>②</sup>（S D14）などがある。この時期の遺構として住居跡が検出されていないことから、集落について言及することはできないが、A地区の包含層からも弥生時代後期の土器が数多く出土していることからみて、弥生時代前期の納所遺跡<sup>③</sup>を拠点の集落として徐々に集落が安濃川左岸（特に美濃屋川流域）や半田丘陵に分散増加していくなかで、当遺跡の位置する安濃川右岸中流域にも後期集落が営まれていた可能性が推定される。住居群を予想すると、遺構や遺物の出土状況（B地区の北半分には弥生土器の出土がほとんどない）などからみて、発掘区A地区の北側とB地区の南側の2つの地域が考えられる。

古墳時代の遺構として竪穴住居2棟・溝5条が検出された。2棟とも前期に属するものと考えられる。いずれも方形で、1辺3～4mと小型である。支柱穴をもたない住居と考えたい。溝についてみると、5条のうちS D12は大型の溝であり、規模のわりに埋土中の土器が少ないことからみて、長期間管理された（例えば、取水用・防禦用）可能性が考えられる。これに対して、S D58は埋土中、特に中層から下層にかけて古墳時代（前期が中心）の土器が数多く出土し、そのうちほとんどが破損していることからみて投棄が何回も繰り返されて埋没したもので、SD12とは対称的である。竪穴住居と溝はほぼ同時期に存

在していることからみて、当遺跡の古墳時代の集落の1つがB地区の南に広がりが考えられる。

奈良時代に入ると再び住居が営まれている。竪穴住居16棟・竪穴状遺構1が検出された。当遺跡の竪穴住居の形状は大部分が方形で、長方形が若干ある。規模についてみると、1辺3～4m前後のものが大部分をしめており、小規模なものが多い。竪穴の掘形も浅く、支柱穴・周溝はみられない。焼土についてみるとS B16の東壁中央とS B26に見られる程度である。以上のことからみて、奈良時代の当遺跡は、A地区からB地区北端にかけての地域に集落が存在したものと考えられる。

奈良時代末期から平安時代に入ると、当遺跡に竪穴住居10棟、掘立柱建物15棟・井戸2基が出現する。

竪穴住居は、形状に方形と長方形がある。規模は1辺2～3mと小規模なものが大部分で、奈良時代の竪穴住居よりも、さらに小規模化していくようである。この点については、飛鳥・奈良時代以降から竪穴住居が全般的に小型化することを伊勢湾西岸地域の傾向として掘立柱建物との関連性をとらえている<sup>④</sup>。この点は、当遺跡でも該当すると考える。掘立柱建物は15棟確認したが、桁行方向に一定の企画性がみられたり、大きな掘形を持つものがある。方位を中心に2つのグループに分類されると考える。S B55を中心とするグループ（S B15・33・47・49・55）と（S B2・3・40・48・54）であるが、2つのグループの時期差については支柱穴内からの遺物が少なく、区別することは出来ない。しかし、いずれの掘立柱建物も井戸（S E42）の付近には検出されておらず、この空間の存在が集落構成上を持つ意味は重要であるが、具体的に検討する資料が乏しく、後考を俟つこととしたい。また、S B55（大きな掘形をもつ）・廂をもつS B49・総柱のS B3などの在り方は、緑釉陶器や陶硯やS E42（詳細については後述する）とともに、一般集落とは性格を異にすることが考えられる。この時代の集落は、発掘区A地区西側やB地区南東側に続くものとする。

当遺跡は弥生時代後期から50年から100年の間隔を保ちながら平安時代まで営まれてきたが、この集落を最後に、土師器鍋・皿・山茶碗などの出土がほとんどないことから、集落は営まれなくなったと考える。

## 2. 井戸 (S E 42) について

井戸は、現在でこそ人々の生活とはかかわりがなくなり、井戸の存在を忘れがちであるが、過去においては、我々の生活の中で飲食・調理・水浴・信仰とさまざまな大きな役割をはたしてきている。

県下の発掘例をみても、住居の近くには井戸の検出例が数多くある。今回、当遺跡で検出されたS E 42についても、掘立柱建物群とのかかわりの中で、そのもつ意味は大きいと考える。

以下、その特徴についてまとめてゆきたい。

### (1)規格性

井戸枠に用いられた側板の法量をみると、ある程度規格化されたものが使用されていたようである。外枠は、長150cm・幅30cm・厚7.5cm前後、内枠は外枠の半分よりやや大きく加工されているところから、言えるのではないだろうか。

### (2)組み手

外枠は、横板に切り込みを施すという方法を用いており、木組みに多い杢結合をしているのは内枠外側にしか用いていない。

### (3)組立て

井戸枠は、内枠と外枠を設けており、各段の井戸枠には、添板が付属するものである。木組み井戸の場合、掘形内で下段から順々に組上げていく方法をとるものである。それには、土砂の崩壊という条件を考慮しながら、製作を進行していかなくてはならないはずである。その中で、添板の存在は土砂の崩壊から井戸枠を守るために設けられた可能性が考えられる。

次に、県下の井戸の発掘例を見ることにする。

奈良・平安時代の木組み井戸の検出例として、上野市下郡遺跡<sup>⑤</sup>・同北掘池遺跡<sup>⑥</sup>・多気郡明和町発シB遺跡<sup>⑦</sup>・松阪市南山遺跡<sup>⑧</sup>・度会郡御蘭村高向C遺跡<sup>⑨</sup>・伊勢市大敷遺跡<sup>⑩</sup>がある。当遺跡のS E 42と比較すると、発シB遺跡S E 33がよく似た形態をもつ。当遺跡と同じく横板に切り込みを施すという方法を採用

しており、発シB遺跡は二段目の横板の上下面に切り込みを施す点と縦板を井戸枠の周りに立てている点が異なる。

次に、前出の遺跡の性格をみると、発シB遺跡は土器焼成壇が検出され、齋宮等への土師器貢納のための土師器製作集団が居住していたと推定され、工房や生活用水として利用された。高向C遺跡は、旧度会郡高向郷における官衙的性格を持つ集落と考えられており、下郡遺跡も郡衙とは断定していないが出土遺物などから一般的集落とは異なると考えられている。

高向C遺跡では緑釉陶器、石帯・帯金具、墨書土器(同一の墨書銘を記す土師器・灰釉陶器)、下郡遺跡では木簡(延暦銘を記す)・緑釉陶器、北掘池遺跡では陶硯が出土している。当遺跡では、S E 42の南北に位置する掘立柱建物群や遺物(緑釉陶器・陶硯)が注目される。また、S E 42の付近の空間の存在も注目される。

以上、県内の奈良・平安時代の木組み井戸と集落について述べてきたが、奈良の都ではどうであろうか。

黒崎直氏に依ると、平城京で検出される井戸のうち井籠組の井戸が最も特徴的にみられるとしており、その存在に特殊な性格をおびている。そして、井籠組の井戸の存在が宮内にあっては役所の格式に、京内にあっては居住者の官位により左右されるのではないかと予測されるとしている。そして、井戸枠の大小により官衙の職務と直接かかわりをもたない井戸の場合、地区なり、官衙なりの性格の差に関連があると予測している。平城京の調査例から推定された井戸枠の規模に相当する官位を参考にすれば、当遺跡のS E 42は司クラスに相当する。

最後に、奈良時代末期から平安時代の当遺跡の性格を考える場合、S E 42や掘立柱建物群・出土遺物などを勘案していくと、一般的集落というより、官衙的性格を持つ可能性が推定される。当遺跡は15万㎡という広大な面積のうち5000㎡しか発掘されていないが、安濃町の歴史を解明する一つの手掛りが得られた。

最後になったが、S E 42の木製品の実測については、三重大学教育学部歴史学研究会原始古代史部会の学生諸君の協力を得た。(中村信裕)

〔註〕

- ① 谷本鋭次「西ヶ広遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』  
日本道路公団名古屋支社・三重県教育委員会 1970
- ② 早川裕己『多倉田遺跡発掘調査報告』 三重県教育委員会  
1981
- ③ 伊藤久嗣『納所遺跡一遺構と遺物一』 三重県教育委員会  
1980
- ④ 伊藤久嗣『安芸郡安濃町・北浦遺跡』 昭和53年度県営圃  
場整備事業地域埋蔵文化財調査報告3 三重県教育委員会 1978
- ⑤ 中森英夫・山田猛・山本雅晴『下郡遺跡発掘調査報告』  
上野市教育委員会・上野市下郡遺跡調査会 1978
- ⑥ 『北堀池遺跡発掘調査報告概要Ⅲ』 三重県教育委員会 1980
- ⑦ 「発シB遺跡説明会資料」と明和町教育委員会社会教育課主  
事中西敦夫氏の御教示による。
- ⑧ 下村登良男『南山遺跡発掘調査概要』 松阪市教育委員会  
1980
- ⑨ 伊藤久嗣「高向C遺跡」『南勢バイパス埋蔵文化財調査報  
告』 建設省中部地方建設局・三重県教育委員会 1973
- ⑩ 吉水康夫「大藪遺跡」『南勢バイパス埋蔵文化財調査報告』  
建設省中部地方建設局・三重県教育委員会 1973
- ⑪ 黒崎直「平城京の井戸」『月刊文化財』151号 1976



## IX 一志郡嬉野町 天花寺廢寺

一志郡嬉野町<sup>てんげいじ</sup>天花寺<sup>てんげいじ</sup>字堀田所在の天花寺廢寺は、いわゆる白鳳様式の屋瓦と「菱形埴仏」が出土した寺院として、よく知られてきた。しかし、現地は水田で基壇跡は見られず、ただ瓦の散布からその所在が推測されるにとどまっていた。

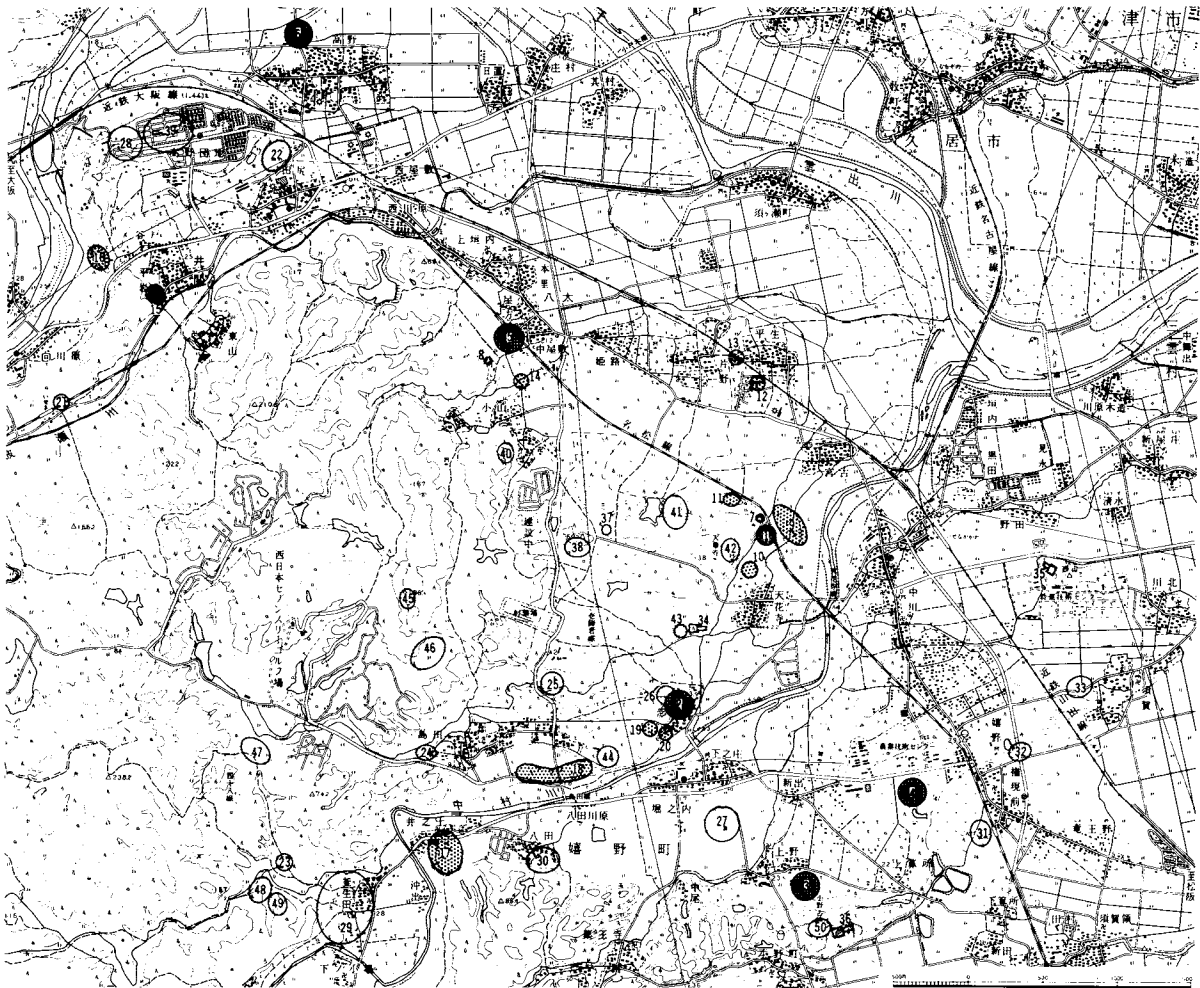
調査は、昭和55年度に実施が予定された県営圃場整備事業に先立って、昭和54年度に第一次、昭和55年度に第二次として実施したものである。

調査を着手するにあたっては、まず地籍図による水田地割の検討と、これまでの水田の床抜き作業等によって瓦片の多量に出土した地点、あるいは礎石等の掘り出された場所等の聞き取りを地元天花寺地区においておこなった。その結果、319番地にあたる通称「薬師の田」には戦前も大正期において、当

時の子ども達が登り降りできる大型の石が露出し、それもいつの頃か抜き取られ、どこかへ持ち運ばれたことも確認することができた。

また、嘉永4年(1851)に編さんされた『勢国見聞集』には、「古跡之部」の一項に、「塔ノ心柱ノ沓石・伽藍ノ柱ノ沓石数十。天花寺村諸堂並塔の跡其儘石居へ有之。此所を本薬師と云」と記されている。このように少なくとも江戸期には礎石と塔心礎の露出していたことがわかる。

したがってこのような「薬師の田」を塔跡に比定することができるのであるが、瓦散布地全域の遺構・遺物の埋没状況を把握し、つぎに実施される圃場整備事業との整合をはかるための資料作成も必要であった。そのため第一次調査では、東西に20m 間隔



第9-1図 遺跡位置図 1:50000 (国土地理院1:25000 大仰) 格子目は古代寺院、網目は飛鳥・奈良時代の集落跡

をとり、幅4mから2mのトレンチを南北方向に設定して調査した。また、瓦散布地の南側において一段低くなった水田部分については、20m毎に幅2m長さ4mの試掘坑を設定して、遺構・遺物の埋没状況を明らかにした。

東西に20m間隔をとって設定したトレンチの中央のものからは、基壇の掘り込み地形が検出されたため、その部分については発掘区を拡張して基壇規模を明らかにした。またトレンチの北端部では掘立柱建物跡の一部が検出されたので、この部分についても発掘区を拡張して全体の形状を明らかにした。

第二次調査は、第一次調査の補足と、県営圃場整備事業における水路予定地の発掘を主目的とした。すなわち、塔と金堂の掘り込み地形の断面観察のために、東西に連なる1本と、それぞれの掘り込み地形に南北の試掘溝を3本、延80m程設けた。また、

SE5の裁ち割りも併せて実施した。

一方、水路予定地は、国鉄名松線の西と丘陵の東麓であり、寺域に関する何らかの遺構が想定される地域であった。この内、幅3m、長さ約90mについて発掘調査を実施し、そのほかは工事立ち合いとした。

第一次調査の結果については、既にその概要を報告した<sup>①</sup>。当報告は、第一次と第二次の調査結果をまとめて報告するものである。

二次に及ぶ調査実施にあたっては、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部森郁夫氏をはじめ、同飛鳥藤原宮跡発掘調査部岡本東三、西口寿生、土野邦一の各氏から御指導を受けることができた。それぞれ記して謝意を表すものである。

なお、当該地の磁北は真北に対して6°10′東に振れるが、当報告では真北を用いた。

## 1. 位置と歴史的環境

天花寺廃寺は、近鉄中川駅の西方1km余の天花寺台地と国鉄名松線に挟まれた、標高11m前後の沖積地に立地する。遺跡の東方約400mには中村川が北流し、近くで雲出川に合流している。また、西接する天花寺台地の東麓にも中村川と並行する小川が北流している。遺跡の立地する沖積地は、砂質土で覆われており、これらの河川の堆積作用によって形成された地形と考えられる。この内、主要堂塔の立地する地点はわずかに高く、周辺部には小川による後世の攪乱が見られる。

次に周辺の歴史的環境を概観してみよう。

先土器時代には、一志町下の下名倉遺跡(21)や高岡遺跡(6)からナイフ形石器の出土が知られている。また、下名倉遺跡(21)や田尻上野遺跡(22)からは、尖頭器をはじめ搔器や石鏃も出土しているが、土器は伴出していない。

縄文時代の遺跡は、天花寺廃寺西方の丘陵中もしくは河川沿いに点在する。押型文土器を出土した鹿伏遺跡(23)や、晩期の蛇亀橋遺跡(25)等各時代に及ぶ遺跡が認められる。

弥生時代の遺跡は、雲出川や中村川沿の沖積地に

中心に分布する。位置図より東にはずれるが、中ノ庄遺跡は雲出川下流の沖積地に立地し、伊勢湾岸でも最も早くから営まれた弥生集落のひとつとして名高い。また、鳥居本遺跡(14)も前期からの遺跡であり、中期の方形回溝墓も調査されている。

古墳時代には、3期の前方後方墳をはじめとして、多くの古墳が分布する。

筒野古墳(34)は、「老師君塚」とも伝えられる前方後方墳であり、全長39.5mを測る。内部主体は粘土槨であり、天王日月獣文帯三神三獣鏡、波文帯三神三獣鏡、石釧、切子玉、管玉等が出土している。これより東方の西山古墳(35)も、全長43.6mの前方後方墳である。さらに、両墳の南方にも国史跡である向山古墳(36)が存在する。やはり前方後方墳で、全長は71.4mを測る。内部全体は粘土槨であり、小型仿製鏡3面(重圈文鏡、内行花文鏡、変形獣帯鏡)や車輪石、石釧、筒形石製品が出土している。3基共正式な調査は行なわれておらず、未知の部分も多い。共に前Ⅱ期に属しようが、出土遺物からみれば向山古墳が若干新しいと考える。これら3基の前方後方墳は一辺が約2.5kmの正三角形に近い位置関係

遺跡番号	遺跡名	時代・その他	遺跡番号	遺跡名	時代・その他
1	天花寺廃寺	白鳳以降	26	薬師寺西遺跡	縄文
2	一志廃寺	〃	27	下之庄遺跡	縄文・弥生
3	上野廃寺	〃	28	上野遺跡	弥生(前・中)
4	嬉野廃寺	〃	29	釜生田遺跡	弥生
5	八田廃寺	〃	30	八田遺跡	〃
6	高岡廃寺・高岡遺跡	〃・先土器(ナイフ)	31	山神田遺跡	〃
7	天花寺古窯跡	〃	32	高くね遺跡	〃
8	中野山古窯跡	〃	33	松葉遺跡	〃
9	堀田遺跡	〃	34	筒野古墳	前期(前方後方墳)
10	北瀬古遺跡	〃	35	西山古墳	〃
11	小谷遺跡	古墳以降	36	向山古墳	〃
12	平生遺跡	飛鳥以降	37	高取塚	前期(粘土槨)
13	西浦遺跡	古墳以降	38	天花寺北古墳群	前期の方墳?も含む
14	鳥居本遺跡	弥生(前～後)・飛鳥	39	上野山古墳群	後期(円墳)
15	平岩遺跡	飛鳥・奈良	40	小山古墳群	〃
16	高岡遺跡	〃	41	赤坂古墳群	〃
17	閉垣戸遺跡	古墳以降	42	小谷古墳群	〃
18	上野垣内遺跡	奈良・平安	43	筒野古墳群	〃
19	コオノ遺跡	弥生以降	44	天保古墳群	〃
20	郡一遺跡	〃	45	北山口古墳群	〃
21	下名倉遺跡	先土器(ナイフ・ポイント)	46	小山口古墳群	〃
22	田尻上野遺跡	先土器(ポイント)	47	釜生田古墳群	〃
23	鹿伏遺跡	縄文(早)	48	上尾土古墳群	〃
24	島田遺跡	縄文以降	49	杉谷古墳群	〃
25	蛇亀橋遺跡	縄文(早・中・晩)	50	原田山古墳群	〃

第9-1表 遺跡地名表



第9-2図 遺跡地形図(1:5000)

にある。共に4世紀後半に築造されたものと推定されており、ほぼ同時期の築造である事を前提とすれば、各々の前方後方墳の直接的な存立の基盤は、直径2.5km程であったとも考えられる。これらに後続する前方後方墳や前方後円墳は未確認であるが、向山古墳のすぐ下の原田山古墳群(50)には径40mの円墳が所在する。また、高取塚(37)は粘土槨であり、鏡や車輪石、鍬形石、玉等が出土したという。さらに、一志町上野所在の円墳からは、舶載内行花文鏡や鍬形石が出土したと伝えられる。一方、天花寺北古墳群(38)のように、後期古墳群と考えられていたものの中にも、前Ⅱ期の小型方墳(?)も存在する事も明らかになっている。このような前期の小型方墳は、津市坂本山古墳群等と同様に、方形周溝墓の伝統と在地性を色濃く残したものであろう。

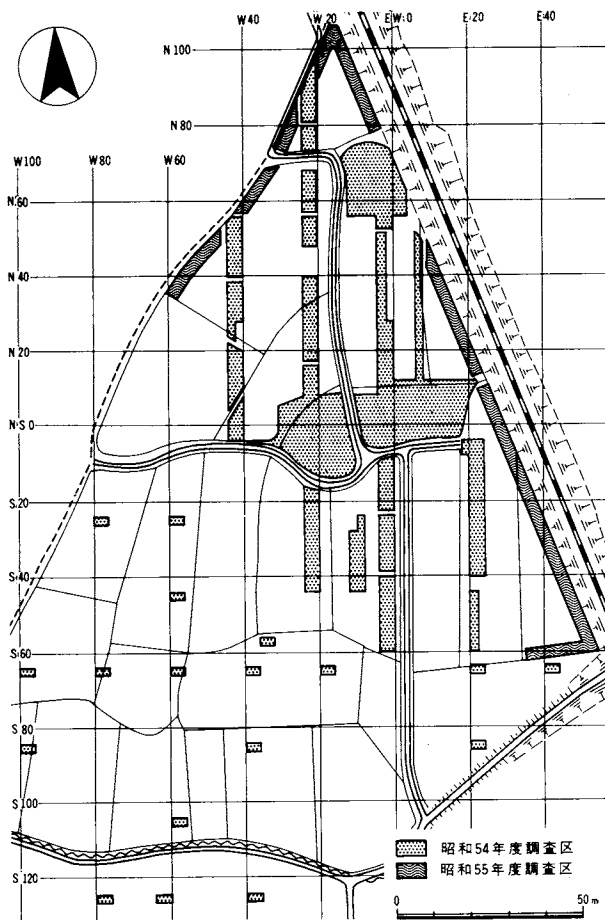
後期の古墳も、特に有力なものは見られない。しかし、群集墳は、天花寺廃寺の西方に広がる丘陵の南北の縁辺部を中心に多く見られる。当地域の群集墳も、伊勢地方のそれと同様に、ほぼ7世紀前半

で造営されている。これは、伊賀地方の群集墳がほぼ7世紀初頭で造営が終息し、追葬も7世紀前半までの例が多い事実に近似する現象である。

飛鳥・奈良時代には、なによりも寺院の多い点が注目される。旧一志郡下には、天花寺廃寺(1)の南南西1.3kmには一志廃寺(2)が存在する。現在も円形柱座を造り出した礎石が残る。出土遺物には、博仏のほか、川原寺式や天花寺のM12やM22に相当する軒丸瓦等がある。南2.3kmには、上野廃寺(3)が知られている。ここでは、いわゆる白鳳様式の軒丸瓦をはじめ、天花寺のM13に相当する軒丸瓦や、伊勢国分寺瓦窯と推定される鈴鹿市川原井瓦窯出土例と、同型式の軒丸瓦等が出土している。南東2kmには嬉野廃寺(4)が存在する。同寺からも、天花寺のM22に相当する軒丸瓦が出土している。北西2.2kmには八田廃寺(5)がある。同寺からは、いわゆる白鳳様式の軒丸瓦や、天花寺廃寺出土の藤原宮式軒丸瓦を彫り直した例等が知られている。八田廃寺の南約400mの丘陵麓には、中野山古窯跡(8)が存在し、八田廃寺出土例と同範の軒丸瓦が出土している。このように、寺院に近接して瓦窯が推定される例には、天花寺廃寺と天花寺古窯跡(7)がある。この古窯跡は天花寺廃寺に接する丘陵の北麓にあり、現況は山林である。灰原が一部露出しており布目瓦片と須恵器杯が出土している。一方、北西4.6kmの高岡廃寺(6)からは、山田寺式の軒丸瓦も出土している。また、位置図よりはずれるが、西方約10kmには大角遺跡がある。同遺跡出土の重圈文軒丸瓦は、天花寺のM4と同範の可能性もある。

次に目を県下に広げると、天花寺廃寺のM12やM22の文様が簡略化した例は南勢に分布し、藤原宮式のM3Aと同型式は、松阪市林廃寺(旧称「貴田寺」)で出土している。このほかにも、藤原宮式系統の例は、南勢を中心に数箇所に見られる。これらは、天花寺廃寺出土例とその退化型式、および下部田廃寺(旧称「四天王寺」)出土例等に区別できよう。また、天花寺廃寺のH3は松阪市御麻生園廃寺にも類似が認められる。なお、藤原宮式は旧伊勢国にはかなり分布するが、旧伊賀国では少なく、これはひとつの特徴といえよう。

一方、飛鳥・奈良時代の集落跡も興味深い。すな

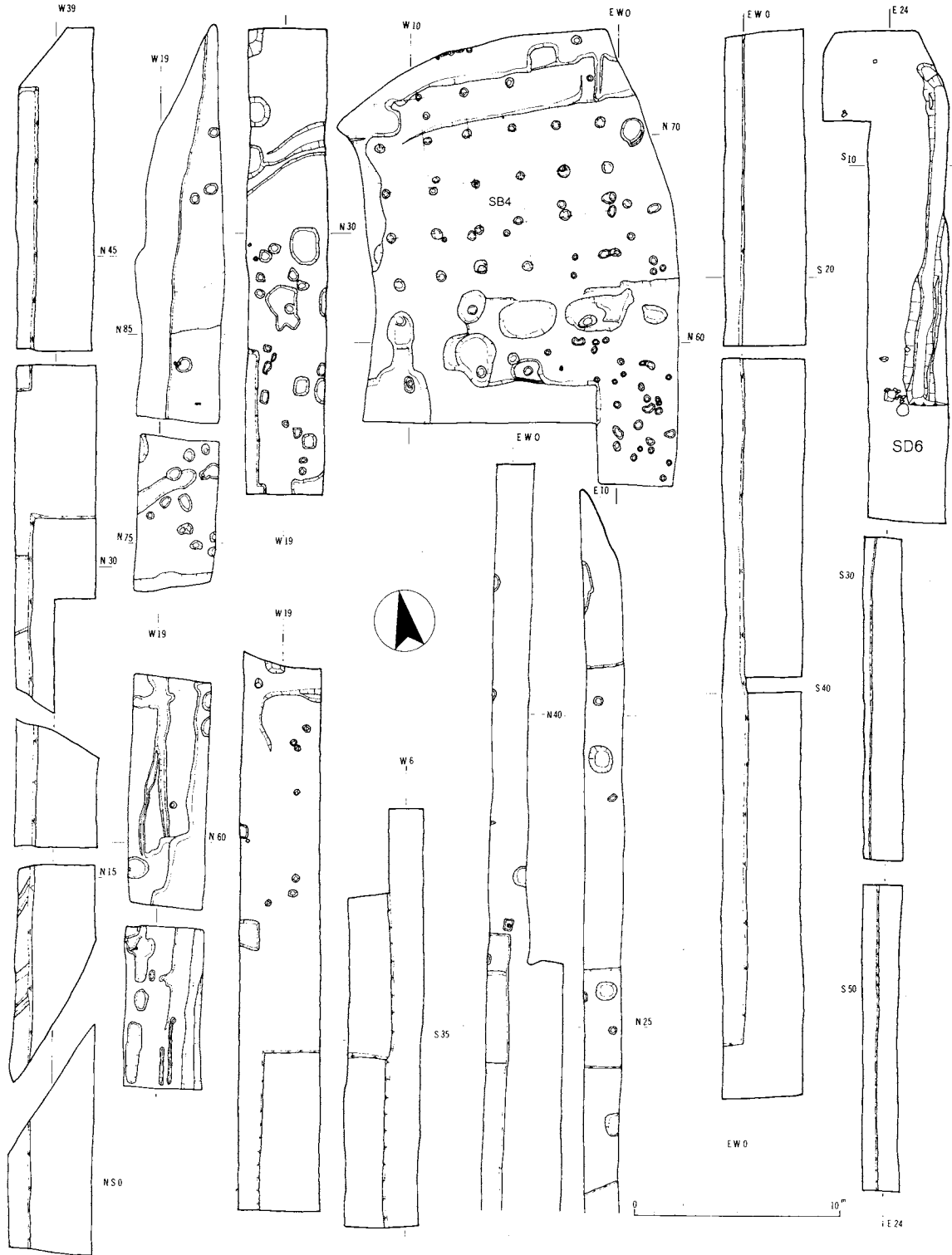


第9-3図 調査区全体図(1:2000)

わち、平生遺跡(12)からは円面硯が出土している。また、同遺跡をはじめとして、土馬も出土した鳥居本遺跡(14)、高岡遺跡(6)、平岩遺跡(15)、堀田遺跡(9)等から8世紀前葉を中心とする、赤褐色で暗文の施された土師器が出土している。これは、大和の飛鳥地方に類例を見るものであり、齋宮の近くの

金剛坂遺跡でも出土しているが、伊勢ではこの一志郡下に多い。これらは、7世紀後半から8世紀前葉に及ぶものだが、伊賀では7世紀前半から見られ、ここでも違いが認められるようである。

以上概観したように、伊勢にあって、この一志郡下は各時代を通じて見るべきものが多い。おそらく



第9—4図 遺構平面図1 (1 : 300)

それは、大和から伊勢、特に齋宮や伊勢神宮へ通ずる交通の要所に位置していた事と無関係ではあるまい。こうした傾向は、律令制国家の成立期に特に顕著で

あるが、これは裏を返せば、当地方の飛鳥・奈良時代の研究は、律令制の地方への実施状況を探る事でもあるといえよう。

## 2. 遺 構

検出された寺院関係の遺構には、東は塔、西は金堂と推定される版築の掘り込み地形と、この中央に位置する南北溝および、これから東に約43mの位置に並行する南北溝等がある。

寺院廃絶後の遺構には、鎌倉時代の掘立柱建物や溝、さらには近世の石組井戸等がある。

### A. 寺院の建築遺構

#### 1. 塔 (SB1)

東西約15.5m、南北約15mの掘り込み地形として認められたものである。水田床土直下において、基壇面はかなり削平され、礎石はもとよりその根固めもみとめられず、また基壇化粧も全く残っていない。

掘り込み地形は、東西と南北の中央の土層観察の結果、最厚部では1.2mを残す版築が認められた。版築は、粗砂と砂質土を互層にしたものであり、金堂のそれと比較すると各層がやや厚く、約5cmである。版築中に含まれていた瓦片は、金堂よりも多い一方、礫は少なく小さい。

残存している基壇の南西寄りには、径約3.9×3.3m、深さ約1mの心礎の抜き取り穴がある。これにより掘り込み地形の範囲そのものが塔基壇の規模を示すものではなく、基壇は版築の裾部を削除して築成したものと考えられる。塔と金堂の位置関係は金堂の南北中央線から東に約25mに塔心礎が位置する。したがって、塔基壇南面は金堂よりも約4m北になる。

基壇中には瓦片・土師器片が少数混入していた。東部の鎌倉期の溝SD3の埋土中には造出しはないが礎石と思われる大型の石材が2個転落していた。

#### 2. 金堂 (SB2)

塔の西側にある東西約20m、南北17.5mの掘り込み地形による基壇跡である。塔跡と同様に基壇上面は削平され、礎石及び根固めも確認されなかった。

とくに南辺は瓦堆積の江戸期の攪乱、井戸(SE5)等によって著しく改変されていた。また東辺においても塔基壇との瓦の堆積があり、それにつづく鎌倉期の遺物包含層との重複により、掘り込み地形の掘り込み線がかなり削平されていた。

掘り込み地形は、東西と南北の中央の土層観察の結果、最厚部で1.55mを残す版築が認められた。版築は、粗砂と砂質土の互層から成り、各層は非常に薄く、中位には人頭大以下の円礫が多数包含されていた。中央溝(SD7)から約9m西の、農道下のために削平が比較的浅かった部分の西半分には、凝灰岩片を包含した落ち込みが認められた。あるいは礎石の据え付け穴と抜き取り穴かとも考えられる。

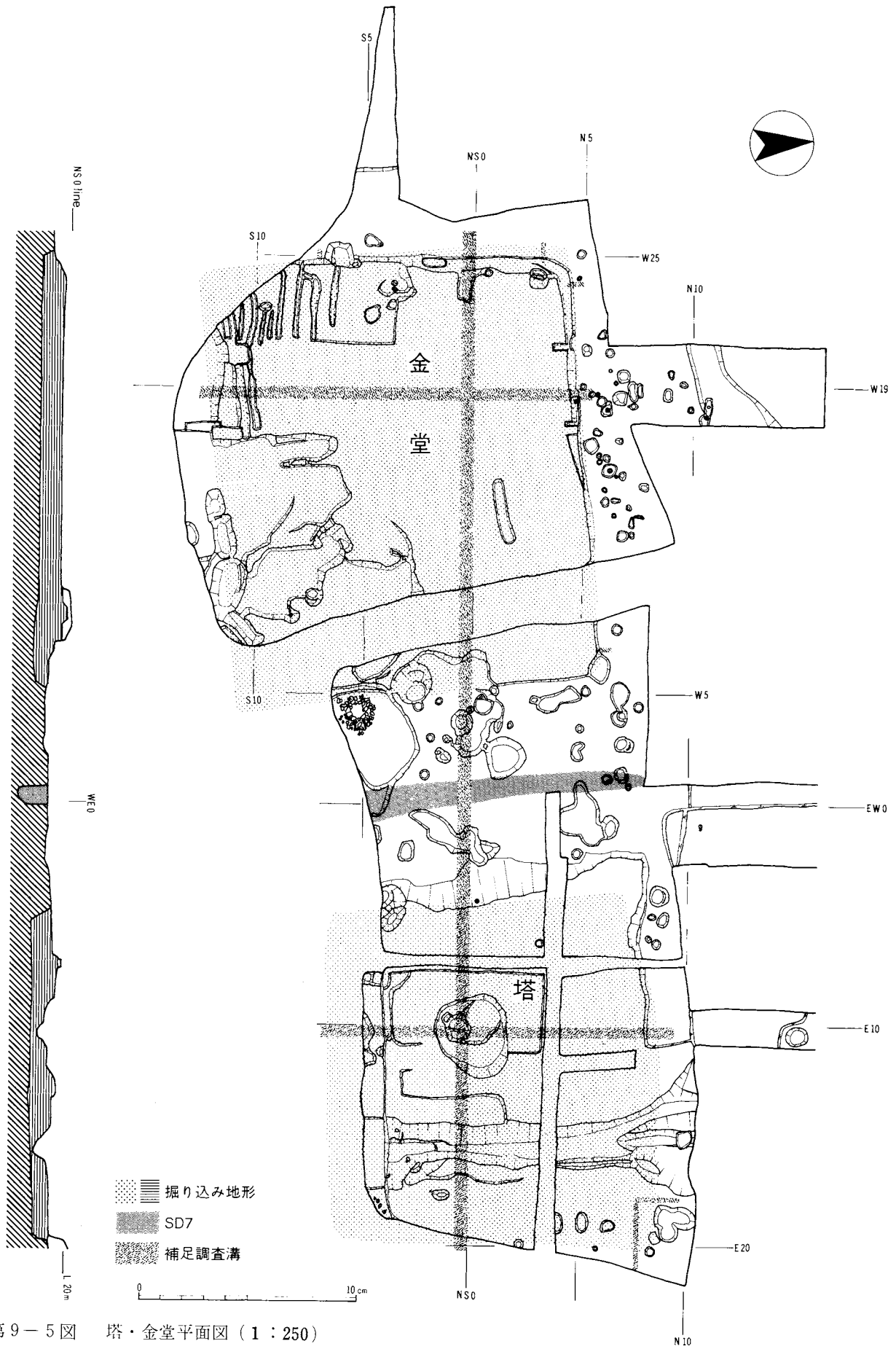
SD7 金堂と塔の版築の中央に存在した南北溝である。埋土の状態から、一度埋没した後に再度幅0.6m、深さ1.4m程に掘り直したものと理解され、掘り直した溝の埋土から瓦片が出土した。掘り直しているが、砂質の地山を深く掘っているため、存続期は長くはないものと考えられる。この溝は、その位置と方向から伽藍中軸線上にあたるかと推定される。

SD8 推定伽藍中軸線上に位置するSD7の東約43mに並行する溝である。幅2m、深さ0.85m程の素掘り溝であり、塔心礎抜き取り穴から南に約38~58mまで確認された。8世紀前半頃の土器が出土しており、寺域を画する遺構の一部の可能性もある。

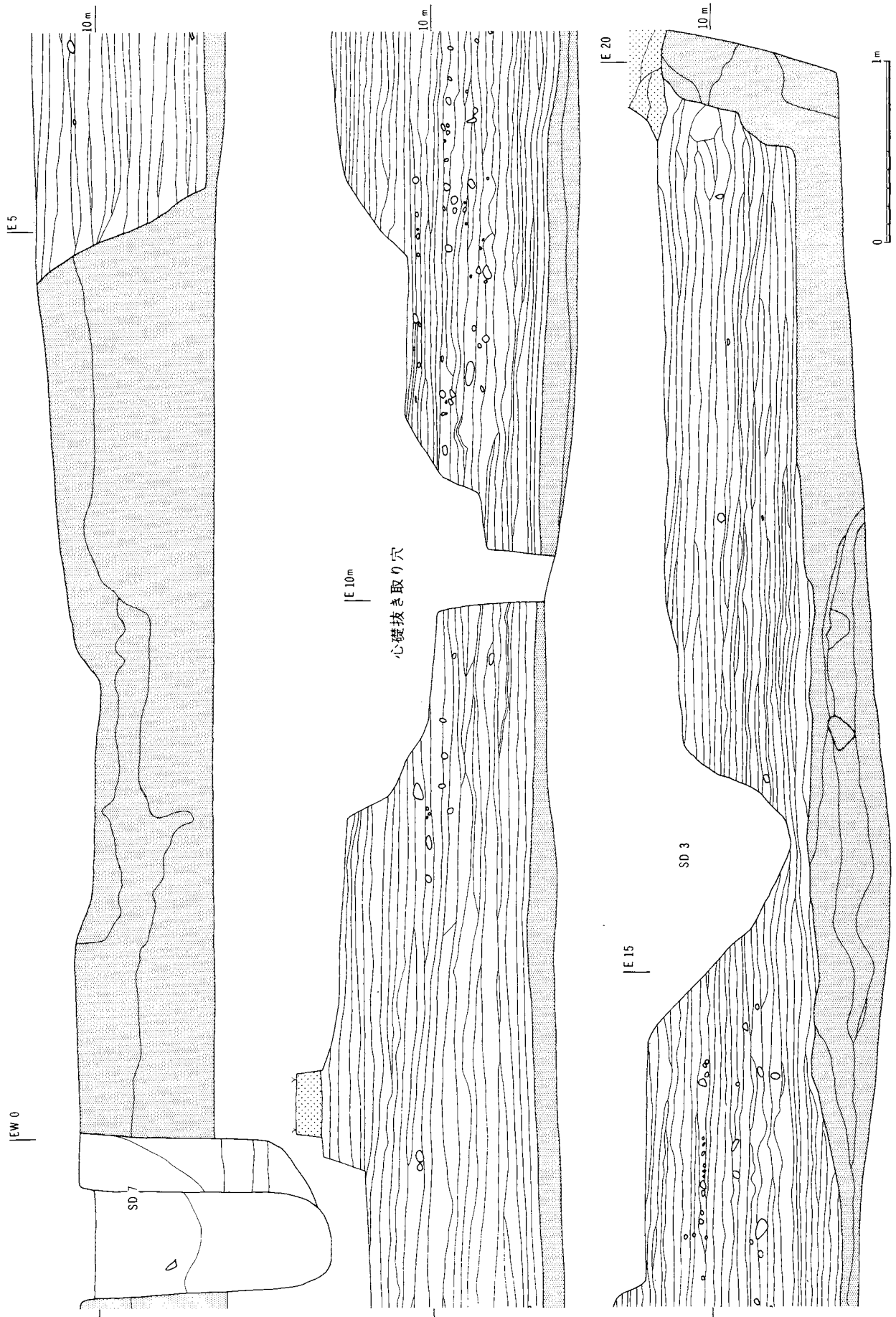
### B. 寺院廃絶後の遺構

#### 1. 掘立柱建物 (SB4)

桁行5間(10.5m)、梁行4間(8.4m)の総柱の東西棟である。柱間は2.1m前後であるが、柱通りはやや悪い。柱穴掘形は、径0.5m、深さ0.5m前後の円形に近いもので、そのうちのいくつかから鎌倉時代の山茶碗が出土していて、この建物の時期を推測させる。

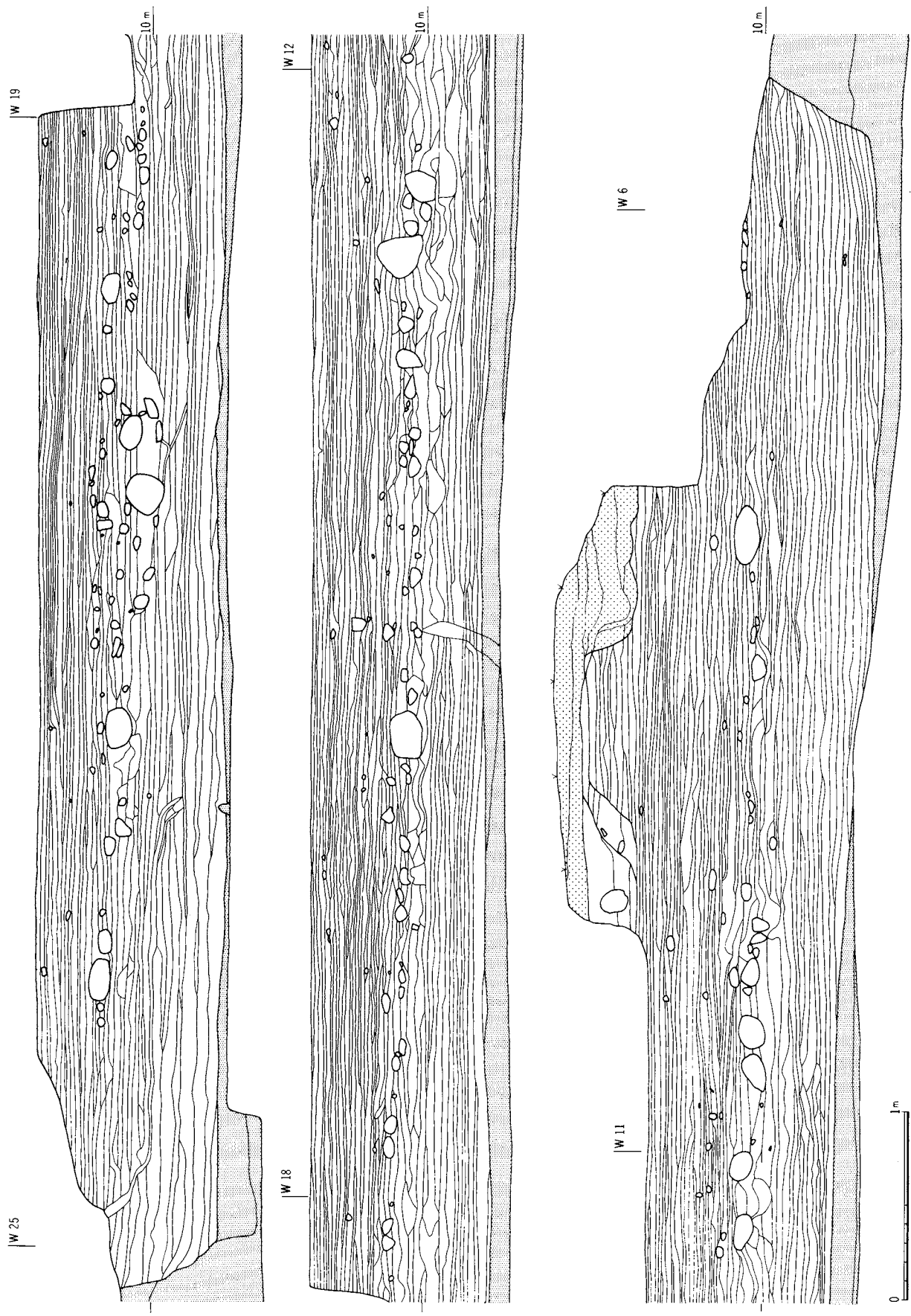


第9-5図 塔・金堂平面図 (1:250)



第9-6図 塔付近東西土層図 (1:30) NS=0m line 白抜き部分=版築等





第 9 - 7 図 金堂東西土層図 ( 1 : 30 ) NS=0m line 白抜き部分=版築等

建物跡は地上面より30cm前後高い土壇状のものの上にある。この土壇状のたかまりは東西14m以上、南北約11mのもので、北辺と西辺は瓦の堆積した溝状のもので区画されている。南側には大小の土壇が数基あり、山茶碗・山皿・土師器皿等とともに瓦片も混在していた。また土壇中には瓦片、土師器片が多数含まれていて、少なくとも奈良時代以降の遺物包含層の上に築成されたものであることがわかる。

## 2. 井戸 (SE5)

金堂の南東隅に掘り込まれた石組みの井戸である。東西約5m、南北3m以上の大型の掘形を持つが、井戸はその中央につくられず、北西隅にかたよっている。石組みの上方部分では石と石との間を瓦片でつめている。内径は0.55mであるが、上部は削平されている。

井戸内からは、内径75cm、厚さ16cm、幅9cmの石製井戸枠がいくつか割れて出土している。使用時

には最上部に置かれていたものであろう。

この井戸は、金堂と塔の間を埋めつくした瓦の堆積中から検出され、しかも近世の染付茶碗や巴文瓦・一石五輪塔、石臼が井戸内から出土し、江戸期に廃絶したものと思われる。

## 3. 溝

**SD3** 塔の基壇東辺を南北に掘りぬいた大溝である。中央では幅1.5m、深さ0.8mを測るが、その両端では幅4.5mに広がっている。溝内には多量の瓦片とともに、かなりの量の山茶碗及び土師器の鍋・皿片が埋まっていた。溝の底は両端が深く、中央では浅い。

**SD6** 塔の南東約10mにおいて南北につづくものである。幅1.5m前後、深さは0.7m前後で、底面は北に高く南に低くなっている。

溝内には多量の瓦片とともに、山茶碗・山皿・土師器片等が出土した。

# 3. 遺物

## A. 瓦 磚類

当遺跡における埴伝や塑像を除く瓦磚類の分類は、昭和54年度分の概報に従う。軒瓦類は第9-8~10図に具体的に示したが、拓影を合成したものであり、個々の分類例を第9-11~13図に示した。

### 1. 軒丸瓦

**M11** 単弁重弁八葉蓮華文軒丸瓦である。蓮子は1+8+8と配される。蓮弁は子葉と共に区画され、反りが強い。外縁は直立縁であり、高い。青灰色を呈し、硬い。2点出土したのみである。

**M12** 単弁重弁七葉蓮華文軒丸瓦である。比較的大きな中房には、円圈を持つ蓮子が1+4+8と配される。蓮弁はやや短く、子葉の幅は広い。外区外縁は傾斜縁であり、外区内縁には左下がりの複線鋸歯文を配す。暗灰色を呈し、焼成は良い。20点出土した。外縁に二重の沈線を持つAと無文のBがある。

**M13** 単弁重弁六葉蓮華文軒丸瓦である。蓮子は1+6であり、界線が蓮弁と一体化して間弁を閉じ込めている。外区外縁は傾斜縁であり、やや乱れた幅線文を配す。暗茶灰色で軟質である。21点出土した。

**M21** いわゆる川原寺式に属す複弁重弁八葉蓮華文

軒丸瓦である。蓮子は1+4+8であり、円圈を持つ。外区内縁には線鋸歯文を配す。暗灰色を呈し、焼成は良好である。34点出土した。

**M22** 複弁重弁七葉蓮華文軒丸瓦である。外区内縁に複線鋸歯文を配すが、M12とは逆に右下がりである。暗灰茶色を呈し、焼成は良い。9点出土した。

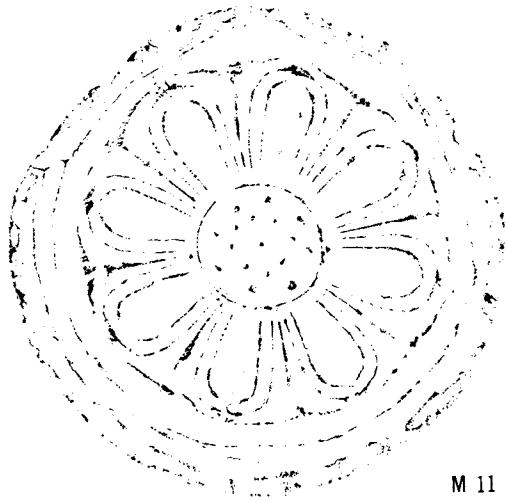
**M3Aa** いわゆる藤原宮式に属し、蓮子は1+8、珠文は32、線鋸歯文は25配す。中房が窪み、鋸歯文がやや乱れる。範に生じた小穴により、間弁の付根に小突起を持つ。緑灰色を呈し、焼成は並である。11点が確認された。

**M3Ab** 同範のAaの中房を彫り窪め、やはり1+8の蓮子を配したものである。73点が確認された。

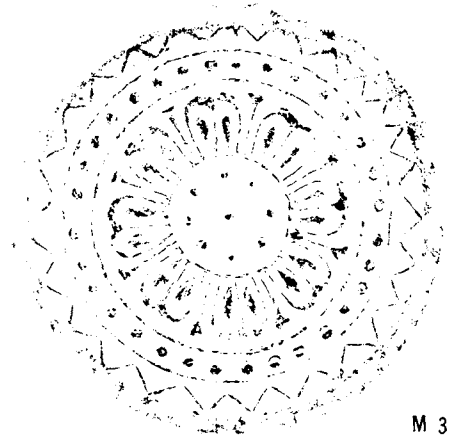
このほかにM3Aとまで判断できる例が80点、M3Aらしいものが20点、M3とのみ判断できる例が2点ある。

**M3B** やはり藤原宮式に属すが、Aよりも径が大きく、蓮弁が平面的であり、蓮子は1+6+6、珠文は39、線鋸歯文は49配す。やはり緑灰色を呈し、焼成は並である。31点が確認された。

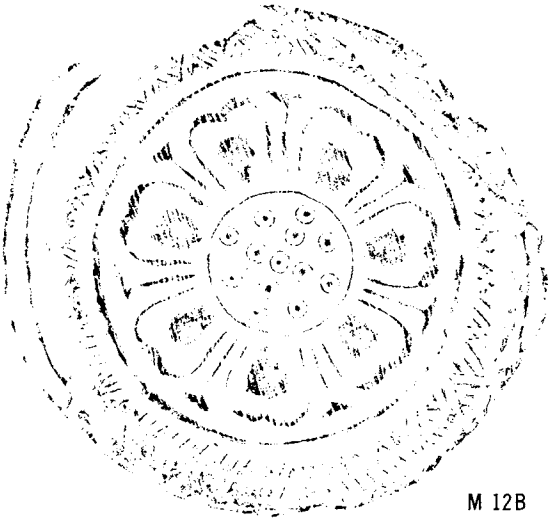
**M41** 重圈文軒丸瓦である。三重に界線が巡り、茶



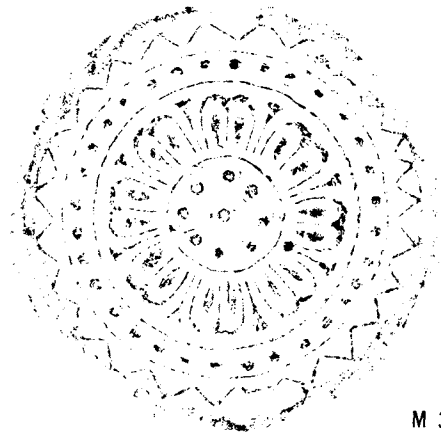
M 11



M 3a



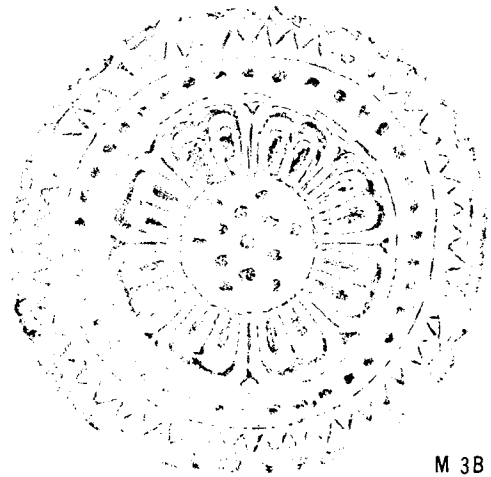
M 12B



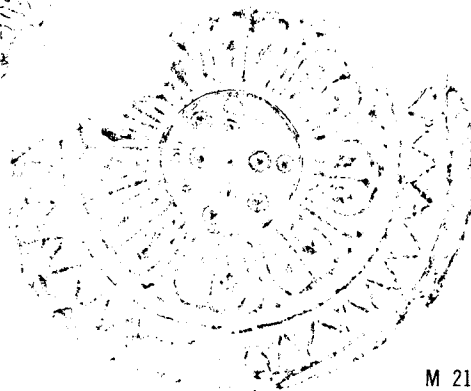
M 3b



M 22



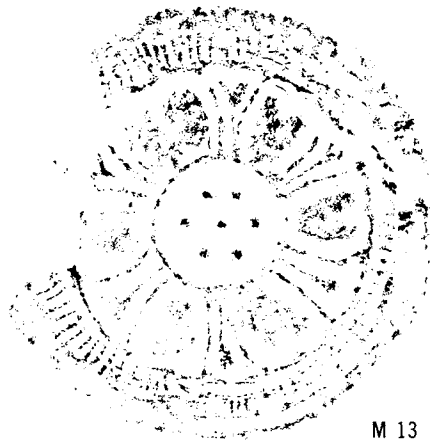
M 3B



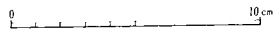
M 21



第9-8図 軒丸瓦分類図1 (1:3)



M 13



第9-9図 軒丸瓦分類図2 (1:3)

黄色を呈す。瓦当部の完形の例(第9-9図)は表面採集品であり、他には2点出土したのみである。

## 2. 軒平瓦

軒平瓦は204点出土し、この内重弧文(H1)は57点、扁行唐草文(H2)が133点、均正唐草文(H3)が14点を占める。

**H11** 三重弧文軒平瓦である。A、B2種の曳型が認められる。いずれも深顎であり、格子叩きを施す。青灰色を呈し、硬い。13点が確認された。

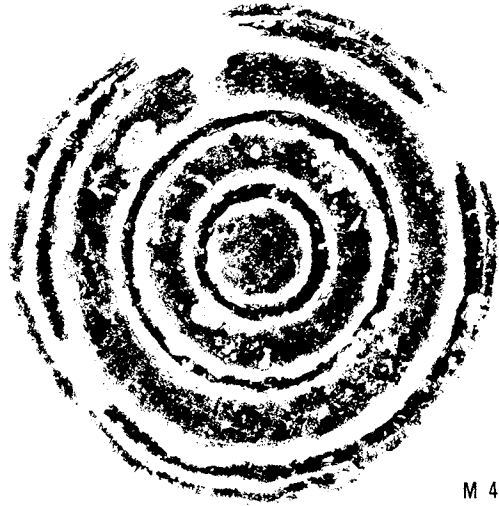
**H12** 四重弧文軒平瓦である。曳型はH11と同じAやBも含むが他に5種あるらしい。製作技法や焼成等はH11と同じである。27点確認されたが、このほかにH11かH12か不明な例が18点ある。

**H21A** いわゆる藤原宮式に属す扁行唐草文軒平瓦であるが、主茎が右に5回、左に2回反転する。内区と脇区を画する界線はそのまま延びて外区と脇区をも区画する。上外区は珠文だが、下外区や脇区には線鋸歯文を配す、全て段顎であり、格子叩き目を残す。7点出土した。

**H21B** やはり藤原宮式に属す扁行唐草文軒平瓦であるが、Aよりも内区の幅が狭い。113点出土したが、Aと同様に格子叩き目を残す段顎の例が7点ある。直線顎は82点確認されたが、これらの叩き目は格子目が23点、縄目が58点、両者併用が1点ある。

**H22** 一応扁行唐草文に属す軒平瓦である。上外区は無文であり、下外区には線鋸歯文を配す。直線顎であり、灰黄色を呈す。11点出土した。

**H23** 扁行唐草文が大きく退化した軒平瓦である。



M 41

H22と同様に、上外区は無文、下外区は線鋸歯文を配す。直線顎であり、縄叩き目を残す。胎土には小石が目立ち、茶黄色を呈す。7点出土した。

**H3A** 均正唐草文軒平瓦である。唐草文は第2支葉まで持ち、主茎は3回反転する。外区や脇区には疎らな珠文を配す。直線顎であり、茶黄色を呈す。12点程出土した。

**H3B** Aと良く似た均正唐草文軒平瓦であるが、唐草文が2回反転するのみである点が異なる。2点程出土した。

## 3. 丸瓦と平瓦

**丸瓦** 詳細は未検討だが、行基丸瓦と玉縁丸瓦の両者が認められる。

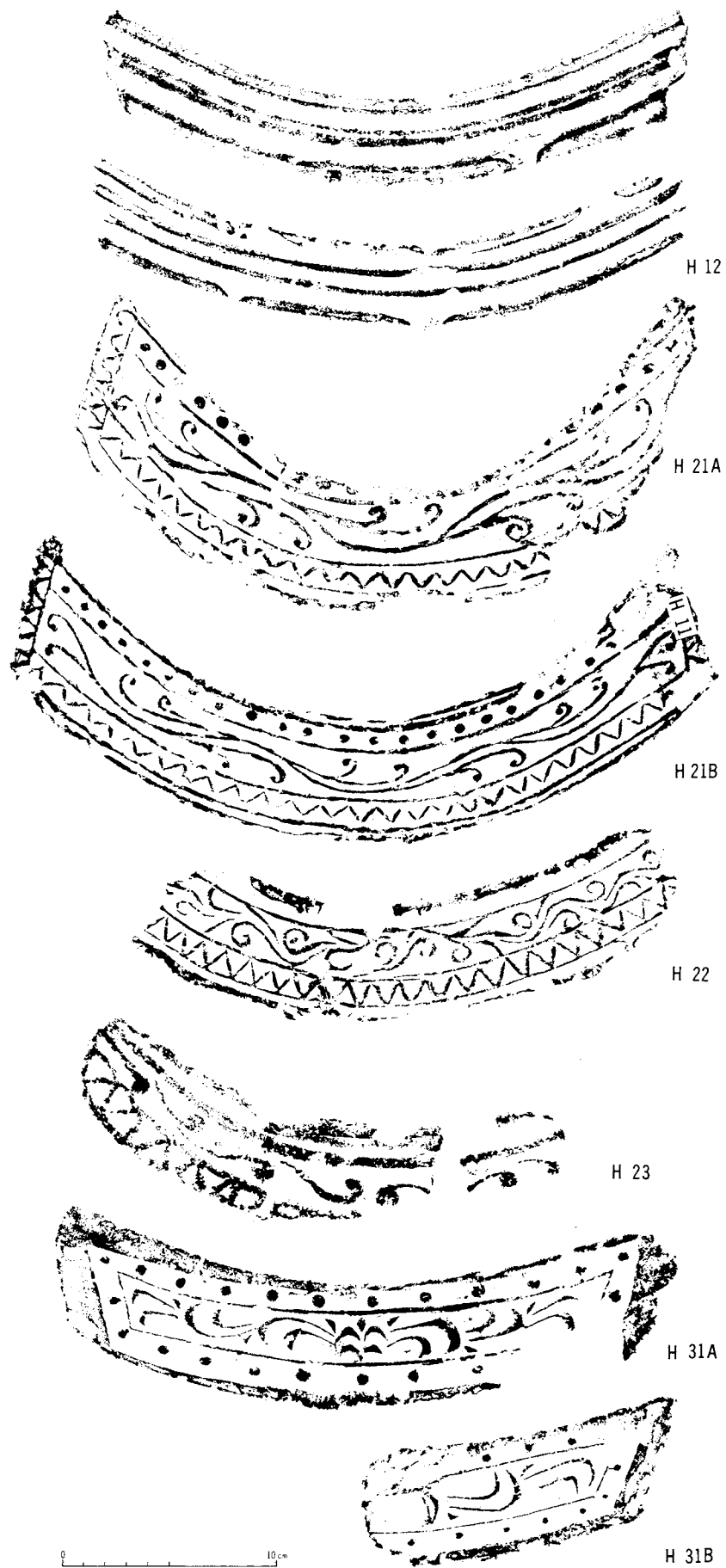
**平瓦** 格子叩き目と縄叩き目および叩き目を残さない例の3群に大別できる。

格子叩き目の一群は、大きな格子の中に斜格子を入れた例が2類(25・27)、一般的な格子が3類(26他)認められる。これらは一般に青灰色を呈し、桶巻作りの可能性が高い。

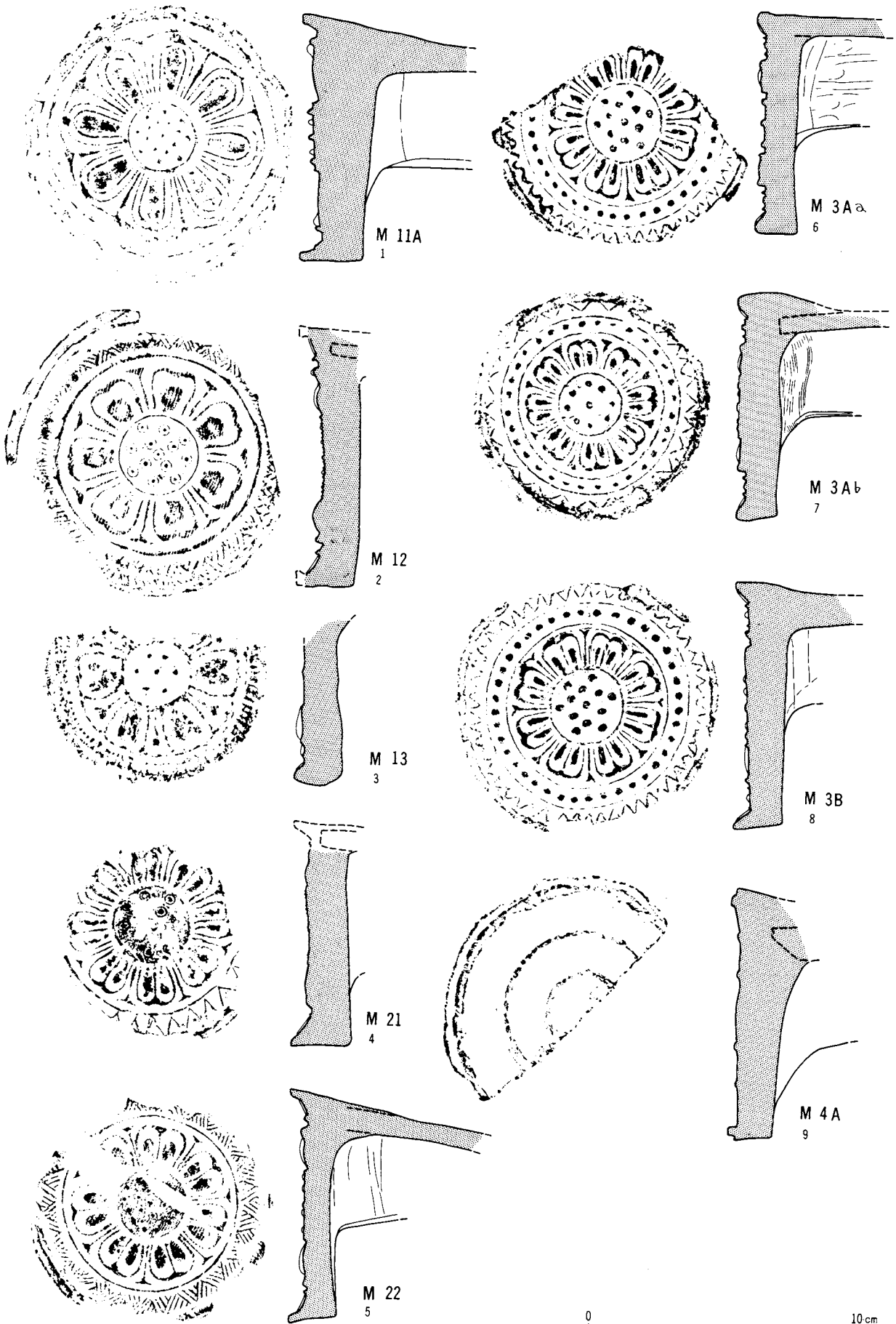
縄叩き目の一群(28~32)は、縄の種類から7類が認められる。これらは一般に暗灰色を呈し、一枚作りの可能性がある。

## 4. 道具瓦

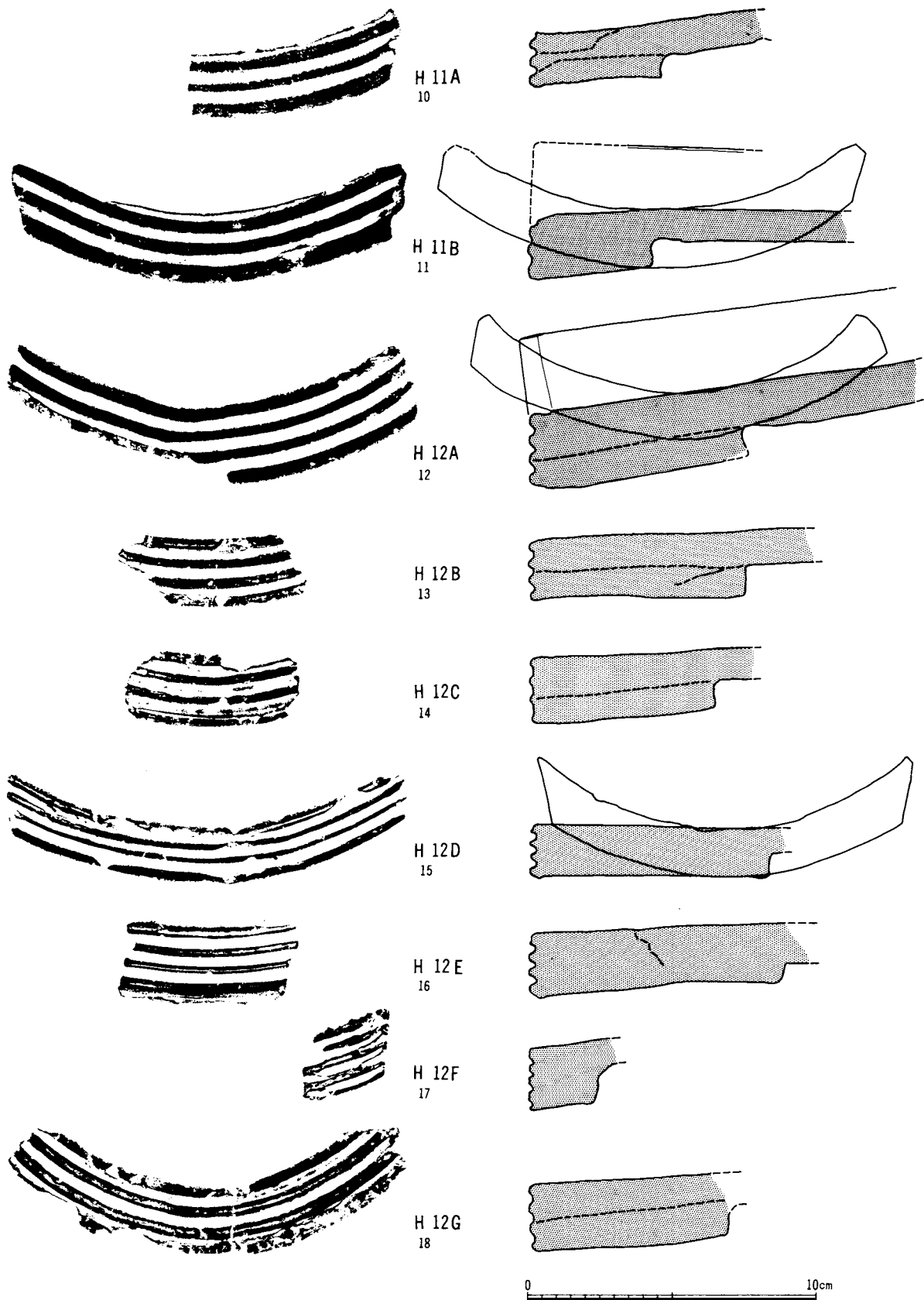
36は熨斗瓦である。平瓦を焼成前に幅13cm程の所で半分程の深さまでヘラ切りしたものである。37は面戸瓦である。弧状を呈す端面は丁寧なヘラケズリを施す。38は隅切瓦である。39は鴟尾のヒレ部分かと考えられる。40は厚さ10cm程の塼である。41は半



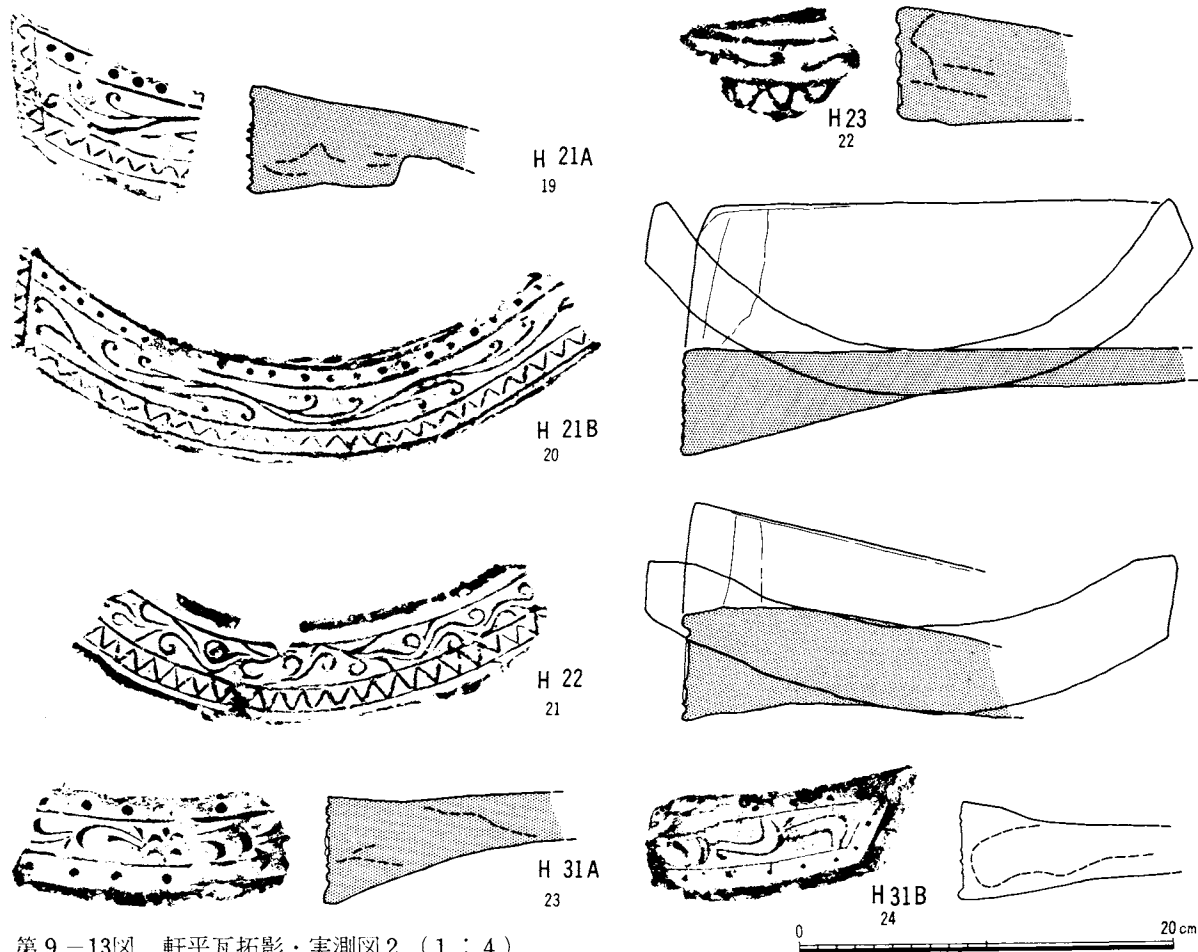
第9-10图 軒平瓦分類图 (1:3)



第9-11图 軒丸瓦拓影·实测图 (1:4)



第9—12図 軒平瓦拓影・実測図1 (1:4)



第9-13図 軒平瓦拓影・実測図2 (1:4)

円形の突帯を2条残し、下面は粘土接合面で剥離している。あるいは鬼瓦片か。

### 5. 塑像・埴仏

45は塔東方の包含層から出土した塑像片である。座高50cm前後の像の膝前と考えられる。現存最大長は約19cmである。46~47は塑像の螺髪である。高さ4cm余りで、基部に円穴を持つ。

埴仏は、昭和54年度調査時に出土した。菱形ならぬ六角形独尊例を中心に、方形独尊例や三尊形式の例が認められた以外に新知見はない。

## B 土 器

縄文時代の石斧や弥生土器、古式土師器等が若干出土しているが、出土土器の大部分は7世紀後半から平安時代前半、および平安時代後半から鎌倉時代に属す。このほかには、少量の室町時代以降の土器も出土した。

### 1. 寺院創建以前

1は類例の少ない器台である。古式土師器かと判断される。2~4は須恵器杯蓋と身であり、5は高

杯である。このように、前代に引き続いて6世紀後半から7世紀前半の土器も見られる。

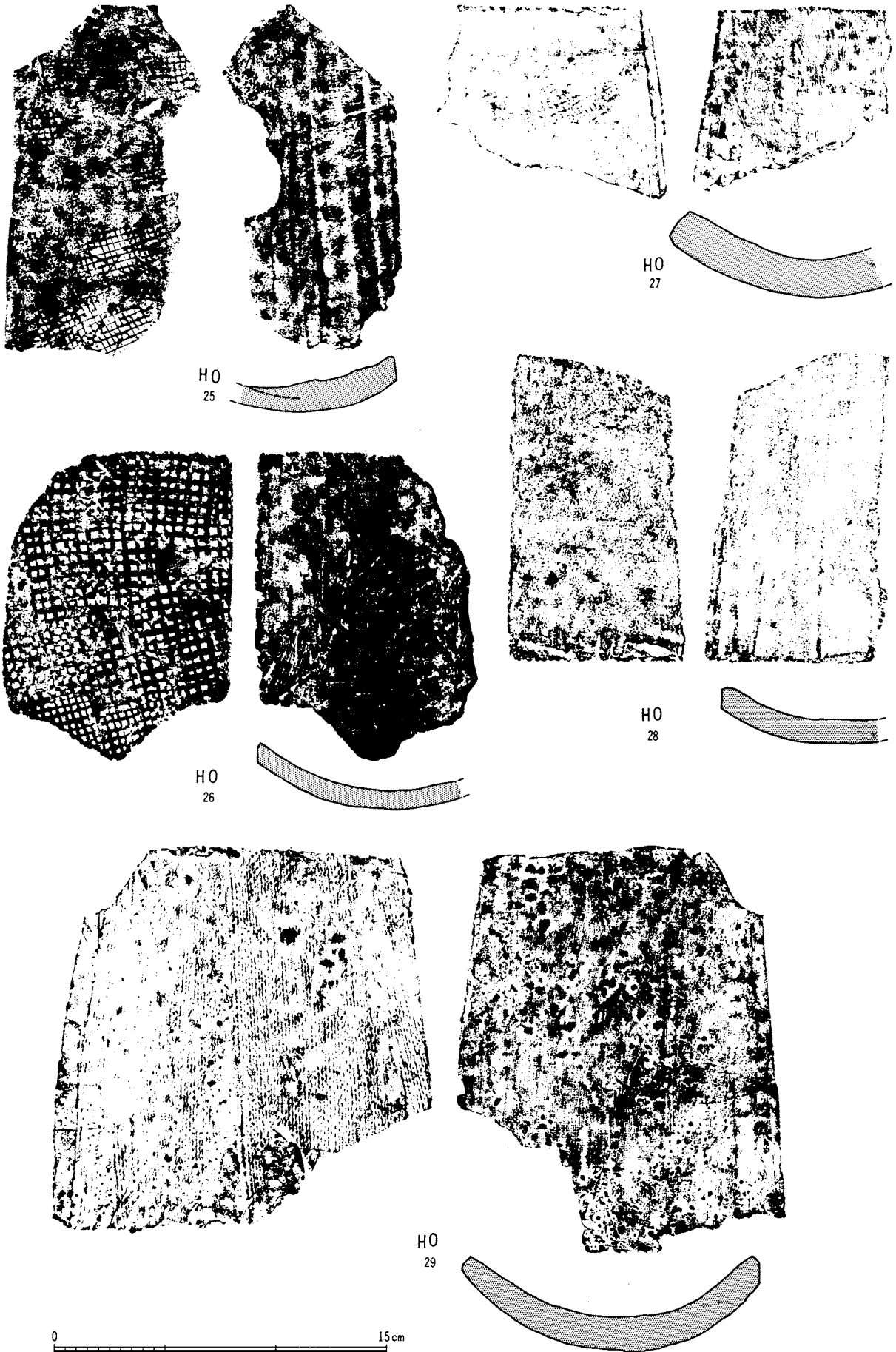
### 2. 寺院存続期

寺院存続期は確定し難しいが、一応7世紀後半から平安時代前半の土器(6~34)が該当すると理解した。

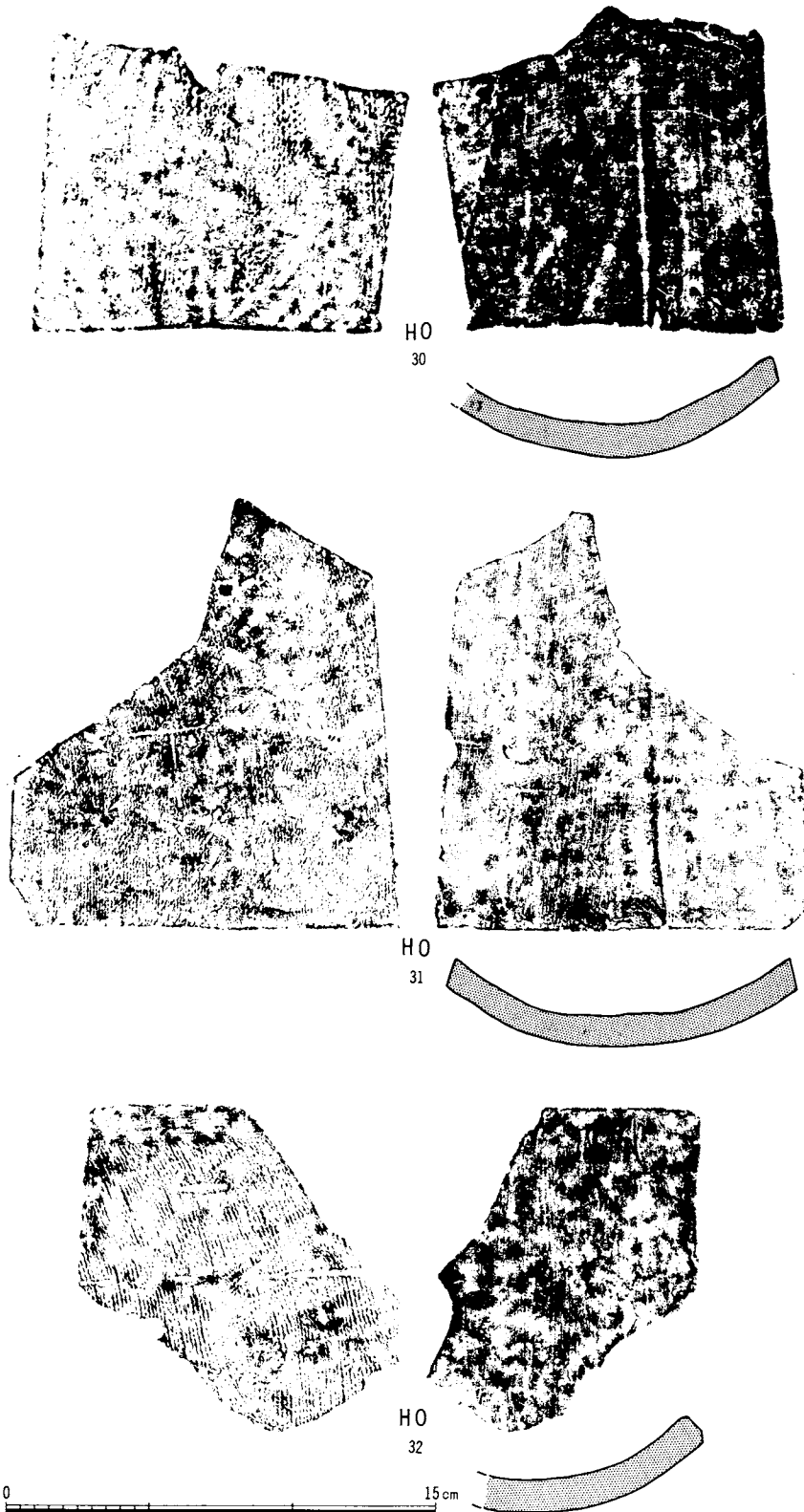
6~16は奈良時代の土師器の杯や蓋である。この内、6~11、16には暗文が見られ、赤褐色を呈し、焼成は良好である。また、7は小片であるが底部に墨書が認められる。17~20は平安時代の杯であり、20は黒色土器A類に属す。

21~32は、須恵器の宝珠つまみの付く杯蓋であり、この内21~26はかえりを持つ。21・22は塔版築上面から、24~26は塔南東の溝から出土した。27から32は、かえりのない杯蓋であり、この内29はSD8出土である。34は杯身片であり、底径に比較して高台径が小さい。33は円面硯である。2条の突帯の下に細い長方形透しが付く。





第9-14图 平瓦拓影·实测图1 (1:5)



### 3. 寺院廃絶後

平安時代後半から鎌倉時代を中心として多数出土したが、室町時代以降の土器類も少量見られる。

35は削平された金堂版築の直上から出土した、須恵器杯である。36～37は緑釉陶器である。36は耳皿である。淡黄色を呈す軟質の胎土に、濃緑色の釉を厚く全面に施し、底部には糸切痕を残す。37は径が大きく高い角高台を持つ皿であり、内面にはヘラミガキが見られる。灰白色で硬い胎土に、明緑色の釉を全面に施す。38～44は土師器の皿類である。45～50は山皿であり、51～58は山茶碗である。

59～62は瓦器である。この内、59は皿であり口縁部内面にもヘラミガキを施す。60は類例の少ない皿であり、ヘラミガキは認められないが、焼成は明らかに瓦器である。61は伊賀型の碗であり、Ⅲ段階<sup>③</sup>2型式に属す。62はⅠ段階の2型式、あるいは3型式に属す碗である。63は鉄釉皿であり、64は青磁皿である。

第9—15図 平瓦拓影・実測図2(1:5)

## 4. 結 語

### A. 周辺寺院との関係

天花寺廃寺出土の軒瓦類は、その大部分が周辺遺跡出土品と何らかの類縁関係が認められる。

**M11** 天花寺廃寺出土軒瓦中1%も占めず、搬入品と理解される。この型式の特徴は蓮弁を二重に区画する界線を持つ点にあるが、八田廃寺（旧称「斑光寺」）出土品（第19図57）はこの意味で類似する。ただし、八田廃寺出土例は蓮弁に丸味が強まり、平面的である。M11は、天花寺廃寺以外の遺跡で多用され、その一部が天花寺にも創建期に流用されたものと推定される。そして、このM11を祖形として八田廃寺出土例の範が彫られ、ここにおいて八葉（57）から六葉（58）へと変化したものと理解される。

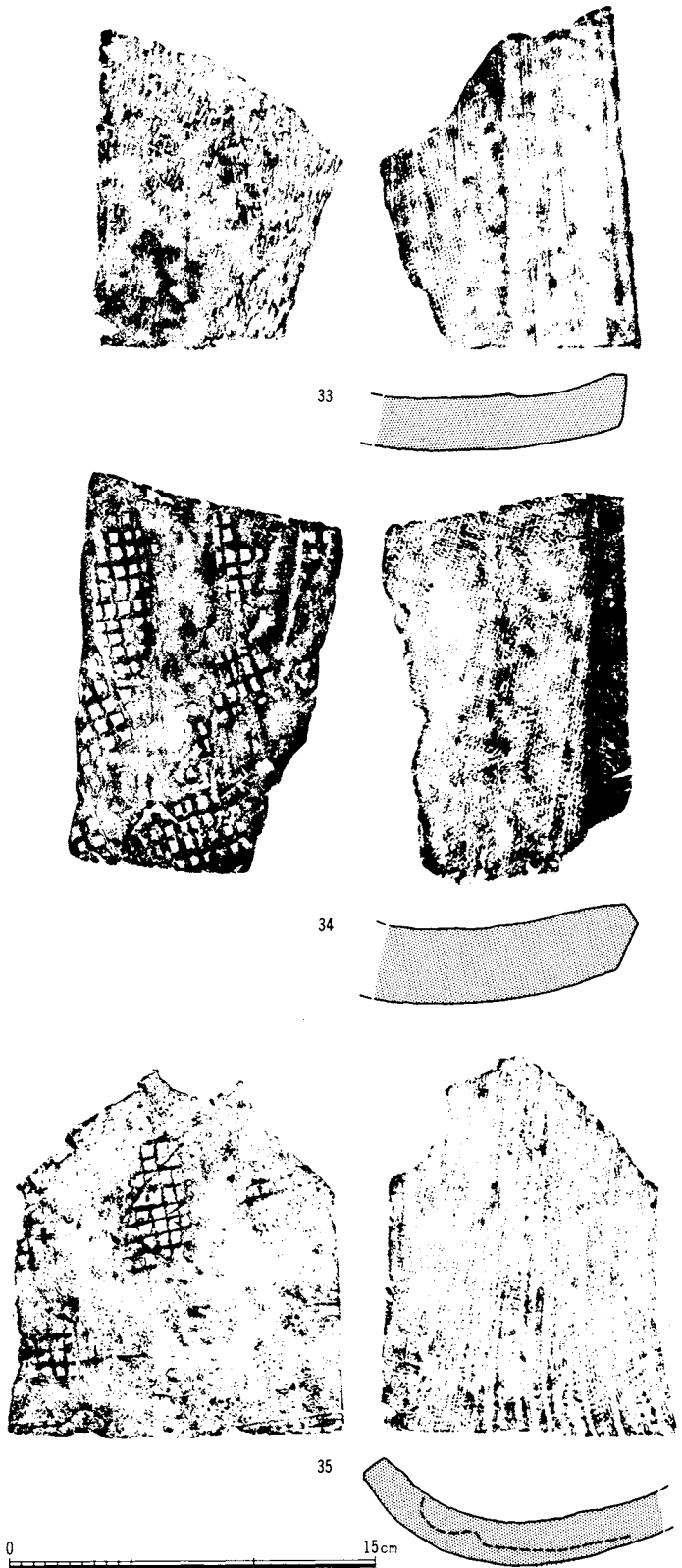
**M12** 七葉で、外区外縁に左下りの複線鋸歯文を配す点の特徴である。八田廃寺と一志廃寺（旧称「東福寺」）出土例<sup>④</sup>に類例がある。このM12は差し替え瓦であろうM13の祖型と推定される。

**M13** 当遺跡における差し替え瓦の主体を成すものであり、軒丸瓦総数の7%近くを占める。M12を祖型としながらも、六葉となり、外区外縁は輻線文となる。上野廃寺（旧称「円光寺」）に類例がある。

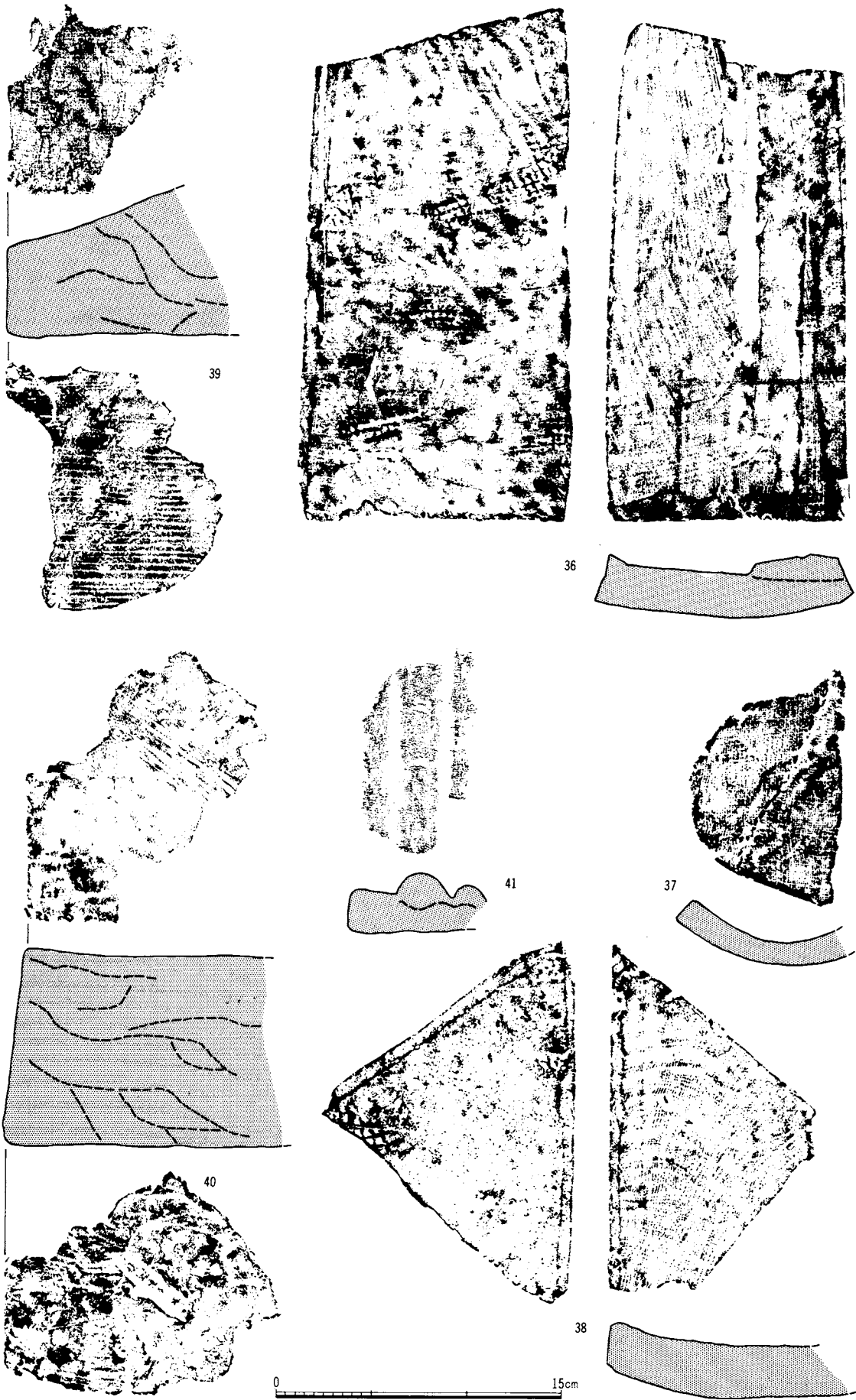
**M21** いわゆる川原寺式に属し、旧一志郡下における類例は一志廃寺に認められるが、明らかに範や胎土は異なり、一志廃寺例はより豊かな蓮弁を持つ。

**M22** 七葉で外区外縁に右下りの複線鋸歯文を配す点の特徴的である。M12と同様に七葉で複線鋸歯文を配すが、単弁と複弁、複線鋸歯文が左下りと右下りの違いがある。あるいは、M12の製品を参考にして複弁の範を彫ったために、複線鋸歯文が左右逆になったものかとも想像される。

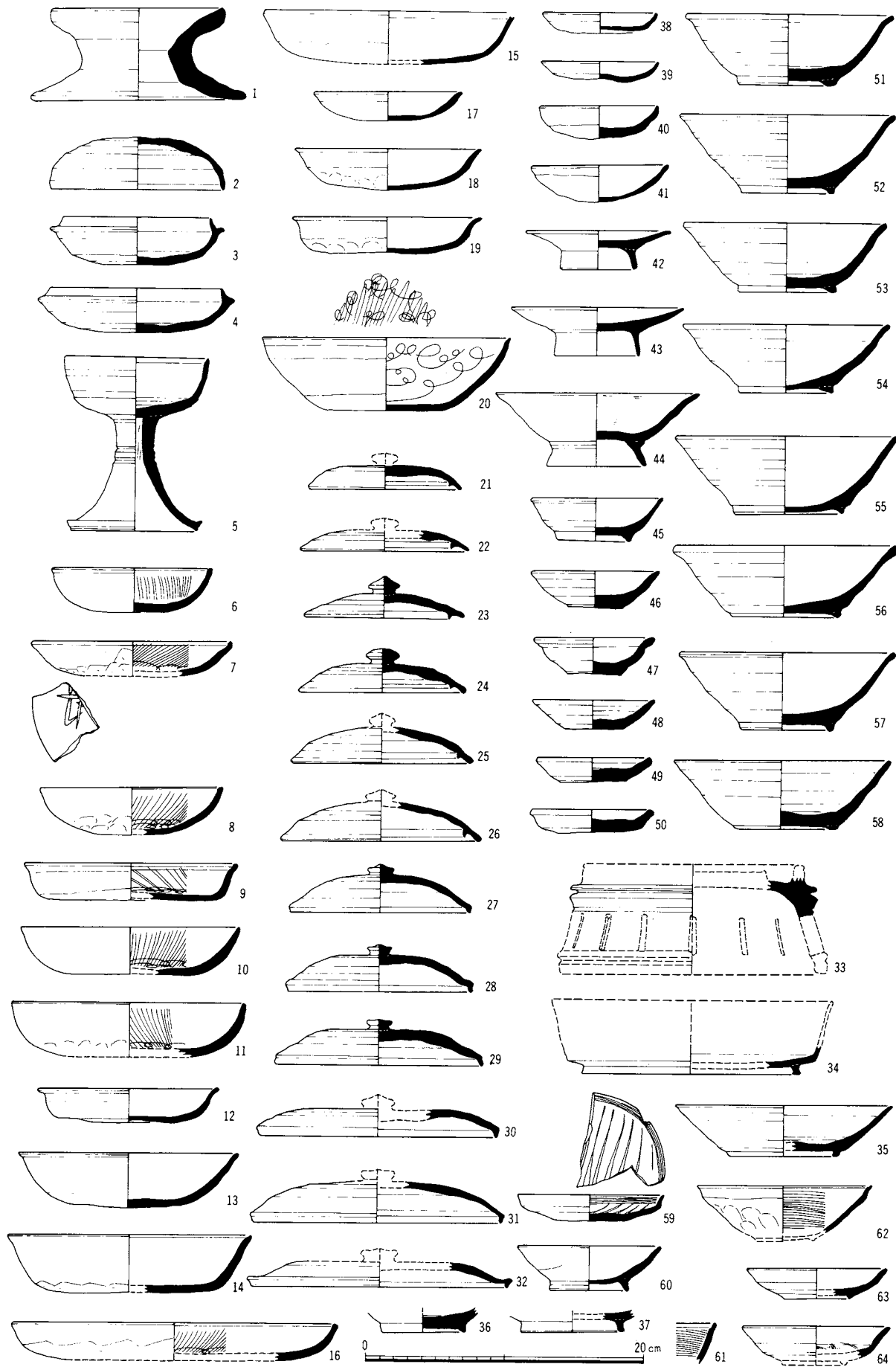
類例は同じ旧一志郡下をはじめとして、旧飯高郡下に多く見られる。すなわち、一志廃寺例（46）は同範の可能性もあるが、天花寺廃寺例よりも蓮弁がより豊かな印象も与える。上野廃寺例（47）は良く類似するが蓮子が1+4+10であり、明らかに別な範である。嬉野廃寺例（48）も（47）あるいは天花寺廃寺例と同範であろう。上記の旧一志郡下出土例は全て七葉であり右下りの複線鋸歯文を持つ。これに対



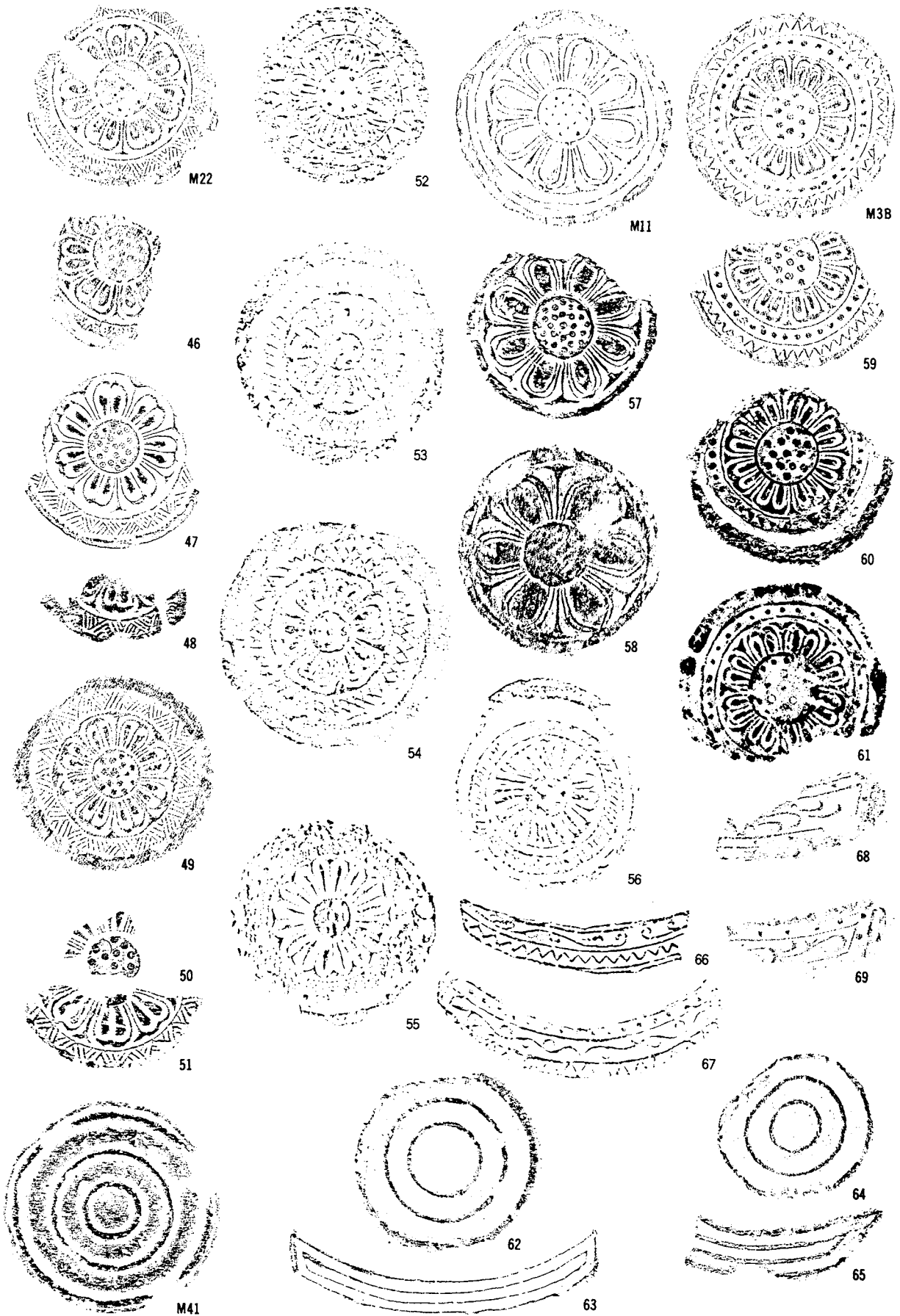
第9-16図 塔版築中出土瓦（1：4）



第9-17图 道具瓦類 (1:3)



第9-18图 土器实测图 (1:4)



第9—19図 天花寺廢寺と關係軒瓦類 (約1:5)

し、旧飯高郡や多気郡下の類例(49~51)は八葉となり、複線鋸齒文も左下りへと変化し、全体的に退化が著しい。49は野中垣内廃寺(旧称「大雷寺」)出土例である。大型であり、間弁が伸びて界線のように複弁を区画する。50・51は瓦窯跡と推定される北牧遺跡(多気郡多気町牧)出土品であり、これは近くの釈尊廃寺<sup>⑦</sup>や櫛田川の対岸に位置する御麻生蘭廃寺の出土例と同範らしい。蓮子が3+9であり、一箇所では間弁と蓮弁が一体化しており、複線鋸齒文が簡略化されている。これらM22の退化型式は52~54へと変化し、さらには55・56へと展開する。52は丹生寺廃寺出土例<sup>⑧</sup>である。外区外縁は截頭鋸齒文状であるが、直接的な祖形は50・51に求められようか。53も丹生寺廃寺出土例<sup>⑨</sup>であり、54は野中垣内廃寺出土例である。共に六葉であり、斜格子文へと変化しているが49からの変化かと考えられる。55は林廃寺(旧称「貴田寺」)出土例であるが、伊勢寺廃寺にも同範例がある。56は伊勢寺廃寺出土例である。これらの外区内縁における斜格子文は、上述の変遷と無関係ではあるまい。

ところで、丹生寺廃寺では52・53と共に、段顎の変形忍冬唐草文軒平瓦や立野瓦窯跡出土例と同範である曲線顎の均正唐草文軒平瓦が知られている<sup>⑩</sup>。前者は釈尊廃寺出土例と極めて良く類似するが範にヒビが入っている。段顎である点から、8世紀後葉以降とは考え難い。後者は東大寺式に属し、同範らしい例が御麻生蘭廃寺で東大寺式軒丸瓦と共に採集されている。したがって、この両軒平瓦は8世紀中葉と推定される。一方、52~54よりも後出的な55、56の類は伊勢寺廃寺で出土しているが、これらと共に変形忍冬唐草文軒平瓦も知られている。これは丹生寺廃寺出土例よりも後出的な文様であり、顎も直線顎である。以上要するに、M22は天花寺廃寺創建期の7世紀第4四半紀から、8世紀中葉過ぎまで型的変遷を遂げているわけである。さらにこのM22系瓦当文は、旧一志郡下でも中村川流域の寺院に採用され、その後退化しつつ旧飯高郡下を中心に独自に展開している。このM22の展開からは、現在多気郡に属す釈尊廃寺や北牧遺跡は旧飯高郡下の周知の全古代寺院と同様な背景が想定される。すなわち、この釈尊廃寺や北牧遺跡は、櫛田川南岸に位置するた

めに現在は多気郡に属しているが、古代においてはあるいは飯高郡に属していたものかとも推定される。

上記の推定に立脚して現在の多気郡下の他の古代寺院を次に概観してみると、逢鹿瀬廃寺と四神田廃寺がある。両遺跡出土の単弁重弁六葉軒丸瓦には同範もあり、四神田廃寺出土例の方が後出的である。共に奈良時代後半に属する瓦である。前者は宮川の北岸ではあるが旧度会郡に属し、天平神護3年(767)に伊勢神宮寺とされた<sup>⑪</sup>。その後神宮寺は崇りにより、宝亀3年(776)には旧飯高郡の度瀬山房に移され、同7年(780)には旧飯野郡に、同11年(784)には三神郡外に移されたという。

ところで、四神田廃寺出土軒丸瓦は逢鹿瀬廃寺出土例と同範であり、ヒビ割れを生じている。また、神宮寺であっても崇りによって神郡外に移された経緯から、神郡内に一般寺院が存在したとは考え難い。したがって、管見に触れた考古学的資料をもってすれば、宝亀7年に飯野郡に移された伊勢神宮寺には、四神田廃寺が最も可能性が高い。要するに三神郡内には、伊勢神宮寺二寺以外には考え難い。

**M3A** 既述のとおり、当型式は中房の彫り直しによってaとbに細分されるものであり、藤原宮式に属す。軒丸瓦の60%を占め、天花寺廃寺の塔に用いられたものの中心を成すと考えられる。同範例は林廃寺にあるが<sup>⑫</sup>、これはbである。

**M3B** やはり藤原宮式に属す。この同範例(59)は上野垣内遺跡(18)の西方丘陵から採集されている。これらは傾斜縁であるが、線鋸齒文の配された外区外縁を彫り直して直立縁にしたもの(60)が八田廃寺から出土している。また明らかに範は異なるが、御麻生蘭廃寺出土例(61)も類似する。

**M4I** 出土軒丸瓦の1%も占めず、型的にも差し替え用の搬入品と考えられる。伊勢国内の類例は、鈴鹿郡関町の萩原遺跡例(62・63)や鈴鹿市長者屋敷遺跡例(64)、伊勢国分僧寺例(65)のほか、大角遺跡<sup>⑬</sup>や鈴鹿市八野廃寺付近の窯跡からも出土したという<sup>⑭</sup>。しかし、天花寺廃寺出土例と同範例は未確認である。大角遺跡は川口関と、萩原遺跡は鈴鹿関や駅家と、長者屋敷は軍団との関係で注目される。

**H1** 重弧文軒平瓦類は全て深顎である。格子叩き目を持ち、桶巻き作りと考えられる。一志廃寺出

土例は縄叩き目を持つ。また、嬉野廃寺出土例は天花寺廃寺とは異なる格子叩き目を持ち、深頸の例と直線頸の例があり、各寺院によってその製作技法または工具は異なるようである。

**H21** A・B 2 范が認められたが、製作技法や胎土はAからBへ漸移しており、継続的な生産が想定される。類例は野中垣内廃寺(66)や伊勢寺廃寺(67)のほかに、下部田瓦窯跡(旧称「四天王寺瓦窯」)等がある。この内、前二者と天花寺廃寺例は藤原宮の6641型式を祖型としている。

**H22** H21を祖型とする差し替え瓦であろう。

**H31** H22を模した差し替え瓦である。H21からH22を経て成立している点から、天花寺廃寺の差し替え用の瓦窯が推定される。

**H31** A・B共に3回反転する均正唐草文軒平瓦である。類例は御麻生園廃寺例(68・69)や下部田廃寺(旧称「四天王寺」)例がある。後者と、おそらく68も4回反転するものである。

以上、各々の瓦当文を通して周辺寺院との関係を述べてきたが、これを次に要約しよう。すなわち、創建期は旧一志郡下の一志廃寺をはじめとして八田廃寺、嬉野廃寺、上野廃寺と緊密な関係があり、これらが旧飯高郡下の諸寺院に影響を与えている。ところが、差し替え瓦の一部は、伊勢国内の各所と同範あるいは同型式の関係にあり、搬入されている。また一方では、天花寺廃寺において型式変化を追える差し替え瓦もある。

これらの現象からは、創建期において緊密な関係のある5寺院は、同族関係にある郡領クラスの氏寺であり、各郷里に建立され、その歴史的宇宙は郡の領域を越えるものではないと想像される。

## B 寺院の造営期と廃絶期

### (1) 造営期

造営期所用軒瓦は、金堂においては重弧文軒平瓦(H1)と、これに組み合うであろうM11・12・21・22が考えられる。この内、M21は川原寺式であり、M12やM22の外縁断面形も川原寺式の影響が考えられる。大和川原寺は665年建立説が有力であり<sup>⑮</sup>、上記の軒丸瓦類はこれ以降の所産と理解される。しかし、天花寺廃寺でも藤原宮式が採用されている事か

ら、上記の軒丸瓦類は藤原宮式の導入に先行する可能性が高い。一方、出土土器は飛鳥編年の第Ⅲ期以降に属す<sup>⑯</sup>。特に、塔版築出土例は第Ⅲ期に、天花寺瓦窯跡灰原出土例<sup>⑰</sup>は第Ⅳ期に属す。以上の点から、金堂造営開始期は飛鳥編年の第Ⅳ期、すなわち末葉を除く7世紀後葉と推定される。

塔所用瓦は藤原宮式を基本とするが、この藤原宮式は、藤原宮の中でも後出的な范が退化したものである。したがって、8世紀初頭を除く第1四半期の所産と推定される。なお、寺域を画すと推定されるSD8からも8世紀前葉の土器が出土しており、ほぼこの頃に造営が完了したものと推定される。

### (2) 廃絶期

差し替え瓦の内、H23はおそらく平安時代に属しよう。一方、瓦堆積から山茶碗も出土しており、11～13世紀頃の土器が多い。したがって平安時代前半に廃絶したものと理解される。

(山田 猛)

(註)

- ① 昭和54年度の概報(小玉道明・山田猛「一志郡嬉野町 天華寺廃寺」(『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1980))では「天華寺廃寺」と呼称した。しかし、今後は小字に「廃寺」を付すことを原則とし、特定の小字に限定できない場合や既に定着している場合は大字に「廃寺」を付す。ただし、当該期の文献によって寺名が明らかな場合は、これに拠って「跡」を付す。したがって、当概報では「天花寺廃寺」と改称した。
- ② 最近、嬉野町釜生田の中村川北岸丘陵で瓦窯跡が発見され、鷗尾が出土した。また、これよりやや下流の上野 垣内遺跡(18)西方の丘陵から、天花寺廃寺のM3Bと同范例(59)が出土した事が田中久生氏によって確認された。
- ③ 山田猛「伊賀の瓦器に関する若干の覚え書き」(近刊)の見解に基づく。
- ④ 鈴木敏雄『三重県古瓦図録』1933
- ⑤ 註④に同じ。
- ⑥ 註④に同じ。
- ⑦ 註④に同じ。
- ⑧ 松阪市史編さん委員会『松阪市史第二巻』松阪市 1978
- ⑨ 註⑧に同じ。
- ⑩ 註⑧に同じ。
- ⑪ 田中卓『神宮の創祀と發展』1959
- ⑫ 註④に同じ。
- ⑬ 註④に同じ。
- ⑭ 鈴鹿市教育委員会『鈴鹿市史 第一巻』1980
- ⑮ 奈良国立文化財研究所『川原寺発掘調査報告』1960
- ⑯ 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』1978
- ⑰ 小玉道明・山田猛「一志郡嬉野町 天華寺廃寺」(『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1980)



# X 多気郡明和町 堀田遺跡

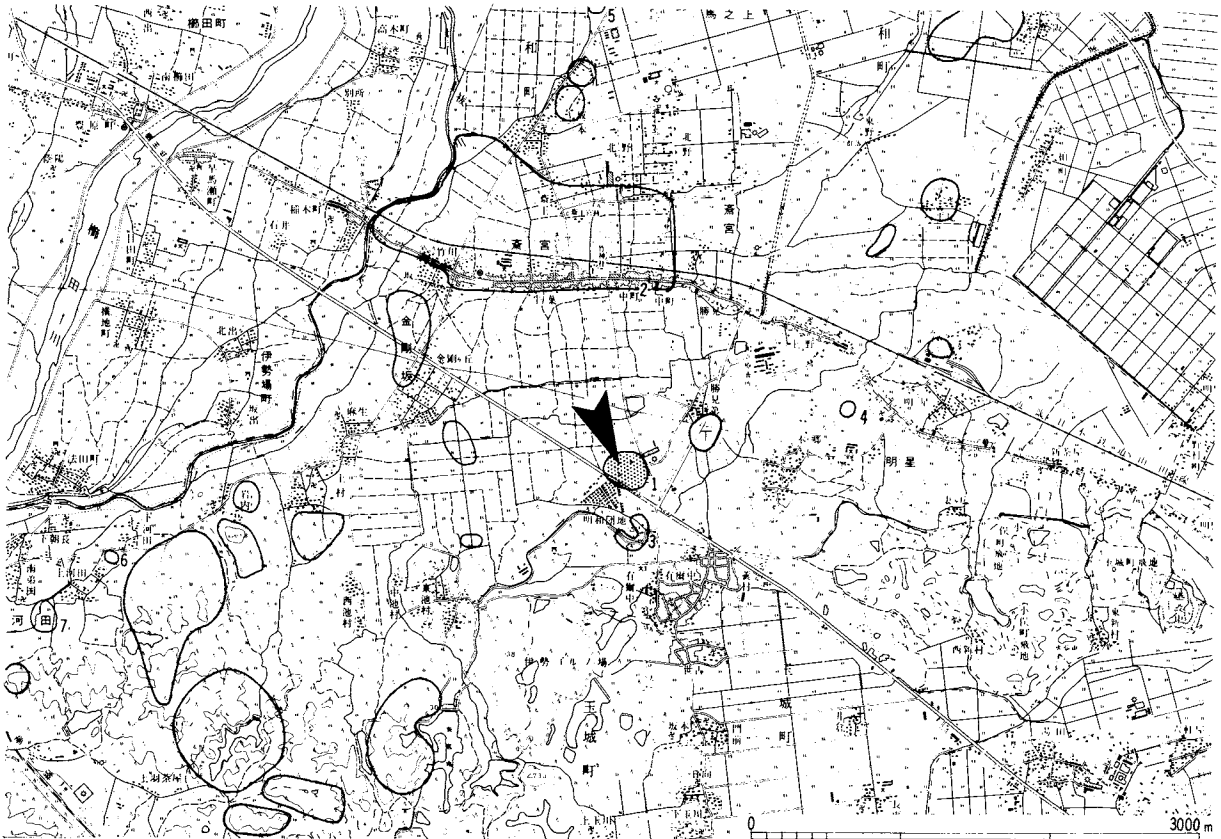
## 1. 位置と歴史的環境

紀伊山脈高見山にその源を発して東流する櫛田川は、伊勢平野南部に肥沃な沖積地を形成して伊勢湾に注いでいる。この櫛田川の下流右岸地域には、玉城丘陵と称される標高40~50m前後の丘陵地帯が広がっている。

堀田遺跡は、この丘陵の北辺部丘麓に所在する。倭名類聚抄に出てくる有式の郷、現在の有爾中の集落の北西に位置する。遺跡は、この有爾中から県道松阪伊勢線をを超えて続く洪積層の低位段丘面先端部にある。標高は14m前後で周辺水田面との比高差は約1~2mである。行政上は多気郡明和町大字有爾中字堀田1225番地に属している。

ところで、伊勢湾西部では大河川が平地に出る附近の台地上およびその背後の丘陵には、多くの遺跡がみられるが、この堀田遺跡の周辺地域も、県下

で有数の遺跡、古墳の所在密度の高い所である。旧石器時代から古墳時代に至る遺跡の分布については既にこれまで発掘調査された遺跡の報告書で述べられているところである。歴史時代に至ると堀田遺跡のすぐ南側で県道と相対する丘陵裾に発シA遺跡(3)がある。昭和47年に幼稚園建設に伴い試掘調査が行なわれ、奈良時代の土器焼成坑2基、掘立柱建物等を検出している。また、当遺跡北東1.5kmには、水池土器製作遺跡(4)がある。昭和51年に発掘調査が行なわれ、奈良時代の3群に分けられる土器焼成坑をはじめ、粘土を溜める土坑等、土器製作に必要な附属施設も含めた遺構が検出された。その遺跡の重要性から国史跡に指定されたことは、周知の事実である。また当遺跡から北方向に1.5kmで斎宮跡(2)が所在し、さらに1.5kmで粟垣内遺跡(5)がある。



第10-1図 遺跡位置図 (1:50000)



第10-2図 遺跡地形図 (1 : 6000)



第10-3図 発掘区平面図 (1 : 4000)

遺跡は縄文晩期から鎌倉時代にかけての複合遺跡であるが、土器焼成坑を検出し、土馬も出土している。また昭和53年発掘の多気町河田の東裏遺跡(6)では奈良から平安の9間×5間の掘立柱建物や緑釉風字硯、同じくカウジデン遺跡(7)でも4間×5間の四

面廂建物や土馬、斎串も出土している。これら最近の発掘により、斎宮跡に深い関連性をもつと考えられるその周辺遺跡が判明してきている。堀田遺跡もその立地面から、斎宮跡との関連性を考えながらその性格を考察していかねばならない。

## 2. 遺 構

遺構検出に至る基本的層序は第1層—表土(20cm)、第2層—茶黒色砂質土(約10cm)、第3層—暗褐色粘質土(遺物包含層20cm)、第4層—黄褐色粘質土(地山)である。検出は第4層直上においてであり、遺構面は西から東へ緩傾斜している。

今回の調査で検出された遺構は、古墳時代後期、奈良時代、平安時代後期の3時期に大別できる。以下、各々について述べていきたい。

### 〈古墳時代後期の遺構〉

#### 1. 竪穴住居

**SB1** 調査区の南寄り中央部で検出されたもので東西4.2m、南北4.0mの方形プランで主軸をN60°Eにおく。遺存する壁高は10cm程度と低い。主柱穴は径20cm、深さ20cm程の4穴で構成され、柱間は

2.3mである。柱穴以外の附属施設はみられない。

**SB2** 調査区北西隅で検出された南北4m以上の方形プランの1部であり、主軸をN60°Eにおく。東壁には、径1m、深さ0.5mの方形の貯蔵穴が設けられている。その他の施設はみられない。**SB3** **SD41**に切られる。

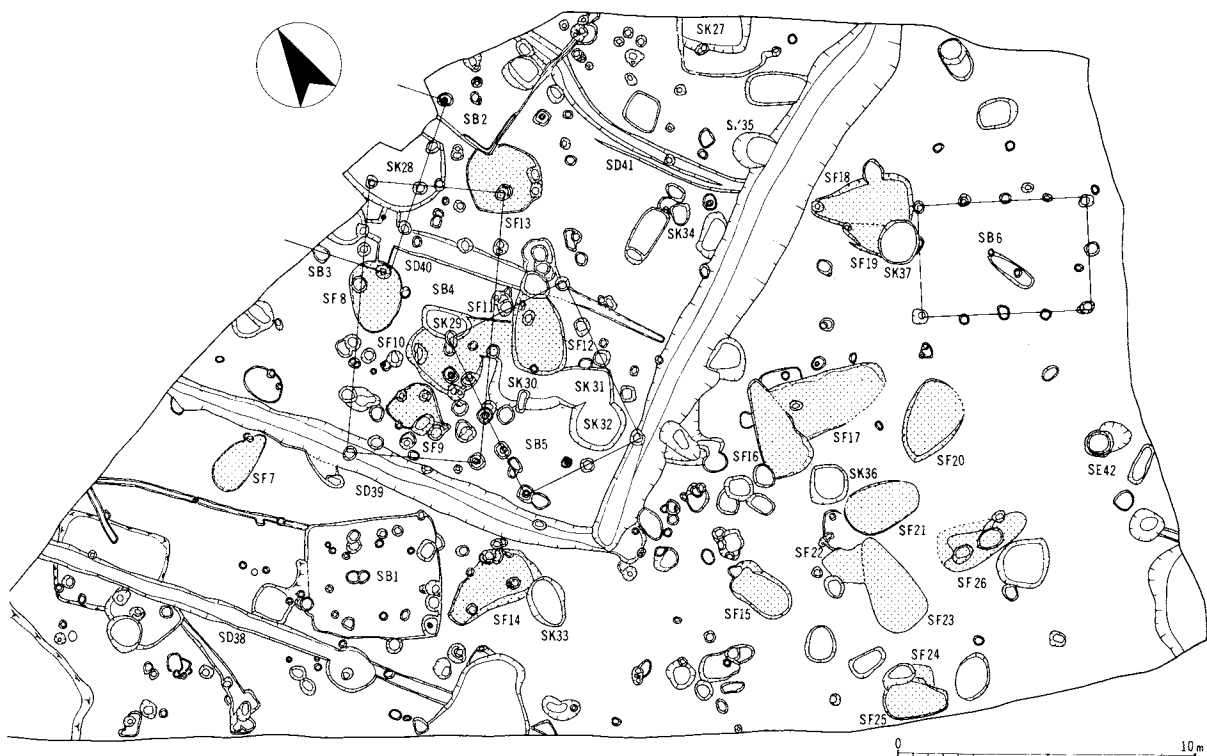
#### 2. 土 塚

**SK27** 調査区北辺部で検出された径2.5m、深さ40cmの方形土塚で、南側に幅80cm、深さ20cmのテラスを有している。

### 〈奈良時代の遺構〉

当遺跡の主流をなす奈良時代では、掘立柱建物3棟、土器焼成坑20基、土塚10基、溝4条がある。

#### 1. 掘立柱建物

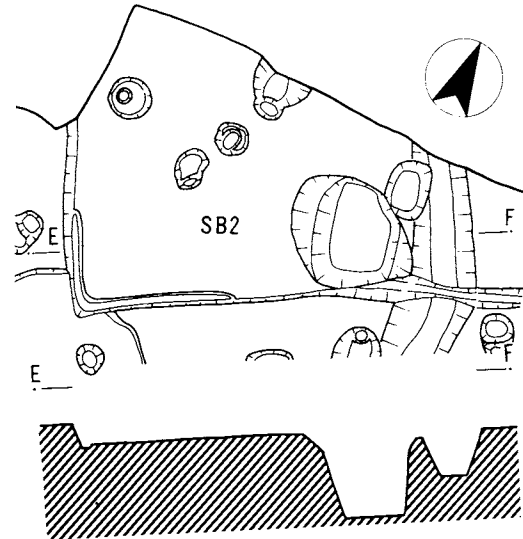
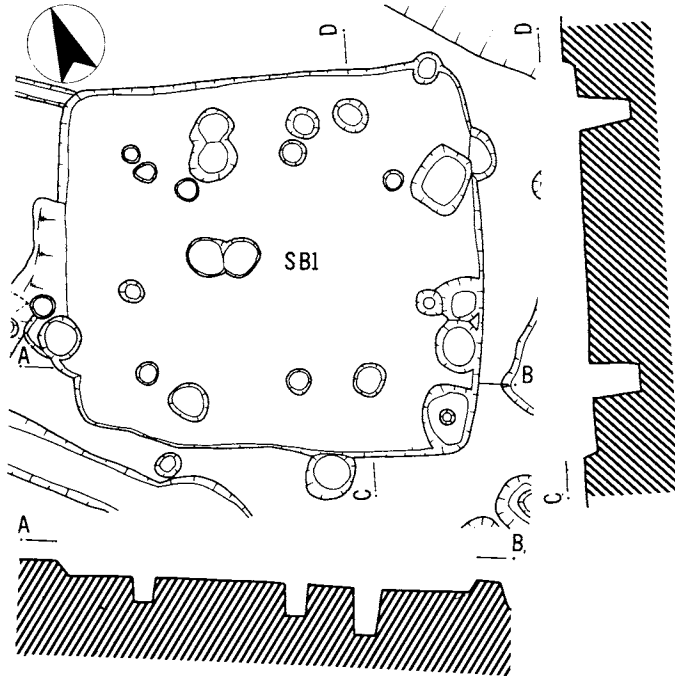


第10-4図 遺構平面図(1:250)

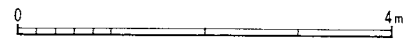
**SB3** 桁行4間・梁行1間を確認したプランが発掘区外へ延びる、主軸方向N60°Eの南北棟建物である。柱穴は径40cm、深さ20cmの円形掘形である。柱間は桁行1.6m等間で梁行は2.2mである。SB

2を切り、SF8に切られる。

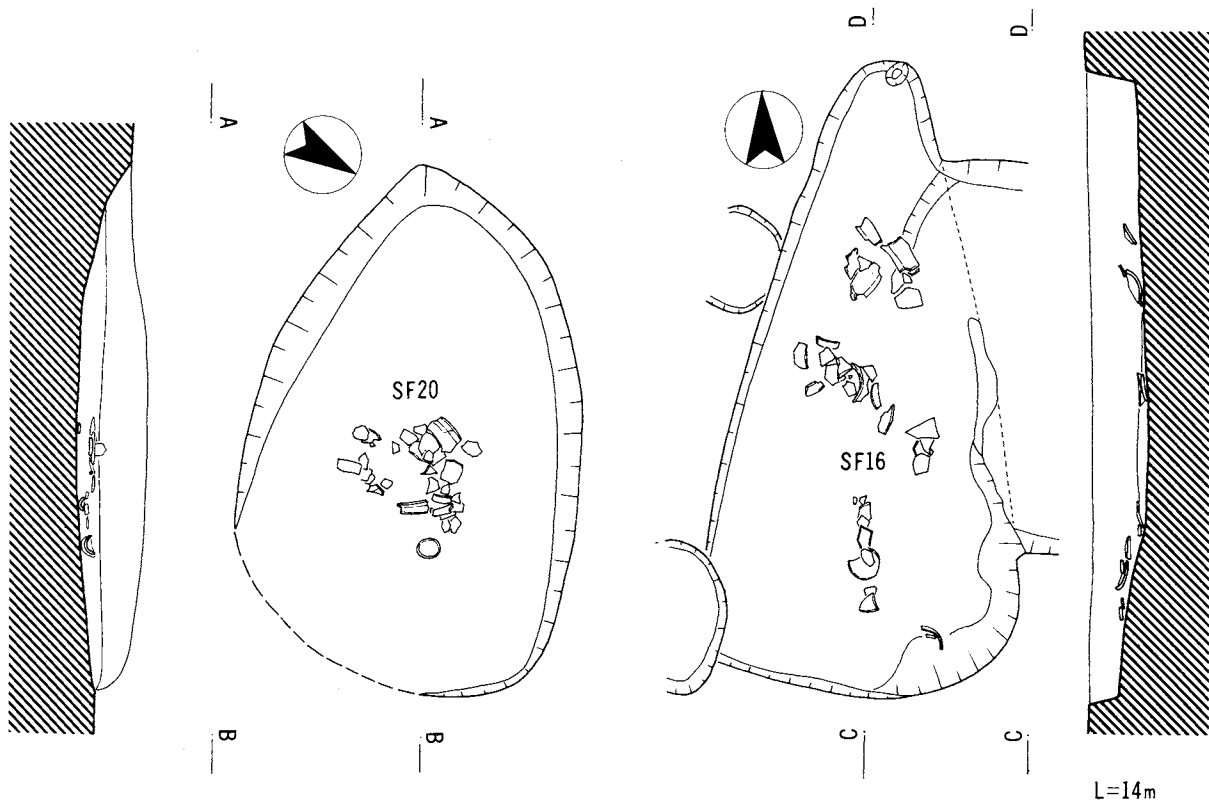
**SB4** 桁行5間×梁行2間の南北棟建物である。主軸方向はN60°Eをむく。柱間は、桁行1.8m、梁行2.1mである。柱穴は径40~50cm、深さ20cmの円



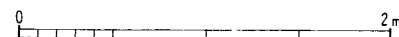
L=14.20m



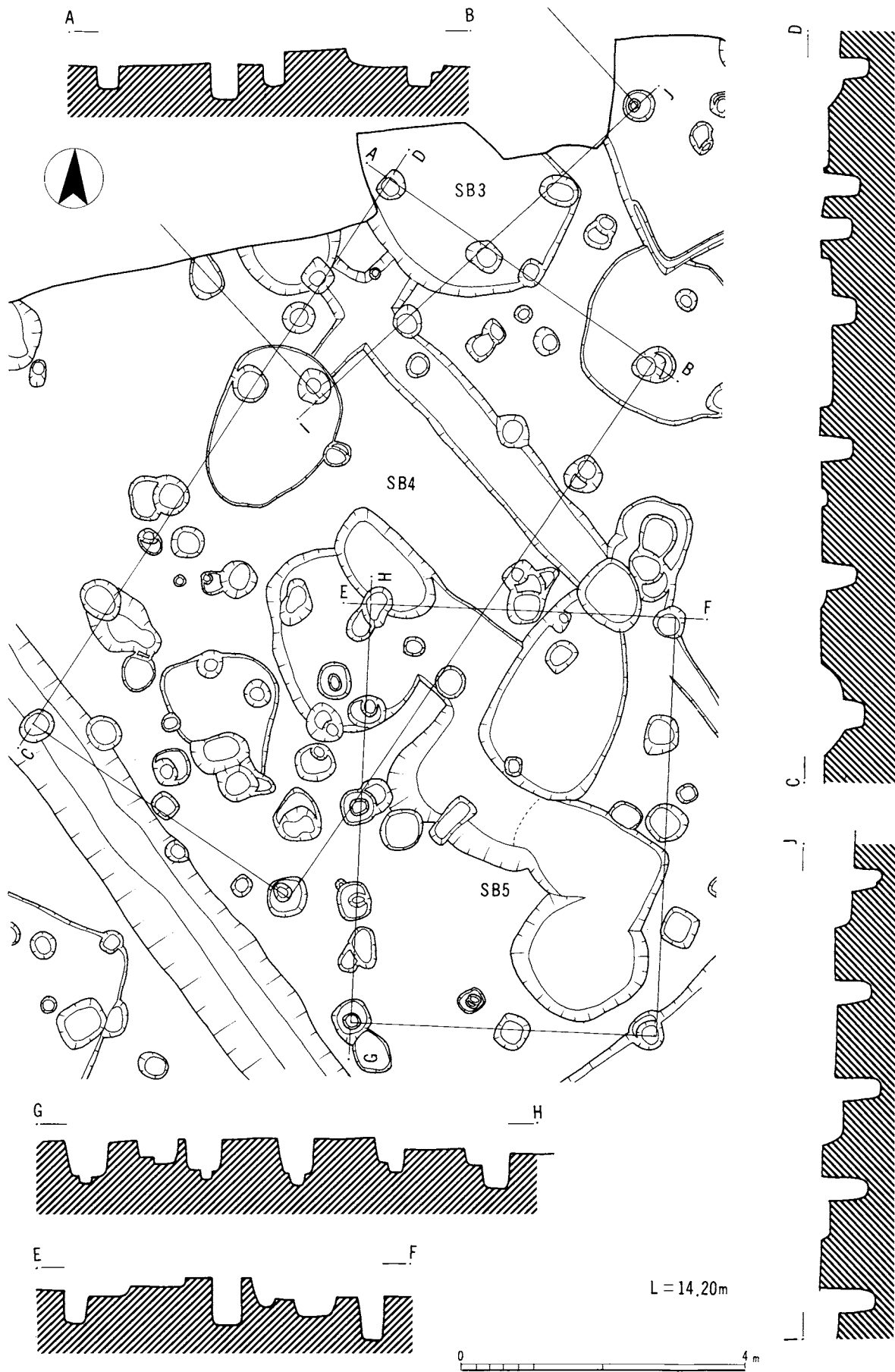
第10-5図 SB1・2実測図(1:80)



L=14m



第10-6図 SF20・16実測図(1:40)



第10-7图 SB3~5实测图(1:80)

形掘形で、SB5・SF8に切られる。

**SB5** 桁行4間×梁行2間の南北棟で、主軸方向はN60°Eを指す。柱間は、桁行1.2～1.7m、梁行2.1mと桁行で不等間となる。柱穴掘形は、径30cm、深さ60～70cmと深く、桁行西列では4穴に径10cm程度の柱痕跡が残る。

## 2. 土器焼成坑

**SF7** 長径2.2m、底径1.2m、深さ5cmの浅い隅丸二等辺三角形を呈し、焼面は極めて薄い。主軸方向はN62°Eを指す。

**SF8** 長径2.3m、底径1.7m、深さ20cmの楕円形を呈し、主軸方向はN18°Eである。SB3と重複しSB3が古い。

**SF9** 長径2.0m、底径1.5m、深さ20cmの隅丸二等辺三角形を呈する。主軸はN26°W。

**SF10** 長径2.5m、底径2.2m、深さ20cmで楕円形プランであり、SF11・SB4・5を切り、SK23に切られている。焼土面は底面が厚く2～3cm、側壁は1cm未満で赤褐色を呈する。主軸はN21°W。

**SF11** SF10・12に切られるプラン不明確の焼成坑である。

**SF12** 長径2.9m・短径1.5m・深さ20cmの隅丸二等辺三角形を呈するものである。SF11・SK30を切る。焼土面は厚く底面で約8cm、側壁で2cm程で赤褐色によく焼けている。主軸はN61°Eの方向を指す。

**SF13** 径2.2m程度の円形を呈し、深さ20cmである。焼土面は薄く、底面は部分的に焼けている程度である。

**SF14** 長径3.2m、底径1.8m、深さ20cmの隅丸二等辺三角形を呈し、主軸方向はN112°Wを向く。焼土面は、よく焼けており厚さ3cm程度である。

**SF15** 長径2.1m、底径1.2m、深さ20cmの楕円形プランであり、主軸方向はN33°Wを向く。

**SF16** 発掘区中心部やや南西寄りに位置する焼成坑である。長径3.4m、底径1.7m、深さ14cmの隅丸二等辺三角形を呈する。主軸方向はN6°Wである。焼成坑の側壁から底面にかけては、よく焼けて硬質化し、焼土面となっている。SF17と重複するが、切り合い関係からSF17よりも新しいことを確認した。なお焼成坑の中央部から、少量の土師器長

胴甕、把手付鍋、椀が底面直上で出土している。また、これらとSK36の出土遺物は接合するものがある。

**SF17** 復元長径約3.9m、底径2.0m、深さ18cmで隅丸二等辺三角形を呈する。主軸方向はN85°Eである。焼土面は、SF16同様よく焼けて硬質化しており、また埋土には灰色粘土ブロック、炭化物、焼土粒を混入している。

**SF18・19** 2基重複しており、SF18は長径3.4m、底径1.8m、深さ25cmで隅丸二等辺三角形を呈する。埋土の観察から、SF19より新しく、SK38より古いことを確認した。SF18の主軸方向はN74°Wである。

**SE20** 長径2.7m、底径1.8m、深さ8cmで隅丸二等辺三角形を呈する。焼土面は薄い。埋土には灰色粘土ブロック、炭化物が混入している。主軸方向はN134°Wを指す。焼成坑の中央部には、少量の土師器甕、椀（完形）が底面直上から出土している。

**SF21** 長径2.6m、底径1.7m、深さ5～10cmの隅丸二等辺三角形を呈するが、どちらかといえば楕円形に近い。主軸方向はN89°Eである。

**SF22・23** 2基が重複しており、SF23は長径3.4m、底径1.8m、深さ4cmで、隅丸二等辺三角形を呈する。SF22は焼土面だけで掘形は無いが、SF23によって切られている。なおSF23の主軸方向はN12°Wである。

**SF24・25** 2基が重複しており、SF25は長径2.2m、底径1.2m、深さ8cmで、楕円形に近い隅丸二等辺三角形を呈する。SF25は、炭化物が多量に混入したSF24より新しい。主軸方向はN106°Eである。

**SF26** 深さの無い焼土面の残りは不整形であるが、おそらく隅丸二等辺三角形を呈するものと推定される。現存長3.2m、底径約1.6mで、主軸方向はN83°Eである。

## 3. 土坑

**SK28** SB2の南西に位置する径2.8m、深さ12cmの円形土坑である。SB3、4の柱穴と重複関係にあるが、埋土が暗褐色粘質土と同一であるために新旧関係は不明である。

**SK29** SF10に切られる長径1.7m、短径1.0

m、深さ20cmの楕円形土壇である。

**S K 30～32** 調査区の中央からやや北側に位置する3基の土壇が重複しているものである。この周囲は調査区内で最も遺構密度が高いところである。その新旧関係はS K 30が一番古く、次にS K 31となりS K 32が新しい。規模はS K 32が径1.8mの円形、S K 31が2.2m×1.5mの楕円形、S K 30は不明となる。深さはすべて20cm前後である。なおS K 32から土師器長胴甕(11)が出土している。

**S K 33** S B 1の南東方向に位置し、S F 14の一部を切っているものである。その規模は長径1.8m、短径1.3m、深さ23cm～30cmであり、形は楕円形を呈している。埋土は基本的に2層であり、上層は暗褐色粘質土、下層は灰白色粘土が堆積している。

**S K 34** S D 39～41に囲まれた位置にある、径60～70cm、深さ26cmの楕円形を呈するものである。この土壇内から土師器椀(完形)や長胴甕片が多数、底面から若干浮いた状態で出土している。

**S K 35** 調査区の北東付近でS D 39と重複するものであるが、その新旧関係は不明である。規模は径

1.4m、深さ50cm、楕円形を呈している。土師器椀(19)、長胴甕が出土している。

**S K 36** 7基の焼成壇がある調査区の中央から少し南東側に位置しているものである。その規模は径1.2m、深さ15～27cmであり、隅丸方形を呈する。この土壇内からは、小片ながら土師器甕、鍋が出土している。

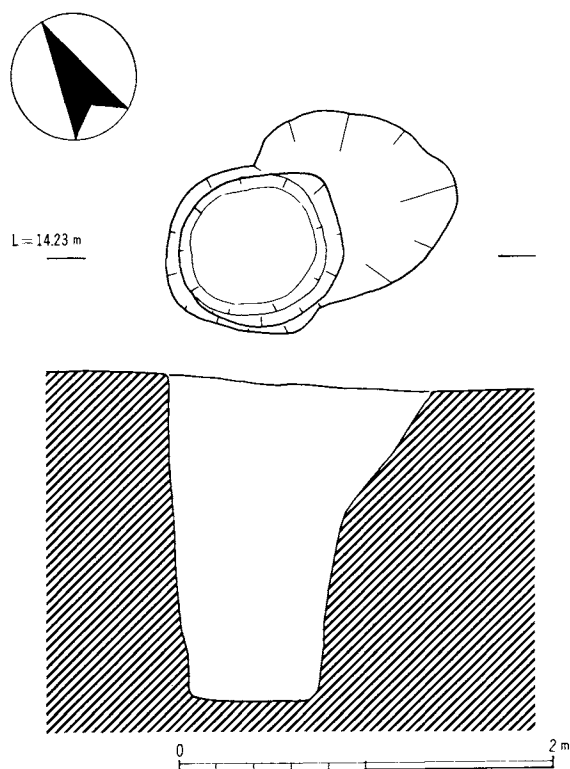
**S K 37** 径1.4m、深さ64cmの円形土壇でS F 18・19より新しい。

#### 4. 溝

**S D 38～41** 調査区の中央から少し南西にあたる位置をコーナーとして、北東と北西へ直線的に走る溝がS D 39である。その鍵状になる内側に6～7mの間隔をあけて、S D 39北西溝と平行して走るのがS D 40、41である。これらは南端でS D 39に合流する。S D 38は、さらにS D 39の南西側約6mにあり、S D 40、41同様、北西へ平行して走る溝である。溝の幅はS D 39が0.8m～2.2m、深さ25cm～45cm、他の3溝は幅50cm～84cm、深さ5cm～15cmである。

名称	形態	規模			焼成壇の状態	主軸方向	備考
		長径(m)	幅(m)	深さ(cm)			
S F 7	隅丸二等辺三角形	2.2	1.5	5	焼土面極めて薄い。	N 62° E	
〃 8	楕円形	2.3	1.7	20	——	N 118° E	S B 3を切る
〃 9	隅丸二等辺三角形	2.0	1.5	12	——	N 26° W	
〃 10	楕円形	2.5	2.2	17	——	N 21° W	S F 11を切る S B 4・5と重複
〃 11	——	—	1.4	8	——	——	S F 10・12に切られる
〃 12	隅丸二等辺三角形	2.9	1.7	4～10	焼土面の厚さ8cm程度。側壁もよく焼けている。黄色粘土・炭化物混入。	N 10° E	S F 11・S K 30を切る
〃 13	円形	2.4	2.2	10	焼土面の厚さ2cm。	——	
〃 14	隅丸二等辺三角形	3.2	1.8	6～15	〃	N 112° W	
〃 15	楕円形	2.1	1.2	14	焼土面若干あり。	N 33° W	
〃 16	隅丸二等辺三角形	3.4	1.7	14	側壁から底面にかけてよく焼けている。土器出土。	N 6° W	S F 17を切る。 S K 36出土土器と接合。
〃 17	〃	3.9	2.0	18	——	N 85° E	
〃 18	〃	3.4	1.8	25	——	N 74° W	S F 19を切る。 S K 38に切られる。
〃 19	——	—	—	25	——	——	
〃 20	隅丸二等辺三角形	2.7	1.8	8	焼土面は薄く、灰色粘土、炭化物が混入。	N 134° W	
〃 21	〃	2.6	1.7	5～10	——	N 89° E	
〃 22	——	—	—	0	全面に焼土。	——	S F 23に切られる。
〃 23	隅丸二等辺三角形	3.4	1.8	4	——	N 12° W	S F 22を切る。
〃 24	——	—	—	0	炭化物混入多し。	——	
〃 25	隅丸二等辺三角形	2.2	1.2	8	——	N 106° E	S F 24を切る。
〃 26	〃	3.2	1.6	0	——	N 83° E	柱穴に切られる。

第10-1表 土器焼成壇一覧表



第10-8図 SE42実測図(1:40)

### 〈平安時代後期の遺構〉

#### 1. 掘立柱建物

**S B 6** 調査区の東端近くに位置する4間×2間の東西棟である。その規模は桁行5.6m×梁行3.5m、柱間寸法は桁行1.7m、梁行1.4mである。西側の梁行、中央の柱穴は不明確となっている。柱穴は円形を呈し、掘方は径25cm~46cm、深さ21cm~45cmである。

#### 2. 井戸

**S E 42** 調査区の南東近くに位置する径90cm、深さ1.7mの円形素掘りの井戸である。井戸の東側には、井戸に接する楕円形土壇がある。この掘形は、東端が浅く井戸に向かって斜めに深くなっていく。井戸一部の崩れであろう。井戸内からは、コンテナ箱(34cm×54cm×15cm)11箱分の遺物が出土した。その出土状況は、埋土の中程あたりから底面近くまでに集中していた。遺物の大部分は、土師器鍋が占めており、他に土師器皿、土製支脚、山茶碗、白磁碗小片がある。

## 3. 遺物

堀田遺跡から出土した遺物には、古墳時代後期の土師器・須恵器、奈良時代後期の土師器、平安時代後期の土師器・陶磁器・土製支脚と鎌倉時代の瓦器碗がある。

特に土器焼成壇出土の土師器は、少量ではあったが奈良時代前半の土器生産の一端を知るうえで貴重な資料である。さらに、平安時代後期の遺物としてS E 42出土土器類は、若干の混入土器を除いて該期の一括資料であり、台付皿と土製支脚は類例のすくないものである。

### 1. 古墳時代後期の遺物

#### A. 土師器

**高杯(1)** 口径17.6cm、底径12.5cm、高さ12.4cm。直線的に外反する杯部の口縁端部は、やや丸味をもち、ゆるやかに外反する脚部の端部も内側に丸味をもつ。脚部は円板充填で接合し、内側の上部を絞っている。全体に磨滅して調整手法は不明である。淡

灰~淡黒色を呈し、胎土に小石を含むが精良で、焼成は良好である。ピット出土。

#### B. 須恵器

**杯蓋(2~5)** 土壇とピットから出土したもので、形式的に(2・3)は5世紀末頃、(4・5)は6世紀代に比定される。(2・3)は口縁部内面に段を作り、天井部のヘラケズリは逆時計方向である。(4)は口径15.4cm、高さ5.4cmのもので、天井部全体に逆時計方向のヘラケズリが施された6世紀前半代のものである。(5)は粘土紐の痕跡が目立ち、ヘラケズリはない。

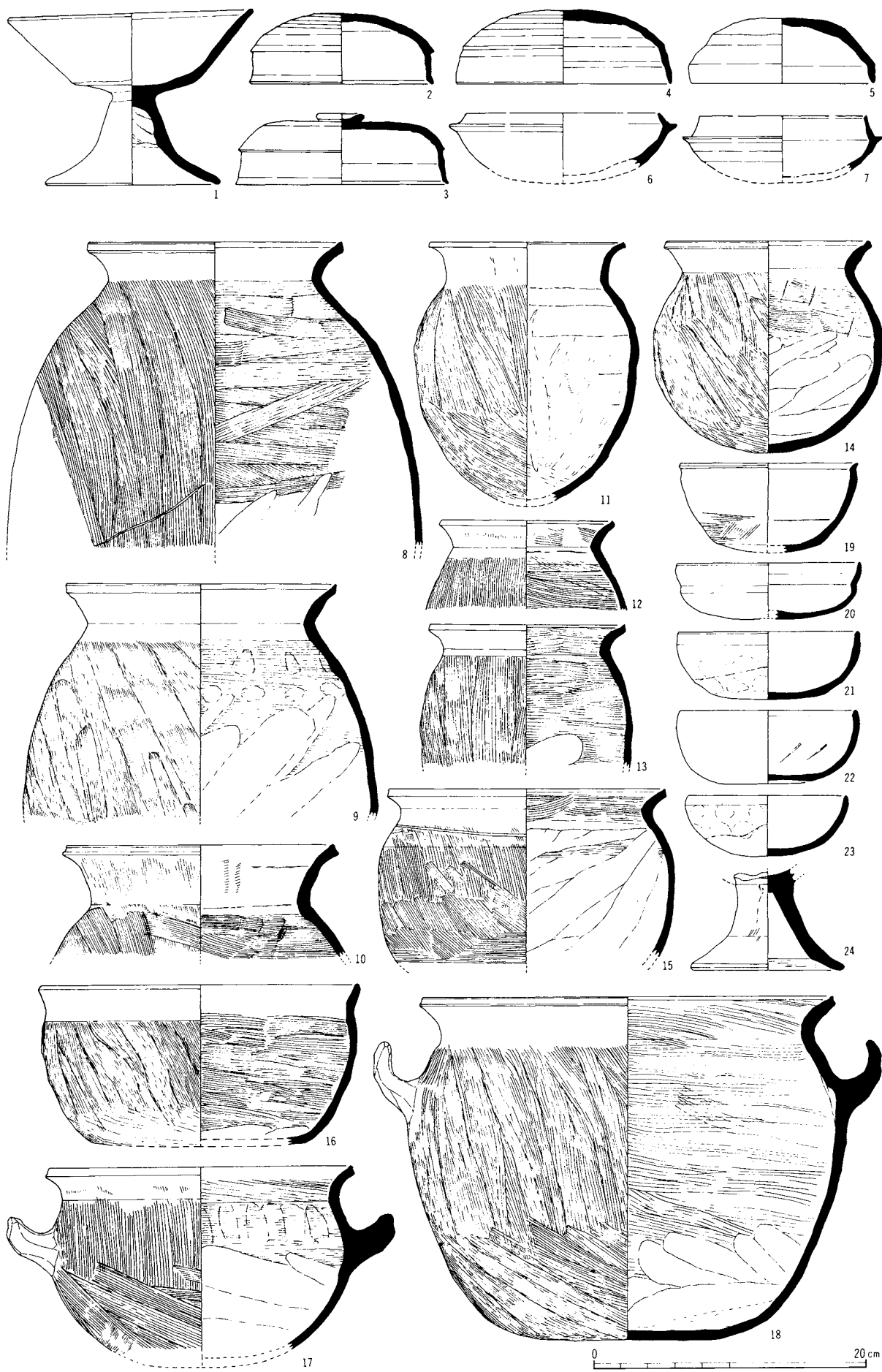
**杯身(6・7)** とともに小破片のため推定復元したが、(7)は口縁部内面に段を作り、底部をひろくヘラケズリしたものである。

### 2. 奈良時代の遺物

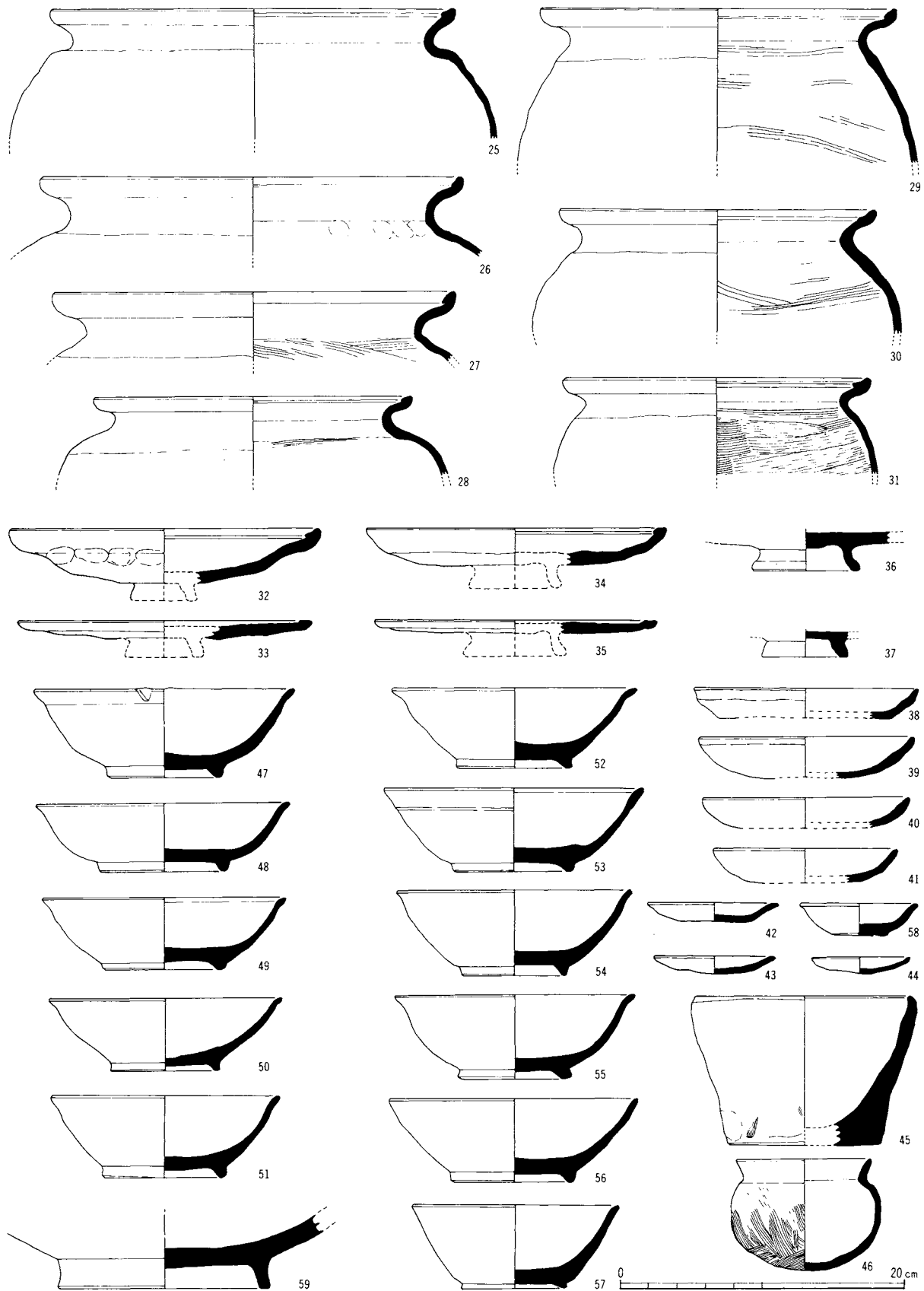
#### A. 土師器

**甕A(8~10)** 口径約18~20cmの長胴甕で、とも





第10—9图 土器実測図 (1 : 4 S F出土8~10・12・15・17・20~24)



第10-10図 土器実測図 (1 : 4)

に焼成塚から出土したものである。完成品はないが、く字形に強く外反する口縁部の端部をつまみ上げて面を作る。大きく内弯する胴部は、輪積み粘土の凹凸を内外面からハケ目調整し、内面は底部から上方へ向ってヘラ削りする。淡灰～黄褐色を呈し、胎土は精良で、焼成良好である。なお、胴部の最大径位の1箇所に黒斑を持つものもある。少量ではあるが、胴部にヘラ描き記号を持つものがあるが、破片が多いため全容は不明である。

**甕B** (11～13) 口径約12～14cmの小型甕で、(12)は焼成塚から出土したものである。口縁端部をつまみ上げや、ハケ目調整、胎土、色調等は甕Aと同じである。

**甕C** (14) 口径14.6cm、高さ15.4cmの小型甕で、胴部は球形である。口縁部がやや肥厚し、端部を丸くつまみ上げている。胴部内面のヘラケズリやハケ目調整、胎土、色調等は甕Bと同じである。包含層出土。

**壺** (46) 口径9.4cm、高さ8cmの小型甕で、平安時代後期のS E42から一点出土したもので混入であろう。短く外反する口縁部と球形の胴部からなり、外面は細かいハケ目調整し、内面はナデつけている。なお外底部に平行する2条のヘラ描き直線があり、記号文と思われる。

**鍋A** (18) 口径29.8cm、底径約13cm、高さ24.8cmの把手を持つ大型鍋である。口縁端部をつまみ上げ、胴部をハケ目調整し、外底面は下から上方向へハケ目で器壁を整えている。内面はやや粗いハケ目で調整した後、底面をていねいに上へ向ってヘラケズリする。2個の把手は大きく屈折し、全体をユビオサエで整形している。なお、外底面に平行する2条のヘラ描き直線があり、記号文と思われる。包含層出土。

**鍋B** (15・17) 口径約20～22cmの小型鍋で、(15)は破片のため把手付と思われる。調整技法、胎土、色調は甕と同じである。

**鍋C** (16) 口径23cm、底径約15.4cm、高さ約11.8cmの小型鍋で、短く直立する口縁端部はや、丸味を持つ。胴部の内外面をハケ目調整するが、それぞれ原体が異なっている。内底面の全面をていねいにヘラケズリし、甕や鍋の調整技法、胎土、色調と同じ

である。

**椀A** (19) 口径12.8cm、高さ約6.4cmで、口縁部は短く外反し端部は丸味を持つ。ゆるやかに内弯する深い体部には、粘土紐巻上げ痕が残り、体部の下半に細かいハケ目調整がある。全体にていねいにナデつけており、底部はユビオサエの後にナデつけている。淡灰褐色を呈し、胎土は良好で焼成はやや軟質である。

**椀B** (20) 口径13.4cm、高さ約4cmで、体部に粘土紐巻上げ痕が残る。口縁部はやや屈折し、調整は全体にナデつけている。灰白褐色を呈し、焼成塚出土。

**椀C** (21～23) 口径約11～14cm、高さ約4.4～5.2cmで、口縁部がゆるやかに内弯し、体部が半球形のものである。精粗の二種類があり、(22)は胎土精良で赤褐色を呈し、(21・23)は胎土に砂粒を含み、淡褐色を呈し、体部外面に粘土紐巻上げ痕とユビオサエ痕が残る。両者とも口縁部をヨコナデしたほか、全体にナデつけている。焼成塚出土。

**高杯** (24) 底径10.4cmの脚部破片で、ゆるやかに外反する筒部の外面上半はユビオサエ、下半はヨコナデしている。内面は下半に浅いハケ目が残り、上半は横位でヘラケズリする。焼成塚出土。なお、図示しなかったが、包含層の出土品に脚部を七角形に面取りした例が1点ある。

**甑** 図示しなかったが口径約25cmで口縁端部を短くつまみ上げた砲弾形の甑が数例出土しており、外面を縦位のハケ目、内面の上半を横位のハケ目で調整し、下半を下から上へ幅広くヘラケズリしたものがあ。胎土、色調は長胴甕と同じである。

以上が奈良時代前半の土師器であるが、甕A・鍋A・B、壺の胴部、底部にヘラ描きを持つものが若干ある。平行する2条直線、3条の直線が一端で交叉する例が多く、ラセン条紋は鍋の底部に一例があり、鍋Aの口縁部内面に十字状の記号紋を持つものが一例ある。

### 3. 平安時代後期の遺物

#### A. 土師器

**鍋** (25～31) 大小の2種類がある。大型例は口径約25～28cm、小型例は口径約22cm以下のものである。

「く字状」に強く外反する口縁端部を内側に短く折り返しておさえたもので、口縁部が肥厚する。胴部は大きく内弯するが、底部まで復元できるものは皆無である。胴部内面に粗いハケ目調整が残るが、他はナデつけられており、外面全体が付煤している。胎土に小石を多く含み、焼成は良好である。淡茶褐色。

**台付皿A** (32・34) 口径約20～22cmで、ゆるやかに内弯する口縁端部を内側に短く折り返して肥厚させるのは鍋と同じで、出土量はすくない。底部は、破片(36・37)から復元したが、復元高は約4.2cmである。全体に凹凸が目立ち、ユビオサエとヨコナデによって成形している。胎土、焼成、色調は鍋と同じで、外面全体に付煤している。

**台付皿B** (33・35) 口径約20cmで、台付皿Aと比較して皿部が平坦なもので、口縁端部を折り返しておさえるが上面は平坦である。調整技法、胎土、色調とも台付皿Aと同じである。出土量はすくない。

**皿A** (38・39) 口径約15～16cmで、口縁部のみをヨコナデし、他はユビオサエのままである。淡黄褐色を呈し、胎土に細砂粒を含むが焼成良好である。

**皿B** (40・41) 口径約12～14cmで、磨滅のため調整は不明であるが、全体にユビオサエのままである。淡黄褐色を呈し、胎土に細砂粒を含むが焼成良好である。

**皿C** (42～44) 口径6.5～9cmで、調整技法、胎土、色調は皿Bと同じである。

**鉢** (45) 口径15cm、底径10.6cm、高さ10.4cmで、全体に厚手の鉢である。体部は直線的に外反し、口縁端部を僅かに内弯させ丸くおさめている。全体にユビオサエの凹凸が残り、体部下半にハケ目が僅かに残る。平坦な底部は、未調整のままである。なお、図示しなかったが、糸切底の椀か鉢の破片が1点あり、胎土に砂粒を含む茶褐色を呈した厚手の土器である。

## B. 陶磁器

**山茶椀** (47～57) 口径14.4～18.2cm、高さ4.8～6.2cm、高台径約7.4～8.6cm。体部から口縁部にかけてゆるやかに内弯し、口縁端部を僅かに外反させたもので、端部は僅かに肥厚するものが多い。付高台は外に踏んばった短い逆台形状で、(50・52・54

57) は幅が狭く、他は幅が広い。高台に靱殻痕を持つもの(50・55)は、井戸内出土の山茶椀のうち約 $\frac{1}{2}$ 位である。体部の成形はロクロ水挽きにより、内底面を円状にナデつけたものも多く、底部に糸切り痕を残すものも多い。(47)は完形品ではないが、口縁部の2箇所に押圧痕が僅かに認められ、輪花の退化したものである。輪花椀はこの1点のみである。(55)も完形品ではないが、口縁部内面に灰釉の付け掛け痕があり、付け掛けはこの1点のみである。

以上の山茶椀は、すべて胎土に細かい砂粒を含んでおり、色調はくすんだ灰白色を呈している。なお、内面に二次的な付煤を持つものも多く、あるいは灯明用としていたものかもしれない。

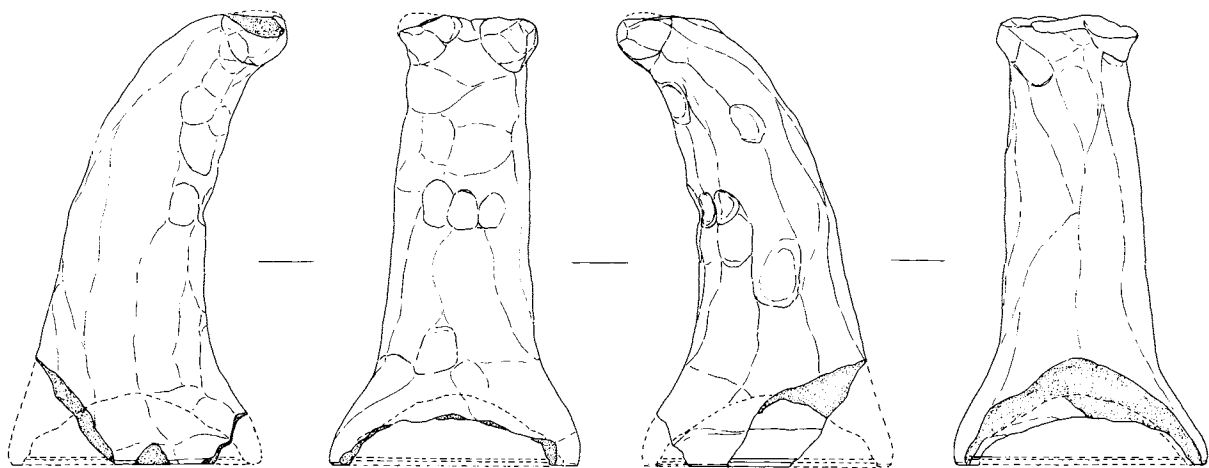
**山皿** (58) 口径8cm、底径4cm、高さ2.2cm。体部から口縁部にかけてゆるやかに内弯し、口縁端部は僅かに外反する。底部は高さ0.3cmと低く作り出し、糸切り痕が残る。全体にロクロ水挽きにより成形し、口縁部内面は灰緑色の自然釉があり、やや厚手である。包含層出土。

**鉢** (59) 大型鉢の底部破片で、推定高台径は約14.4cmである。外側にしっかり踏んばる付高台は、2.1cmと高く、端部は丸味を持つ。体部は粘土紐による成形で、下半は逆時計廻りでヘラケズリされるが、底部は未調整であり、付高台はていねいにヨコナデされている。内面はヨコナデされ、全体に滑らかになっている。厚手作りで暗灰色を呈し、僅かに砂粒を含むが胎土は精良で、焼成は堅質良好である。なお、別個体の口縁部片があるが、丸味を持つ端部がやや外反する形式である。

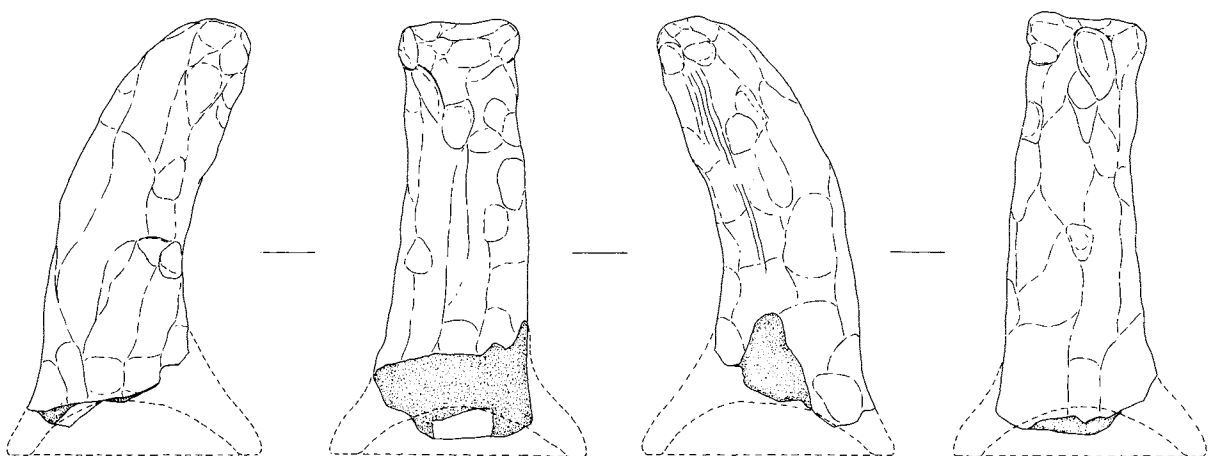
**白磁椀** 小破片のため図示しなかったが、底部から高台にかけての破片である。ゆるやかに内弯する体部に輪状高台(現高1.2cm)を作り出したもので、体部外面にヘラケズリがある。体部内面と見込みに10～11条の浅い櫛描き曲線(猫描手文)が配され、見込みと体部の境に浅い圈線を描いている。素地は灰白色を呈し、堅質で緻密であり、内面全体と高台から0.6cm幅を除く外面に乳白色ガラス状の釉が掛けられている。

## C. その他

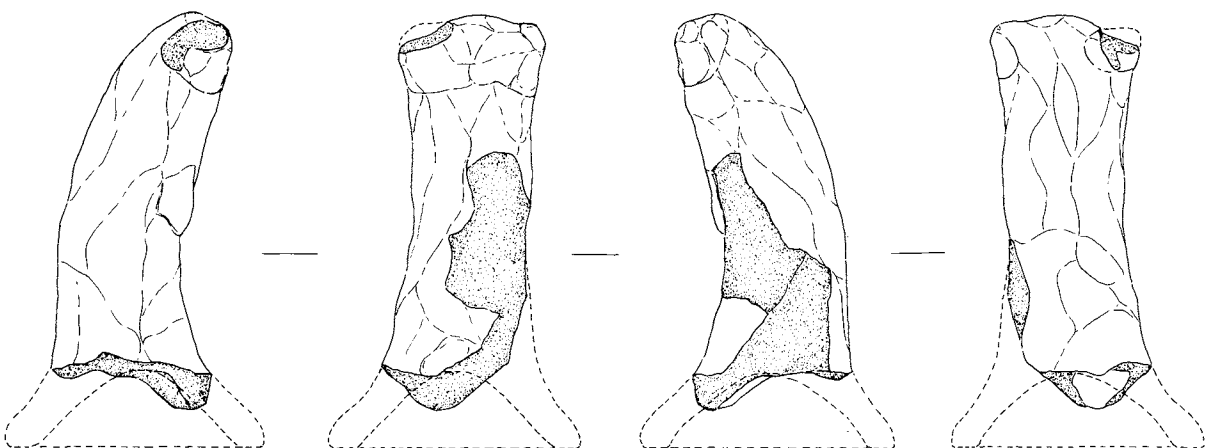
**土製支脚** (60～71) 土師質のいわゆる「土製支脚」と呼ばれているもので、大半はSE42の埋土内の出



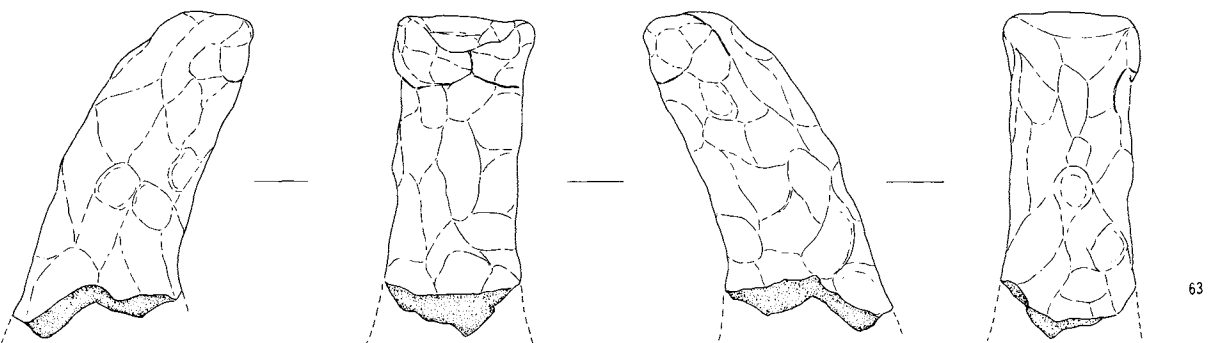
60



61



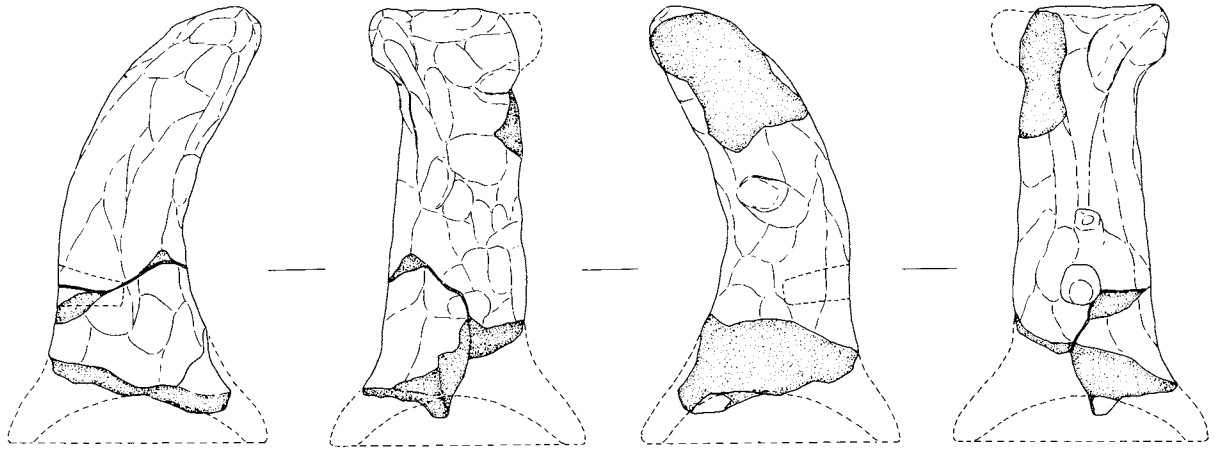
62



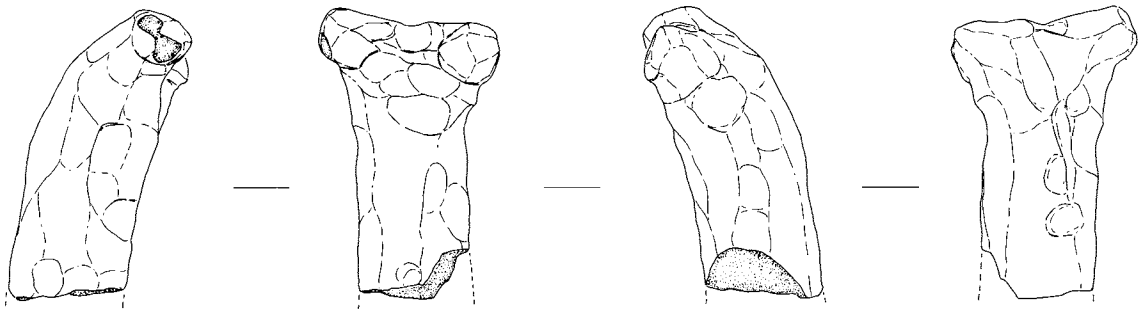
63

第10—11图 土製支脚実測図 (2 : 3)

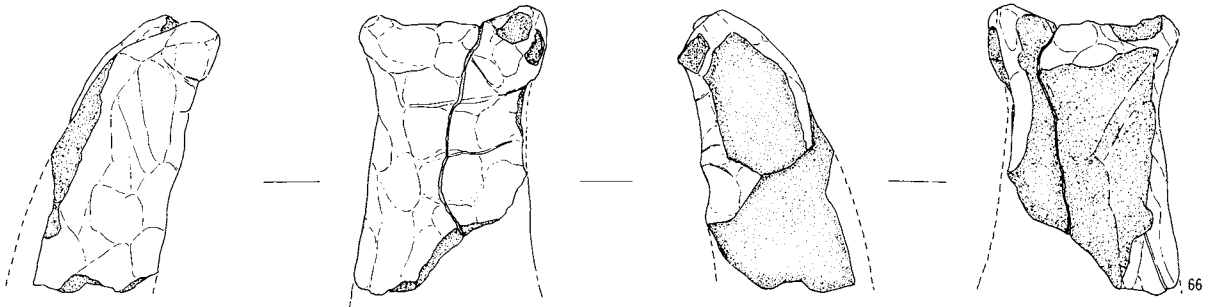
0 15 cm



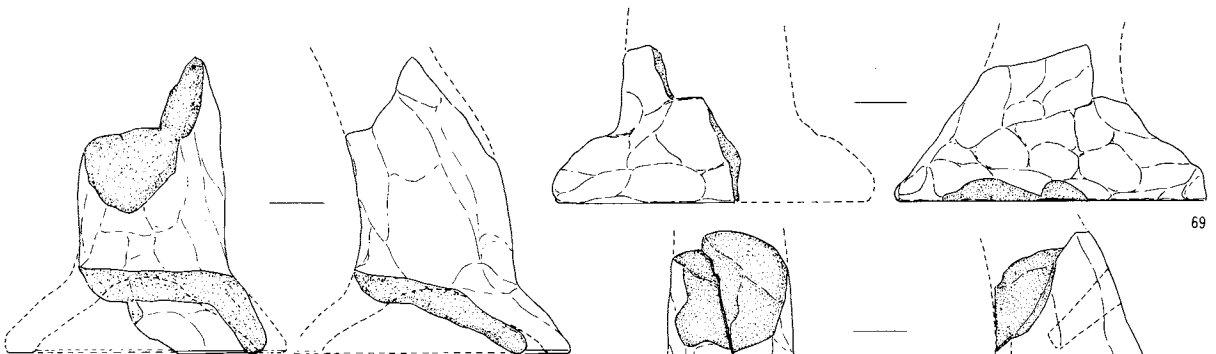
64



65

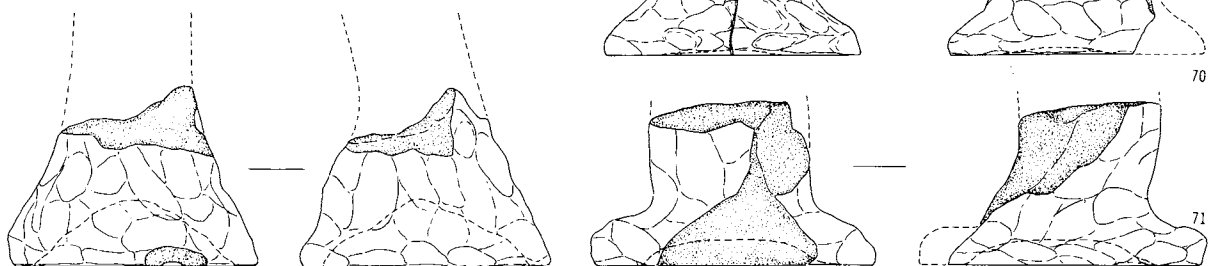


66



67

69



68

70

71

第10-12図 土製支脚実測図 (2:3)

0 15 cm

土であるが、包含層からも少量出土している。

図示したもののうち、(60)がほぼ完形品であり、他は全て破片であり、全体に火熱のため赤色化し、付煤している。正面と側面の形態が異なるため、(60)を例にとって形態を述べることにする。

○正面 ゆるやかに外反した裾が下方近くでやや内弯して底径約9.8cmの底部に至り、裾から上方に向うにつれてややすぼまる円柱状の胴部からなり、その上端が二又に前方につまみ出されて小突起を作る。小突起の間は、僅かにくぼんでいる。上端幅5.6cm、高さ17.7cmである。

○右側面 裾広がり底部から上方に向かうにつれてゆるやかに右側へ弯曲して上端部に至り、その右側先端に小突起がつまみ出されている。

以上が基本的な形態であるが、小突起が大きく左右に広がるもの(64~66)と、そうでないもの(60~63)とがあり、上端部の幅は4.6~7.4cmである。底部は、底面がほぼ平坦なもの(69・70)と、上げ底のもの(60~62・64・67・68・71)の2種類があるが、底径は9.8~12.4cmとほぼ均一性がある。

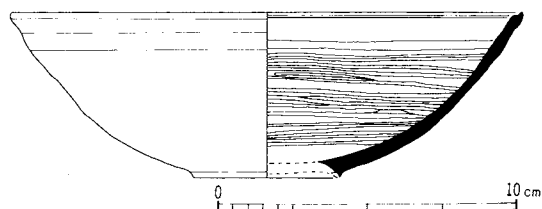
成形は手捏ねで全体に指頭圧痕が多数残り、他は

不定方向にナデつけられ、胎土に小石を多く含み粗雑な作りである。なお、背面の下部に円孔を持つもの(65・70)がある。直径1.2~1.5cmで、斜目下方に穿孔されているが胴部を貫通せず中央部で止まっている。

## 4. 鎌倉時代前期の遺物

### A. 土師器

**瓦器椀(13)** 口径約13.7cm、高さ約4.4cm。ゆるやかに内弯する体部と、端部でやや外反する口縁部からなる。外面は小さいユビオサエのままでヘラミガキはなく、内面は口縁端に浅い沈線一条がめぐり、以下を密にヘラミガキし、中央にラセン文が集約した形式と推定される。黒色を呈し、胎土精良で焼成良好である。SB1の埋土から出土。



第10-13図 瓦器椀実測図(1:2)

## 4. 結 語

### 1. 遺構について

今回の調査で検出した遺構は、古墳時代後期の竪穴住居2棟・土塚1基、奈良時代の掘立柱建物3棟と土器焼成壇20基・土塚10基・溝4条、平安時代後期の掘立柱建物1棟・井戸1基がある。そのうち注目すべきものは、土器焼成壇である。

土器焼成壇は、基本的に隅丸の二等辺三角形で長径2.0~3.9m、最大幅2.2m、深さ約13cmと大小の差が認められるが、ほぼ平坦な床面と垂直な壁面は全体に燃焼のため赤褐色を呈し、硬質化しているが、先端部は若干焼きがあまり燃焼温度が低い部分と考えられる。分布状況を見ると調査地域内で散在しているが、SD39を境にして南北2群に区分できるかもしれない。さらに、長軸の方向をとっても明瞭な規則性を認めることはできないようである。個別の焼成壇についてみると、相互に重複または1m未満

の間隔をとって近接する焼成壇は同時存在したとは考えられない。さらに、一定の間隔を持っているものも同時存在とは断定できないが、おそらく2~3基がセットを形成して土師器を焼成していたものと思われる。なお、周辺には粘土溜(SK33)や土器廃棄壇(SK36)と思われる土塚が散在するが、井戸は検出していない。

焼成壇内の出土遺物は僅少であったが、甕・椀・鍋・高杯などの各器種があり、相互に調整技法や胎土が類似しており、形式的に奈良時代前半に比定されるものである。

第1章で述べたごとく、現在奈良時代の土器焼成壇は齋宮跡<sup>①</sup>(3基)のほか齋宮跡周辺では、史跡水池土器製作遺跡<sup>②</sup>(16基)、発シA遺跡<sup>③</sup>(2基)、発シB遺跡<sup>④</sup>(9基)、粟垣内遺跡<sup>⑤</sup>(2基)、堀田遺跡<sup>⑥</sup>(20基)のほか、名張市鴻之巣遺跡<sup>⑥</sup>(1基)で検出している。

この諸遺跡の状況や、県下の奈良時代集落遺跡の調査例において土器焼成壇が従来全く検出されなかったことからみて、斎宮跡およびその周辺部での集中性は注目される点であり、個別集落における自己完結的な消費を目的とした土師器生産とは異なる生産形態を考えざるをえない。ここでは斎宮跡への土師器貢納(調進)を義務づけられた土器製作工人達の集落の一つとして、堀田遺跡の歴史的な性格を位置づけておきたい。今後は斎宮跡出土の該期土師器との胎土比較により、具体的に実証する必要があるが、斎宮跡の土器の胴部や底部にもヘラ描記号が散見する<sup>⑦</sup>ことを紹介するにとどめたい。ただ、こうした位置づけは、今のところ奈良時代前期から後期の間における土器焼成壇を持つ集落の存在としてしか垣間見ることができないが、二等辺三角形を呈する土器焼成壇が、構造的に多量の土師器生産に最適であった結果として普及したものか未解決の問題である。

土器焼成壇の構造上、二等辺三角形例は伊勢地方以外にも散見する<sup>⑧</sup>が、県内の上記遺跡例ではいずれも壇内の先端部床面の焼きがあまり、壁面や床面に粘土の貼り替えが認められない。このことは、土器焼成が数度に亘って行なわれていなかったか、たとえ数次焼成であっても床面等に損傷が生じなかったことに起因していたかのいずれかであろう。周知の如く、土師器は700～800℃の酸化焰焼成であり、野焼きによっても焼成可能であることは実験的にも確認されている。ただ、先端部の焼きのあまさは、形態的にみても空間的な狭さに基く火廻りの悪さに基づくものと

思われるが、土器の焼上りの均一性を保持するには円形の土壇の方が効率的であり、この点からも二等辺三角形の形状は、焼成壇の上部構造や作業工程などと密接に関連したものではないかと推定される。この点で、焼成壇の上端面の周辺が壁面に沿って広範囲に焼けていないことを考え合わせると、天井部が存在しても比較的低いものと思われるが、焼成壇内からは天井部の存在を裏付ける遺物は全く認められないので、薪材などを積み重ねた簡単な仮設的な構造か、または全く天井部を設けない構造であったと推定される。

焼成壇内の土器片のうち、大型の長胴甕には腹部に大きな黒斑を持ったものがある。この黒斑は、焼成時に甕を横倒しに置いた結果生じたものと思われるが、段重ね状で焼成しなかったとすれば、床面からの高さは甕Aの最大腹径の約20～30cm未満となり、当遺跡以外の完好な土器焼成壇にみる現存の壁面の高さ約40cmでも十分に大型甕は焼成可能である。堀田遺跡の東南約300mに位置する神宮土器調整所では、簡単な構築窯(平窯)で、燃料として松葉、わらなどを用いており、土器焼成壇においても同様の燃料を用いたものと思われる。

昭和51年の緊急発掘調査の結果、16基の土器焼成壇が出土した水池土器製遺跡では、焼成壇と井戸、粘土溜の土壇、掘立柱建物があり、奈良時代前期における土師器生産工房の実態の一端が明確になった。水池遺跡では、16基の焼成壇が大略3群に大別される分布状態を示している。また、発シB遺跡の奈良

遺跡名	所在地	時代	数量	形態	出土遺物	関連遺構
水池遺跡	多気郡明和町明星字水池	奈良	16 3	隅丸二等辺三角形	杯、皿、高杯、甕、甑、鍋、土馬、土錘	竪穴住居、掘立柱建物、井戸 粘土溜、土壇、溝
斎宮跡	〃 斎宮字東裏ほか	〃	3	〃	甕	竪穴住居、掘立柱建物、土壇 溝
栗垣内遺跡	〃	〃	2	〃	甕	〃
発シA遺跡	〃 有爾中字発シ	〃	2	方形	甕	掘立柱建物
発シB遺跡	〃 〃 〃	〃	9	隅丸二等辺三角形	杯、皿、椀、甕、甑、鍋	竪穴住居、掘立柱建物、井戸 土壇
堀田遺跡	〃 〃 字堀田	〃	20	〃	椀、高杯、甕、甑、鍋	〃
鴻之巣遺跡	名張市夏見字鴻之巣	〃	1	〃	杯、皿、甕	竪穴住居、掘立柱建物
落河原遺跡	四日市市西坂部町字落河原	平安	3	不整楕円形	甕、カマド	竪穴住居(?)、溝

第10-2表 三重県内土器焼成壇出土遺跡一覧表



時代の9基のうち、2から3基が先端部を南に向けて配列されており、規則性がうかがえる。こうした規則的な配列を堀田遺跡では見出しえないが、わずか500mと近接した堀田・発シB遺跡の焼成坩の配列状況の相異が、土器生産集団間の格差を示すものか、或いは土地利用上の何らかの制約に起因するものかは現段階では全く不明であり、時期的に古い水池遺跡との対比により、奈良時代を通じて斎宮跡をめぐる土器生産の実態は微妙な様相を呈しているものと思われる。

さらに、こうした特徴的な形態の土器焼成坩が、現状では奈良時代以降の出土例<sup>⑨</sup>が明確でないため果して平安時代にも継続していたかも不明であり、こうした意味においても堀田遺跡は一つ伊勢地方のみならず、我国の古代土器生産の解明にとって重要な資料を提供したといえよう。

## 2. 遺物について

SE42遺物の中で注目されるものに、土製支脚がある。三重県内の出土例は、度会郡玉城町小ばし遺跡<sup>⑩</sup>のみであり、中世集落からの出土は当遺跡で2例目ときわめてすくない。小ばし遺跡例は、本遺跡とほぼ同一と思われる、形式や製作手法などは同一のものである。ただ小ばし遺跡の土製支脚は、先端に二又の小突起を持つ側を地面に接するものとして報告されているが、完形品が今回の調査で出土したことで確認されたものである。

土製支脚は、安定性を保つために底部を広く平坦なもの、上げ底のもの2種類があり、重量感がある。先端の二又の小突起は、機能上重要なものであり、端部が剥離しているものが多いのが特徴的である。

さらに、表面を細かく観察すると、赤色化している部分、煤が付着する部分とそれ以外の部分に分けることができる。これらが顕著に表われている4点(60、64、65、68)についてみると、先づ赤色化しているのは、支脚の正面である、小突起の一部を含めた内弯する面である。次に煤が付着しているのは、この赤色化した面を挟む二面に認められ、それ以外の部分は底面と背面の一部である。以上の観察から次のように使用方法を推定することができる。赤色

化は、炎が支脚を舐める様に長時間被った結果、燃焼時に発生する熱を最も多く受けたための変化であり、煤の付着は炎に直接接しない位置にあったためであろう。それ以外の表面に変化が無いのは、炎の影響を全く受けない部分といえる。

前述した小突起の剥離した痕跡と、表面観察の結果から、土製支脚は正面を火中に向けていることは確実であり、これらを3本以上を組みあわせ、「五徳」のように煮沸器を小突起で支えたものと思われる。この場合の煮沸器は、同じくSE42から多量に伴出した土師器鍋であろう。

これまで土製支脚は、弥生時代前期に出現し、古墳時代後期のカマドの使用に伴ない消滅したのではないかと指摘されている<sup>⑪</sup>。しかしながら、今回の調査による出土例の追加により、当地方においては土製支脚が平安時代後期に至って復活することがさらに明らかになった。この土製支脚復活の理由については、いろいろと想定できると思われるが、最も基本的な理由はカマド使用の変化によるものと思われる。

すなわち、古墳時代後期における朝鮮系渡来文化の伝播によるカマドの出現は、旧来からの厨房構造に大きな転換を余儀なくさせた。カマドの形式が、可動式のいわゆる韓カマドであるにせよ、造り付式のカマドであるにせよ、当地方の煮沸系土器の形態はこの時点から一変した。古墳時代前期以来、伊勢湾沿岸以東の範囲に広く分布していたいわゆる台付甕(S字口縁甕)の消滅であり、それに代る長胴甕の出現である。以後、長胴甕は奈良・平安時代を通じて当地方の基本的な煮沸系土器として多用されていくが、平安時代後期に至って次第に低平な鍋が多用されるに至っている。この煮沸系土器における形態の変化は、カマドの衰退に伴って生じたものと思われる。

おそらく、長胴甕は甑とセットになって使用されたものであり、平安時代後期の長胴甕の衰退は、甑を伴う調理法の転換を他の器種にもたらした可能性も想定されよう。

以上のごとき煮沸系土器の変遷を背景にすることによって、はじめて土製支脚の復活を意味付けることができると考えるのであるが、この土製支脚にはさらに注目しておきたい点がある。すなわち、当地

方の平安時代後期以降の中世集落跡の発掘調査例が多数あるにもかかわらず、土製支脚の出土例は上述のごとく小ばし遺跡と本遺跡の2例にすぎない。このことは偶然的なものではなく、該期の土製支脚の性格を暗示しているものではないと思われる。

S E 42の埋土内に限定しても、土製支脚に対する土師器鍋の数量は圧倒的多数であり、中世の一般集落の出土例の稀少性は、伴出した台付皿と同様である。

したがって、鍋による煮沸に際しては、必ずしも鍋と土製支脚がセットを形成していたとは考え難い。むしろ、簡便に河原石を支脚代りに使用したか、

あるいは鉄製五徳が一般集落で既に広範に使用されていたものと思われる。あくまで土製支脚は、特別な場合のみに作られ、使用されたものではあるまいか。

南勢地方の鎌倉時代集落から、三足鍋が稀に出土しているが、明確な遺構に伴っての出土ではないようである。

土製支脚という日常的道具の復活と、その稀少性ゆえの展開は、三足鍋に至る過程にひそやかに息付いているかにみえる。資料の増加をまって、後考を期したい。  
(伊藤久嗣・伊勢野久好)

[註]

- ①『史跡齋宮跡発掘調査概報』三重県教育委員会 三重県齋宮跡調査事務所 1979・1982
- ②『齋王宮跡—広域市町村圏道路調査—』明和町教育委員会 三重県教育委員会 1977  
下村登良男 山沢義貴「三重県多気郡明和町水池遺跡の土師器焼成遺構」『日本考古学協会昭和53年度大会研究発表要旨』1978
- ③『三重県埋蔵文化財年報昭和47年度』三重県教育委員会 1974
- ④昭和56年 小学校移転に伴ない明和町教育委員会によって発掘調査実施
- ⑤昭和54年 広域市町村圏計画道路事業に伴ない明和町教育委員会によって発掘調査実施
- ⑥昭和58年 土地区画整理事業に伴ない名張市遺跡調査会によ

て発掘調査実施

- ⑦齋宮跡調査事務所 倉田直純氏の御教示による。
- ⑧塩野博「土器（土師器）製作遺跡について」『月刊文化財』167号 1977
- ⑨谷本鋭次「四日市市西阪部町・落河原遺跡」『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』23 三重県教育委員会 1972
- ⑩下村登良男「度会郡玉城町・小ばし遺跡」『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』24 三重県教育委員会・三重県文化財連盟 1979
- ⑪小林行雄「土製支脚」『考古学雑誌』第31巻第1号 1941  
大橋信弥「支脚形土製品の系譜」『古代研究』17 1979

# XI 阿山郡大山田村 西沖遺跡

## 1. 位置と歴史的環境

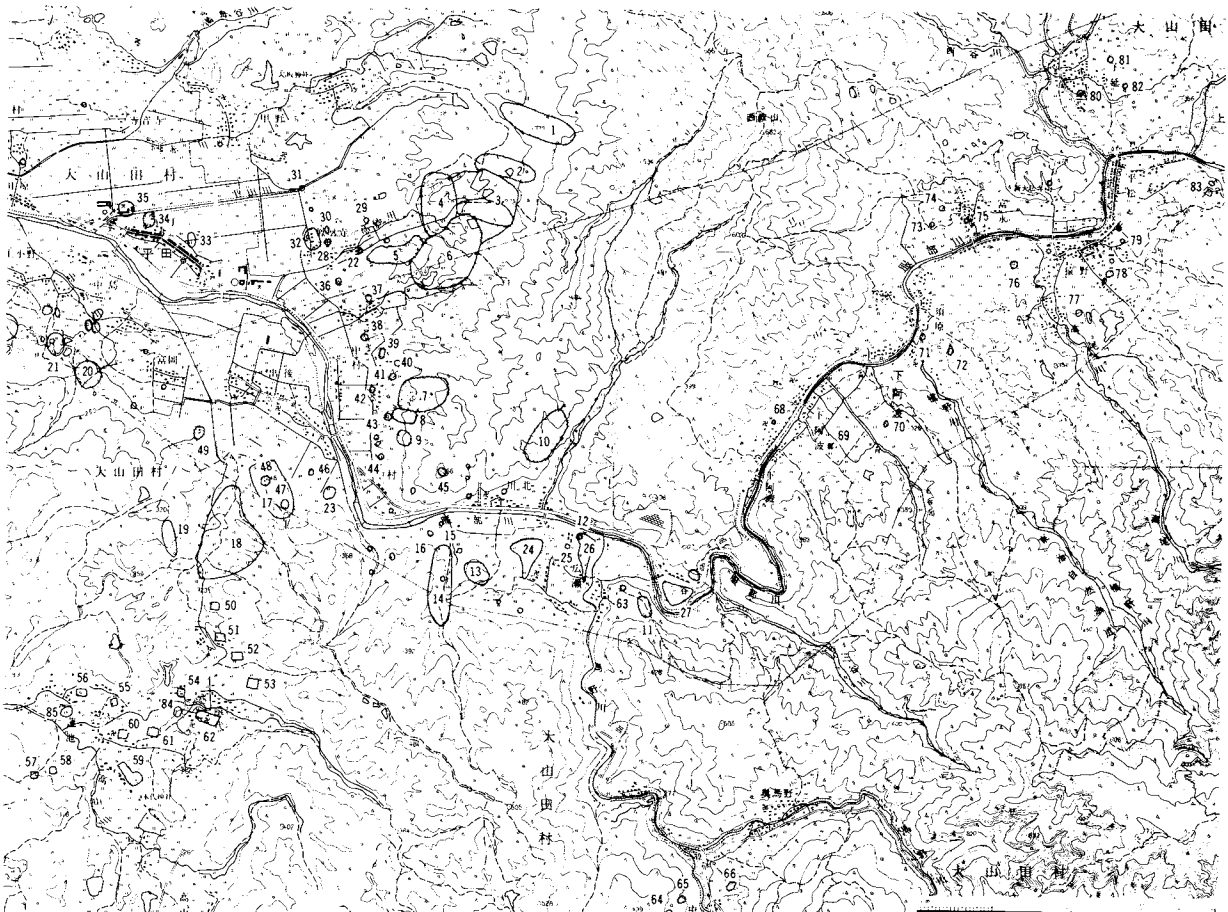
西沖遺跡は行政上、大山田村広瀬字西沖1080番地他及び字北芝1036番地他に属する。広瀬は旧布引村に属し、東は旧阿波村、西は旧山田村に接していた。

大山田盆地の中央部を西流する服部川は、布引山地西麓の雨水を小河川で集め、阿波の小盆地を経て三谷・広瀬までは深く土地を下方に刻む浸食作用をはたし、ここから土砂の運搬と堆積作用が主となって、山田盆地に氾濫を幾度となくもたらした。服部川中流にあたる広瀬では、土地が二度も隆起し、その度に川によって深く刻まれた二段の河岸段丘が形成された。

西沖遺跡は、服部川左岸の標高 243m 前後の上位河岸段丘上に位置し、その範囲は段丘の半ば近くの

3万㎡にもあたる。現況は水田が多く、東端付近は畑や宅地となっている。遺跡の南隣地は標高 500m 以上の丘陵裾にあたり、他は下位段丘に接している。北は比高差20m 以上の急崖で、下位段丘に下った後最短 100m 程で服部川に至る。現河床の標高は 218m である。西には、浅い谷を経て、小高い丘に丸山古墳群(13)があり、北西数百m には横枕1・2号墳(15・16)がある。東は広い巾の段を取りながら、下位段丘に降りていき、その先 300m 付近には服部川に合流する馬野川が北流している。馬野川は土地を深く刻み、川底に向けて急峻な崖を作っている。

この東の下位段丘には、古墳一基・遺跡二箇所が存在する。古墳は、標高 223m の水田にあって、沢



第11-1 遺跡位置図 (1:50000) (24 西沖遺跡)



第11-2図 遺跡地形図 (1 : 6000)



第11-3図 遺跡平面図 (1 : 2,000)

古墳(12)と称し、広瀬字沢 606番地に属する。遺跡のひとつは、標高 226mの畑・水田にあって、田中遺跡(25)と称し、広瀬字田中 689番地他に属する。他は標高 223～230mの畑・水田にあって、沢遺跡(26)と称し、広瀬字沢 579番地他・字溝の浦 530番地他に属する。

伊賀は布引山地の分水嶺を境に伊勢と別れ、南と西は大和国に、北は近江国に接している。古来、大和の影響を強く受け、開発も古い地域である。

東西30km、南北35kmの小国にもかかわらず、県下の遺跡数の約半にあたる1700以上の遺跡が確認されている。このうち、西沖遺跡を中心とした5kmの範囲には240以上の遺跡が所在する。

種類別にみると、古墳が最多で約半にあたる174基も占める。これは伊賀全体の約半にあたり、地域の古墳の分布の濃度を示している。次に城館跡では約50程確認されており、この数字は県下の約半、伊賀の約半を占める。他に集落跡・寺社跡が各10程数えられるが、伊賀全体の分布の上からは稀薄な地域である。

## 2. 遺 構

検出された遺構は、古墳時代後期の竪穴住居跡、奈良時代の竪穴住居跡、平安時代末から鎌倉時代の掘立柱建物跡、井戸、溝、室町時代後期の城館の堀、近世以降の溝がある。これらの遺構は発掘区各所で検出され、また、遺構密度の濃密な遺跡であることが明らかになった。遺構のひろがり、西や北東の斜面を除いてさらにのびると思われる。特に後背地に丘陵をひかえ、平地がかなり続き、遺構・遺物の検出状況からも密度が高いことが予想される。

発掘区は南東部が一番高く、標高は244m前後である。舌状にのびる台地のほぼ中央にあたり、西は谷間をひかえ急斜面、北は60mほどゆるやかに傾斜し、さらに服部川の低位段丘面へ急傾斜する。北西へは平地がさらに舌状にのびる。現況はすべて水田である。

遺跡の基本的な層序は、第1層に水田耕作土が15cmほどあり、第2層に黄灰色粘質の床土が続く。第

時代別にみると、古くは弥生時代の沢遺跡、高北遺跡(23)、轟遺跡が知られている。

古墳時代の古い時期のものは付近になく、6.5km北西の荒木山山頂に伊賀最古の前方後円墳である車塚古墳がある。古墳時代の新しいものは、群集墳(1～21)として多数確認されている。この時期の集落跡として、西沖遺跡、田中遺跡、沢遺跡、高北遺跡が知られている。

奈良時代になると、三谷遺跡(27)や蓮池代遺跡(85)で大きい集落が出現し、鳳凰寺廃寺では古瓦が出土している。

平安時代に入っても、前時代の二遺跡が存続しているが、後期には廃絶したらしい。

平安時代末期から鎌倉時代の広瀬に関する古文書によれば、当時の耕作田が18町は存在したとされている。又、広瀬の上位の領主が平家→源頼朝→宋人陳和卿と代っていく。

室町時代になると、小領主達が多くの城館(29～83)を築くが、広瀬では非常に稀薄である。

3層は茶褐色粘質の遺物包含層、第4層が黄褐色粘質の地山となる。現況で一番高い位置にある南東部は、遺物包含の密度も高く、遺構検出は上面より15～17cmで可能である。南東部から西方や北方にかけては遺物包含密度はめだって低下し、遺構検出は斜面付近で約1mも掘削を要する。

### (1)古墳時代後期の遺構

竪穴住居跡33棟がある。発掘区の北西と南東を除き、ほぼ帯状に検出され、そのほとんどが重複している。規模から大形のもの和小形のものにわけられるが、小形のは重複が少ない。主柱穴や周溝が明確なものは少ないが、カマドをもつものは北辺中央にその位置が限られる。

**SB5** 発掘区南東部の掘立柱建物群のほぼ中央で重複せずに検出された。周溝は認められない。北辺中央にカマドをもち、床面北西部に厚さ10cmほどの焼土が検出された。また、10cmほど掘り下げられ

た床面は平坦で柱穴も少ない。南東隅の柱穴埋土は暗茶褐色粘質土であり、若干の炭化物が検出された。出土した遺物には土師器甕細片と須恵器杯があるが、須恵器の方が量は多い。

**SB 8** SB 5のすぐ南西でSB 9と重複して検出された。南辺と東辺の一部と南東隅部である。隅部で深さ10cmほどあるが、東辺がSB 9に削平され、南辺は2.7mほどで消失する。須恵器細片が若干出土している。

**SB 9** 北辺中央から北西隅部がSB 10に重複している。北東隅を中心に幅20cm、深さ10cmの周溝が検出された。厚さ3cmほどの焼土が北辺中央で50×50cmの範囲で検出されたが、西半はSB 10の南辺で削平されている。床面には柱穴が多く検出されており、径30～40cmの円形を呈する主柱穴が確認できた。深さは30～50cmである。土師器、須恵器の細片が出土している。

**SB 10** SB 9との重複が著しく、南西隅と南辺が不明である。幅20cmの周溝が西辺の一部で検出された。南西隅部が削平されて不明のため、2箇所の焼土がSB 10の床面になるのかは不明である。

**SB 11** 西半をSB 9と重複して検出された。東

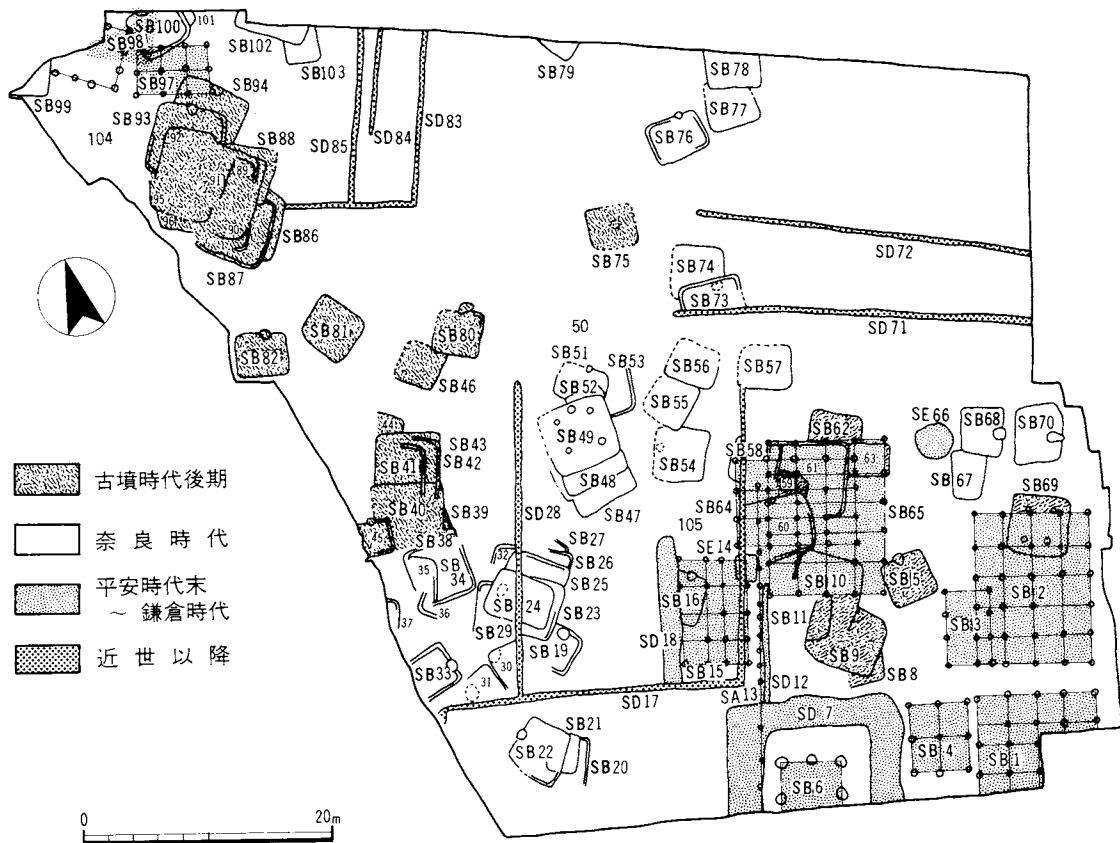
辺中央で径60cmの半円形を呈する土坑が検出されたが、遺物は全く出土せず、貯蔵穴かどうかは不明である。

**SB 38** 発掘区西辺中央付近で、SB 39・40と重複して検出された。僅かに北東部が検出されたのみでほとんど不明である。SB 39より新しい住居跡である。

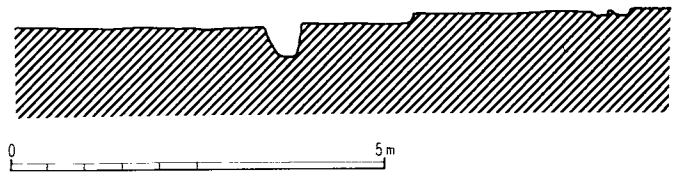
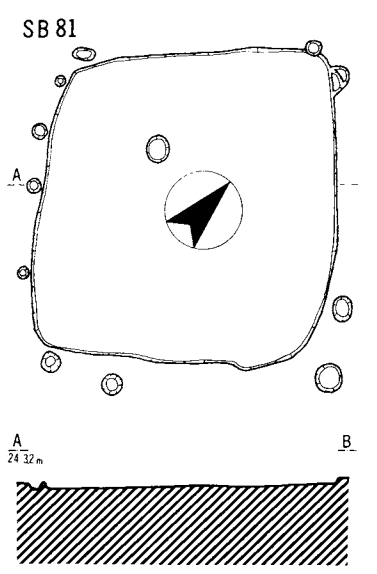
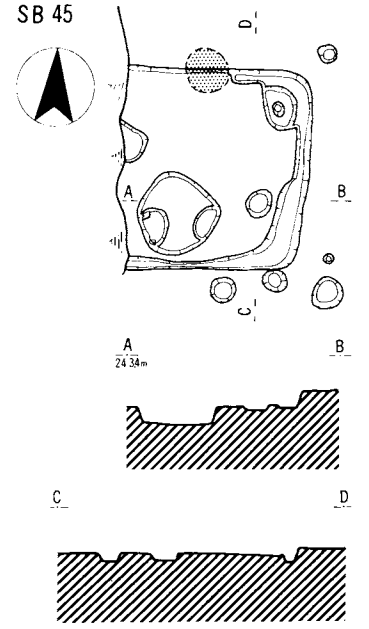
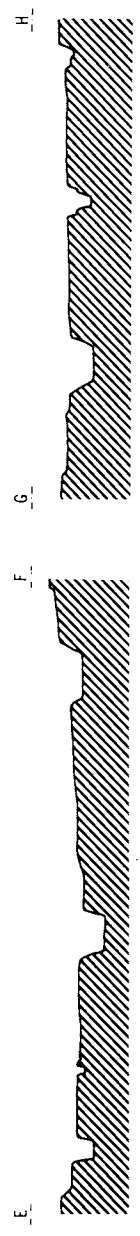
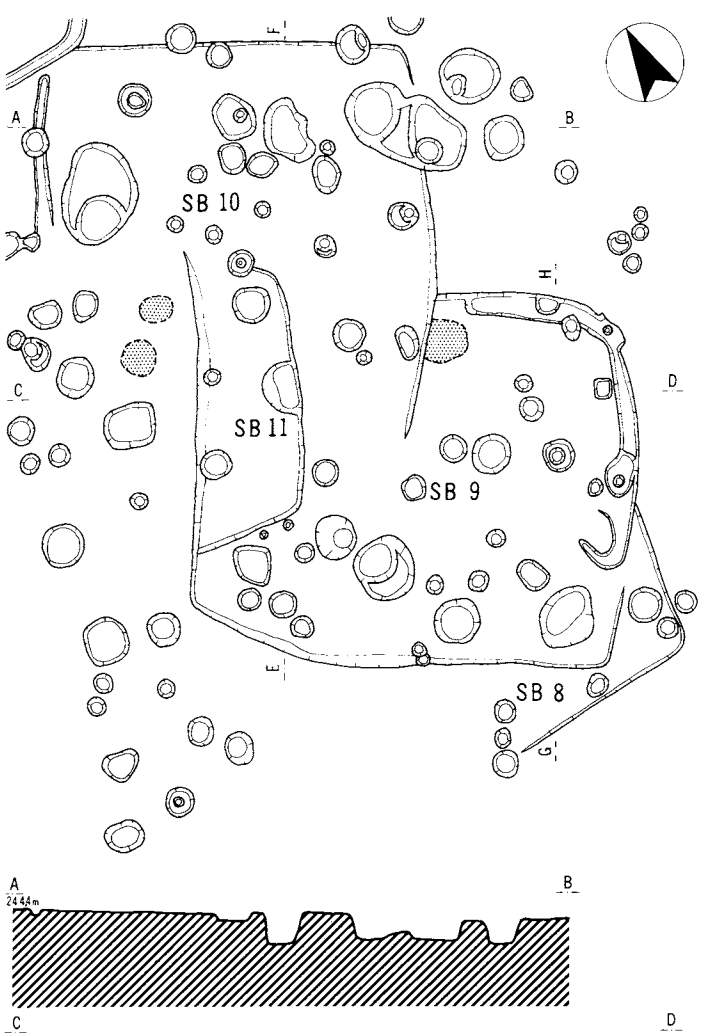
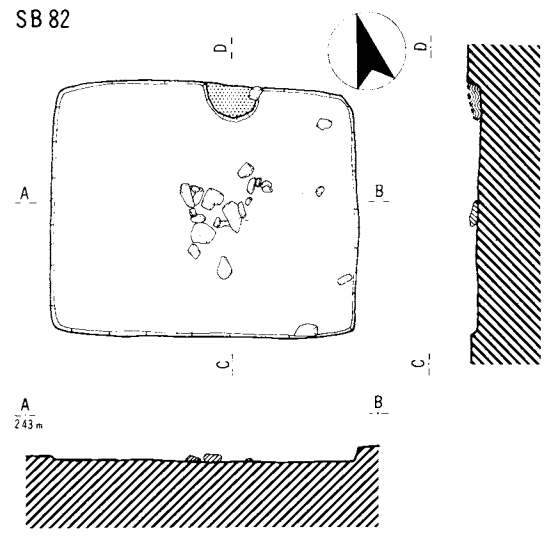
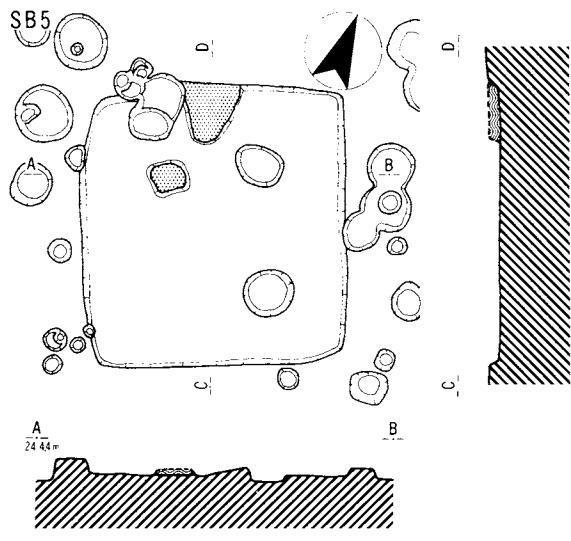
**SB 39** SB 38・40と重複して検出された。僅かに東辺の一部だけであるが幅20cm、深さ13cmの周溝が確認された。

**SB 40** SB 39のすぐ西で検出された住居跡である。西辺5.7mと大形のものであるが、南半はSB 38・45と重複しており不明である北半の重複する2穴は主柱穴の一部であろう。規模は大きいですが、カマド及び焼土は検出されなかった。周溝もない。床面は平坦で、柱穴は粗である。SB 38との重複関係は削平が著しく確認できなかった。

**SB 41** 南半をSB 40、東辺をSB 43と重複して検出された。検出状況からSB 40・43より古いことが確認できた。北半で検出された径40cmの円形を呈する柱穴は主柱穴の2穴と思われる。土師器甕片が出土している。



第11-4図 遺構配置図 (1:600)



第11-5 図 古墳時代後期竪穴住居実測図 (1:100)

**S B 42** S B 41の底部東半からS B 40の北辺にかけて重複して検出された。幅20cm、深さ10cmの周溝が巡る。

**S B 43** S B 42の建替えのように平行して同規模の周溝が巡る。

**S B 44** S B 41の北辺に削平されるように重複して検出された。西は削平が著しく、2 m ほどで消失する。周溝はない。

**S B 45** 西辺は開墾のためか削平されていて不明である。北辺中央にカマドを構える。北辺西半を除き幅20cm、深さ7 cmの周溝が巡る。土師器細片のほかに7世紀前半に比定される須恵器杯が出土している。

**S B 46** S B 44のすぐ北で、S B 80の南辺と重複して検出された。深さ8 cm。

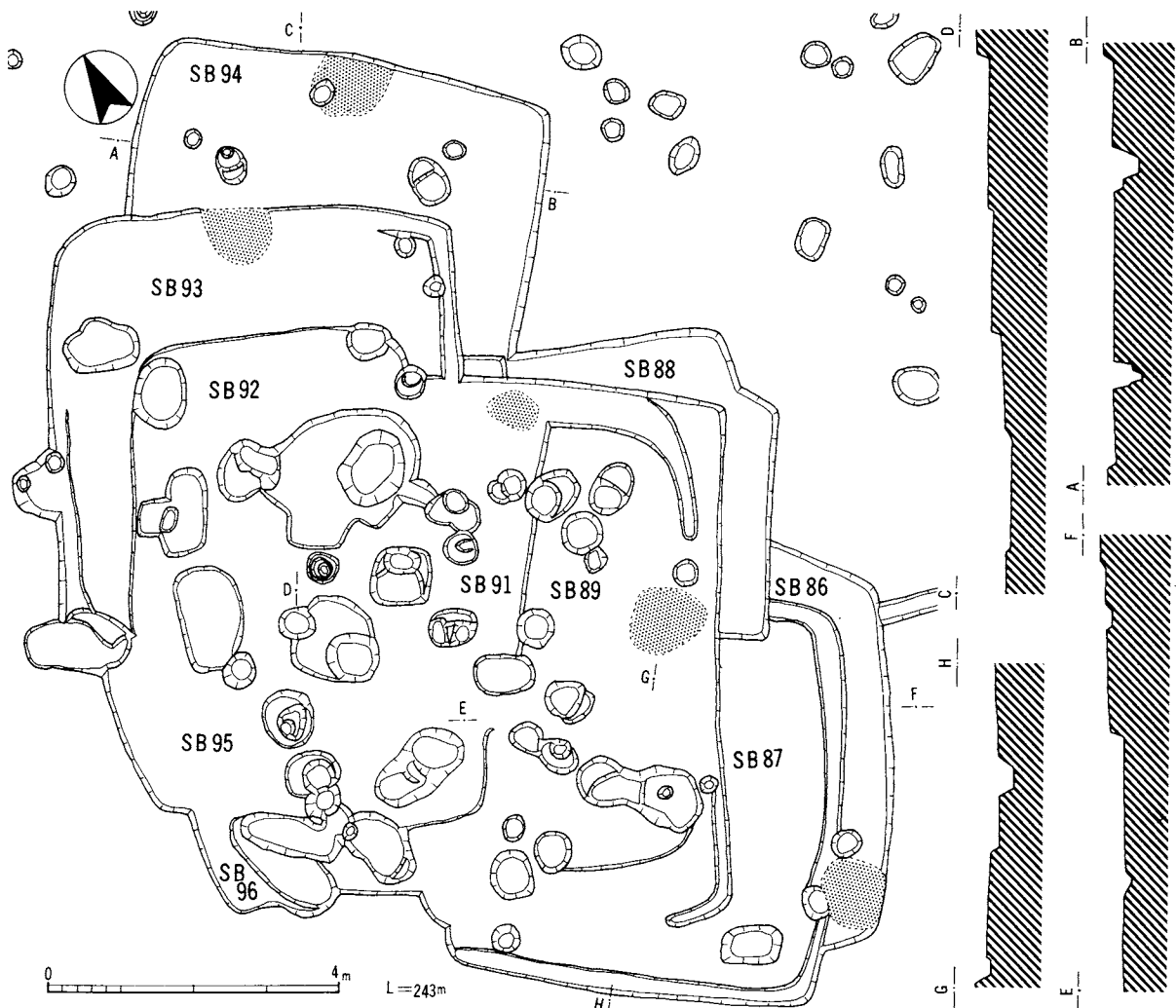
**S B 59** 発掘区南部中央で、奈良時代の竪穴住居跡3棟と重複して検出された。北東隅部付近の検出

で僅かに深さ3 cmほどの壁面が残るだけである。周溝はもたない。7世紀初頭に比定される須恵器杯が床面から出土している。

**S B 62** 南半をS B 61・63と重複して検出された床面で検出された柱穴は少なく、支柱穴は確認できない。北辺中央にカマドをもつ。周溝はない。土師器、須恵器の細片が若干出土している。

**S B 63** S B 62の南東隅部を削平するように重複して検出された。S B 62と同じように平坦な床面から検出された柱穴は掘立柱建物に伴うものが多く、支柱穴は確認できない。北東隅付近で30×30cmの範囲で焼土が検出された。土師器甕小片、須恵器杯片が出土している。

**S B 69** 発掘区東辺中央で検出され、他と重複しない中形の竪穴住居跡である。埋土が淡黄灰色粘質、赤褐色粘質といった掘立柱建物の柱穴の他に、暗茶褐色粘質の埋土をもつ竪穴住居跡の柱穴も検出され、



第11-6図 古墳時代後期竪穴住居実測図(1:100)



主柱穴が確認された数少ない住居跡である。カマド、周溝はもたない。遺存度が良好なわりには出土遺物が少なく、土師器、須恵器の小片が出土したにすぎない。

**S B 75** 発掘区北部中央で検出された小形の竪穴住居跡である。重複はなく、周囲には同時期のものはない。開墾のためか削平が著しく、北西隅部と西辺、東辺の一部が検出されたのみで、同規模のものもつカマドは確認できなかったが、床面中央で焼土が検出された。

**S B 80** 発掘区西部中央でS B 46と重複して検出された。北辺と二つの隅部が検出されていないが、カマドはS B 80に伴うものと思われる。北辺中央にあたる位置である。東辺で幅20cmの周溝の一部が検出された。土師器、須恵器の小片の他に鉄滓が出土している。

**S B 81** S B 80のすぐ西で、他と重複しないで検出されたものである。東辺の壁面外側に径20cm、円形を呈する柱穴が並ぶ。平坦な床面から柱穴は1個検出されただけである。カマド、周溝はもたない。

**S B 82** S B 81のすぐ西で検出されたものである。発掘区外へひろがるため拡張して全体の形状等を確認した。重複しておらず小形の典型的な竪穴住居跡である。カマドは北辺中央にもつが、周溝は巡らない。柱穴は1個も検出できず、また壁面外側にも柱穴はない。床面中央に河原石の集石が認められた。

**S B 86~96** 発掘区北西隅で11棟が重複して検出された。一辺5~7mとこの時期では大形のものがここに集中している。発掘区の中では一番低い場所にあたる。重複が著しく、全体の重複順序は確認できなかった。北からS B 94→93→92、東からS B 86→87→88という順序である。北辺中央にカマドをもつものにS B 93・94がある。S B 89は周溝をもち、S B 90はもたないが壁面を共有していたり埋土も同じである。床面から数多くの柱穴が検出されたが、どの住居跡に伴うのかは不明である。また、埋土は茶褐色粘質土が主であるが、掘立柱建物の柱穴埋土である赤褐色粘質土、淡黄灰色粘質土も混入している。出土した遺物は極めて少量で、7世紀代に比定される須恵器杯の小片が主である。

名称 (S B)	規 模(m)		主柱柱間(m)		深 さ (cm)	南 北 軸	備 考
	東 西	南 北	東 西	南 北			
5	3.6	3.7	—	1.6	10	N 8° W	北辺中央にカマド、焼土有り
8	—	—	—	—	10	N 9° E	
9	5.9	4.9	2.4	2.1	9	N 29° E	北辺中央に焼土有り、周溝
10	5.1	(5.1)	—	—	14	N 29° E	周溝有り
11	—	3.4	—	—	5	N 24° E	
38	—	—	—	—	10	N 14° E	
39	—	—	—	—	1	N 6° W	周溝あり
40	5.7	—	2.8	—	11	N 14° E	
41	5.0	(5.0)	2.8	16	16	N 14° E	
42	—	(3.8)	—	—	0	N 14° E	周溝あり
43	—	(4.6)	—	—	0	N 14° E	周溝あり
44	—	—	—	—	3	N 22° E	
45	(2.7)	2.7	—	—	7	N 3° E	北辺中央にカマド、周溝有り
46	(3.2)	3.2	—	—	8	N 44° E	
59	—	—	—	—	3	N 24° E	
62	4.1	—	—	—	10	N 20° E	

63	3.3	2.5	—	—	8	N20° E	焼土有り
69	4.6	4.7	2.5	2.5	10	N19° E	
75	3.7	(3.8)	—	—	3	N 1° W	中央に焼土有り
80	3.6	(4.1)	—	—	5	N29° E	北辺中央にカマド有り
81	4.1	3.9	—	—	4	N44° E	
82	4.1	3.4	—	—	21	N 9° E	北辺中央にカマド有り
86	—	5.2	—	—	8	N32° E	
87	5.3	5.5	—	—	10	N34° E	周溝あり
88	—	4.3	—	—	18	N34° E	
89	—	7.4	—	—	8	N24° E	周溝有り
90	—	6.5	—	—	4	N29° E	
91	—	7.2	—	—	7	N39° E	
92	3.7	4.0	—	—	4	N30° E	
93	5.6	6.0	—	—	24	N26° E	北辺中央にカマド、周溝有り
94	5.7	—	—	—	13	N39° E	北辺中央にカマド有り
95	—	—	—	—	20	N 4° E	
96	—	—	—	—	15	N 4° E	

第11—1表 古墳時代後期竪穴住居一覧表

( )は推定

## (2)奈良時代の遺構

竪穴住居跡47棟がある。古墳時代後期の竪穴住居跡がほぼ帯状に北西から南東に検出されたのに対してやや散在する。発掘区の南半という比較的高い位置には密集しているが、さらに中央部から弧を描きながら北西にのび、発掘区の西部中央にこの時期の遺構空白地帯がある。規模は一辺が6mをこえる大形のものが1棟あるが、他は5m前後の中形のもの、4m以下の小形のものにわかれる。カマドをもつ場合の位置は北辺中央に限られず、西辺にもつもの、東辺にもつものもある。その位置は限定されないが、中でも東辺にもつものが多い。

**S B16** 発掘区南半中央で、西半をS D18に削平されるように重複して検出された。北辺中央にカマドをもち、周溝はない。7世紀後半に比定される須恵器杯片が出土している。土師器片も少量ある。

**S B19** 発掘区南西部で、近世の開墾によって西半を削平された形で検出された。北辺中央にカマドをもち、幅20cmの周溝が巡っている。深さ15cmと壁面はよく残っており、床面に柱穴は1個もない。土師

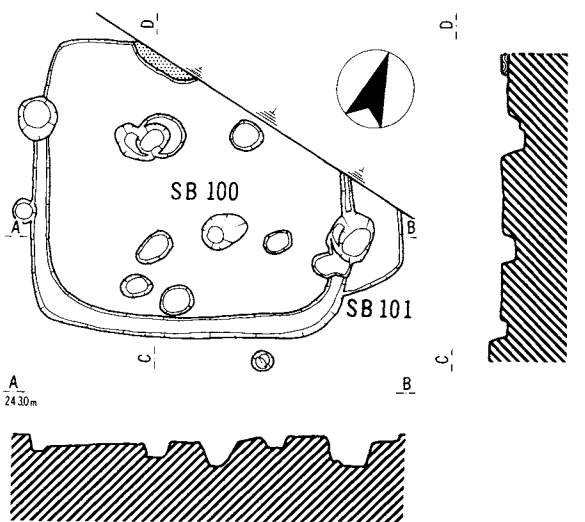
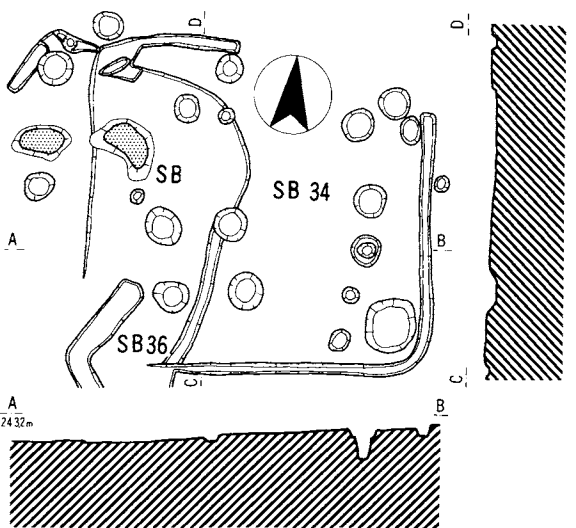
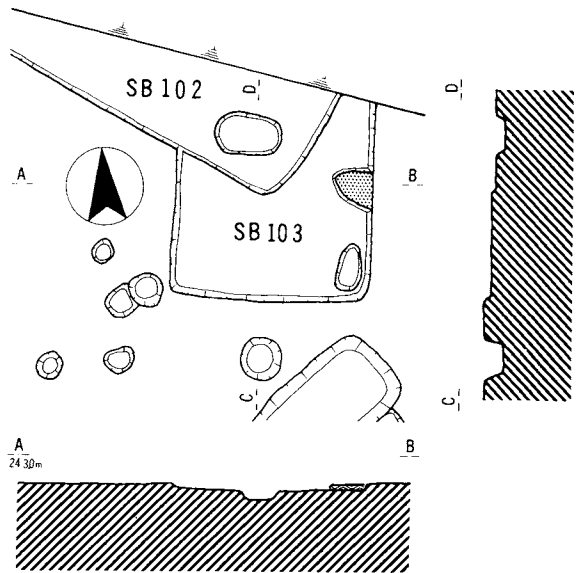
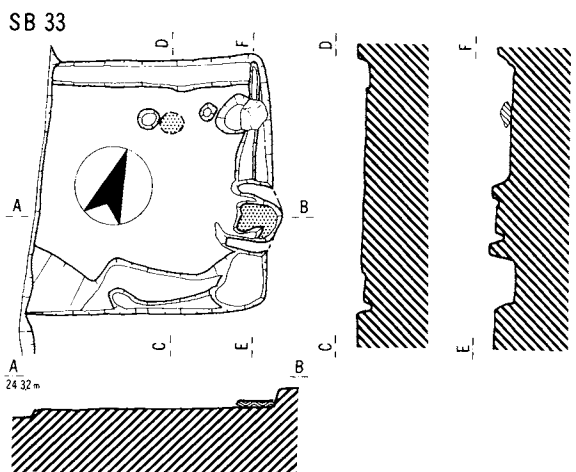
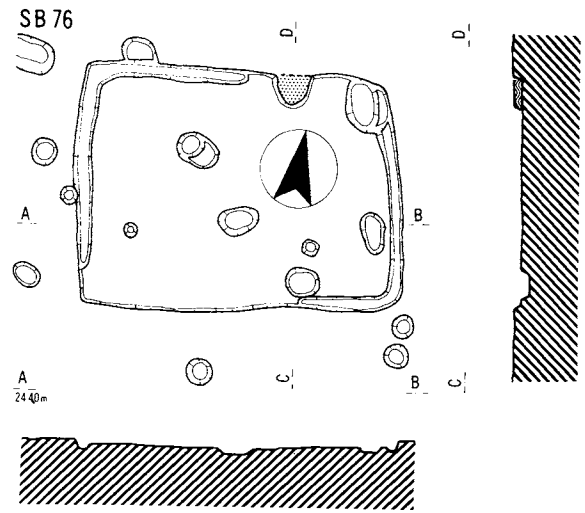
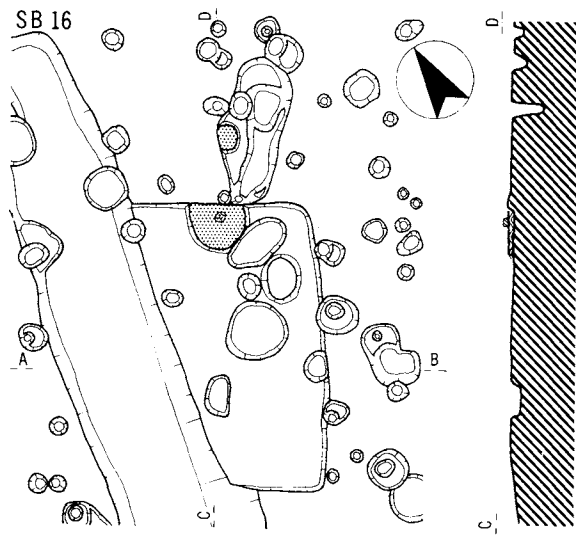
器、須恵器の小片が出土している。

**S B20・21・22** S B19のすぐ南で検出され、発掘区では一番南西隅にあたる。3棟の重複関係は、20→21→22である。S B20・22は幅20～30cmの周溝をもつが、S B21はもたず一辺3mと小形の住居跡である。S B22は西辺中央にカマドをもつ。また、放射状の暗文を施した土師器杯も出土している。

**S B23～27** S B19のすぐ北で、5棟が重複して検出された。重複関係は、27→26→25→23→24である。南北軸をほぼ同一にしており、建替えであろう。S B24を除いて周溝をもつ。カマドは確認できなかったが、S B24の西半中央で40×40cmの範囲の焼土が検出された。北西隅部では幅20cmの周溝が残る。

**S B30・31** S B29のすぐ南で、各々一辺を接するようにして検出された。周溝やカマドはともにもたない。各々北辺中央には長径50～60cmの楕円形の土壇を壁に沿って掘り込んでいる。遺物、炭化物はない。S B30は北西隅部、S B31は北辺中央に径1mほどの範囲で焼土が検出された。

**S B32** S B24・25と重複して検出された。僅か



第11-7 図 奈良時代竪穴住居実測図 (1:100)

に北西隅部の検出であるが、周溝をもち南北軸もほぼS B23～27と同じであることから建替えの可能性が強い。

**S B33** 発掘区西端南部で検出されたものである。西辺は開墾のため削平されている。東辺中央にカマドをもつもので幅40cm、深さ2cmの広い周溝が巡る。壁面は12cmほど残る。土師器、須恵器小片が出土している。

**S B34・35・36** S B33のすぐ北で3棟が重複して検出された。S B35→34であるが、S B36の重複関係は不明。全て周溝をもつものである。S B35からは土師器長甕片が出土している。

**S B47～53** 発掘区のほぼ中央で7棟が重複して検出された。S B47～50の4棟は規模、南北軸ともほぼ同じで建替えであろう。S B47とS B50は重複関係は確認できなかった。S B47・50→48→49の順序である。一辺5mと中形の典型的な竪穴住居跡である。一番新しいS B49でみるならば、北壁よりやや内側にカマドをもつ。支柱穴のうち3穴は確認できた。周溝はいずれもない。S B51は2.7×4mと長方形を呈する小形の竪穴住居跡で、北辺中央にカマドをもつ。S B53とともに周溝をもつものである。S B52はS B51→52→49という重複関係で、一辺3mと小形である。

**S B54・55・56** S B49のすぐ東で、S B49と重複する竪穴群と南北軸を対称にした位置関係で3棟が重複して検出された。壁面掘形が数cmほどと非常に浅く、削平の著しい箇所である。周溝はもたない。S B56からは土師器甕片、須恵器杯蓋が出土している。

**S B57** S B56のすぐ東で検出されたものである。北へ削平され、北西隅や西辺が不明である。

**S B58** S B54のすぐ東で、近世の溝S D17にその西半を横断するように削平されている。北辺中央にカマドをもつ。周溝は幅10～20cmと狭いものが東辺で確認された。床面の柱穴はほとんど掘立柱建物に伴うものである。土師器長甕片が出土している。

**S B60** S B58のすぐ南にあり、西辺をS E14、S D17に削平されている。カマドは北辺中央にあり、南辺から東辺にかけて幅20cmの周溝が確認できた。土師器甕、須恵器杯片が出土。

**S B61** S B60の北東隅と重複している。この時期で規模が最大の竪穴住居跡で、6.3×5.8mである。幅30cmの周溝が巡る。カマドはない。S B58・60→61である。土師器杯、甕片、須恵器杯片が出土している。土師器が多い。

**S B67・68** 発掘区東端中央で2棟が重複して検出された。S B67→68である。S B67は2.5×4mと南北が長軸の長方形を呈している。カマド、周溝はもたない。南辺は12cmほど掘り込まれるが、S B68と重複する北辺近くでは3cmと非常に浅い。土師器杯、須恵器杯、蓋、砥石、鉄滓が出土している。S B68は東辺中央にカマドを構え、その両脇に径70cm～1m、深さ30cmの大きな円形土壇を掘り込んでいる。北西隅から北辺に沿って平行に検出された周溝は建替えであろうか。土師器甕、須恵器杯、砥石が出土している。

**S B70** S B68のすぐ東で検出されたものである。S B68とほぼ同規模で南北軸も一致する。カマドの位置も同じで、東辺中央にもつ。周溝はなく、壁面に沿って柱穴、土壇が並ぶ。床面中央は平坦で柱穴はない。竪穴住居跡の中では一番出土遺物が豊富で、カマド周辺、四隅の方形土壇から土師器杯、甕、須恵器杯、蓋が出土した。中でも土師器甕が圧倒的に多く、近江系の長甕もある。球状の胴部をもつ小形甕は外面底部がヘラ削りされる。実測可能な土器が多い。

**S B73・74** 発掘区北半中央で2棟が重複して検出された。S B74→73である。南北に並行して走る近世の溝が検出されるなど削平が著しい。S B73は壁を削平されており、周溝のみの検出であった。北辺中央の焼土はカマドか。S B74は深さ5cm。周溝はない。土師器、須恵器片が少量出土。

**S B76** S B74の8m西にあり、他と重複せずに検出された小形の竪穴住居跡である。北辺中央よりやや東にカマドをもつ。南辺の西半を除いて幅20cmの周溝が巡る。北壁は10cmほど掘り込まれているが、南壁は5cmと浅い。土師器、須恵器片が少量出土。

**S B77** S B76のすぐ東で、北辺を削平された形で検出された。壁は残らず周溝のみの検出であるが、本来南辺の幅20cmであったのが削平で広がったものであろう。深さ2cm。



第11—8图 竖穴住居・掘立柱建物实测图(1:100)

**S B 78** S B 77のすぐ北で、北半が発掘区外へのびるように検出された。発掘区の北は現在農道が発掘区に沿ってのびており段差をもつことから拡張はしなかった。周溝はなく、平坦な床面は15cmほど掘り込まれている。須恵器杯、蓋が出土。

**S B 79** 発掘区北端中央で、南西隅部のみが検出された。深さ9cm。隅に大きな土壇を掘り込んでいるが、出土遺物はない。

**S B 99** 発掘区北西隅で検出されたものである。深さ7cm。床面に柱穴はなく徐々に西へ傾斜して発掘区外へのびる。土師器甕片が少量出土している。

**S B 100・101** S B 99のすぐ東にあり、北東隅部が発掘区外へのびる。S B 101→100である。S B 100は北辺中央にカマドをもち、幅30cm、深さ5cmの周溝が巡る。主柱穴は径30cm、深さ10cmで、円形を呈している。S B 101は南東隅部のみを検出で、周溝はもたない。

**S B 102・103** S B 100のすぐ東で、2棟が重複して検出された。S B 103→102である。S B 103は東辺中央にカマドをもち、須恵器杯、蓋、皿、土師器甕片が出土している。

名称 (S B)	規模(m)		主柱柱間(m)		深さ (cm)	南北軸	備考
	東西	南北	東西	南北			
16	—	3.8	—	—	14	N29°E	北辺中央にカマド有り
19	—	3.2	—	—	16	N41°W	北辺中央にカマド有り
20	—	3.9	—	—	9	N22°E	周溝有り
21	2.4	3.0	—	—	11	N19°E	
22	3.7	4.4	—	—	8	N38°E	西辺中央にカマド有り
23	—	4.5	—	—	4	N34°E	
24	4.7	3.5	2.1	1.6	25	N29°E	西辺中央に焼土有り
25	4.7	—	—	—	1	N34°E	周溝有り
26	—	—	—	—	17	N34°E	周溝有り
27	—	—	—	—	8	N44°E	周溝有り
29	—	5.0	—	—	4	N24°E	周溝有り
30	—	—	—	—	2	N16°W	焼土有り
31	—	—	—	—	2	N16°W	焼土有り
32	4.8	—	—	—	5	N44°E	周溝有り
33	—	3.4	—	—	13	N16°W	東辺中央にカマド、周溝有り
34	4.6	4.6	2.2	1.8	2	N3°W	周溝有り
35	—	—	—	—	5	N14°E	周溝有り
36	—	—	—	—	0	N34°E	周溝有り
37	—	—	—	—	10	N14°E	周溝有り
47	5.0	—	—	—	5	N6°W	
48	5.0	—	—	—	10	N6°W	
49	5.3	5.2	2.7	2.6	5	N1°W	北辺中央にカマド有り
50	—	—	—	—	4	N6°W	
51	4.1	2.5	—	—	8	N34°E	周溝有り
52	3.0	—	—	—	4	N16°W	
53	—	(3.2)	—	—	1	N9°E	周溝有り

54	—	4.0	—	—	4	N29° E	
55	—	3.8	—	—	15	N44° E	
56	4.1	—	—	—	9	N34° E	
57	(3.7)	3.2	—	—	18	N12° E	
58	3.8	3.9	—	—	4	N24° E	北辺中央にカマド、周溝有り
60	—	4.7	—	—	8	N 4° E	北辺中央にカマド、周溝有り
61	6.4	6.0	—	—	9	N22° E	周溝有り
67	2.6	3.9	—	—	9	N14° E	
68	3.4	3.8	—	—	20	N14° E	東辺中央にカマド有り
70	3.8	4.4	—	—	31	N14° E	東辺中央にカマド有り
73	4.8	—	—	—	5	N 1° W	北辺中央にカマド、周溝有り
74	—	—	—	—	5	N 9° E	
76	4.3	3.2	—	—	9	N11° W	北辺中央にカマド、周溝有り
77	4.0	—	—	—	2	N 1° W	周溝有り
78	4.2	—	—	—	15	N 9° E	
79	—	—	—	—	9	N44° E	
99	—	—	—	—	7	N24° E	
100	4.2	3.9	1.7	1.4	15	N14° W	北辺中央にカマド、周溝有り
101	—	—	—	—	10	N14° W	
102	55.4	—	—	—	12	N32° E	
103	2.7	(2.8)	—	—	12	N 6° E	東辺中央にカマド有り

第11-2表 奈良時代竪穴住居一覧表

( )は推定

### (3) 平安～鎌倉時代の遺構

掘立柱建物を第11-3表のとおり検出した。発掘区南東部の小高い地区の40×40mの所に、9棟が集中しており、大体はN14～15°Eに棟筋が揃っている。中世遺物の出土が少ない北西部でも3棟検出されているが、規模不明の建物2棟は当期とは判断できない。このほか素掘り及び木組の井戸が各1基、堀1条、溝2条、柵列1列などがある。

#### 1. 掘立柱建物

**S B 1** (第11-9図) 発掘区南東隅で4×(3)間の規模で部分的に検出したもので、梁行北の柱間は2.3mの等間である。桁行の柱間は北から1.9m+1.6m+2.2mである。柱穴は径30～50cmの円形で、深さは20～30cmと確認された。柱穴から瓦器(椀・皿)、土師器(皿・羽釜)などや須恵器が出土している。

**S B 2** (第11-8図) 発掘区東辺のS B 1の北で検出した4×5間の総柱の建物である。桁行は北か

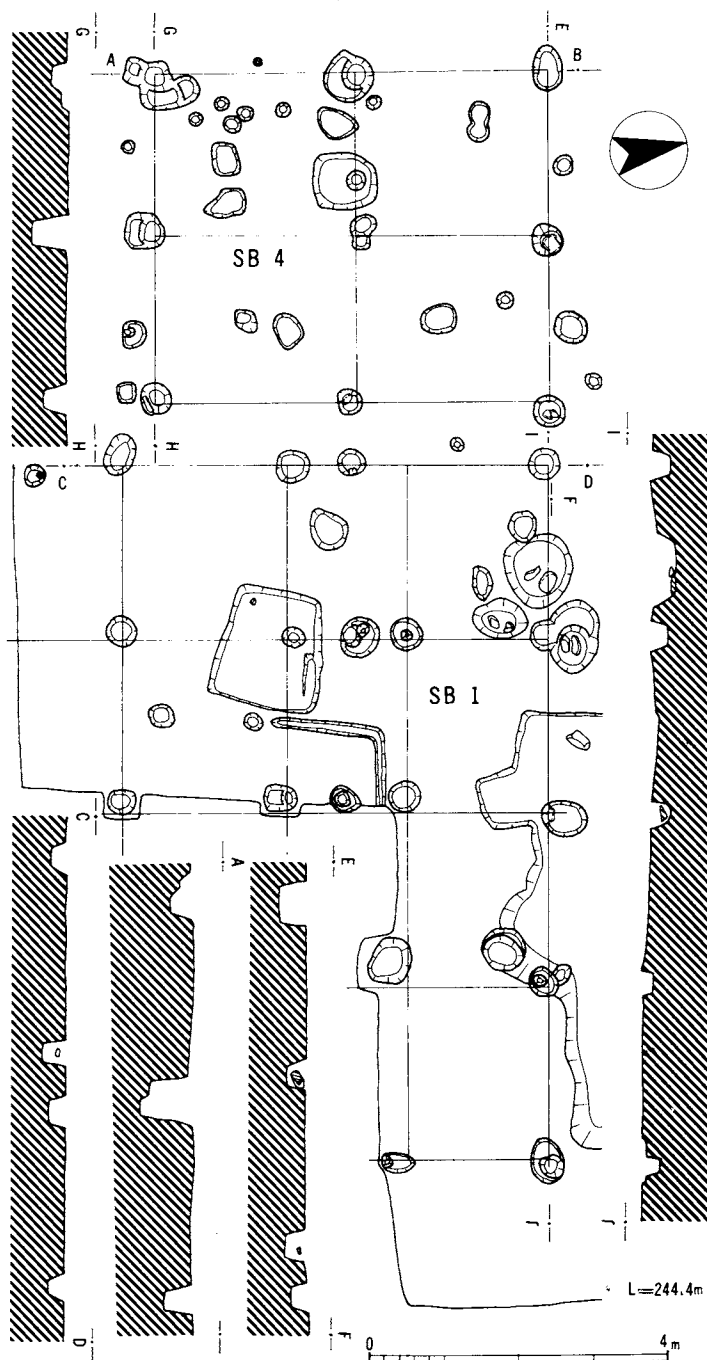
ら2.6m+2.2m+2.3m+2.3m+2.2mの柱間である。柱穴は径30～40cmの円形で、深さ15～20cmである。東側の桁行のさらに東10～20cmの位置に同様な柱穴が4つあるが、S B 2のなんらかの施設の一部の可能性もある。4つ並列した柱の東方約1mは数10cmも落ち込み水田となっているので、建物が東へ延びるものではない。梁行は西から2.15m+2.25mの柱間で、西2個の柱穴は深く、検出面より60cmである。他はその半分以下であり、柱穴径は共に30cm前後である。柱穴からは多くの瓦器(椀・皿)、土師器や、少量の須恵器が出土している。

**S B 3** (第11-8図) S B 2の南西部分で重複する側柱の建物で、桁行は北から、1.7m+2m+2mであり、梁行は3.35mの間である。柱穴は径20～50cmと様々であるが、深さは20cm前後であり、土師器(小皿)、瓦器(椀・皿)、須恵器が出土している。

**S B 4** (11-9図) S B 1西隣1mで検出された倉庫で、桁行2.6m+2.6m、梁行2.1m+2.3mであ

る。梁行北の柱列の東、中、桁行東の柱列の中の柱穴には根石があり、柱穴の径は30~40cmで、深さは20cmと浅い。他の柱穴径は50cm前後で、深さは30~70cmである。柱穴の数の割に、多くの遺物が出土している。瓦器（椀・皿）、土師器（小皿）、羽釜などが多い。

**SB 6**（第11-12図） 発掘区南辺中央で検出された。周囲に幅約2m、深さ10~50cmの堀（SD 7）がめぐる側柱だけの2×（1）間の建物である。検出建物群の柱穴の中で最も大きく、径1m、深さ55



第11-9 図 掘立柱建物実測図（1：100）

~80cmである。5個の円形柱穴の中で、3個の柱穴下部には地山の直上に根石が一段敷かれた上に、柱根が遺存する。桁行は、調査区南隣の工事中に東側で柱穴1個を確認しており、2間以上のものである。なお、調査地区外の南側は原状保存されている。

桁行北東角の柱穴は、径8cm、長さ20cmの柱根が遺存し、掘形と柱痕跡の検出状況から、柱の径は28~30cmと推定できる。さらに南の柱穴は、径14cm、長さ4cmの柱根が遺存しているが、その状況から、柱径が約30cmと推定できる。また、桁行北西角の柱穴は柱根が良く遺存しており、径20cm、長さ40cmである。これも出土状況から、当初は径約30cmあったものと推定され、掘形からは灰釉椀片が出土し、柱穴の掘形断面は、地山が黄褐色粘質土で、掘形内の柱を固定する裏込め部分は地山の土がやや混入した黒灰色土で、根石と柱根の間はやや青味がかかった黒灰色粘土質である。

梁間は、2.35mの等間である。なお、瓦器（椀・皿）・土師器・須恵器などが掘形から出土している。

**SB 15**（11-13図） SD 7より北で、SD 12とSD 18に挟まれた場所で検出した3×4間の総柱の建物である。桁行は2.0mの等間で、梁行は1.75m + 1.7m + 1.75mである。柱穴の径は20~50cm、深さは20~30cmで、瓦器・土師器・須恵器が出土している。建物は、SE 14で切られている。

**SB 64**（第11-10図） 発掘区南東部高台の中央に位置する3×5間の総柱の建物である。桁行は2.3mの等間、梁行も2.2mの等間である。柱穴は径30~40cm、深さは約50cmのものが多い。瓦器、土師器、須恵器が出土している。

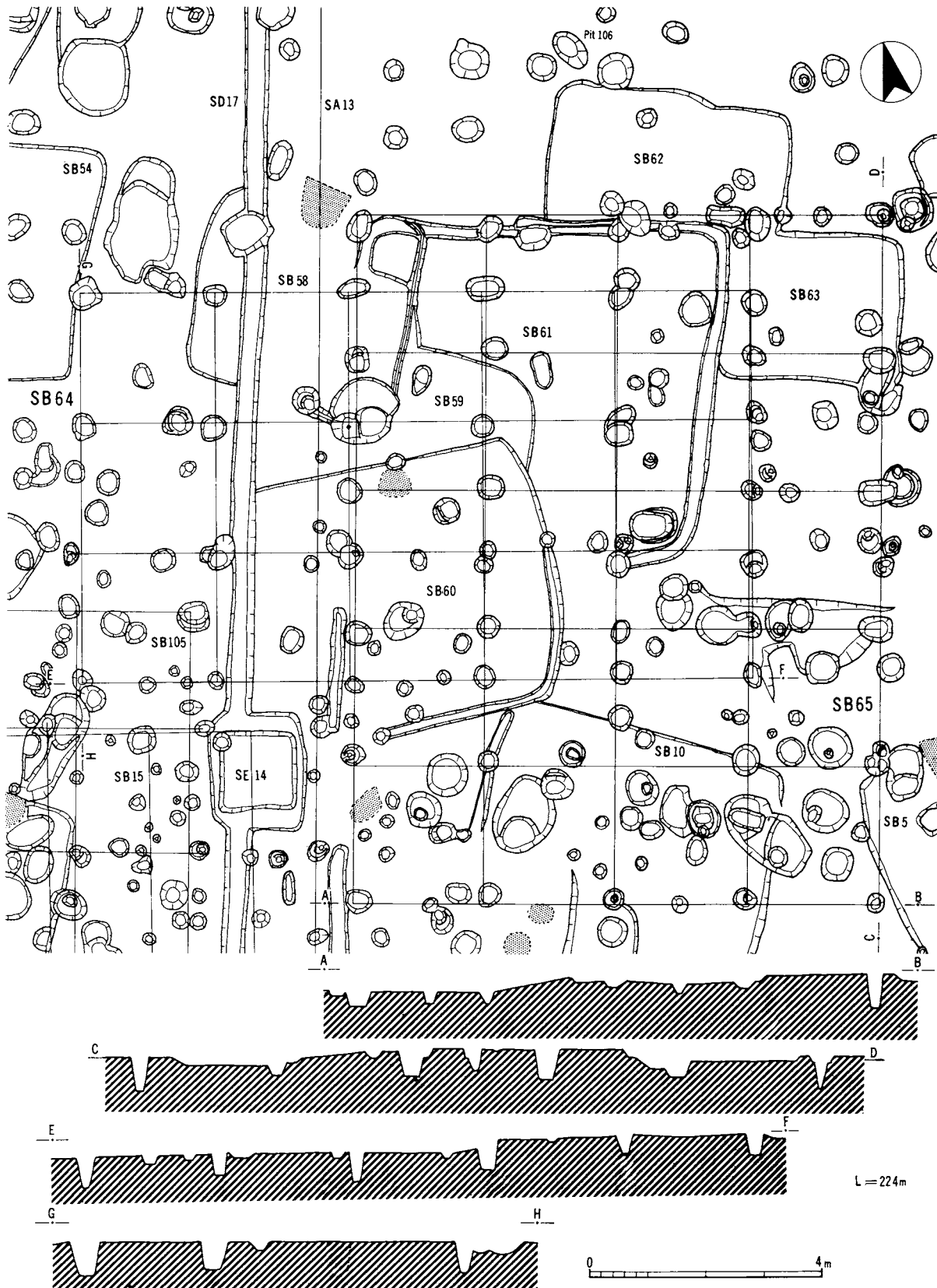
**SB 65**（第11-10図） SB 64と大部分が重複する。総柱の4×5間の建物である。桁行は2.35mの等間で、梁間は2.25mの等間である。柱穴の径は30~50cm、深さは各隅で50cmと深く、他の深さは20



～50cmとなっている。瓦器（椀・皿）・土師器（皿）  
・須恵器などが出土している。

2 × 3 間の総柱の建物である。桁行は1.25m + 2 m  
+ 1.25m、梁行は1.8 m の等間である。柱穴は径20  
～40cm、深さ20～30cmで、埋土は暗茶褐色粘質土で

**S B 97**（第11～11図） 発掘区北西隅で検出した



第11～10図 竪穴住居・掘立柱建物実測図（1：100）

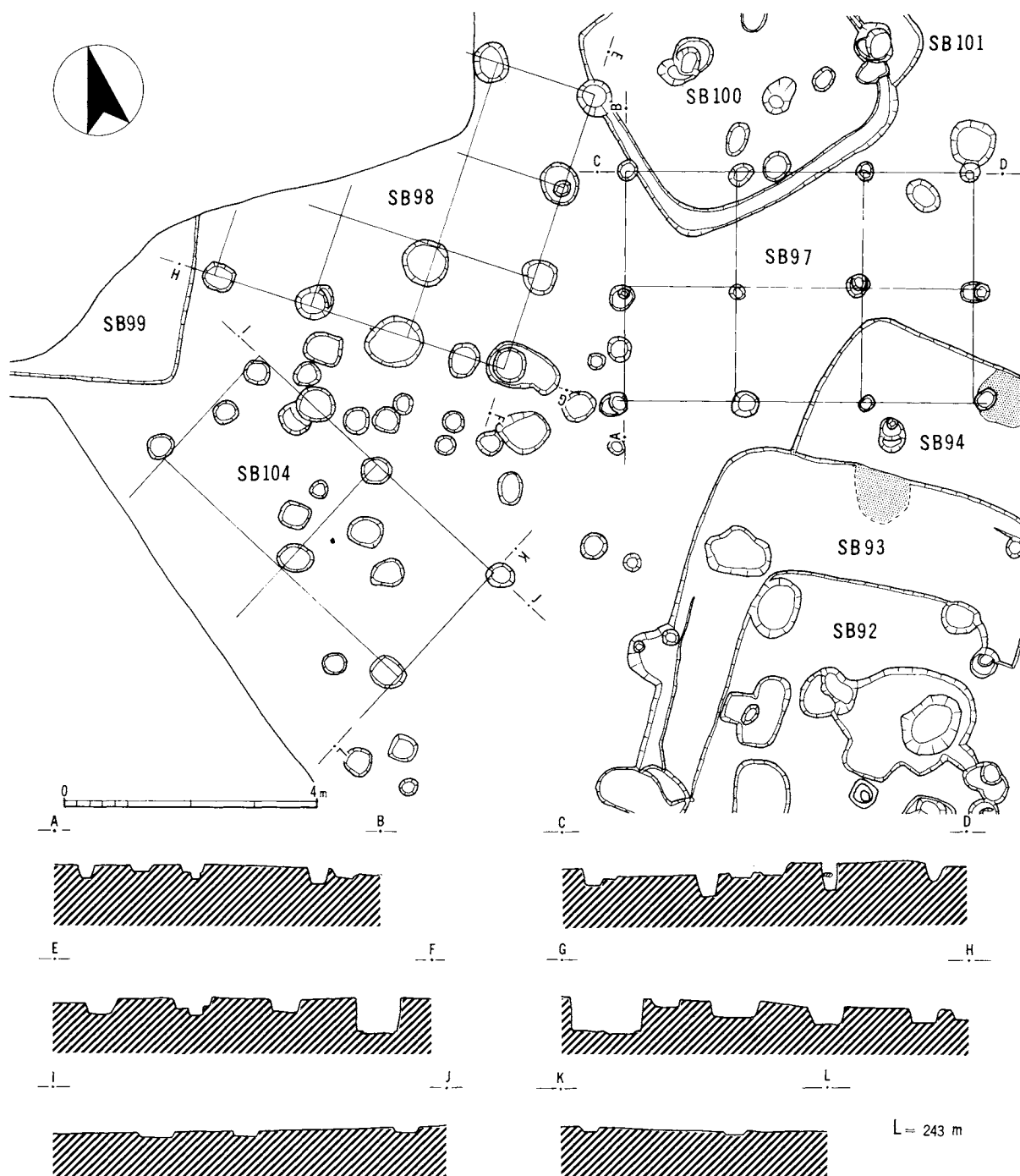
ある。瓦器、土師器、須恵器が少量出土し、梁行東側中央の柱穴から、高台の退化した13世紀後半の瓦器碗片が出土する。

**S B 98** (第11-11図) S B 97の西で検出した3×(3)間以上の建物である。桁行は1.6mの等間が3間分確認でき、梁行は1.5mの等間である。柱穴の径は50~80cm、深さは20~70cmである。出土遺物はない。

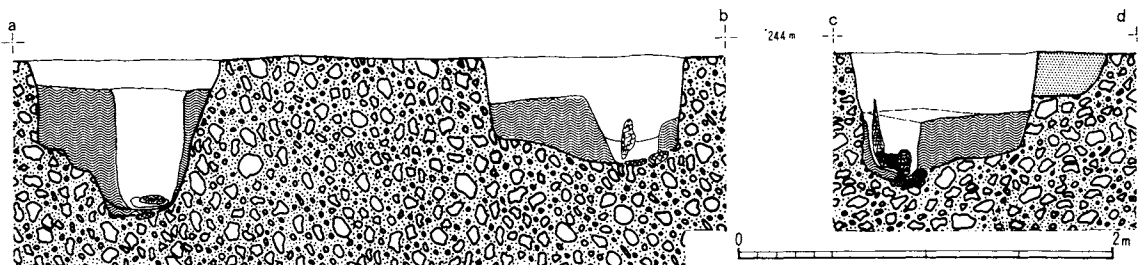
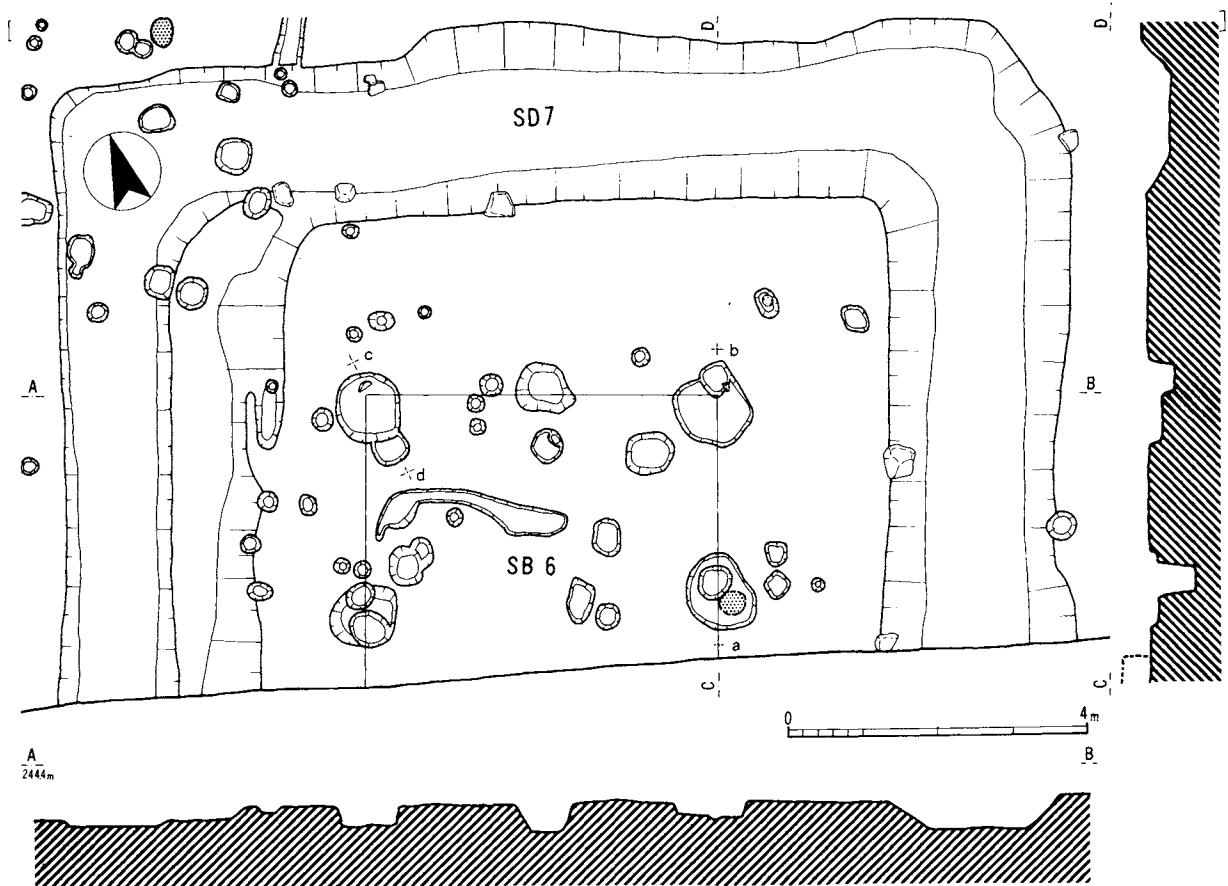
**S B 104** (第11-11図) S B 98の南で検出した2

×(1)間以上の建物である。梁行は2.5mの等間であるが、桁行は1間2.2mのみ確認できた。柱穴は径約50cmあるが、深さは10cmにも満たず、出土遺物はない。なお、S B 98・S B 104の時期は不明である。

**S B 105** (第11-13図) 掘立柱建物が集中する発掘区南東部でS B 15、S D 18に重複して検出した3×4間の総柱の建物である。桁行は北から2m+2.1m+2.45m+2.45m、梁行は2mの等間である。柱穴は径30~60cm、深さ20~50cmで、瓦器、土師器、



第11-11図 竪穴住居・掘立柱建物実測図(1:100)



第11-12図 掘立柱建物・溝実測図 (1:100)

No	間	心心距離m	棟方向	備考
1	4×(3)	9.2×5.7	N12° E	総柱
2	4×5	8.8×11.6	N14°30' E	〃
3	1×3	3.35×5.7	N12°30' E	側柱
4	2×2	4.4×5.3	N11° E	倉庫
6	2×(1)	4.7×2.7	N15° E	側柱大型掘形
15	3×4	5.2×8	N14° E	総柱
64	3×5	6.6×11.5	N15° E	〃
65	4×5	9×11.75	N14°30' E	〃
97	2×3	3.6×5.5	N13°30' E	〃
98	3×(3)	4.5×4.8	N32° E	側柱
104	2×(1)	5×2.2	N34° W	総柱(?)
105	3×4	6×9	N15° E	総柱

第11-3表 掘立柱建物一覧表

須恵器などが出土している。

## 2. 井戸

SE 14 (第11-14図) 発掘区南東部の掘立柱建物群 (SB 15・105・64・65) が重複するあたりで検出した方形の木組の井戸である。掘形は検出面で南北に1.95m、東西に1.7mの長方形を呈しており、底部で一辺1.6mの方形である。深さは、検出面より65cmである。

構造は、遺存状態が良好でないので、部分的にしからぬが、掘形底部の周壁から内側へ20cmの位置に厚さ1~2cm、幅7~20cmの板11~13枚程を一系列に直立させ、東西南北の側板となし、井筒を構成している。板を直立させる方法には、土中に打

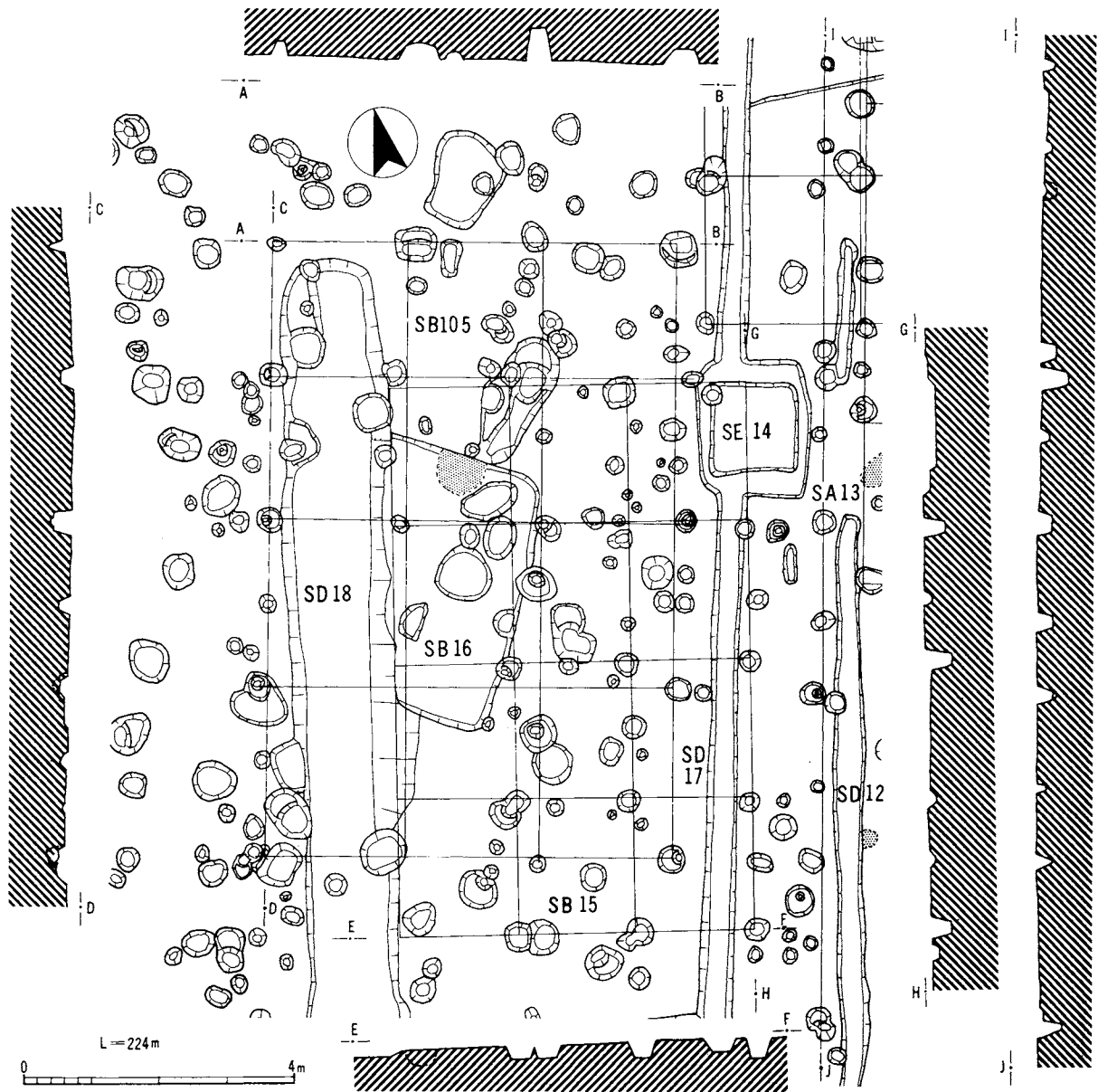
ち込んだ状態と、下部を土、礫で固定させた状態があり、検出時、北側では支柱らしき痕跡もあった。

側板の現存長は、還元層のレベルに対応して8～23cmであるが、元々は約50cmのものであったと思われる。埋土中層からは3枚の板(60×16×2cm、100×30×3cm、90×12×2cm)が出土している。ただし側板より幅が広いので、あるいは側板以外のものか、存続期間中に、敷かれた底板の可能性もある。

埋没状況は、第1層がSD17の埋土で、上層では黒灰色粘質土、下層では黒褐色粘質土(茶赤色の焼土、炭化物が多く含む)となっている。第2層が埋土I層で、30cmの厚みを持ち、上層は茶褐色粘質土、中層は灰褐色粘質土、下層は淡黒褐色粘土である。

下層の上面にはレベル的に接近して、山茶碗(172)瓦器碗(170)が出土している。第2層には、加工木を含む木片が多く含まれている。第3層は埋土II層で、暗青褐色粘土で存続期の終期の埋没で、板等の木製品が出土している。第4層は埋土III層で、上層は暗褐色粘土、下層は緑褐色粘質土で、植物遺体を多く含む。とくに南壁底には、ウリの種子が多量に出土しており、粃も確認できた。第5層は、地山で黄褐色粘質土である。掘形と側板との裏込めは、褐色系の汚れた土である。出土遺物は瓦器(碗・皿)、山茶碗、土師器(皿)、製塩土器、白磁碗、動物遺体(昆虫)である。

SE 66 (第11-15図) 発掘区南東部の掘立柱建



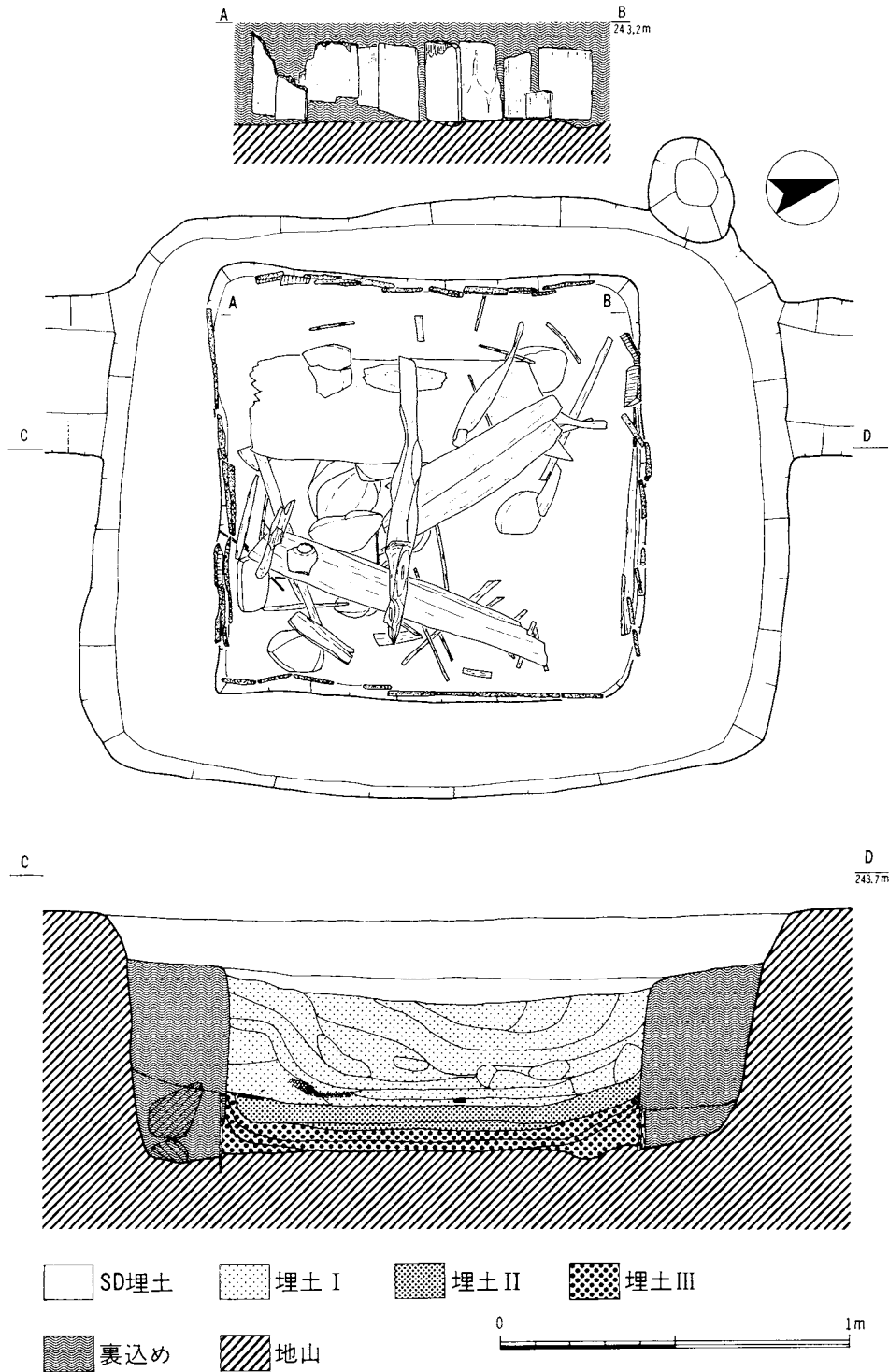
第11-13図 掘立柱建物・井戸・柵・溝実測図(1:100)

物群の北辺で検出した円形の素掘りの井戸である。

検出上面での掘形は径 2.6 ~ 2.9m もあり、底部径で 1.85m である。深さは検出面より 2.8m である。

埋没土層は、検出時の最上層に第 I 層黄褐色土がレンズ状に残り、砂や小礫が混入した床土の下部にあたる。第 2 層暗褐色粘質土は拳大 ~ 人頭大の石が 10cm の幅で带状に西から東へ傾斜して埋没しており、

炭化物や瓦器、土師器を多く包含しており、厚い部分で 1.5m もある。第 3 層は褐色系粘質土で、炭化物を多く包含している。第 4 層は灰褐色粘質土で、有機物や木片を多く含み、中層に炭化物層がある。第 5 層はやや灰色を帯びた暗褐色粘質土で、夥しい有機物や木片が 50 ~ 80cm の厚みで含まれている。第 6 層は灰色粘質土でやや粗い粒子を含む。第 7 層は地



第11-14図 SE14実測図 (1:20)

山の砂礫層となっている。

遺構に接する地山は、検出上面から黄褐色粘質土、淡褐色粘質土、砂礫層となっており、礫層以下は還元層である。

井戸からは、下駄、曲物、箸、杓子、木筒、加工木などの木製品や、動植物遺体、及び土器多数が出土している。

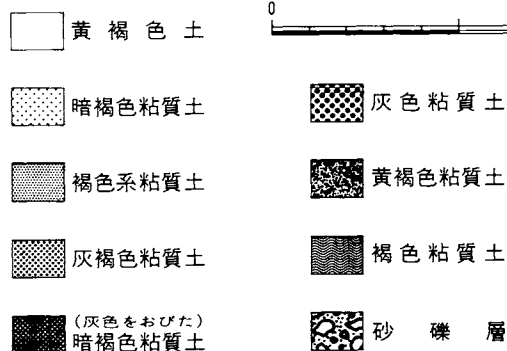
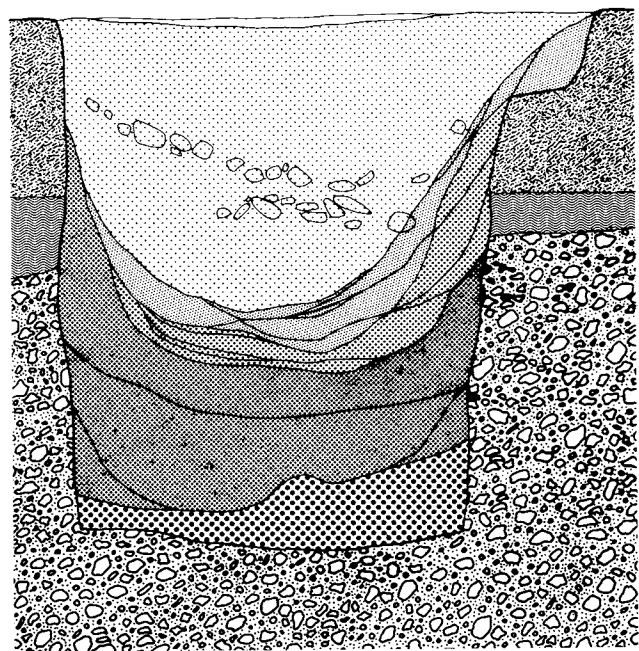
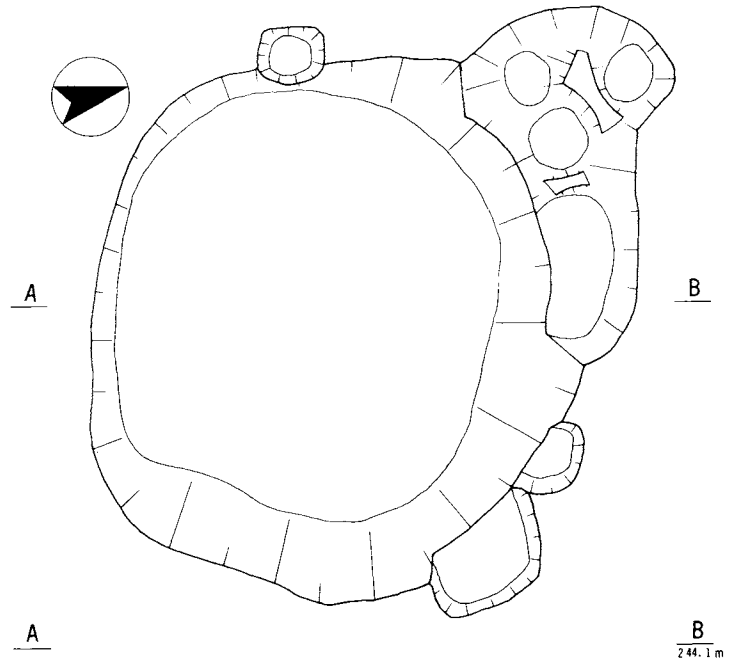
土器類は瓦器破片2,272点(計測可能碗47点、皿214点)、土師器破片 251 点(計測可能皿33点)、山茶碗 3 点、土錘 1 点、貿易陶磁(白磁片) 16 点などである。

### 3. 堀・溝

**SD 7 (第11-12図)** 発掘区南辺のSB6を矩形に巡る堀で、この一棟のみを区画する。堀の北辺部で全長14m、幅2.0~2.4m、深さ40~50cmを検出した。北東角では南北3.5m、東西1.5mの範囲に、瓦器と共に拳大~20×50cmの石が粗雑に密集している。北辺中央南側東半の現存溝肩から溝底への法面には張石の如く30×50cmの扁平な石が一行9石並行している。北辺中央西半には北東角と同様な石が南北1.5m、東西3mの範囲に、より密集して堆積していた。堀の東辺部は幅約2.2m、深さ30~50cm、現存長8mである。西辺部では、幅2.5~3m、深さ20~30cm、現存長8mであるが、東側法面に幅60~80cmの平坦な面を持ち、段となし、堀底より10~15cmの高さにあたる。石はほとんど、堆積しない。

堀の断面では、黄褐色粘質土の地山の堀底に炭化物を多く含む黒褐色粘質土が約10cm積もり、この上に30~40cmの黒灰色粘土が多くの大小の石や瓦器、瓦等と共に短期間のうちに堆積した状況を示している。出土遺物は、本遺跡出土の瓦器の半数、同じく布目瓦の大半、及び土師器、須恵器、山茶碗、貿易陶磁などである。

**SD 12 (第11- 図)** SA13に東隣する溝である。南北に走り現存長約1.8m、幅40cmの溝で、南



第11-15図 SE66実測図 (1:40)

端はS D 7に注ぎ、深さ20cmである。北端の深さは5cmであり、水は北より南へ流れる。なお、北方2mに全長2.2m、幅20cm、深さ10cmの溝があるが、S D 12と関連するかは不明である。埋土は暗茶褐色粘質土で、中に暗灰色土部分もある。出土遺物は瓦器、土師器、須恵器、陶器などである。

**S D 18** (第11-13図) S B 15西側と接する溝である。南北に走り、現存長約11m、幅1.4mである。北端は深さ約20cmであり、南端は近世の溝S D 17で切られ、深さ12cmを測り、水は南より北へ流れる。埋土は暗茶褐色粘質土である。出土遺物は、瓦器、土師器を中心に瓦質土器、陶磁器、須恵器などである。

#### 4. 柵列

**S A 13** (第11-10・13図) S B 15とS B 10の間を南北に占める柵状遺構である。ピットは12を数える。ピットの径は20~40cm、深さは大半20~25cmであり、間隔は1.2~1.5mが多い。埋土は茶褐色粘質土である。北端のピットはS B 60の北方30cmにあたり、径約20cm、深さ22cmである。南端のピットはS D 17の南東隅東方1.2mにあり、径約30cm、深さ30cmである。両端の長さは約14mであるが、南の延長上に3ピットある。ただし、南端から、3.4m+4.5m+0.7mの間隔である。S E 14南東部より南方3mにあるピットは径30cm、深さ25cmであるが、径8cm、長さ15cmぐらいの柱根が遺存し、掘形からは瓦器、土師器、須恵器が出土する。他に1ピットに柱根が残るが、良好ではない。ほとんどのピットから、瓦器、土師器が出土する。

#### (4) 室町時代後期~江戸時代の遺構

室町時代後期の遺構に浜田氏堡の堀があり、江戸

時代の遺構に溝7条がある。

#### 1. 浜田氏堡 (第11-3図)

発掘区に隣接する水田が城跡と言う伝承や水田区画から、城館跡の堀跡と推定できるため、幅1.3mのユニボーを使用して、6本のトレンチを入れる調査を実施した。

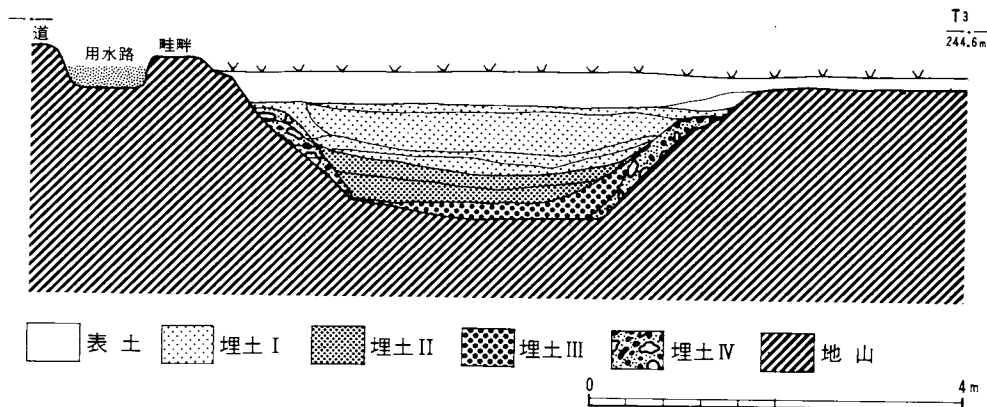
**T<sub>1</sub>** 南側の細長い水田の東寄りに設定した。全長9mのトレンチである。北は比高1.3mの高い畑で、南はT<sub>1</sub>と同レベルの別の水田に接する。堀底は標高243.1mを測り、堀肩までは80cmある。埋土は褐色土が大半で、下層に暗褐色粘質土が堆積する。

**T<sub>2</sub>** 南北に細長い畑の西側南寄りに設定した全長9mのトレンチである。堀肩は標高243.86mである。

**T<sub>3</sub>** (第11-16図) 畑西方の水田中央部に設定した、全長10mのトレンチである。堀幅5.6m、堀底幅2.8m、堀の深さ1.35mであり、堀底の標高242.55mを測る。堀の土層断面は、第1層表土で、上層褐色灰色粘質土、下層暗青灰色粘質土である。第2層埋土I層で、上層褐色灰色土(管状鉄分を多含)、中層暗青灰色土、下層暗青灰色(やや砂混で、植物遺体多含)である。第3層埋土II層で、上層暗灰色砂土(植物遺体含む)、下層暗褐色土である。第4層埋土III層で褐色粘土である。第5層埋土IV層はやや灰色がかった黄褐色粘質土である。第6層は地山で黄褐色粘質土である。

**T<sub>4</sub>** 畑の西側北寄りに設定した、全長9.5mのトレンチである。堀の深さは1.64mで、堀底は標高242mである。

**T<sub>5</sub>** 畑北方25m付近の道と水田にかけて設定した全長8mのトレンチである。堀の深さは1.55mで、堀底は標高242.05mである。



第11-16図 浜田氏堡堀(T<sub>3</sub>)断面図(1:80)

T<sub>6</sub> T<sub>5</sub>の東方33mに設定した、全長9mのトレンチである。堀の深さは1.5mで、堀底は標高1.50mである。

以上の調査結果から、検出された堀は郭を方形に圍繞するものである。西側の堀の外法は63m、内法は50mである。南側では内法8m、北側では内法35mまで検出した。

## 2. 溝

**S D 17** (第11-4図) 発掘区中央で南北に約23m流れた後、西へ直角に約24m流れる幅20~50cmの溝である。溝は拳大~人頭大の石を何段にも積む暗渠排水の施設であり、深さ30~50cmである。なお、S E 14・S D 18を切っている。埋土は黄灰色粘質土で、近世瓦、近世陶磁器等が出土している。

**S D 28** (第11-4図) S D 17の南北に走る部分に平行して、西方17mの地点で、南北に走る幅30~50cmの溝である。北端の深さは10cmであり、南端はS D 17に注ぎ、深さは12cmである。埋土は黄灰色粘質土で、近世陶器などを出土する。

**S D 71** (第11-4図) 発掘区東半部低地を西から東に28m走る幅30~50cmの溝である。埋土は褐灰色粘質土で、暗渠用竹も数本入っている。深さは西端で25cm、東端で40cmである。近世陶磁・土師器等が出土している。

**S D 72** (第11-4図) S D 71の北方5~7mで西から東に26m走る幅30~50cmの溝である。溝は、竹や川原石を使用した暗渠排水の施設であり、西端

の深さ5cm、東端の深さ10cmである。埋土は褐灰色粘質土で、近世陶器などを出土する。

**S D 83** (第11-4図) 発掘区西半部低地で、西から東へ10m走った後、南から北へ13m走る、幅30~40cmの溝である。深さは西端で5cm、北端に到ると26cmである。埋土は黄褐色粘質土で、近世陶磁器等が出土している。

**S D 84** (第11-4図) S D 83の西方約3mで、南から北に8m走る幅30cmの溝である。深さは南端10cm、北端6cmである。埋土は灰褐色粘質土で、近世陶器などを出土する。

**S D 85** (第11-4図) S D 83の南北西方4.5mで、これに平行して走る幅30~40cmの溝である。北端は深さ33cmで、南端はS D 83に注ぎ、深さ27cmである。埋土は黄灰色粘質土で近世陶器などを出土する。

## (5) 拡張区

発掘区北方の約450㎡である。層序は上から1層耕作土(黒灰色土・陶磁器出土)が15cm、2層床土(黄褐色粘質土・土師器出土)が10cm、3層旧耕作土(灰色土・須恵器出土)が5cm、4層旧床土(暗黄褐色粘質土・土師器出土)が15cm、5層包含層(茶褐色粘質土・土師器・須恵器出土)が35cmで、地山(黄褐色粘質土)に達する。発掘経費、期間等から、完掘できなかった地区である。2間×(1)間以上の掘立柱建物1棟、竪穴住居跡18棟の遺構を上面で確認するにとどめたのは、文化財保護上遺憾である。

# 3. 遺物

竪穴住居を中心とした出土遺物は、古墳時代の須恵器、奈良時代の須恵器、土師器を中心とするが、遺構のわりには出土遺物が少ない。現況が水田で、削平がすすんでいたためだろうか。そのほとんどが破片で、接合により復元できる遺物もある。掘立柱建物を中心とする平安時代以降の遺物には多量の瓦器碗・皿のほか、土師器・山茶碗・陶磁器などがある。井戸、溝出土の一括遺物は伊賀地方における中世土器編年上きわめて重要な資料である。

## (1) 古墳時代後期

### 1. 須恵器

**杯蓋A** (1~5) 天井部は余りふくらみがなくヘラ削りの範囲はややせまい。天井部と口縁部は明確な稜線でわけられる。端面は内傾している。(1)は口縁部径15.2cmとやや大きく、体部がほぼ垂下している。接合によりほぼ完形に復元できる。(2~5)は口縁部径12~13cmで、体部はややひらく。

**杯蓋B** (6~9) 天井部のヘラ削りは部分的になり粗い。体部が短くなりややひらく。口縁部は(7)がやや内傾して面をもつ他は丸くおさめられる。口縁部径は12~13cmである。(9)の天井部は器壁が厚く重ね焼きのあとがうかがえる。(7)はS



B100から出土。

**杯蓋C** (10~15) 口縁部径が10cm前後の小型のものである。全体に浅く、天井部からやや内湾しながら体部がひろくもので、端部は丸くおさまられている。(15)は器壁が厚く、小石を含み胎土が粗い。

**杯身A** (16) 口縁部径11.4cm、器高3.8cmとやや深い。底部からやや立ちあがりぎみの体部をつくり受部をみじかくひき出す。口縁部は立ちあがりぎみにのび、端部は丸くおさまられる。

**杯身B** (17~30) 口縁部径12.8cmで浅い、(23・30)と、口縁部径11cm前後のものにわけられる。

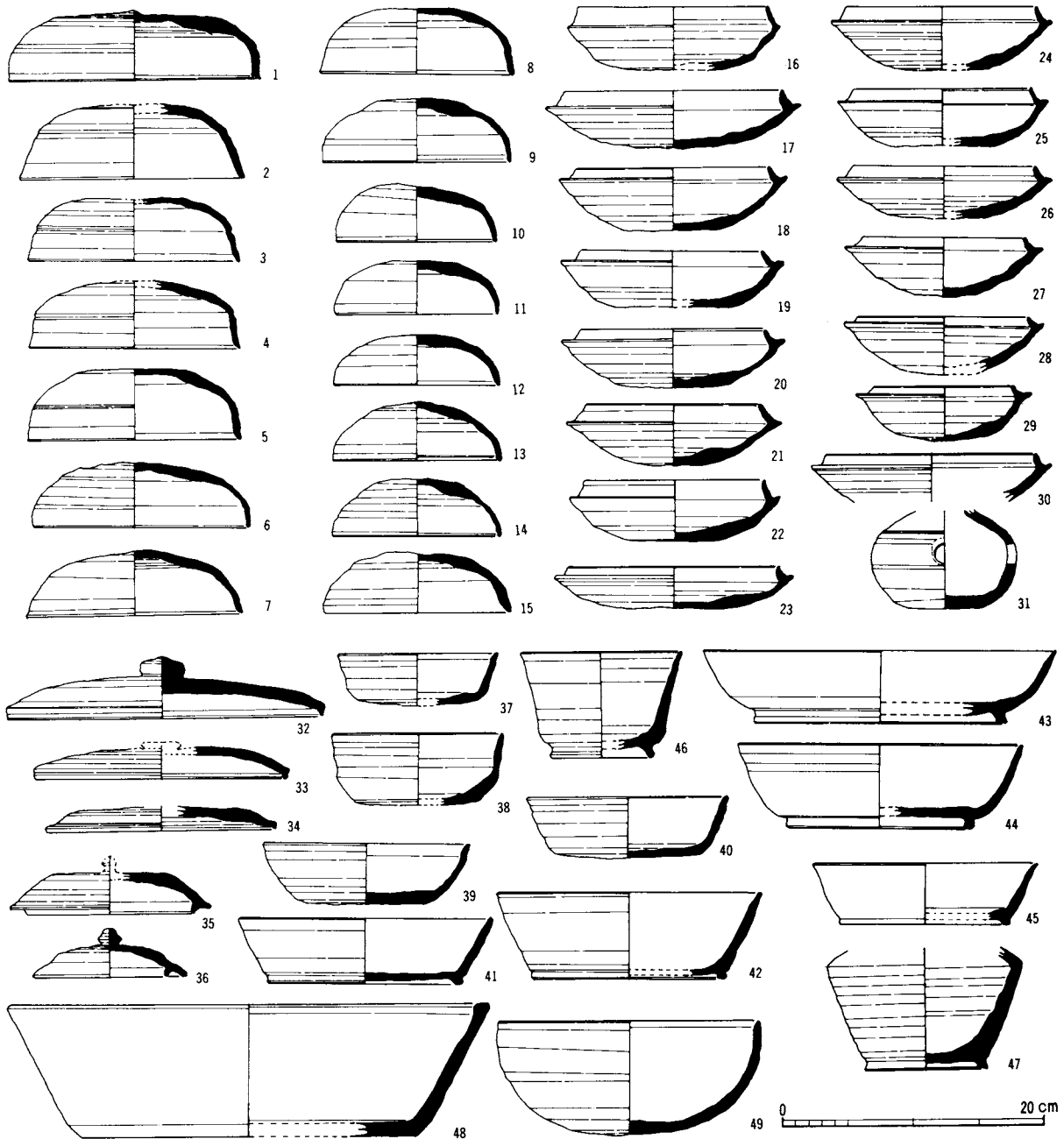
受部は水平またはやや上方へひきだされた受部と口縁部の堺にはヘラによる一条の凹線が施される。口縁部はみじかく内傾し端部を丸くおさめる。底部のヘラ削りは範囲のせまいものもある。(30)はS B 96から出土。

**小型臚** (31) 口縁部から頸部が欠損している。胸部の最も張り出したところに円孔をもつ。胴下部から底部にかけて、ヘラ削りを施す。

## (2) 奈良時代

### 1. 須恵器

**杯蓋A** (32~34) 口縁部径19cmと大型の (32)



第11-17図 須恵器実測図 (1:4)

と、14～15cmの(33・34)にわけられる。(32)は、まだ宝珠形のおもかげを残すつまみをもつが、(33・34)は扁平なものか。口縁端部は下方へ短く屈曲し、端部内面はわずかにふくらむ。

**杯蓋B** (35・36) 天井部中央に乳頭状のつまみがつく。口縁部径は(35)が10.0cm、(36)は9.0cmである。(35)は平坦な天井部にヘラ削りが施される。口縁部内面にかえりをもち、(35)は口縁端部よりも下方へ突出している。

**杯身A** (37～40) 口縁部径が10cm前後の小型なもの(37・38)と、12cmをこえるもの(39・40)がある。平坦な底部から直線的に外上方へのび、端部は丸くおさめられる。(38)は体部から屈曲して立ちあがりぎみに口縁へのびている。

**杯身B** (41～45) 口縁部が直線的に外上方へのびるものと、やや内弯ぎみにのびるものがある。口縁端部はすべて薄く、丸くおさめられる。高台はあまり高くなくわずかに外に開き、端面はほぼ水平である。(44)はわずかに内弯する高台をもつ。

**椀** (46) 口縁部径10.0cm、器高6.5cm、底部と体部の界がヘラ削りされる。高台は薄く、やや外に開く。体部から口縁部にかけて直線的に立ちあがりぎみにのび、端部を薄く丸くおさめる。

**長頸壺** (47) 肩部から口縁部まで欠損。底部径7.2cm。直線的な体部から内側へ屈曲し、明瞭な肩部をもつ。底部には短く外へ開く高台が付く。

**盤** (48) 口縁部径29.0cm、器高8.0cm、底部径20.4cm。直線的にのびる体部からやや肥厚して端部をつくる。端面は上方に平坦である。底部は大部分が欠損しているが、体部との界はヘラ削りされる。

**鉢** (49) 口縁部径15.7cm、器高6.8cm。丸い底部から内弯しながら上方へのび、口縁端部を丸くおさめる。底部から体部にかけてヘラ削りされる。

## 2. 土師器

**甕A** (50～55) 頸部から「く」の字状に外反し、やや内弯して端部を丸くおさめるものと、内側へ短くかえるものがある。口縁部径も約24cmのものから約30cmのものまでである。(54)は図化できなかったが、器表には細かい刷毛目が施されている。色調は明茶色を呈し、胎土中に細砂を多く含む。長い胴部には煤の付着も観察できる。(52)の内壁には指おさえの

あとがのこる。口縁部は外面、内面ともナデられたものや刷毛目の残るものもある。(51)はS B 70から出土したもので、胴下部はヘラ削りされる。また、(52)はS B 68から出土。

**甕B** (56～58) 短く外反する口縁部をもつ。

(56)は、口縁部径25.8cm。外面は黄白色、内面は明茶色を呈している。胎土は緻密で、焼成は良好である。胴部は粗い刷毛目が施される。内面に指オサエがのこる。(57)は口縁部径24.6cm。口縁部は肥厚し両面ともナデられる。明茶色を呈し、胎土中に小石を含む。内面は指オサエのため凹凸がみられる。

(58)はやや小型で口縁部径21.4cm。頸部は指オサエのため凹凸がみられる。胴部は黒灰色を呈している。

**甕C** (59・60) 頸部から立ちあがりぎみにのび、端部ちかくでやや外反する口縁部をもつ。全体に遺存度が悪く不明な点が多い。(59)の内面には横方向の細かい刷毛目が施される。

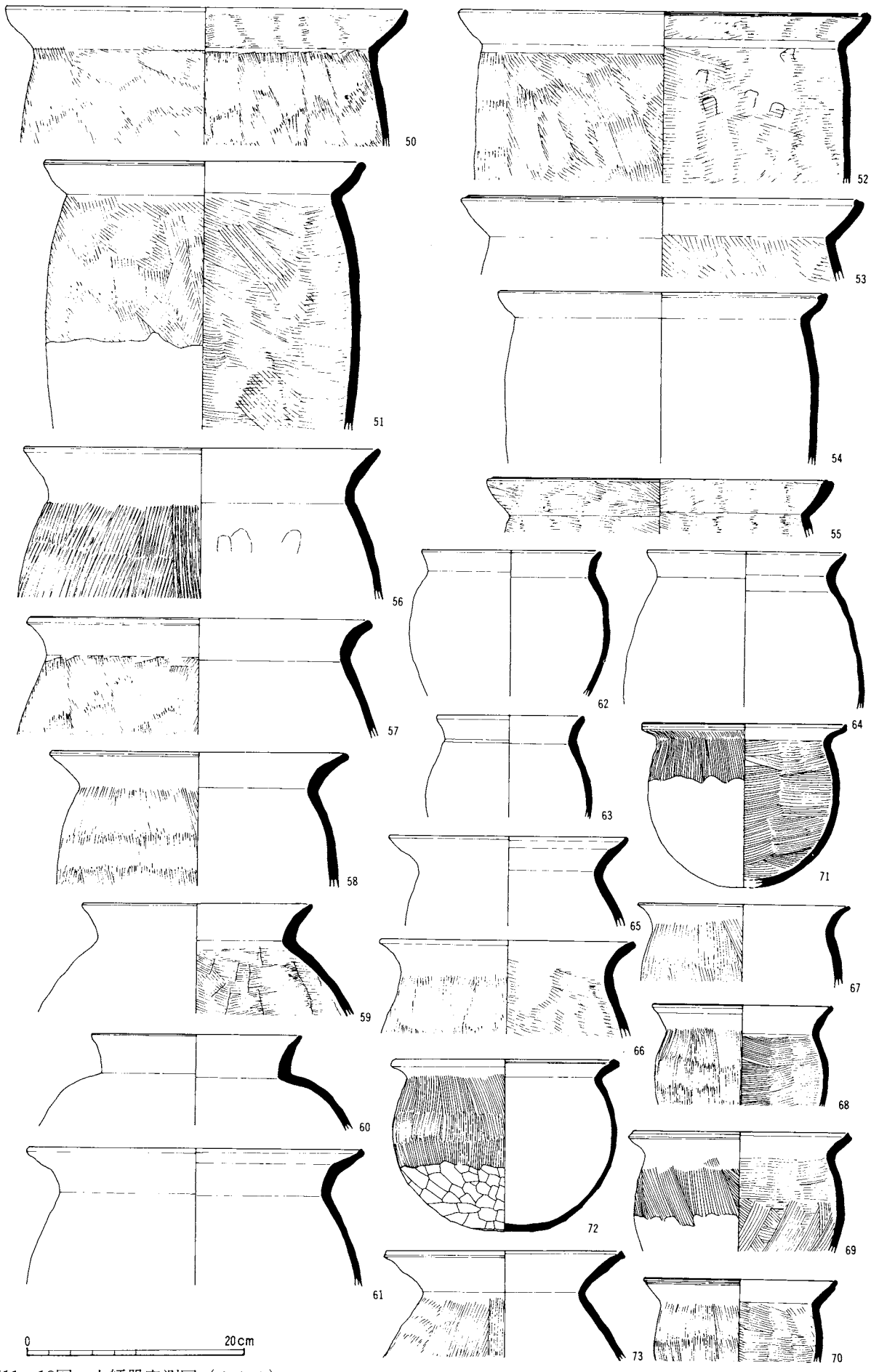
**甕D** (61) 頸部から短かく立ちあがり外反してさらに内弯しながらひきだされ端部を丸くおさめる。口縁部径24.4cm。胎土中に砂粒を多く含む。器表が剝離しているため不明な点が多い。

**小型甕A** (62～64) 口縁部が、短く立ちあがりぎみにのび、端部は丸くおさめられる。器表が剝離しており調整等は不明である。(63)は口縁部径10.6cmと小さい。

**小型甕B** (65～70) A種よりさらに外反する口縁部をもつ。口縁部が肥厚するもの(66)や非常に薄く端部を丸くおさめたもの(67・68)がある。(69)はS B 27から出土したもので、口縁部径15.7cm。明茶色を呈し、胎土中に多くの砂粒を含む。胴下部はヘラ削りされている。

**小型甕C** (71) 口縁部径14.8cm、器高12cm。淡褐色を呈し、胎土中に砂粒を多く含む。球状の胴部は最大径のもつやや上方からヘラ削りされる。底部の器壁は厚く、内面は指オサエによる凹凸がみられる。S B 27出土。

**小型甕D** (72) 口縁部径16.0cm、器高12.6cm。茶褐色を呈し、胎土中に砂粒を多く含む。口縁部は短く外反して肥厚し、端部を丸くおさめる。球状の胴下部はヘラ削りされ器壁が非常に薄い。内面は



第11-18图 土師器実測图 (1 : 4)

不定方向のナデがみられる。S B70のカマドから出土。

**小型甕E (73)** 口縁部径17.0cm、大きく外反する口縁部をもつ。赤褐色を呈し、胎土は緻密である。胎土は暗文をもつ杯とよく似ている。口縁部から内面にかけて調整不明。

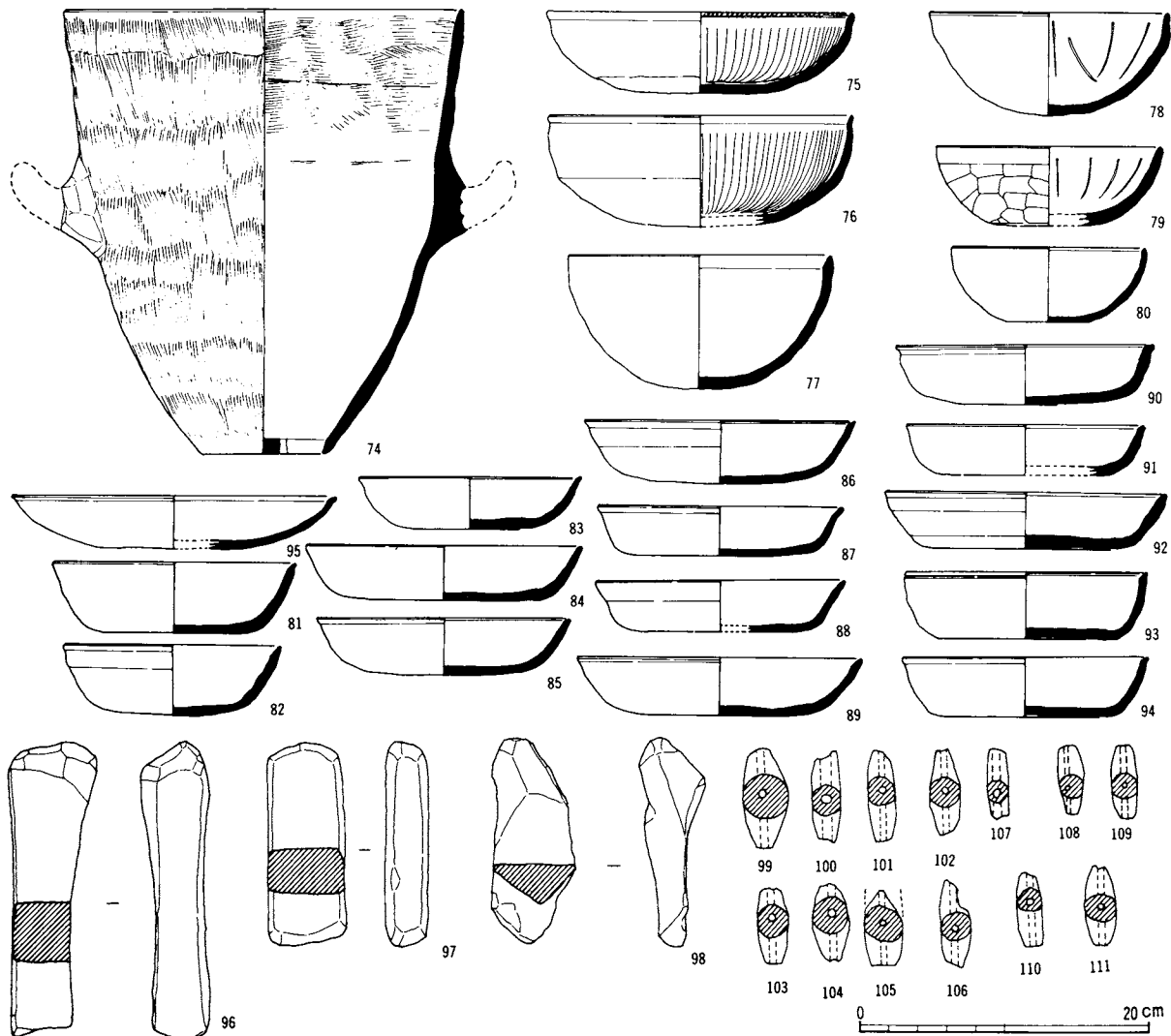
**甕 (74)** 口縁部径21.7cm、器高24.4cm。両側に把手がつけられ、底部は半円形の蒸気孔があく。外面は縦方向の刷毛目が施され、下端はナデられる。内面は上 $\frac{1}{2}$ ほど横方向の刷毛目が施される。下 $\frac{2}{3}$ は刷毛目のあとナデられる。明茶色を呈しているが、部分的に黒褐色を呈し、内面下半は赤褐色を呈している。

**杯A (75・76)** (75)は口縁部径16.8cm、器高4.5cm。赤褐色を呈し、胎土は緻密である。内面に放射状、口縁部内面の凹部に螺線状の暗文が施される。

体部から口縁部にかけてヘラ磨きされる。底部から体部にかけて圧痕による凹凸がみられる。(76)は口縁部径16.6cm。内面に放射状の暗文が施され、体部から口縁部にかけてヘラ研磨される。下半は圧痕による凹凸が著しい。赤茶色を呈し、胎土は緻密である。S B24出土。

**杯B (77~80)** 丸い底部からゆるやかに内湾ぎみに立ちあがり口縁端部を丸くおさめる。(78・79)の内面にはヘラのあたりが認められる。(79)は体部から底部にかけてヘラ削りされる。(78)はほぼ完形品である。(80)は小さく口縁部径10.4cm、器高4.1cmである。茶褐色を呈している。胎土は全体に多くの砂粒を含む。

**杯C (81・82)** 口縁部径12cm前後、器高3.8cmと深い。赤茶褐色を呈し、胎土中に若干の細砂を含む。調整不明。(81)はS B70から出土。(82)は接合



第11-19図 土師器・砥石・土錘実測図 (1:4)

によりほぼ完形に復元される。

**杯D** (83~89) 底部から丸味をおび体部との界が明瞭でない。直線的に外上方へのびる。端部は内側に面をもつもの、丸くおさまられるものがある。口縁部径は14~15cmのものが多いが、(83)は12.3cm、(89)は15.5cmである。器高は3~4cm。茶褐色を呈し、胎土中は砂粒を多く含む。(84・85・88)はS B70出土。

**杯E** (90~94) C種より浅く、口縁部の立ちあがり鋭く、端部は内面に面をもつ。底部と体部も明瞭にわかれる。口縁部径は13~14cmであるが、(92)は15.4cmである。全体に器表があらえていて調整不明な点が多く、赤茶褐色を呈するものが多い。(90)は端面に一条の沈線が施されている。(91・94)はS B70出土。

### 3. その他

**砥石** (96~98) (96)は現存長16.2cm、幅3cm。4面を使用している。(97)は現存長11.0cm、幅4.2cm。2面を使用。(98)はかなり使用したもので、断面三角形の2面は凹み、変形している。(97)はS B29出土、(98)はS B30上層から出土。

**土錘** (99~111) 端部が欠損しているものが多いが13点出土している。包含層から出土。

### (3) 平安時代~鎌倉時代

#### {1} S E 66出土遺物

#### 1. 瓦器

瓦器の破片は22,726点に及ぶ。器種は椀と小皿である。第11~4表は計測可能な土器の法量である。椀の器高は5~5.5cmのものが多く、口径は14.6~16.1cmであるが、14.9~15.2cmのもの半数である。皿は口径8.9~9.6cm、器高1.3~1.8cmのものが多い。このうち、報告するのは、椀16点、皿8点である。椀内面は成形時凸面の型を使った様に面的に凹凸もなく、内底部を指ナデした後、体部内面にヘラミガキを密に施し、口縁部内端面に1~2mm幅の沈線を巡らす。口縁外面は横ナデ後、横方向のヘラミガキを施す。体部は成形時の指頭圧痕と掌紋を明瞭に残し、ヘラミガキを口縁部端面から下の方に弧状に施す。その範囲は高台部までで3~4回に分けるものが多い。高台はすべて貼り付け高台であり、その貼り付け箇所付近と高台内外面を横ナデ調整する。高

台径は5.5~5.9cmが多い。色調はおおむね黒色で、遺存良好の瓦器は銀黒色を呈している。胎土は白灰色で非常に精良であるが、砂粒を含み、中に大豆状の石を含むものもある。焼成は良好である。なお、内底部には様々な暗文を施す。この形状を主に、器形、体部調整技法などから、椀をA~Gの7類に分類した。

皿は手づくね成形である。口縁部内外面を横ナデした後、内面にはすべてヘラミガキを施すが、疎密はある。内底部に施す暗文により、A・Bの2型式に分類した。

**椀A** (112・113) 内底部の暗文はジグザグ状である。内底面は丸味を持ち、体部下部でやや腰を張り、外方に開く。高台は断面逆台形が外方に開く。口縁部内端面の沈線は幅2mmと割に広い。内面のヘラミガキは、内底部の暗文施行後に施し、ごく部分的に間隔があるものの、密に丁寧の下から上へ横方向に連続圏線状に施す。口縁部外面は、ヨコナデ痕跡が明瞭に残るが、横方向のヘラミガキを疎らに施し、さらに下から上へ弧状のヘラミガキを体部下半まで施す。完形でないため、ヘラミガキの分割数は不明である。(112)は口径14.7cm、器高4.5cm、器高指数(以下、指数と略す)31、(113)は口径14.9cm、器高5.5cm、指数37である。

**椀B** (114・115) 内底部の暗文は二重の連結輪状であり、外輪から内輪へ一筆書きする。内面ヘラミガキは暗文に先行し、わずかに間隙が残るが、密である。外面ヘラミガキは高台付根から口縁部まで、5往復で3分割ないしは4分割される。口縁部は強く横ナデされ、端部は外方に引張られる。高台は断面逆台形で、外面が直立ぎみである。胎土は砂粒を含み、色調は黒銀色である。(114)の5輪の外輪、一輪の内輪とも輪は丸みを持ち、口縁部外面は密に横方向のヘラミガキを施す。口径15.1cm、器高5.1cm、指数34、高台径6.2cmである。(115)の外輪の3輪、内輪の2輪は $\ell$ 字状の輪である。口径14.9cm、器高4.6~5.7cm、高台径5.9cmである。

**椀C** (116~120) 内底部の暗文は4~7個の輪が重複して連結する連結輪状である。器形も様々で内底面が丸みを持つものや平らなものがあり、体部外面下半も丸みを持つもの、指頭圧痕を残すものが

ある。口縁部は椀Aより立ち気味であり、内面ヘラミガキは椀Aよりやや疎である。ヘラミガキと暗文は重複しない。外面のヘラミガキは体部下半の全体に及ぶものも少なくなく、施し方も3分割と4分割の2種に限る。高台の断面は逆台形と三角形のものがある。口径は15.0~15.3cmと15.6~15.8cmの2種があり、後者の方が多い。その指数は、32~35である。なお、(119、120)の高台径は、5.0~5.3cmと小さい。(117)は暗文施行後、内面ヘラミガキを施し、外面には粘土の継目痕や爪痕がある。(118)の外面にも、粘土の継目痕があり、口縁部から高台にかけては白灰色を呈し、焼成時の器の置き方を示す。(120)にも内外面に一部白灰色部分があり、この椀の暗文のみ、幅2mmと広い。(119)の内底面に輪状の粘土が付着し、重ね痕を残す。

**椀D** (121・122) 内底部の暗文は連結輪状の4輪であるが、椀Cに比べて少し深い椀であり、口縁部は軽く横ナデする。器壁も椀Cに比べて体部中程でやや薄くなる。体部外面のヘラミガキは3~5分割するが指頭圧痕と掌紋が明瞭に残る。(121)の口径14.9cm、器高5.3cm、指数36、(122)の口径15.9cm、器高5.5cm、指数34である。

**椀E** (123) 内底部の連結輪状暗文は5輪で、幅は2mmと広い。外面は体部上半~口縁端で9~10往復のヘラミガキを重複して5分割以上で施す。ヘラミガキが体部上半に限る点、他の椀に比べ密に施す点がこの椀の特徴である。

断面台形の高台が外に開いて貼り付く。口径は14.6cm~15.6cm、器高4.4~5.3cmで、器形の歪みは大である。

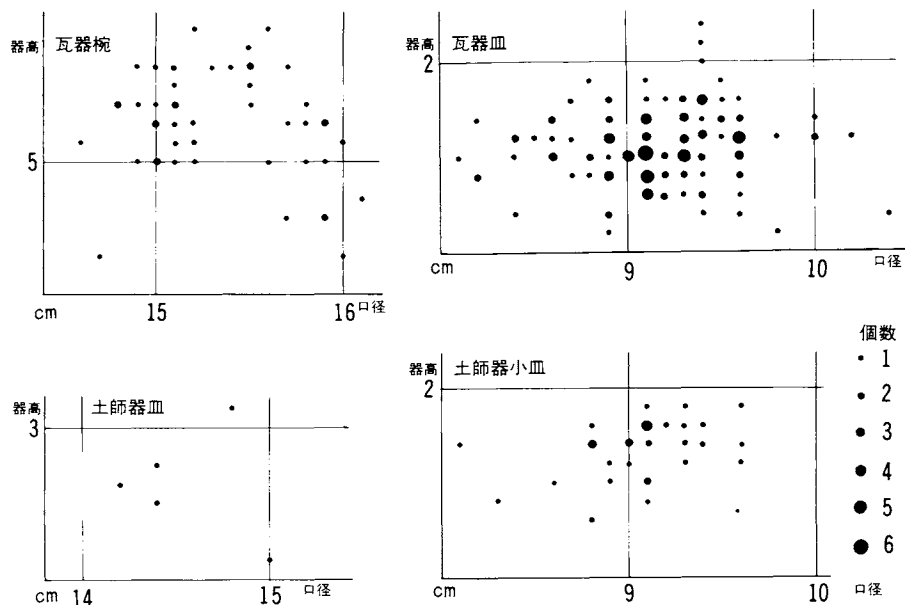
**椀F** (124~126)

内底部の連結輪状暗文は3輪で幅は2~3mmと広い。(124)は全体の色調がにぶい黒色の例外的な椀である。暗文の幅が3mmもあるのは、この1例だけである。残りが1/4のため、

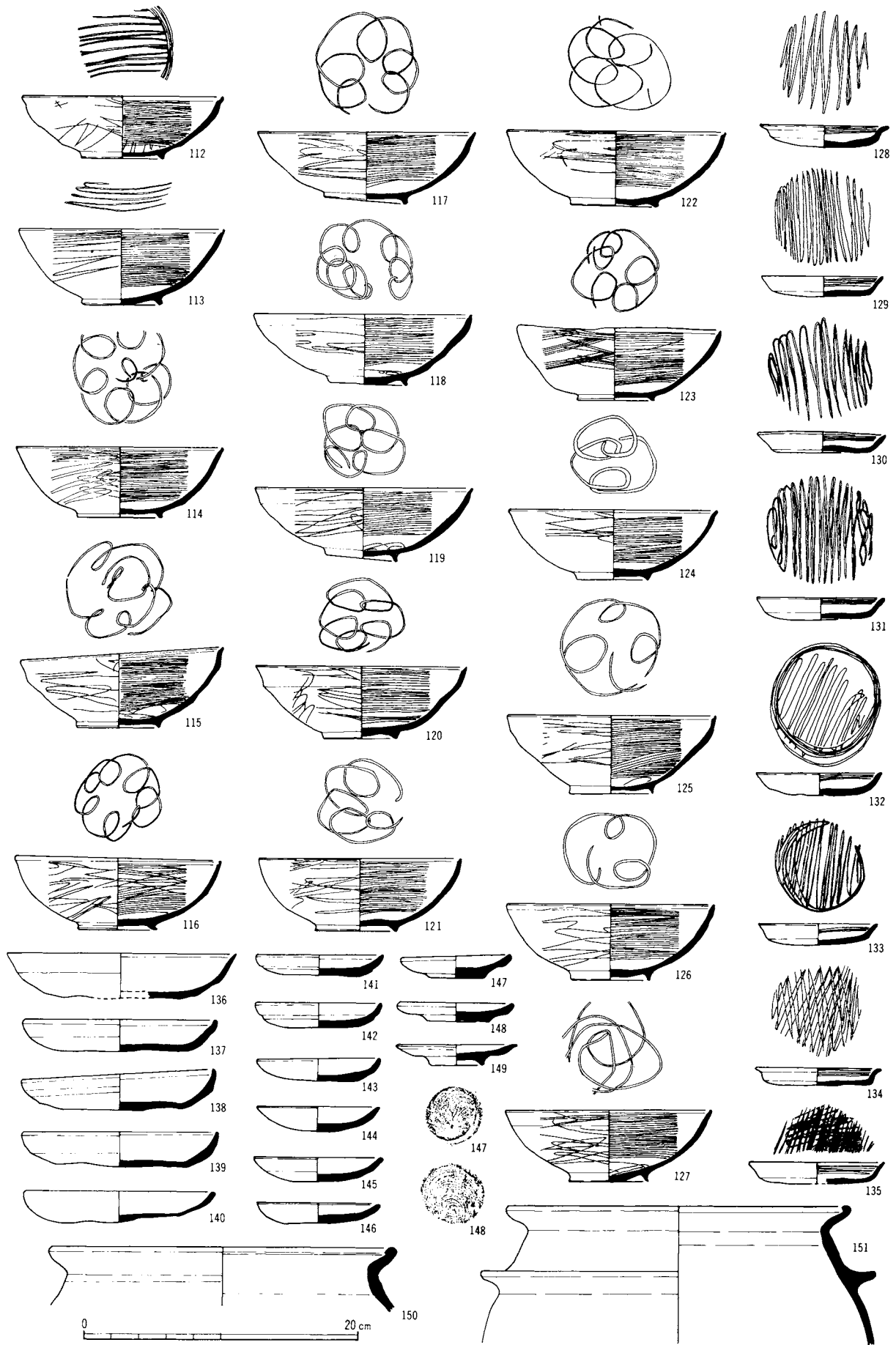
外面ヘラミガキの分割は不明である。口縁部の下2cmはヘラミガキ痕が幅2mmのため、割と密に見える。ヘラミガキの下限は体部中央で現認するだけである。口径15.1cm、器高5.1cm、指数34である。(125)の口縁部は強く横ナデされ、直に近く、口縁部と体部にかけて一巡する強い指頭圧痕が横方向にみられる。外面は体部下半1/4から口縁端部までの往復のヘラミガキを3分割で施す。(126)の外面ヘラミガキは体部下半1/4まで疎に及ぶが、残りが1/4のため分割単位は不明である。(125・126)の口径は15.0~15.2cm、器高5.5~5.7cm、指数38~39である。

**椀G** (127) 内底部の暗文が渦巻状である。幅は1mmである。外面のヘラミガキは、高台の貼り付け部近くから口縁端部におよび、細かく施す。残りが1/4弱のためヘラミガキの分割数は不明である。高台の断面は崩れた逆台形で外反する。口径15.2cm、器高5.2cm、指数34、高台径5.2cmである。

**皿A** (128~133) 内底部に連続書きのジグザグ状暗文を施す。暗文は間隔の広いもので9~10回、狭いもので17~20回の往復で、例外なくヘラミガキに先行する。口径は8.6~9.4cm、器高は1.5~1.7cmである。(128)の口縁部は極めて強い横ナデを受け、端部上面に5mm幅の面を持ち、暗文は幅1.5mmで9往復のジグザグ状である。(129)の口縁部は外反し、軽い横ナデを受け、ジグザグ状暗文は幅0.5mmで、18往復である。(132)のヘラミガキは暗文に重複し



第11-4表 S E 66出土土器法量表



第11-20图 SE66 出土土器实测图 (1:4)

て、口縁内面より底部に施す部分がある。(133)は内底部に13往復のジグザグ状暗文施行後、口縁内面をヘラミガキする。形状は5本の弧状線が両端で集結する。

**皿B** (134・135) 内底部はジグザグ状の暗文が2つ重複する。口縁部は内面から端部上面まで、密にヘラミガキを施す。(134)は9往復のジグザグ状暗文施行後、約30～45度の傾きで9往復の同じ暗文を施すのが特徴である。暗文幅は1～1.5mmと広い。(135)は内面に密に暗文を配す。幅0.5mmの暗文をあまり間隙をあげないで、横方向に施した後、同様に縦方向で前施行線に120度の傾きで重複させる。(134)の口径は9.1cm、器高1.3cm、(135)は口径9.4cm、器高1.6cmである。

## 2. 土師器

土師器の破片は418点を数え、器種は皿と羽釜である。皿は、口径14cm以上を皿、10cm以下を小皿とする。計測可能な法量は第11—4表のとおりである。このうち、報告するのは、皿5点、小皿9点、羽釜2点である。

**皿** (136～140) 手づくねで内底部を一方向ナデ調整、外底部を乱ナデ調整後横ナデを施すが多い。色調は褐色ないしは橙褐色であり、胎土は小石(1～2mm)、金雲母等を含み精良なものでない。(136)は口径16.9cm、器高3.5cm、他は口径14.0～14.4cm、器高2.3～2.6cmである。(136)の残りは $\frac{1}{2}$ 以下で、内底部は乱ナデ調整である。(137)の胎土には小石がめだつ。(138)の器面には煤が付着し、内面では底部から口縁端に帯状に続く。外底部では粘土継目痕が口縁部近くに $\frac{1}{4}$ 周残り、直線状やだ円状の工具痕がある。(139)の口縁部は横ナデを2回施す。

**小皿A** (141～146) 技法的には皿と同じで、違う点は内底部外周 $\frac{1}{2}$ にまで、口縁部からの横ナデが及ぶ。口径は9.0～9.5cm、器高は1.5～2.0cmである。(141・142)は(139)と同じく、口縁部は2回、横ナデを施す。色調は(141～143)は橙褐色で、(144～146)は黒褐色である。

**小皿B** (147・148) ロクロ成形時の横ナデが器面全体に見られ、底部は粘土塊からの糸切り痕を残す。糸切りは底部全体でなく、部分的に持ち上げて、切離す。胎土に金雲母、砂粒、小石(～1mm)など

を含む。(147)は口径8.1cm、器高1.4～1.8cmであり、色調は明褐色である。(148)は口径8.2cm、器高1.2～1.4cm、色調は灰褐色である。

**小皿C** (149) 口径8.6cm、器高1.5cmの小皿である。基本的には器面全体にナデ調整を施し、高さ0.5cm、径3.6cmの高台を貼りつけるもので、非常に浅い小皿である。口縁部は殆んど立ち上がらず、端部は外に斜に幅1.5mmの面を持つ。

**羽釜** (150・151) 煤が付着する口縁部を含む小片である。口縁部は「く」字形に鋭く外反し、端部を内側に折り返す。内外面は横ナデ調整し、口縁部と肩部の接点は軽く削り、ナデ調整を施す。胎土は砂粒や小石(～1mm)、金雲母を含み、色調は褐色である。推定口径は24～25cmである。(150)の口縁端部は折り重なる状態である。(151)の鏝は肩部上方にめぐらし、肩部外面は横ナデ調整し、内面は軽いナデ調整である。

## 3. 木製品

SE66からは木簡、飲食具、履物、加工木などの木製品と、自然木、種子(ウリ)等が共に出土している。

**木簡** (152～168) 全部で17点あり、墨書が明瞭に認められるものは(152・162)である。

(152)は埋土第6層の灰色粘質土の出土で、法量は、長さ11.5cm、幅2.25cm、厚み0.1cmで、形態は091型式の削屑である<sup>②</sup>。上端・右端が原状を保つが、左端が欠損し、下部が折損しているため、全体の文字の確認はできない。現存墨書は漢字で3字あるが、判読できない<sup>③</sup>。

□ □ □

なお、同型式に、(154～156)がある。3枚とも、現状では墨書は認められない。最大幅の部分は共に両側縁が原状を保つ。(154)は頭部に挟り込みのある板を木簡に転用したもので、法量は長さ8.9cm、幅1.9cm、厚み0.2cmである。(155)の法量は、9.2×1.6×0.15cm、(156)は10.2×1.7×0.15cmである。

(162)は埋土中層から出土した現存長17.6cm、厚み0.9cmの曲物の底板である。墨書が遺存し、061型式に相当する。墨書は2文字認められるが判読できない。

(163～166)は、側面に孔を穿った短冊型の015型



式で、4枚が重複して埋土中層から出土した。最大個数5個の穿孔は4枚を紐等で結んでいた状況が想定できる。4枚とも、墨書は判読できない。(163)は図示した右下端部のみが欠損し、現存端線1.2cm中央部に径約2mmの穿孔が1個、左端は原形を保ち、側線より0.5～1.5cmの位置で、上下とも中央へ5cm寄った箇所径約2mmの穿孔が各2個と、都合5個ある。4枚の中で、残存状態が最良である。上下端は原形を保つ。法量は、長さ32cm、幅5.5cm、厚さ0.4cmである。(164)は片側縁に2個の穿孔があり、上下端のみ原形で、法量は長さ31.9cm、幅4.3cm、厚み0.4cmである。(165)は原形を保つ片側縁に(163)と同様に4個の穿孔があり、上下端は原形を保つ。法量は長さ32.3cm、幅4.2cm、厚み0.4cmである。

(153・160)は一端が方頭で、(153)の他端は折損し、(160)は腐蝕で原形を失っている019型式である<sup>②</sup>ともに墨書の判読はできない。(153)の法量は長さ8.4cm、幅3.0cm、厚み0.35cmで、同様に(160)は22×2.3×0.35cmである。

(157～159・161)は折損、腐蝕などで原形が判明しない081型式である<sup>②</sup>(157)は実測図の裏面に墨書があるが、判読できない。法量は長さ13.4cm、幅1.1cm、厚み(最大)0.5cmである。(158)の法量は

長さ21.6cm、幅2cm、厚み0.3cmであり、同様に(159)は25.7×3.5×0.5cm、(161)は19.4×1.5×0.2cmである。ともに墨書の判読はできない。

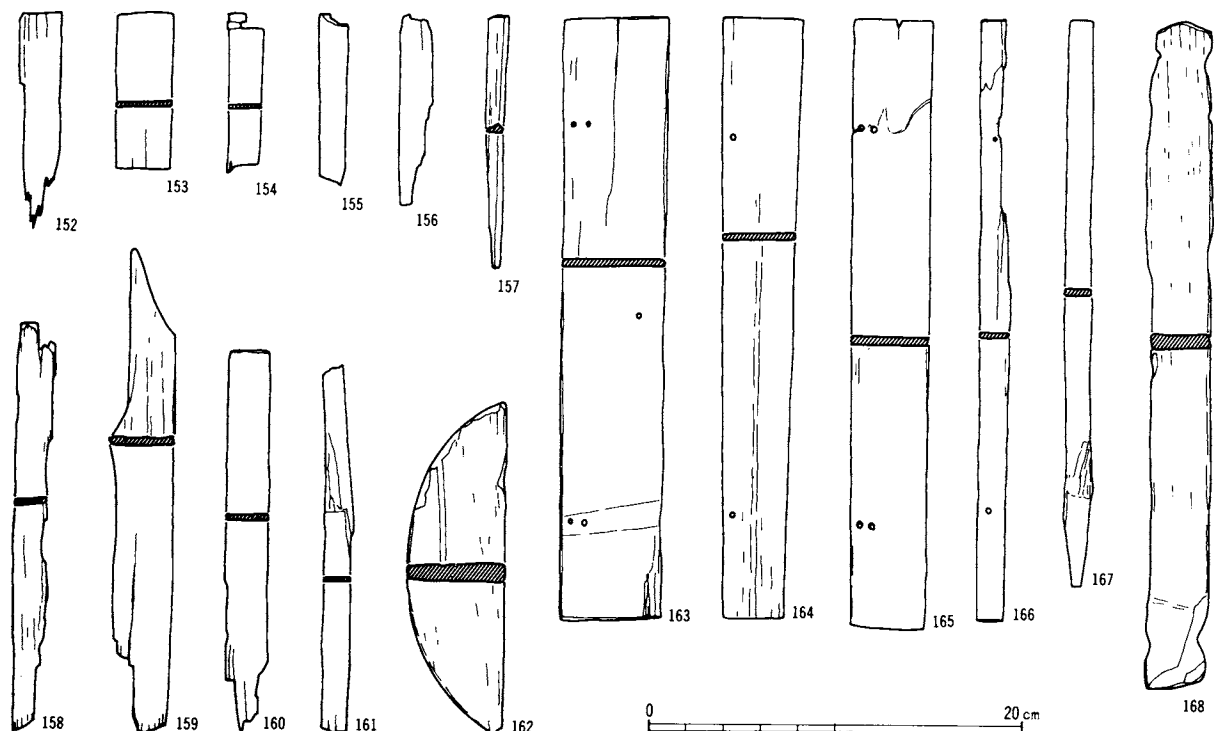
(167)は短冊型の011型式で、上下端は原形を保つが、両側縁は欠損する。墨書は判読できない。法量は長さ30cm、幅1.4cm、厚み0.4cmである。

(168)は長方形の材の両端の左右に切込みを入れた031型式である<sup>②</sup>図示した上部は原形を保ち、上端は圭頭を示し、他端は腐蝕により方頭か圭頭かは不明である。墨書の判読はできないが、形状からみて付札であろう。法量は長さ35.3cm、幅3.5cm、厚み0.8cmである。

**箸** 六面程に面取りされているが、全体的に丸味を持ち、面取りの最大幅で0.4cmである。箸の中央部はやや太く直径0.5cm程で、両端は0.3cmであり、一端部はこげており、他端は端部より、3cmの箇所ですこ曲っている。現存法量は長さ24.5cm、経0.5cmである。

**杓子** 遺存状況は良くないが、その原形はたどれる。現存長は25cm、食物を掬う部分で最大幅5cm、把手部分で2cm以上である。厚みは0.5cm以上である。井戸の中層からの出土である。

**曲物** 経9.5cmの容器の底板の一部分である。現存部は厚み0.6cm、経9.5cm、中央部で幅3.6cmで



第11-21図 SE66出土木製品実測図(1:4)

ある。

**履物** 連齒下駄の破片であり、現存長は11.2cm、幅7.5cmである。遺存状態が良くないので、台部の形状は不明である。横緒孔は円形で1穴のみが残り、齒は鋸で成形されている。

**加工木** 板状のもので、長さ10.5cm、幅1.5cm、厚み0.7cmで、先端部の円孔に樹皮（桜か）を通してある。他に板状や棒状のものが出土するが、用途、形状等は不明である。

## 〔2〕 S E 14出土遺物

### 1. 瓦器

**椀** (169・170) 内底部の暗文は4輪の連結輪状文であり、体部内外面ともヘラミガキされ、高台断面形状は逆台形である。胎土は小石等を含み、色調は黒灰色である。以下に記述する。 (169) は内面の底部と体部の境に稜線が明瞭である。体部は直線的に開き、口縁部はやや肥厚して、立ち上がる。口縁端部の沈線は幅2mmの段状である。推定口径15.8cm、器高5.7cmである。(170) の内底部は指圧痕で少し凹み、体部は緩く曲線状に開き、口縁部は極く軽く横ナデを受ける。口縁端部上面は2～3mm幅の面を持ち、幅1.5mmの沈線がこれを巡る。この椀1点のみ、暗文は3度書きである。他はすべて一筆書きである。推定口径15.2cm、器高4.6cmである。

瓦器の破片は全部で203点に達するが、実測可能な椀は上記2点のみである。皿は1点である。

**皿** (173) 底部から直線的に口縁部が開く皿である。器壁は4mmと厚いままに、口縁上端部で外傾して面を持つ。口縁部内面は幅の広いヘラミガキを密に施し、外面は軽く横ナデする。内底部の暗文は10往復以上のジグザグ状である。胎土に砂粒を含み色調は黒銀色である。口径9.0cm、器高1.3cmである。

### 2. 土師器

**小皿** (174) 口縁部があまり立ち上らない、扁平な皿である。口縁部は横ナデ、内底部と外底部の一部はナデ調整を軽く受ける。外底部の大半は、指頭圧痕を明瞭に残すので、輪状の粘土継目痕を認める。胎土に長石（～2mm）、金雲母を多く含み、色調は淡褐色である。口径9.3cm、器高1.3cmである。他に土師器細片が152点ある。

### 3. 山茶椀

**山茶椀** (171・172) (171) の体部は腰を張るが直線的である。口縁部は強く轆轤挽きされ、高台は低く外方に開き、端部に靱殻痕を明瞭に残す。外底部の糸切り痕、内底部の指圧痕は明瞭である。外面では長石が噴き出しており、器面全体に鉄分が融解した黒い斑点が顕著である。色調は灰白色である。名古屋市東部の東山地区の胎土に類似する<sup>④</sup>。口径16.4cm、器高5.0cm、高台径7.2cmである。(172) の体部は丸味を帯びて開き、口縁部は外に摘み出される。内面の体部と底部の境は少し凹み、稜を作る。断面逆台形の高台が低く貼り付き、端部には靱殻痕が残る。外底部には糸切り痕を残さない。胎土は小粒子を多く含み、渥美市や常滑古窯の古い土に類似する<sup>⑤</sup>。口径16.5cm、器高5.3cm、高台7.0cmである。

### 4. 土製品

**土錘** (174) 径1.9cm、全長約5cm、重量30gである。胎土に、小石（～3mm）を多く含み、色調は淡褐色である。

## 〔3〕 S B 1出土土器

### 1. 土師器

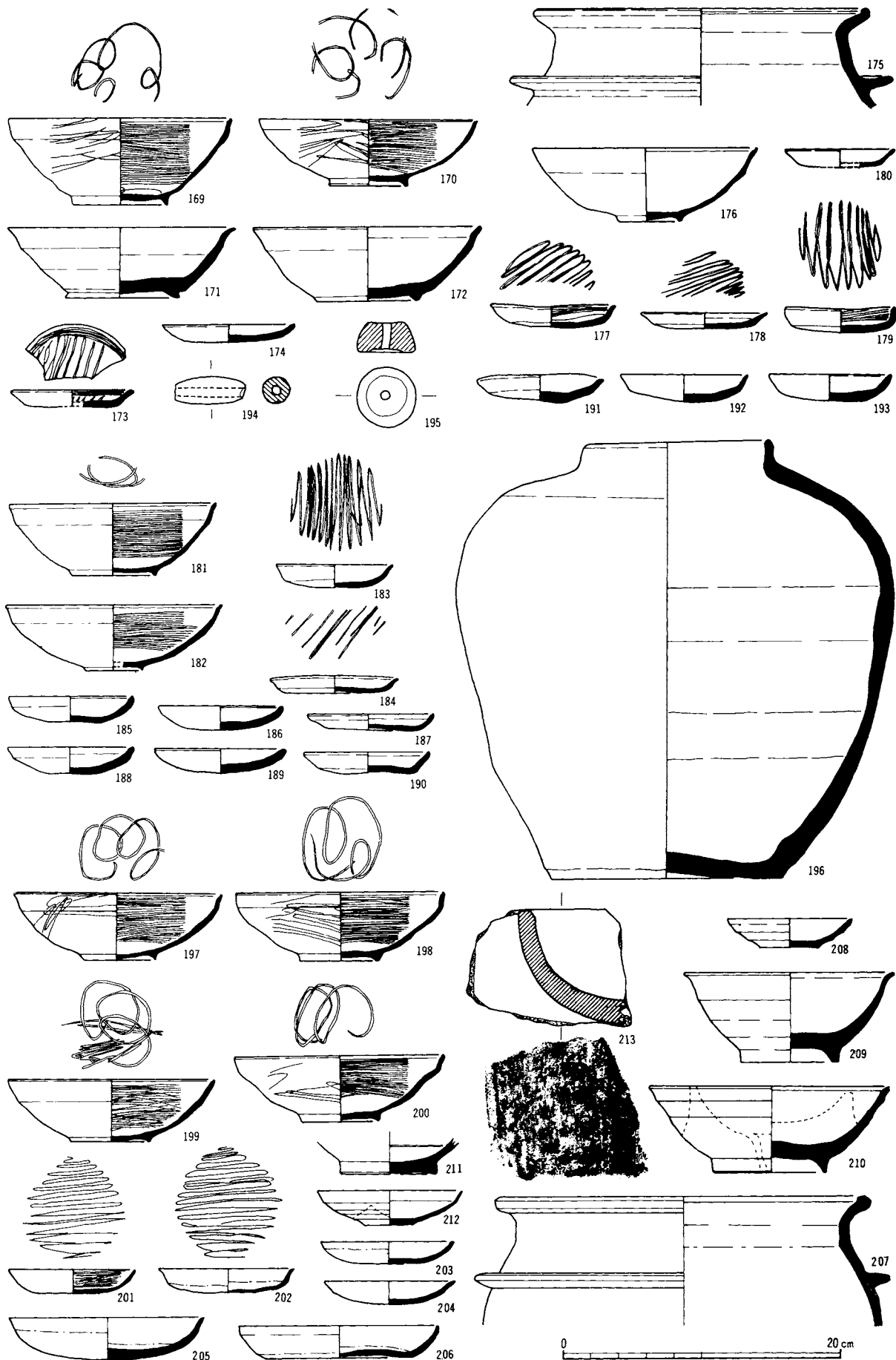
**羽釜** (175) 煤が付着する口縁部、肩部が残る小片である。口縁部は「く」字形に鋭く外反し、端部は内側に折り重なる。器面は横ナデ調整を施す。肩部上方に鏝をめぐらし、外面は横ナデ、内面はナデ調整を施す。胎土は荒らく、小石（～2mm）、金雲母等を多く含み、色調は橙褐色である。推定口径は、24～25cmである。

## 〔4〕 S B 2出土土器

### 1. 瓦器

**椀** (176) 底部中央はやや厚みがあり、体部は曲線状に開き、口縁部は強い横ナデを受けて、立ち上がる。その際、体部と口縁部の境が肥厚する。器面は調整技法痕をとどめない程に磨耗している。口径16cm、器高5.1～5.6cmの歪みのある椀である。高台径は4.5cmである。なお、出土椀の中で高台径が4cm台のものは稀である。

**皿** (177～179) 手づくね成形で、内面はナデ、口縁部器面は横ナデ調整を施す。内面に11～13往復のジグザグ状暗文施行後、口縁部内面にヘラミガキを施す。口径8.4～8.8cm、器高1.4～2.1cmである。(177) の内面ヘラミガキは、密であり、口縁端



第11-22图 出土土器实测图 (SB 1 175 SB 2 176~180 S.B.4 181~190 S.D199~213) (1:4)  
 (S.E14 169~174·194 S.B65 191~193 他195·196)

部は強く水平につまみ出す横ナデを受ける。(178)の内面ヘラミガキは、僅かである。(179)の暗文幅は2mmと広く、口縁部は底部から立ち上がる。

#### 〔5〕 SB3出土土器

##### 1. 瓦器

皿(180) 全体の $\frac{1}{2}$ の残りである。器面の磨耗で、調整等は不明である。胎土は精良、色調は黒灰色である。推定口径8.0cm、器高1.3cmである。

#### 〔6〕 SB4出土土器

##### 1. 瓦器

椀(181・182) 色調は黒灰土で、胎土に小石、金雲母等を含み、残りは $\frac{1}{2}$ 以下である。外面の指頭圧痕はよく残るが、外面のヘラミガキは磨耗により不明である。(181)の暗文はラセン状の一部と認められ、内面ヘラミガキは密である。推定口径15cm、器高5.1cmである。(182)の内面ヘラミガキには間隙があるが、密である。

皿(183・184) 内面の暗文はジグザグ状であり、内面ヘラミガキは磨耗で不明である。手づくね成形であり、口縁部を素直に横ナデするものと、水平に引張って横ナデするものがある。口径8.4～8.6cm、器高1.3～1.7cmである。

##### 2. 土師器

小皿(185～190) 手づくね成形である。口縁部に横ナデ、底部器面にナデ調整を施す。胎土に小石、金雲母等を含み、(187)の色調は淡白褐色であるが、他は明褐色である。口径8.4～8.7cm、器高1.1～1.9cmである。(185・186・188)は同一ピット出土である。

#### 〔7〕 SB65出土土器

##### 1. 土師器

小皿(191～193) 手づくね成形で、底部に指頭圧痕が明瞭に残る。口縁部に横ナデ調整を施すが他は激しい器面の磨耗により不明である。同一ピット出土である。長石粒を多く含み、色調は淡白褐色である。口径8.8～9.0cm、器高1.9～2.1cmである。

#### 〔8〕 ピット・包含層出土の遺物

##### 1. 土製品

紡錘車(195) 下部径3.9cm、上部径2.8cm、高さ2.1cmである。孔は径6.5mmである。外面に「+」の印がある。胎土は砂粒を含み、色調は灰色である。

包含層出土である。

#### 2. 山茶椀系土器

短頸壺(196) 底部成型後、粘土紐を輪積にして成型した痕が、土器の断面や内面の体部下半に残る。体部内面は雑にナデ調整されるが、内面の肩から口縁部までは丁寧である。口縁部内外面も丁寧に横ナデ調整を施す。体部外面下部 $\frac{1}{2}$ より上は、回転台による横ナデ調整を施す。外面に淡緑色の灰かぶりが口縁から体部上半にみられる。胎土は荒く、長石(～3mm)や砂粒を多く含み、灰かぶり部分ではガラス状に長石が噴き出ている。焼成は良好で、色調は灰白色である。歪みが少々ある。口径12.8cm、器高31cmである。ピット106出土である。

#### 〔9〕 SD7出土土器

##### 1. 瓦器

椀A(197・198) 内底部の暗文が連結輪状からラセン状への移行を示し、ひとつの輪が概して、細長く大きい。口縁部横ナデと体部指頭圧痕が卓越するので、器体は凸凹に富み、歪みが大きい。内面ヘラミガキは横方向に連続圏線上に密に施し、外面ヘラミガキは粗雑に3ないしは4分割される。胎土に小石、砂粒を含むが、精良である。(197)の外面ヘラミガキは2～3往復の3分割で、高台断面は三角形である。口径15～15.5cm、器高4.4～5.3cmである。(198)の外面ヘラミガキは5～6往復の4分割で、口縁部は顕著に直立する。口径14.8～15.2cm、器高4.2～5.3cmである。

椀B(199・200) 内底部の暗文はラセン状である。技法的には椀Aと大差がない。(199)は、重複した直線状の暗文の後にラセン状の暗文を施し、次に間隙の多い内面ヘラミガキを施す。外面ヘラミガキは磨耗により不明であり、低い断面逆台形の高台が雑に貼り付く。完形である。口径14.6～15.6cm、器高4.1～4.7cmである。(200)の暗文は輪が2回半、ラセン状に重なるもので、内面ヘラミガキは体部下 $\frac{1}{2}$ 以上に密に施す。口縁部は強い横ナデで屈曲しており、外面に3～4往復のヘラミガキを粗雑に施す。残りは $\frac{1}{2}$ である。推定口径15.6cm、器高4.5～4.8cmである。

皿(201・202) 内底部の暗文は口縁部内面のヘラミガキに先行し、11～14往復のジグザグ状である。

口径9.3～9.7cm、器高1.7～1.8cmである。(201)の口縁外面には丁寧な横ナデを施す。(202)の底部には指頭圧痕が明瞭に残り、口縁部には強く水平に掴み出す横ナデ調整を施す。

## 2. 土師器

**小皿** (203・204) 手づくね成形で、口縁部は横ナデ調整され、外底部には指頭圧痕の上にナデ調整を施す。胎土に砂粒、金雲母を多く含む。口径9.2cm、器高1.6～1.7cmである。(203)の口縁端部は水平な面を持ち、色調は褐色である。(204)の口縁部は丸味を持ち、色調は淡褐色である。

**皿** (205・206) 技法的には小皿と同様であり完形である。(205)は、口径14cm、器高3cmである。胎土は長石粒、金雲母を含むが緻密であり、色調は淡褐色である。(206)は、口径14.4cm、器高2.3cmである。胎土に砂粒、金雲母を多く含む、色調は明褐色である。

**羽釜** (207) 煤が付着する口縁部～肩部の破片である。口縁部は「く」字形に外反し、端部は内側に折り重なり、器面は横ナデ調整を受ける。肩部上方に鏝を貼着し、肩部外面に横ナデ、内面には軽くナデ調整を施す。胎土に小石(～2mm)、金雲母を多く含む、色調は褐色である。推定口径26.4cmである。

## 3. 山茶椀

**山茶椀** (209・210) 平らな底部から、体部が曲線的に開いていく形状を示し、底部の器壁は厚い。高台の断面は逆台形の形を呈し、外面は直立ぎみで、端部に靱殻痕がつく。(209)は、口縁端部では強い横ナデを受け、器面は轆轤水挽きが明瞭に残る。胎土に小石を含むが、緻密であり、色調は灰褐色である。口径15.1cm、器高6.4cm、高台径6.1cmである。(210)の口縁部から体部にかけて灰釉の漬け掛けが一周3分割されている。口縁端部は指で押えただけの輪花が4箇所ある。外底部の糸切りはナデ調整で不鮮明である。口径17.4cm、器高6.2cm、高台径7.6cmである。

## (4) 貿易陶磁

**白磁** (211) 底部のみの破片であるが、高台径は6.5cmを測る。内面に淡黄を帯びた白濁色の施釉があり釉薬は0.2mm程塗布する。高台は回転糸切り底で、外面には轆轤回転に伴うヘラ削り調整を施す。

## (5) 灰釉陶器

**皿** (212) 口径9.8cm、器高2.5cm、高台3.2cmである。轆轤水挽きで成形され、高台は底部の一部を回転糸切りする事でできたものである。口縁部と体部に明瞭な稜があり、前者は立ち上がる。施釉は漬け掛けで、色調は黄褐色を呈し、釉薬は0.1mmの厚みに塗布されている。胎土は非常に精良で、白灰色をしている。1/2の残りである。

## (6) その他

**瓦** (213) 内面に布目痕を残す丸瓦の破片である。幅を示す部分の一端は原形を保ち、胎土に長石を多く含む。この時期の瓦は他に50点近くあるが、復元できるものはない。

**石皿** 滑石製の石皿である。器壁は1.3cmの厚み、口縁端部は幅1cmの面を持つが、口径、器高は計測できない。他に厚み3.1cmの滑石の破片があるが、用途不明である。

## (4) 室町時代以降

### 〔1〕 S D17出土遺物

#### 1. 陶磁器

**燈明皿** ロクロ成形の陶器である。口縁内面中程に輪状の細い突帯が巡り、一部は半円状の灯心受け部となっている。外面は露胎のままであるが、内面に釉を施す。口縁部外面上半は横ナデ、下半以下はロクロ削りの調整を施す。口径10～10.8cm、器高1.8～1.9cmと口径8.4cm、器高1.3cmの小ぶりのものがある。(220)の露胎は黄褐色で、釉は乳灰色であるが、他の露胎は白灰色で、釉は淡黄褐色系である。

**染付椀** 外面の文様や高台内の窯印に呉須を用いる磁器である(223)は口径12cm、器高6.4cmである。他は小ぶりで、口径9.5cm、器高4.9～5.3cmである。

**蓋** 器面全体に淡黄褐色の釉を施す陶器である。口径16cm、器高3.5cmである。

#### 2. 石製品

**石臼** 白面現存直徒13cm、高さ10cmである。皿部は、6溝6分割と推定できる。石材は花崗岩である。

## 4. 結 語

西沖遺跡は、古代・中世の集落跡と中世城館である。発掘調査で、多くの遺構・遺物を確認したが、なお集落跡・城館跡の全貌を明らかにするには至らなかった。調査された結果から、多少とも大胆な考察を加えて結語としたい。

### (1) 遺 物

出土遺物は3万点以上である。第11-5表のとおり、瓦器と土師器で90%近くを占め、須恵器が7%弱、その他と云う器種構成である。出土状況は発掘

区南東部の竪穴住居、掘立柱建物が集中する小高い地区が全体の3/4強を占め、南東部から北西部へ帯状に竪穴住居が群在する地区は1/4弱にあたる量が出土している。他は稀薄か皆無である。

須恵器は陶邑編年で云うTK10~MT21が多い<sup>①</sup>。遺構からはTK 209の出土が少なくなく、TK 7に近いものもある。

瓦器・山茶椀・羽釜の編年をSE66・14、SD7の遺構ごとに検討した。SE66の瓦器椀は、暗文で

器種等	計	器形	数量	
瓦器	14,781 (44.5%)	椀	10,575	
		皿	1,868	
		不明	2,338	
土師器	14,473 (43.5%)	甕	1,827	
		皿	494	
		羽釜	50	
		杯	30	
		甌	2	
		不明	12,070	
		甕	908	
須恵器	2,217 (6.7%)	杯	蓋	14
			身	187
			不明	236
		高杯	14	
		横瓶	9	
		瓦	7	
		短頸壺	4	
		広口壺	3	
		提瓶	2	
		椀	2	
		長頸壺	1	
		不明	351	
		陶磁器	852 (2.5%)	椀
播鉢	151			
甕	110			
鉢	100			
皿	42			
水差	10			
不明	247			
その他	928 (2.8%)	(木製品の数量がプラスアルファ)		
合計	33,251			

その他の器種等	計	器形	数量	
弥生土器	2	不明	2	
灰釉陶器	5	椀	4	
		皿	1	
山茶椀	54	椀	36	
		皿	5	
		鉢	1	
		短頸壺	1	
		不明		
瓦質土器	5	羽釜等	4	
		火舎	1	
天目茶椀	5	椀	5	
貿易陶磁	46	青磁	23	
		白磁	23	
製塩土器	152	不明	152	
瓦	470	近世	415	
		中世	55	
土製品	18	土錘	16	
		紡錘車	2	
石製品	7	砥石	4	
		石鏃	2	
		石錘	1	
鉄製品	12	紡錘車	1	
		鉄滓	11	
木製品	30以上	木簡	16	
		飲食具	箸	9
			杓文字	1
			曲物	2
		履物	下駄	1
		加工木	1以上	
不明	122			
合計	928以上			

第11-5表 出土遺物一覧表

大別して、ジグザグ状は11世紀、連結輪状は12世紀におさめ、細分は下記のとおり川越編年に相当すると理解し、実年代を比定した。

椀A	第Ⅰ段階D型式	11世紀後葉
椀B	第Ⅱ段階A型式	12世紀前葉
椀C	第Ⅱ段階B型式	12世紀中葉
椀D	第Ⅱ段階B型式 第Ⅲ段階A型式	12世紀後半
椀E～G	第Ⅲ段階A型式	12世紀後葉

瓦器皿も暗文でA・Bに大別する。皿Aは椀Aと皿Bは椀Bと、暗文施行の技法が同種と考えられるが、椀A・Bが共に各2点と僅少のため、椀・皿のセット関係を断定できない。編年も幅を持たせて、皿Aは11世紀後葉～12世紀後葉、皿Bは皿Aより新しいと考える。羽釜(151)は大和B<sub>1</sub>型dに相当12世紀中頃～13世紀前半に比定される。

SE14の瓦器椀は川越編年の第Ⅱ段階Bに相当し、12世紀中葉にあたる。瓦器皿は1点だが、器形や丁寧な内面ヘラミガキの様子から、SE66皿Aと同期か多少とも古いと考える。山茶椀は藤沢編年によれば下記のとおりである。

(172)	第Ⅱ段階第4型式	12世紀第2四半期
(171)	第Ⅲ段階第5型式	12世紀第3四半期

SD7出土の瓦器椀を川越編手で、羽釜を菅原編年<sup>⑩</sup>で、山茶椀を藤沢編年で比定すると、下記のとおりである。

瓦器椀A～B	第Ⅲ段階A型式	12世紀後葉
羽釜	大和B <sub>1</sub> 型d	12世紀中頃～13世紀前半
山茶椀(210)	第Ⅱ段階第3型式	12世紀前葉
山茶椀(209)	第Ⅱ段階第4型式	12世紀中葉

なお、瓦器椀Bはラセン状暗文を呈するので、多少13世紀に入りこむ事も考えられる。

中世土器は日常雑器がほとんどであり、煮沸用の羽釜、食膳用の椀・皿が揃っている。椀・皿の器種は大和型の瓦器が大半で、東海産系の山茶椀を274対1で凌ぐ。出土瓦器椀は大和型の特徴<sup>⑪</sup>である下記のb～dを示すが、胎土には砂粒等を含み素地土は精良とは言えない。

- a 素地土の精良さ
- b 口縁部内端面の沈線
- c 口縁部内外面へのミガキ調整

#### d 内底部の暗文

瓦器は僅か40×40mの面に15,000点近く出土しており、出土量と日常雑器と云う点で、大和国などからの移入は大勢としては考えられない。恐らく、伊賀国内で焼れたものであろう。ただし、製作技術等の移入は充分にありえる。

#### (2) 遺構

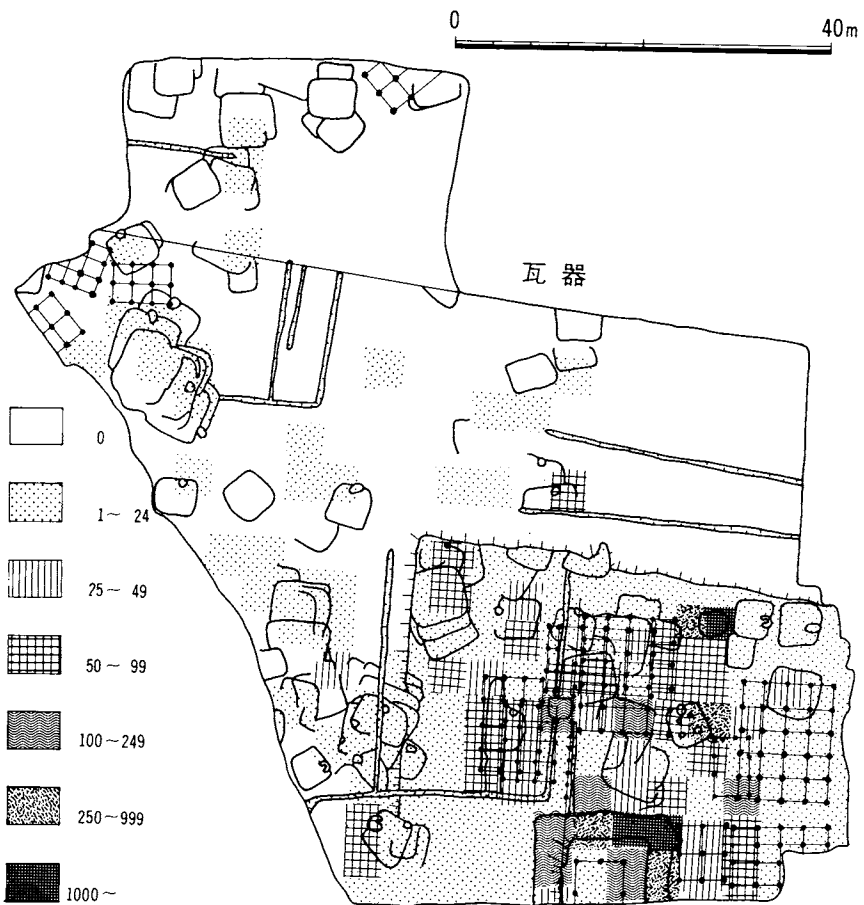
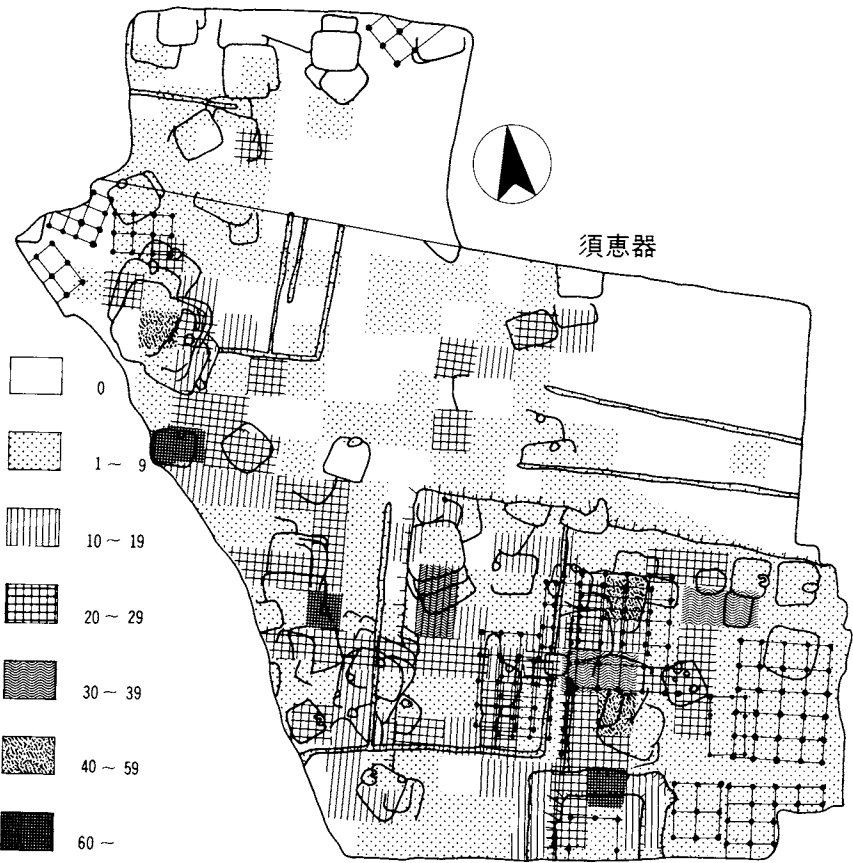
主に竪穴住居群、掘立柱建物群に係る集落跡について、言及したい。遺構と遺物の相関で、須恵器と竪穴住居、瓦器と掘立柱建物をオーバーラップさせたのが第11～23図である。図は4×4mグリッド内の出土破片数(包含層+遺構)を数量別に示したものである。須恵器・瓦器は時代が或る程度特定でき、出土状況も遺構に対応するので、遺構・遺物の相関を考える上で取り上げた。なお、土師器は古代・中世の区別しがたいものが多いので除き、陶磁器・その他は出土量が少ないので省略した。

古墳時代後期の竪穴住居33棟は出土遺物から、6世紀～7世紀の時期と特定できる。この時期に遺物が集中する箇所は、SB8～11、SB38～40、SB82、SB86～96の4箇所がある。集中度は第11～23図のとおり、1グリッド40～49点以上(須恵器全量の1.8～2.7%)である。鉄滓の出土率は45%である。出土地点はSB40・80の埋土とSB5・81・86～96の上層の遺物包含層である。住居は段丘西縁部を帯状に地形にそって占地するA群がある。A群は数棟で1群を成し、その1棟が床面積30㎡以上(SB93は33.6㎡)の大型で、その他が15㎡前後の小型(SB80～82)であったと考える。SB38～45で別の1群を形成するものと推定する。なお、大型住居は11回以上も建替られており、宅地の占有化傾向を示す。B群は南東部の小高い所を占地する中型と小型の数棟で形成される。中型は床面積SB69等の20㎡台のもので、小型は床面積10㎡前後のSB5等である。住居には大体北辺中央にカマドが設けられ、煮炊き用の土師器甕も出土しており、厨房施設が整っていた事が判る。恐らく、各竪穴住居が消費の単位であった事が想像に難くない。

奈良時代の竪穴住居47棟の配置は、上述A・B群の間を弧状に占地し、A群の場所が中央広場のように遺構の空白地帯になっている。建替は13回と前時

代より、住居地の占有化が進む。1群の構成棟数は減じ、C群（S B 70と68・67）、D群（S B 47～53と54～56）、E群（S B 58・60・61と57・16）では2棟に、F群（S B 20～37）では3棟位になっている。なお、規模、内容は古墳時代後期と大差ない。ただ、C群ではS B 67・68で砥石、S B 67・68で鉄滓、S B 70で鉄製紡錘車が出土している。これは、住居の遺存度にもよるが、生産における集落内における各住居内世帯の自立度の高揚とも理解できる。広場と前述した住居空白地帯は倉庫（群）だった可能性も残る。掘立柱建物S B 98・104は時期不明としたが、当期かも知れない。また、この地帯には未報告だが、総柱2×2間（2.1×3.0m）1棟、側柱1×4間（3.5×6.9m）1棟、側柱1×2間（2.3×4.8m）1棟が存在したかも知れない。ただし、非常に柱穴等が不揃いである。

計画的に配置した12世紀を中心とする掘立柱建物12棟を発掘区南東部で検出した。配置には主屋・副屋・倉庫・付属屋・井戸等が考えられる。主屋は4×5間の床面積100㎡以上の建物と考える。具体的には、S B 1・2



第11-23図 須恵器・瓦器出土状況図（1：800）



・65が候補である。副屋は3×4～5間の床面積40～80㎡の建物で、SB15・65・105が該当する。倉庫はSB4と考えられるが、SB6も倉庫と考える。

ただし、SB6は特別な倉庫である。他の建物の柱穴の倍以上の大きさを持ち、周囲に堀がめぐる。出土遺物も、柱穴からは少ないがSD7からは12世紀後半～13世紀初頭の瓦器碗多数と布目瓦50点近くが出土した。瓦器が建物の崩壊時期を、瓦が建物の最上部構造を示すと理解するなら興味ある歴史考察ができる。井戸出土木簡(152)の上一字は「俚」<sup>①</sup>とも、(162)は「□よう入」<sup>②</sup>とも解せない事もないが、確信はない。出土瓦器の中心時期は12世紀中葉から後葉であり、遺構SD7で55%、SE14で0.7%、SE66で15%の出土率である。包含層で100点以上出土するのは、SB2の南西部SB65の南東部で、食器収納機能を持つ建物部分だったと考えられる。同様に、煮沸土器(羽釜・鍋)の建物内出土状況を検討すれば厨房機能部分が解明されるだろう。なお、第11～23図の瓦器出土状況は、南東部以外にも出土を示すが、建物群は関係ないものと理解する。

浜田氏館跡の堀跡を確認した。郭を圍繞する堀は西側で堀外法63m、内法50mを確認した。南・北は部分的に検出したが、東は未調査である。伊賀の平地の中世城館は郭に水堀がめぐるものが多いが、当館跡もこれに該当する。堀の湛水は軍事的要請もあるが、稲作における用水の安定確保と冷水の温暖化が考えられる。馬野川の水や南方の山間の雨水を常

溝で堀の南西角に注ぎ、北西角から田圃に戻す事がトレンチ調査の堀の深さから肯首できる。なお、城館の規模は不明であるが、トレンチを入れた郭の南北は50m、東西は東の道路までと推定すると60mとなる。さらに推察すると、郭の虎口は南側にあるとし、南方30mの広徳寺北部分の数m幅で1m足らずの高まりを土塁の残存とすると、第2・3の郭が存在するとも考えられるが、判断は今後の調査に期待したい。

### (3) まとめ

西沖遺跡の時代の景観は、弥生時代から古墳時代中期までに原野が早期に開発され水田化され、古墳時代後期から奈良時代までは竪穴住居を主体とする集落が営まれた。奈良時代末から平安時代後期までは、集落は廃絶して、他に移り、平安時代後期から鎌倉時代初期までは発掘区南東部に限ると、再び人間の居住場所となり、掘立柱建物群が出現する。鎌倉時代初期に、再度廃絶した後、水田利用が始まり現在に至る。江戸時代には暗渠排水(SD17・28・71・72・83～85)等も設けられる。集落は時代と共に、段丘の西縁から現集落の東縁に、非連続的に移動したと考える。

なお、報告書の2.(1)(2)、3.(1)(2)は早川、3.(3)〔9〕は田中が分担し、他は森前が文責を負う。報告書の作成にあたっては福田典明(同志社大学生)、東絹子、岸森千賀子の3氏の協力を得た。

(森前 稔・早川裕己・田中喜久雄)

〔註〕

- ① 『東大寺未成巻文書』1～24
- ② 『木簡研究』第3号 5～6ページ 木簡学会 1981
- ③ 同上 33～34ページ
- ④ 藤澤良祐、宮石宗弘両氏の御教示による。
- ⑤ 同上
- ⑥ 田辺昭三『陶邑古窯址群 I』平安学園考古クラブ 1966  
中村浩ほか『陶邑』I～III 大阪文化財センター 197～198
- ⑦ 川越俊一『大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題』『文化財論叢』奈良国立文化財研究所 1983

- ⑧ 菅原正明『畿内における土釜の製作と流通』『文化財論叢』奈良国立文化財研究所 1983
- ⑨ 藤澤良祐『瀬戸古窯址群』I(研究紀要 I) 瀬戸市歴史民俗資料館 1982
- ⑩ 前出⑧
- ⑪ ⑦の778ページ
- ⑫ 上野市の神ノ木館跡・木津氏館跡他『昭和54年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1979
- ⑬ 『大山田村史』上巻 398～400ページ 1982



## XII 上野市喰代 高猿6号墳

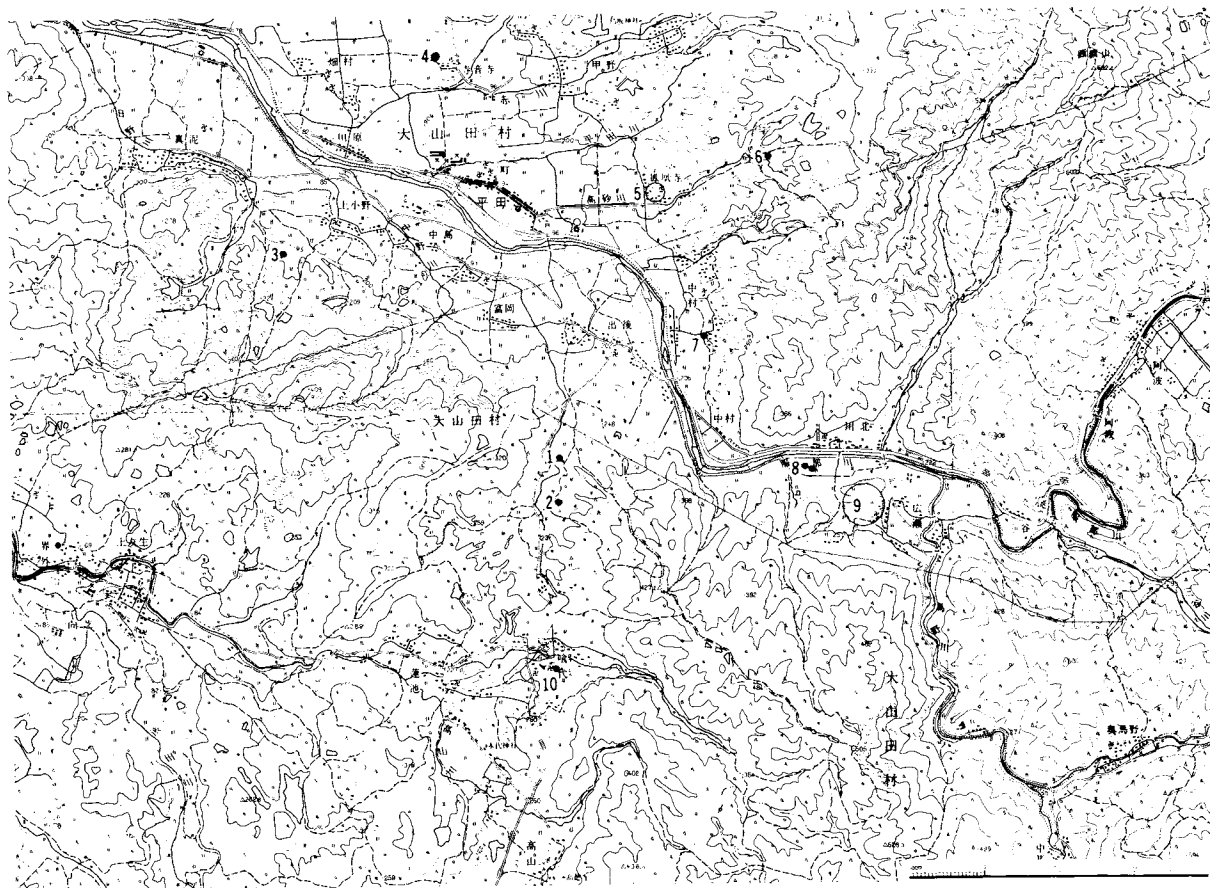
上野市喰代の高猿地内には、明治年間に鏡・玉・鉄器・土器類等多数の副葬品を出土した古墳の所在が知られており、現在その遺物は東京国立博物館に保管されているが、「考古学雑誌」<sup>①</sup>や「三重考古図録」<sup>②</sup>にもその紹介があり、この地域は、古墳研究の上で注目されてきた。

ところが、昭和55年度、県営圃場整備事業がこの地域で実施されることになり、古墳の多いことから文化財保護に万全を期すためには、更に詳細な古墳の現状確認が必要となった。分布調査は事業に先立って、特に事業の対象となる上野市喰代から大山田

村出後にかけての狭い谷あいの中水田地帯を中心に行い、その結果、東西両側の丘陵斜面に開田された棚田の畦畔部に古墳状のマウンドを6箇所確認した。これらはそれぞれトレンチ等によって試掘をし、遺構や遺物の有無を調査したが、すでに水田開発により、主要部が破壊されたのか、古墳として認められたものは、わずか6号墳1基のみであった。

6号墳の所在する丘陵斜面は、水田化のため削平される計画となっており、工法上の変更も困難であり、事前に本格的な発掘調査を実施することとなった。

### 1. 位置と歴史的環境



第12-1図 遺跡位置図 (1 : 50000) 国土地理院 1 : 25000 (上野・伊勢路・平松・佐田)

上野市街地の東約8kmの標高250m前後の山麓部に喰代地区の集落が営まれている。集落は四方を山に囲まれ、戦国時代の百地丹波城（第12-1図、地図番号10）が築かれていることから、いかに要害の地であるかがうかがえる。

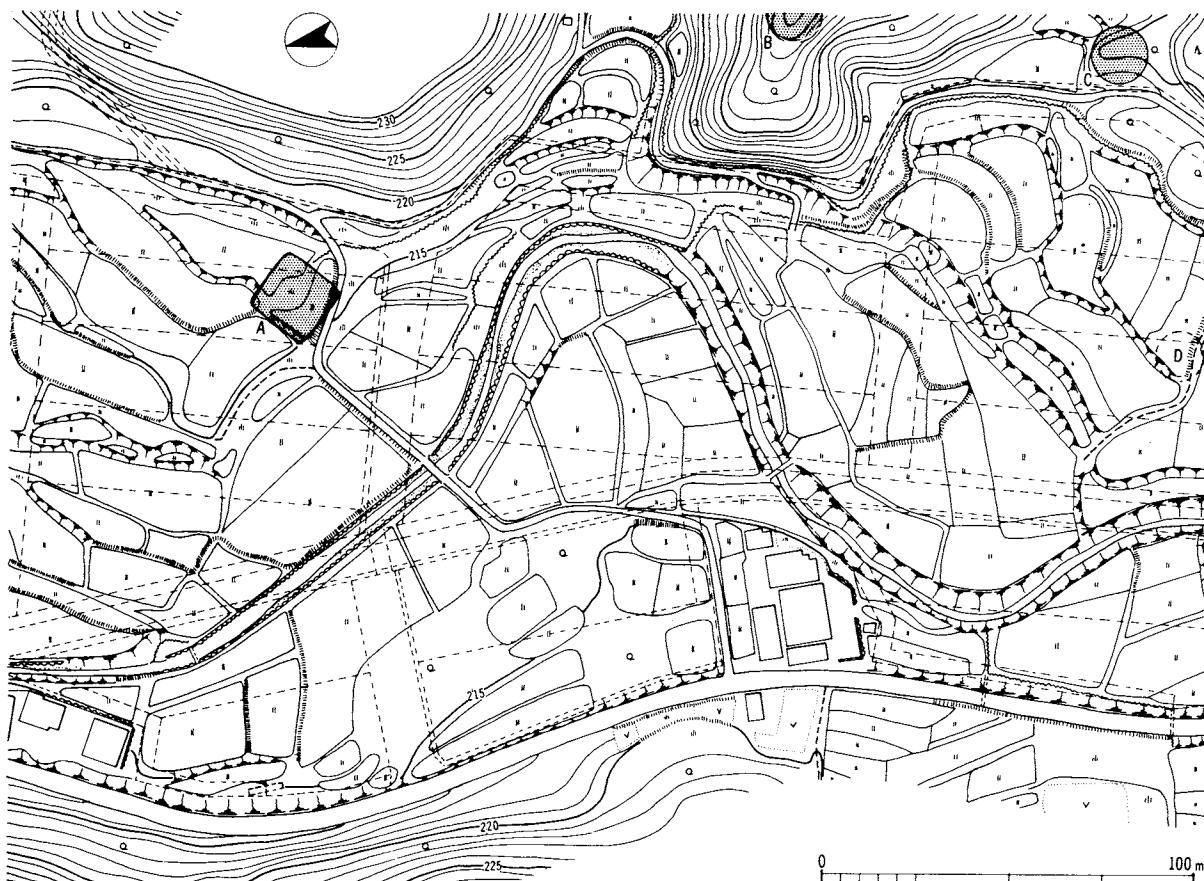
集落の西と北には狭い谷が開き、集落から西に向かって久米川が流れ、北に向っては服部川の支流中野川があり、集落は分水嶺の位置にあたる。

高猿6号墳(1)は、喰代の集落の北、大山田村との境界近くの狭い谷あいにおり、中野川右岸の東からのびる丘陵斜面（標高約217m）に築造された古墳である。丘陵の斜面は水田化され、棚田として小区画の田圃が多くつくられており、6号墳はその棚田の広い不整形な畦畔にあり、草生地として残されてきた。行政的には上野市喰代字松本に属する。

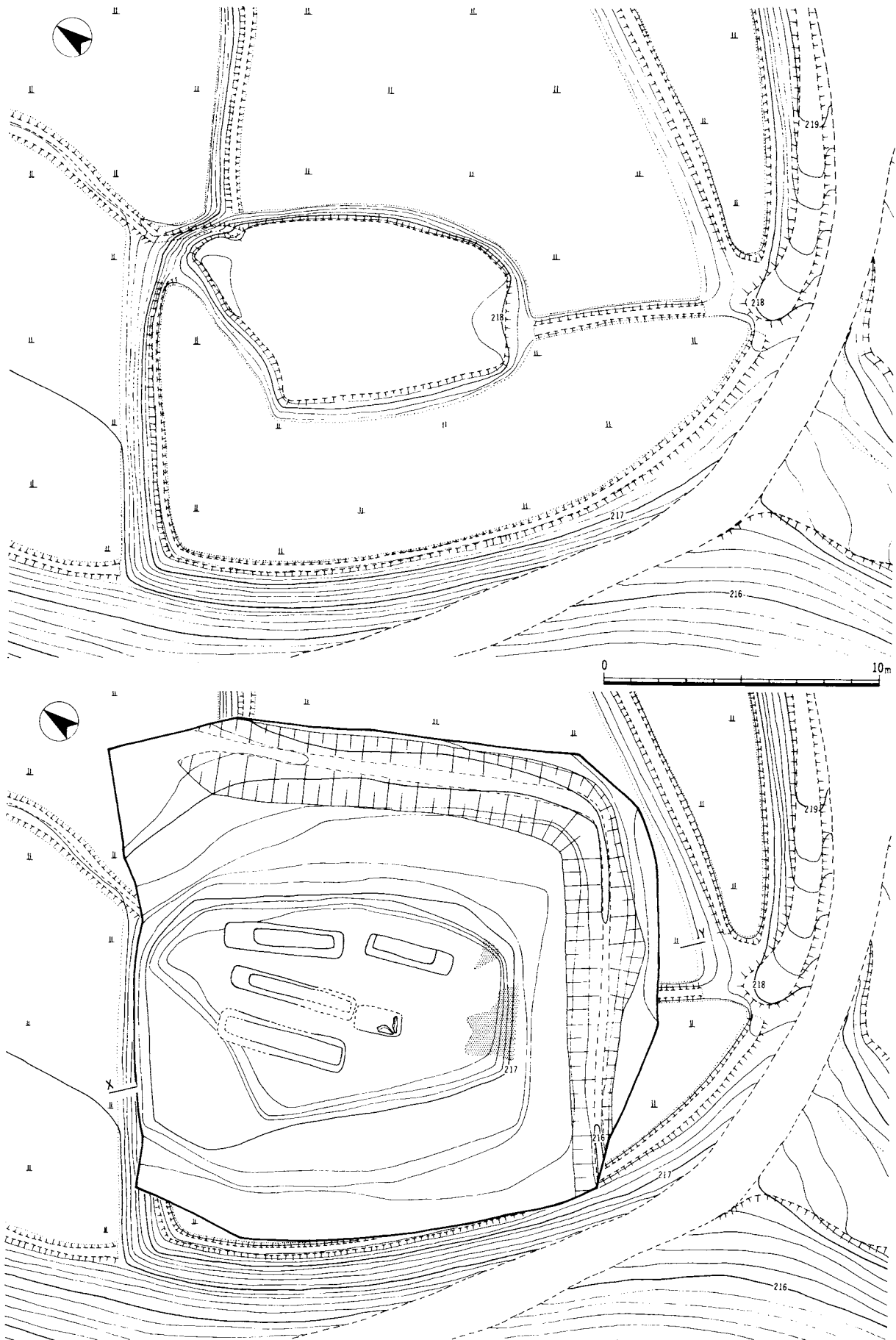
6号墳の南約230mの丘陵突端部の山林には、鏡・玉・鉄器・土器類を多数出土した高猿1号墳(2)がある。

これら高猿古墳からは、狭い谷あいを通して、服部川の西流する大山田の盆地が眺められ、盆地とその周辺には多数の古墳が知られている。その数は、

200基ほどにも達し、前方後円墳も所在している。盆地の中央部には、馬蹄形の周溝を水田区画に残す全長約60mの寺音寺古墳(4)があり、盆地の東部山麓には後円部に横穴式石室をもつ鳴塚古墳(6)が築造されている。また鳳凰寺跡(5)は、白鳳期の寺院跡として県指定史跡にもなっており、この地域の古代史を考える上で貴重な資料となっている。それに加え、近年では、大山田盆地の圃場整備事業等の進展と共に、発掘調査される遺跡や古墳も多く、平林1号墳(3)、辻堂古墳(7)、横枕古墳群(8)や西沖遺跡(9)などがある。発掘された古墳はいずれも横穴式石室を内部主体とする後期古墳であったが、辻堂古墳は石室も大きく、箱式石棺を有する特徴的なものであることが明らかになり、西沖遺跡は高猿6号墳と同じく昭和55年度の発掘調査であるが、古墳時代後期～奈良時代の竪穴式住居跡が多数検出され、徐々にこの地域の古代史究明のための資料が増加しつつある。しかし一方では、その分だけ遺跡や古墳は姿を消していることになり、これらの資料について十分な分析・検討が期待されることである。



第12-2図 遺跡地形図(1:2,000) A 6号墳 B 9号墳 C 1号墳 D 3号墳



第12-3図 墳丘実測図（上、発掘前 下、発掘後）（1：200）網目 葺石

## 2. 墳 丘

丘陵斜面の水田の畦畔に残された墳丘残存部は、頂部が東西約6.2m、南北約11.5mの範囲で平坦に削平され、水田面からの高さはそれぞれ東で0.9m、西で0.6mと低く、縁辺部は水田化のため削平され、平面は不整形なものであった。そのため古墳であるという確証はなく、X-Y方向にトレンチを設定した試掘によって、墳丘残存部の西端部で鉄鎌・刃等を発見し、やっと古墳であることを確認したものである。古墳の大きさや墳形は全く不明で、墳丘残存部頂部には20cm大の河原石が若干目立ったが、葺石の存在も予想できるものではなかった。

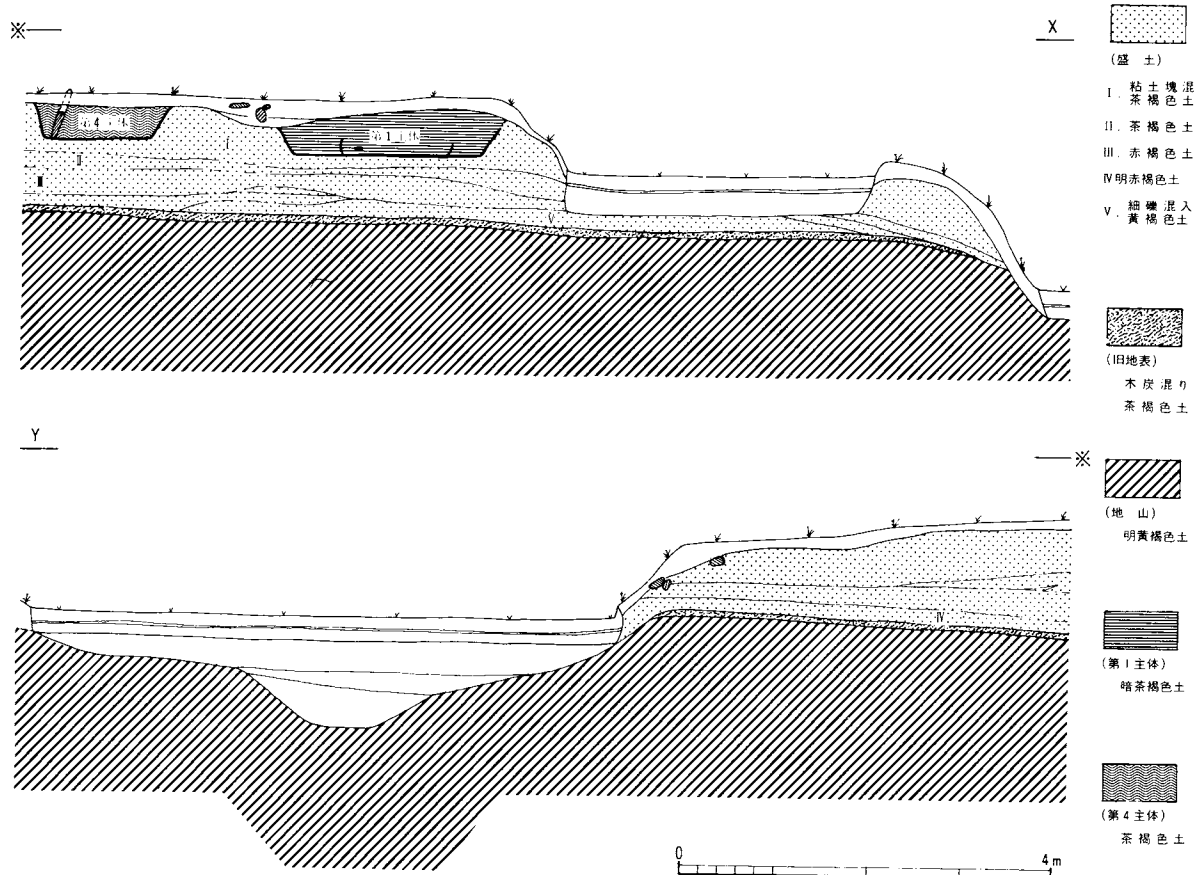
そこで発掘調査に着手し、古墳の規模や墳形をさぐるため、周囲の水田に何箇所かのトレンチを設け掘り下げるとともに、墳丘残存部のみを掘鑿したX-Y方向のトレンチを周溝が予想される丘陵の高所のY方向に延長し、水田下を掘り下げることとした。

水田耕土、床土の下層には水を十分に含んだ灰黄

褐色粘質土が堆積しており、これを掘り下げ、地山である黄白色粘質土を追うと、墳丘残存部裾から約2m離れて水田下0.9mで、水を含んだ灰青褐色粘質土で埋まった周溝と考えられる掘形肩部を検出し、更に掘り下げ、幅約2.1m、深さ0.5mの周溝を確認した。しかし、Y方向以外のトレンチでは、地山が北西に向って傾斜するため、古墳の基底部分が水田下1.5m以上掘り下げてもつかめず、水田下の堆積土は十分に水を含み、スコップ等による人力掘鑿はとうてい無理な状況であったため、重機（バックフォア）によって慎重に作業を進めた。

その結果、東側部分で、墳丘残存部から約6m離れて、ほぼ直角に曲がる周溝を確認し、本古墳は方墳であることがわかった。

その周溝は、北と南に直線的にのび、北側では、水田により削られたのかはっきりしなかったが、南隅は、畦畔部の未掘部分にのび、畦畔に沿う農道ま



第12-4図 墳丘土層断面図 (X-Yトレンチ南壁) 1:80 レベル219m



第12-5図 墳丘葺石実測図 1:40 レベル218.2m

で続くものと判断され、墳丘残存部西の水田の畦畔はおおむね古墳の基底線と合致するものであることがわかった。

そのことは、発掘調査後の測量図(第12-3図下)からも言え、周溝底部をめぐる標高216mの等高線は、一段低い北西の水田との畦畔を直角に曲がっており、一段低い水田では、墳丘が若干削られている可能性はあるものの古墳の基底線を216mの等高線に沿って求めることができる。

以上のことを勘案すれば、古墳の規模は一辺が約18mの方墳で、高さは、発掘着手前の墳頂部最高所標高218.4mで、基底線216mであり、墳頂部は削平されているが、2.4m以上になる。

次に古墳の築成方法は、二段築成で下段は地山を方形に整形し、上段は旧地表と考えられる木炭混じりの茶褐色砂質土の上に1.3m以上の盛土をし築成している。土層断面図(第12-4図)によれば、旧地表の上に細礫混じりの茶褐色砂質土や明赤褐色粘

質土を盛り、上層部には粘土塊の混じった茶褐色砂質土を盛り上げている。主体部はいずれもこの土層中に検出されている。

なお下段と上段の境には幅1.5~2.0mのテラスが考えられるが、北隅部分や上段部が水田化のために削られている箇所では、あまりはっきりしていないのが現状である。

当初墳丘部に散乱した河原石や、また墳丘中央部には盗掘坑があり、これらには多数の河原石が投げ込まれていたが、これらの河原石は墳丘上段部の盛土部分にのみ葺かれた葺石の一部であることもわかった。墳丘の南隅の表土を除去していくに従い、わずかではあるが葺石が残存していた。(第12-5図)しかし墳頂が削平されていることや周囲の水田化のため削り取られていたりして葺石と基石の区別や葺石の積み方など詳細な様相が明らかになる箇所もなく保存状態は良くなかった。

### 3. 内部主体

本古墳の墳丘残存程度を面積比で考えるならば、一辺18mの方墳全面積324㎡に対し、残された墳丘は、約80㎡で、わずか $\frac{1}{4}$ である。それでも、中央部が保存されていたため、5つもの主体部を検出することができた。

各主体部の呼称は、発掘調査過程での発見順によるものであるが、それぞれの状況は次のとおりである。

#### (1) 第1主体

残存した墳丘の西半部にある木棺直葬の主体部で、X-Y方向のトレンチによる試掘調査の際、残存する墳丘端部付近で、刀子（遺物番号9・11・12）・鉄鏃（17～20）・鉄斧（34）などの鉄製品が出土し、内部主体であることが明らかになった。

墓壇は、幅1.1m、長さは、北端部を削られ明らかでないが、4.1m以上の長方形のもので、長軸はN17°40'Wを示す。墓壇は、粘土塊混じりの茶褐色土中に掘られ、検出面からの深さは約20cmで、暗茶褐色土で埋められていた。墓壇中央部の棺跡は、幅0.7m、長3.8m以上で、周囲の埋土より一段黒味がかかった土層となっていた。

棺底面は、残存墳丘の地表下0.75mで、棺内には鉄器類を中心とした副葬品が配置されていた。棺の西側には鉄刀（6）、東側には鉄剣（3）と鉄刀（5）があり、いずれも先端を南に向けて、平行に置かれ、西側の鉄刀に寄って、変形四獣鏡（1）が、鏡背を上に向け、水平の状態出土し、東側の鉄刀の近くからは、銀環（2）や刀子（7）も発見された。さらにX-Yトレンチと交わる棺の位置には、鉄剣（4）・鉄斧（35～38）・鉄製の鎗先（13・14）や鉄鉾（22・23）・鉄鏃（15・16）・鑿形鉄製品（24～28）などがまとめられて埋葬されており、砥石（39・40）も含まれていた。

#### (2) 第2主体

第1主体とは約1.1mの間隔をおいて、平行に位置する木棺直葬である。墓壇の掘形検出面は第1主体とはほぼ同レベルであるが、深さ約40cmで、棺底面は、第1主体部よりも低い。

墓壇の規模は、幅0.75m、長さ3.2m以上で、南端部は盗掘坑により破壊されている。墓壇内の埋土は粘土塊混じりの暗褐色土で周囲の盛土よりわずかに黒味をおび、中央部の棺跡は淡い朱が認められた。棺跡は、幅0.52m、長さ2.45m以上で、北端小口部には、厚さ15cm程度で粘土塊が込められていた。

副葬品は、第1主体に比べて少なく、北端に土師器杯3（41～43）が配置されているほか小玉26（46～71）・鉄製品（83）が棺内から出土した。小玉はその出土状況から、糸あるいは紐を通し連ねていたようである。

棺外遺物としては、鉄鏃（73～82）が束ねられた状態で、墓壇西壁面に接して発見された。

さらに第1主体の間には、須恵器蓋杯（44・45）と鉄刀（72）が置かれていた。

#### (3) 第3主体

第2主体の東側に位置する木棺直葬。幅1.3m、長さ5.4m、深さ45cmの墓壇内に幅0.6m、長さ3mの棺跡が確認された。主体部の方向は、第1・2主体とは異なり、わずかに西に振り、長軸はN24°Wを示す。

墓壇内の埋土は、やや赤味がかかった茶褐色土で、棺は、墓壇の南端に寄せて置かれており、北端部には空間を設け、特に西側には、須恵器類等副葬品を集中して配置していた。また東側は、粘土状の硬い埋土を入れ込み、段を呈する。

副葬品は、棺内に刀子（100・101）・鉈（102）があり、それぞれ1点ずつ単独で、かなり離れて出土した。

棺外には、かなり多くの副葬品が置かれており、墓壇東南隅には、須恵器蓋杯（84・85）が、蓋をした状態で発見され、墓壇中央部のやや北寄りの西壁近くにも、10cm大の山石を挟んで、須恵器蓋杯が2組（86・87及び88・89）置かれ、特に86・87は、棺内に位置し、木棺が朽ちた際に落ち込んだものと考えられる。また88・89の蓋杯の下からは、鉄鏃（103）が1点出土した。墓壇北端部は遺物が多く、須恵器蓋杯3組（90～95）と、須恵器甗（96）・土師器杯



(97)・砥石(104)が配置されていた。中でも、94・95の須恵器蓋杯は、高い位置で検出された。

さらに墓坑掘形北東肩部では土師器杯(98・99)が、重ねられて発見された。

#### (4) 第4主体

墳丘のほぼ中央部、第2主体の南延長上に設けられた箱式石棺で、南端の2石材が残存する。北端部が、X-Y方向のトレンチにより破壊されてしまったため、平面の規模は定かでないが、幅0.5m以上、長さ1.5m以上のものである。石棺長軸は、N25°Wを示し、第1・2主体とは方向を異にし、向きはむしろ第3主体に近いものとなっている。なお棺底面も他の主体部に比べて高く、残存墳丘地表下0.5mで、石棺南端小口部の石材上端は地表上に露呈していた格好であった。

残存する2枚の石材は、石棺南端小口部のものと南側板を構成する石材の一部で、いずれも50×70cm大、厚さ10cm内外の扁平な板石で、蓋石等が除去されているため、双方とも内側に傾いて検出された。

石棺内の副葬品としては、南端小口部近くに土師器杯2(105・106)が伏せ、重ねられた状態で配置されており、中央部近くでは、玉類17(108~124)が発見された。さらに、石棺埋土中から須恵器杯片(107)が、石材埋め込み穴から須恵器甕片が出土

した。

#### (5) 第5主体

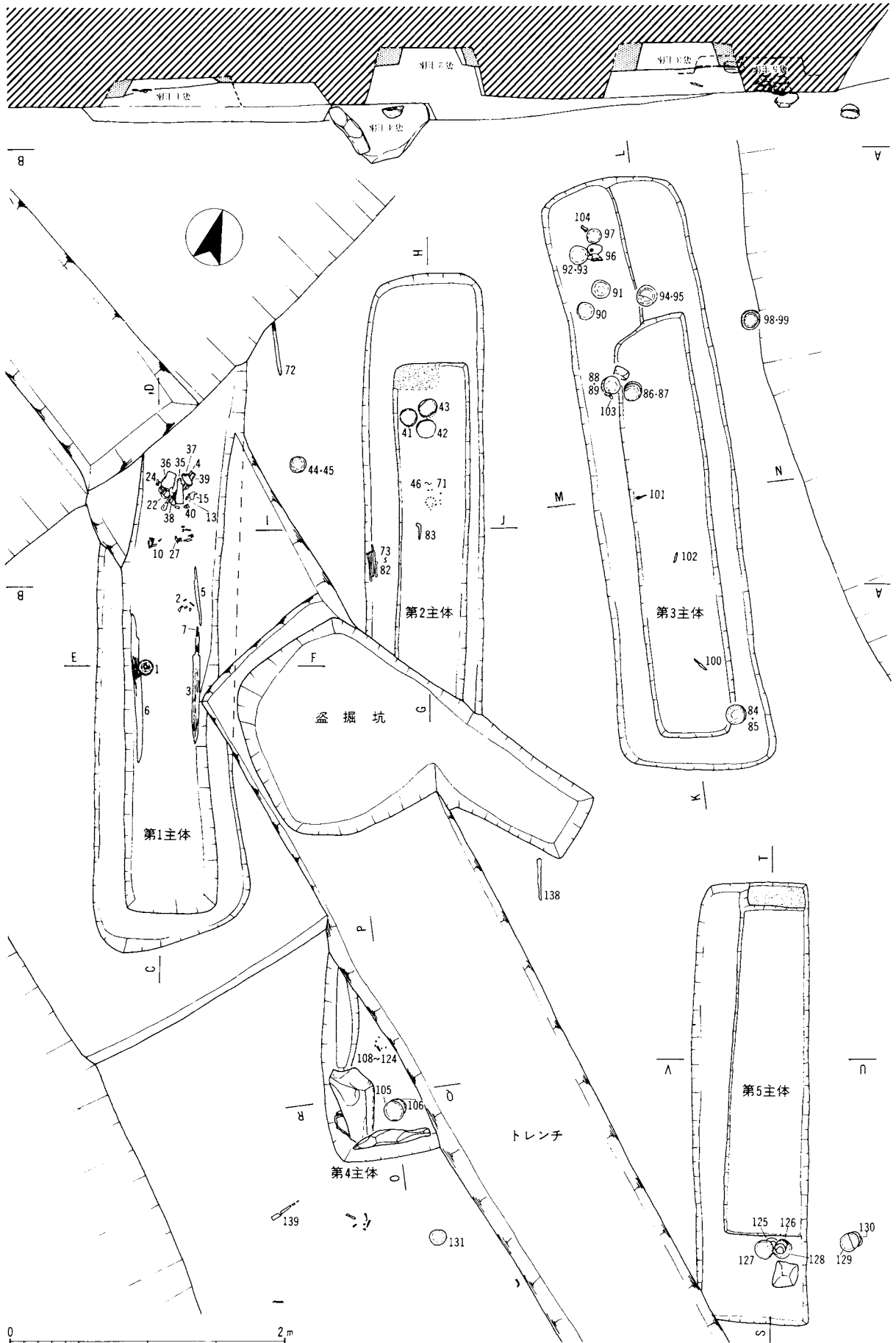
第3主体の南東にある木棺直葬の主体部で、長軸方向は、第1・2主体部とほぼ同じ方向を示す。

幅0.85m、長さ3.1mの墓坑内に、幅0.6m、長さ2.3mの棺跡が墓坑北及び東壁面に接して認められた。棺北端小口には粘土塊を詰め、南端小口棺外には、20cm大の山石を据え、その前面に須恵器把手付椀(125)と甗(126)を並べ置き、それぞれ土師器杯(127・128)をひっくり返し、蓋としていた。またこれらの土器類とは一直線上の墓坑掘形肩部に、第3主体と同様、土師器杯2個を重ね、配置している。そのレベルが高く、墓坑掘形から浮いた格好となっているのは、第5主体部棺底面が、他のいずれの主体部よりもレベルが低いにもかかわらず、識別が難しく検出面を削りすぎ、墓坑が浅いものとなっていることによるものと考えられる。

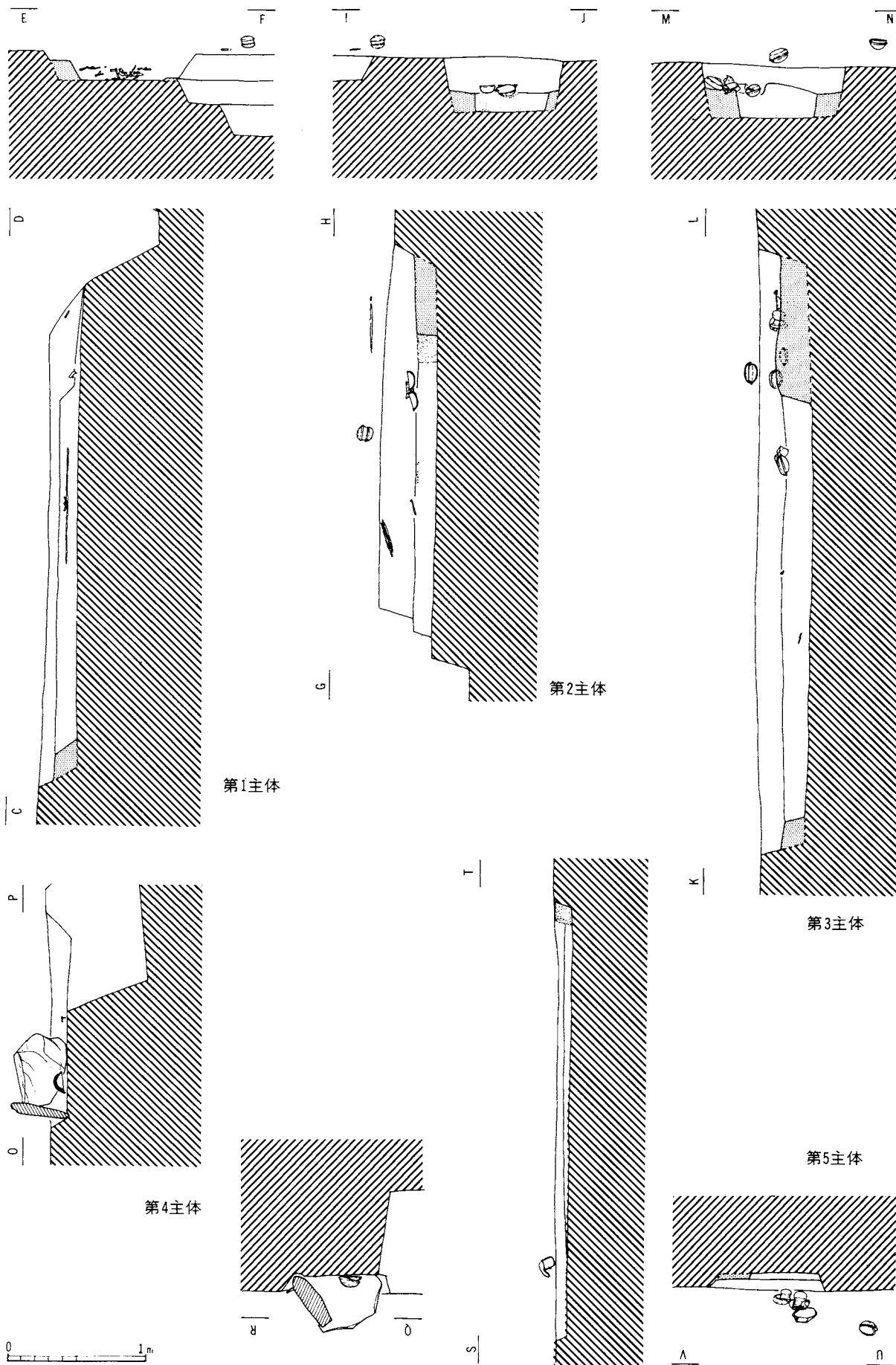
以上、次々に発見された5つの主体部とその副葬品の配置状況を述べてきたが、墳丘面からの遺物もかなり多く、特に第4主体の南では、土師器杯(131)や銚(139)等の鉄製品が散在しており、また主体部の位置関係からも、主体埋葬の余地が認められるところで、注意して調査を進めたが、6番目の主体部は確認できなかった。

主体部	種別	規模	副葬品
第1主体	木棺直葬	墓坑 幅 1.1m × 長 4.1m 以上 棺跡 幅 0.7m × 長 3.8m 以上	変形四獣鏡1、銀環1、鉄剣2、鉄刀2、刀子6、鎗先2、鉄鏃7、鉄銚2、鉄斧5、鑿形鉄製品5、不明鉄製品5、その他鉄片、砥石2
第2主体	〃	墓坑 幅0.75m × 長 3.2m 以上 棺跡 幅0.52m × 長2.45m 以上	土師器杯3、玉類26、鉄鏃10、不明鉄製品1
第3主体	〃	墓坑 幅 1.3m × 長 5.4m 棺跡 幅 0.6m × 長 3.0m	須恵器蓋杯6組、須恵器甗1、土師器杯1、砥石1 刀子2、甗1、鉄鏃1
第4主体	箱式石棺	幅 0.5m × 長 1.5m	土師器杯2、玉類27
第5主体	木棺直葬	墓坑 幅0.85m × 長 3.1m 棺跡 幅 0.6m × 長 2.3m	土師器杯2、須恵器把手付椀1、甗1

第12-1表 高猿6号墳内部主体一覧表



第12-6図 内部主体平面図 (1:40)



第12-7図 内部主体断面図 (1:40) レベル 218.2m

## 4. 出土遺物

### (1) 第1主体の遺物

変形四獣鏡1・銀環1と鉄剣2・鉄刀2・刀子6・鉄製鎗先2・鉄鏃5・鉄鉾2・鑿形鉄製品及び不明鉄製品などがあり、金属遺物に限られる。

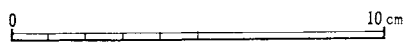
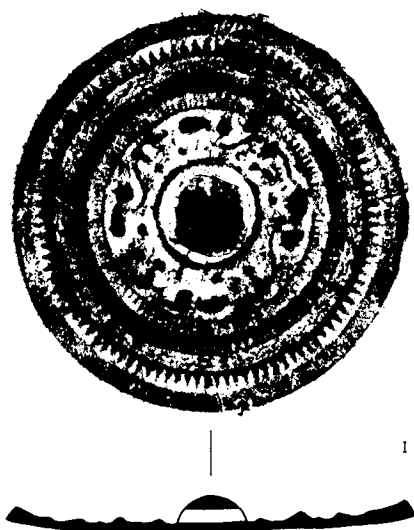
これらの遺物の中には、試掘調査の際、出土したものもあるが、発掘調査の状況から、すべての遺物が、棺内の副葬品と考えられる。

**変形四獣鏡(1)** 径10.9cmの銅鏡。鏡面は凸面で、灰青色の地肌に濃緑色の錆がかなり厚くふき出ている。また、その錆には布目痕が明瞭に残っており、布で包んで埋納されていたものと思われる。

鏡背は鏡面に比べて錆化が進んでおらず、わずかに薄い錆が付着するだけである。特に第12-8図拓影の左上部には全く錆が出ていない。鋳上がりは、比較的良好で、文様も鮮明である。

外縁は平縁で、外区の様帯は、外側から鋸歯文・複線波文・鋸歯文からなる。内区は、外周に橢歯文帯がめぐり、簡略化された獣像と神像をそれぞれ4体ずつ交互に配し、乳はみられない。なお獣像は時計廻りの方向を向いている。

中央の鈕座は直径2.7cmで、小乳もない。鈕は径



第12-8図 第1主体出土遺物(変形四獣鏡・銀環) 1 : 2

2.4cm、高0.76cmで、鈕頭はよく磨かれている。

**銀環(2)** 直径1.9cmのきわめて小さな指輪状のもので、挟はない。や、紫色がかった銀色を呈し、断面は径2mm弱と細い。非常にもろく、発見当初には完存していたが、調査途中に一部を欠損してしまった。

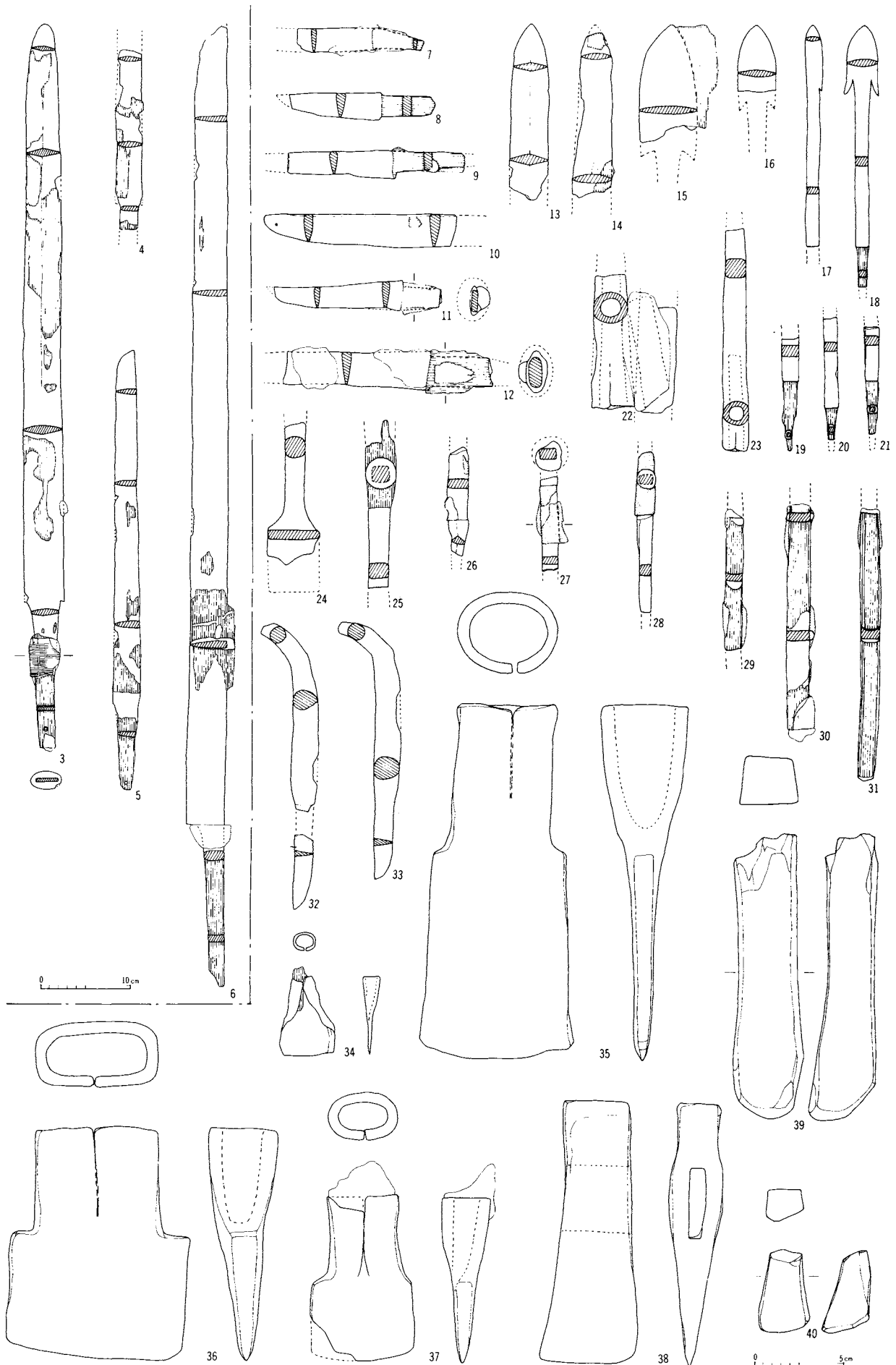
**鉄剣(3・4)** 3は全長79.1cm。刃部は長さ63.1cm、最大幅4.4cm、厚さ約1.0cmで、錆がみられる。茎は長さ16.0cm、最大幅3.7cmで茎尻に向かって幅は狭くなる。刃部と茎の接点はほぼ直角に関がつくられ、厚さ0.5cmの茎には、茎尻近くに径0.4cmの目釘穴をもつ。刃部には鞘の木質が付着し、茎には柄の木質と柄に巻いた紐が錆化して残り、さらに関の近くには鹿角片もわずかに認められる。

4は、3に比べて小形のもので、刃先及び茎尻が欠く。刃部は幅2.9cm、現存長16.5cm、厚さ0.6cmで錆はみられない。茎は現存長2.7cm、厚さ0.5cmで、刃及び茎のいずれにも薄く木質が付着している。

**鉄刀(5・6)** 大小2本の鉄刀がある。5は、全長48cmのもの、刃部は長さ38.9cm、最大幅2.9cm、刃背部幅0.8cmで鞘の木質がわずかに付着する。茎は長さ9.3cm、最大幅2.7cmで、茎尻に近づくに従い、すぼまる。目釘穴は茎尻近くに認められ、径0.3cmである。刃部と茎の接点の関は刃側のみの片方で、関の付近には木質が付着しておらず、鏝の着装部分と思われる。

6は全長104.7cmの太刀。刃部は切先をわずかに欠くが、現存長86.9cmを測り、幅4.2cm、刃背部幅0.7cmで、刃部の断面は二等辺三角形をなす。刃部には鞘の木質が、0.5cm以上の厚さで残っている箇所もあり、鞘の木質には、幅0.3cm長さ約5cmで、紐の痕跡も認められる。しかし、紐は、刀に伴うものか、この鉄刀に接して出土した変形四獣鏡に伴うものか、あるいは、死者の衣服等に伴うものかは、明らかでない。

関は、片側のみで、この関の延長上まっすぐに柄にふくれあがった錆が止まっている。これは鏝によるもので、錆の側面には緑青も付着しているが、鏝



第12-9図 第1主体出土遺物（鉄製品・砥石）鉄剣・刀 1 : 6 その他 1 : 3

は残存していなかった。

茎は長さ17.8cm、幅2.3cm、厚さ0.8cmで、木質が付着し、目釘穴の位置等はわからない。

**刀子**（7～12） 完形品はないが、大きさは様々で、7～9及び11は刃部の幅も狭く、小形である。うち、完形に近い8は現存長8.2cm、刃部最大幅1.5cm、刃部現存長5.1cmで、関は両側にみられる。11も、現存長9.3cm、刃部最大幅1.7cmで、小形のものはいずれも切先に向かって段々と細くなっている。それに対し、10や12は、刃部幅がや、広く、12は最大幅2.2cmを測る。また長さも一段長いと考えられ、小形品のように極端には切先に向かって細くならない。

茎には柄の木質が残り（7～9・12）、また鹿角装の柄（9・11・12）もみられる。

**鉄製鎗先**（13、14） いずれも刃部のみ破片で、両側に刃がつく。現存長9.7cmの13は刃部幅2.1cm、厚さ0.6cmで、両面に鎗が明瞭にみられる。14は、13に比べ鎗が明らかでなく、断面は丸味をもった平造りに近いもので、木質が付着する。現存長8.7cm、刃部幅2.1cmで先端をわずかに欠く。

**鉄鏃**（15～21） 鏃の大きさ、形態から4種類あるが、数は少ない。15は、鏃先だけであるが、幅3.2cm、長さ4.8cmの大形のもので、鏃の平面に鎗がつかない。鏃の吹き出しが激しく、木質が付着している。16も鏃先だけであるが、かえりや茎の様子は明らかでないが、鎗のない平面的な鏃で、形態的には15と同様のもと考えられるが、15に比べかなり小さい。

17は、刃部かえりが片刃式のもので、刃部幅0.9cm、長さ3.6cmと細長く小さい刃部をもつ。18は全長14.3cmで、幅1.7cm、長さ3.7cm、厚さ0.4cmの刃部は、両側に比較的鋭いかえりがある。刃部かえりから矢柄までの長さは9.1cmで、茎は幅0.7cm、厚さ0.5cmの断面が長方形のものであるが、矢柄への挿入部は細く、断面が丸くなり、木質が付着する。刃部先端の形態は、鎗がなく、15・16にも似るが、一段と小さい。

19～21は、茎及び矢柄挿入部の破片で、挿入部は断面が小さな方形を呈し、表面には木質が残存している。

**鉄銚**（22・23） 小形の銚で、いずれも先端を欠く。22は基部のみの現存長7.3cmの破片。基部外径

は2.4cmで、袋部内面には、挿入された柄の木質が残存し、外表面には別の鉄片が錆化のため付着している。現存長12.1cmの23は、基部径が1.4cmと一段と小形である。袋部の長さは約5cmで、袋部は断面が中空の円形であるが、刃部にかけては断面が方形になり、先端では鎗をつくり、断面が菱形を呈するものと考えられる。袋部にはわずかに木質が残る。

**鉄斧**（34～38） それぞれ形態・大きさの異った斧が5点出土した。うち34～37の4点は、刃部をつけた鉄板の上方を両側から折り曲げ、中空の袋部をつくり、木柄を装着するようにしたものである。

34は、長さ4.4cmのミニチュアで、幅2.7cmの直線に近い刃部から、袋部にかけては、あまり肩も張らず、ゆるやかである。また袋部の鉄板の折り曲げも雑で、きちんと鉄板が合わさっていない。

35は、長さ19.3cmの大形で、細長く、刃部は長さ11.5cmで、両肩はわずかに張出す。刃部幅は8.5cmで、刃先はや、弧状となっている。袋部は5.6×4.6cmの断面が中空の楕円形を呈し、深さ約8cmの内面にはわずかに柄の木質が残存している。

36は、長さ12.6cmで、刃先も直線的で、幅9.8cmと幅広く、全体的に方形で、中央部の両肩の張りも35に比べ大きい。袋部も断面が6.7×3.7cmの長方形状につくられている。

37は、35・36に比べ、わずかに小ぶりで、長さ9.0cm、袋部幅3.9cmを測る。刃先は一部を欠損するが、幅6cm程度で、わずかに弧状を呈する。中央部の両肩の張りは小さく左右均等でない。袋部は断面が、中空の楕円で、内面は錆化している。

以上の4点の鉄斧が、刃部と直角に柄を装着するのに対し、38は刃部と平行の方向に柄をつけるもので、長さ14.3cm、刃部幅5.3cm、刃背部幅3.7cmの細長い鉄斧の側面に幅0.9cm、長さ3.7cmの方形の透しがあけられている。鉄斧の厚さは、刃背部で2.5cmであるが柄の装着部では、3.0cmとふくれあがる。刃先は直線的で、前方側面は、背部から刃部にかけてわずかに外反している。

**鑿形鉄製品**（24～28） いずれも破片で完形品はなく、確実な用途は不明であるが、その形態、仕様等から一応鑿形の鉄製品として報告する。

24は幅2.9cm、厚さ0.4cmの刃部付根と一辺1.0cm

の隅丸方形の断面をもつ茎部で、刃先及び柄部を欠き、判定できないが、幅広い鑿状の工具と考えられる。

25～27は、茎と柄の破片で、25は茎が幅 1.1cm、厚さ 0.8cmで、柄は径 1.7cmの円形を呈する木質のもので、錆化が著しい。

26～28の柄の鹿角装で、27・28をみると断面が円形につくられる。茎部は、柄の着装部が扁平な方形であるのに対し、26は断面が三角形、28が方形になり、28は錐であるかもしれない。

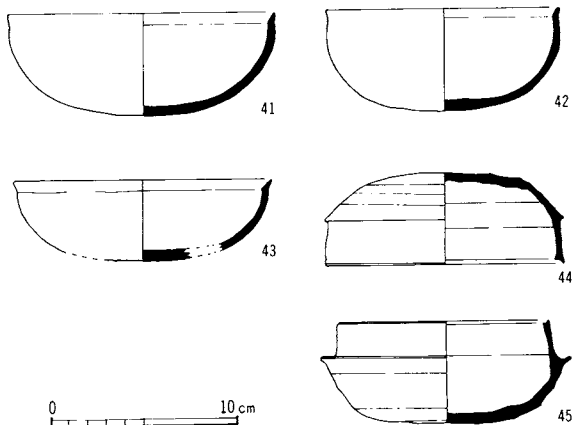
**不明鉄製品 (29～33)** 用途不明の鉄製品で、2種類ある。

29～31は、幅1.0～1.3cm、厚さ0.4～0.5cmの断面が方形の棒状の鉄製品で、29・30は同一個体の可能性が高い。いずれも木質が全面に残存しており、木質で巻かれていた可能性が高く、特に、裏面は厚く木質をあてている。さらに、29や30では、所々に鹿角片が残る。

32・33は、径1.3～1.5cmの鉄材を一方の端部では細くし、折り曲げ、もう一方の端部では、刀子状の刃部をつくるものである。33は全長14.1cmで、刃部は、長さ4.2cm、幅1.0cm、厚さ0.35cmで断面が二等辺三角形に造り出されている。32は刃部と基部が同一個体ではないかもしれないが、刃部は現存長4.0cm、厚さ0.3cmで、33と同様の拵えで、黒漆色を呈する。

これと同様の鉄製品は、第2主体の棺内から出土しており、さらに他の遺跡に目を向けると、奈良県新庄火野谷山2号墳<sup>⑤</sup>にその出土例がある。

**砥石 (39・40)** 細長い角柱のもので、四面が研



第12-10図 第2主体出土遺物(土器類) 1:4

磨されている。双方とも一端を欠き、完形ではないが、39は現存長15.5cmで、断面が一辺2.4～3.1cmの四角形を呈する。石材は青灰色。40は乳白色の石材で、中央部がかなり減っており、よく使用されていたものと思われる。現存長 4.3cm。

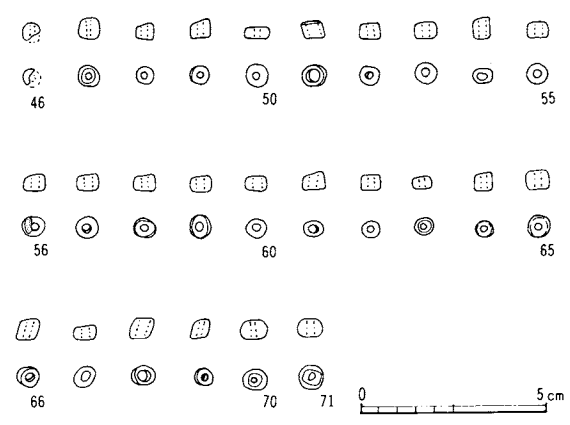
(2) 第2主体の遺物

棺内から出土した土師器杯(41～43)と玉類(46～71)及び用途不明鉄製品(83)と棺外遺物としての鉄鏃(73～82)がある。ほかに第1主体部との間の墓壇掘形肩部に、須恵器蓋杯(44・45)と鉄刀(72)が発見されている。これらの遺物は、第2主体部の埋葬時のものとは限らないが、第1主体には土器の埋納がなく、第2主体では土師器が副葬されていることから、須恵器蓋杯は第2主体部に伴うものとして、報告したい。なお鉄刀は第1主体部墓壇掘形に近く、第1主体に関連する可能性も強い。

**土師器杯 (41～43)** 口径が13.2～14.2cmで、器高は41・42が 5.4cmを測り、43はや・浅い。全体に残りが悪く、器壁の剝離が激しい。口縁部は内外面ともに横なでされ、断面はや・内弯し、端部は内傾し、面をつくっている。口縁部から底部にかけては断面が丸味をもち、42などは、指頭によるおさえの凹凸が残る。

**須恵器蓋杯 (44・45)** 44の蓋は口径12.6cm、器高 4.9cmで、口縁部はほぼ垂直に立ち、口縁部は内側に段をなす。口縁部と天井部の境は稜がみられ、天井部は平坦で、ヘラ削り調整される。

45の身は口径11.1cm、器高 5.4cmで、口縁部立ちあがりの内傾度は小さく、口縁部内側には段がつくられる。底部は、ていねいにヘラ削り調整がなされ



第12-11図 第2主体出土遺物(玉類) 1:2

る。いずれも完形品で、歪みもほとんどない。

**小玉 (46~71)** すべてガラス製のものである。径は4~7mm、厚さ3~5mmで、中央に1~2mmの孔が穿たれており、ガラス管を裁断し形成するため両端を平らに仕上げた扁平のものが多く、46・47は縦長であり、70・71は両端が丸く磨かれている。また50・63はかなり薄く、51や68の孔径は大きい。

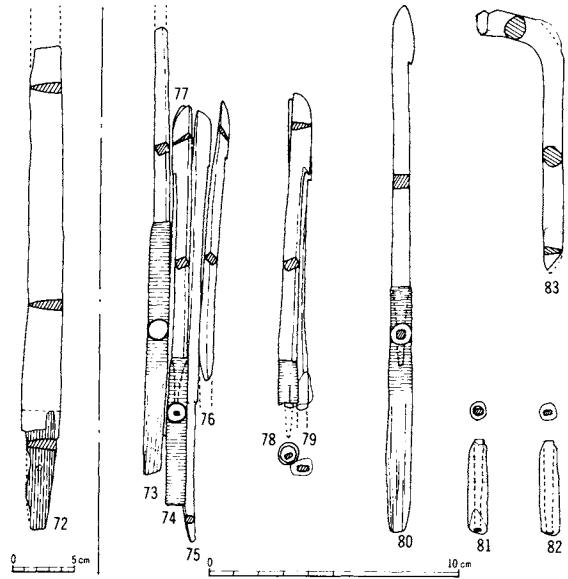
色は、ほとんどが濃い青色あるいは紫色がかった青色をしており、わずかに46がくすんだ朱色、47が明るい茶褐色で他とは異なる。

**鉄鏃 (73~82)** 棺外の墓壇西壁に接して束ねられた状況で出土し、錆のためくっついてしまっているものが多い。鏃の刃部は、長さ2.4~3.1cm、幅0.8cm前後の細身で、片側のみに小さなかえりをもつ形態のものである。茎部は幅0.5cm、厚さ0.4cm程度と断面がわずかに扁平で、かえり付根から矢柄挿入部までの長さは、74・78のように7.5cmほどのものとそれ以上に長いものがあり、75では9.2cm、80では8.8cmを測り、79も長い部類と考えられる。矢柄の残存状況も良好で、73・80で約10cmの長さで残り、径1.0cm前後の矢柄は、錆化しているが、矢柄に巻いた樹皮も、73・74・78・80で観察できる。矢柄への茎部の挿入は、茎部を茎尻に向けて細くすぼめ、74では2.5cm、80は3.0cmほど挿入しているが、75・81・82ではそれ以上となっている。

**不明鉄製品 (83)** 棺内の中央部から出土した鉄製品で、1個が単独で発見された。形態は、第1主体出土のもの(32・33)と同じであるが、や・小形となっている。折り曲げられた端部は、弧状を呈しそれに薄い木質が付着しており、細い木質の丸棒状のものに取り付けられていたのではないかと考えられる。さらにもう一方の端部はわずかに先端を刃部状にしたのみで、刃部は長さ1.5cmと短い。

**鉄刀 (72)** 第1主体部との間の墓壇掘り面に置いていたもので、第2主体に伴う遺物とは言いきれない。現存長38cmで、切先部を欠く。刃部は幅2.7cm、刃背部幅0.8cmで、棟の反りはなく平坦である。刃部断面は、わずかに丸味をもつ二等辺三角形で、刃部と茎部の境は片方に閤を造り、閤に接しては鏝の痕跡か錆化の状況が異なっている。

茎部は、茎尻にいくに従いすぼまり、茎尻は幅1.3



第12—12図 第2主体出土遺物(鉄製品)  
(鉄刀1:6、その他1:3)

cmで直線的にまとめている。茎尻から5cm、刃部に寄った箇所が目釘穴と考えられるものがあるが、柄の木質と錆化のため径は明らかでない。

### (3) 第3主体の遺物

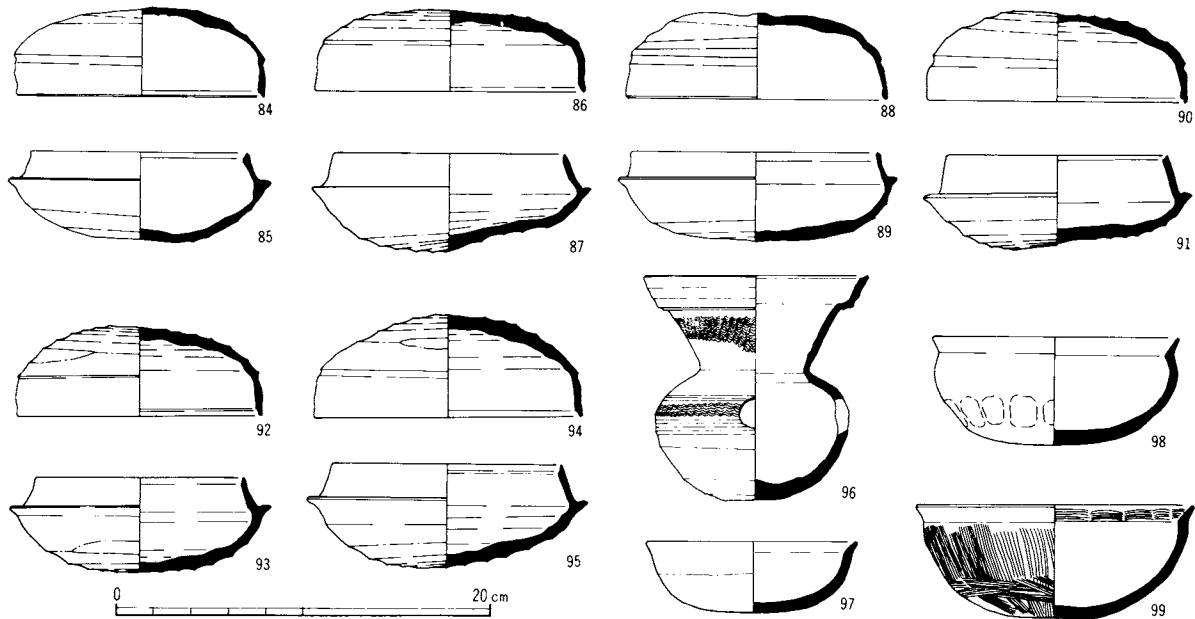
棺内遺物は、刀子2(100・101)と鉈(102)と少ないが、棺外には、須恵器蓋杯6組(84~95)・須恵器甕(96)・土師器杯(97)・砥石(104)・鉄鏃(103)があり、墓壇北東肩部では土師器杯(98・99)も発見された。土器類が多く、しかも須恵器が多いことで他の主体部に比べ特徴的である。

**須恵器蓋杯 (84~95)** 第12—13図に掲げた蓋杯で、それぞれ上下がセットとなる。90・91を除いて、他の5組は蓋をしたま、発見された。

蓋は、口径13.0cmのもの(84・92)、13.6~13.7cmのもの(88・90)、14.2~14.4cmのもの(86・94)があり、第2主体部肩部のものより大きい。器高は4.3~4.6cmと低く、概して扁平であるが、94は5.5cmと高く天井部に丸味をもつ。口縁部は短く、外にや・開き気味で、口縁部と天井部境の稜線は弱く、わずかに段をなし、段の下が凹線状となるもの(84・88・90・94)が多い。内面中央に円弧の叩き目痕の残るもの(88)もある。

口縁端部の仕上げは、それぞれセットとなる杯身とも対応し、段を呈するもの(84・85、90~95)と段をなくし丸く仕上げるもの(86~89)とに分けられるが、ただ86の蓋口縁端部内面には、段というよ





第12-13図 第3主体出土遺物（土器類） 1 : 4

り、浅い沈線状のものがめぐっている。

杯身は、口径11.0~13.0cm、器高4.6~5.2cmと扁平なものが多いが、95は94の蓋と対応して、底部断面が丸味をもつ。

杯身の口縁部は短く内傾し、内面に底部とのくびれの稜線がみられる。

なお、蓋天井部、杯身底部は、すべてヘラ削り調整がなされ、95の杯身底部には「×」、93・94には直線のヘラ記号が認められる。

**須恵器壺 (96)** 口径11.9cm、器高11.9cmで、口径が体部最大径10.3cmを大きく上まわる。体部は球形に近くなり、底部はヘラ削り調整がなされ、径1.6cmの円形の透孔のある体部中央の文様帯には櫛描波状文とカキ目文が施されるが、上下に沈線を伴っていない。

口頸部基部は径6.0cmと太く、高さ3.4cmで、径10.4cmの口縁部との段に達する口頸部は外上方にのび、外面には不揃いの櫛描波状文が描かれている。口縁部は、高さ0.9cmで、断面は口頸部と同様の角度でのび口縁部は、わずかに内傾した面をつくっている。

**土師器杯 (97~99)** 97は口径11.6cm、器高3.8cmと小形で浅い。口縁部の内外面は横なでされ、口縁端部は内傾した面を形成する。口縁部から底部にかけては、指頭によるおさえ痕がわずかに残る。色

調は淡褐色で、全体に器壁の風化が著しい。

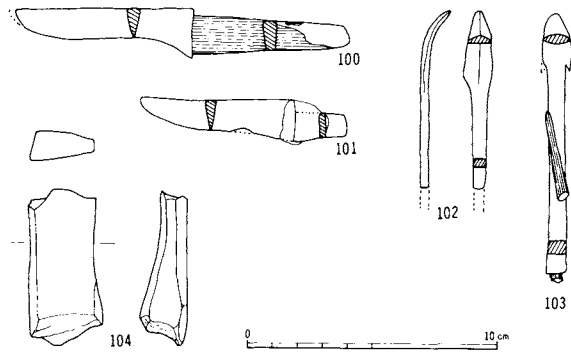
98は口径12.9cm、器高5.7cm、99は口径14.6cm、器高6.0cmで、98が99の内側に重ねられて、出土した。

いずれも短い口縁部が、わずかに外反し、くびれをなすもので、口縁端部は大きく内傾した面をもつ。口縁部から底部にかけては、断面が内湾し、98の外面には指頭によるおさえ痕が残り、99はハケ目調整が施されている。このハケ目調整は縦方向のものが7本単位、横方向のものが6本単位でなされ、また口縁端部内面の横方向のハケ目調整は5本単位である。

**刀子 (100・101)** 大小の刀子で、100は現存長17.3cmで、切先をわずかに欠く。刃部は関部分で幅2.0cm長さ7.0cm、刃背部幅0.45cmを測り、刃先は内湾し切先にいくに従い細くなる。関は両関で、茎部は幅1.2cm、厚さ0.45cm、長さ6.3cmで、柄の木質が残存する。

101は、全長8.3cmの小形品で、刃部は長さ6.1cm、幅は関部分で1.7cmを測り、切先に向かって細まる。関は鍔のため明確ではないが、刃背部側に大きく造られているようである。茎部は短く、薄いものとなっている。

**鉈 (102)** 下端を欠くが、刃部の反りから鉈と考えられる。現存長7.0cmで、刃部は一応両刃である



第12-14図 第3主体出土遺物(鉄製品・砥石)1:3

が左右対称ではない。刃部最大幅1.15cm、長さ3.0cmで、上面に鋸があり、先端は上反りする。茎部は幅0.5cm、厚さ0.35cmと細い。

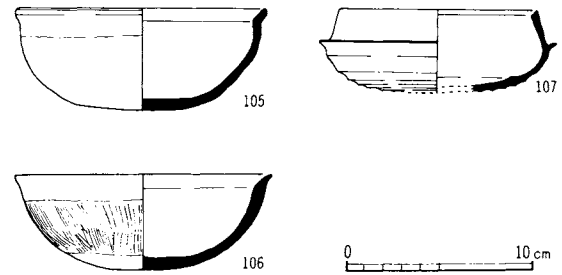
**鉄鏃** (103) 茎部に折れた矢柄挿入部の下端部がくっつき、完形のものと言える。全長13.8cmを測る。刃部は、長さ2.4cm、幅1.2cm、厚さ0.35cmで、両側に小さなかえりをもつ。茎部は幅0.7cm、厚さ0.45cmで、刃部かえりから矢柄挿入部までの長さは8.1cmとなる。矢柄挿入部は細く、長さ3.7cmで、矢柄の木質が付着している。

**砥石** (104) 乳白色の粘板岩製の砥石で、片側が欠く。現存長6.2cmで、中央部の幅は上面で2.3cm、下面で2.5cm、側面は0.5cm及び1.0cmと扁平なもので、四面とも研磨されており、かなり使用されていたらしい。

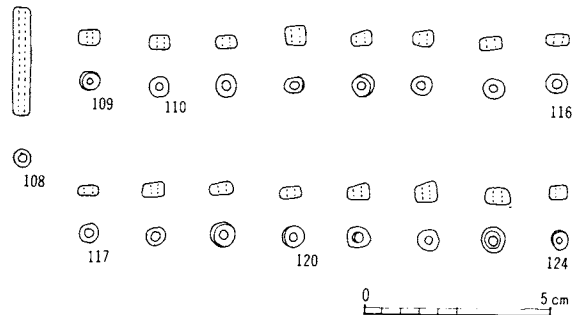
#### (4) 第4主体の遺物

石棺内に配置された土師器杯2(105・106)と玉類17(108~124)のほか、埋土中に発見された須恵器杯片(107)がある。主体部は試掘トレンチによって削られてしまっていたが、試掘調査の際の出土遺物もなく、箱式石棺という性格からも副葬品は多くなかったものと考えられる。

**土師器杯** (105・106) 105は口径13.1cm、器高5.4cm、106は口径13.6cm、器高5.0cmで、106の方がわずかに扁平となっている。口縁部の様相も若干異なり、105は薄い器壁を外反し面を形成するが、106はさほど外反せず、わずかに器壁を肥厚させ、内面に内傾した面をつくっている。双方とも口縁部横まで、内面はなでにより調整されているが、106の体部から底部にかけての外表面には、粗いハケ目が残っている。焼成は良好であるが105の体部には一部



第12-15図 第4主体出土遺物(土器類)1:4



第12-16図 第4主体出土遺物(玉類)1:2

黒斑状の箇所がみられる。

**須恵器蓋杯** (107) 蓋杯の杯身口縁部の破片で、復原口径が10.4cmのや、小ぶりのもので、口縁立ちあがり短く内傾する。口縁端部は内面に段をつくり、底部外面はヘラ削り調整がなされる。

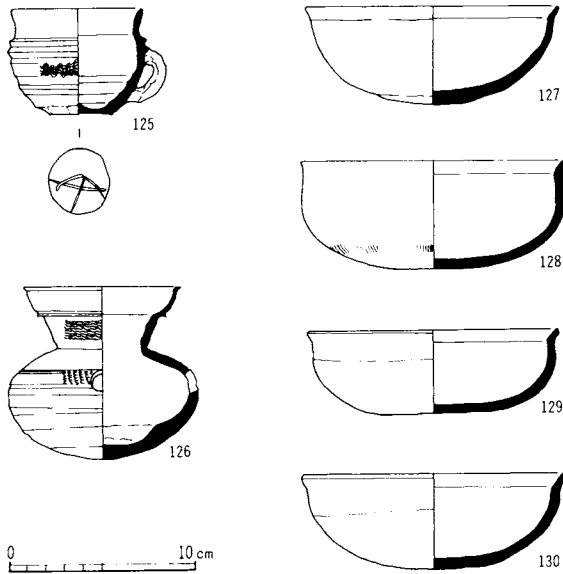
**管玉** (108) 径0.45cmの細い碧玉製の管玉。長さ2.85cmで、径0.22cmの糸穴をもち、表面には薄く朱が付着している。

**小玉** (109~129) 径0.5cm前後、厚さ0.3~0.6cmのガラス製の小玉で、ガラス管を裁断して造られたようで、両端が平らに磨かれているものがほとんどである。それ以外のものとしては、117と123があり、両端がや、丸味をもって仕上げられる。色調は、大半が青色ないし濃い青色で、ほかには124が緑色、113・123が黒色を呈しているだけである。

#### (5) 第5主体の遺物

墓壇南端小口部に据えられた須恵器把手付椀(125)・甕(126)と、それぞれその蓋をしていた土師器杯(127・128)があり、さらに墓壇掘形肩部には、土師器杯(129・130)が重ねて置かれていた。

**須恵器把手付椀** (125) 口径6.8cm、器高5.6cmの小形のもので、体部のや、下方に、輪状の断面円形の把手が付けられている。口縁部は短く直立した後、わずかに外反し、端部は丸くおさめる。体部は、口



第12-17図 第5主体出土遺物（土器類）1：4

縁基部より下方に内弯しながら下り、底部は、凹み仕上げられ、ヘラ記号がみられる。口縁基部から肩部には、断面三角形の鋭い凸線2条をめぐらせ、その下に、櫛描波状文を施す。文様帯はその下方の凹線と隆線によって限られ、体部下方から底部にかけては静止ヘラ削り調整がなされている。

**須恵器罍（126）** 口径8.2cm、器高9.2cmの小形罍で最大径10.1cmは、体部のほぼ中央部にある。口頸部の基部は太く、口縁部は外反した後、屈曲して段をつくり、わずかに内弯しながら、さらに外上方にのび、口縁端部は水平な凹面を呈する。口頸部には櫛描波状文が施され、屈曲部の段には鋭い凸帯がめぐり。

体部外面の文様帯は、上を浅い2条の沈線、下を1条の沈線で限り刺突文を施す。また文様帯上には、径1.1cmの円孔が上外方から下内方に穿孔されている。

なお、ゆるやかな丸味をもつ底部は、窯床片が付着するなど、自然釉がかかり、ヘラ削り等の調整技法はわからない。

**土師器杯（127～130）** 127は口径13.6cm、器高5.2cmで口縁部から底部にかけてゆるやかなカーブであるのに対し、128は口径14.0cm、器高5.7cmで、腰部が張り出したもので、外表にはハケ目が残る。また口縁端部の仕様も異なり、127は端部を外反させ、内面に内傾した面をつくっているが、128はあまり

端部を外反していない。

129は130の内側に重なっていたもので、口径13.2cm器高4.4cmと小さく、扁平である。130は、やや大きく口径13.8cm、器高5.0cmを測り、底部は丸味をもつ。口縁部は横なでされ、端部は外反し、内面に内傾した面をもつ。いずれも胎土に小砂粒を含み、器壁面の風化は激しい。

#### (6) 墳丘・周溝部の遺物

墳丘及び周溝からは、かなりの遺物が出土したが図示できるものは第12-18・19区のもので、特に周溝部は、重機使用による発掘のため、採集できなかった遺物もあると思われる。墳丘上からは土師器杯（131）・須恵器高杯（133）・須恵器蓋（132）・須恵器直口壺（134）・須恵器甕（135・137）の土器類と鉄鉢（138～140）・刀子（141・142）・砥石（143）が出土し、周溝からは須恵器甕（136）が採集された。

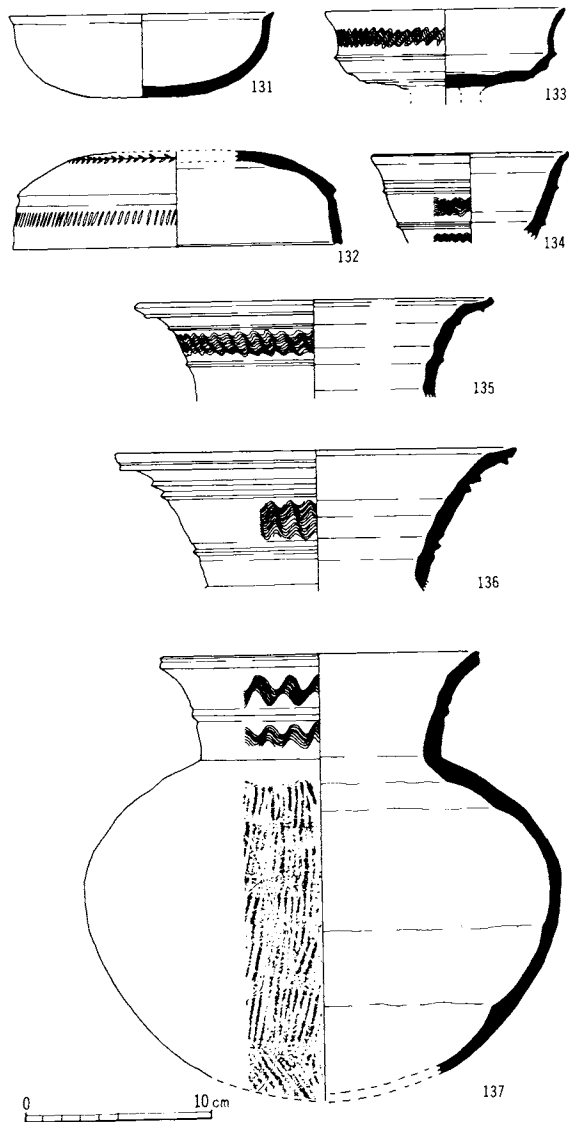
これら古墳に伴う遺物のほか、サヌカイト石匙や瓦器碗片、中世土師器小皿片なども出土した。

**土師器杯（131）** 口径14.0cm、器高4.4cmの扁平なもので、全体に風化が激しい。口縁端部はさほど外反せず、内面に内傾した面をつくる。

**須恵器蓋（132）** 口径17.4cmの大振りの蓋で、口縁部はわずかに開き、底体部との境には稜線と凹線がめぐり。口縁端部はわずかに内傾した凹面をついている。口縁部外表には、ヘラ描き斜線が施され、天井部にも羽状にめぐらされる。

**須恵器高杯（133）** 無蓋の高杯で、脚部を欠損するが、杯部底部の接合痕跡から四方向に長方形の透しをもつものであったことがわかる。杯部は、径12.6cm、高さ4.1cmの浅いもので口縁部はまっすぐのびた後、端部でわずかに外反し、口縁端部は丸く仕上げられている。口縁部外面には、10本単位の櫛描波状文が描かれ、口縁部と杯部底体部の境には、凸帯がめぐり、底部はヘラ削りにより調整されている。

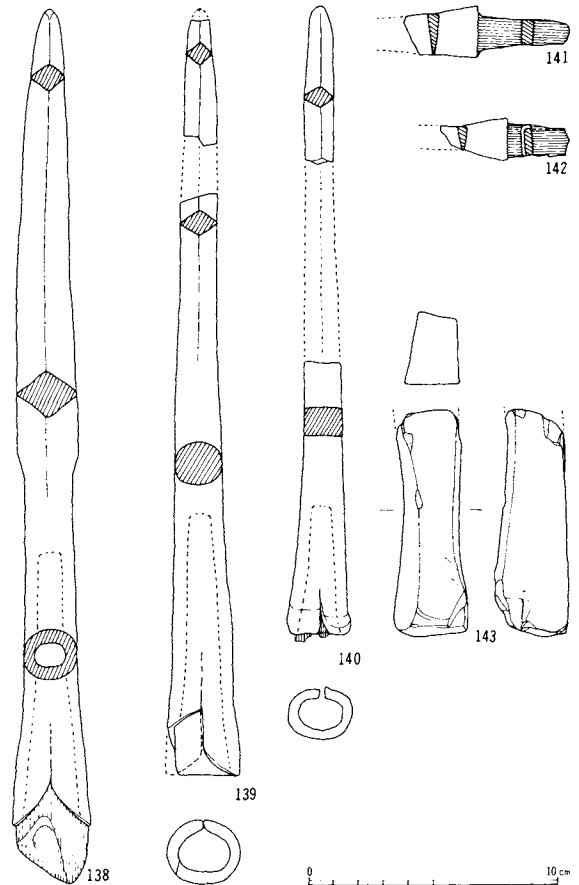
**須恵器直口壺（134）** 墳丘盗掘坑内から出土した口頸部の小片。復原口径は10.2cm、高さ4.6cmで、口縁端部は、わずかに外反し、内面にはゆるやかな段をつくる。口頸部は基部に向ってまっすぐすばまり、口頸部基部に近くではやや内に屈曲する。外面には、2条の凸帯がめぐり、2段に櫛描波状文がみられる。



第12-18図 墳丘・周溝出土遺物（土器類） 1 : 4

**須恵器甕**（135~137） いずれも完形品ではないが、墳丘盗掘坑内から発見された137は、その形をかなり復原できた。137は、口径12.7cm、推定器高23.6cmで体部はやゝ扁平で、体部最大径25.4cmは、体部底面よりほゞ $\frac{2}{3}$ の高さに求められ、体部外表には平行叩き目痕が全面に残る。口頸部基部は太く、口頸部は上外方にまっすぐのび、口縁部近くで、一段と外反し、端部は外傾した面をつくり、浅い沈線がめぐらされる。また口頸部中央には凸帯があり、それをはさんで、波状文が描かれる。

135・136はいずれも口頸部の破片で、135は口径18.6cm、136は口径21.0cmと推定され、いずれも外反して上外方にひらき、口縁端部近くでは水平方向に



第12-19図 墳丘出土遺物（鉄製品・砥石） 1 : 3

屈曲している。端部内面では、稜をつくり、端部外面は外傾する帯状の面を形成し、136には沈線がめぐぐる。口頸部には、それぞれ1~2条の凸帯があり、その間には、波状文が描かれている。

**鉄鉞**（138~140） 138は完形品。鉞先は全長32.4cmで、それに挿入された柄の木質もよく残っている。刃部は長さ18.5cmで、関は両側にゆるやかな角度で造られ、関部分の幅は2.5cmで、先端に向かってしだいに細くなる。刃部中央には鑄があり、刃部断面は菱形を呈する。茎部は基部に向かって徐々に太くなり、径3.2cmの基部は両端の鉄板を曲げ、断面が中空の円形の袋部を造っている。柄を挿入する袋部の長さは10.6cmを測り、袋部内面には柄の木質が付着したままである。

139は、刃部と茎部の接点の関がないもので、断面円形の基部に鑄をつけることにより、断面が菱形の刃部とし、先端にいくに従い鋭利なものとなる。茎部基部は一部を欠くが、径約3.0cmのもので、長さ10cm程度の深さで、袋部を形づくっている。刃部

の先端と中央部を欠くため、全長は明らかでない。

140は、138、139に比べわずかに小さく、径2.5cmの基部袋部には、挿入された柄の木質が残存する。鋒先と基部しかないため、刃部と茎部の境の様相は詳かでないが、茎部の断面が幅1.5cm、厚さ1.1cmの方形で、他のものとは異なる。

刀子(141・142) ともに、刃部先端を欠くもの

であるが、刃部は関の部分で最も幅広く、切先に向かうにしたがって、細くなる。関はいずれも両関で、刃背部側の方が大きく、茎部には柄の木質がよく残存している。

砥石(143) 幅2.2cm、厚さ2.9cm、現存長9.0cmの青白色を呈する細長い砥石で、四面ともがよく研磨され、かなり使用されたものと思われる。

## 5. 周辺の古墳分布

水田地の畦畔の草生地として残された高猿6号墳の発掘調査の結果には、予想外のものがあつた。

そこで、高猿6号墳の歴史的位置づけはもとより今後のこの地域の古墳文化研究と文化財保護の上からも、改めてこの谷あいの古墳分布調査と、明治44年に発掘された高猿1号墳の墳丘測量が提起され、6号墳の発掘調査終了後これらの調査を実施することにした。

### (1) 周辺の古墳分布状況

高猿6号墳の所在する谷あいは、水平距離にしてわずか200mにも満たない狭いもので、東西の丘陵が迫ってきている。特に東側の丘陵は、細長い舌状のもので、いくつかの小さな谷が入り込み、また丘陵も西側に比べて低く、傾斜もゆるやかで、丘陵裾部は開墾され、水田となっている箇所も多い。

高猿古墳群(第12-20図1~15)及び中出山古墳群(18~25)は、そうした東側からのびる丘陵の先端、裾部あるいは頂部に分布する古墳群で、古墳群の築かれていない丘陵支脈はみられない。

高猿古墳群は、明治年間に多くの副葬品を出した1号墳をはじめ、5号墳までが、これまで知られてきた古墳で、2号墳は、水田中に7×3m、高さ2mのマウンドとして残ってきた。また3号墳は、5×3m、高さ2mのものであつた。今回の圃場整備事業に伴って、この2基の試掘調査を実施したが、遺構・遺物を確認することは出来ず、既に水田化のために主要部は壊されてしまったものと考えられる。

4号墳は、1号墳のある丘陵先端部の東に入り込んだ、さらに小さな谷あいの水田畦畔に残る古墳で墳丘もなく、横穴式石室の石材が露出している。

5号墳は、この古墳群としては、最も南の丘陵裾部にある古墳で、水田に突出した格好となり、墳丘上には物置小屋が建てられ、水田と物置小屋によってかなり変形している。

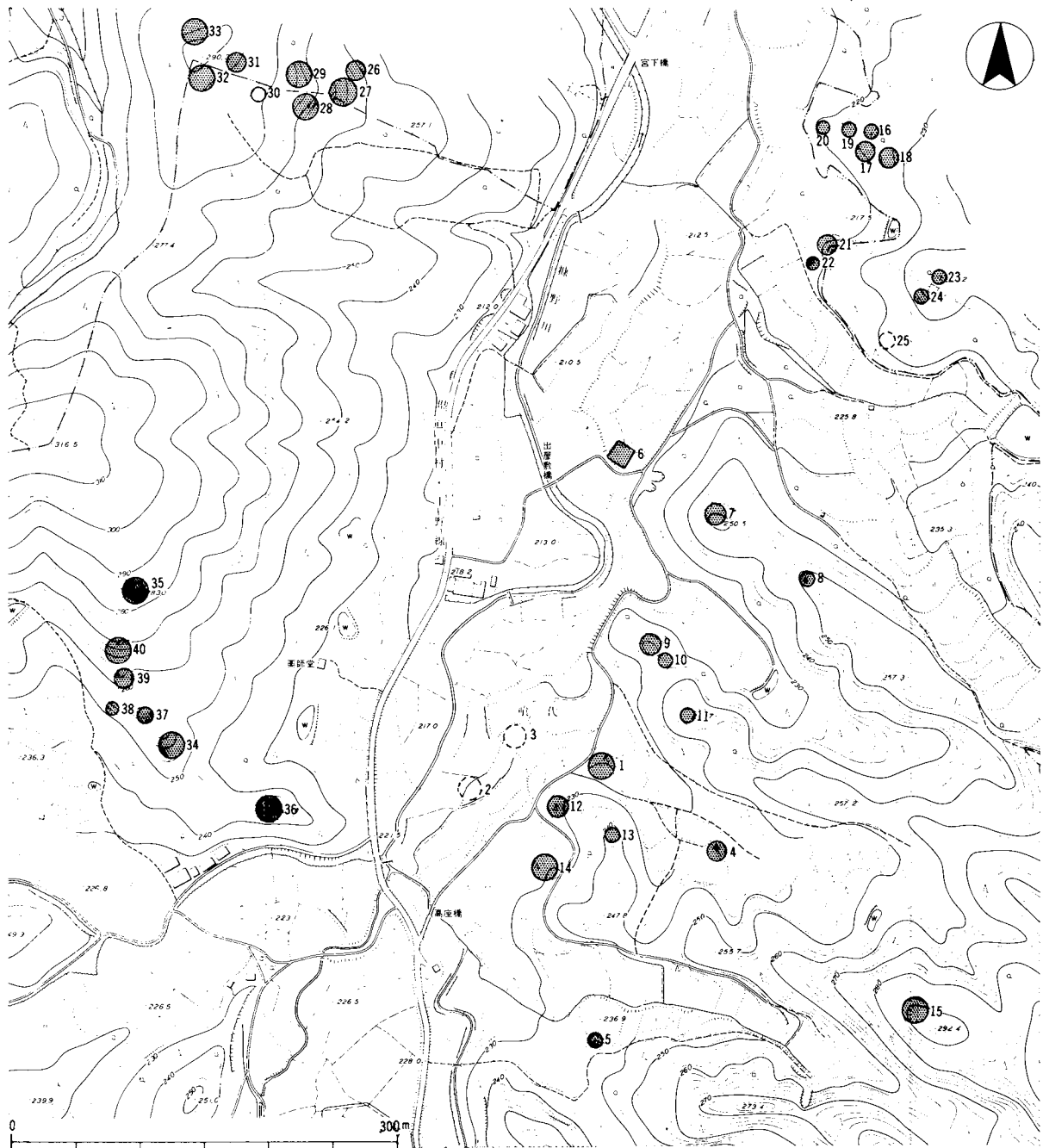
7・8号墳は、6号墳東の丘陵頂部に築かれており、その南の狭い谷を隔てた細長い丘陵尾根にも9~11号墳が所在し、いずれも丘陵の先端にある7・9号墳が他の古墳に比べ規模が大きい。

次に12~14号墳は1号墳の周辺に所在する古墳で、14号墳は1号墳とほぼ同規模のものである。また、15号墳は、かなり離れた丘陵頂部に単独で立地し、規模も大きい。

高猿古墳の北にある中出山古墳群14基は、既に所在が知られていたもので、遺跡台帳によれば、規模等は別表のとおりで、5号墳(16)、10号墳(21)、11号墳(22)は、横穴式石室を内部構造としている。なお、別表では、墳形がすべて円墳となっているが、分布調査の確認では、6・7号墳(17・18)及び9号墳(20)は、方墳の可能性もみられた。

この谷あいの西側にある丘陵地は、比高約100mと高く、県道中村・上野線に面した斜面は急峻であるため、古墳の築造は、東側の丘陵よりも少ないが、それでも、丘陵の南端や、大山田盆地を見下ろす大山田村境のや、傾斜がゆるく、東にのびる尾根上には、古墳の所在が確認される。

これまでは、南端の尾根上に2基が知られており、高座1・2号墳と呼ばれてきたものである。今回の分布調査によって、新たに南側で5基、北側で8基を確認し、小字名をとって、それぞれ出屋敷A古墳群(34~40)、出屋敷B古墳群(26~33)とした。



第12-20図 周辺古墳分布図 1：5000 上野市都市計画図（1：2500）

これらの古墳群の中には、径が20m、高さが3～4mになるものが多く含まれており、規模が大きく注目すべきところである。

## (2) 高猿1号墳の墳丘

高猿1号墳については、明治44年2月、鏡、剣、玉類そしてハマグリ、アワビ等の入った須恵器等、多数の遺物が発掘されて以来、よく知られてきたところであり、「考古学雑誌」<sup>①</sup>には、故大西源一氏が次のように報告している。

——（略）——其の地は大字喰代の小字高猿である。此の丘陵麓に俗称王塚という古墳があったが、元來此の付近は村の共有地で、土取場になっているから、昨年土人が其の爲めに此の王塚を破壊した処が、頂上から地下2尺5寸及至3尺の所に続々遺物を発見し、底には一面に小炭雜りの灰が敷いてあったそうである。——（中略）——又、此の王塚は、周囲30間ばかりの円墳で、内部には石槨さへなかったと云ふから、古墳としては決して雄大なものではない。

No	古墳名 (県遺跡番号)	所在地	地目	概況	備考
1	高猿1号墳 (3138)	上野市喰代字高猿	山林	円墳 径21m、高2.5m	須恵器、玉類、鏡出土
2	〃 2 〃 (5965)	〃 〃 〃	水田		消滅
3	〃 3 〃 (5966)	〃 〃 〃	〃		〃
4	〃 4 〃 (5967)	〃 〃 〃	〃	水田により削平され石室のみ露出	
5	〃 5 〃 (5968)	〃 〃 〃	山林	円墳 径8m	
6	〃 6 〃	〃 〃 字松本	草生地	方墳 一辺18m 高2.4m以上	今回発掘調査
7	〃 7 〃	〃 〃 〃	山林	円墳 径15m、高1m	
8	〃 8 〃	〃 〃 〃	〃	〃 径10m、高1m	
9	〃 9 〃	〃 〃 字高猿	〃	〃 径15m、高1.5m	
10	〃 10 〃	〃 〃 〃	〃	〃 径10m、高1.5m	
11	〃 11 〃	〃 〃 〃	〃	〃 径10m、高1m	
12	〃 12 〃	〃 〃 〃	〃	〃 径15m、高2m	
13	〃 13 〃	〃 〃 〃	〃	〃 径10m、高2m	
14	〃 14 〃	〃 〃 〃	〃	〃 径20m、高1m	
15	〃 15 〃	〃 〃 〃	〃	〃 径20m、高2m	
16	中出山5号墳 (5822)	大山田村出後字中出山	〃	〃 径8m、高1.8m	
17	〃 6 〃 (5823)	〃 〃 〃	〃	〃 径14m、高2.3m	横穴式石室
18	〃 7 〃 (5824)	〃 〃 〃	〃	〃 径13m、高3.6m	〃
19	〃 8 〃 (5825)	〃 〃 〃	〃	〃 径11m、高0.8m	
20	〃 9 〃 (5826)	〃 〃 〃	〃	〃 径9m、高1.1m	
21	〃 10 〃 (5827)	上野市喰代字松本	〃	〃 径13m、高3.5m	横穴式石室
22	〃 11 〃 (5828)	〃 〃 〃	〃	〃 径7m、高0.5m	〃
23	〃 12 〃 (5829)	大山田村出後字中出山	〃	〃 径9m、高1.5m	
24	〃 13 〃 (5830)	〃 〃 〃	〃	〃 径10m、高2m	
25	〃 14 〃 (5831)	〃 〃 〃	〃	〃 須恵器出土	消滅
26	出屋敷B1号墳	〃 〃 〃	〃	〃 径15m、高1m	
27	〃 B2 〃	〃 〃 〃	〃	〃 径20m、高1m	
28	〃 B3 〃	上野市喰代字出屋敷	〃	〃 径20m、高3m	
29	〃 B4 〃	大山田村出後	〃	〃 径20m、高3m	
30	〃 B5 〃	上野市喰代字出屋敷	〃	〃 径10m、高2m	
31	〃 B6 〃	大山田村出後	〃	〃 径15m、高1.6m	
32	〃 B7 〃	上野市喰代字出屋敷	〃	〃 径20m、高1.6m	
33	〃 B8 〃	大山田村出後	〃	〃 径20m、高2.5m	
34	出屋敷A1号墳 (5963)	上野市喰代字出屋敷	〃	〃 径25m、高4m	高座1号墳
35	〃 A2 〃 (5964)	〃 〃 〃	〃	〃 径25m、高4m	〃 2号墳
36	〃 A3 〃	〃 〃 〃	〃	〃 径25m、高3m	
37	〃 A4 〃	〃 〃 〃	〃	〃 径12m、高1.5m	
38	〃 A5 〃	〃 〃 〃	〃	〃 径6m、高1.5m	横穴式石室
39	〃 A6 〃	〃 〃 〃	〃	〃 径15m、高1.5m	
40	〃 A7 〃	〃 〃 〃	〃	〃 径8m、高2m	

第12-2表 周辺の古墳一覧表

而し茲に注意すべきことは貝殻竝に魚骨を納めた処の高杯があったことである。——(略)——

またこの時に出土した遺物は、現在、東京国立博物館に収蔵されており、「東京博物館収蔵目録(考古)<sup>⑦</sup>」によれば次のとおりである。

碧玉管玉4、紡錘車1(滑石)、銀釧2、碧玉勾玉2、硬玉勾玉1、斑瑪瑙勾玉2、玻璃小玉40、六獣

鏡1(径11.5榿)、四乳鏡(径14.5榿)、乳文鏡(径8.1榿)、提瓶4、埴6、甕2、蓋杯11、高杯5、盃1、剣身残片2

以上のような状況を踏まえながら、高猿1号墳の墳丘を測量し、どんな古墳なのかを探ろうというものであった。

まず、高猿1号墳の立地が、丘陵の突端裾部にあ



第12-21図 高猿1号墳墳丘実測図 1:200



り、水田や農道に面していることから、かなりの変形が予想されたが、測量の結果、墳丘東裾部は水田のため、削られていたものの、そのほかはさほど変形しておらず、西側及び南東墳麓は現状のままで、特に西墳麓では、幅 2.0 m 程度の周溝を思わせる凹地が実測できた。

しかし墳丘頂部は、かなり荒されており、中央部には祠が建てられ、中央部にそれぞれ径 4～6 m、高さ 0.4～0.8 m の小山状の高まり 3ヶ所が並んだ状

況で認められ、墳丘西半部は平坦に削平されている。

また墳丘に北にのびる丘陵尾根状の地形は、水田や土取りにより、変形しているが、ゆるやかに北に傾斜し、とうてい古墳の前方部として確認できるものではなかった。

そうしたことから、高猿 1 号墳は、径約 21 m の円墳で、高さは、墳頂部の乱れから正確ではないが、西麓から墳頂最高所までの高さは 2.8 m を測るものであることが明らかになった。

## 4. 結 語

発掘調査前、高猿 6 号墳の周辺は水田となっていたが、地形図をみると、古墳築造当時は丘陵斜面の尾根状の地形であったと考えられ、水田床下の周溝部からは、瓦器片、中世土師器片が出土しており、中世期までは、古墳が完全に残っていたようである。その後の水田化に伴って、墳丘が削られ、周溝部は埋められてしまって、地上観察だけでは、古墳とは断定しかねるものとなっていた。

しかし、今回の発掘調査の結果、一辺 18 m、高さ 2.4 m 以上で、丘陵斜面高位部には、幅 2.0 m の周溝をもち、墳丘は二段に築成され、盛土部には葺石を施す壮々たる方墳であることが明らかになった。

このように、この周辺の古墳群には、20 m 級の古墳が目立って多い。他地域の古墳群は径 10 m 前後のものが中心に構成され、それが、後期群集墳の一般的なあり方である<sup>⑧</sup>とすれば、この地域では、高猿 1 号墳・6 号墳でわかるように、比較的早い時期から古墳群が形成されはじめたためによるのか、当時のこの地域の優位性がうかがえる。

また、このことは、鏡を副葬していることから言え、高猿 1 号墳からも鏡 3 面（「考古学雑誌」の報文では、4 面となっている）が発見されており、たとえその鏡が、径 10 cm 前後の小形の仿製鏡であっても、鏡の出土が地域的に片寄り、当時鏡を保有している集団とそうでない集団との力の隔差が考えられるところである。

さらに、6 号墳は葺石をもっており、葺石を施す労力だけをとってみても、他の古墳との優位性は指摘でき、葺石が太陽の光を受けて、輝く姿は、まさ

に被葬者あるいは葬る側の支配権力を示していたのである。

このように、この狭い谷あい古墳には、かなり強い支配者の系譜が考えられるわけであるが、6 号墳は方墳で、他の古墳が円墳である中で、特質的である。なお、中出山古墳群の中には方墳とできるものが存在し、発掘調査をすれば、他に方墳となる可能性もあるであろうが、6 号墳とは同規模でほぼ同時期に造られたと思われる高猿 1 号墳は、測量の結果、円墳であることが確認されており、そうした中で、わざわざ方墳という形態をとった 6 号墳の被葬者は、この地域の古墳を形成した集団において、どんな位置づけがなされていたのか、興味をひくところである。

次に 6 号墳の内部主体であるが、墳頂部で 5 主体が検出され、これまでの発掘事例では、亀山市大岡寺 1 号墳で、甕棺 1 を含め、7 主体があったとされており、県内では、これに次ぐ確認となった。大岡寺 1 号墳の 6 主体は、粘土槨ないしは木棺直葬で、時期的にも 5 世紀末～6 世紀後半のもので、高猿 6 号墳に似ており、古墳時代後期になって、古墳の性格が変わり、古墳がより家族墓的なものとなる過程で、同一墳丘内に多葬するという現象が生まれ、やがては追葬に便利な横穴式石室が多く採用されるとすれば、きわめて単純明解なものとして理解されるところである。しかし、前期古墳においても、一墳に一主体という例は少なく、逆に複数の主体部を有する事例が多いことが指摘されており<sup>⑨</sup>、単に横穴式石室の前段階だけでは解釈し難いところもある。この

同一墳丘に埋葬された5人の被葬者の関係、葬った集団の社会的な秩序は何であったもか、この古墳をめぐる問題は多い。

5つの内部主体について、その埋葬順序と時期を考えてみると、まず第一主体は、墓塚の掘形も大きく、副葬品も鏡・剣・刀・工具等の金属器で、土器類が含まれておらず、前期的な要素が強く、この古墳の築造時期のものであると思われる。

第2～3の時期として、第5主体部出土の須恵器把手付椀や盃が、陶邑古窯址群の型式編年でいうI型式3段階<sup>⑪</sup>(TK 208号窯式)<sup>⑫</sup>に比定されるもので、時期的には5世紀後半に位置づけられる。なお、第5主体は、第1主体とはなれているものの、主軸の方向は第1主体と同じである。しかし墓塚の規模、棺の設置、副葬品の組成等は、大きく第1主体と違っている。

第2主体については、墓塚掘形におかれた須恵器蓋杯が、形式的には、第5主体の須恵器より1～2段階新しい要素をもつが、単独であるため時期決定は難しく、またこの須恵器が必ず第2主体に伴うとは断定できない。さらに第1主体と平行して、埋葬されており、当初からの計画性がうかがわれ、第1主体とはさほど時間的な差を認められず、第5主体との前後関係は、はっきりしない。

第4～5の時期は、第3主体部と第4主体部である。第3主体部から出土した6組の須恵器蓋杯の中には、口縁端部が丸く仕上げられたものが含まれ、II型式2段階(TK 10号窯式)に位置づけられ、6

世紀前半期のものである。特に、この第3主体の主軸方向は、第1、第2、第5主体とはかなり振れており、時間的な経過がうかがえるところである。

第4主体は、埋土中から発見された須恵器蓋杯の杯身の形態は、第3主体の須恵器に比べや、古い型式に属するが、単独の破片で、しかも埋土中に浮いており、時期の決定はいささか危険が伴う。これを除去して考えると、これまでの埋葬方法とは違った箱式石棺ということや、墳丘の最も高いレベルに納められていることから考えて、新しい時期の埋葬と言えるものである。しかし、第3主体部との順序を決定づけるものはない。

以上のように、高猿6号墳は、5世紀後半から6世紀前半にかけて、5主体が埋葬されたもので、そのひとつひとつの埋葬順序は明らかでないが、副葬品の組み合わせには、かなり変化がみられる。第1主体から第5主体まで、量の多少はともかく、同じ組み合わせの主体部はない。こうした副葬品の変化には、第1主体のような前期的な副葬品から、その他の主体部のように、日常的な土器類を副葬するといった後期的なものへの、時期的な変遷はあるものの、埋葬時期のほぼ同じ段階の主体部でも、第2主体は土器類の他に玉と鉄器がみられるのに対し、第5主体は、土器類のみであり、また、第3主体は土器類が多く鉄器がみられるが、第4主体では鉄器がなく、代わって玉類をもつといったような組み合わせの違いがみられ、それぞれの被葬者の性格に関係し、副葬品が選ばれたのであろう。(吉村 利男)

[註]

- ①大西源一「喰代の古墳」『考古学雑誌』第2巻第9号 1912年
- ②三重県教育委員会『三重考古図録』 1954年
- ③三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報9』 1979年
- ④森川桜男ほか『辻堂古墳発掘調査報告書』大山田村教育委員会 1973年
- ⑤中森英夫「阿山郡大山田村横枕1・2号墳」『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財報告』三重県教育委員会 1980年
- ⑥奈良県立橿原考古学研究所編「新庄火野谷山古墳群」 1979年
- ⑦『東京国立博物館収蔵目録(考古)』 1956年

- ⑧大塚初重「古墳の変遷」『日本の考古学』河出書房 1966年
- ⑨三重県教育委員会「名阪国道予定敷地内遺跡発掘調査概報」 1964年
- ⑩松尾昌彦「前期古墳における墳頂部多葬の一考察」『古墳文化の新視角』古墳文化研究会編 雄山閣 1983年
- ⑪大阪府教育委員会『陶邑1』 1976年  
中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房 1981年
- ⑫平安学園『陶邑古窯址群1』 1966年

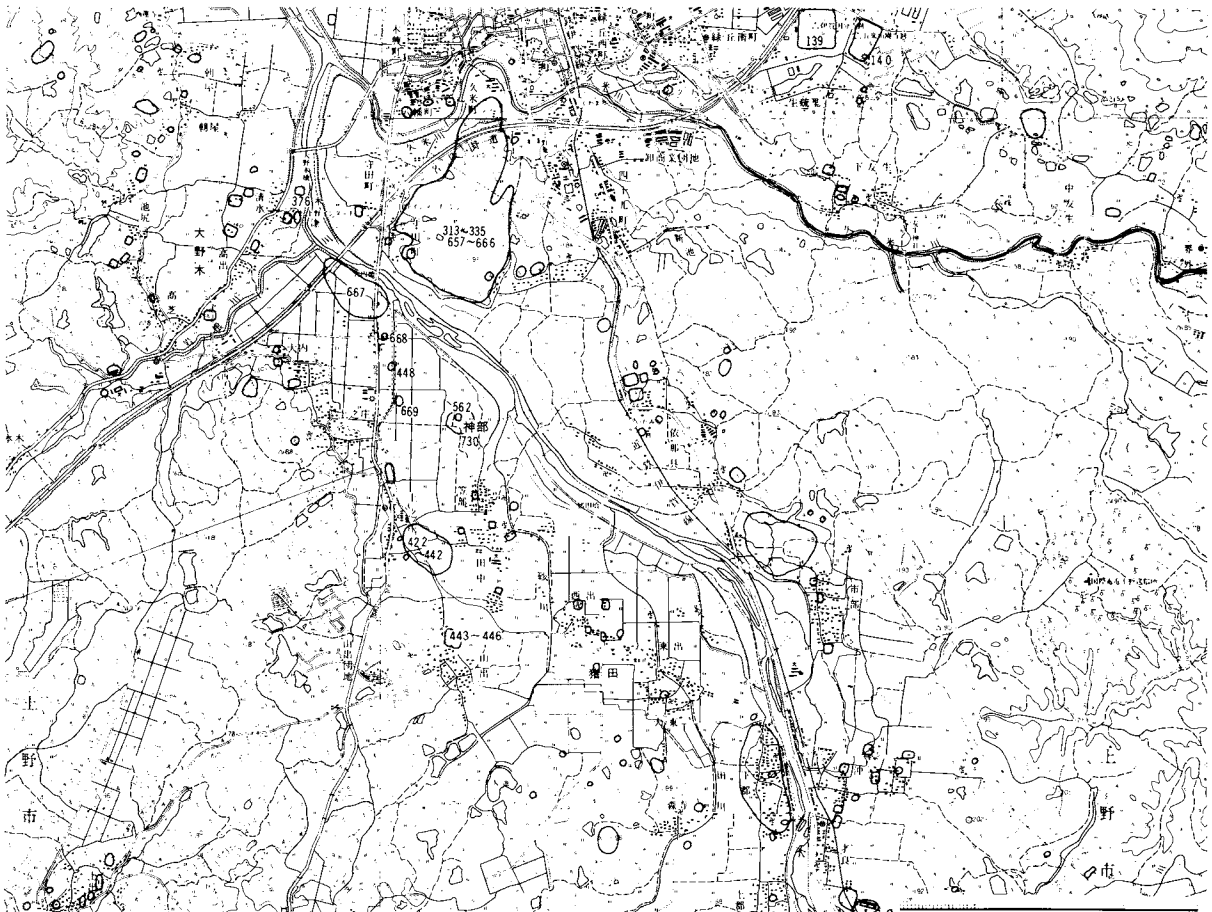
## XIII 上野市笠部 神部遺跡

### 1. 位置と歴史的環境

第3紀層及び第4紀層からなる四周の山地に囲まれた伊賀盆地は、第4紀中期（50万年～30万年前）に古琵琶湖から陸化し、上野・山田・名張などの小盆地と、柘植川・服部川・木津川流域の小平野とからなる。上野盆地は、最大にして各河川が合流する低い地を占める。

上野盆地における古代の遺跡は、河川流域や盆地周辺部に多くみられる。まず先土器時代には、盆地東部の丘陵地から有舌尖頭器を出土した岡山遺跡が知られている。縄文時代には、前期の爪形文などを出土した田中遺跡(143) 後期の土器片などを出土した清水北遺跡(376)をはじめ、木津川流域でいくつかの縄文土器の出土が確認されている。

弥生時代では、前期の出土例はないが、受口状口縁と櫛描文を特徴とする中期前半の土器を出土した三田遺跡や、これに続く中期後半の西高倉の遺跡などが盆地北縁部に分布しているのが認められる。後期の遺跡は、その数も増してくる。ことに、木津川の左岸地域の氾濫原や段丘上に顕著である。唐古第V様式の影響を強く受けた土器群を出土する田中遺跡・才良遺跡(417)や、山ノ川遺跡(669)・北堀池遺跡(667)などが知られている。田中遺跡と北堀池遺跡は、ともに木津川左岸の氾濫原上の微高地に占地する遺跡であり、両者は約2kmを隔てている。そして、この間には、山ノ川遺跡・地蔵出口遺跡(448)・出口遺跡(668)が分布しており、ともに弥生時代後期から



第13-1 図 遺跡位置図 (1 : 50000 国土地理院 上野・島ヶ原・月ヶ瀬・伊勢路)

古墳時代を一つの中心とする複合遺跡である。今回報告する神部遺跡もこうした遺跡の一つである。

古墳時代に至れば、伊賀最古4世紀末と推定される荒木車塚古墳、5世紀初頭と推定される御墓山古墳などの王者にふさわしい墳墓も盆地北東部を中心に造営されている。木津川流域の丘陵地でも、5世紀から7世紀に造営された久米山古墳群(313~335他)や長野古墳群(422~442)などいくつかの小規模な古墳群が分布している。

古墳の集中する地域は、開発も古く条里地割が広く認められる。旧伊賀郡の条里地割は、木津川両岸で「里」地内から「木興」地内に広がり、木津川の流路に応じて異なった方向を示している。この地域は、大内字中丁田の地割のように典型的な長地型が認められる地域でもある。神部遺跡西方の微高地上にも、条里地割が認められていたが、最近の圃場整備事業により消滅していった。

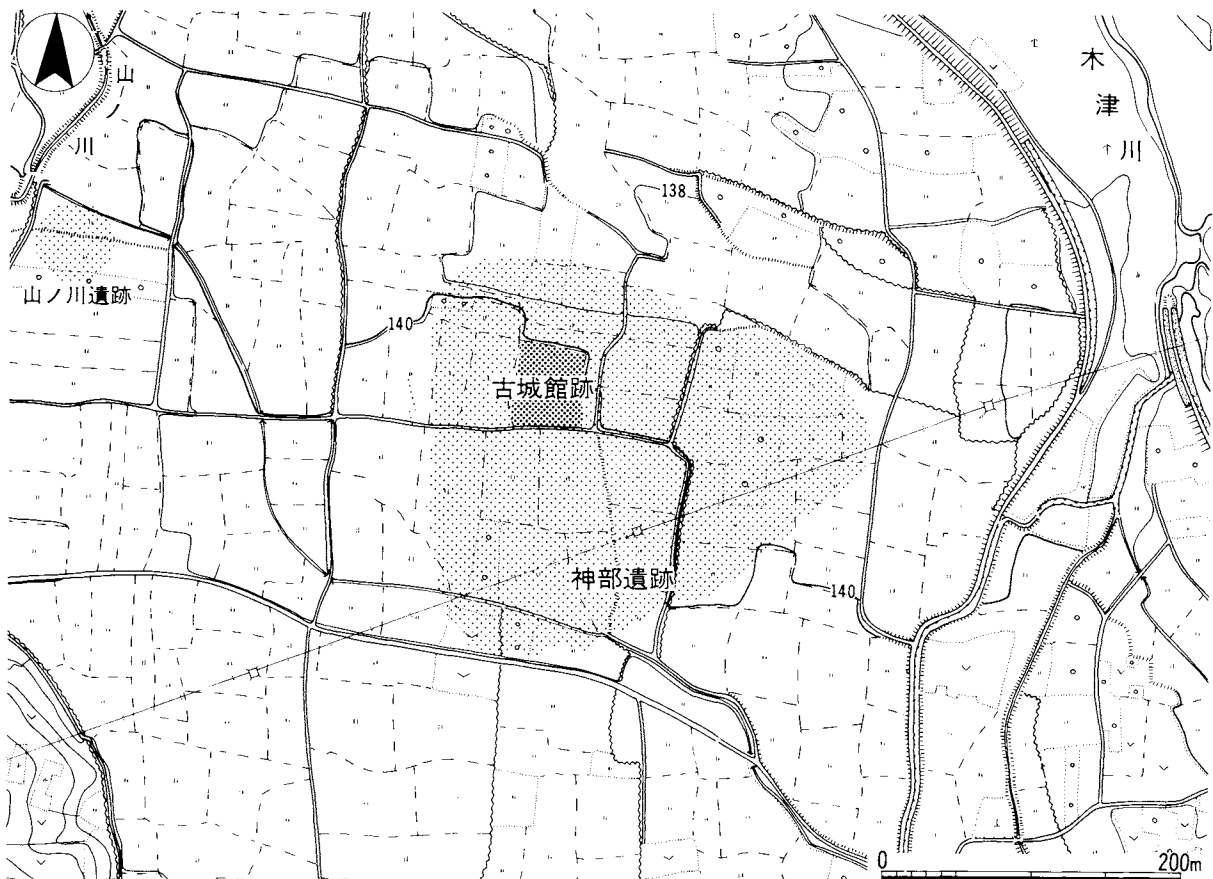
律令制時代には、上野盆地在伊賀国の中心となり、盆地北部の印代付近に国庁が置かれ、国府より南約3kmに方二町の国分寺(139)と尼寺と考えられる

長楽山廃寺(140)が隣接して建立される。この時代の遺跡は、従来あまり調査されていなかったが、近年、大山田村西沖遺跡・三谷遺跡や上野市蓮池代遺跡などの山間地の調査が行なわれ、次第に明らかにならつつある。

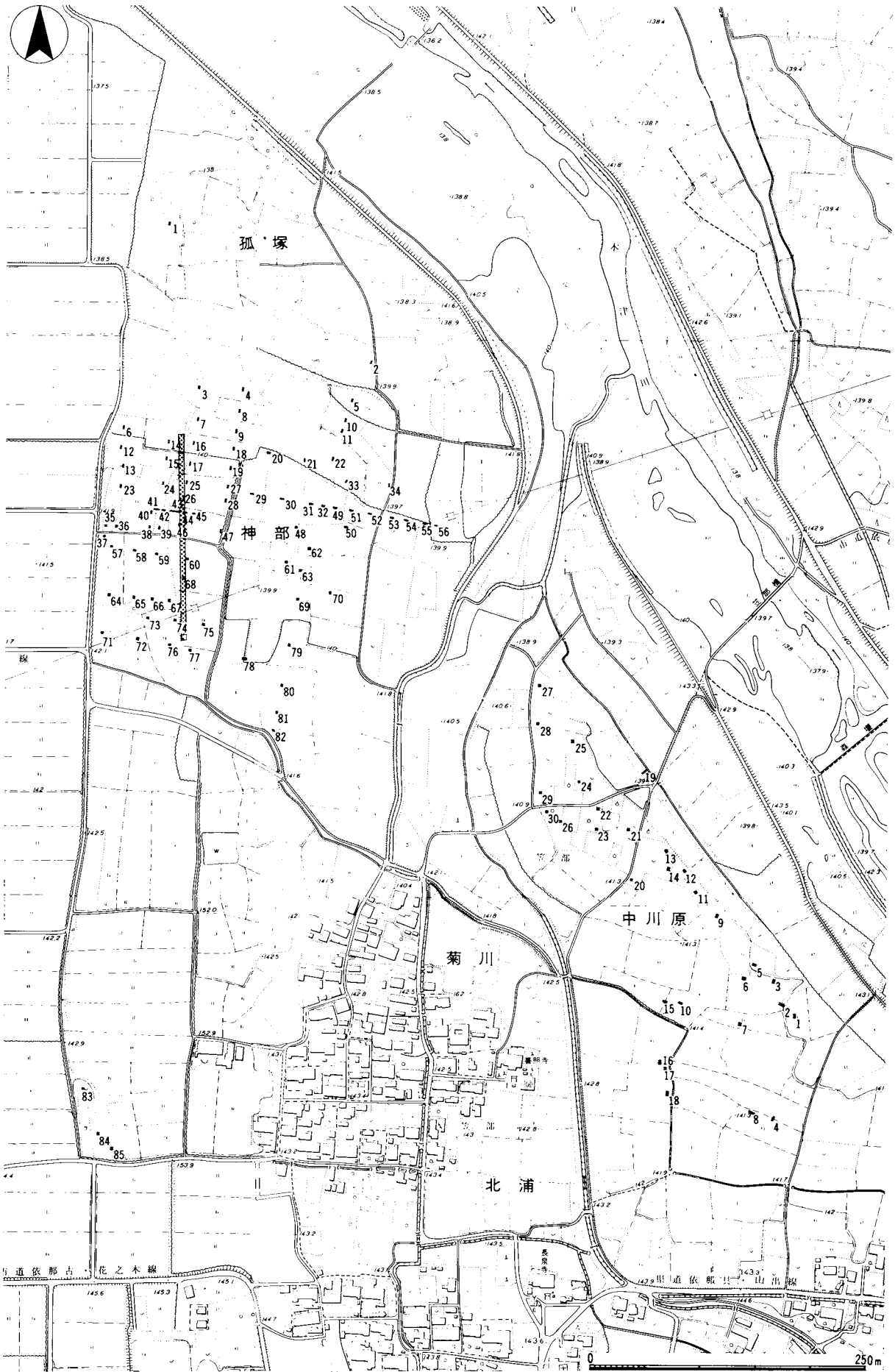
神部遺跡(730)は、上野盆地を北流する木津川西岸の標高140m前後の氾濫原上に営まれた古代・中世の複合遺跡である。

神部遺跡は、木津川とその支流山ノ川にはさまれた地域に位置し、木津川の河床にあたる北と東へわずかず傾斜している。木津川の現存の流路から西へ約300mほど隔てて、木津川の流路に沿うように微高地が存在し、田中遺跡・神部遺跡・山ノ川遺跡・北掘池遺跡などの遺跡が分布する。この微高地より一段低い地域は、冠水することもあり、木津川旧河道の一部あるいは後背湿地を形成していたものであろう。今回の調査は、この微高地直下に予定されていた水路部分のみの緊急調査であった。

なお、神部遺跡は、行政上上野市笠部字神部に属す。遺跡標示略記号は、3JJBとした。



第13-2図 遺跡地形図(1:5000)



第13-3図 発掘調査区域図 ■ 第一次調査 □ 第二次調査

## 2. 遺 構

神部遺跡は、第一次調査の結果によれば東西 200 m × 南北 250 m の広範囲を占める弥生時代後期・古墳時代・奈良平安時代の複合した遺跡であることが確認された。また、遺跡の中心は、遺跡西部の一段高い微高地にあることが想定されるが、既に圃場整備事業が完了しており、その西限については正確には判断できない。

今回の調査は、この微高地直下の水路部分にあたる幅 4 m × 長さ 180 m の 320 m<sup>2</sup> を対象として実施した。調査は、北から 20 m 毎に C～K の中地区を設定し、更にこの中地区を北から 4 m 毎に 1～5 の小地区を設定して実施した。

### 1. 基本層序

調査地区は、南北に細長い幅 4 m のトレンチであり、北へ緩やかに傾斜しており、その比高差は 1.2 m である。南端の K 地区から D 地区までは、同一の

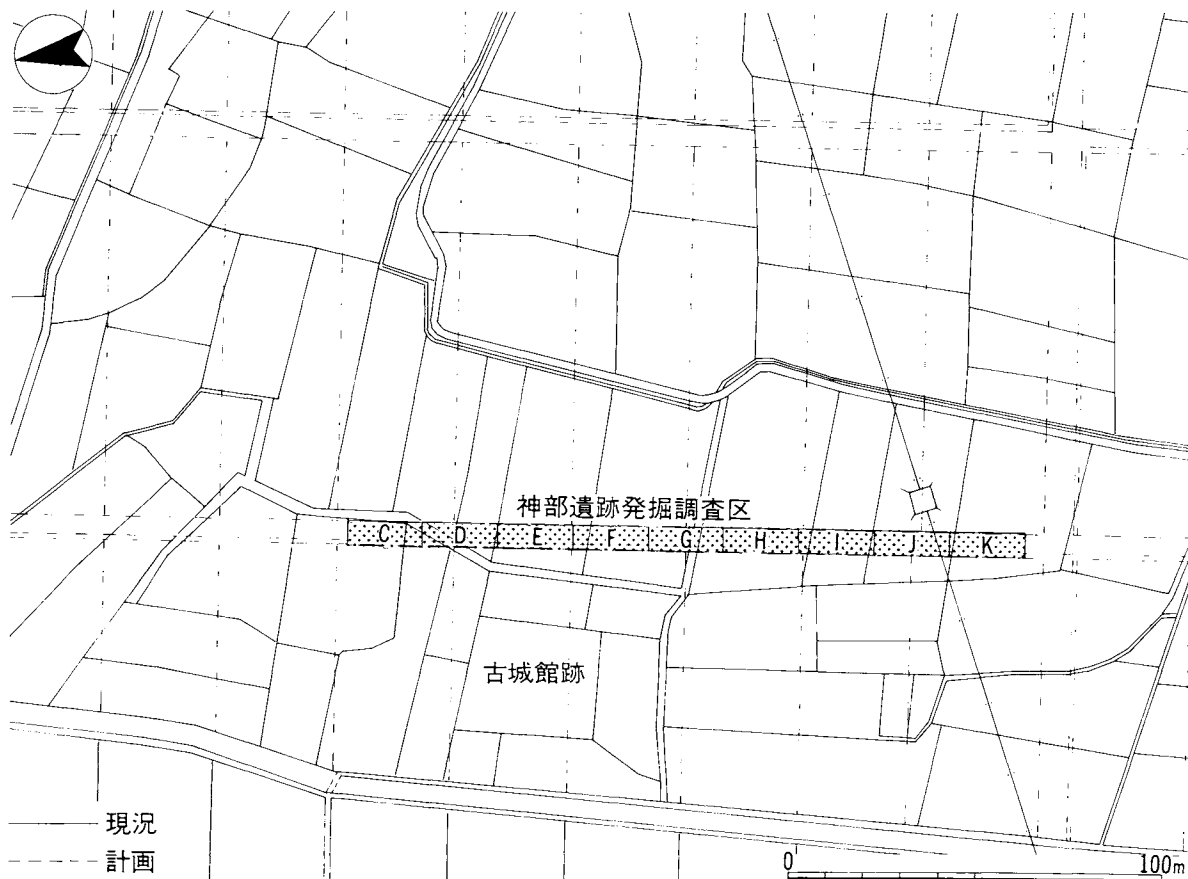
層序をなす。

I 層	黒灰色砂質土	耕作土層
II 層	灰褐色粘質土	旧耕作土層
III 層	暗褐色粘質土	奈良時代以降遺物包含層
IV 層	黒灰色粘質土	古墳時代以降遺物包含層
V 層	黒褐色粘質土	植物遺体包含層
VI 層	青灰色砂質土	地山層
VII 層	灰色砂礫	地山層

I 層から IV 層までは、各地区に共通して認められる土層である。II 層は、平均 20 cm の堆積層であり、黄褐色砂質土が薄く 1～2 層間層として観察され、現在の耕作前に 1～2 層の耕作土が認められる。

III 層は、平均 45 cm の比較的厚い堆積土として観察される。奈良・平安時代の須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・青磁・白磁、及び鎌倉時代の土師器・瓦器を出土する。

IV 層は、現表土下約 90 cm の深さで 40～90 cm の厚さ



第13-4 図 第二次調査区域図 (1:2000)

で堆積しており、ことにF～G地区でこの堆積は厚い。古墳時代前期を中心とする土師器及び若干の木製品を各地区で出土する。後世の遺物を含まない単純層である。K地区の南部では、微高地の直下にあたる部分で土器溜を検出している。

V層は、F～J地区のみでIV層下に観察され、平均70cmの厚い堆積層である。V層の上部には、数cmの厚さで青灰色砂土が堆積しており、河川の氾濫により堆積したものと推定される。このV層からは、古墳時代前期の土師器も出土するが、量は少ない。一部泥炭化した植物遺体を含む。しかし、木製品と判断できるものは、D～K地区では出土していない。

VI層・VII層は、地山と判断される砂礫層であり、現地地表下100～210cmに観察される。調査区の両端近くで浅く、中央部で深いこと、及びD・K区でV層の堆積が認められないことから調査区中央部は、凹地となっていたことが窺われる。また、この地山層は、砂礫であることから、微高地の下は旧く木津川の河道域をなしていたものと考えられる。

C地区の層序も基本的には同一であるが、その堆積状況は若干異なる。すなわち、C地区南のD地区は、比較的浅くJ地区を最深部とする凹地が浅くなってき、再びC地区南端で検出した段で一段低くなる。段下を埋積するのは、厚さ50cmほどの暗褐色粘

質土(III層)であり、D～K地区のIII層と対比できるが、土質が多少異なり、奈良時代以降の遺物も少ない。このIII層直下には、厚さ10～50cmの青灰色砂土と黒灰色粘質土の互相層(IV層)が堆積する。木製品の大半は、この層の下部から出土している。ある時期、数回の氾濫が続いたことを示唆している。V層は、杭列及び木製品の一部を検出した層であり、砂礫で構成されるVI層の地山面が北へ傾斜するのに応じて厚く堆積している。調査区の北端では、湧水と壁の崩壊のため、最下部を検出し得なかったが、厚さ2.5m(現地地表下3.5m)ほどに達するであろう。

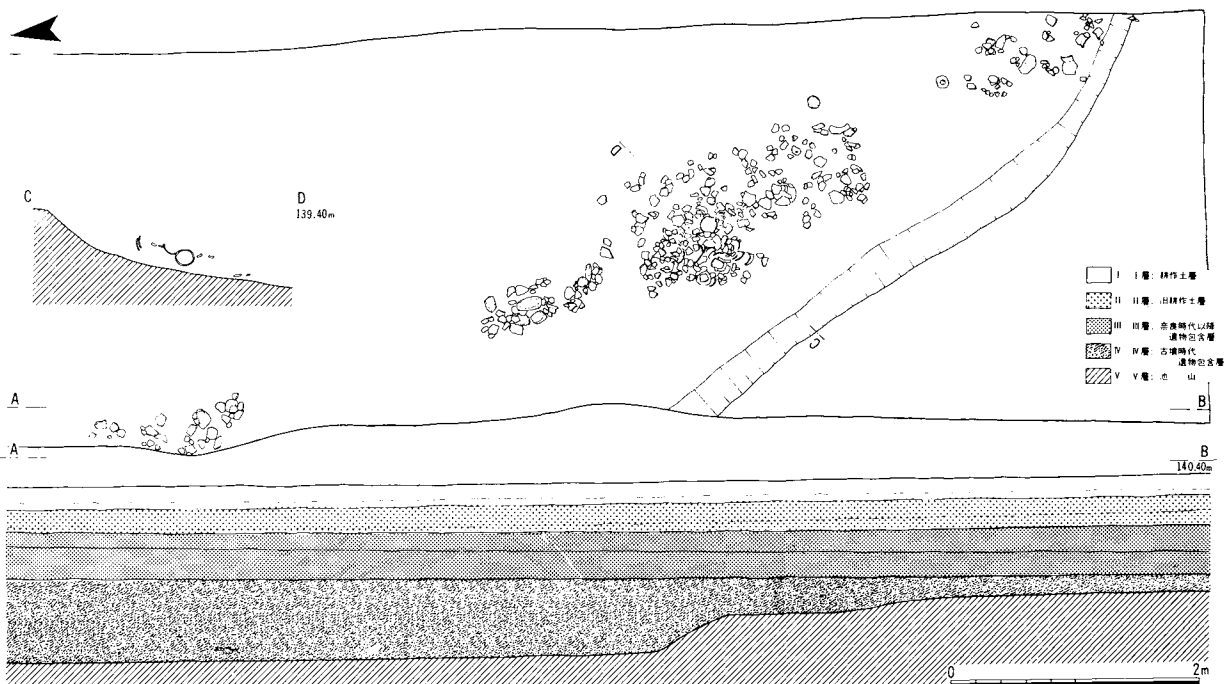
## 2. 古墳時代前期の遺構

### (1) K地区

#### 土器溜

K地区の南部で、古墳時代前期の土師器が集中して検出された。調査区を斜めに横断するように、長さ約8m、幅約1.2mの帯状をなしている。この土器溜の直ぐ南西側には、微高地を形成する黄褐色～乳灰色のシルト層が平行して検出され、土器溜が微高地から放棄されたものであることを示唆している。土器の堆積は、厚さ30cmほどである。

出土遺物には、土師器の杯・高杯・器台・壺・甕の各器種があり、管玉1点も検出された。出土遺物



第13-5 図K地区土器溜遺物出土状況 (1:50)

の時期は、庄内式に併行する時期を中心とする。

## (2) C地区

C地区南端で東西に続く、高さ 1.5m の段を検出し、この段の下にあたるC地区の北部で堰の一部と考えられる杭列及び大小多数の木製品を検出した。

### 杭列

C地区北端では、黒青灰色砂土（Ⅳ層）に覆われた黒灰色粘質土（Ⅴ層）上部の一部に幅 1.5m・厚さ 0.5m で砂が帯状に堆積した部分がある。杭列はこの帯状の砂土に対して、直交するように長さ 3.5m ほど検出している。杭は、東に向かって打ちこまれている。杭は、長さ 1.5m 前後の丸杭を主体としており、数本が接近して深く打ちこまれている。また 93・110 のような矢板も存在するが、杭と直交する材は見あたらなかった。この杭列の背後にあたる部分は、Ⅴ層と同じ土層となり、木製品が出土している。

### 木製品の出土状況

この杭列及び帯状に堆積した砂土と段の間には、約60点の木製品が出土するが明確な遺構とは把握しきれなかった。あるいは、段と砂土の間を流れる溝状の遺構が存在するのかもしれない。ただ、土層断面観察の結果では判断できなかった。ここでは、一応漂着したものと考えておきたい。

木製品の中には、槽(123)のように用途の明確なものもあるが、大半は比較的長い材や板が多い。

これらの杭列及び木製品の時期は、(1)段直下のⅤ層下部から弥生時代後期～古墳時代前期の土器が出土していること、(2)木製品の多くがⅣ層下部近くで出土していることから、弥生時代後期を遡り得ない。また、木製品と伴出した土師器碗が7世紀を降らないことから、下限を古墳時代後期におくことができる。

## 3. 遺物

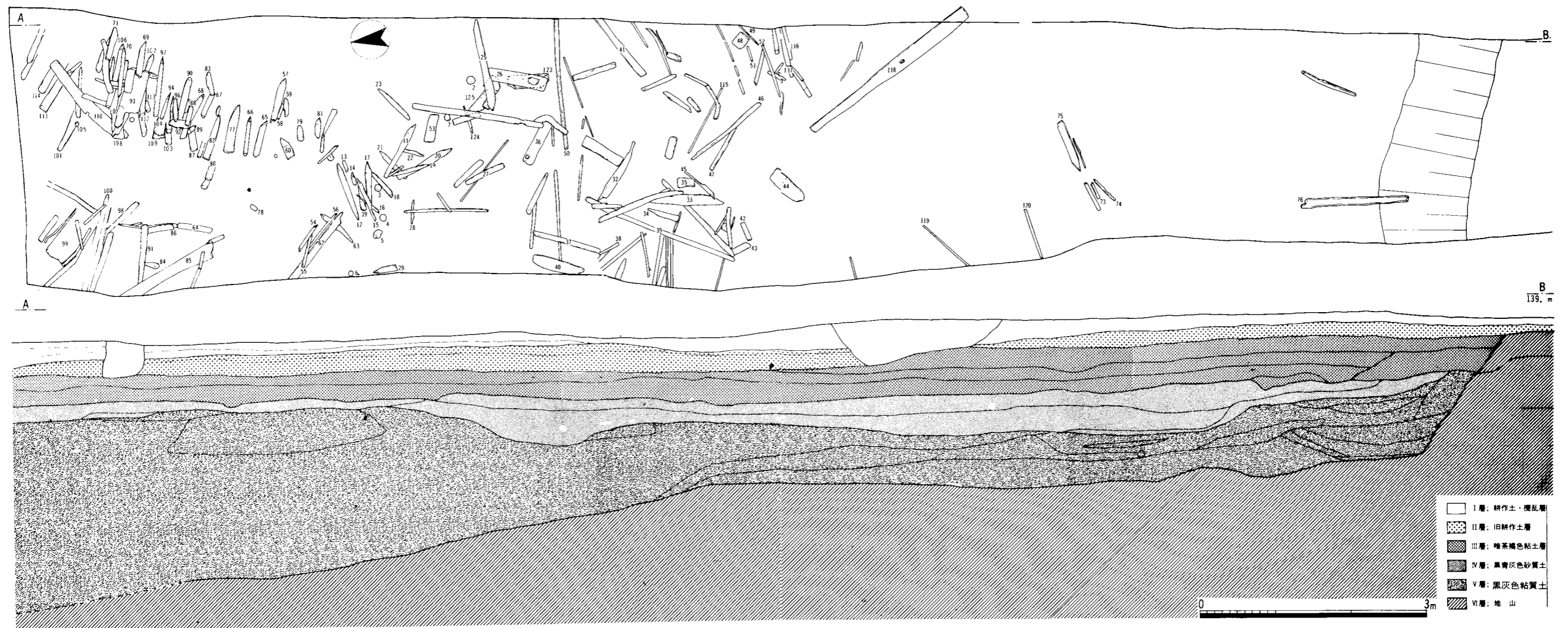
### 1. C地区

C地区では、木製品の出土が多いが、土器の出土は比較的少ない。土器は、C地区南端の段下のⅤ層で出土した弥生時代後期～古墳時代前期のものと、木製品と伴出したⅣ層のものに大別される。量的には、後者の数は少ない。また、その下層にⅤ層が広がっているが、この付近のⅤ層から出土した土器は極めて少ない。

#### (1) Ⅴ層の土器

**広口壺 (1～3)** 1は、口径16.2cm・器高26.5cmで、最大径を胴部中央部よりやや下方にもち24.5cmである。口縁部は、大きく外反し、端部で上下に

第二次調査は、幅 4m・長さ 180m の水路部分で実施するため、20m 毎に 4m×4m のグリッドを設定して土層の観察を中心に行ないながら実施した。その結果、前述したようにC地区・K地区で遺構を確認した。従って、C地区・K地区では、表土層から人力により、層序に従い調査を進めた。K地区では、奈良時代以降の遺物包含層Ⅲ層で若干の混入物を含むが古墳時代前期の包含層（Ⅲ層）を確認した。C地区でも同様な方法を用いて行なったが、奈良時代以降の遺物は少なく、第Ⅳ層で杭列及び木製品を確認し、その下層（第Ⅳ層）で弥生時代後期～古墳時代前期の土器出土をみた。以下、C地区、K地区、試掘坑及び包含層で出土した遺物を概観したい。



第13-6図 C地区遺物出土状況 (1:60)



肥厚し垂直な面をつくる。頸部には、凸帯をつくる。体部は、大きく内弯して下膨れの球形をなす。底部は、底径5cmの平底となり、周囲は高台状となる。口縁部の端面には、羽状刺突文をめぐらし、頸部の凸帯の二面にも刺突文を施す。口縁部外面は7本/cmのハケ調整を行い、内面をヨコナデする。体部外面には、9本/cmのハケ目を右上りに施し、体部上半部はその上をナデたのかハケ目ののこりは悪い。淡茶色を呈し、細砂・雲母を含む。

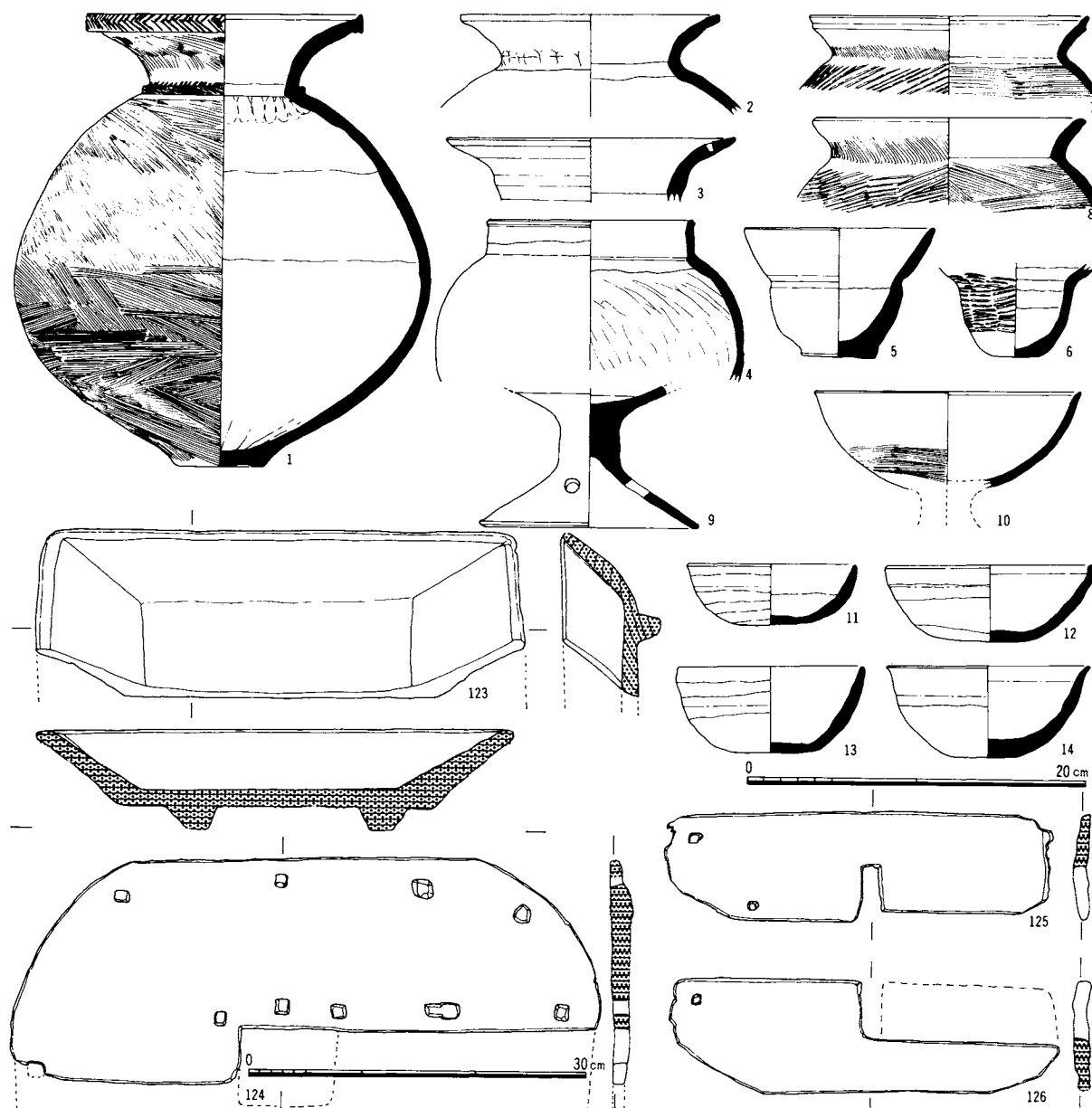
2は、口径15.4cm。口縁部は、「く」字形を呈し大きく外反し、端部は角張り面をつくる。口縁部をヨコナデし、頸部にはオサエの指頭痕がのこる。茶～暗茶色を呈し、砂をかなり含む。

3は、口径17.0cm。口縁部は、大きく外反し端部は、やや先ぼそりして丸い。口縁部約 $\frac{1}{2}$ の破片であるが、径5mmの貫通しない穴が2ヶ所認められる。

**直口壺 (4)** 口径12.0cm。口縁部は短く、直立して引き出され、端部でわずかに肥厚して外反する。体部は、丸く球形をなす。体上半部をナデ調整し、下半部にはハケ口がわずかにのこる。内面は、ナデ上げた指頭痕がのこる。砂・雲母を含む。

**小形壺 (5～6)** 5は、口径11.4cm・器高7.3～7.8cm。体部は、わずかに内弯し、口縁部は直線的に伸びる。頸部を強くヨコナデし、凹ませている。口縁部をヨコナデし、体部をナデ仕上げする。

6は、口頸部を欠く。体部はわずかに内弯し、底



第13-7図 C地区出土遺物 (1~14; 1:4、123~126; 1:6)

部は平底となる。体部には、平行タタキ目を施す。砂をかなり含み、雲母含む。

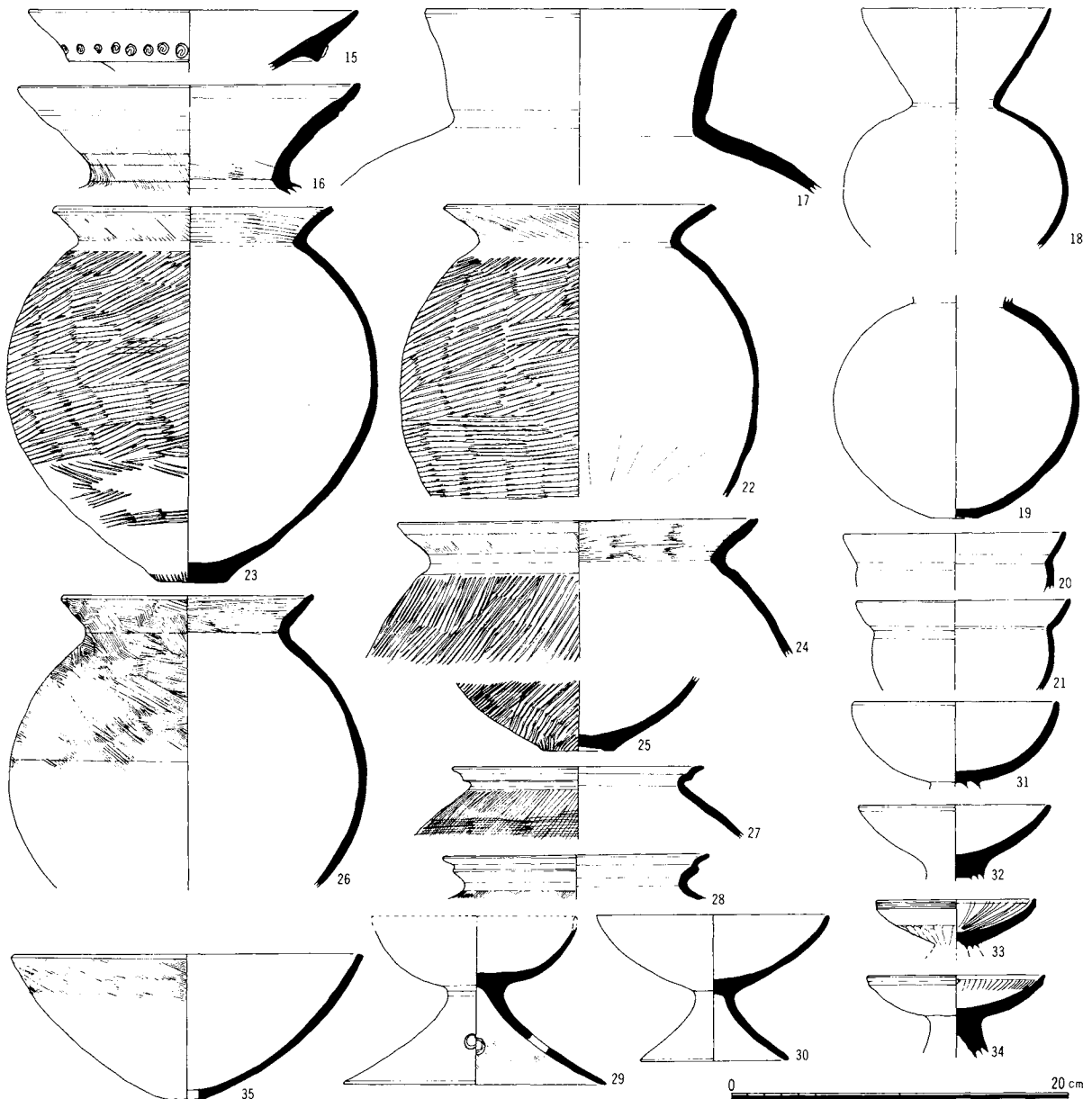
**甕 (7~8)** 口径16cm前後で、「く」字形に外反する口縁部をヨコナデし、外面には6本/cmのハケ目を施す。体部外面には、4本/cmの左下りのタタキを施し、口縁部内面には8本/cmのハケを横方向に施す。細砂・雲母含む。8は、ほぼ均一な厚さで端部は丸い。口縁部をヨコナデし、外面には7本/cmのハケ目を施す。体部外面には、2.5本/cmの左下りのタタキを施し、口縁部内面には7本/cmのハケ目を斜方向に施す。砂をわずかに含む。

**高杯 (9~10)** 9は、杯部を欠く。太めの脚柱部は中実となり、裾は大きく開き、端部はわずかに

外反する。裾上部で円孔を三方に穿つ。杯部および端部はヨコナデする。脚柱部はヘラケズリの後ヘラミガキし、裾上部はヘラケズリの後ヨコナデする。10は、脚部を欠く。口径15.6cm。杯部は丸味をもち、大きく内湾する。端部は、内傾する面をもつ。口縁部外面をヨコナデし、体部外面には横方向のハケを施す。杯部内面は、ナデ上げる。淡茶色を呈し、細砂・雲母を含む。

(2) IV層出土の土器

**碗 (11~14)** 大きく内湾する口縁部と底部からなる碗である。端部が直ぐ上方へのびるもの(11・13)、端部が内湾するもの(12)、端部が外反するもの(14)、に細分される。粘土紐をマキアゲ成形し、内



第13-8図 K地区出土遺物(1:4)

面および口縁部をヨコナデするが、外面にはマキ上げ痕がのこる。11は、口径9.7cm・器高3.6cm。12は、口径12.3cm・器高4.5cm。13は、口径10.0cm・器高5cm。14は、口径12.0cm・器高5.3cm。13は黒色を呈するが、他はすべて茶色である。

### (3) IV層出土の木製品

**槽 (123)** 半載の状態で出土。全長46.6cm・現存幅15.9cm・高さ9.8cm。脚部分を芯材方向に置き、柾目取りする。各部分は鋭く切断され、丁寧にケズリ仕上げられる。材質は、針葉樹材と思われる。

**加工板材 (124)** 半載の状態で出土。全長57.7cm・現存幅21.3cm・厚さ1.8～2.2cm。両端部は大きく弯曲してケズラれる。中央部に一辺8cm方形の孔が認められ、鼠返しかとも思われる。また、周辺部に約1.6cm方形の小孔が11孔ほど認められる。柾目取り。

**十字組板 (125・126)** 全長38.2cm・幅10.8cm・厚さ1.7cmの板材で中央部に長さ4cm・幅2cmの納を切りこみ組み十字状に組み合わされて出土。125には小孔が2孔、126には1孔の小孔が認められる。柾目取り。

## 2. K地区

K地区南部の第IV層で検出された土器溜から、古墳時代前期の土師器が一括出土した。器種には、壺・甕・高杯・小形器台・鉢を確認され各器種は細分が可能である。以下、主な土器について概要を記していきたい。

**二重口縁壺 (15)** 口径19.5cmで、口縁部は大きく外開し端面は丸い。口縁部は接合され、外面に面をつくり円形浮文を貼りつける。口縁部は、ヨコナデされる。細砂・雲母を含む。

**広口壺A類 (16)** 口径20.0cm口縁部は、大きく外開し端部でわずかに直立気味となる。口縁部上半部をヨコナデし、下半部の外面を細かいハケ目で、内面を粗いハケ目で調整する。茶～暗茶色を呈し、細砂・雲母を含む。

**広口壺B類 (18・19)** 口径11.0cm。口縁部は、直ぐ大きく開き、端部がわずかに内弯する。体部は、球形をなし、底部は小さな平底となる。18・19とも外面を丁寧にヘラミガキする。口縁部内面をヨコナ

デし、体部内面をナデで仕上げる。赤褐色を呈し、胎土に砂を含まない。

**小型丸底壺 (20～21)** 口径13cm前後。口縁部は短くわずかに内弯し、体部は直立気味となり底部がすぼまる。口縁部をヨコナデし、体部をヨコナデする。21の内面は横方向にヘラミガキする。

**直口壺 (17)** 口径18.4cmで、わずかに外傾する。端部は丸い。頸部を強くオサエてヨコナデする。体部外面はヘラケズリした後ナデ調整する。口縁部は、内外面ともヨコナデする。茶褐色を呈し、細砂・雲母を含む。

**甕A類 (22～25)** 「く」字形の口縁部、球形の体部と平底の底部からなり、体部外面に左下りのタタキを施すものをA類とした。調整方向に差異が見られ細分が可能である。

23は、口径16.0cm・器高22.2cm・底径4.0cm。口縁部外面を斜方向の細かいハケ目7本/cm、内面を横方向の粗いハケ目5本/cmを施し、体部外面には上半部で左下り、下半部でやや水平に近いタタキを二列ほど施す。タタキ原体は、4本/cmとやや細い。体部下半部には、部分的にタタキ目をのこすが、連続して認められない。体部内面には、ヘラケズリ痕をのこさずナデ仕上げする。暗茶色を呈し、細砂・雲母を含む。外面に煤が付着する。24は口径22cmで同手法による。

22は、口径15.8cm。口縁端面は、外上方へ面をもつが中央部がわずかに凹む。口縁部外面には斜方向の粗いハケ5本/cmを施し、内面はヨコナデする。体部外面は、上半部で左下りのタタキ、下半部でほぼ水平なタタキを施す。タタキ原体は、3本/cmと太い。頸部をヨコナデし、ハケ目・タタキ目が一部消される。体部内面は、ヨコナデ調整されるがヘラケズリ痕がのこる。黒茶色を呈し、細砂・雲母を含む。

25は、底径4.0cmの甕底部である。底部には、低い高台状のものがめぐり、23と異なる。底部端部いっぱいまで3.5本/cmのタタキが施される。暗茶色を呈し、細砂・雲母を含む。

**甕B類 (26)** 口径15cm。「く」字状に外反する口縁部と球形の体部からなる。口縁部外面は、5本/cmのハケを斜方向に施し、体部外面上半分に施された

右下りの細いハケ目9本/cmが一部に及ぶ。体部下半部をヘラケズリする。体部内面は、ヨコナデされる。暗茶色を呈し、細砂・雲母を含む。

**甕C類** (27~28) 「S」字状口縁を有する甕である。27は、口径13.0cm。口縁部の屈曲部は鋭く稜をなし、口縁部の立ちあがり外反気味となり、端面は丸い。体部には、斜方向のハケ目の上に横方向のハケを施す。暗茶色を呈し、細砂・雲母を含む。28は、口径15.8cm。口縁部の屈曲は比較的ゆるやかで、口縁部は薄く外反して端部は丸い。

**高杯** (29~32) 29は、口縁端部を欠く、推定口径12cm・推定器高10cm。杯部は、丸味をもち内弯して開く。脚部は大きく拡がり、端部は尖り気味となる。脚中央部に円孔を四方に穿つ。杯部および脚部外面を緻密にヘラミガキする。脚部内面は、斜方向のハケを施した後ヨコナデする。暗茶褐色を呈し、胎土は砂を含まず精良。30は口径15.8cm・器高8.6cm・底径8.7cm。杯部は大きく内弯し端部は丸い。脚の広がり、29に比べ小さく円孔はない。端部は、やや角張り外側に稜線をもつ。杯部内外面及び脚外面はヘラミガキし、脚内面をヨコナデする。31は、口径12.0cmで、調整手法は30と同様である。32は、口径10.7cmで内弯して開き、端部は少し角張る。杯部内外面をヨコナデする。暗茶色を呈し、細砂を含む。

**小形器台** (33~34) 浅い皿状の台部に「八」字状に開く脚部がつく。精製土器(33)と粗製土器(34)の二種がある。33は、口径9.4cmで台部はゆるく内弯し、端部は上へつまみ上げられる。口縁端部はヨコナデされ、台部内面には放射状暗文がみられ、外面は上半部をヨコナデし下半部をヘラケズリする。台部中央部は、器面が荒れ使用痕をのこす。34は、穿孔径10.5cmで台部は、33同様端部でつまみ上げるが内面に稜をもたない。内面の放射状暗文は、中央部の使用痕で消される。

**鉢** (35) 口径20.3cm。わずかに内弯して大きく開き、口縁端部は外上方を向く面をもつ。底部は径1.9cmと小さく中央に径1.1cmの穿孔をもつ。口縁部外面には、右下りのハケ目を2段に施す。

### 3. 試堀坑・包含層

遺跡の範囲確認のため実施した第一次調査では、弥生時代から鎌倉時代にかけての各種の土器が出土した。また、第二次調査区では、耕作土下のⅢ層およびⅣ層で奈良時代を中心として土師器・須恵器・瓦器・青磁・白磁・縁釉陶器・灰釉陶器・山茶碗等が出土した。

#### 1. 弥生時代の土器

##### (1) 弥生土器

**広口壺** (36) 口径13.6cm。体部下半を欠く。口縁部はゆるやかに外反して開き、端部は丸味をもって外上方を向く。体部は丸味をもち、胴部中央部で最大径をもつものである。肩部には、櫛描横線および波状文を4条を単位としてめぐらす。また、体部上半部を右下りの粗いハケで調整し、下半部をナデ調整する。口縁部は、内外面ともヨコナデする。口縁部と体部の接合部には、指頭によりオサエ痕をのこし、それ以下をヨコナデする。胴部内面には、接合痕がのこり、接合痕以下は粗いハケを施した後ナデにより調整される。細砂・金雲母を含み、淡褐色を呈する。

**甕** (37) 口径13.2cm・器高15.4cm・底径4.5cm。口縁部は、短く大きく外反し、端部は丸い。体部は、卵形をなし、下半部ですぼまり、平底の底部をもつ。口縁部をヨコナデし、体部の器面はナデ上げられる。細砂・金雲母を含み、淡茶褐色を呈する。

**高杯** (38) 口径25.6cm・器高16.8cm・底径14.3cm。杯部は、内弯して開き、口縁部は屈折して外反する。口縁部と体部の境は、外面で稜を成し、口縁端部は肥厚し、斜上方を向く面をもつ。脚部は、円柱状をなし、下部で屈曲して大きく開く。脚端部は、肥厚し面をもつ。脚部内面には、3段にわたる指圧痕をのこし、脚下半部内面をヨコナデする。脚部外面および杯部内外面は、緻密なヘラミガキで調整する。細砂・金雲母をわずかに含むが胎土は精良で、褐色を呈する。

#### 2. 奈良時代の土器

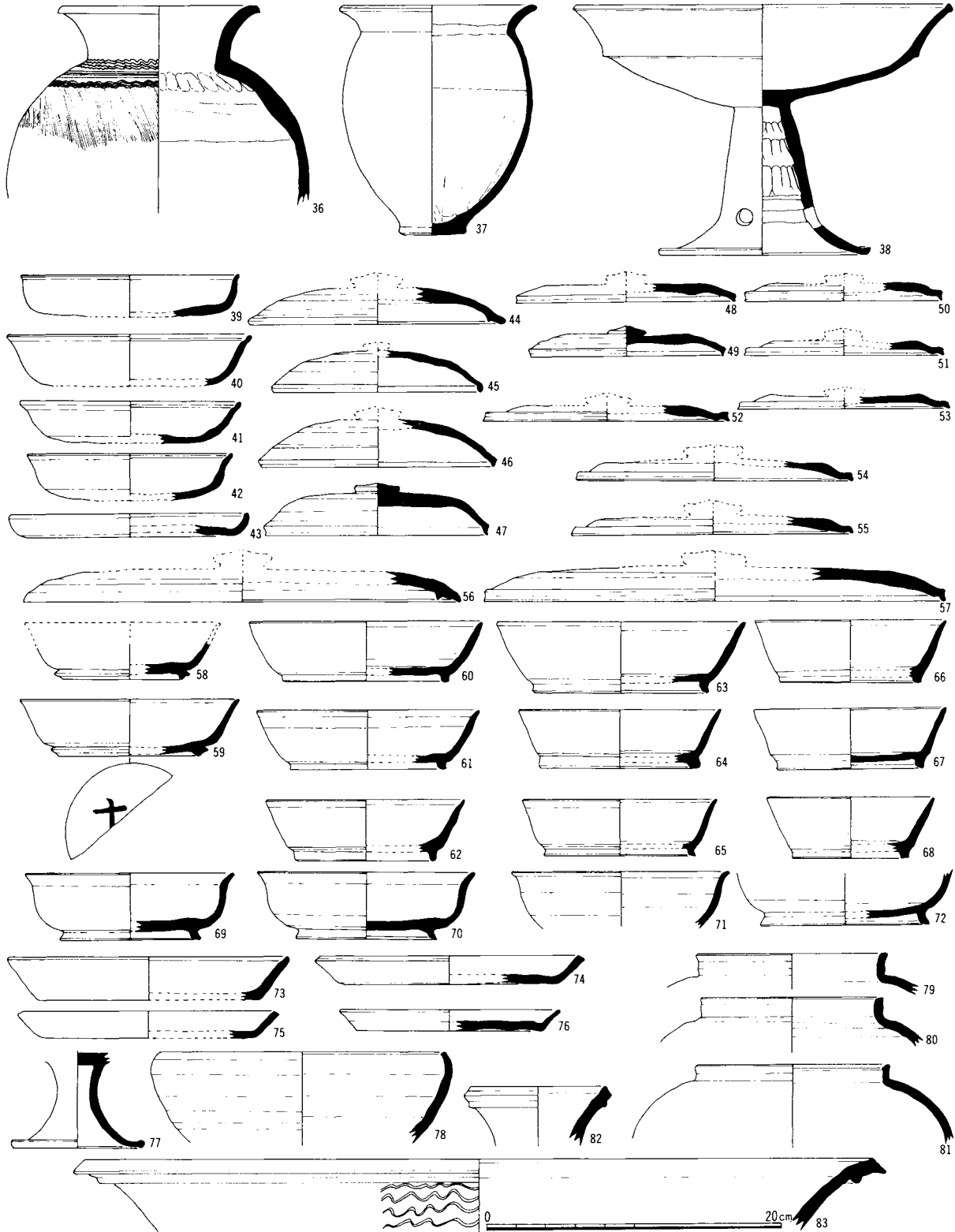
##### (1) 土師器

**杯** (39~42) 口径13.8~16.6cm・器高2.7~3.5cm。口縁部が内弯して大きく開くもの(40・41)と、

外傾度が小さく口縁部と底部の境が比較的明瞭なもの(39・42)がある。口縁端部は、内面に面をもち、段状に近くなるもの(40~42)もある。端部でわずかに肥厚し、外反する。口縁部内外面を広くヨコナデする。底部外面は、39で粗いヘラケズリが認められる他はオサエのみである。細砂・金雲母を含み、

淡褐色を呈する。39はG24出土。

皿(43) 口径16.2cm・器高1.6cm。口縁部は内弯し、端部は内側にまきこまれる。底部は、上げ底気味で平坦である。口縁部をヨコナデし、底部内面をナデ調整し、底部外面を同心円状にオサえる。細砂・金雲母を多少含み、茶褐色を呈する。



第13-9 図 試掘坑・包含層出土遺物(1:4)

## (2)須恵器

**蓋** (44~57) 口縁部の形態を中心にして3類に大別でき、内面にかえりを有するものをA類、口縁端部が面をもち下方に開くものをB類、口縁端部が屈折するものをC類とする。

**A類** (44・56) 口径に大小があり、44は口径17.6cmで天井部が笠状を成す。56は、推定口径29cmで天井部は偏平に近い。天井部の $\frac{2}{3}$ 以上をヘラケズリする。

**B類** (45~49・57) A類と同様に口径に大小がある。45~49は口径13.4~16.2cmで、天井部が笠状を成すために器高が高いB<sub>1</sub>類(45~47)と天井部が偏平なために器高が低いB<sub>2</sub>類(48~49)に細分できる。47は、口径15.2cm・器高3.5cm 49は、口径13.4cm・器高2.0cm。

B<sub>1</sub>類の中でも、多少の形態差が認められる。45は天井部が丸味をもち、口縁端部は肥厚して丸く内側に屈曲する。46は、丸い天井部と外側に面をもつ口縁部から成るが、口縁部端は内側に明瞭な稜線をもたない。47は、天井部は平担で口縁部が大きく屈曲する。ともに天井部の $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{2}{3}$ をヘラケズリする。なお、47のつまみ上部には、判読できないが墨書が認められる。

B<sub>2</sub>類は、天井部が偏平となり、口縁端部を下方につまみ出し、外側に面をもつ。天井部は、ともにロクロナデで仕上げ、ヘラケズリ痕をのこさない。

57は、形態的にはB<sub>2</sub>類と同じであるが、口径が大きく31cm前後と推定される。天井部をヘラケズリする。

**C類** (50~55) 天井部は偏平で、口縁端部が「Z」状に引き出される。口径が14cm前後のもの(50・51・53)と17~19cmのもの(52・54・55)に分かれる。55以外は、天井部をロクロナデにより仕上げる。

**杯** (58~72) 器形の特徴から4類に区分される。

**A類** (60~63) 口縁部はわずかに内弯して開き、高台は断面方形で底部端よりわずかに内側につき直立する。口縁端部が丸くまとめられるもの(60)と、端部でわずかに外反し内傾する面をもつもの(61~63)がある。口径13.4~16.8cm・器高4.0~4.8cm・底径9.6~11.6cm。口縁部及び底部内面をロクロナデにより仕上げる。

**B類** (64~68) 口径11.4~13.2cm・器高3.8~4.2cm・底径7.9~10.3cmとA類に比べ小型である。67で、口径13.0cm・器高4.1cm・底径9.8cm。口縁部は概して直線的に開き、端部は尖り気味に丸くまとめられる。端部でわずかに外反気味となり、内傾する面をもつ例(65・66)もある。高台は、断面方形で短く、底部端につけられ直立するもの(66~68)とわずかに外方へふんばるもの(65)がある。口縁部及び底部内面をロクロナデにより仕上げる。

**C類** (58~59) 59は、口径14.8cm・器高3.8cm・底径9.4cm。口縁部は、外方に開き端部でわずかに外反し、高台は断面方形のものが底部端より内側につき、高台断面が外側を向く。器面全体を丁寧にロクロナデする。また、59の底部外面には墨書が認められる。

**D類** (69~72) 口径14.2~14.8cm・器高4.5cm・底径9.6cmと規格性が強い。口縁部は、直立気味に内弯して開き、端部で大きく外反し、高台は断面方形で長く、底部端より内側につきわずかに外方へ開く。金属器の佐波理碗を模倣した形態のものである。71は、口縁部のみの破片であり、端部の外反度も小さいがD類とした。

口縁部及び底部外面をロクロナデし、底部内面はロクロナデの後不定方向にナデて仕上げる。

なお、69と70の底部外面には、判読できないが墨書が認められる。

**皿** (73~76) 器高に対する口縁部の大きさによりA類(73)とB類(74~75)に区分される。

**A類** (73) 推定口径19.5cm・器高3.0cm。口縁部は直ぐ外開し、端部は内面でわずかに凹む。他の皿に比べ、器高が高く杯とも考えられる。

**B類** (74~76) 大小があり、口径18cm・器高1.8cm前後のもの(74・75)と口径15cm・器高1.4cmのもの(76)がある。ともに口縁部は、直ぐ外開し端部で肥厚し、端面は斜め上方を向く面をもつ。また、口縁部と底部の境では内面でわずかに凹む。

A・B類ともに口縁部をロクロナデし、底部内面はロクロナデの後不定方向にナデて仕上げる。底部外面はヘラ切りのままである。

**高杯** (77) 脚部のみ破片である。脚部は、径8.8cm・器高5.5cmで、筒状を呈し脚下半部で大きく

外反して開き、端部は肥厚して丸くおさめられる。

**鉢 (78)** 推定口径19.5cm。内湾する体部は、口縁部で大きく内傾し、断面は、内側上方を向く面をもつ。口縁部外面は、淡黒灰色を呈する。

**広口壺 (79~81)** 口径13cm前後の直立する短い口縁をもつ。口縁部は直立するもの(80)、外反気味のもの(79)、端部で肥厚し内傾する面をもつもの(81)がある。灰~暗灰色を呈するが、80の外面は黒灰色を呈し、79の肩部には自然釉がかかる。

**細頸壺 (82)** 口径10cm。外反する口縁部は、端部が上方を向く面をもつ。口縁直下の外側には凸帯をつくりだす。

**甕 (83)** 推定口径50cmの大形甕の口縁部である。外反する口縁部は、端部で外上方を向く面をもつ。口縁直下に凸帯をつくる。頸部に篋描波状文を施す。内面は明灰色、外面は黒灰色を呈す。

### 3. 平安・鎌倉時代の土器

#### (1)土師器

**杯 (84)** 口径15.6cm・器高3.7cm。内湾する体部は、口縁部で外反し、端部は丸い。口縁部をヨコナデし、底部内面を不定方向にナデる。全体に丁寧な仕上げである。G846出土。

**皿 (85~95)** 口径14.5cm・器高2.0cmの大形のもの(85)と口径8.5cm・器高1.2cm前後の小形のもの(86~95)がある。

小皿は、口縁部が内湾して丸味をもち平底のもの(86~89・93)、口縁部が内湾し底部が上げ底のもの(90~92)、口縁部と底部の境が明瞭で稜線をもつもの(94・95)などの種々の形態のものがある。ともに、口縁部をヨコナデし、底部内面をナデて仕上げる。底部外面は、オサエのままである。

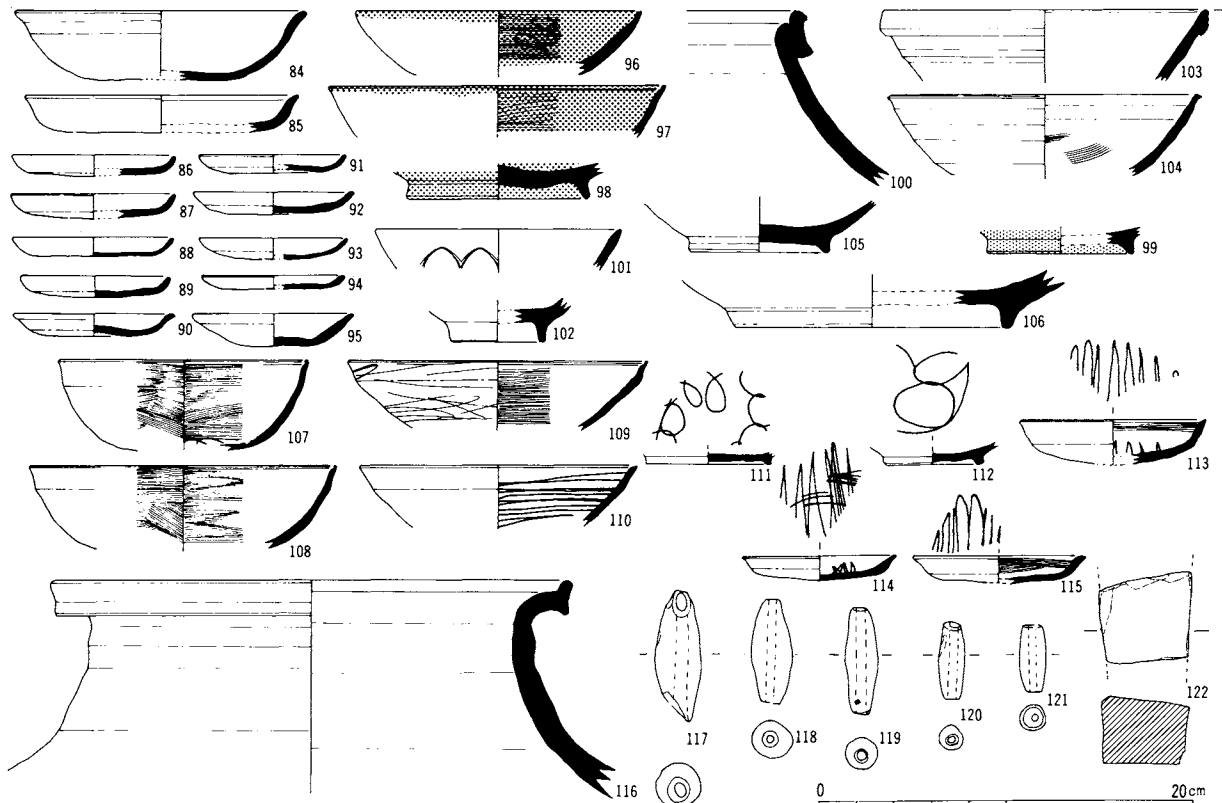
#### (2)黒色土器

**A類碗 (96・97)** 96は、推定口径15.4cm。わずかに内湾して開く口縁部は、端部でわずかに直立気味となる。口縁部をヨコナデし、内面をヘラミガキした後、ヘラミガキによる暗文を施す。体部外面をヘラケズリする。97は、推定口径18cm。口縁部内面直下に段状に近い沈線をめぐらす。口縁部をヨコナデし、内面をヘラミガキする。G68出土。

**B類碗 (98)** 底径9.5cmの底部破片である。底部は、中央部がふくらむゆるやかな曲線をなす。高台は、断面方形で高くわずかに外傾する。

#### (3)緑釉陶器

**碗 (99)** 底径7.7cmの底部破片である。高台は、



第13-10図 試掘堀・包含層出土遺物(1:4)

断面方形でわずかに外傾する。胎土は、軟質で濃緑色の釉が内外面ともかかる。

#### (4)須恵器

**甕** (100) 口縁部の破片で口径不明。口縁部は「N」字状口縁となり、端部は肥厚する。

#### (5)磁器

**青磁椀** (101~102) 101は、推定口径13cm。直ぐ開く口縁部は、端部が尖り気味となる。外面に比較的明瞭な鑄文をもつ。暗緑色。102は、101と同一個体かと推定される底径5cmの底部である。断面方形の高台は直立する。

**白磁椀** (103~104) 103は、推定口径17.2cmで玉縁口縁をなす。淡緑灰色。104は、推定口径16.8cm。ゆるく内湾する体部は、口縁部でオサエられ、端部で肥厚して面をつくる。体部外面には、ヘラケズリの際の稜線をのこし、内面には毛彫りを施す。灰白色。

#### (6)陶器

**灰釉椀** (105) 底径7.0cm。断面逆台形の高台は直立する。底部外面には糸切り痕をのこす。

**鉢** (106) 推定底径14cmの鉢かと思われる底部である。断面方形の高台は直立する。

#### (7)瓦器

**椀** (107~112) 口径16cm前後で内外面とも緻密なヘラミガキが施されるもの(107・108)、口径16cm前後で内面ヘラミガキは比較的密であるのに対し外面ヘラミガキが粗略化されたもの(109)、口径14.8cm前後で、外面ヘラミガキが消失し内面ヘラミガキが粗略化されたもの(110)に区分される。と

もに、口縁内面直下に沈線をめぐらす。

111~112は、底部の破片である。111は、底径6.7cmで断面方形の高台は低い。内底面に比較的細い輪結状暗文を施す。112は、底径5.4cmで断面方形の高台は低く、わずかに外傾する。内底面に大きな輪状暗文を施す。

**互器皿** (113~115) 113は、口径10cm・器高2.4cmで深く、丸底となる。口縁部内面上部はヘラミガキされ、内底面は平行ジグザグ状暗文を施す。底部外面はオサエによる成形時のままである。115は、口径9.2cm・器高1.5cm。口縁部はヨコナデされ、わずかに外反する。口縁部内面はヘラミガキされ、内底面に平行ジグザグ状暗文を施す。底部外面は、オサエによる成形時のままである。114は、口径7.8cm・器高1.3cm。口縁部はヨコナデされ、外反する。口縁部内面にヘラミガキは施されない。内底面には、平行ジグザグ状の暗文とわずかに同心円状の暗文を施す。底部外面は成形時のオサエのままである。

#### (8)その他の遺物

**信楽焼甕** (116) 口径27.4cm。ゆるく内傾する口頸部は、口縁部で大きく外反し、端部で上下に肥厚して縁帯をつくる。暗茶褐色~緑茶色。

**土錘** (117~121) 長さ1.4~6.9cmまでの各種の大きさがある。長い方は、径も大きく丸味をもつ。

**砥石** (122) 断面3.3×4.5cm。両端を欠損する。四面ともに使用痕をのこす。



## 4. 結 語

神部遺跡は、木津川左岸の微高地に位置する弥生時代から鎌倉時代の複合遺跡である。遺跡は、標高約140mの微高地と一段低い沖積地からなり、前者は黄褐色シルト層を地山とするのに対し、後者は灰色砂層を地山としている。第一次調査で、一段高い地域でピット等の遺構を確認しているが、一段低い微高地では遺物の出土は見たものの遺構は確認されていない。第二次調査は、一段高い微高地直下で実施したが、土器溜・杭列を検出したにとどまり、建物跡などの遺構は検出されなかった。

土器溜は、一段高い微高地直下で検出され、微高地に存在したと推定される居住地から投棄されたものと考えられる。土器は、古墳時代前期の庄内式併行期のものを主体とする。

杭列及び木製品は、一段低い微高地の更に一段低い地点で検出された。調査区域が、幅4mと限られていたため、その全容を明らかにし得ないが、杭列は堰の一部と推定される。堰と考えられれば、それは当然水路の存在を裏付けるものであり、ひいては水田存在の可能性を示唆する。神部遺跡の北西1.0kmの北堀池遺跡では、古墳時代前期の水田跡が検出されており、遺跡の立地も両遺跡で一致する点が多く、神部遺跡の一段低い沖積地に古代の水田跡の存在する可能性が強いと思われる。

神部遺跡出土遺物は、大別して(1)弥生時代後期の土器、(2)古墳時代前期の土器及び木製品、(3)奈良時代の土器に分けられる。

弥生土器は、第一次調査グリッド3で出土した一括土器(36~38)がある。肩部に楡描文をのこす壺

(36)、偏球形の体部をもつ甕(37)、大きく内湾し口縁部で外反する杯部と裾部で屈曲して開く脚部の高杯(38)は、ともに後期中葉の一括資料として貴重である。また、C地区V層出土の壺(1)や高杯

[註]

(1)谷本鋭次他『北堀池遺跡発掘調査報告書 第一分冊』三重県教育委員会 1981

(2)井藤暁子「弥生土器——近畿5——」『考古学ジャーナル』219 1983

都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係——淀川水系を中心に

(9)は、後期後半に位置づけられる<sup>②</sup>。

古墳時代前期の土器は、K地区で一括出土した土器群である。壺5類・甕3類・高杯2類・小形器台2類・鉢1類を確認しているが、更に細分が可能なものがある。甕は、体部が球形をなし左下りのタタキ目をもつもの(22~25)が主体をなし、この他にハケ目をもつもの(26)や「S」字状口縁をもつもの(27~28)がある。タタキは、体部上半部と下半部で方向を違えるものが多い。「S」字状口縁甕は、木下・安達分類によるⅢA類に属するものである<sup>③</sup>。高杯・小形器台には、精製土器と粗製土器の両者があり、前者ではヘラミガキが多用される。また、精製土器には、広口壺B類や小形丸底壺も含まれる。

奈良時代の土器は、土師器と須恵器があり後者が主流を占める。土師器では、39で底部外面をヘラケズリする以外は、すべてオサエのままの調整手法をとる。暗文は、認められない。須恵器には、奈良時代初期に属するかえりをもつ蓋もあるが、天井部が笠形をなし口縁端部が面をもつB類と、天井部が偏平で口縁部が「Z」状となるC類が主体をなす。また、杯類は、口径15cm前後で高台が底部端より内側につくA類から口径12cm前で高台が底部端に近く低く垂直なものとなるB類への移行が認められ、平城宮の編年による平城宮Ⅲ~平城宮Ⅳの段階にあたり8世紀中頃の年代が考えられる<sup>④</sup>。また、須恵器には、佐波理碗を模倣した杯D類があり、仕上げも丁寧であり、法量にも規格性が強く窺れるとともに、底部外面に墨書が認められ、その用途は限定されていたと考えられる。

以上、今回の発掘調査によって得られた成果の一部を報告したが、C地区の木製品及びK地区土器溜出土土器の詳細については、別稿によりたい。

(駒田利治)

——』『考古学研究』第20巻第4号 1974

丸山竜平「弥生式土器の終焉——稲糠貯蔵用壺の消滅と古墳文化の成立基盤——」『古代研究』10 1976

(3)安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』第60号第2巻 1974

(4)『平城宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所 1976

## XIV 上野市比自岐 下り合遺跡

### 1. 位置と歴史的環境

①  
下り合遺跡は、伊賀盆地の一部を構成する上野市南東部の比自岐小盆地に位置する。この小盆地は東西約3km、南北約1kmの東西に長い形状を呈し、南北の山際には御代川と比自岐川が西流し、枳川で合流しこの小盆地を抜けて木津川（旧称長田川）へそそぐ。

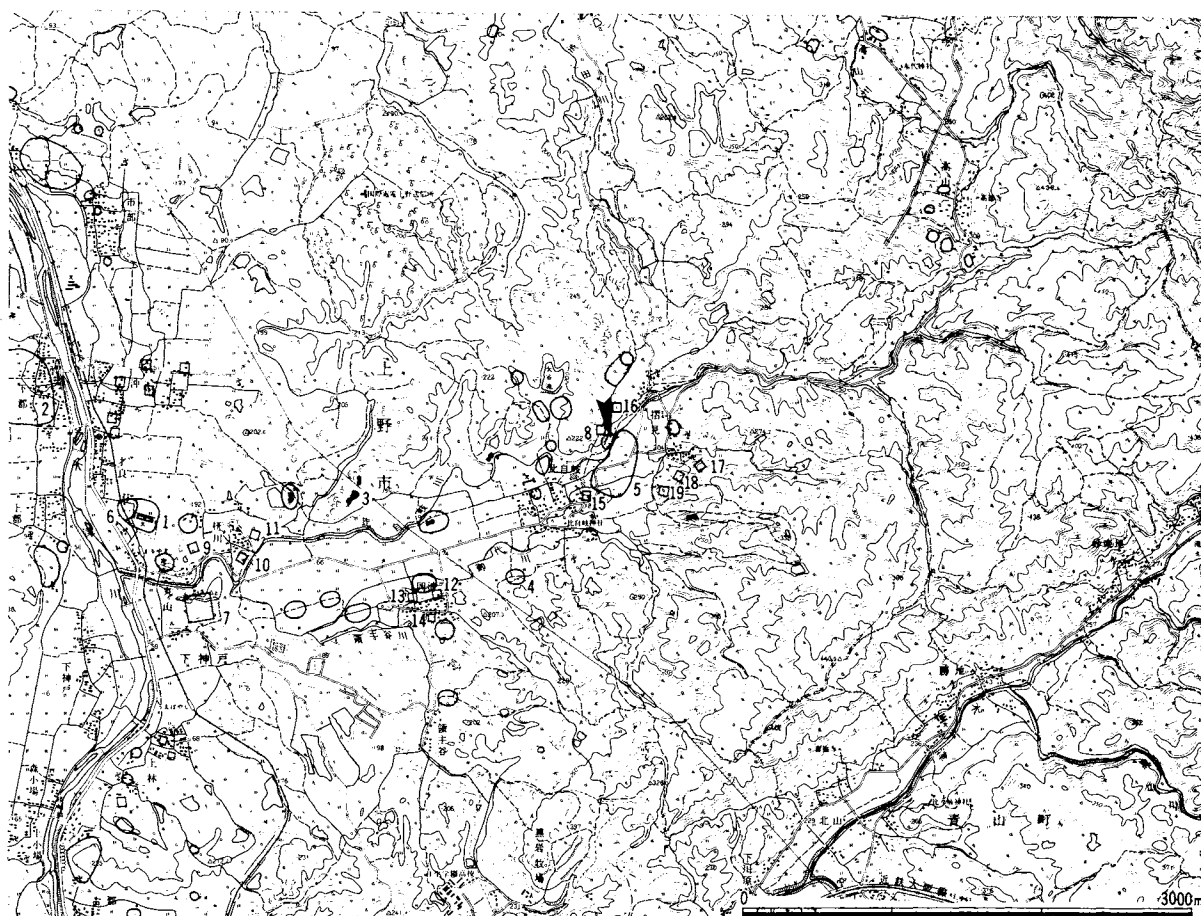
下り合遺跡は、比自岐と摺見、両集落のほぼ中間で、比自岐川の右岸北の丘陵麓に立地し、標高194m前後、比自岐川との比高差は2mである。行政的には上野市比自岐字下り合に属する。

歴史的には伊賀地方は古くから拓け、木津川沿岸地域に縄文・弥生時代の遺跡が点在し、とくに才良遺跡(1)、下郡遺跡(2)が知られている。一方比自岐で

は小規模な弥生時代の3遺跡が北方丘陵裾で確認されている。

古墳時代の伊賀地方における前方後円墳の中でも、特に優勢な全長120mの石山古墳(3)が築造されたことは、伊賀地方において比自岐地域の社会的優位性が窺える。集落跡には、小盆地内で馬場西遺跡(4)、木津川流域に前述の才良・下郡遺跡がある。

歴史時代になると、当遺跡から比自岐川の対岸には、上寺遺跡(5)があり、木津川流域には才良廃寺(6)、下郡遺跡等がある。小盆地内は条里地割が施行され、「比自岐御厨」や「貞観寺領比自岐庄」の所在が、多様な勢力支配を物語り、小盆地特有の地域的結合性を萌芽させていったと考えられる。



第14-1図 遺跡位置図 (1:50000 国土地理院 伊勢路)

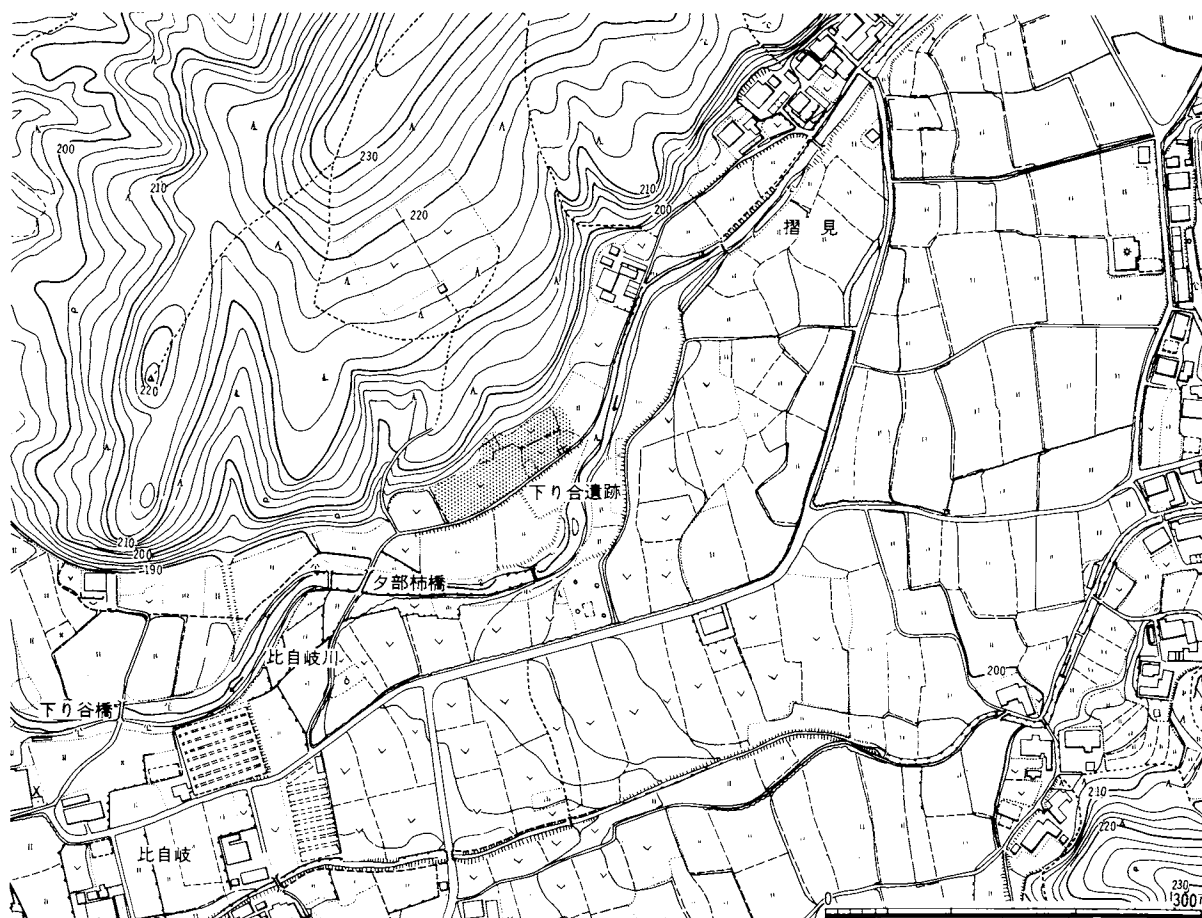
中世以降、伊賀国で数百にのぼる中世城館が築造され、比自岐小盆地には天正伊賀乱の織田軍による伊賀攻め拠点、丸山城(7)の他、12の中世城館が確認されている。

丸山城以外の城館跡は、山本雅靖氏の所見<sup>②</sup>によれ

ば、大別すると柘川・岡波・比自岐・上寺・摺見の5地区に区分が可能で、各地区に2～3の集合を単位として所在し、規模・形態的に極めて類似性が強いという。小盆地内の現在の各集落毎に所在する均質的な城館跡の分布状況は、現集落とほぼ同一の場

番号	城館跡名	地区	所在地	立地	規模 (東西×南北)	構造		形態	文献
						土塁	堀		
8	西氏城	上寺	比自岐下り合	山腹	45×45 m	○	○	四方土塁	三国地志
9	瀧川三郎兵衛砦	柘川	柘川	山頂	45×50	○	○	四方土塁	三国地志
10	嵯峨尾主馬砦	〃	柘川狭間	山頂	30×50	○	○	二方土塁	三国地志
11	城氏館	〃	〃	山腹	40×70	○		四方土塁	
12	竹田氏館	岡波	岡波百々農栄	台地	55×45	○	○	四方土塁	三国地志
13	浅野氏館	〃	〃	台地	65×50	○	○	三方土塁	地誌上申書
14	岡波館	〃	〃	台地	60×100	○	○	四方土塁	
15	荒堀長川館	比自岐	比自岐向	平地	45×40	○	○	四方土塁	三国地志
16	三藤氏館	上寺	摺見上寺	山腹	32×56	○	○	三方土塁	地誌上申書
17	重富氏館	摺見	比自岐向山	山腹	90×80	○	○	三方土塁	三国地志
18	荒堀氏城	〃	〃	山腹	63×65	○	○	四方土塁	三国地志
19	竹岡氏城	〃	〃	山腹	43×37	○	○	四方土塁	三国地志

第14-1表 比自岐盆地中世城館跡一覧表 山本雅靖「中世城館の分布とその問題—伊賀国伊賀郡比自岐郷の場合—」による



第14-2図 遺跡地形図(1:6000)

所に当時の集落が営まれ、城館を中心とする各集落の独自の結合性や、各集落における在地土豪層の同等な成長を物語っている。しかしその成長過程や成立時期については、不明な点が多くその解明は今後の課題となろう。

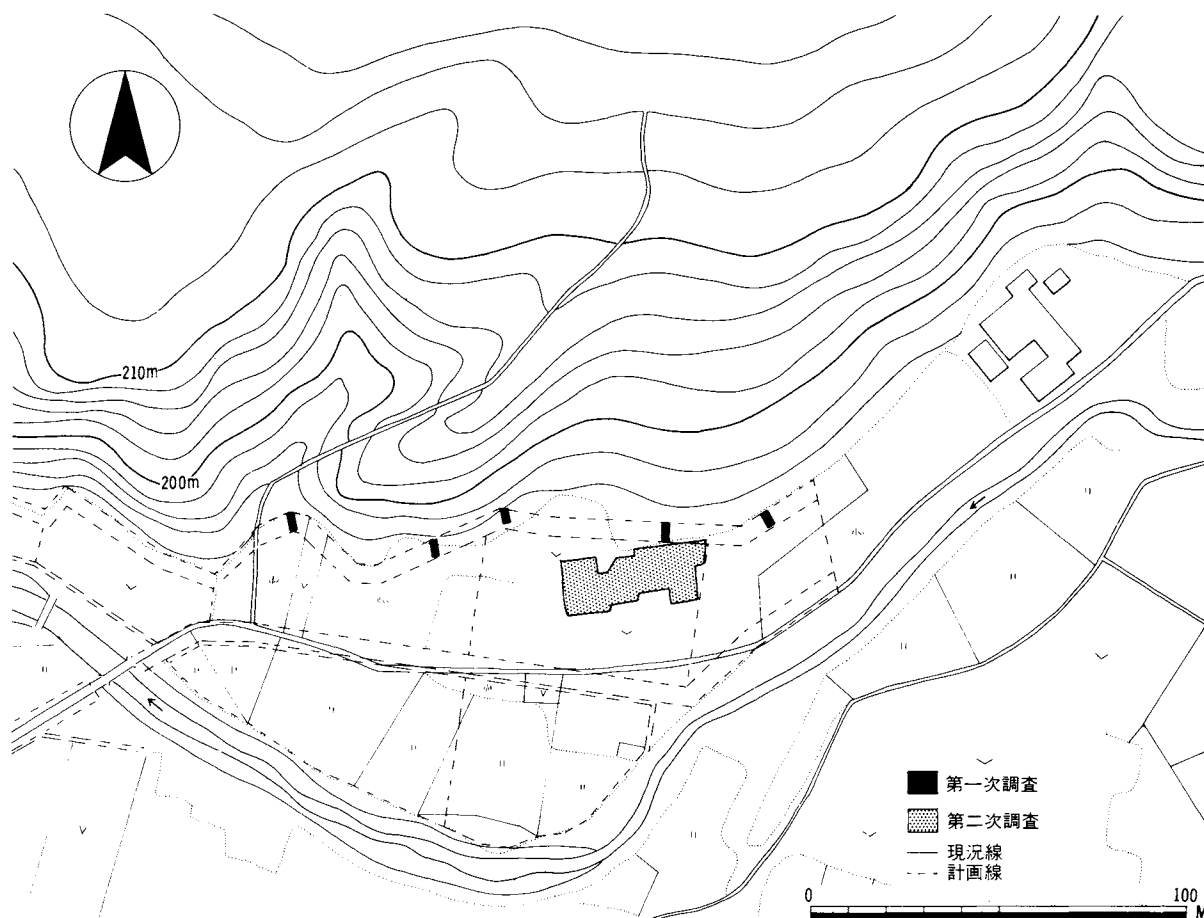
当遺跡すぐ北側丘陵端部に位置する西氏城も、その様な在地土豪西氏に築かれた城館に比定されている。西氏城は『三国地志』には森村に所在すると記載される城館跡である。規模は東西・南北ともに約45mであり、幅9mの土塁が四方を巡る、典型的な「四方土塁」といわれるもので南西の一部に虎口がある。北及び西側の二面には、L字形に空堀がめぐ

らされる。郭内の規模は東西23m・南方19mである。土塁の遺存状態は、西側の一部が崩壊するが極めて良好である。この山腹に位置する西氏城から、眼下の比自岐川までの平地部は地元で「構千軒」と呼ばれる地域であり、当遺跡はこの「構千軒」内の西氏城土塁虎口の直下に立地している。この立地面や「構千軒」という名称、散布遺物や試掘による出土遺物等から、当遺跡は西氏城に関する中世の遺跡であろうと予測された。やがて比自岐小盆地や伊賀地方における在地土豪層は、天正9年の織田信長の伊賀攻略により、その基盤が崩壊していくが、下り合遺跡もこうした状況の中で理解されるべきであろう。

## 2. 遺 構

調査により検出した遺構は、掘立柱建物1棟（SB5）、石組井戸1基（SE1）、溝3条（SD2・3・14）、土壇9基（SK4・6～13）、土壇（SX15）である。

遺構検出に至る基本的層序はⅠ層一耕作土（厚さ約20cm）、Ⅱ層一暗茶色砂質土（客土・包含層上層10～20cm）、Ⅲ層一暗茶褐色砂質土（包含層下層50～60cm）、Ⅳ層一白灰色礫層（地山）である。遺構は発掘



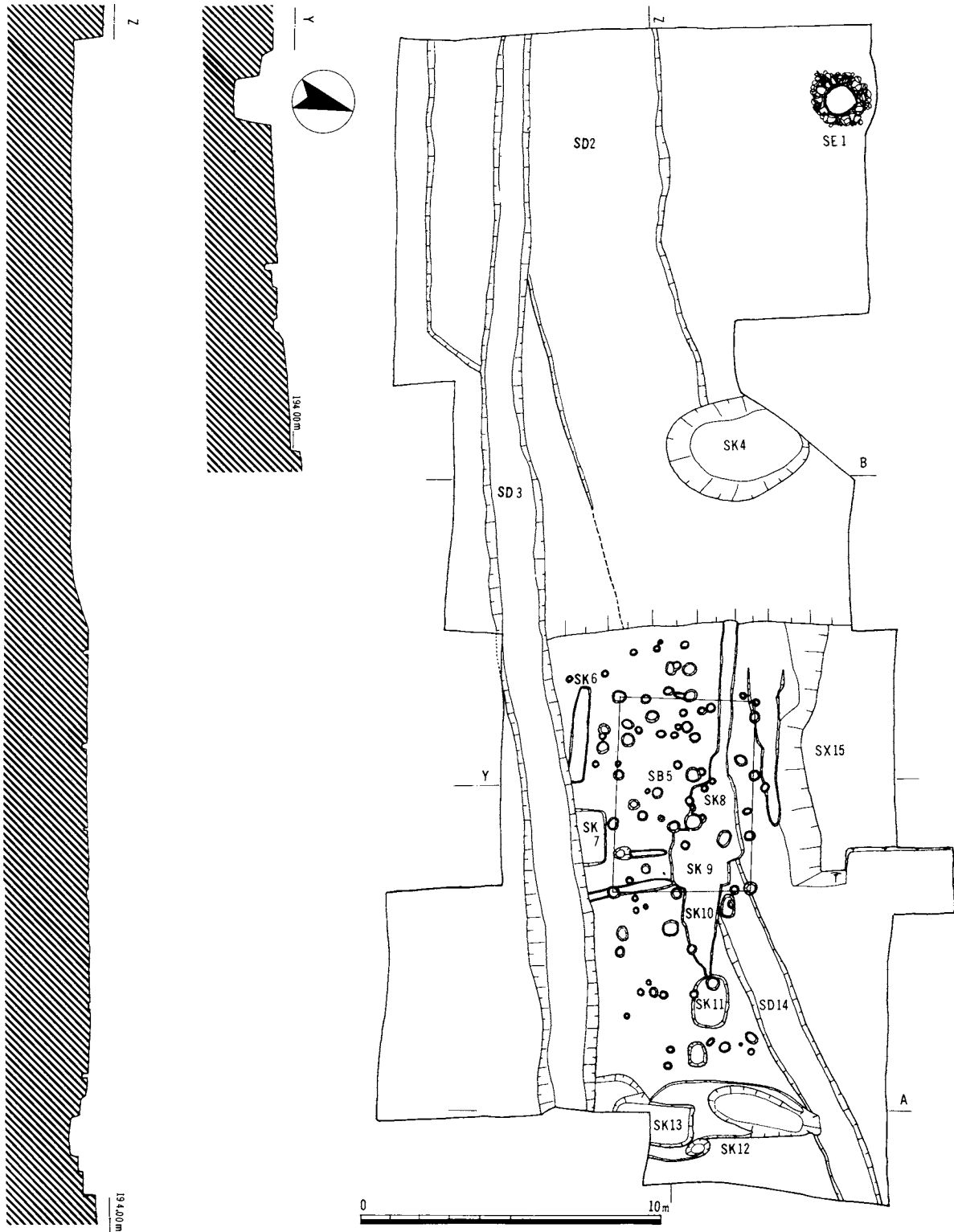
第14-3 図 発掘調査区域図（1：2000 県営ほ場整備事業 上野南部地区 摺見B工区その2 現況計画平面図）

区東半部でⅢ層上層部（室町時代後期の整地面）において確認し得たが、西半部では削平が著しく、地山にて検出を行なった。

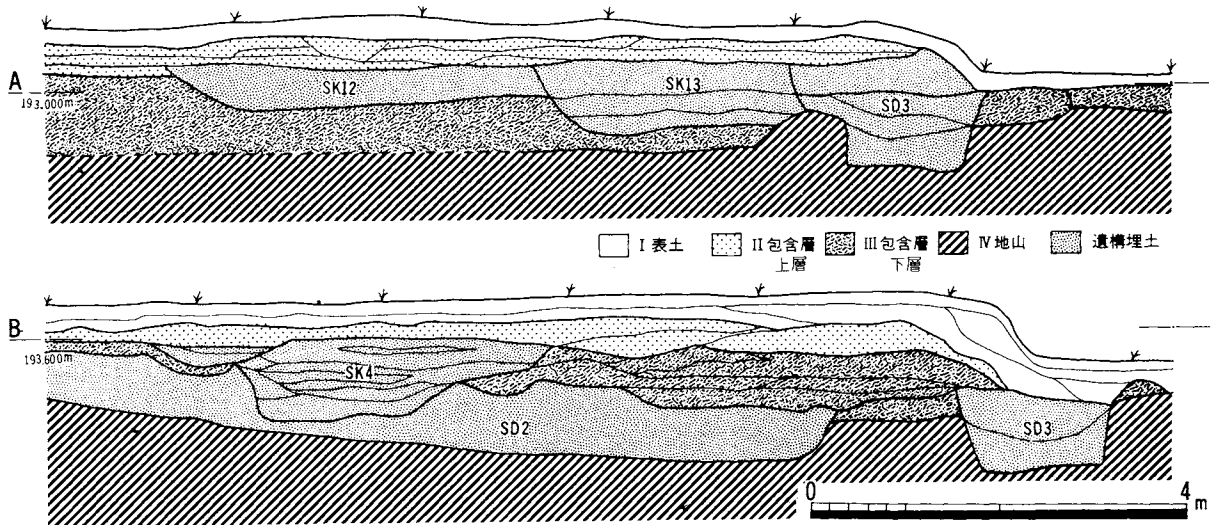
### 1. 掘立柱建物

**SB5** 桁行3間(6.40m)×梁行2間(4.40m)

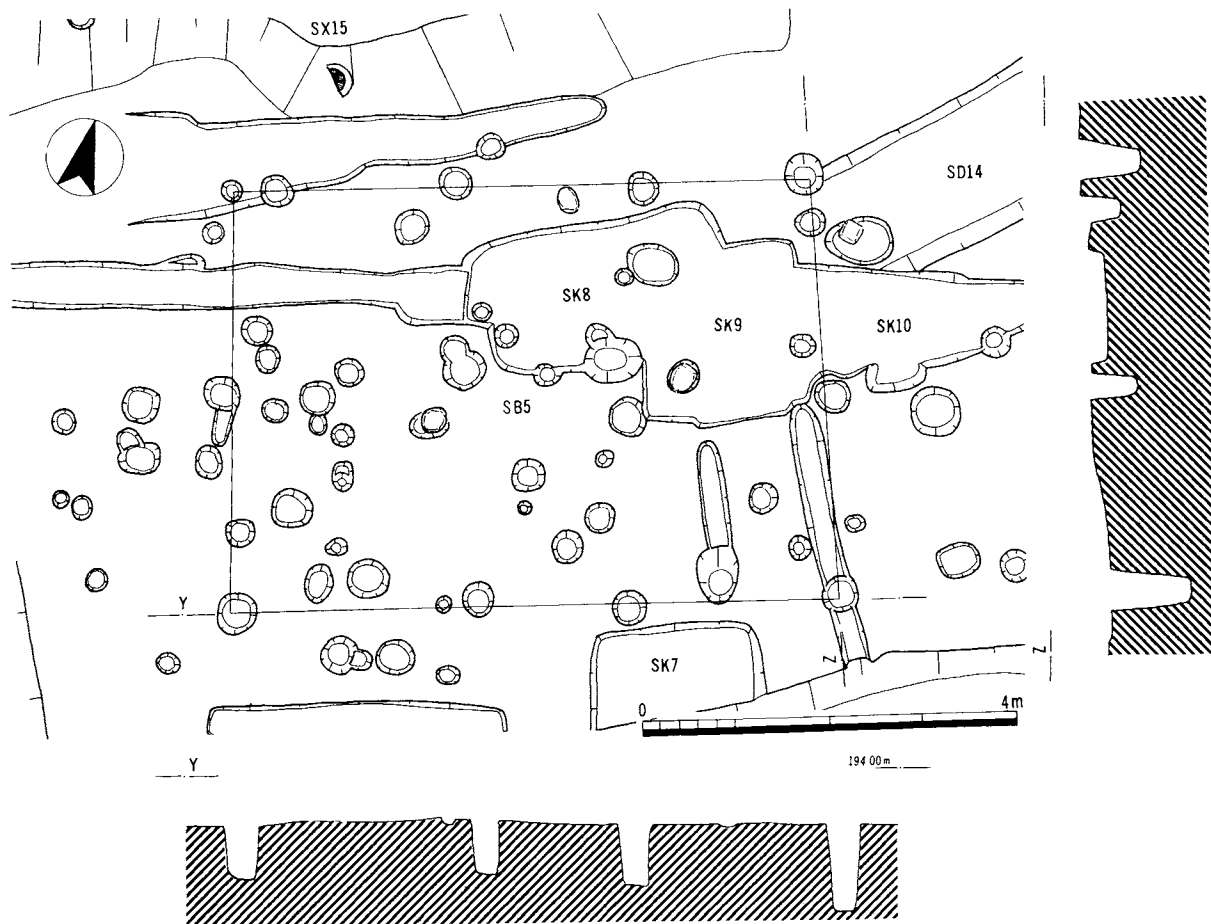
の東西棟である。棟方位はN17°Wである。柱間は梁行2.1m+2.3m、桁行2.2m+2.0m+2.2mの不等間である。柱穴掘形は円形で、径22~42cm、深さ25~42cmである。柱穴埋土から土師器や瓦器の細片が少量出土している。



第14-4図 第二次調査区全体図(1:200)



第14-5図 土層断面図 (1:80)



第14-6図 SB5実測図 (1:80)

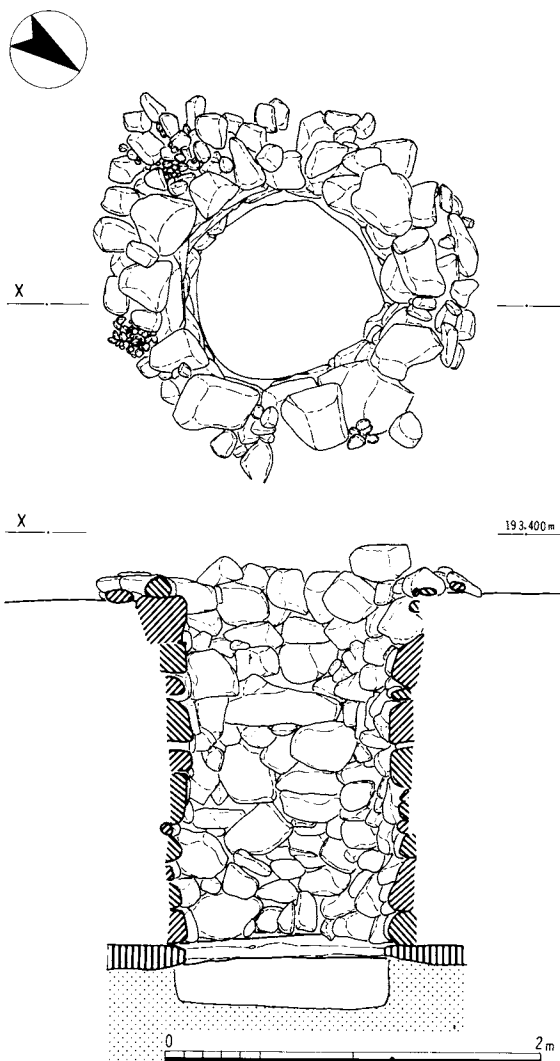
なお、このSB5内外に焼土粒・炭化物が飛散して認められ、火災による消失を想定することができる。

## 2. 井戸

SE1 内径約104cmの円形の乱石積みの石組井

戸である。井戸は掘形底面の白灰色砂層（地山）上、約20cmにある茶黒色岩盤を削り抜き、その岩盤上に拳大から人頭大までの川原石を約10段ほど垂直に積みあげ構築されている。

井戸の埋土は基本的に3層に分れ、検出面から順次



第14-7図 SE1 実測図 (1:40)

多量の川原石層 (1.4m)、暗灰色砂質土層 (0.4m)、青灰色粘質土層 (ヘドロ状堆積物・0.4m)、地山となる。下層にいくほど漸次、川原石の混入が減少する。積石に使用されたと考えられるこれら川原石の多量な埋没から、更に上面への石積みを想定できる。井戸は井側として石積みし、最下底部は岩盤を剝き抜いているが、曲物小片が出土している点から、湧水層に曲物を設置し井筒としていた可能性がある。出土遺物はすべて最下層から、漆器碗細片、完形の伊賀焼播鉢 (50)、同甕片も出土している。

### 3. 溝

**SD 2** 幅約 4 m、深さ 40cm の東西方向に走る溝である。溝掘形は南壁部がほぼ垂直であるのに比べて、北壁部は緩傾斜となる。検出面の相違で調査区西半部のみ確認であるが、東半部へも続くものと思われる。埋土は暗茶色粘質土で、拳大から人頭大以

上の礫が多量に混入している。出土遺物は皆無に近い。

**SD 3** 幅 2.0m、深さは東端が 1 m、西端が 0.4 m で、発掘区を東西方向に走る溝である。西部で南側に幅 2 m、深さ 10cm のテラスを有する。溝掘形は両壁が垂直に近く、底面は平坦である。埋土は SD 2 と極似している。出土遺物は灰釉の印花文皿 (37)・碗 (39)、瓦質羽釜 (19)、伊賀焼播鉢 (49) 等がある。

**SD 14** 幅 1.4m、深さ 15cm のものである。発掘区東北端から SK 8~10 の土坑群までを南西方向に走る溝である。重複関係から SD 14 が土坑群より古い。

### 4. 土坑

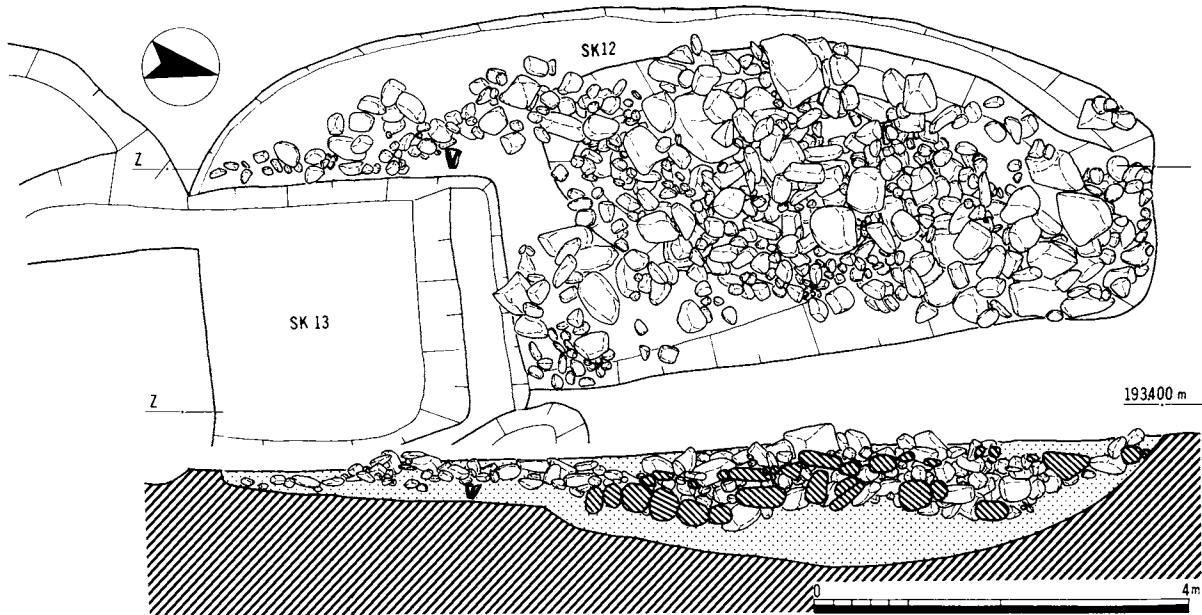
**SK 4** 短径 3.4m、長径 4.4m、深さ 45cm の隅丸方形のものである。SK 4 にのる土層断面図において、掘形は III 層直上からであるのが分る。埋土は白色砂層と黄色粘土の互層が 3 層をなし、最下層の黄色粘土は厚さ 20~30cm で、底面から中位ほどまで張られている。遺物は全く混入しない、性格不明の土坑である。

**SK 6** 幅 0.5m、長さ 3.2m、深さ 8cm の浅い長方形プランである。一部を SD 3 に切られる

**SK 7** 幅 1 m 以上、長さ 1.8m、深さ 15cm の方形プランで SK 6 同様、南部を SD 3 に切られる。

**SK 8~11** 幅 1.0m~1.5m、長さ 1.6~2.7m、深さ 10cm 前後の方形土坑が 4 基重複しているものである。また、SK 8 西側に幅 0.5m、長さ 5 m 以上、深さ 15cm の東西に走る浅い溝がある。この重複する 4 基の土坑と溝の新旧関係は、埋土が暗茶色砂質土 (炭化物・緑色粘土ブロック混入) と同一であるため不明である。SK 10 から土師器小皿 3 点 (31~33) が、底面から少し浮いた状態で出土している。

**SK 12** 北端を同一にする 2 重の楕円形プランであり、底面は 2 段になっている。長軸方向は N 4°W で外側短径 1.8m、長径 5.7m、深さ 20cm であり、内側は短径 1.3m、長径 3.7m、深さ 50cm である。南側を SK 13 に切られる。拳大から人頭大の礫が多量に埋没していた。炭化物・焼土粒を混入し、北端では特に多い出土遺物は上層から北宋銭 (55)、下層で土師器小皿 (29)、鍋 (44)、伊賀焼播鉢 (48)、瓦質火舎 (21) 等がある。



第14-8図 SK12・SK13実測図(1:80)

SK13 幅1.7m、長さ2.6m、深さ70cmを測る方形プランであり、SK12を切る。

### 5. 土壇

SX15 発掘区東半部のSB5の北側で検出した土壇である。プランは第Ⅱ層上面での確認であるが、既に攪乱が甚だしくその一部を検出したのみである。

盛土は高さ25~40cmを測る暗茶色砂質土で、黄色粘土ブロックを混入する。南側の壁面は緩斜面となり、約10cm前後の川原石が多量に散乱している。これらの川原石は肩部に石積みされ東西方向に延びていたものと考えられる。なお、半割された茶臼(51)が石積みに使用されたのか、斜面上から出土している。

## 3. 遺物

下り合遺跡から出土した遺物には、室町時代後期の土師器・瓦質土器・陶器・石製品・古銭を主体として、鎌倉時代の瓦器のほか、少量であるが古墳時代の須恵器・土師器がある。

### 1. 鎌倉時代の遺物

#### (1) 瓦器

椀A(1~3) 内湾して開く体部に、断面方形の高台が貼り付けられる。口縁の内面直下には、例外なく沈線がめぐる。また、内面のヘラミガキは比較的丁寧であるが、外面ヘラミガキは粗略化の傾向を示しており、1のように指圧痕が明瞭にのこる例もある。内底面のヘラミガキは、粗い輪結状を呈すと思われる。胎土中に金雲母片を含む。1は、口径16.5cm前後、器高4.8cmで、器高指数29を示す。2は口径13.8cm、3は口径14.2cmであり、盛行時の瓦器より多少小型化してきている。

椀B(4~7) 内湾する体部に、低い断面方形

若しくは断面逆三角形の高台が貼り付けられる。口縁内面には、沈線が認められるが、段状を呈するものが多い。外面のヘラミガキは、消失しており、指圧痕がよくのこる。内面のヘラミガキは、粗略化の傾向を辿り、内底面のヘラミガキも粗い螺線状の暗文に変化している。また、内底面のヘラミガキを施す前に、横方向にハケ調整している。ともに胎土に金雲母片を含み、細砂を多少含む。4は口径14.6cm器高4.7cmで、器高指数32を示す。

椀C(8・9) 体部の内湾度合が弱くなり、小さな高台が粗雑に張り付けられる。外面のヘラミガキは、前段階で既に消失しており、内面のヘラミガキも太く間隙の多いものとなっている。8は、口径約13.5cm、器高3.1cmで、器高指数23を示し、扁平化が進んだ型式のものである。口縁内面直下には、段状の沈線を巡らす。9は、口径13.3cm、器高3.5cmで、器高指数26を示す。僅かに内湾して開く体部に、断



面逆三角形の小さな高台が張り付けられ、高台消失直前の型式を示す。口縁内面直下の沈線も施されるが、口縁部のヨコナデにより部分的にのこるのみである。8・9は、ともに胎土に細砂を多少含む。

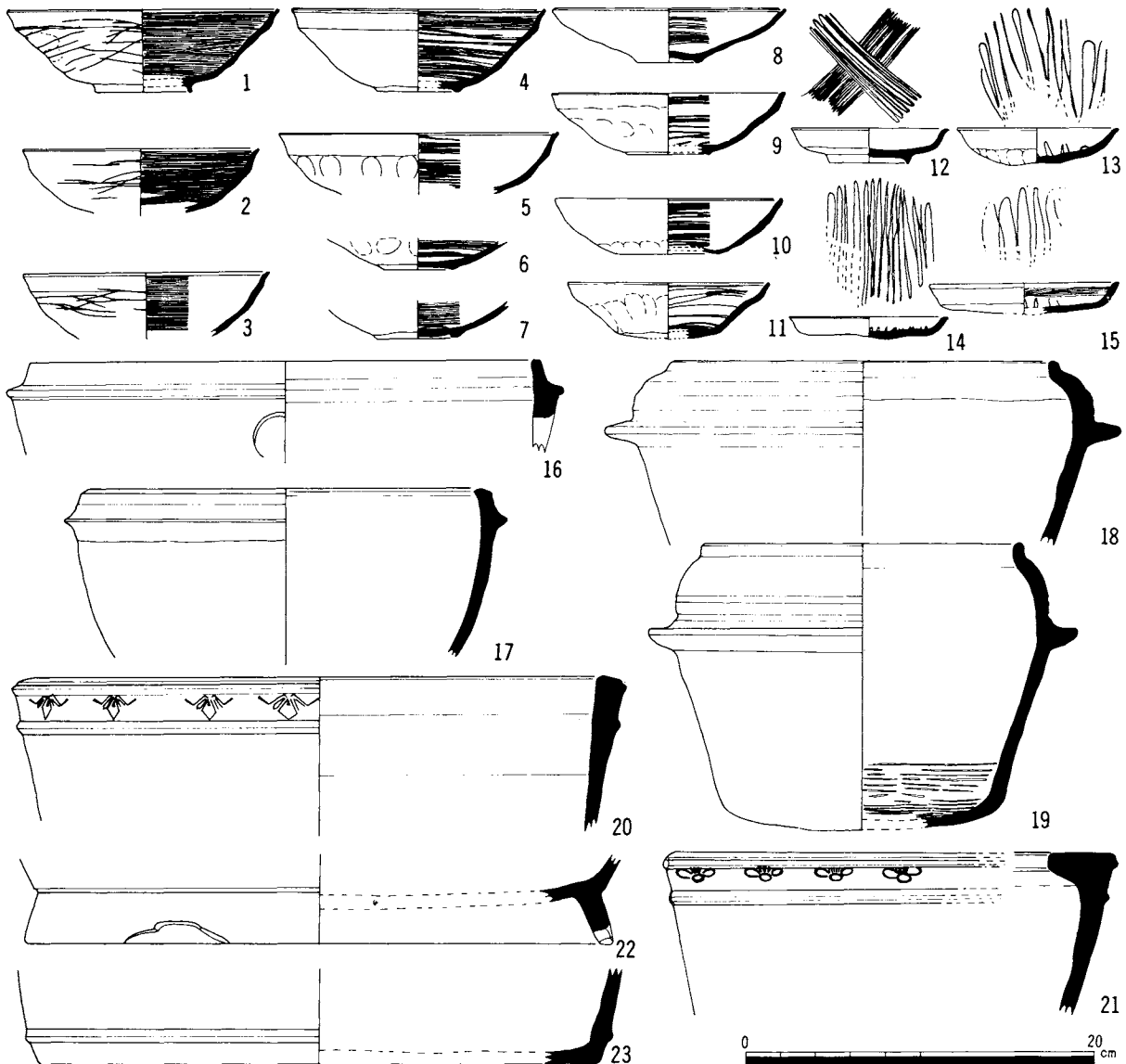
**椀D (10・11)** 体部が直線的に開き、高台が消失した型式を示す。最終末の瓦器椀である。10は、口径13cm、器高3.2cmで、器高指数は25を示す。体部は、直線的に開き、口縁直下で沈線を巡らす。内面のヘラミガキは、太いが比較的丁寧に施される。外面には、指圧痕をのこし、体部下半には燻しがかかっていない。11は、口径約11.6cm、器高3.1cmで、器高指数27を示す。直ぐ開く体部は、口縁部で屈曲する。口縁内面には、僅かであるが、沈線がのこる。外面には、指圧痕をのこし、内面のヘラミガキは、

太く粗雑なものである。10・11ともに、細砂を多少含む。

**皿A (12)** 断面逆台形の高台が付く皿である。口径9.0cm、器高2.0cm、高台部の底径4.6cmを測る。口縁部は、端部で外方に折りかえされる。口縁内外面をナデで仕上げ、内面には、平行線の暗文を直交させる。細砂を少し含む。

**皿B (13)** 底部が丸味をもち、体部と底部の稜が明瞭でない皿である。口径9.2cm、器高2.2cmである。口縁部内外面をナデで仕上げ、体部・底部外面をオサエて仕上げる。内底面には、ジグザグ状暗文を施す。

**皿C (14~15)** 体部と底部の境に明瞭な稜をもつ平底の皿である。14は口径9.2cm、器高1.2cm、15は



第14—9図 遺物実測図 (1 : 4)

口径9.9cm、器高1.4cmである。ともに、口縁部内外面を、ナデで仕上げる。底部外面は、オサエのみである。内底面には、ジグザグ状の暗文を施す。

## 2. 室町時代の遺物

### (1) 瓦質土器

**羽釜A** (16~17) 短く直立する口縁直下に水平の短い齔が巡る。16は、口径32cm。口縁部は水平な面をもち、内外面ともナデで仕上げるが、外面は丁寧に磨かれる。齔の直下に円孔の透しが認められるが、細片である為いくつか穿孔されているか不明である。17は、口径21.8cm。口縁部は、僅かに内傾して、内湾する体部へ続く。体部内面は、ナデで仕上げられるが、体部外面は、オサエの後ナデで仕上げられる。内面は銀灰色、外面は黒灰色を呈し、齔以下には煤が付着する。ともに、胎土に細砂を含む。

**羽釜B** (18・19) 大きく内湾する口縁部に水平な齔が巡る。19は、口径17.2cm・器高16.3cmである。内湾する体部は、口縁部で直立し、端面は丸くまとめられる。齔以下の体部は、直線的にすぼまり、平底の底部をもつ。外面をナデで仕上げ、体部内面はオサエの後、粗くナデで仕上げられ、体部下半には横方向のハケ目を施す。内外面とも黒灰色を呈し、齔以下には、煤が厚く付着する。

**火鉢** (20~23) 丸型のもの(20)と方形のもの(21)があり、底部には丸型のもので2種類(22・23)ある。丸型のもの、口径36cm程のものである。口縁部は厚く、体部へ移行するにつれ、次第に薄くなる。口縁部端面は、水平な面をもち、口縁部直下外面には2条の突帯を張り付け、この間に印刻文を施す。内外面とも黒色を呈し、細砂を少し含む。方形のものは、断片であり大きさは不明である。口縁部は、肥厚し縁をつくる。口縁直下に2条の突帯を張り付け、この間に印花文を施す。外面は磨かれ、黒色を呈す。細砂を多少含む。

22・23は、ともに丸型火鉢の底部であり、高台をもつもの(22)ともないもの(23)がある。22は、底径34cm程のもので、外方に開く高台には、三方と推定される透しをもつ。23は、平底のもので底径33cm程のものである。底部近くに1条の突帯を張り付ける。胎土に細砂・金雲母片を含み、黒灰色を呈す。

### (2) 土師器

**小皿A** (24~26) 口径8.8~9.2cm、器高1.4~1.6cmの小皿である。器壁は厚目で、口縁部全体はヨコナデ、内面はナデ調整され、外面はオサエによる凹凸が所々に認められる。26は口縁端部をオサエで整形している。

**小皿B** (27・28) 口径は8cm内外、器高1.3cm。小皿Aに比し薄手の皿で、粗雑なつくりである。内面はすべてナデ調整され平滑であり、口縁部外面はヨコナデされる。

**小皿C** (29・30) 口径8.0と10.4cm、器高1.4と1.8cmの薄手の皿である。内面はすべてナデ調整され、外面は不調整で底部中央に顕著な指頭圧痕が残り、内底面がせりあがる。淡黄褐色を呈し、胎土は砂粒を混入し、軟質である。

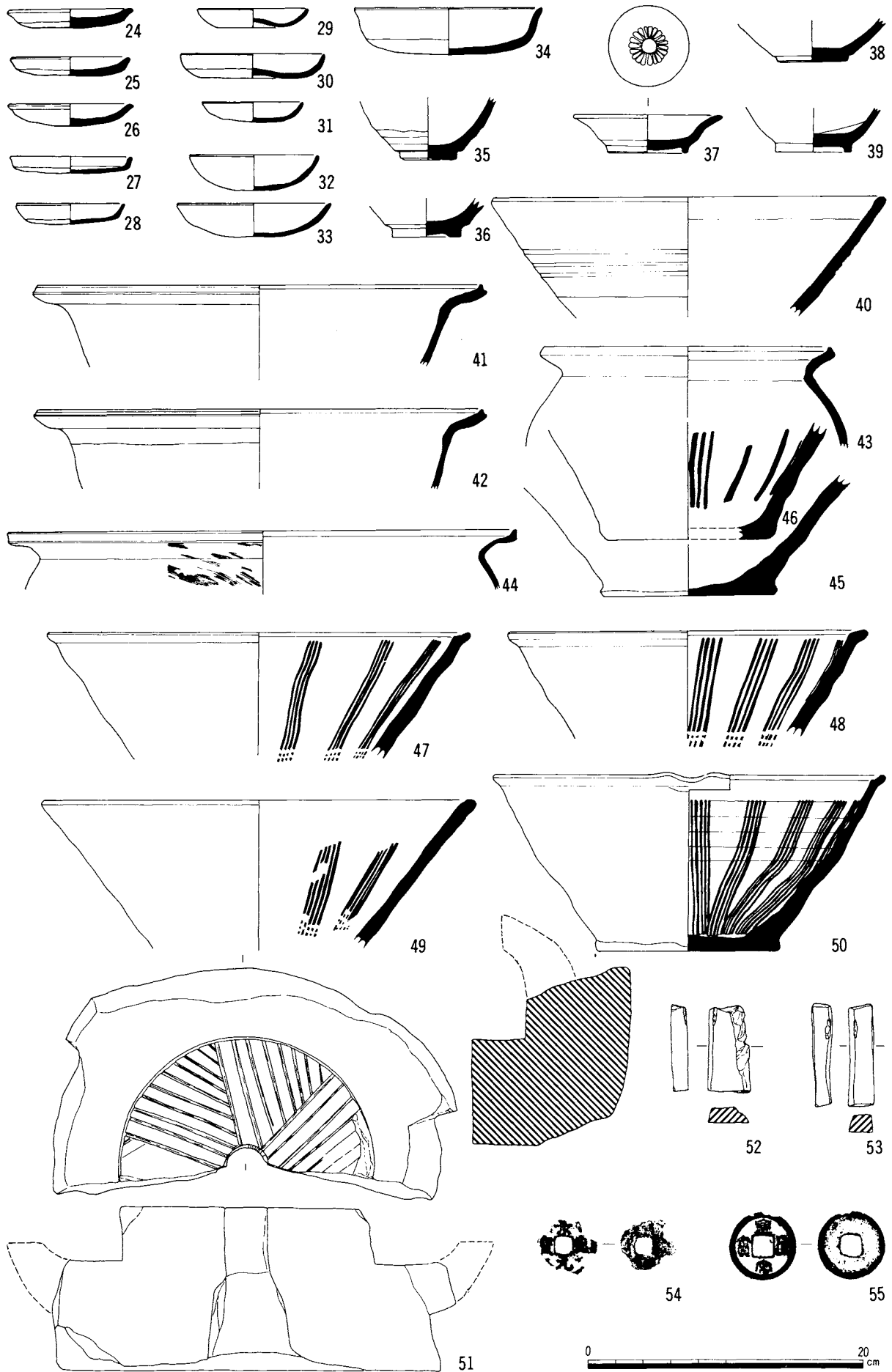
**小皿D** (31~33) 口径7.2~11.0cm、器高1.4~2.5cmと大きさにばらつきをみせる薄手の皿である。内面はすべてナデ調整、外面は不調整でオサエによる凹凸がめだつ。黄褐色を呈し、若干軟質である。

**皿** (34) 口径13.8cm、器高3.4cmの皿である。口縁部全体をヨコナデし、内面はナデ調整で平滑に仕上げ、外面は不調整である。口縁端部内面にヨコナデによる沈線がめぐる。淡黄褐色を呈し胎土は緻密で軟質である。この皿は形態的に、中世よりさらに遡る可能性がある。

**鍋A** (41・42) 口縁部は、体部から外反してのび、端部はつまみあげられ断面三角形を呈する。端部外面は、ヨコナデによる擬凹線が一条走る。深鉢的タイプであろうか。口縁部内外面はすべてヨコナデされ、体部内外面はナデ調整される。黄褐色を呈し、胎土は砂粒を少量混入し軟質である。復元口径33.0~33.2cmである。

**鍋B** (43) 体部より「く」の字形に外反する口縁部は、端部をつまみあげられ断面三角形を呈する。器壁は約4mmと厚目の鍋である。口縁部内外面はヨコナデされ、体部内面はナデ調整、外面はハケメ調整され煤が厚く付着している。

**鍋C** (44) 「く」の字形に強く外反する口頸部から口縁部は断面三角形を呈し、端部は上方につまみあげられる。端部外面に擬凹線が一条走る。口縁部内外面はヨコナデ、外面は体部上半ハケ目、内面はナデ後、ハケ目調整される。



第14-10图 遺物実測図 (1 : 4 54・55; 1 : 2)

### (3) 陶器

#### (i). 施釉陶器

**天目茶碗 (35・36)** 2点とも底部片である。底径4.2cmと5.0cmの削り出し高台である。ともに光沢のある茶黒色の鉄釉がつけ掛けにより施され釉溜りが生じている。(35)はつけ掛け以外の露胎部にも、鉄泥が施され薄茶色を呈するが、(36)には施されない。

**灰釉印花文皿 (37)** 口径11.0cm・器高2.7cmを測る、見込み中央部に20弁の菊印花文を施した小皿である。高台から緩やかに立ち上る体部と、外反する口縁部をもつ。淡緑色の灰釉が全面に施され、高台付近と見込み周辺部に釉溜りが生じ、細かな貫入が認められる。外底面には、窯道具の痕跡が残る。

**灰釉碗 (38)** 底部のみの出土である。底径5.2cmのロクロ削り出し高台を有する碗である。釉の大部分は剥落しているが、見込みに淡緑色の灰釉が認められる。形態的には天目茶碗と類似するが、平茶碗とも考えられ、器形は不明である。

**灰釉碗 (39)** 底部のみの出土である。底径5.6cmで、断面方形の付高台を有する碗である。淡緑色の灰釉が施され、高台付近と特に見込み下半部に厚い釉溜りが生じている。又、施釉範囲には、細かな貫入が認められる。外底面に重ね焼きの際使用された窯道具の痕跡が残る。

**灰釉鉢 (40)** 口径28cmの口縁の大きく開いた鉢である。釉は志野系の淡桃灰色でつけ掛けされるが、体部下半の露胎部に薄茶色の鉄泥が施される。

#### (ii). 伊賀焼陶器

**捏鉢 (45)** 口縁部を欠く底部の破片である。底径は12.2cmである。粘土紐巻き上げ成形により、器面の凹凸がはげしい。外底面には下駄印、体部下部にユミの痕跡が認められる。低火度焼成によるものか、色調は黄白色を呈している。胎土には長石等の石粒が混入している。

**摺鉢 (46~50)** 出土数が多いがほとんどが小片で、図示できるのは5点のみである。口径26.4~31.0cmである。内面には、3(46)、4(47・48)、5(49・50)本単位の櫛状工具による卸し目が、48では18ないし19、50では21条が放射線状に施される。卸し目はすべて下から上に施され、50では右回りに施文される。粘土紐巻き上げによる成形で、器面に

凹凸がみられ、50では内面に顕著なロクロ目が認められる。口縁部破片の(47~50)のなかで、49は端部が外反気味に丸くおさまるのに比して、他は大きく外反し、ヨコナデによる凹面を有する。49は別形態であろうか。50は口縁の一部をつまんで片口をつくり、見込みには明確な使用痕が認められる。47の体部外面に部分的な煤の付着が認められるが、二次的な焼成によるものと考えられる。

ともに内面下半部は、かなり使用され器面は滑らかになっている。胎土に長石・砂粒を多く含み、硬く焼き締められ、明褐色を呈する。

46は、底径11.5cm。47は口径31.0cm。48は、口径26.4cm。49は、口径30.4cm。50は、口径28.8cm、器高12.8cm、底径12.8cm。

49は神ノ木館跡のA2類に、47~48・50はB類に対比され、下り合遺跡の場合はB類が主体をなし、比較的単一時期の所産と考えられる。

#### (4) 石製品

**茶臼 (51)** 茶臼の下臼の半分がS X 15傾斜面から1点出土している。臼面直径18.2cm・底面直径27.6cm・高さ11.8cm、芯木孔径3.0cmである。粉受け用の「皿」を有しているが、皿部は破損し形態は不明確である。7~10溝6分画と推定され、目の断面形状はV字型に近い丸溝で、周縁まで切つてある。臼面は平滑に研磨され、側面はノミによる荒仕上げの痕跡がわずかに認められる。中心の芯木孔は、芯木の回転を円滑にするため丁寧に研磨され、「えぐり」は大きく、ノミによる荒仕上げが施される。

**砥石 (52・53)** 2点とも小型品で、52は片側の側面が欠落し、53は直方体である。52・53ともに正面と背面の2面を使用している。携帯用砥石であろうか。

#### (5) 古銭

当遺跡東半部から、散在しながら3枚の古銭が出土し、うち2枚が判読可能である。

**景德元宝 (54)** F 9包含層からの出土である。初鑄年代1004年の北宋銭であり、文字は明瞭に判別できるが、周縁が欠落する。

**皇宋通宝 (55)** S K 12埋土上層からの出土である。初鑄1049年の北宋銭である。文字は明瞭に判別でき、遺存状態は良好である。

## 4. 結 語

下り合遺跡は、比自岐川に面した丘陵裾に位置する中世の複合遺跡である。調査の結果、鎌倉時代の遺物を含む包含層上に室町時代後期の掘立柱建物・井戸・土壇・堀が検出された。

室町時代後期の整地面は、調査区の東部分にのみ黄褐色粘質土の客土として認められたもので、西部分では確認できなかった。この整地面上で、柱穴と考えられるピットをかなり検出しているが、建物としてまとまりをもつものは1棟のみである。また、一对の扁平な石を確認しており、或いは建物の一部であるかもしれない。遺構が検出された北側直上の丘陵端部には、西氏城が構築されており、調査区の中央部が大手口にあたる。調査区北部には、土壇が残され、東西に流れる堀は、調査区東で屈折しており、検出された遺構は城館の一部とも考えられる。一方、この地域が「構千軒」とよばれることから、集落の一部として捉えることもできる。ただ、周辺で明確な遺構を検出していないので、前者の性格が強いと思われる。このように考えると、伊賀の中世城館の立地から考えて、丘陵・台地端部に位置する城館の裾部にも、館の一部が存在する可能性を指摘できる。

出土遺物は、鎌倉時代と室町時代後期のものに大別される。鎌倉時代の遺物には、瓦器碗があり、4形態が認められる。A・Bは、13世紀代のものであるが、最終末期に属するC・Dの2形態も含まれる。ともに、小型化した碗であり、Cの段階では退化した高台を有しているが、Dの段階では消失している。ともに、粗雑なヘラミガキを内面に施し、内面の口

縁直下には、弱い沈線をめぐらす。下り合遺跡からは、相当量の瓦器碗片が出土しているが、C・Dと認められる破片は、図示した3点のみであり、この時期の類例の少なさを示している。下り合遺跡の他には、神ノ木館跡<sup>⑤</sup>・木津氏館<sup>⑥</sup>でも各々1点ずつ出土している。ともに、伊賀における最終末期の瓦器碗であろう。C・Dの瓦器碗の実年代については、判然としないが、室町時代後期の整地層下層の包含層に相当する層からの出土であり、その下限は15世紀後半を下らないであろう。また、同様な特徴をもつ瓦器碗が、奈良県高市郡の越智氏居館跡<sup>⑦</sup>等でも出土しており、白石太一郎氏の編年によるⅢ段階の後半に比定されるものであり、C・Dの時期を14世紀後半から15世紀前半の間で考えるべきであろう。

室町時代の遺物は、以下のように分類できる。

- (1)調理形態 伊賀焼播鉢、石臼
- (2)煮沸形態 土師器鍋、瓦質土器羽釜
- (3)供膳形態 土師器皿、陶磁器皿・碗、漆器碗
- (4)貯蔵形態 伊賀焼甕、木製品曲物

以上の区分は、同時期の館跡である神ノ木館跡と器種構成が同様である。これらの遺物の時期は、硬く焼き締められ内面を約20分割する伊賀焼播鉢の年代観、及び器種構成から16世紀前後を中心とするものと考えたい。

16世紀代の遺物のうちで、土師器の皿・鍋については、地域差・個体差も考慮する必要があり、その編年上の細分については、尚多くの課題をのこしている。

(伊勢野久好・駒田 利治)

[註]

- ① 当遺跡標示記号は4JKYとした。
- ② 山本雅晴「中世城館の分布とその問題——伊賀国伊賀郡比自岐郷の場合」『古代研究』15元興寺文化財研究所 1978
- ③ 藤堂元甫『三国地志』1763
- ④ 駒田利治「神ノ木館跡」『昭和54年度県営圃場整備事業地域

埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会 1980

- ⑤ ④に同じ
- ⑥ 森前稔「木津氏館」同上
- ⑦ 白石太一郎「越智氏居館跡出土の瓦器——瓦器の終末年代に関連して——」『古代学研究』85 1977

# 圖 版



調査前近景（西から）



調査区全景（西から）



調査区全景（東から）



SD2・3（東から）





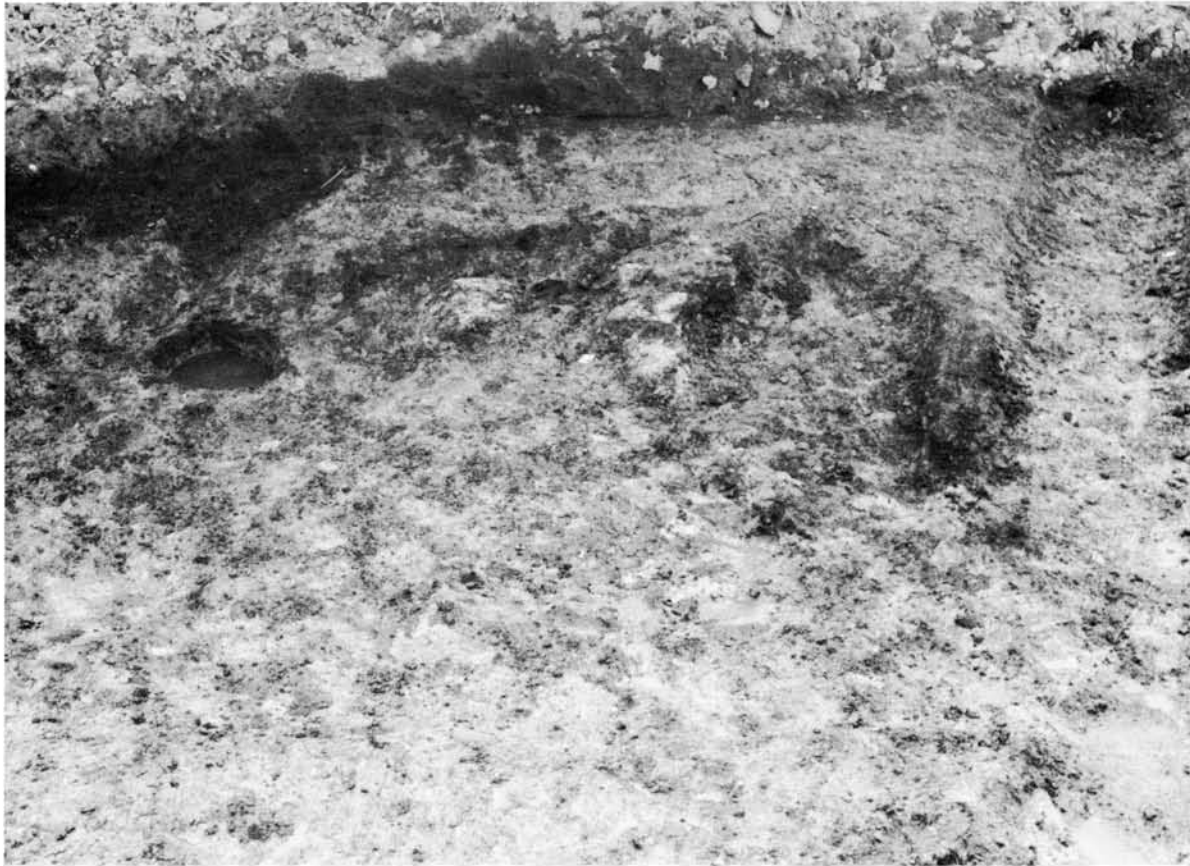
調査区全景（西から）



調査区全景（東から）

PL 4

山田廃寺



SB 1 (南から)



SX 2 (西から)



A区全景（東から）



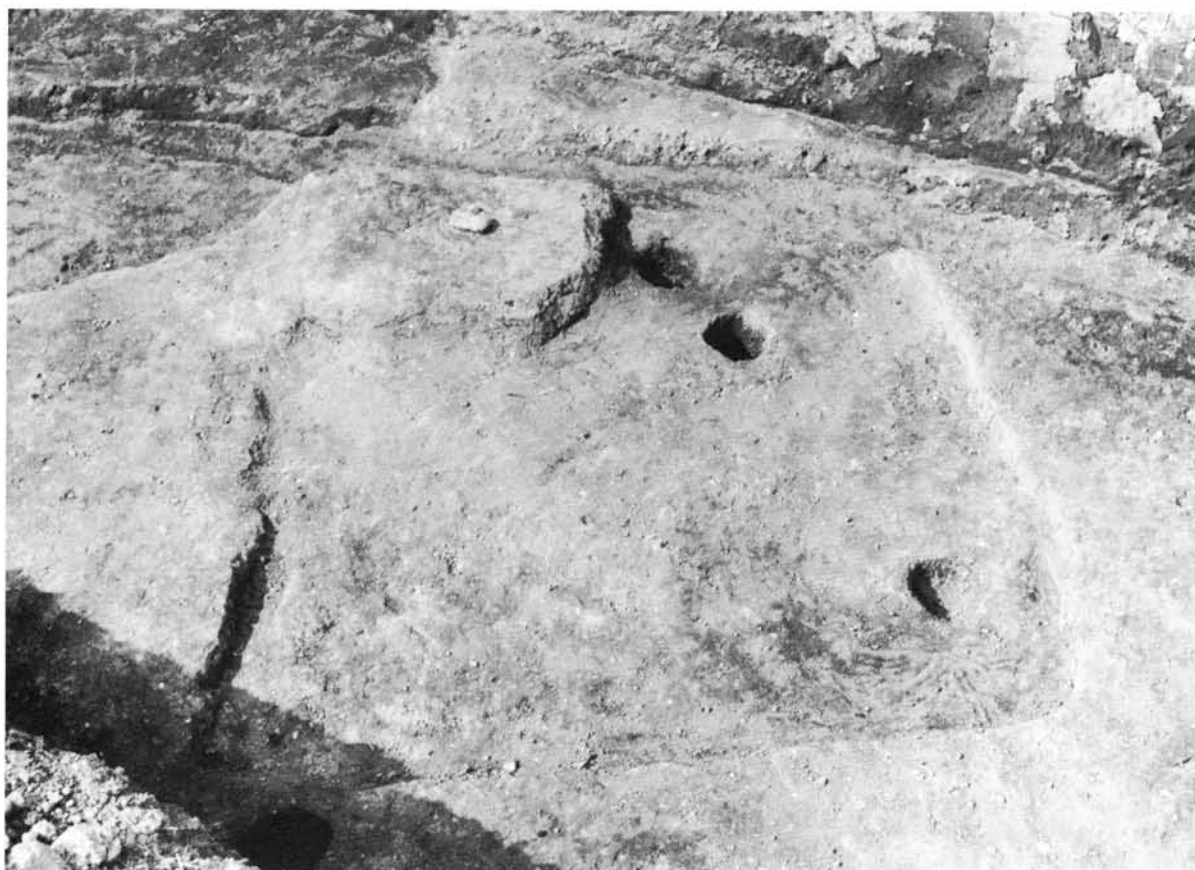
A区近景（東から）



A区 SB1 (東から)



A区 SB2 (東から)



A区 SB5 (南から)



B区 SD6 (西から)



B区 SD8 (西から)



B区 SD6・7 (東から)



出土土器（1：3） 右下：山田庵寺（SX2 出土）



調査前近景（北から）



調査区近景（北から）





SK 2 (南から)



SD 1 断面 (西から)



4



3



63



13



17



30



34



18



32



66



67



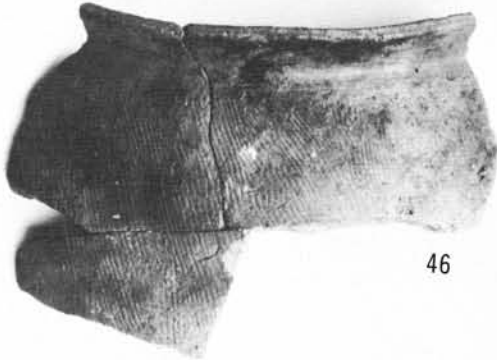
68



69



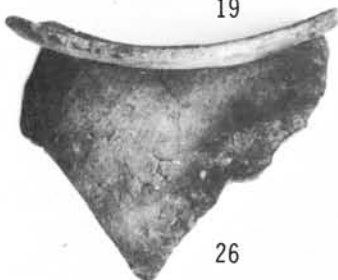
19



46



62



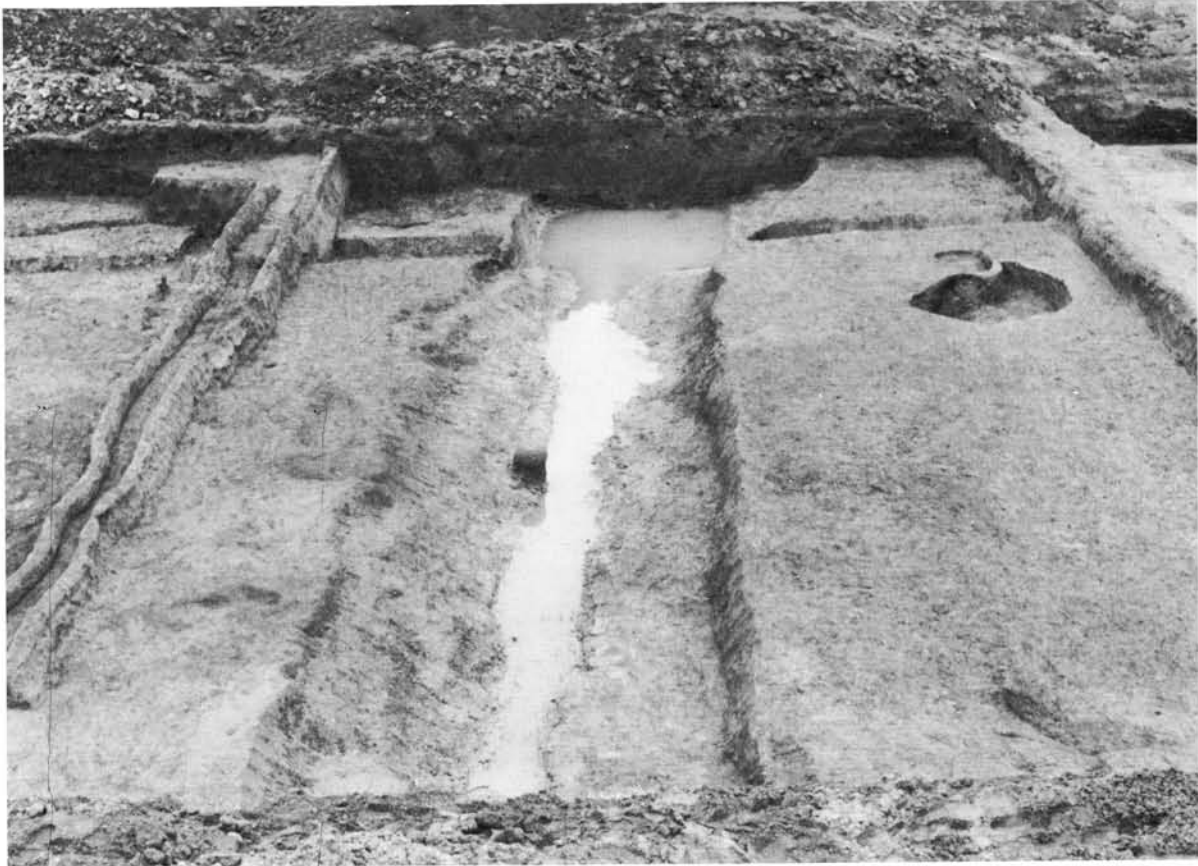
26



航空写真 A ; 神大寺遺跡、B ; 天ノ宮遺跡



遺跡全景（南から）



SD4 (西から)



調査区近景 (南から)





34



53



44



55



46



56



47



69



48



84



航空写真



A地区全景（南から）



A地区 SB2 (東から)



A地区 SB8 (東から)





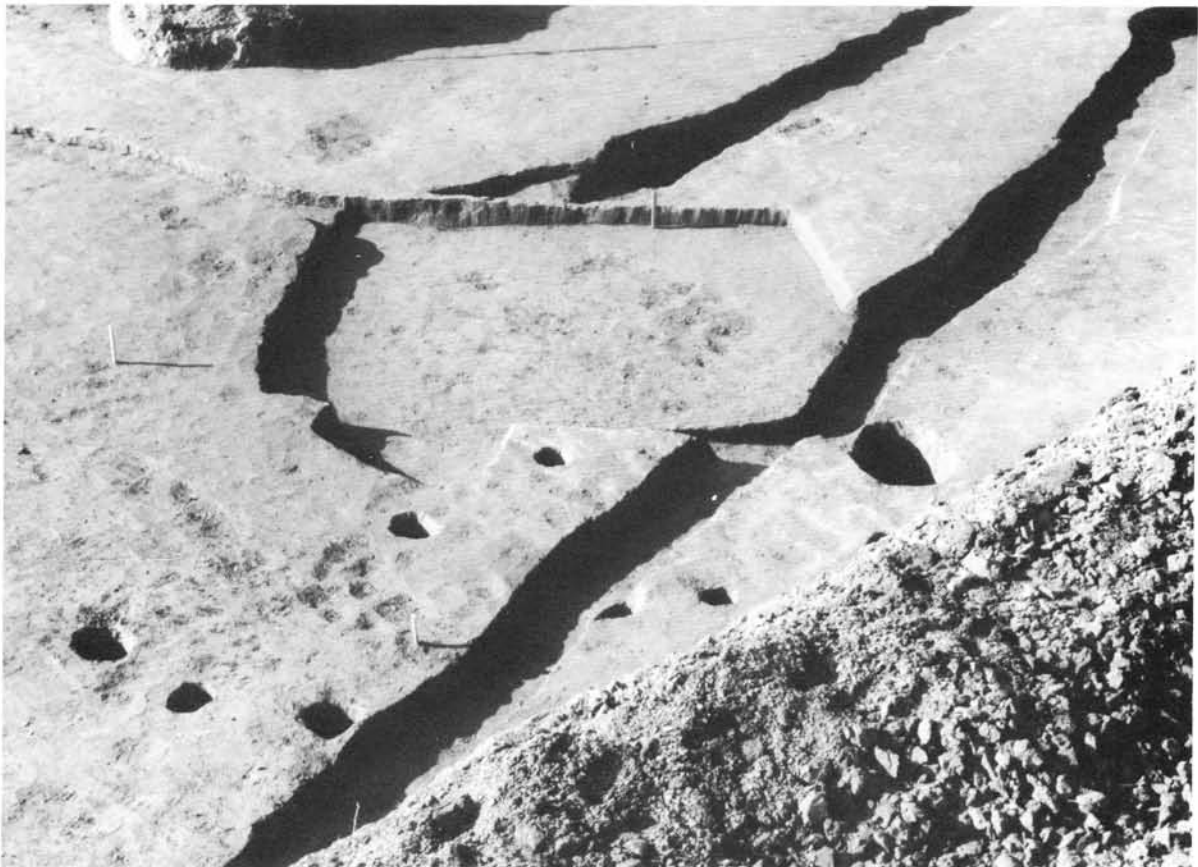
A地区 SB14 (東から)



B地区全景 (西から)



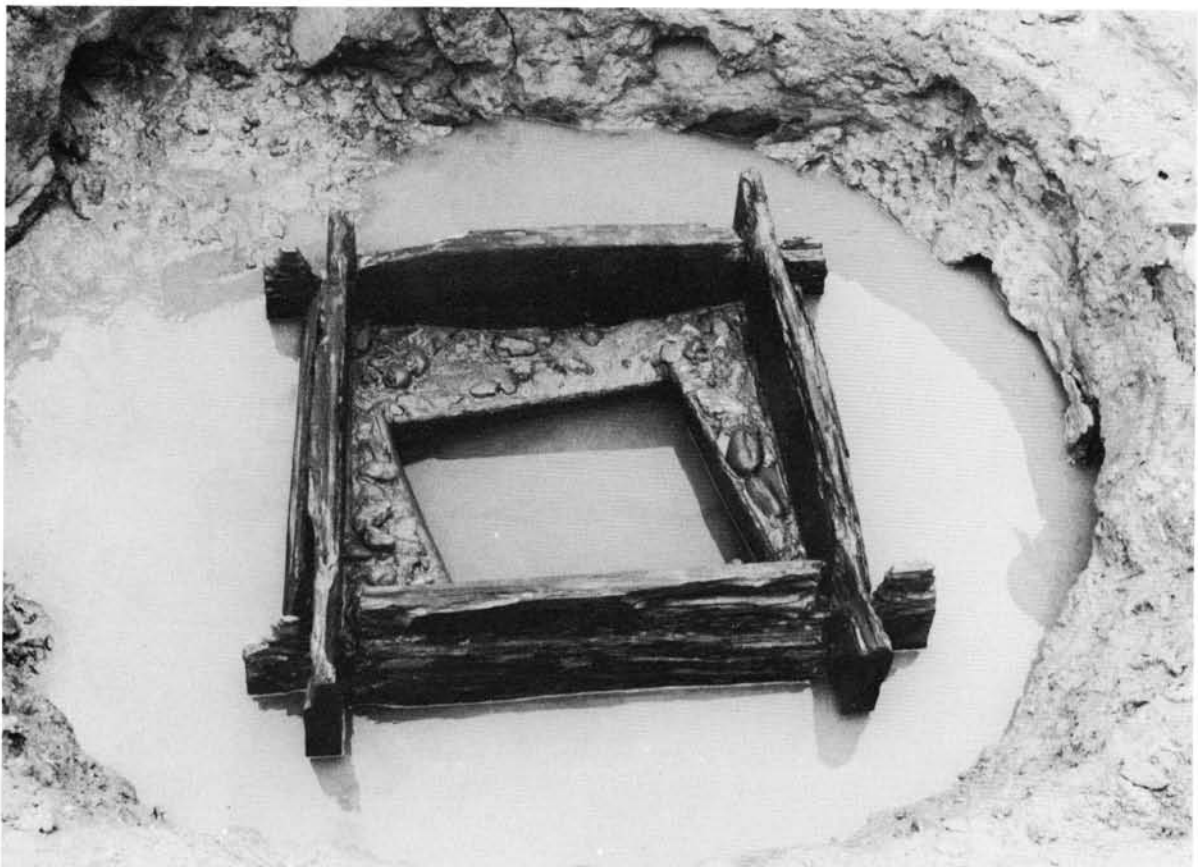
B地区 SB23~31 (南から)



B地区 SB44 (南から)



B地区 SE42 (北から)



B地区 SE42 (北から)



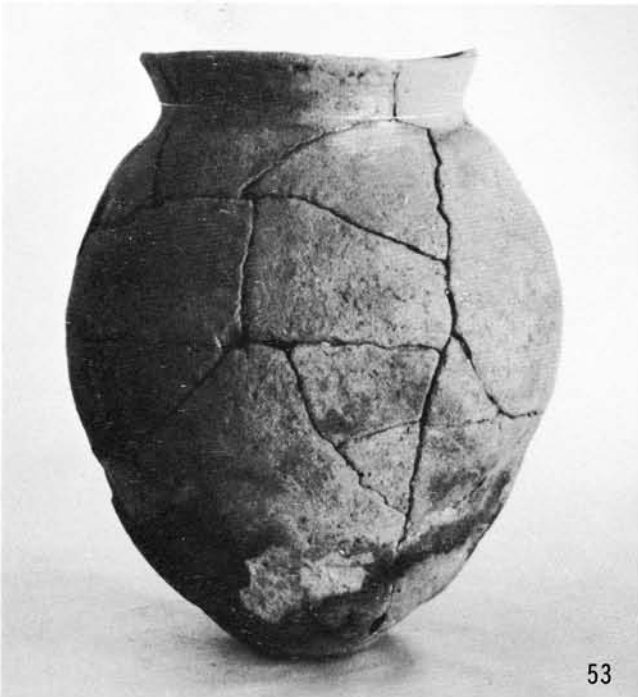
B地区 SB55 (東から)



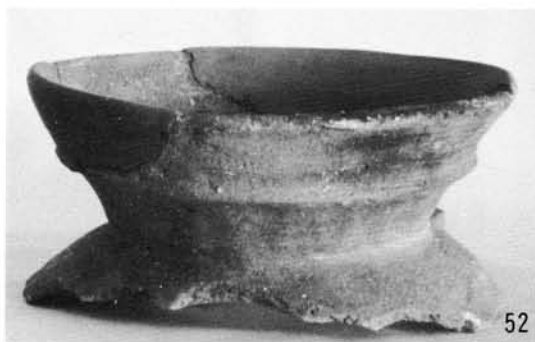
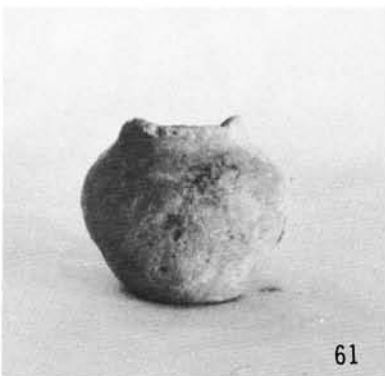
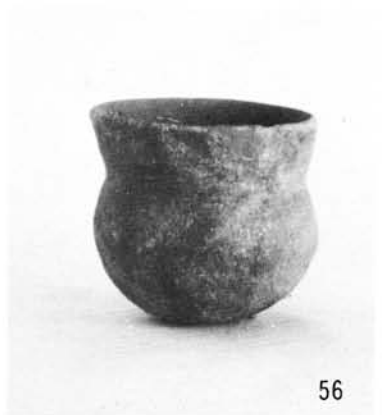
B地区 SD58 (西から)

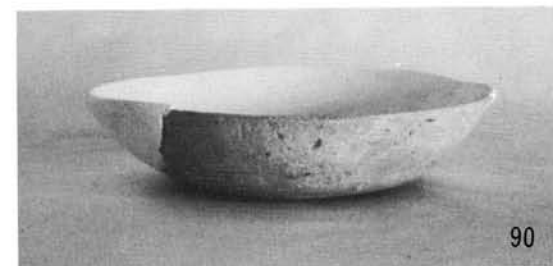


出土土器 (1 : 3)

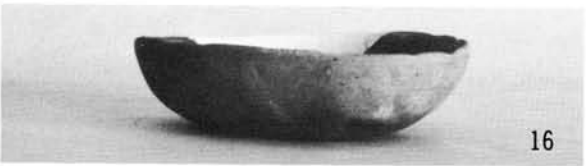
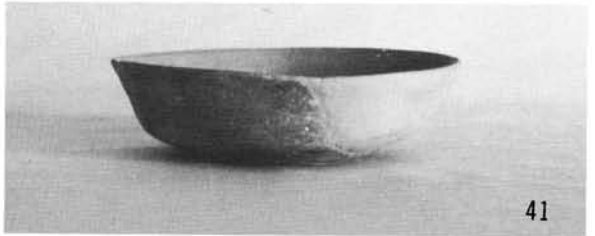


出土土器 (1 : 3)



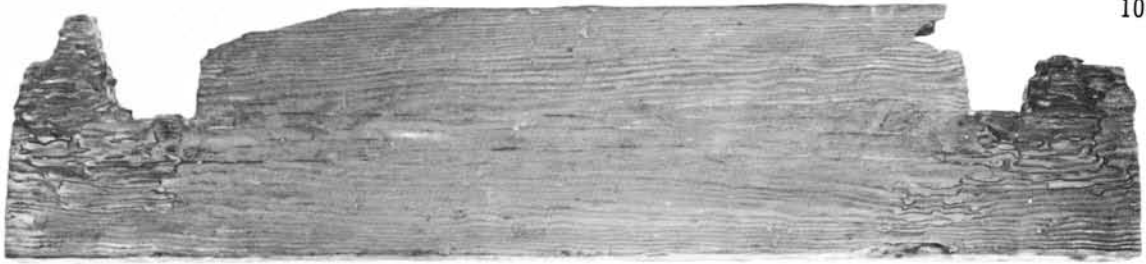






PL28

浄土寺南遺跡



105



106



107



108



110



111

SE42 梓材 (1 : 10)



113



114



115



116



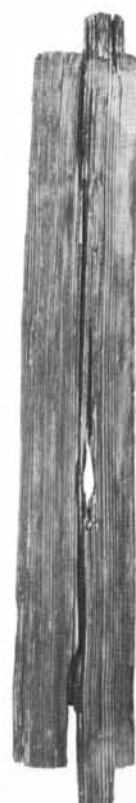
118



119



120



124



127

PL30



金堂の版築



SD 8

天花寺廃寺



塔の版築



SD 7



M11  
H12



M3Ab  
H21B



M3B  
H21B



M13  
H23



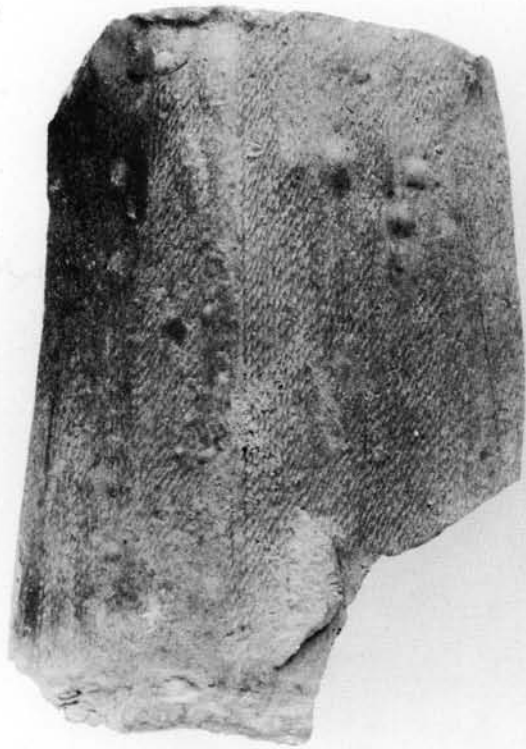
格子叩平瓦 (1 : 4)



格子叩平瓦

PL34

天花寺廃寺



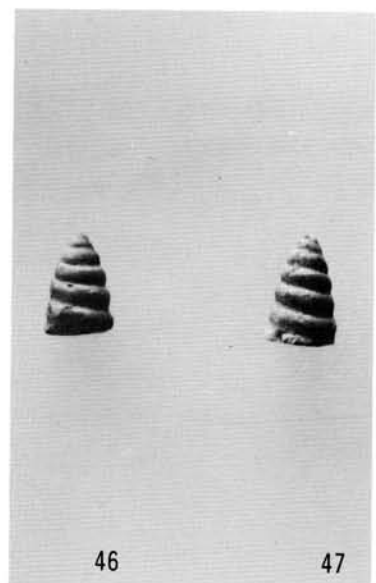
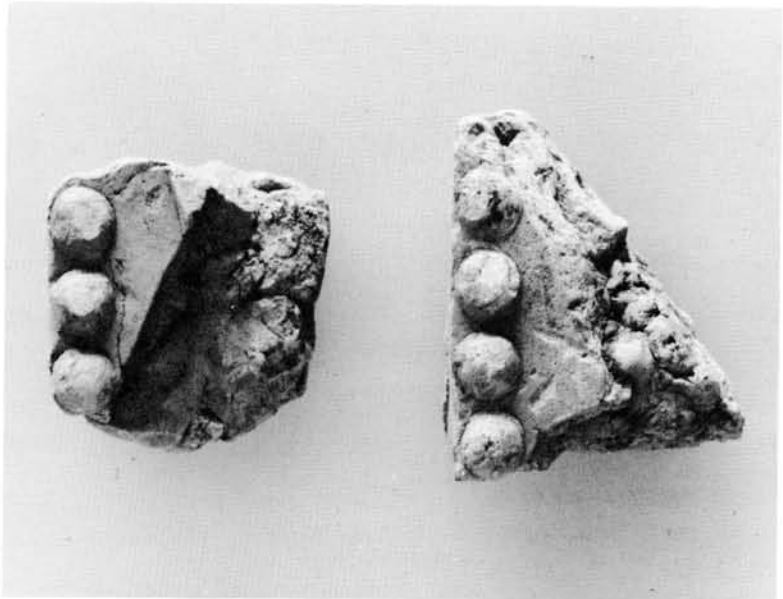
29

繩叩平瓦



繩叩平瓦





上・中段：道具瓦 下段：埴仏・塑像

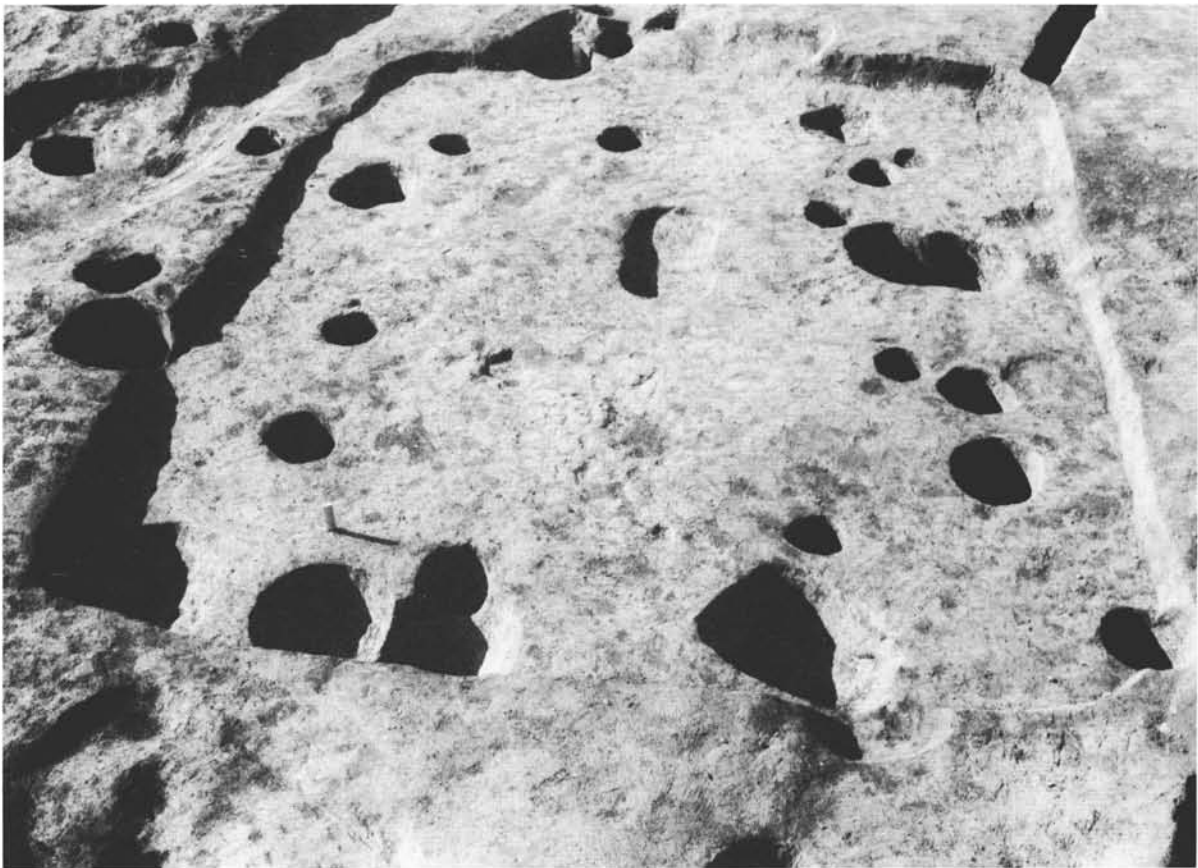




調査区全景（北西から）



調査区近景（北から）



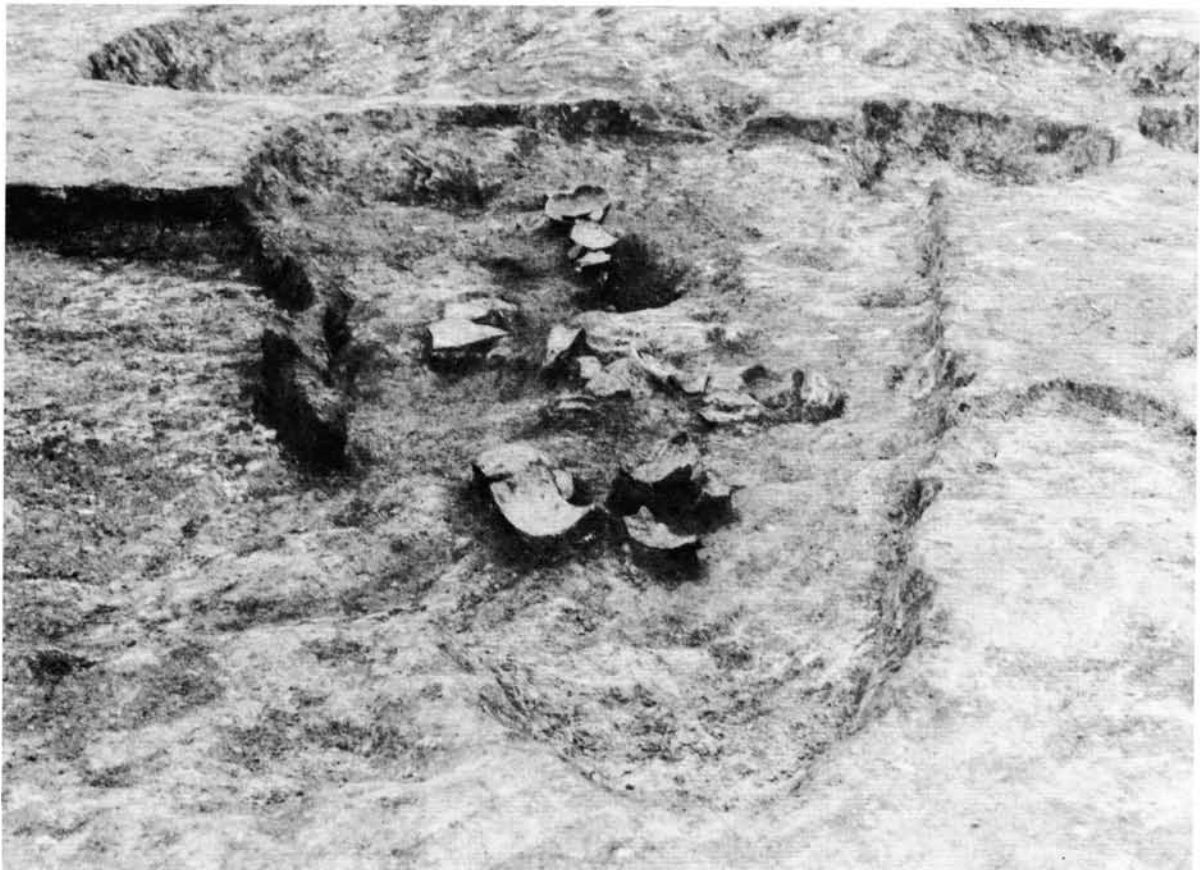
SB1 (南から)



SF 8~12 (南から)



SF16(右)・SF20(左) 遺物出土状況



SF16 遺物出土状況



SK34 遺物出土状況



SE42 (西から)



1



3



2



6



4



7



5



8



11









55



59



57



60



61



62



63



56



65



47



46



調査前遠景（東から）



調査区遠景（東から）

PL46

西沖遺跡



東南部近景（東から）



SB6・SD7（西から）



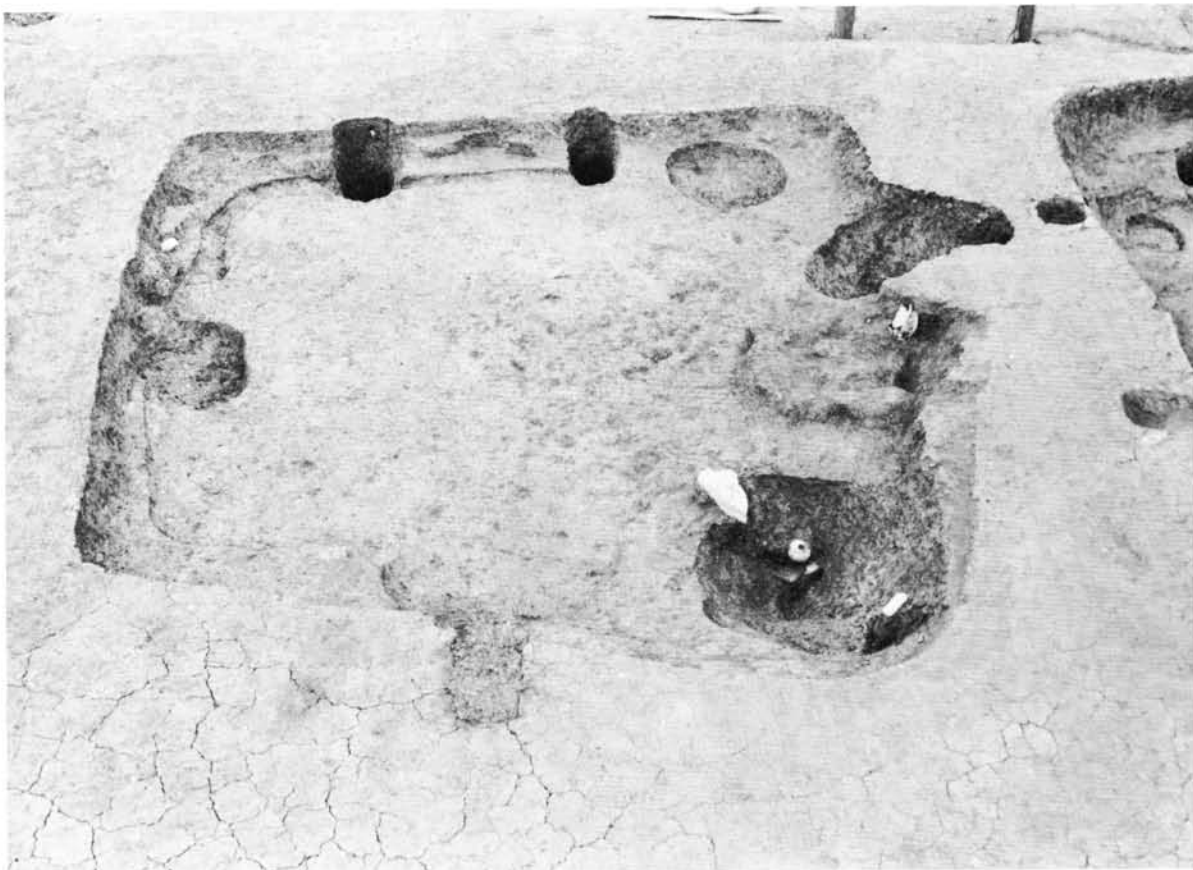
SB 6 pit 内柱痕



SB70 (南から)



SB86~101



SB68 (南から)



SE66・SB67・68・70 (東から)



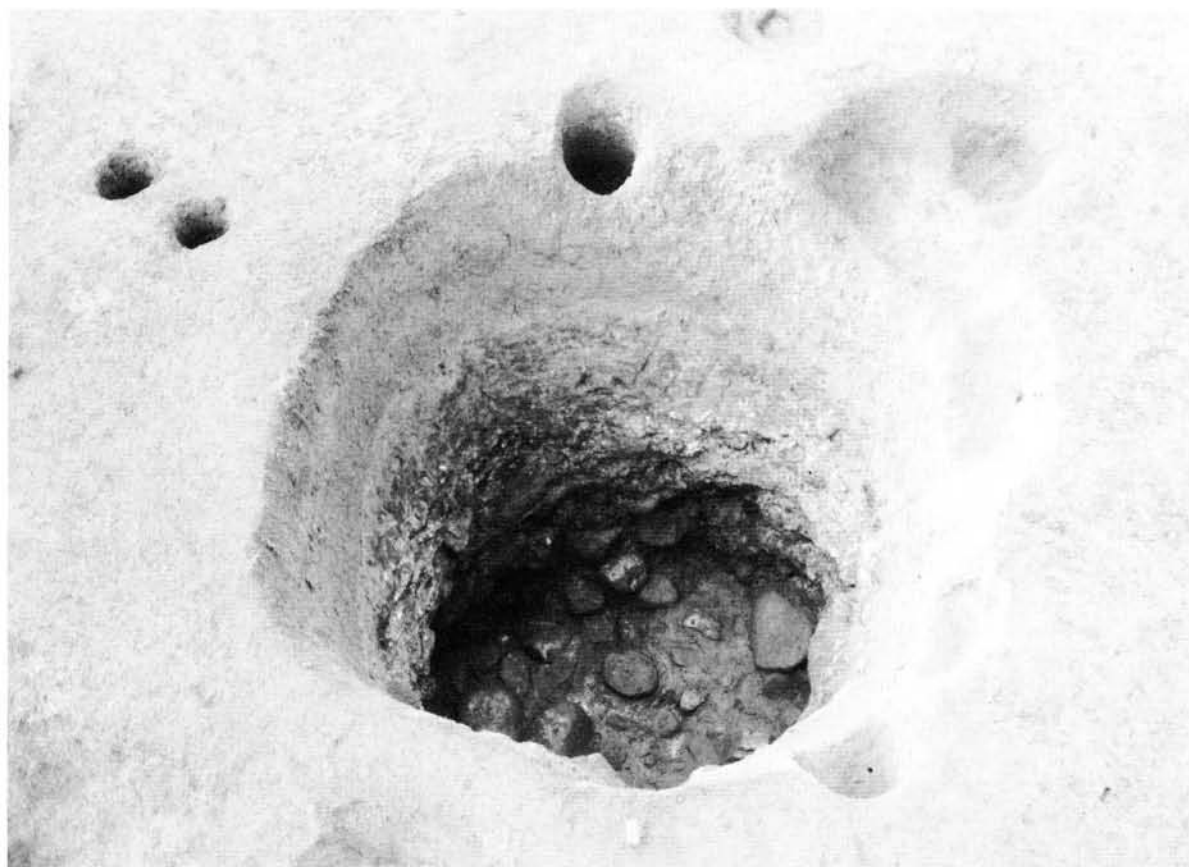
SB64・65 (東から)

PL50

西沖遺跡



SE14 (東から)



SE66 (東から)





210



200



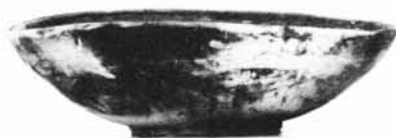
209



172



171



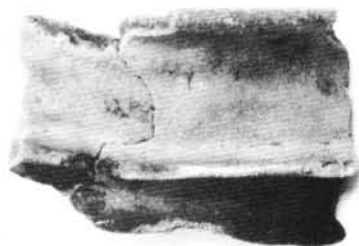
199



212



206

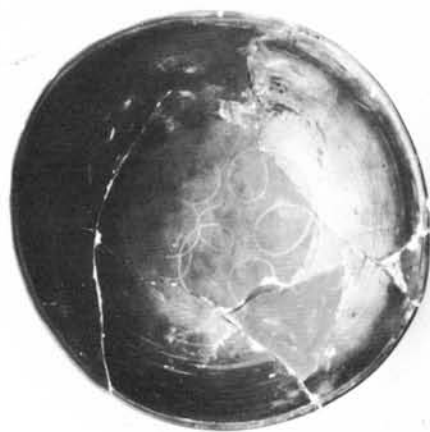


205



203

207



112



114



151



126



137



138



141



148



128



131



149



航空写真（6号墳 矢印）



墳丘全景（南から）



墳丘全景（西から）



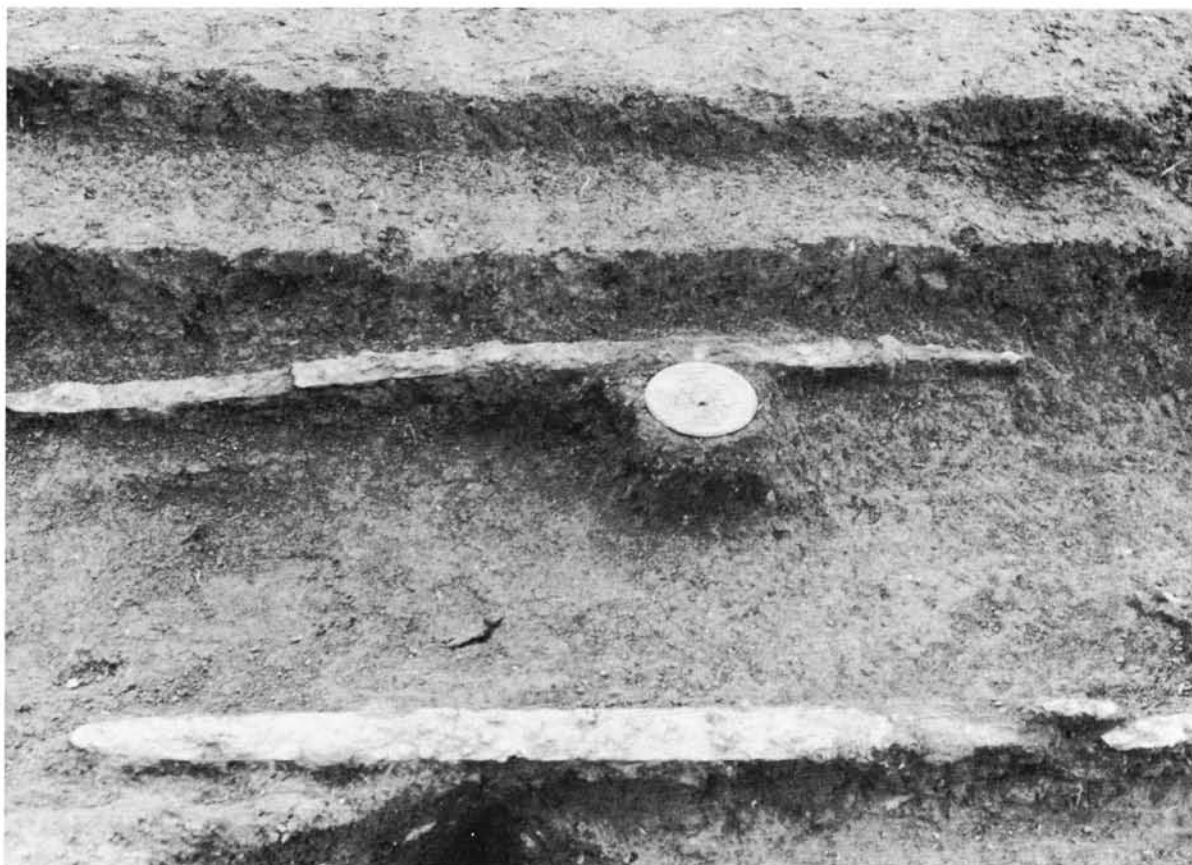
墳丘全景（東から）



第1主体（南から）



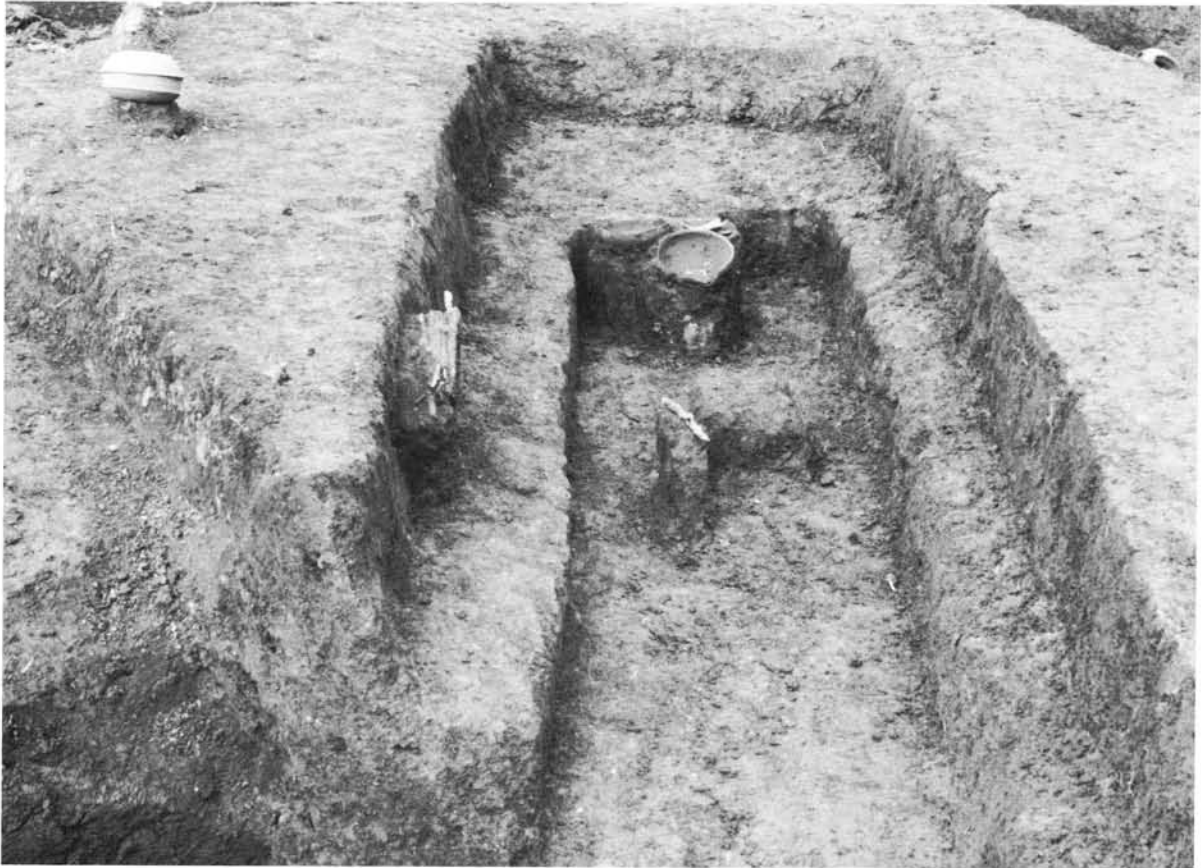
第1主体（北から）



第1主体 鏡、劍、刀出土状況（東から）



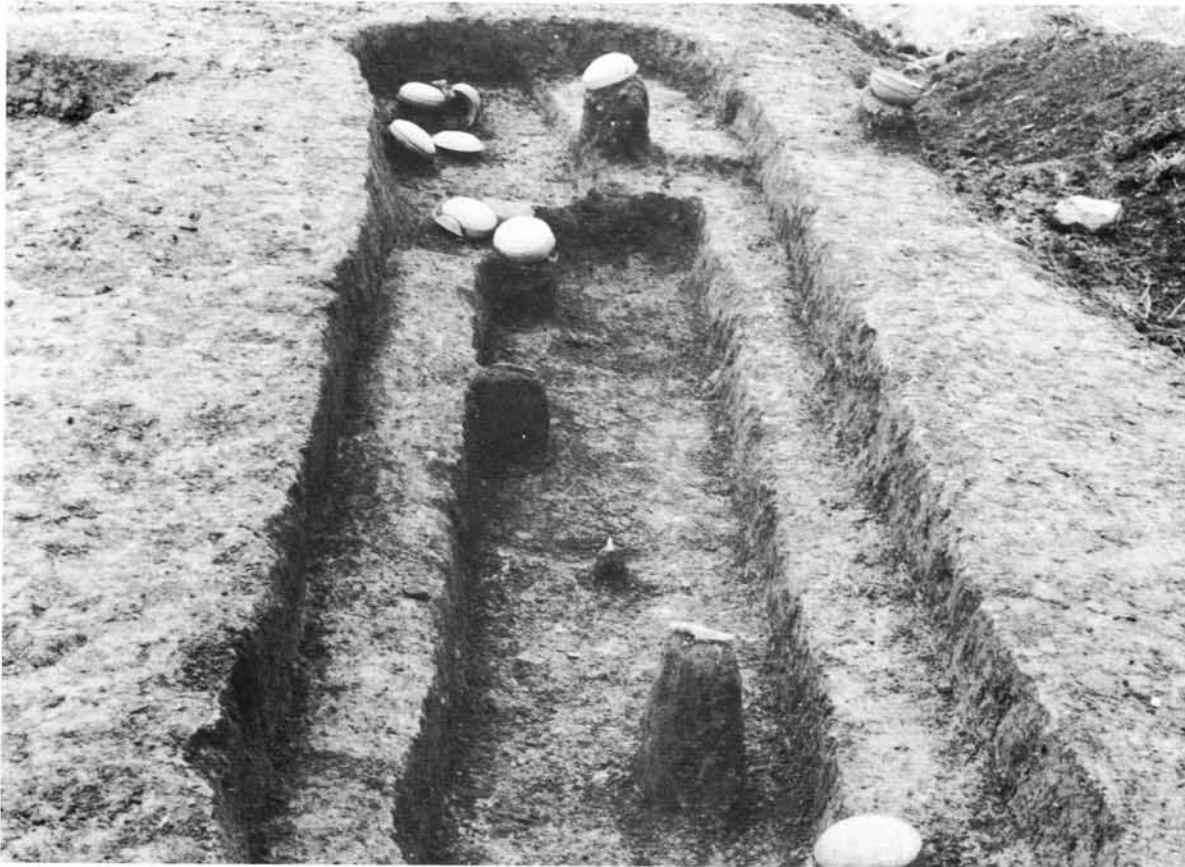
第1主体 鉄器類出土状況（南から）



第2主体（南から）



第2主体（北から）



第3主体（南から）



第3主体（北から）





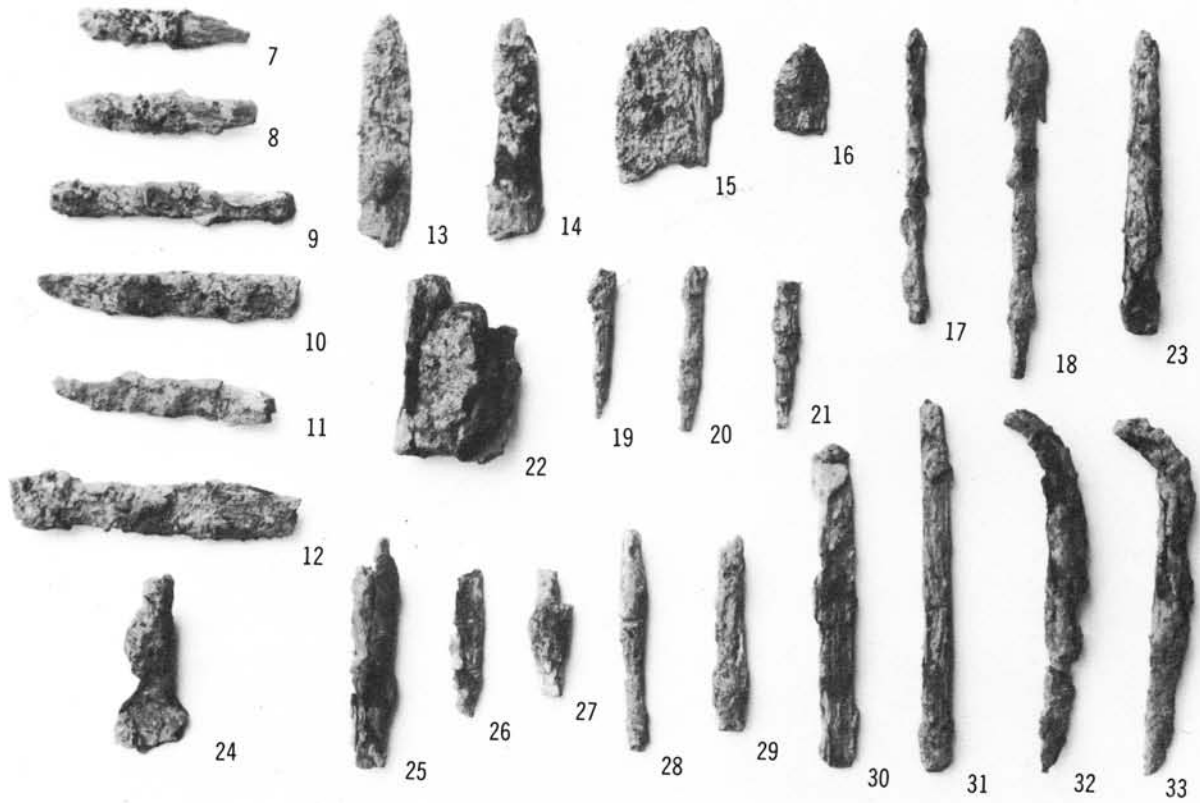
第 4 主体（北から）



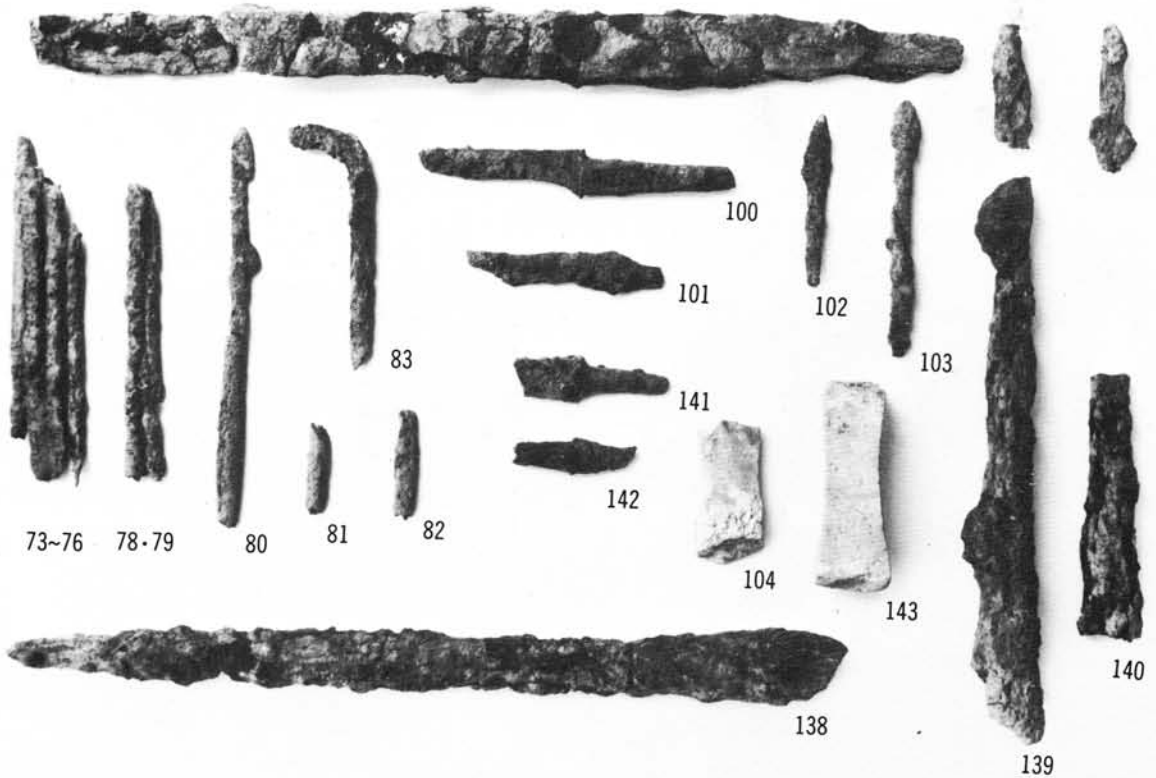
第 5 主体 南端配置土器



第1主体出土遺物（1：3、3～5は1：5）



第 1 主体出土遺物 ( 1 : 3 )



第 2・3 主体、墳丘出土遺物 ( 1 : 3 )



第3主体出土遺物(1:3)



96



42



43



97



44



98



125



99



126



106



130



航空写真（南上空から）



調査前近景（北から）



K地区土器溜（西から）



K地区土器溜（南から）



C地区杭列・木製品出土状況（南から）





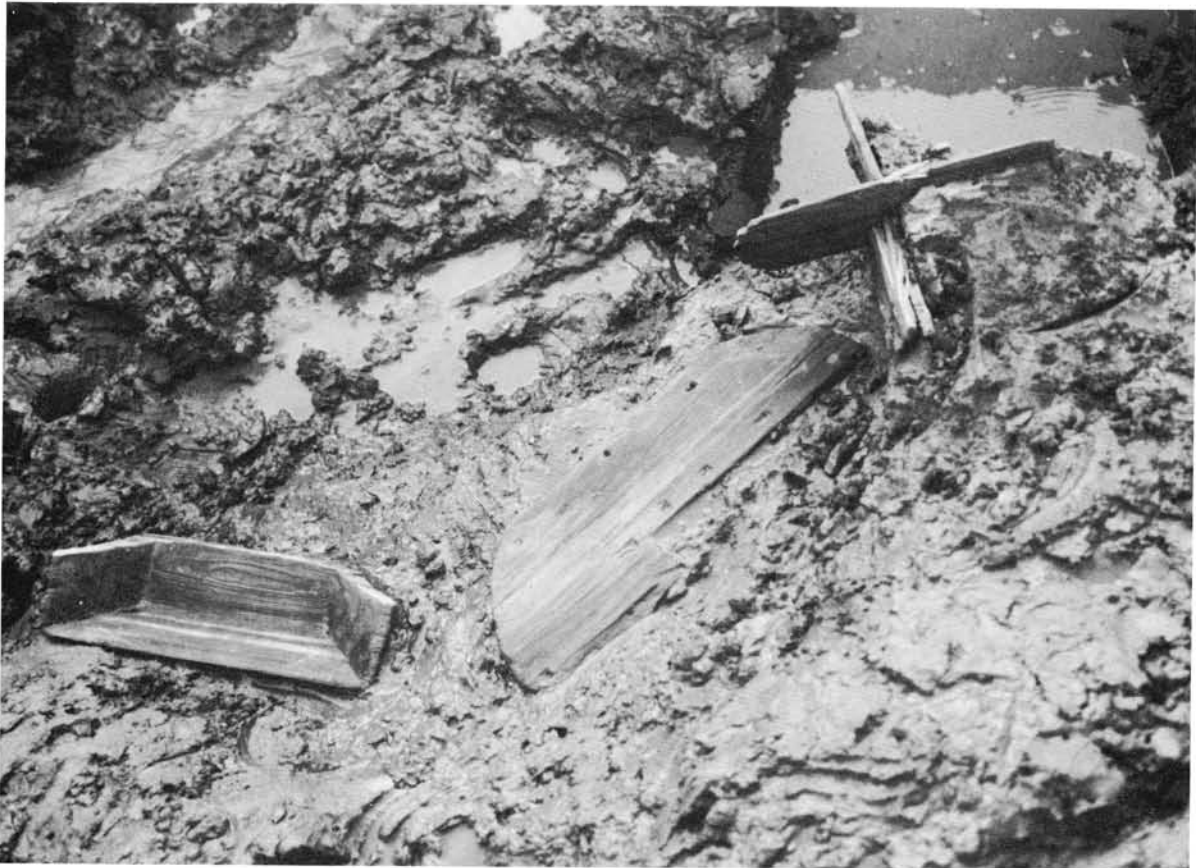
K地区杭列出土状況（北から）



K地区杭列出土状況（南から）



K地区木製品出土状況（東から）



K地区木製品（棺・返し等）出土状況（東から）



K地区木製品・土器出土状況（北から）

PL70

神部遺跡



1



5



6



11



13



14



23



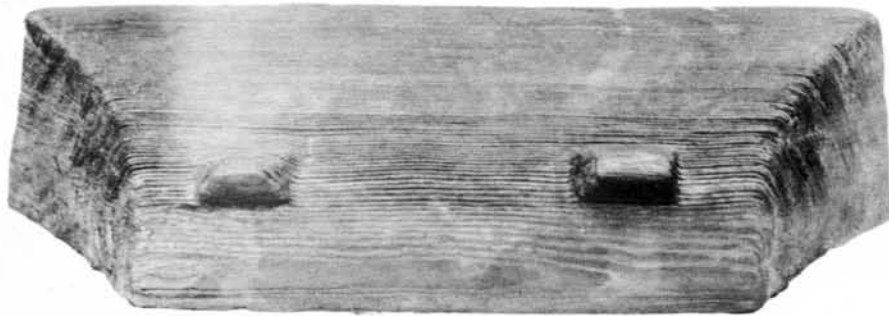
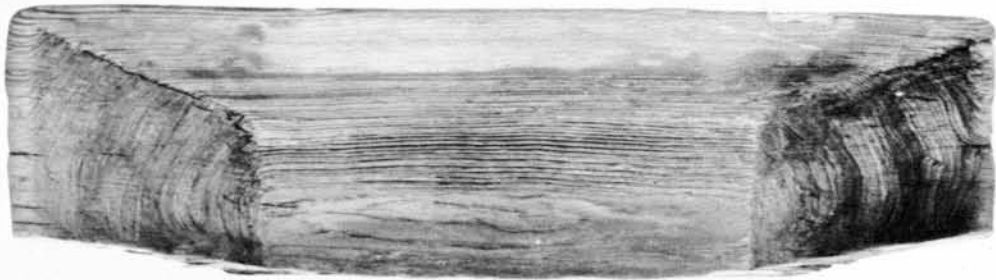
18



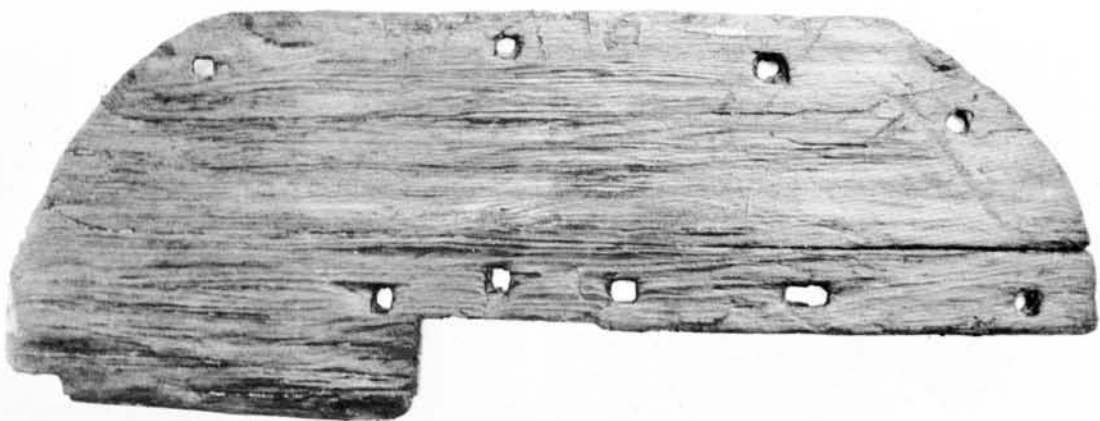
30

C地区・K地区出土土器（1：3）

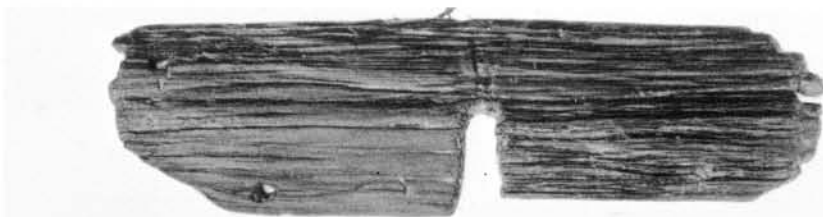




123



124



125



調査前遠景（南から）



調査区全景（東から）



調査区東部近景（南から）



SB5（南から）





SE 1

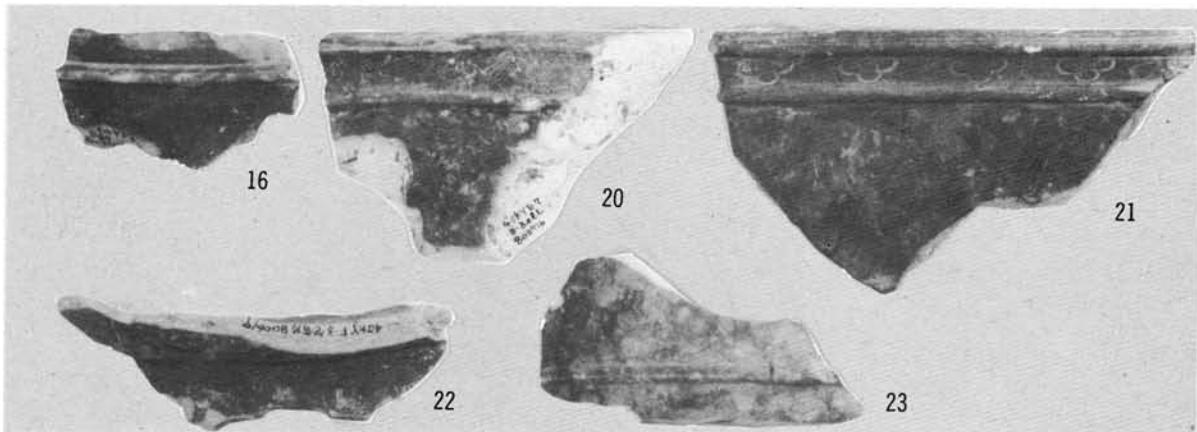


SK12・13 (西から)

第10-12図	堀田遺跡	土製支脚実測図……	110	第12-6図	高猿古墳	内部主体平面図……	162
第10-13図	〃	瓦器椀実測図……	111	第12-7図	〃	内部主体断面図……	163
第11-1図	西沖遺跡	遺跡位置図……	115	第12-8図	〃	第1主体出土遺物…	164
第11-2図	〃	遺跡地形図……	116	第12-9図	〃	第1主体出土遺物…	165
第11-3図	〃	遺跡平面図……	116	第12-10図	〃	第2主体出土遺物…	167
第11-4図	〃	遺構配置図……	118	第12-11図	〃	第2主体出土遺物…	167
第11-5図	〃	古墳時代後期竪穴住 居実測図……	119	第12-12図	〃	第2主体出土遺物…	168
第11-6図	〃	古墳時代後期竪穴住 居実測図……	120	第12-13図	〃	第3主体出土遺物…	169
第11-7図	〃	奈良時代竪穴住居実 測図……	123	第12-14図	〃	第3主体出土遺物…	170
第11-8図	〃	竪穴住居・掘立柱建 物実測図……	125	第12-15図	〃	第4主体出土遺物…	170
第11-9図	〃	S B 1・4 実測図…	128	第12-16図	〃	第4主体出土遺物…	170
第11-10図	〃	竪穴住居・掘立柱建 物実測図……	129	第12-17図	〃	第5主体出土遺物…	171
第11-11図	〃	竪穴住居・掘立柱建物 物実測図……	130	第12-18図	〃	墳丘・周溝出土遺物	172
第11-12図	〃	掘立柱建物・溝実測 図……	131	第12-19図	〃	墳丘出土遺物……	172
第11-13図	〃	浜田氏堡堀T <sub>3</sub> 断面図	132	第12-20図	〃	周辺古墳分布図……	174
第11-14図	〃	掘立柱建物・井戸・柵 溝実測図……	133	第12-21図	〃	高猿1号墳墳丘実測 図……	176
第11-15図	〃	S E 14実測図……	134	第13-1図	神部遺跡	遺跡位置図……	179
第11-16図	〃	S E 66実測図……	135	第13-2図	〃	遺跡地形図……	180
第11-17図	〃	須恵器実測図……	137	第13-3図	〃	発掘調査区域図……	181
第11-18図	〃	土師器実測図……	139	第13-4図	〃	第二次調査区域図…	182
第11-19図	〃	土師器・砥石・土錘 実測図……	140	第13-5図	〃	K地区土器溜遺物出 土状況……	183
第11-20図	〃	S E 66出土土器実測 図……	143	第13-6図	〃	C地区遺物出土状況	184
第11-21図	〃	S E 66出土木簡……	145	第13-7図	〃	C地区出土遺物……	186
第11-22図	〃	出土遺物実測図……	147	第13-8図	〃	K地区出土遺物……	187
第11-23図	〃	瓦器・須恵器出土状 況図……	152	第13-9図	〃	試掘坑・包含層出土 遺物……	190
第12-1図	高猿古墳	遺跡位置図……	155	第13-10図	〃	試掘坑・包含層出土 遺物……	192
第12-2図	〃	遺跡地形図……	156	第14-1図	下り合遺跡	遺跡位置図……	195
第12-3図	〃	墳丘実測図……	157	第14-2図	〃	遺跡地形図……	196
第12-4図	〃	墳丘土層断面図……	158	第14-3図	〃	発掘調査区域図……	197
第12-5図	〃	墳丘葺石実測図……	159	第14-4図	〃	第二次調査区全体図	198
				第14-5図	〃	土層断面図……	199
				第14-6図	〃	S B 5 実測図……	199
				第14-7図	〃	S E 1 実測図……	200
				第14-8図	〃	S K 12・S K 13実測 図……	201
				第14-9図	〃	遺物実測図……	202
				第14-10図	〃	遺物実測図……	204

PL76

下り合遺跡



出土土器

下り合遺跡

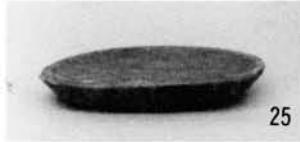
PL77



24



29



25



30



45



26



31



27



32



46



28



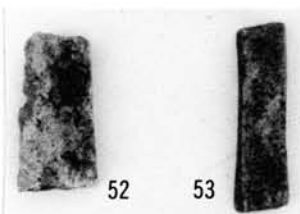
33



37

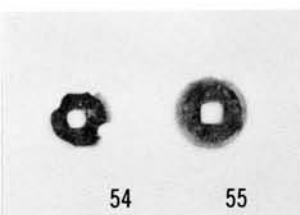


50



52

53



54

55



51

出土遺物 ( 1 : 3 )

昭和56（1981）年3月に刊行されたものをもとに  
平成16（2004）年11月にデジタル化しました。

---

三重県埋蔵文化財調査報告44

昭和55年度県営圃場整備事業地域  
埋蔵文化財発掘調査報告

昭和56年3月31日

編集 三重県教育委員会  
発行

印刷 オリエンタル印刷株式会社

---